
魔法少女リリカルなのは StrikerS ～困った時の機械ネコ～

シュテルン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers ～困った時の機械ネコ～

【Nコード】

N70510

【作者名】

シュテルン

【あらすじ】

時空管理局陸上電磁算気器子部工機課で働く男は、上長のいつも通りのいきなりの辞令を素直に受け取り、4月より新しく設立される課に期限延長つきで出向することになった。

リリカルなのはStrikers再構成小説です。遅筆ですが、続けられる限りがんばります。

6年前（前書き）

リハビリに書いてみました。

6年前

「なんで、だよ！」

周りは炎、轟音、盛っては響き、唸りを上げているが、青年の声は相手に十分聞こえた。

聞こえた相手の反応は苦笑いを浮かべているのが帽子の中から窺える。

「俺は、俺の方が、俺の方が助ける側なのに」

青年は、否、青年達はまだ、自分達が危険を脱出したわけでもないのにお互い向かい合って一方の青年は両手で相手の胸倉をつかみ、嗚咽しながら、相手を睨み付ける。

「早く行かないと、僕等も逃げ遅れるよ。急ご」

「普通にしてんじゃねえよ！」

青年は相手を言葉を遮り、目をそむけることを許さなかった。

現状は良くはない。今いる場所は火力を増長されるものが多く、つい先ほど人を避難させたばかりなのだ。彼を悲しみや怒りによる感情の起伏を激しくさせたのはその直後に起こった。

「手、離してくれる？」

しかし、彼は自分の行為によつてかは分からないが、相手のいつもより幾らか低い声によつて、素早く冷静を取り戻した。

そもそも、自分を助けてくれた相手にこんなことをして良いはずがなかった。

「わ、わりい」

彼はパツと手を開いて離し、すぐに周りの暑さでじとりと汗のかいた自分の手の開く力抜く。

「早く、ここを離れよう。後ろから追いかけて、避難を促さなくちや」

「そう、だな」

もちろん、避難している集団の先頭もしっかりと先を指示する人がいる。彼らは後ろを守ることを自ら志願したのだ。2人はすぐに後ろを追いかけ始めた。

「これで、よし」

「んッ。ありがとう」

彼は走りながら、相手にその場しのぎの血止めを行う。

「でもおまえ、これから」

「そうそう、言い忘れてたことがあった」

今度は相手が彼の言葉を遮った。

「俺の方が助ける側、じゃあなくて、俺等が助ける側でしょ？
ま
あ、確かに普段の僕はこんな場面じゃ、助けられる側だけだね」

前に避難者の背中が見えてくる。

「あと、大丈夫だって。僕は君に名前をもらってるから」

まあ、恥ずかしいけどね、あの名前。自分からは絶対言わない。
と、右手で頬を掻きながら、また苦笑う。

「自分は続けるよ。この仕事」

今度はいつも仕事で見せる真面目な顔で、相手がそう答えたとき、不覚にも自分の不注意で相手を傷つけてしまった罪悪感よりも、相手に対する感謝の気持ち_ミが彼の心を占めてしまった。

そつだ、コイツはいつもそうなんだ。何をやっても変わらないから、罪悪感や自己嫌悪を払拭してしまつ。と考えていると、自分のペースが少し落ちて、相手の背中を追う形となる。

相手は、大丈夫？ と顔を彼に向けるが、彼は相手の疑問に対する答えを返さなかつた。

「でも、今回は忘れないからな。この恩」

唐突もなく言った言葉だったが、不思議に思うことはなく、

「これからもいつも通りでいてくれるなら」

と、返答する。相手は今日という出来事で彼が後ろめたさを感じ、今日までの関係が崩れてしまつのが何よりも嫌だつた。

それは彼もすぐに感じ取ることができた。

「あたりまえだ、ネコ。んで、これからもよろしくな、
マシナリーキヤット困った時の機械ネコ”！」

6年前（後書き）

始まりました。次話もかければよいかな。

第1話 『少女の机』（前書き）

2話目を書いて気づきましたが、主人公の名前がまったく出てきて
いません。おそらく次回こそは。

それでは、どうぞ。

第1話 『少女の机』

時空管理局陸上電磁算気器子部工機課課長ドグハイク・ラジコフに1本の通信が入った。

「ああ？ 用件はなんだ、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐？」

「おいおい、会話の始めがその対応は、如何なもんだ、ドグハイク・ラジコフ三等陸佐？」

2人の関係は決して親しくはない。実際にこうして話すのも、どれくらい振りが覚えていないほどだ。しかし、お互いこの管理局に勤めている年数は短くはなく、どういう性格かはお互い理解していた。

「ん、こんな課に連絡をくれるのは大体決まった連中だからな。すまんすまん。それで、どんな御用で、ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐？」

普通ならば、相手の方から「今大丈夫か？」や、「最近どうだ？」という会話から始めるが、ドグハイクはこの課にはそんな社交辞令は必要なく、相手に用件だけを聞き出す様、通信開始直後からこのように切り出すことにしている。

(なにもかわってないじゃねえか)

そんなことは口には出さず、ゲンヤは用件を述べることにする。

「実はな、今度うちの知り合いが4月から新しい課を設立することになったんだが」
「人貸しか？」

いや、もうすこしオブラートに包んだ言い方はないのか？ と、
怯むが、

「まあ、そういうことだ。新しい課を設けるが、設備まで新しいわけではないからな。出向で3ヶ月くらい人が欲しい」
「それは構わんが。今、うちから出せるのは1人しかない。他のやつらはみんな案件を抱えてるんでなあ。どちらかといわなくてもうちの方も欲しいくらいだ。電磁算気器子部工機課に」

時空管理局陸上電磁算気器子部工機課という、いやに長ったらしいが、何をするのはなんとなく分かってしまうこの部は、時空管理局陸上における、電磁、電算、電気、電器、電子部品を担う部であり、工機課はさらに工業生産部品、主に管理世界に存在する質量兵器の調査、検証を行う課である。しかし、実質はまず、電磁算気器子部に所属する課は工機課しかなく、質量兵器の調査、検証もごくたまにで、実際は電磁、電算、電気、電器、電子部品の修理を主な作業としている。

通称“局の修理屋”である。だが、この工機課は局内で知名度が低く、通称も通っていないため、配属の割り当てが非常に少なく、現在は課長合わせて5人しかない。普通、組織であれば均等を保つように人員が配分されるはずだが、この課はある資格 先に述

べた電云々の各資格　を保有していなければ、配属されることはなく、さらに言つとその資格でさえも人気が少ないため、配属されることがまずない課なのである。

「1人で十分なんだが。というより、課に2人もいれば手にはあまるだろうが」

そう、しかし逆を言えばこの課は何でもそつなく修理してしまうため、隊、部あるいは課に1人いれば他に専門メカニックは要らないと言われたりもする。

「いや、ここ10年で随分質が落ちたし、局員も増えたらう？　昔とは何もかもちげえよ」

そういう時もあったぐらいに留めておいてくれよ。と付けたす。

「だが、1人しかいないんだろう？　結果は変わらない」

「結果1人というのが変わらんのは間違いないが、こいつはなかなかできるやつだぞ。俺の足元にも及ばんがな。っと、久し振りに話を逸らした。で、用件はその1人の出向させるということではないのか、期限は3ヶ月で？」

「ああ、書類と場所、日程は後で送る。期限は状況によって延ばすことも可能か？」

問題ない。と頷く。

「詳細の契約はそい、ん？ 直接の契約はだれになるんだ？」

ゲンヤは片眉をつりあげて、ああ、と息を漏らす。

「わるいわるい。言ってなかったな。契約者は古代遺物管理部機動六課課長八神はやて」

「ヤガミ・ハヤテ？ ニュアンスがにているな、アンタに」

「ん、そういう意味で言うと、ハヤテ・ヤガミ、だな」

「どっちでも構いやしねえよ。じゃあ、書類は送っておいてくれ」
「了解」

通信はきれ、デスクの上にある、ブザーを押すと、相手が返事をする。

「はい。こちら」

「出向だ。書類はついたらすぐに送る。準備しておけよ」

相手の反応を窺わず、用件だけ伝えて通信を切った。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ
コ

第1話 『少女の机』

4月中頃に、彼は新しく設立された課、古代遺物管理部機動六課、
通称“機動六課”のある機動六課隊舎に訪れていた。

「えーと、ロビーはどこかな、と」

むむう。と、目を細めて地図とにらめっこをするが、なんてこと
はなく、すぐに見つけることができた。彼は初めて行く場所は必ず
とっていいほど、迷う人間なので、迷わずに行けたことを喜び、
周囲に分らないように、右手をきゅっと握り締めて、ちいさくガ
ツポーズをとる。

ロビーに着くと、やはり早過ぎたのかだれもいなかった。

「さすがに2時間は早すぎたなあ」

小腹も空いていないし、時間つぶしできるものはないかなあ、と

周りを見渡すと、整理しきれないところがあるのだろうか、『リサイクル品 御自由にどうぞ』と書かれている貼り紙が貼られているアルミ板と木板を見つけた。

「ふう。無かったです。今日が初日なのに」

「しょうがないやん、ライン。時間が空いた時にでも、また探しにいこ？」

「だって、はやてちゃん。デスクもイスも無いなんて、締まらないですよ！」

ふうと頬を膨らませたり、両肩をがくんと下げたりと、素直に感情を身体で表している一人の女性の横を飛んでいる少女、ラインフオース・ツヴァイは不満を漏らしていた。

そんな小さな仕草の一挙一動が可愛いと思いつつも、言葉には出さずラインの隣を歩いている女性、機動六課課長八神はやては苦笑する。

「ほらほら。ラインの行ったとおり今日は初日なんやから、ピシッとしよう？」

「むう。むうですよ……う？」

ふと、通り道であるロビーの横を通り過ぎるとき、ラインの視界に何か入った。

「どないしたんや、ライン？」

彼女は一旦軌道を逸れ、視界に入った対象物の近くによる。

「はやてちゃん、はやてちゃん。これ、これ！」

「これって言われても……んう？」

ラインが飛んでいる下に目をやると、そこには一般人より1回りも2周りも、いや、どれくらい周りも小さいデスクがぼつんと置いてあった。キャスター付きのイスまである。ラインはすとんと座ってみるとイスの背は皮製であることがわかり、使い古されているが、それがむしろ座りやすい。スプリングも丁度良い感じだ。そして、そのほぼ新品同様のデスクには『リサイクル品 御自由にどうぞ』という貼り紙がしてある。

「誰のリサイクル品？」

「誰のでも構わないです。これ、欲しいですう」

はやては、いくらなんでも、無断で持って行くのは。と考えたが、張り紙のこともあり、ラインにせつつかれたのもあったりで、すぐ

にその考えは消え、持つて行くことにした。

「……あれ？」

作成後、余った物を片付け、戻りがてらお手洗いに行った後、口
ビーに戻ると、デスクとイスが消えていた。

「ええつと。……あれ？」

（作った後、動かしたっけ？ いや、動かしたってどこに？）

自問自答が自問自問になり、自答が出てこなかった。

部長長オフィスでの彼女はかなり上機嫌だった。イスをクルクル
まわしながらハミングを奏でるほどである。

「それにしても、ラインのデスクも丁度いいのが見つかってよかったなあ。そのイスなんて私が欲しいくらいや」

「へへー。ラインにぴったりサイズですう」

ラインはよほど嬉しかったのだろう。机に指を走らせて、ピカピカであることを何度も確かめていた。

そこでブザーが鳴り、はやは入室を受け入れた。

「失礼します」

2人の女性が声を揃えて同時に入ってくると、彼女は顔を綻ばせて彼女たちに近寄った。

「お着替え終了やな」

「おふたりとも素敵です」

ラインの賛辞に2人の女性ははにかみながら、

「ありがとう、ライン」と、笑顔で応えた。

「3人で同じ制服なんて、中学生のとき以来やね。なんや、懐かしい」

3人はそれぞれ元々所属している部署が違うため、これから先同じ制服を着ることは少なくなるなるかもしれないが、それでも今日

同じ制服を着ていることは嬉しいことに変わりは無かった。

一言、三言、会話と楽しむと入室した女性の1人がもう1人に目配せする。

「さて、それでは」

「うん」

彼女達2人は課長八神はやてに向き直り、敬礼をして足を揃えた。

「本日只今より、高町なのは一等空尉」

「フェイト・テストロツサ・ハラウン執務官」

「両名共、機動六課へ出向となります」

「どうぞ、よろしく願います」

敬礼をしたときの髪の毛のなびきで、2人が長髪であることは十分確認はできたが、彼女たちの特徴は長髪というだけでは述べ難かった。

八神はやてから見て右に位置する女性高町なのは、赤みがかった茶髪の持ち主で、髪を左側サイドに留めていた。髪を根元の方で留めている分、頭が大きく見られるかと思うが、そのようなことは決してなく、小顔であることは、むしろ周知の事実であった。瞳はブルーで、一等空尉という階級であること、航空戦技教導官であることから真っ直ぐな目の持ち主である。しかし、男勝りなところは無く、言葉の間々からポロリとこぼれる少女っぽい口調は、彼女のスタイルも加わって、可愛く見せていた。彼女はその容姿と生ま

れ持った魔法力、戦技教導隊での実直な姿勢から『航空戦技教導隊の若手ナンバーワン』、『不屈のエースオブエース』等、局内での評判が大変良く、他に、雑誌に掲載されたりと、局外でも色々をささやかれている女性である。

対して、八神はやてから見て左に位置する女性フェイト・テストア・ハラオウンは、流れるような金髪を持ち主で、後ろ髪の方でリボンを蝶々結びにして、大きくなびかない様になっている。瞳はレッド、管理局において執務官という立場にいるのか、それとも彼女の現在まで成長してきた環境なのかは分からないが、物静かな落ち着いた目の持ち主である。しかし、だからと言って、何事においても冷静且つ沈着な行動をとるかという点、こと家族、友人など親近者に対しては感情的になる事が多いため、それは必ずしも当てはまらなかった。彼女は若くして執務官という官職に就いただけに、頭の回転は早く、容姿端麗も相まって、男性を振り向かせる美しさを無自覚ながら身に付けていた。

「はい。よろしくおねがいます」

予てより2人と友情を育んでいたはやては、親友たちの畏まった態度を素直に受け入れ、もう畏まらなくてもええよと微笑む。

2人も応じて、微笑んだ。

また、入室のブザーが鳴る。

「ぶっぞ」

ドアが開き、男性が目を瞑り、かるく頭を垂れながら一言断って入室してきた。

頭を上げて目を開くと、見知った2人が部隊長オフィスにいることに驚き、慣習により敬礼する。

「高町一等空尉、テストロッサ・ハラOWN執務官。ご無沙汰しております」

しかし、2人は自分より身長の高いこの男性をすぐには思い出せず、一拍小首と傾げるが、なのは気付いたようで、名前を告げる。

「もしかして、グリフィス君？」

「はい。グリフィス・ロウランです」

ああ、とフェイトも気付く。

「うわあ、久し振り、ていうかすごい、すごい成長してる」

「うん。前見たときはこんなに小さかったのに」

なのはに同意して、フェイトはたしかこれくらいだったと胸元に手のひらを置いて示してみせた。

「そ、その節は、色々お世話になりました」

その頃の自分の幼さに恥ずかしがりながらも、なんとか態度を崩さずにできた。

「グリフィスもここ部隊員なの？」

「はい」

「私の副官で、交代部隊の責任者や」

「運営関係も色々手伝わってもらってるです」

六課での立場をきいて、立派に仕事しているんだと思いながら、ふと思いついたように、

「レティ提督は元気？」

「はい。おかげさまで」

元気にしています。と応えそうになるが、すぐに報告事項を思い出し、グリフィスはやてに向き直った。

「報告してもよろしいでしょうか？」

「はい。どうぞ」

グリフィスが言うには、フォワード4名を加え機動六課部隊員とスタッフ全員揃いました。現在はロビーに集合、待機させています。との事だった。

「そうかあ、結構早かったなあ。ほんなら、なのはちゃん、フェイトちゃん、まずは部隊のみんなに挨拶や」

2人は揃えて頷く。

(そういえば、ナカジマ三佐が1人メカニックが参画してると言うてたなあ。見知った人が多い中、浮かんように今日できたら挨拶できたらええなあ)

そう思いながら、はやてたちはロビーに足を運んでいった。

第1話 『少女の机』（後書き）

はい。

始まりましてございます。

私は、オリジナルファンタジーを5、6年前に自サイトにて書いていたのですが、いかんせん手放してしまいました。

そいで、そいで

2次創作でもやってみましようかなと思った次第でございます。

コレも飽きなければ、続けていきます！

さて、あとがきですが、主な内容は本文の用語解説がきたらなあと思います。難しい漢字に振り仮名が無かったり、意味が分からなかったりではきつと、困る（自分が）からです。

というわけで、行きましよう。

怯む^{ひる}

気後れする。

あまりにも直線的過ぎて、ゲンヤさんは気後れするわけですね。

予てより^{かね}

以前より

以前よりよりはカッコイイと思いました。

こんなところでしょうか？

あれ、もしかして自分かなり上から目線？

し、信じてください！

違います！

よろしければ、感想をおまちしております。

第2話 『彼女たちの疑問』 (前書き)

さて、第2話目も何とかかけました。

第2話 『彼女たちの疑問』

(なにをしているんだろう?)

彼女はたまたま彼の行動が目についた。

課長八神はやてからの挨拶が終わり　はやては最後で、他の隊長陣、主任共々の挨拶は終わっている　解散となつてから、隊員、スタッフがそれぞれの持ち場に戻ろうとするとき、一人の背の小さい男がきよろきよろ、ロビーを見て回っていた。

彼は彼女フエイト・Ｔ・ハラウンより、いや、はやてより背がひくいように見えた。服装は他の隊員と変わらず、制服を着こなしているが、明らかに周りの人とは雰囲気が違う。

(……ねむいの、かな?)

今日は機動六課という船の進水式ともいえる日であり、ここにいるどの人も気力に満ち溢れているのにもかかわらず、彼女の視線の先にいる彼は眠そうな目をして、なおかつ髪も整えてはいないことは頭のぼさぼさを見れば一目瞭然だった。

彼の行動にみんなの視線が集まったのは次の行動である。

ガゴンとおもむろにゴミ箱に頭を突っ込んだのだ。

「うーん。ない。狸にでも化かされたかなあ？」

ひとしきりゴソゴソとゴミ箱の中で動いた後、ぷはあと顔を引き抜いた。

「あの、どうかしましたか？」

「え？ ああ、いえ、なにも」

どうも歯切れが悪い。

「落とし物でも？」

「いえ、落とし物というわけでは……」

そう応えた割にはぶつぶつと、いや、落とし物？ と、独り言を言う。

「フェイトちゃん、どないしたん？」

こちらのやり取りを不思議に思ったのか、はやてが2人のところまでやってきた。フェイトとはやてが彼に近づいたからだろうか、周りの人は特に心配することなく、自分の持ち場へ戻っていく。

「あ、はやて。この人がなにか落とし物をしたみたいなんだ」

「落し物？ おサイフとかですか？ それとも何か他の貴重品類？」
「え、いえ。貴重品というものではありません。サイフというのは
当然ずしも遠からずです」

はやてはこの後、首都へ向かわなければならぬため、単刀直入
に聞くことにする。

「いったい何を落とされたんですか？」

「え、っと。机とイス、です」

（机とイス？）

フェイトは疑問符を頭に浮かべたが、はやてはすぐに気がついた。

「リイン、リイン」

はやてが念話でリインを呼んでいる間にフェイトが続ける。

「あの、それは……」

「あ、あー。大きさ的にはコレくらいなのです。実はロビーに……」

彼はジェスチャーで大きさを表わすと、ロビーに早く着きすぎて
しまったこと。暇つぶしで辺りにあった余りもので机とイス 背
もたれには使い古したサイフを使用 を作ったこと。作成後、片

付けをするために一度離れて戻った後にそれらが消えてしまったことを話した。

「ミニチュアのデスクとイス、ですか？」

そのようなものですね。寝ぼけ目は変わらず、右手を後頭部にやっつけてぱりぱりと頭を搔いた。

「あろう……」

2人が聞こえた方に目をやると、はやてとリインが申し訳なさそうに両手を前で結んでいる。

「リイン、はやて？」

「それ、私たちですう」

「か、かんにんやあ」

今度はこちらが今日までリイン用のデスクとイスが見つからなかったこと。オフィスへ向かう最中に見つけて、リインにせつつかれたこと。

「それだとリインが悪いみたいですよ！」

『リサイクル品 御自由にどうぞ』と書かれたために持ってい

ってしまったことを話した。

「そういうことですか」

「ごめんなさい」

「い、ごめんなさいです」

ぺこりと頭を下げる。

「……あの」

「ふ、ふあい」

顔を上げるとリインは泣かずにいるが何を言われるんだろうかとおどおどしている。

「え、えと。どうでしたか？」

「ふあい？」

「いえ、あの。机の安定感ですとか、座り心地ですとか」

「そ、それは、とてもよかったです。デスクはツルツルぴかぴかで、イスの座り心地も良いです」

声を若干震わせながら応えると、彼はぶふうとすこし息を吐くて胸を撫で下ろした。

「よかったあ」
「です?」

はやて、フェイトも小首を傾げる。

「では」

そう言つと彼は回れ右して歩いていく。

「あ、あの!」
「はい?」

何か用事だろうかと振り向く。

「そ、それだけですか?」
「それ、だけ、ですが? も、もしかして、どこかに不備でも!?」

眉根を寄せた後にはっと顔を擡^{しか}めて、ずいとラインに顔を近づける。

「安定はいますが、傾いているですか?」
「い、いえ」

「引き出しが重いですか？」

「いえ、全然です」

「では、イスですか。キャスターがスムーズではないとか？」

「大丈夫です」

「空気圧がおかしくて、高さの可変が効かないですか？」

「大丈夫です」

「ではでは、背もたれの可変ですか？」

「いえ、問題ないです」

うう、ううむと彼は考えられる不備を搾り出そうとする。

「あの、そうではなくてですね？ お、怒らないですか？」

「はい？」

「勝手に持って帰ってしまっって」

「ん。あ、あー、そういうことですか。別に怒りませんよ。あれは本当に暇つぶしで作ったもので、今日からしばらく暮らすことになる宿舎でインテリアにでも思ったくらいです」

まだ、部屋には何も無いもので。と頭を掻く。

「もし、困っているのならば全然利用してくださって構いませんよ？」

「本当ですか？」

それを聞いて、ぱあっとリインは表情を明るくする。

「はい。私はあれが突然無くなったので、不思議に思って探した次第です」

ひとしきり2人の会話にはやても胸を撫で下ろしたのを見て、フエイトははやてに訊ねる。

「ねえ、はやて？」

「なんや？」

「彼が作ったデスクって、部隊長オフィスにあった」

「そそ、あれや。本当に良くできているんよ」

フエイトは先程オフィスに入ったとき、ラインが居たデスクを思い出す。それは見た目上、はやてが座っていたものと劣らずの出来であることに今気付いた。当たり前過ぎるほどそこにおいてあったので違和感に気付かなかったのだ。

「余程器用なんやろなあ」

「そうだね。でも、見ない顔だけど、はやては知ってる人？」

「書類で見たくらいやなあ、ナカジマ三佐が手を回してくれた人なんよ。えと、名前は」

「ありがとうございますです！ えと……」

「はい。本日より機動六課へ出向となりましたコタロウ・カギネ三等陸士です」

彼コタロウ・カギネは特徴的である寝ぼけ眼をそのままに、ぴしりと敬礼をした。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コ

第2話 『彼女たちの疑問』

彼ヴァイス・グランゼニックはコタロウに対する自分の立ち位置をどうするか戸惑っていた。

「コタロウ三等陸士、さん？」

「はい？」

「なんとお呼びすればいいんすかね」

「お好きな呼び方で構いませんが？」

現在は屋上にいて、へりの離陸準備をしようとしているところである。コタロウはぐるりと、手を当てながらへりをゆっくりと一周

する。その間に、ヴァイスは腕を組んでいくつかの葛藤をした後、やはり自分の基準は階級ではなく、年数や年齢によるものということに落ち着けた。

「それでは、コタロウさんで」

「はい。よろしく願います。グランセニック陸曹」

「あ、自分のことはヴァイスで構いません」

「そう？ でも、申し訳ありません。もう、ファミリーネームで呼ぶのが一種の癖になっているので、私はそのままグランセニック陸曹と呼ばせていただきます」

そのうち、ファーストネームで呼ぶことがあるかもしれませんが、ヘリからは目を離さずに応えた。

ヴァイスははやてよりコタロウを任されていた。

本当ならばメカニックであるシャリオ・フィニーノやアルト・クラエッタに任せるところであるが、それは建前で、本音はヘリでの護送中に少しでも会話をしたいというのがはやての思いである。

「ふうむ。このヘリ……」

今は制服は着替え、ヴァイス、コタロウ共々つなぎを着ている。ヘリパイロット用のミリタリースーツとメカニック用のメカニックスーツとでは見た目からの違い以上に彼ら2人は違っていた。

おおよそ違っているのはコタロウのほうで、ヴァイスはおろしたての新品見紛うことみまがは無いの比べると、つなぎのいたるところにツギハギやコゲ、工業油のシミがこれ見よがしに施してある。目深めぶか

にかぶっている帽子も特徴的だ。

ヴァイスはすぐに新しいのに着替えては？ と、勧めるがコタロウは慣れているから、と、ぼんやりと断った。

「気付きました？ 新品なんですよこの」

彼がひとつの話のつなぎとしてへりを紹介しようとするが、

「あ、だからか」

と、さも不精に板を立て直すかのように片足でへりを傾かたげ上げる。

「っ！？」

<マスター！ 何事ですか？>

一瞬、ヴァイスは全身がびくりと固まり、愛機のストームレイダーが主人に確認を取る。

「ここ、か」

わずかに押し上げ、さらにもう少し奥へと進み、右手をそのまま右腰にやると道具を取り出すと、すごい速さで調整をとる。

「コ、コタロウさん？」

「す、ぐ、終わります……ふう。終わりました」

はい。と、大きくへりを押し上げ、コタロウが先程の位置まで戻ると足を高く上げ、へりをそっと足を添え、ゆっくりと下ろした。

「新品は締め具合が一定で、固すぎる箇所があるんですよ。これで振動は抑えられます」

「は、はあ。つでなくて、なんなんですかい、今のは？」

「今のは？ といいますと？」

「へりを軽々しく持ち上げたことですよ！」

「ん。あ、あー。うちの課は結構力持ちが多いんですよ」

5人しかいませんが。と付け加える。

「力持ちって」

（それは、怪力って部類にはいるんじゃないですかい？）

ヴァイスは口にはしなかった。

<マスター？>

「だ、大丈夫だ。なんでもない。起動してくれ」

<そう、ですか。了解です>

ヴァイスも驚くようなことは他でもいろいろと見たことがあるので、深く考えないようにした。

「そついやあ、コタロウさんってどこの課からきたんですか？」

彼は早くも口調をいつも通りにし始めている。

「電磁算気器子部工機課です」

「聞いた事ない課すね」

「まあ、知名度は低いですな」

「何をす」

「あ、ヴァイス君。もう準備できたんか？」

次の質問の前に、屋上へのドアが開き、声のする方からはやて、フェイトが歩いてくるのが見え、2人ともそちらへ目をやる。

「準備万端。いつでも出れますぜ」

「うわあ。このへり結構新型なんじゃない？」

フェイトが感嘆して声を上げる。

「JF-704式。一昨年から武装隊で採用され始めた新鋭機です。機動力や積載能力も一級品すよ。こんな機体に乗れるってなあ。パイロットとしちゃあ幸せでしてねえ」

へりについての解説はパイロットながら、とても楽しそうに話す。

「ヴァイス陸曹！」

「はい？」

その最中にラインが割って入る。

「ヴァイス陸曹はみんなの命を乗せる乗り物のパイロットなんですから、ちゃあんとしてないとダメですよ」

すつと指を相手に向けて注意するラインに、ヴァイスは当然！と、言うように手を振り上げ

「へいへい。分かってまさあね、ライン曹長」

「コタロウさんはヴァイス君とは話せましたか？ というより、新品のメカニックスーツありますよ？」

はやては自分と同じくらいの身長のコタロウに話しかける。

「はい。気さくな良い方です」

「コタロウさん。そう言う割りには言葉遣い、堅苦しいっすよね」

「一種の局にいる癖のようなものです」

彼は変わらずの寝ぼけ目で応える。

5人はへりに乗り込むと、はやては首都クラナガン、フェイトは中央管理局までと行き先を指示し、飛び立っていった。

「そういえば、コタロウさん。さっきの話の続き何すけど」

「はい」

「その、電磁……」

「電磁算気器子部工機課？」

「そうです。その課って何するところなんすか？」

「すごい名前ですう」

「私も気になっとったんや。その課」

「聞いたこと無い課だね」

一様に感想を漏らす。

「んー。課の紹介上での目的は『時空管理局陸上における電磁、電算、電気、電器、電子部品を担う部であり、工機課はさらに工業生産部品、主に管理世界に存在する質量兵器の調査、検証を行う課』ですね」

「え、えーと。つまり？」

「簡単に言うと、時空管理局上の機器類の修理を行う課ですね」

「はー、なんかすごい課すねえ」

「いやいや。今はそれぞれの課、隊には専門のメカニックがいるでしょう？ 今は仕事は少なくなっているよ。さっきも言ったけど知名度が低いから」

「せやけど、多くの機器類を修理するのって対応の資格がいるやろ？書類みましたけど、書かれてなかったんやけど……」

あー、そつだ。と、思い出したように、コタロウははやての方を向き、

「これを」

小さなチップを取り出す。

「書こうとしたのですが、時間が無かったもので」

(ものぐささんなんやろうか?)

「申し訳ありませんが、今追記してもよろしいでしょうか？」

「ん。それなら、リイン」

「はいですう」

リンはコタロウからチップを受け取り、専用端末へつなぐ。相手は自分のデスクとイスを作ってくれた人なのだ、それくらい構わないという陽気さで、画面を立ち上げた。

画面は資格の数だけ立ち上がるが、

「す、すごいですう」

「なんなんや、これ」

「本当にすごい」

どんな感じなんですかと、自動操縦にしてヴァイスも振り向く。

「うげ」

振り向いたヴァイスからはリンが見えなくなっていた。

そこにはアルファベットのAからZ 本文では『あ』から『ん』

までのありとあらゆる資格が表示されている。

「測量士、高圧室内作業、通信士、溶接士、プレス、砕石」

「運転免許は大型まで」

「修理とは関係ない、ヘリパイロットや艦船操舵もですう」

デバイスマイスターまで、と目に当たるところから読み上げていく。

「ヘリパイロットの資格まで持つてるんですか？」

「まあ、最低のこですが」

そこで、はやても気付く。

「そう、やね。どれも最低ランクの取得までやね。どれも……二等陸士扱いかそれ相当の資格ばかりや！」

「はい。先程のデバイスマイスターも調整までのものです。うちの課はとにかく広く浅くなので」

「それにしても」

「この数は」

「すごいですう。あ、ぬいぐるみ検定5級というのものもあるです」

「まあ、17年もあの課で勤務していればそうなりますね」

「17年!？」

ヴァイスがオウム返しに聞き返し、フェイトもその言葉に反応する。

「え、17年。17年ですが、なにか？」

「あの、失礼ですが、いまおいくつですか？」

フェイトがおずおずとたずねる。

「26歳ですが？」

「……………」

一時の間の後。

『えーーーーー!?!?』

フェイトは素直に驚いたが、ヴァイスは年数、年齢両方とも自分より上なことに驚いた。

自分より若い勤務年数が多い人は少なくないことは知っていたが、彼の場合は年齢も自分より年上で、勤務年数も自分より倍近く勤めていることに何より驚いた。はやてと同じくらいの身長もさることながら、子どもっぽさを冗長する寝ぼけ目から自分よりも年齢が上であるとは思わなかったのだ。

次に彼が淡々と話す自分が孤児で今の課長に引き取られたことくだりの件は驚きの中で聞こえないでいた。

「ヴィータ。ここにいたか」

1人の女性が少女、もとい女性に話しかける。

「シグナム」

2人の身長差は明らかである。

背が低く、眼下にいる新人達を真摯に実力を押し量っている女性
ヴィータは、三つ編みを2つに分けた赤い髪の持ち主で、今は腕を
組み、教導について思いをめぐらせている。

「新人達は早速やっているようだな」

背が高く、新人達にちらりと目をやり、つすみきれいろ雰囲気だけをつかむ女性
シグナムは、後頭部で1つに結わえた薄紫色の髪の持ち主で、今は
右手を腰に手をやり、ただ傍観するだけに務めていた。

「ああ」

「お前は参加しないのか？」

ヴィータはシグナムを一瞥して、また新人達に視線を戻す。

「4人ともまだよちよち歩きのヒヨッコだ。アタシが教導を手伝うのはもうちよつと先だな」

「……そうか」

「それに、自分の訓練もしたいしさ」

すつと視線を新人達から、教えている教導官にずらす。

「同じ分隊だからな。アタシは空でなのは守ってやらなきゃいけない」

一つの決意を聞いたシグナムは、その理由も理解しているようで、

「そうか、たのむぞ」

と、短く区切った。

「うん。つと、そういえば、シャマルは？」

「自分の城だ」

同志の動向を聞くヴィータにシグナムは彼女について想像し、微

笑んでいるんだろうか目を細めていた。

彼女たち、アルト・クラエッタとルキノ・リリエが疑問に思ったのは届いた医療機器の調整をしようと、機器のケースを開いた時である。

「ふふうん。いい設備。これなら検査も処置もかなりしっかりできるわねえ」

シヤマルがかなり上機嫌にルームを見渡し、既にきれいなデスクの上で何度も手を走らせていた。

「ルキノ。そっちはどう？」

「こっちはなんともない。そっちは、アルト？」

こちらも。と不思議がる。

アルトは貰い元の医療スタッフから、この手元にある医療機器の不具合箇所を事前に窺^{うかが}っており、一度中を開いて確認していた。そのときには不具合箇所は確かにあり、彼女はそれ以外にも老朽のためか数点、ケーブルやパーツの交換が必要な箇所を見つけ、めぼしをつけていたのである。それはルキノも同じでアルトから不具合箇所の連携を受けており、ロビーの集合前に目視で確認していたのだ。しかし、その箇所はきれいに修繕、調整が取られている。それはアルト、ルキノが見落としていた部分でもある。

電源を入れると特に問題は無く起動し、不具合とされていた箇所も異常は見られない。

「ルキノちゃん、アルトちゃん、どうかしたの？ やっぱり、本局医療施設の払い下げ品じゃあ」

「い、いえいえ！ 実用にはまだまだ十分です」

「みんなの治療や検査。よろしく願いますね、シャマル先生？」

2人はかぶりをふって、シャマルを安心させる。実のところ何も問題は無いのだ。もう、いつ治療、検査がきても対応できる。

「はあい！」

と、機嫌を取り戻したシャマルはふふつと笑顔になって、ルームを一つの舞台のようにくるりとまわり白衣を翻^{ひるがえ}す。

「他の機器も一応見てみる?」
「そう、だね。たしか、問題は無いけど、怪しい箇所が見つかった
機器はいくつかあるから」

彼女の聞こえないトーンで2人は言葉を交えた後、他の懸念され
ている医療機器を開けてみるが、それらの機器はすべて問題が解消
されていた。

「どういうこと?」

「さあ。さっぱりよ。妖精さんが直してくれたのかしら?」

「妖精って、ライン曹長?」

なに言ってるのよ。と、苦笑しながらアルトが突っ込むが、誰が
修繕をしたことについては突っ込めずにいた。

第2話 『彼女たちの疑問』（後書き）

うーん。文章を書くのって時間を忘れてしまっことを久しく忘れてしまいます。

語彙が高い人はすんなり出てくるのでしょうか、なにぶん我流なので、とんでもない言い回しや、否定から文が始まるなど、色々難ありです。

さて、やっとの2話目なのですが、

まだ、主人公が登場して1日過ぎていません。

どうして？ と思ったのですが、

まあ、理由は丸めてしまいましたので、分かりません。

感想、できたら、ほんとできたら、お待ちしています。

（いや、こないだろうなあ）

第3話 『課長と課長とネ』(前書き)

たぶん、更新はこのペースになるかと思います。
私は遅筆なのです。

第3話 『課長と課長とネ』

六課配属2日目、八神はやては昨日へリの中で目に付いたのもあって、デバイスの整備・作成を担当としているシャリオ・フィニーノ一等陸士の下もとにコタロウ・カギネ三等陸士をつけることにした。しかし、彼の年齢による経験と資格から、随時他の調整作業も依頼しようかと内心検討している。

「コタロウ・カギネ三等陸士です。どうぞよろしくお願いします」

彼女シャリオ・フィニーノ一等陸士が彼の第一印象として感じたのは、ぼやっとした目と左腰に下げている『傘』くらいで、それ以外は特に意識することは無く、

「シャリオ・フィニーノ一等陸士です。コタロウ君でいいかな？」

簡単な挨拶ですます。彼女ははやてから『コタロウさんはひとま
ずシャリーの下につけるけど、臨機応変に動いてもらう予定や
から、よろしくな?』と伝えられていた。

「はい。呼び方は御自由にさせていただいて構いません。フィニーノ
一等陸士」

「あ。皆、私のことはシャリーって呼ぶから、よかったらそう呼
んでね?」

はやてが彼のことをさん付けで呼んでいたことで、年上かなと思
ったが、見た目からそのような雰囲気は窺えなかつたため、彼女は
きつと気を使っていたのだらうと思ひ、シヤリオはこちらから歩み
寄る。

「いえ、これは一種の癖のようなもので……」

が、彼は頭を掻きながらやんわりとシヤリオのお願いを断つた。

(全然かまわないのに。緊張しているのかな?)

不満顔をちよっぴり覗かせるだけにする。

「しかし、このような早朝から、何かの朝練ですか？」

現在、2人は隊舎をでて、海に向かって歩いてゐる。周りは早朝
特有の静かな空間で、聞こえるのは鳥の鳴き声くらいである。

「そう。新人たちの訓練を見にいきます。コタロウ君には私が訓練
を見に行けない時、訓練中のデータを収集して欲しいの」

新人たちのデバイスにもデータ収集機能は付いているんだけど、
やっぱり人が採ったデータのほうが、ね。と、続ける。やはり、デ
ータは一度人に触れたほうがものの方が、扱いやすく、解析しやす

いのだろう。おかしな視点があれば、元のデータをみればそれだけで済む。シャリオはその方がより効率的であることを知っていた。

「そうですね。そのほうが効率がいいと思います」

「へえ、わかってるねえ、コタロウ君」

「ありがとうございます」

昨日とは違い、コタロウのメカニックスーツは新調されている。

これは昨日、はやてに『やっぱり、新設した部署やから、しばらく新調品を使用してください』と、畏^{かしこ}まれてしまった為である。コタロウは考えるにそのとおりで、ヴァイス・グランセニクにはあ言^いったが、新設部署なのだから、当たり前か。と、納得し、時期をみてまた着ればよいと考え、今の服装でいる。

「ところで、その腰の傘は……」

「はい。私のストレージデバイスです」

それはどうみても傘にしか見えない。目立つものがあるとするれば、柄が曲がっていないことと、生地が少し厚いくらいである。

「自作、だよな」

「はい。作成は2年くらいで、その後、少しずつ調整をしています」
「時間があつたらじっくりみたいけど、今は新人たちがあるしな

あ
」

独り言らしいが、そうは聞こえなかった。
そんなことを話している間に、集合場所にたどり着く。

「おはよう、みんな」

『おはようございます』

丁度、高町なのは一等空尉、新人たちも集まったようである。

「おはよう」

「おはようございます」

シヤリオ、コタロウも挨拶をする。

「えと、では始めに、一日遅れだけど私と同じくメカニックを1人紹介します」

彼はぴしりと敬礼をとり、

「コタロウ・カギネ三等陸士です。至らぬ点があるかと思いますが、どうぞよろしく願います」

彼の挨拶の後、これから生活の一部になるであろう早朝訓練を始

めるために訓練場へと足を運ぶ

彼女スバル・ナカジマは訓練場に向かう間に自分も自己紹介しなければと思いい口を開く。

「私、スバル・ナカジマ二等陸士。よろしくね、コタロウ」

「エリオ・モンディアル三等陸士です。よろしくお願ひします、コタロウさん」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。よろしくお願ひします」

「んで、あつちの」

「ティアナ・ランスターよ」

新人たちはスバルの挨拶を皮切りにそれぞれ一様に挨拶をする。

全員、どうやら昨日初日の訓練の疲れは残ってはいないようで、どちらかというところ、『今日も頑張るぞ』という気力に満ちていた。

「はい。よろしくお願ひします」

これはこの課の特性なのか、それともその様な気質の持ち主が多いのかはわからないが、『自分のことは名前で呼んでも構わない』と言うティアナを除く人が多い。現に、もうコタロウを呼ぶ時はファースト・ネームで呼んでいる。

「コタロウのその腰に下げている傘はデバイスなのかな」

なのはもそれに準じている　これはティアナも含む。」

「はい。高町一等空尉とは違い、ストレージデバイスです」
「へえ」

しかし、コタロウ自身は相手のことをファースト・ネームでは呼ばず、階級呼称を付与して呼んだ。これには皆、先ほどのシャリオ同様、多少不満顔　ティアナを除く　で、スバルは一番に「スバルで構わない」と、再度念を押すが、彼は「これは癖や習慣と同じ様に染み付いているものなので、角^{かど}が取れてくれば、自然とそう呼ぶようになるかと思えます。それまでは」と、ヴァイスの時と同様に断った。

そんなことを話している間に、訓練場にたどり着く。

「それじゃあ、今日の早朝訓練、実践型模擬戦やって行こうか」
『はい！』

なのはの挑戦的な笑顔に新人たちは負けじと威勢のいい返事で応えてみせた。

魔法少女リリカルなのはStrikers　　く困った時の機械ネ

コ

第3話 『課長と課長とネ』

「以上、今日は私が収集したけど、午前、午後の訓練のデータ収集をお願いできる？」

「はい。問題ありません」

なのはが新人たちに対して、朝練での良いところ、悪いところ、考えなければならぬところを教えている間、データを取るためのインタフェースの使用方法を再度コタロウに確認をとる。

シャリオが彼に教えて素直に感心したのはなかなか物覚えが良いところであった。きちんと自分が説明した内容を把握している。

「それじゃ、今日の早朝練習はこれまで」

『はい！ ありがとうございます！』

練習が終わると、糸が切れたように息切れを始め、その辛さを物語っていた。

「それじゃあ、シャワーでも浴びて朝食にしようか」

『はい！』

シャワーを浴びるため、新人たちは宿舎へ足を進めていく。

「それじゃ、なのはさん。私は先にデータだけ置いてきちやいますね？」

「うん」

「では、食堂で。あ、コタロウ君は皆と一緒にね？ 少しでも親睦を深めておいたほうが良いでしょう？」

シャリオは手を振りながら隊舎へと小走りで戻っていった。

「高町一等空尉はどうされるのですか？」

コタロウは彼女の言葉に2つ返事をした後、なのはの方を向く。

「ん？ 私も、今取ったデータを私なりにまとめておくよ。午前の練習は朝練の成果を反映させてやりたいからね。コタロウはシャリーの言ったとおりみんなについていかなくていいの？」

「いえ。フィニーノ一等陸士に『はい』とは答えたものの、私はそもそも汗をかいていませんので」

ああ、それもそうだね。と、なのはは端末を操作しながら返事をする。

「なので、外で待っていていようかと思えます。しばらく、その操作を見ていても構いませんか？」

うん。大丈夫だよ。と、返事をしながら、端末を操作していく。なのは先ほどの練習をもう一度、ダイジェストの感覚で動画データを各角度から眺め、そこで新人たちに話した考えるべき場面に ついて自分なりの教導内容をその動画の横にコメントをしていた。時々レイジング・ハートに話しかけ、午前のトレーニング内容を何度か確認する。

教官は普段であればこのような個々に応じたトレーニングの組み立ては行わない。それはやはり人数の多さであろう。なのはまだはやてのこの機動六課の真意を教えてもらってはいいが、周到に教導を行うに間違いはないと考えていた。そんなことを思いながら、キーをたたき構成を組む。

「……もしかして、ずっと見てたの？」

「はい」

彼女は端末を閉じて視線を上げると、ぼつんと正面にコタロウがいる。

「う、ごめんね。夢中になって気がつかなかったよ」

「いえ。私もデバイス作成を手伝う身ですから、見ていただけで十分勉強になります」

「そう？ それならいいけど」

じゃあ、みんなもそろそろ集まるころだし行くところか。と、隊舎へ

向かうことにした。

「そういえば、デバイスを所持しているってことは、武装局員資格
持っているの？」

「え、う、はい。持ってはいませんが、このデバイスは自作でして、
そのテスト用に登録してあるだけなのです。正確にはデバイス調整
補助動作確認兼試験運転限定付武装局員資格です」

「う。す、すごい資格だね」
「やははと苦笑う。」

「そうですね。限定付武装局員資格で構わないと思います」

「ふうん。シャーリーもその資格……あ、もってないか」

シャーリオは魔力を有してはいないのだ。

「はい。それに魔力所持者は大抵武装局員資格を取得した後、それ
ぞれ進路を選びますから。私の場合は入局が少し特殊でしたので」
「特殊？」

そこでなのははコタロウの方を向くが、目深まぶかに被っているメカニ
ック帽のせいで表情は見えない。身長がなのはよりも若干低いのも
強調している。

「私は」

「なのはさん、コタロウさん。おはようございます」

向こうからヴァイス・グランゼニツクが歩いてくるのが見えた。

「おはよう、ヴァイス君」

「おはようございます、グランゼニツク陸曹」

「ヴァイス君も、今からご飯？」

「はい。昨日は初日だけあって、色々なんやらで忙しくかったんですが、今日はゆっくりでさあ」

まあ、午後からはまた忙しくなりそうなのですがね。と、言葉を漏らす。ヴァイスが言うに、午前も午後も忙しいことには変わりないらしいが、ばたばたを移動が多い忙しさではなく、一ヶ所での作業の忙しさであるらしい。午後は移動を繰り返さなくてはならないので、忙しいということだ。

食堂へ向かう間、しばらくヴァイスとなのはとの会話が続き、その途中、コタロウへも話題が振られるが、「はい」や「ええ」といった片言の返事のみで返すものばかりであった。

その間、なのはの違和感がどんどん強まっていった。彼に話題を振るのはヴァイスばかりで、常に敬語で訊ねているからである。ヴァイスは年下や勤務年数が下の者に対して敬語は使わない。使うことがあっても、それはお互いの自己紹介の後だ。ヴァイスはシャリオと同じく人見知りをするような性格ではない。違うのは、相手の持つ雰囲気を読むのがうまいことだ。それにより相手に対する態度を的確に判断することが彼の美德の一つである。そのヴァイスがコタロウに対して敬語を使用していることになのはは違和感を覚えていた。

(んと、あれ?)

そこで十字路に差し掛かり、正面から八神はやて、フエイト・テスタロツサ、シヤマル、シグナム、ヴィータ、そして青い獣、左からはシャリオ、アルト・クラエツタが、そして後ろからは

「なのはさーん」

新人たちが追い付く。

「あれ、おかしな偶然もあるもんやねえ。皆、ご飯?」

ほな、一緒にいこか? そうして、隊長陣およびヴォルケンリツター シヤマル、シグナム、ヴィータ、青い獣のザファイラの総称 を先頭に、最後尾に新人たちがつく。ヴァイスやシャリオたちは真中に位置する形になる。コタロウはシャリオの丁度真後ろを歩いている。

「コタロウさん、おはようございますです!」

はやての隣を飛んでいたリインフォース・ツヴァイがコタロウの横に付き挨拶をすると、

「おはようございます。リインフォース・ツヴァイ曹長」

「おはようございます。リイン曹長」

コタロウに合わせて隣を歩いていたヴァイスも挨拶をする。

「自分でいうのもなんですが、言いにくくありませんか? リインで構わないですよ?」

「いえいえ。私はこれが普通なのです」

そうですね。と、すこし、肩を落として、そのままふよふよとコタロウの隣につく。

「珍しいな。リインって少し人見知りする方じゃなかったっけ？」

「そうね。まあ、初めのうちだけなんだけど、面識があるのかしらっ。」

「ふむ。主^{あな}っ。」

ヴィータとシャマルの言うことも最もで、少し考えシグナムは主はやてに問う。

「ん、あー。オフィスにリインのデスクがあったやろ？ あれを作ったのがあの人なんよ」

彼女たちはそういえば、昨日の夕食の間、デスクのことをことさらに自慢していたのを思い出した。そのとき確かにコタロウという名前が出てきたのを覚えている。

「へえ。あいつが」

ヴィータが思うのが正しいのかどうかは分からないが、小さいヤツというのが正直な感想であった。

シグナムも思うところは同じらしく、年は15、6くらいだろう

かと第一印象から判断していた。

戦闘においての判断力は彼女たちはずば抜けていたが、人に対する判断力はヴァイスの方がずば抜けていた。

「そういえば、シャーリーの下につくことになったんすよね？」

「はい。フィニーノ一等陸士の補佐として、新人の皆さんのデータの収集することになりました」

「というと、朝練にも付き合っんで？」

はい。と、二つ返事で答える。

「どうですかい、新人たちは？」

「どう、といたしますと？」

「そりゃあ、話してみてもですか。練習をみての動きですとか。使っているデバイスですとか。まあ、思った感想ですかね？」

ふむ。と、コタロウは右手を顎にあてるがすぐに離して、ヴァイスの方を向く。

「それは教導官高町一等空尉、デバイスマイスターフィニーノ一等陸士、そして新人のみなさんの前で申し上げてもよろしいことなのでしょうか？」

彼の方を向いたコタロウは寝ぼけ眼をほそくして眉根を寄せていた。

「ねえねえ、ティア。ヴァイス陸曹どうして、コタロウに敬語なの

かな？」

「わ、私に聞かないでよ」

「ティア？ 顔色悪いけど、大丈夫？」

確かに、今の彼女は少し血の気を失った顔をしている。

「大丈夫よ。すぐにアンタも一気に顔色変わるから」

ティアナ・ランスターは練習前の自分の突き放したような態度に激しく後悔していた。彼女はどうかやら、彼らの会話のやり取りで気づいたようだ。

（なんで、私たち新人たちにあんな態度なのよ、コタロウさんは！）

ヴァイスの性格上、敬語を使う時がどんな場合かは2言3言話した時に把握していた。

「私、なのはさんたちやアンタに便乗するから」

「……？ どゆこと？」

彼はなのはの感じた違和感や、ティアナの態度の理由を次の言葉で解消した。

「なあに言ってるんですかい。コタロウさんはシャーリーが生まれ
た年に入局してるんですから、そんなこと気にしないでいいんっす
よ！なのはさんだって、意も言わず許してくれますって」

解消はされたが、一気に空気が凍りつく（特にシャリオの）。

「そういつものなのでしょう　　っター！」

その空気に気が付かないコタロウは突然立ち止まったシャリオの
後頭部に鼻っ柱をぶつけてしまった。帽子はツバが先にあたり、足
元にぼとりと落ちている。

「いふあい（痛い）。えと、食堂に着いたのですか？」

彼は、ゆっくりとしゃがんで帽子を拾いかぶりなおして、周りを
見るが、まだ廊下であった。

はやてとフェイトはコタロウの叫びで立ち止まり、後ろを振り向
くと全員の視線が一点に集まっていた。

「はやて、昨日の私とヴァイスもあんな感じだった？」

「そやね。はたから見ると面白くてしゃあないわ」

はやては書類で見ているため、昨日も動じていない。

「な、なのはも固まってるんだけど」

「シャマルたちも目を見開いて固まっとなるなあ」

彼女たちは次に他の皆がどう反応するかは、わかりすぎるほどわかっていた。

「あの、皆さん。どうかなさいました？」

昨日よりもたっぷり沈黙を使い、ヴァイスがにんまりと声に出して笑う前に、

『えーーーーーーーっ！』

という、驚嘆の声（なのは、シャリオ、スバルが特に大きい）が廊下に木霊した。ラインが既に耳を押さえていたのは余談である。

食堂へ向かうまでの間、なのは、シャリオ、スバル、ティアナの4人それぞれの謝罪があったが、コタロウは何をそんなに謝っているのだろうかと疑問に思っただけで仕方がなかった。その疑問にはヴァイスが応えるが、

「好きなように呼んでいただいて構わないと申し上げたはずなのですが」

「……いや、若い分、そういうのには敏感なんですさあ。自己紹介に年齢も付け加えてはいかがですかい？」

「検討しておきます」

4人はなんとか罪悪感と自己嫌悪を軽減させることができ、現在は食卓に取ってきた料理をおいて席についている状態だ。帽子は邪魔にならないようにおいている。

はやて、フェイトもまた、別の席についていた。はやてはヴォルケンリッターと一緒に、なのははフェイトやシャリオたちと一緒に、新人たちは新人たちで席につく。

コタロウはヴァイスと2人で席についている。

彼の左では、

「ティア、いつから知ってたの？」

という声が聞こえ、彼の右では、

「それじゃあ、はやてさんもフェイトさんも知ってたんですか？」
「なんで教えてくれなかったの？ うう、フェイトちゃんもはやてちゃんもひどいよお」

と、お互いぼそぼそと言いつているのが聞こえていた。
コタロウとヴァイスが座っているのは丁度、食堂中央のテレヴィジョンモニタ正面席である。

「んで、さっきの話ですが」
「感想、ですか？」

そつす。と頷く。ふむと考えコタロウは皿上のハムを刺してリスのように口いっぱい運び飲み込む。

「性格を応えるならば、皆さん良い方々としか言いようがありません」

飲み込んで答えるとまた食べ物をお口へ運んで行く。どうやら彼は食べながらしゃべるといふことはしないようだ。

「社交辞令みたいな答えつすねえ」

「私は機械に触れることが多いですから、人間について述べるのは難^{むづか}しいです。機械的見地なら、もうすこし話すことが出来ますが」

「機械的な見地っすか？」

また、彼は口いっぱい料理を運び、コクリと頷く。ヴァイスは例えば？ と、質問した。

「例えば……ふむ。例えば、ナカジマ二等陸士のローラーですが、それほど長くは持たないでしょう。よくて一ヶ月くらいで、壊れま
すね」

きよとんと、スバルがその言葉に反応して、コタロウの方へ向く。他の新人たちも彼女に合わせて彼のほうを向いた。なのはやシャリオも彼の発言に興味がわき視線を向ける。

「なぜですか？」

「耐久率の問題ですね。ナカジマ二等陸士は攻撃時は前傾姿勢、防御時は後屈姿勢、走行時は平行姿勢と、立ち方をそれぞれ変えています。あれでは間接部の衝撃はかなりのものでしょう。もっとも、壊れるのはそこからではなく、その箇所での磨耗によって全体のバランスが崩れ、全体の耐久率の低下に伴う故障になるかと思いますが」

またまた、たっぷりと口に料理を運ぶ。

「……そこまでわかるものなんですか？」

なのはとシャリオはぱちくりと瞬きするとお互いに目を合わせた。

「んくつ。まあ、これでも人より機械の方と多く接してきましたから。機械稼動部から、その人を判断したにすぎません」

「いやあ、結構的確に判断したみたいですよ？」

何故ですか？と、問うコタロウにヴァイスは嗜好飲料を口にしながら、視線でコタロウの左後方へ視線を送る。彼が振り向いてスバルと目があるとコクコクと首を立てに振っていた。どうも、指摘されて初めて自覚したようである。

「なのはさんは気づいてました？」

「うん。一応。昨日の練習である程度、みんなのウィークポイントを抑えていたから。でも、デバイスにかかる負担率まではいれてないよ。シャーリーは？」

「私のほうは逆でデバイス各所の耐久比率は算出していました、新人たちの動きの詳細までは見ていませんでした」

2人ともそれぞれの得意とする分野の判断は的確に抑えていたが、そこに至る過程がいくつか抜けていた。彼女達は静かに話していたため、コタロウたちや新人たちには聞こえてはおらず、彼らは話を続ける。

「するつてえと、他の新人たちもその、機械的見地からなにか判断

できるんで？」

コタロウはもしやりと今度は野菜に手をつけている最中であった。

「ん。それは」

「お？ ネコじゃねエか」

それは突然、会話の中に入ってきた。コタロウは知った声の向くと、そこにはエリオのそれよりのずっと黒い、臙脂色えんじの髪髪の男が手を振って近づいてくる。

「あ、ジャン。どうしたの？」

ヴァイスが聞く限り、初めてコタロウが敬語を抜いて話をする相手である。

彼がジャンという男はヴァイスよりも大きな身長身長の持ち主で、瞳も髪と同じ色色をしている。体格もすっかりしており、通り過ぎる人たちの進行方向を曲げさせる威圧感威圧感を持ち合わせていた。

「ん。お隣に挨拶にな。八神はやて二佐はここいるか？」

「八神二等陸佐ならあちらに、いるよ」

ジャンという男の快活な声はよく通り、はやては自分が呼ばれた

ことにすぐに気が付いた。それは彼女の周りを囲むシグナムやシャマルたちも同様で、その男に警戒色を強める。

「なんだお前エ」

始めに敵意むき出しで立ち上がったのはヴィータだ。

「あんたが八神はやて二佐かい？」

彼女の反抗的な視線には目もくれず、テーブルの間に挟む形で向かい合い、男はやてに挑戦的な目を向ける。

「挨拶とは聞こえていたが、部隊長に何か用事でもあるのか？」

ことりと食器を置くとシグナムも立ち上がり、相手を睨む^{にら}。気が付けば、テーブルの下に居たザフィーラも顔を覗かせ、低い唸り声を上げていた。

制服を着ていることから同じ局員であることは間違いないはずなのに、一触即発の空気がひしひしと食堂を侵食し、朝食のさわやかさがなくなっていく。

時間にしては1分も満たない時間であったが、相対する沈黙が時^{あいたい}を長引かせていた。

「失礼ですが、どちらさまやるか？」

ヴァイスもコタロウに同じ質問する。するとその男はまるで拳銃を出すのかのような仕草でゆっくりと自分の胸に手をやり　ぐつとシグナム、ヴィータは身構える。

「……こついう者です」

先ほどまで張っていた肩を丸めて威圧感をなくし、畏まりながらはやてに名刺を手渡した。あなた方たちもどうぞ。と、身構えている彼女達にも渡す。

彼女達は視線を落としてゆっくりと黙読すると、はっと顔を上げて相手の顔を確認する。

そこで男はまた威圧感と挑戦的な目を、今度は彼女たち3人にむけて、

「よろしく!」

左手を軽く上げて挨拶をした。

始めに動いたのは課長であるはやてだ。コタロウとは違いピシッとお手本のような敬礼をして、

「うちのものが失礼を。機動5課課長ジャニカ・トラガホルン二等陸佐」

先ほどの2人と一匹の非礼を詫^わびた。
それはコタロウが「私の親友の1人です」と、言ったすぐ後のこ
とであった。

第3話 『課長と課長とネ』（後書き）

なんとか、3話目の投稿になります。

はい。

コタロウがどういいうときに敬語を話し、どういいうときに話さないのか分かったと思います。

私がこの話で最も言いたかったことは、
はやてがコタロウの年齢と勤務年数を言わなかったこと。
新調した作業衣を着せたことです。

当然、そうすれば彼の童顔が目立ちますからね。
まったく、頭の回転の速い女性は楽しさも兼ねそろえていますから
怖いです。

今回は、課長とネコのやり取りを書こうかと。
コタロウが何故ネコと呼ばれているかは次回では明らかにはなりません。

では。

かければまた次回。

第4話 『背骨より腕』(前書き)

前書き 第4話目です。

毎回毎回サブタイトルで悩みます。

第4話 『背骨より腕』

『申し訳ありませんでした』

やや不服そうであるが当然のことであり、シグナムとヴィータは頭を下げる。

「いや、気にすんな。というか、それが目当てだ」

ん？ 彼女たちが見上げると先ほどの快活な笑顔に戻っていた

「メシイ食つてるときが一番、隊の雰囲気^{つが}を掴めるからな。予想通りの反応をしてくれてこちらとしてはありがたい限りだ」

「申し遅れました。機動六課課長八神はやていいいます。……なかなか素晴らしい方法論をお持ちで、トラガホルン二佐？」

「ジャニカで構わないよ、なんならあのネコと同じにジャンでもいい。この部下にふさわしい御仁で、八神、いや、はやて二佐？」

互いが互いに性格を理解したのか、はやてもはやてで挑戦的な目を相手に向ける。

「……ふふっ。五課と六課は確かに番号的にはお隣ですが、近くはないですやろ？ 朝早く、ご足労ありがとうございます、ジャニカ

「二佐」

敬礼を解き、彼女は両手を前で合わせてお辞儀をするとひらひらと手を振った。

「ん？ 課長になつたのがあまりにもうれしくてなあ、昨日は初日で夕飯時に四課に行つて来た」

あの顔はなかったなあ。と、顎あごに手を当ててしたり顔をする。
はやては四課課長が自分と同じようにあわてているのが目に浮かび、苦笑した。

「よし、挨拶はすんだな。んじゃあ、気兼ねなく、朝食の続きをしてくれ。俺もご一緒しても？」

「へ？ え、ええ。構いません」

ほら、座った座った。と、ジャニカは立っていた彼女たちの着席を促す。

彼が近くのイスを引き寄せて、そのままはやてたちのテーブルに着くと もうすでに座る場所はなく割り込む形になる タイミング良く、料理の盛られた食器が彼の目の前に出てきた。

「貴方は待つということをいつ覚えるのかしら、ジャン？」

はやてでも目を見張る銀髪の美人がそこにいた。

「ふん。遅かったな、ロビン」

ロビンはボーイッシュな短い髪型であるが、スバルのような幼さはなく、ましてやフェイトのような立ち止まって振り向くような魅力ではなく、彼女の横を通り過ぎる時は呼吸をしているのかも定かではない時間遅延をもたらす支配力を持ち合わせていた。

胸は一般女性と同じくらいであるが、それはさして問題ではなく、問題なのは彼女のすなりとした脚の長さであり、腰にあるベルトもそれ以上ホールがないのかゆるく、締めているというよりは一つの形式的そこにあるだけで、少し傾いているそれがなおのこと彼女を引き立たせていた。

「申し遅れました。ロビン・ロマノフです。階級は二等陸佐。この愚課長が何か粗相そつうを致しませんでしたでしょうか、八神はやて二等陸佐？」

しばらく、食堂の空気がとまった。動いているのは、ジャニカとコタロウくらいである。

「はっ、い、いえいえいえいえ！　そ、そんな滅相ありません」「うん？」

小首を傾げるロビンもまた、それである。

「俺が愚課長なら、おまえは使えない粗悪品だな」

「粗悪品も使いこなせない。愚のつく課長に相応しいわ。それに私は、貴方がほぼ乗り捨てたに近い護送車を収めていたのよ」

いきなりお互い譲らない気迫で口喧嘩を始めた。それは鬼気迫るもので、憎しみ合っているに等しいほどだ。

「あ、ああの。ロビン二佐も食事どうですか？」

たまらず、はやては勇気を振り絞り割って入ると、何事もなかったようにはやてのほうをむいた。

「ん。ありがとうございます。頂こうかしら」

しかし、彼女の座るスペースはすでになかった。

「どうしてこうなったんやろ？ シグナム、悪いんやけどテーブルを持ってきてもらえるか？」

「わかりました」

シグナムは立ちあがって余っているデスクを探すとジャーニカがそれを制す。

「ロビン、あっちにネコがいるぞ」

彼が自分の背後を指さすと、そこには今までの空気の変化ややり取りなんかを気にせず、食事をとっているコタロウがいた。ヴァイスはぼかんのこちらのほうを見ていたが。

「テーブルを探す必要はありません。烈火の騎、いえ、剣の騎士シグナム。私はあちらでとることにします」

「わかりました」

いささか、心ここにあらずでコタロウの方へ歩いて行った。

(私の名前を知っている?)

「ん。あんたがシグナムか。つーと、はやて二佐の周りにいるこの獣も合わせて、ヴォルケンリッターと呼ばれる守護騎士でいいのかな?」

「……挨拶いうわりに、調べてきているんですね」

「調べたのはロビンだ、俺じゃねえ、移動中に耳にタコができるくらい聞かされたよ。六課の主要メンバーをね」

俺は、変な先入観生まれっからいいとは言ったんだがなあ。やれやれと顔を振って、おかれた食事に取り掛かった。

そういうジャニカをよそにはやてはロビンに視線を動かすと、これまたおかしい状況がそこにあつた。

「ロ、ロビン。く、ぐるしいよ」

まるでそれは大きいぬいぐるみ抱きしめるかのようにコタロウは彼女の腕の中にうずくまっていた。

「ロビイン、そろそろ手エはなしてやれ。ネコの背骨が折れるぞ」

ジャニカは振り向きもせず、背後で行われていることが目に見えるようである。

「……ハッ！ あまりにも嬉しくて意識が一瞬遠のいていたわ。お久しぶり、ネコ」

彼女の意識は彼によって戻ってくると、あわてて離して、コタロウに笑顔を向ける。それは彼に向けられたわけではないのに、ヴァイスは顔を赤くして上気した。

(えーと。僕のほうは意識もってかれそうだったんだけど)

一方コタロウは、彼女の笑顔は既に見慣れているらしく、それを余所よそにごほごほとせき込む。しかし、彼女の笑顔は限られた人間の中でもさらにふるいに掛けられて、なかなか見られるものではないが、ここでは割愛させていただく。

コタロウは息を整えて最後に大きく深呼吸をしてから、やっと彼女のほうを向いた。

「ひさしぶりだね、ロビン。それに相変わらず仲よしだねえ、ミスター・アンド・ミセス・トラガホルン？」

ジャニカ・トラガホルンは振り向き、局員登録はロマノフのままであるロビン・トラガホルンと目を合わせると、今度はジャニカも笑って声をそろえてこう言った。

『当然でしょう(だろう)? 夫婦なんだから』

どうも朝から六課を驚かせることが多い。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 　　困った時の機械ネコ
第4話 『背骨より腕』

声を上げる驚きではなかったが、驚きで喉を詰まらせる人は何人かいた。

管理局に長く勤めていればいるほど、不可思議なことが自分の身の回りに発生することを局員たちは良く知っていた。

トラガホルン夫妻が夫妻であるのも、局内での謎の一つである。

「ほう。じゃあ、君がレディ・ヴィータかい？」

ジャニカは彼女が飲み物を飲んでいるのを見計らって、少し古い表現で相手の名前を確認する。

「ングツ！？　ゴホツ。ア、アンタ、何を」

ていうか、レディって。と落ち着くとみるみるうちに顔を赤くする。これは別にジャニカが美男であるがゆえに起こったものではなく、そのような扱いに慣れていないために、意識してしまったのだ。

「紅くなるようじゃあ、まだまだ子供だなあ」

「べ、別に紅……こ、子供じゃねえ、よ！」

彼女は子ども扱いされることが何よりも嫌いだ、尻すぼみに声
が小さくなるところを見ると自分から『子供じゃない』と言い張ら
なくてもそう扱ってくれたことがちよっぴりだがうれしいらしい。

「なら、『レディはいささか古すぎませんか？』 くらいの受け流
しはほしいところだな。そう思うだろう、レディ・シグナム？」

シグナムを横目で見ると、彼女は視線をずらし、

「レ、レディはいささか古すぎませんか？」

頬をほんのりだけ染めることだけしか彼は見れなかったが、それ
で十分だった。

「安心して大丈夫だぞ。騎士シグナムもどうやら子供らしい」

ジャニカはにんまり笑った後、食事の続きに取り掛かる。

「私や、はやてちゃ、はやて隊長にはないんですか？」

シヤマルは次に自分を期待していたらしい。

「アンタは、見た目から子供だからな」

まあ、はやて二佐は誰かに鍛えられているようだが？ とだけ応えるとサラダをフォークで突き刺し、口へ運ぶ。

「はやてちゃん、私、初めて子ども扱いされたかもしれません」
「……なんでそれで機嫌いいん？」

しかし、シヤマルが喜ぶ気持ちがなくわかってしまう。
はやてはジャニカが次に小さな曹長をからかいたすのを見て、ほえましくもあったが、何よりもまず、すでにシグナム、ヴィータが抱^{いだ}いていた警戒心を完全に取り除いてしまったことに正直驚いていた。

ヴァイスも同じようは気質の持ち主であるが、このような回転のよい発言は出てこないだろう。うわさに違^{たが}わぬ人だと今確信する。
そう、はやて、なのは、フェイトは彼彼女を知っていた。

会ったことはなかったが、彼ら夫婦を知る身近な人たちの間では有名な謎で、その謎が彼女たちの耳にも入ってきていたのである。

「貴方のその発言がどれだけ彼女達の自尊心を破壊しているか、生きていく間は決してわかることはないでしょうね？」

ジャニカのやり取りは、反対側にいる新人たちにも聞こえるため、同時にロビンにも聞こえていた。

「おいおい、ロビンの、いやいや、『貴女その容姿がどれだけ彼女等の自尊心を破壊しているか、死んであの世へ行ったとしても決してわかることはないでしょうね？』」

彼女の言動をすこし変えて放ち、パンをむしゃりとかぶりつく。

「彼女達が、いえ、彼女達を取り囲むこちらの方々が証人なのでまずあり得ませんが、彼女達が仮にもし、いいですか、仮にもしですよ？ 私より容姿が劣っているのであれば、それは認めざるを得ないでしょうね」

彼女は特に食堂を見渡し、意見を視線で確認しようとしていないのにもかかわらず、『いえいえ！ 私はロビン二佐より美しいとは思っていません！ それに自尊心なんておこがましいです』といわんばかりに、周りいる女性陣が首を横に振った。

しかし、彼の方はそのそぶりには目をくれず、飲料でパンの残りを流し込む。

「確かに、粗悪品でも目だけはいらしい。ロビンなんて足元にも及ばないくらい、彼女たちのほうが魅力的だな」

ロビンはサラダの最後の部分を丁寧に口に運んで咀嚼そじやくして喉を通す。

「このまま離婚調停に持ち込めば、貴方はなにも弁護できませんね、トラガホルン二佐？」

「あなたの経歴を傷つけ、二度と『俺を足元に置く』というあなたの野望を見るも無残に破壊する算段は既に考えてあることを努々ゆめゆめ忘れるなよ、ロマノワ二佐？」

この夫婦は、眉目秀麗頭脳明晰、容姿端麗才気煥発であり、夫婦であることだけを知っている人から見れば、お似合いであることは疑う余地がないが、彼らは仕事以外の会話で普通の会話を聞いたことがなく、常に皮肉を言い合い、敵意を放出しあっているため、よく知った人ほど謎となる。

「はやて達が聞いた謎は『何故、この嫌悪し合っている男女は夫婦であるのか？』である。」

「貴方の考えた算段が、どれだけ使い物にならないかは普段を見ていれば、手に取るようにわかるわ」

ジャニカとロビンはお互い依然として振り向くことはなく、彼はポケットからピカピカのコインを取り出した。

「ほう。手に取るように考えのわかる馬鹿な男の誘いがなければ、課長補佐にもなれなかった女がよく吠えるな。……どっちだ？」

「裏よ」

そうすると、お互いは背を向けたままコイントスをし、彼が舌打ちするのをロビンは聞いた。

ジャニカは立ち上がると、コーヒーを2杯注いで 片方は砂糖を1つ、もう片方にはミルクを入れる 戻つてくると、ロビンの前に丁寧においた。

「そうね。そこは自覚しているわ。まさか、私より2カ月も遅れて二佐になった男に誘われることになるなんてね」

ロビンが口にしたのを確認してから、ジャニカは立ったままミルク入りのコーヒーに口を付ける。

既に食堂のほとんどが、この男女2人が夫婦であることをわすれていた。むしろ、この2人がいつ取っ組み合いになるか心配でしよ
うがない。

「う、噂通りの人達だね、フェイトちゃん」

「うん。仲が悪いっていつても、からかい程度のものだと思ってた」

なのは、フェイトは怖さで肩を狭くし、リインははやてのおかげに

隠れ、耳をふさいでいる。

「夫婦喧嘩じゃねえぞ、ありや。完全に敵意むき出しじゃねえか」

「言葉同士で肝が冷えたのは初めてだ」

「冷静に受け流しては、無情むじょうに切り掛かってましたね」

ヴィータたちは冷や汗を流していた。

「さて、行くか」

ジャニカとロビンがほぼ同時に飲み終わる。

「じゃあ、六課のみなさん、俺達隊舎に戻るわ」

「朝の貴重な時間、私たちがお邪魔をしましてしまい、申し訳ありませんでした」

食堂を見渡し、二人はお辞儀をしてから敬礼をとる。彼らが敬礼をとるとこれもまた様になっていた。

「い、いえ！ こちらのほうこそ何もおもてなしもできず、もうしわけありません」

代表して挨拶をしたのは、はやてである。
それをみて食堂にいる全員が立ち上がり、敬礼をとった。

「では、外で待っていてください。車をとってくるわ、ジャン。それと、マシンナリーキャット機械ネコ、車の調子が少しおかしいの、見ていただけ？」「うん。いいよ」

コタロウは帽子をかぶり、動き出す。

「それじゃあ、午前の練習は今から10分後に始めるよ、みんな！」「はい！」
「ほな、ウチらも仕事場に戻らんと」

なのは、新人達、はやて達も彼に合わせ動き出した。
ジャニカは自然にみんなの先頭になり歩き出そうとするが、そこでジャニカは立ち止まってロビンのほうを向き、にやりと笑った。

「手にとるように考えのわかる馬鹿な男が思うに、あんたはこれから幾許いくばくしないうちに後悔の念に駆られるだろう。な、ネコ？」

彼はコタロウの左肩にぽんと手を置くと、ぐ、ぎん、と何かが外れる金属音が鳴る。

「……あ」

ずるりとジャニカの手を置いたほうの腕が抜け落ちて、ごとりと床に転がった。

「背骨より腕のほうが弱いということが、どつやらロビンにはわからないらしい」

コタロウには左腕がなかった。

第4話 『背骨より腕』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

絶対、読者受けしないこと請け合いの小説ですいません。

（あ、この言葉、次回からテンプレートにしてもいいかもしれない）
今回私が紹介したかったのは、お分かりのトラガホルン夫妻です。

眉目秀丽頭脳明晰なのがジャニカ・トラガホルン

容姿端麗才気煥発なのがロビン・トラガホルン

眉目秀丽というのは男の人に使う言葉なのだそうです。

この言葉をはじめて聞いたのはフルーツバスケットという漫画です。

たしかに男の子相手に使っていました。

あれ？ これは二次シリーズに追加しなければならぬのだろうか？

……だまつところ。（いわれたときにつければいいかな）

どちらも非の打ち所がなく、綺麗で頭がよいという意味ですね。

ちなみに読みは

「びもくしゅうれい」

「ずのうめいせき」

「ようしたんれい」

「さいきかんぱつ」

です。

んでは、用語解説

咀嚼そしゃく

よくかむということです。格好いいたべかたがこれくらいしか思
いつきませんでした。

努々ゆめゆめ

neverと同じですね、決してくしない。というときに使いま
す。

決して忘れるな 努々忘れるな

無情むじょう

無精むじょうではありません。感情なく、ですね。

レ・ミゼラブル！

幾許いくばく

不明、不定をあらわします。

どころくらいもしないうちに 幾許もしないうちに

ほいでは

感想、（よみにくければ）指摘、お待ちしております。

（用語解説せんでよろしいとかいわれたらどうしよう）

ちなみに、機械ネコ（マシナリーキャット）は某漫画が由来ではあ
りません。

解説はお話の中でトラガホルンが説明してくれます。

第5話 『それを押すだけ』 (前書き)

このグダグダには自分でもびっくりです。
あとがきに理由をば。

第5話 『それを押すだけ』

コタロウ・カギネの左腕が義手であることを知ることができるのは、初対面ではまずありえないことであり、それはもちろん、傍^{はた}から見て彼が片腕無しということは認識することはできるが、これは当てはめない。

知ることができるのは決まって2日目以降だ。

「あの、ロビン？ 大丈夫だから。義手をはずすことをすっかり忘れていた僕が悪いんだよ。それより、車を見に行こう？」

ロビン・ロマノワはジャニカ・トラガホルンに言われたとおりに後悔の念に駆られ、人目をはばからず両膝を床について謝ろうとしていたが、コタロウはそれをなんとか止めることに成功した。

彼はロビンの背中を押して、駐車場へ連れて行き、現在ジャニカの近くにいるのは八神はやたとヴォルケンリッター、そして、ヴァイス、なのは、新人達である。他は軽く彼に挨拶をして、持ち場で戻っていった。

「別に、見送りはしなくてもかまわないのだが？ こんな大人数で」「いえいえ、送らせていただきます」

それ以上、はやてたちは何もしゃべらなかつた。

隊舎を出るまで無言は続き、ジャニカが口を開いたのは外へでて

左右をみて、まだ車がこないのを見てからである。

「ネコの左腕を奪ったのは俺だ」

そのまま訓練場へ向かおうとしていたなのは、新人たちの足が止まる。

「6年と少し前、そうだな、はやて二佐と同じ19歳の頃だ」

ジャニカはふつと笑って、

「あのときロビンは人目をはばからず　ネコの前だと既に憚はばっていないが　大号泣。俺は大激怒。当のネコは、自分が大出血してるつづのこ……」

思い切り後ろに足を上げて踵かかとをたたきつけた。

そして、大きく深呼吸した後、

「左腕がないことであいつは大抵出向先で爪弾つまはじきになることが多いんだが、どうやら大丈夫そうだな」

「もしかして、その為にご挨拶に？」

四課へは今日のためですやるか？ と、はやてはふふと笑う。

「あいつはそれが当然のように毎回話すが、俺とロビンはあんたの2つ名の、烈火のように怒るのが大抵だ、シグナム」

シグナムは何も言わなかった。

「まあ、愚痴ぐちるのは好きじゃねえから、これ以上はやめておこつ」

向こうから、護送車が走ってくるのが見えた。

「あいつについてはこれからもいくつか驚くことがあるかもしれないが、よろしく頼むわ、はやて二佐」

それはもちろん。とはやてが応え、周りに目配せしてみると、さも当然というように大きくうなずいている人や、目だけを少しだけ伏せて返事をするものもいた。

(若いながらの隊は、偏見が少ないな)

「ところでジャニカニ佐？」

「ん？」

「何で、コタロウさんをネコと言ってるんですか？」

はやてが最後の質問とばかりに小首を傾げながらたずねると、あー。とジャニカは声を漏らす。

「それはな」

「それは？」

彼はニツカリ笑った後、

「……秘密だ」

「なんだよそれ」

ヴィータが今までの空気を吹き飛ばす力の抜けた溜息を吐く。

「まあ、ある時ふつとわかるようになるさ。ネコっぽいだろ？ あいつ」

確かにそう捉えられなくもないが、含みのある言い方をする。

「それじゃあ、マシナリーキャットというのは何です？ キャットというのはわかるのですが……」

今度はリインフォースが首を傾げる。
護送車はジャニカの前にとまり、運転席からロビンが、助手席からはコタロウが降車する。

「あー。こいつの資格の数、みたか？」
こくりと頷く。

「下手すりゃ、ここにいるやつらの　ヴォルケンリッターを除く
年齢の総和の2倍近くあるからな」
『え？』

「はやてちゃん、そうなの？」
「あれは驚くで？」

ここにいるメンバーは軽く驚く。

「3年前で」

さらにジャニカは付け加える。それは、今はどれくらいあるかわからないということを言っていた。

「課には大抵、メカニックがいるだろう？」

これは言わずもがなである。

「メカニックと聞くと『それ専門の』が頭についたりするイメージがあるからな。だが、ネコの所属する電磁算気器子部工機課には、そういつた括りがない。あらゆる機械という機械をすべてそつなく修理する。だからその工機課の人間たちを

「マシナリー機械士と呼ぶ」

ロビンはすっかり気を取り直していて、平常心を取り戻していた。

「人の会話にずかずか入ってくるなよ。まあ、そういうことだ。ネ

コに仕事をお願いするときは、俺らはそう呼んでる。な、ネコ？」

「その機械マシナリーネコの普及活動まだしてるの？」

すごい恥ずかしいんだけど。と眉根を寄せてジャニカをみる。

「この通り、当の本人は嫌がっているがね」

「これだけは私もジャンに同意するしかありません」

ジャニカとロビンが視線をとめた先には、1人ため息を漏らしているコタロウがいた。

その後、トラガホルン夫妻はここにいる全員にもう一度、敬礼と言葉を述べ、お互いに皮肉を言い合いながら車へ乗りこみ、彼ら唯一無二の親友にこう言い残して車を走らせていった。

『じゃあな（それでは）、ネコ。何かあったときには頼むぞ（お願いします）、“困ったときの機械ネコ”』
マシンリーキャット

魔法少女リリカルなのはStrikers 困った時の機械ネ

コ

第5話 『それを押すだけ』

昨日の彼はロビーにいて隊長陣の挨拶を聞き、へりに乗ってはや
て、フェイト、ヴァイスに簡単な自己紹介、その後は待機を命じら
れていた。

本日の彼は新人たちの早朝練習を見学して、上司であるシャリオ
から自分の役割を伝えられ、朝食の後から本格的に働くことにな
る。

つまるどころ、コタロウの機動六課出向後初の実質的な仕事振り
を見るのは、なのはと新人たちである。

「じゃあ、午前の訓練を始めようか」

『はいー』

なのはは次に今日の午前の訓練内容を説明する。

「それでは、コタロウさ」

「……………」

なのはは訓練場の設営を依頼しようとして振り向くと、既にコタロウは端末を開いてキーをタッチしており、彼女は言葉をとめていた。

新人たちも彼女に合わせて視線を彼に向けるが、なのはと同じように言葉を無くしている。

彼がキータッチ操作を片手でしななければならないことは、今日の朝食後すぐに知ることができたが、彼が訓練場を設営した時間と昨日今日みたシャリオが両手で操作して出現させたそれとがほぼ同じくらいであること、つまり、彼のキータッチの速さは当然ながら知るすべがなく驚いた。

「す、すい」

「文章打つのが苦手な私が見ると、一入ひっかきだよ」

完全に訓練場が具現化した後に、ティアナとスバルが言葉を漏らす。

「高町一等空尉、設営完了しました」

「あ、ありがとうございます」

それじゃあ、行こうか。となのはは新人たちを促した。

「コタロウさん、キータッチ早いですねえ」

移動中にスバルが素直に感想を述べ、ティアナは顔に手を当ててため息を吐く。

「スバル、あんたねえ」

「ん？ いや、わかってるんだけどさ。気にしないでいいって、ジヤニカ二佐が言ってたから」

彼女はにっこり笑う相手のその真っ直ぐなところに素直に感心することがある。

「そうですか？ ありがとうございます」

「やっぱり、その、練習したんですか？」

しかし、そのスバルでも『片腕がなくなってから』というキーはたたけなかった。

「はい。練習はしましたが、それは皆さんも同じではないのでしょうか？」

「……へ？」

コタロウは質問を投げ返すが、その質問に首を傾げる。

「初めて操作するときは、練習はすると思つのですが」

「え、あの、はい。それはそうですね」

「そうではなくて。と彼女は言いよどみ、今度はコタロウも首を傾げ、

「あ。『片腕がなくなってから』ですか？」

「気づいたように質問の内容を確認すると、スバルはこくりと頷いた。

「していませんよ？」

キー操作について片腕がないことをリスクに感じないかのように応えた。

「私はもともとキーは片手で行っていきますから」

工機課は片手操作が普通なのです。と傾げた首を元に戻す。

「な、何ですか？」

「覚えてた頃は両手で操作していましたが、いざ作業をこなすとなると、両手でキータッチをするわけにはいかないんですよ。同時に作業をこなさなければなりませんからね。なので、そういう時は片腕であることで効率が落ちてしまいましたが、その時はキータッチの速さをあげればいいだけなので、別段困ってはいません」

「は。そうなんですか。あの、すいません、てっきり」

「『片腕がなくなつてから』練習をしたと？」

「う、はい」

片腕がないことを気にしなくてもよいとばかりに質問を試みたスバルだが、コタロウはそもそも片腕があるない以前に操作については気にしていなかったようで、問題ありませんと付け加える。

「ということ、まだ速くすることができるのですか？」

なのは、他の新人たちも一緒にいるので会話に参加していることになり、エリオが頭ひとつ前を出してコタロウの方を向く。

「そう、ですね。先程は設定の確認をしながらなのでゆっくり打ち

ました。次からはもう少し速くなりますので、練習の時間を無駄にしないように努めます」

コタロウは少しでも新人たちの訓練に支障をきたすまいと思っていたが、新人たちの考えとは違っていた。

「あれで、ゆっくり……」

クウ。とキャラの肩に乗っている白い竜も彼女の肩の上下に合わせて鳴く。

「ル・ルシエ三等陸士。そちらの肩に乗っているのは、竜の子供ですか？」

「え、あ。紹介おくれてしまいました。この子は私の使役竜のフリードリヒです。愛称はフリードで、皆さんもそう呼んでいます。フリード、ご挨拶を」

「キユクルー」

「よろしくおねがいします、ドラゴン・フリードリヒ」

帽子をとり、丁寧に辞儀する。

「ク、ウ」

フリードリヒはどうやらこのように挨拶されたことがないのか、素直に返事が出来ないでいた。

その感想は新人たちも同様で、フリードリヒ　小さく幼い動物（？）　をそのように丁寧に扱う人間に会ったことがない。もちろん、動物を扱うドクターは別である。

『……………』

コタロウは真つすぐ向かう先である訓練場をぼんやり寝ほけ眼で見ているが、ほかのみんなは一度視線を彼に向けてから前を向いた。

『（コタロウさんって、ヘンな人！）』

それから数日間は何事もなく通り過ぎて行き、コタロウは少しずつ馴染んでいった。

そのなかで彼についていくつかわかったことがある。

その一つは、誰に対しても丁寧な口調であることだ。それは階級年齢、勤続年数のどれにも当てはまらず一定であり、まだ彼の年齢を知らない人間からしてみれば本人の階級から、自分よりも若いという錯覚に陥っていた。

何故、トラガホルン夫妻には敬語を使わずに会話していたのかと問うと、

「しばらくあの夫婦と一緒に3人で暮らしていたからだと思います」

と彼ら3人がなのは、フェイト、はやてと同じような友好関係を築いているということくらいしかわからなかった。

その次は、彼は自分から話題を振ることはない、物静かな人であることだ。

食事の時も、ヴァイスが誘わない、あるいはいないときは1人で食事をとることが多く、もつとも、ヴァイスが誘わないということとはなかったが、自分から誰かと一緒にご飯を食べることはなかった。

そして今は夕飯時^{トキ}でコタロウは食堂にはおらず、いるのははやてなのは、フェイトとヴォルケンリッターである。

「新人たちはどうなの、なのはちゃん？」

「伸びしろはあるからねえ、ここ数日でどんどん伸びてるよ」

「ごめんね、なのは。手伝えなくて」

「ううん。忙しいんでしょ？ 全然大丈夫だよ」

フェイトが申し分けなさそうであるが、なのははそんなことには気にも留めなかった。

「それに、レイジング・ハートやコタロウさんが手伝ってくれてるし」

ね、レイジング・ハート？ と胸元に話しかけている。

「……コタロウさんって、どんな人？ 私も話してはみたんだけど、こっ、なんていうか……」

あの、そのう。と言いよむむと、

「へんな人、かなあ」

なのはは正直に答える。フェイトもゴミ箱に頭を突っ込んだコタロウをみているため、同じ意見である。

「やっぱり、なのはちゃんでもそう思うんか？」

はやての言葉にこくりと彼女は頷く。

「悩むときは眉を寄せたりするけど、いつつもぼやあつとしてて、にこりともしないんだ」

「不真面目そうなら、一発喝を入れてやろうか？」

グイータはぷすりとフォークでトマトを刺して口に運んでにやりと笑うと、なのははぶんぶんと首を横に振る。

「ううん。コタロウさんにはすごく助けてもらってる」

「一緒に新人たちをおしえてるんか？」

彼女はもう一度首を横に振る。

「あのね、片腕でエイミィさんくらい操作がはやいの……嘘やる？」

彼女たちの知るエイミィは現在は現役を引退しているが、当時を思い出してみても子供ながらすごいと思ったことは覚えている。

「そのぼやあつとしたままでキータッチするからかな？ みんなが見ても驚くと思う」

「へえ〜、やっぱりベテランさんは違うもんやなあ」

「それに訓練中、データ収集と並行して私がまとめた訓練プランをみていて、私が依頼する前にもう決定ボタンを押すのを待ってるの。

ね、レイジング・ハート？」

<はい。なおかつ彼は私が電算処理したのも、並行して見ています>

「うん。だから、人数分のデータ画面と私たちの画面を同時にキー操作をしている感じ、かな？」

そこで彼女は食後のティーで口の中を湿らせた。

「すごいできる人なんだ」

「人って見かけによらねえなあ」

フェイトとヴィータが嘆息し、

「マシナリ機械士というだけあるなあ」

はやては感心すると、なのはが気づいたようにはやてのほうを向く。

「そういえば、ジャニカ二佐が言ってたコタロウさんの資格の数ってそんなにあるの？」

「うん。ほんま」

そこで通信が入る。

「八神部隊長、今大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ。そっちこそこっちがご飯中でも大丈夫やるか？」

「お食事中でしたか、それでは」

「かまへんよ」

ひらひらと手を振る。

「本日の報告なのですが」

もう一度、確認を取ってから報告する。しばらくはやてとグリフイスの報告内容を聞き、終わりに近づいたところで、

「すごいよ、コタロウさんの資格の数」

私もその場にいたんだ。とはやての代わりにフェイトが応える。

「アルトより？」

「見てみるですかあ？」

こくりと頷くと、ラインが割って入ってきた。

「 以上です」

「 どうもありがとな」

「 …… 最後にもうひとつよろしいですか？」

「 なんや？」

「 正直、報告してよい内容か悩むのですが」

うん？ とはやては首を傾げる。

「 妖精がいるみたいです」

「 …… もう一度、いつてくれるか？」

『妖精』という言葉に、そこにいる全員が一旦視線を画面に集中する。

グリフィスが言うには、スタッフから給湯室の給湯器が壊れているという報告があり、修理を依頼し、来てもらうと直っていたり、通風孔の調子が悪かったのに次の日には直っていたりしているという。ルキノとアルトも医療機器について同様のことを述べている。

「 知らないうちに直っているんで、妖精というわけやね？」

「 はい」

「 不思議なこともある……ないな！」

「 はあ」

はやては思う前に答えを出し、はあと溜息を吐く。

「本人に報告するよう言うておくわ」
「正体をご存知なんですか？」
「リン？」
「はいです」

すでに決定ボタンを押すだけで待っていたので、すたと指でキーをたたくと、登録した名前と所属、取得資格が出てくる。その画面には左上に本人の顔、右上に登録コード、所属、名前、六課への出向期間（延長有）が出力され、中央以下は彼の取得資格が並んでいた。

その保有資格の数は画面には収まらず、リンは資格だけをスライドさせていく。

「な……！」
「……おいおい」
「は」
「ふえ」

グリフィスは目を丸くしたただけだが、シグナム、ヴィータ、シャル、なのはは声を漏らして驚いた。

「コタロウ・カギネ三等陸士。電磁算気器子部工機課から現在うちに期限延長付で出向してきた整備……メカニ……マシナリー機械士や」

脇では「これ、いったいいくつあるのかな？」とつぶやくと、は
やてはそれに自信をもって応えてみせた。

「彼の資格保有数は253！」

あの時いた年齢総和の2倍どころではなかった。

第5話 『それを押すだけ』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シユテルンです。

絶対、読者受けしないこと請け合いの小説ですいません。

さて、冒頭でお話したグダグダに目を通していただいた通りでございます。

なぜこのようなことになってしまったのかといいますが、本当ならこのお話、タイトルが出てくるまでのおよそ3000byteまでが前回のお話にくっつけていたのです。

それ以降のお話は、本当は書く事はなかったプロットむやむやの内容というわけです。

しかし、自分自身としましては、10000byte前後を目安にしているため（現在は）このようなことに。

プロットはしっかりと考えないとけませんね？

（反省してます）

んで、次回から原作ファースト・アラートに入っていきます。

コタロウは戦闘には、参加？ 不参加？

次回もどうぞよろしくお願いします

感想、指摘、お待ちしております

第6話 『役に立つメモ』（前書き）

ユニーク（アクセス）数、3000を突破いたしました。
ありがとうございます。

お気に入りも四捨五入で30件です。
すくなくとも、3人以上たくサンのかたがたが読んでいるということに。。。
ありがとうございます！

それでは次から本編です。
はじめに謝っておきます。
すいませんでしたー！

第6話 『役に立つメモ』

機動六課の食堂は何も、朝食時、昼食時、夕食時にのみ開いているわけではない。不定期に時間が空いた場合に息抜きをするという時 そのときは全てセルフサービスである にも利用価値があるため、基本、人の出入りが少ないときも省電力で利用可能である。はやては自分の守護騎士であるシグナム、ヴィータ、ザフィーラからここ数日のガジェットの動きや新たに発見できたこと、疑いのあること等の調査結果報告を受けた後、すこし遅めの夕食をとるために、みんなで食堂に行くことにした。

「そういえば、新人たちの新しいデバイスはいつできるんだ？」
「確か、今日調整が終わったと言っていましたので、早ければ明日には支給できるはずです」

そうすると、アタシも参加しなきゃなんねエな。と両手を頭の後ろであわせて、面倒そうにヴィータは溜息を吐くがどこか楽しそうである。

そんなことを話しながら食堂まで足を運ぶと、1人の女性が1人の男性にペこりとお辞儀をしてから、小走りで自分たちにも立ち止まってお辞儀をしていそいそと通り過ぎる。

「お疲れ様です。コタロウさん」

食事をそれぞれ持って、はやてたちはコタロウの隣のテーブルに座ることにした。

「お疲れ様です。ラインフォース・ツヴァイ曹長」

ラインは彼のいつも通りの丁寧な挨拶に、いつも通りの不満顔を見せる。

「今の人、どないしたん？　ぬいぐるみを持ってたんやけど……」

そう、先ほどの通り過ぎた女性の手には、頭が人の拳3つくらいのクマのぬいぐるみを持っていたのだ。

「はい。彼女には双子の娘息子がいるそうなのですが、喧嘩をしてぬいぐるみの引っ張り合いにあいになり、首が生地一枚を残して取れてしまったのです」

お昼の空いた時間に直そうとしていたらしいのですが、お裁縫道具を忘れてしまった上に忙しかったようで、直す手段を持ち合わせしていなかったようです。と裁縫道具をつなぎ右腕ポケットにしまう。しかし、コタロウが自らその女性に「どうかされましたか？」と訊ねたわけではない。

女性は午後も中ごろに差し掛かる頃、彼が隊舎のインフラ周りを観^みるために移動している最中に袖がほつれていたのに気がつき、そのポケットから裁縫道具を取り出して器用に上半身だけ脱ぎ、歩きながら直しているところを見かけた。普段の彼女であれば、初対面の人間に話しかけることはしなかったが、このぬいぐるみが自分の子どもの喧嘩の解消させる最後の一押しであるため、すでに喧嘩は収まっているがぎこちなさが残っている。話しかけることにしたのだ。

本当であれば自分で直したかったが、

「私の子がぬいぐるみを壊してしまって……」

「直せばよろしいのですか？」

良ければ貸していただきたい。と言葉をつなごうとしたところ、コタロウは工機課いつも通りの受け答えをしたことと、自分が今日は定時に帰れるかもわからない状況であった事から、思わず、

「おねがいできますか？」と頼むことになり、頼まれた彼は自分の作業が終わった後に直すことを断り、それがちょうど先ほどで、彼女が彼を迎えに来たのもちょうど先ほどであった。

「コタロウさんはお裁縫もできるんか？」

「はい。出来るほどかどうかはわかりませんが、あれくらいの修繕なら可能です」

はやては彼に修理や調整をしたときには事後でかまわないので報

告をしてほしいと言った直後に呆れたのはまだ日が新しい。

確かに、医療機器や給湯器、通風孔を直したのは彼である。はやてはそれ以外にも直している部分はあるのではないかと考えており、それは見事に的中したが、まさか各フロアの修理した箇所を画面に出し、1つ1つ説明を受けるとは思っておらず 40を越えた所で制止させた 逆に隊舎内放送で『突然機器が修繕されたりすることがありますが、お気になさらず』と話すことになるとは想定の外であった。

はやては彼を臨機応変に動かすつもりであったが、既に自分が把握していない庶務の部分、特にインフラ周りに関しては臨機応変に動いており、彼のポジションをどうするか考え直す必要があった。以前、ゲンヤ・ナカジマに今度会う約束を取り付けるついでに、コタロウについて話したことがあった。

「優秀なやつがきたなあ。まあ、機械士マシンナーというのはそういうものだ。どこのメカニックの下についても、そつなくこなすからな。決まって最近の若い上官 30代やそこら は考えが二極化する。機械士を見出すか、そうでないかだ。そうでないやつはただあるポジ

シヨンに固定配置させて何もさせず任期終了。見出すやつは、お前さんみたいに悩むわな。しかし、なんとなしに取った配置が一番機械士の能力を引き出していることに気づくのは任期終了させてからだ」

それはなんです？ とはやてが訊ねると、

「適当に配置させて、その後何もしないこと」

「それは見出さない人と変わらないのでは？」

「『させない』と『しない』では意味が違うだろう？」

「困った時に困った場所に配置すればいいのさ」

機械士は困

機械士の話題の終わりに、ゲンヤはぼそりとこつこつぶやいた。

「しっかり受け継がせてるじゃねえか。『困ったときの機械イヌ』」
マシナリードッグ

彼はコタロウの別名なんて知らなかったし、はやてはドグハイク・ラジコフの別名を知らなかった。

魔法少女リリカルなのはStrikers

く困った時の機械ネ

コ

第6話 『役に立つメモ』

つまるところ、コタロウの配置は現状維持で、空いた時間は彼の自由にさせることにした。

後日、その旨を彼に伝えたところ、

「空いた時間の具体的な指示はないのですか？」

「そうや」

困った顔をされてしまった。

「なにか、不都合なことでもありませんやろか？」

「あ、いえ、出向先では指示以外のことは禁じられていて、与えられた指示をこなしてきたもので」

「……この前の医療機器等の修理は、指示を出したつもりはあらへんけど？」

(コタロウさんを見出した上官はいないというこちやな)

「はい。他の場所でもこっそり……あ、隠れてやる必要がないという……ですか」

はやては頷く。

「加えて、事後報告もいらへん。聞くところによると機械士は『修理屋』であって『開発屋』ではないねやろ？」

(何も悪いことはしてへんのに今まで隠れて作業をしていたんやなあ。ジャニカ二佐は大抵をいうてたけど、今までの出向先すべて隠れてやってたとなると……)

ジャニカ・トラガホルンのいう爪弾きという意味が少しながら把握でき、内心溜息を吐く。

「はい。古くなった電灯を取り替えるような作業が機械士の本分です」「ラインのデスクみたいなのは趣味の範囲ということや」

はい。と頷く。

(つまり、見出せない人というのは機械士の本分である領域を狭めてたというわけや。新しい物を作るとか、より良いものを作るわけではないんや。かつ、デバイス等個人所有物に手を出すような領分

侵犯はない)

「であれば、むしろよろしくお願いします。私たちが動きやすくなるように、ちょっと庶務みたいな仕事になってしまってもしれんのかな」

「そういうことであれば、了解です」

「具体的な指示がほしいときは、近くにいる隊長陣に仰いでください。するときも同様で、従ってください。くれぐれも体を壊すような無理はしないこと」

技術を駆使する人間は、自分の体に無理することは良く知っていたため釘を刺す。

「了解です」

現在、裁縫道具をしまった彼は、一度席を立ち、飲み物を持って同じ席に再び座る。

はやてたちはお互い今日あったことをもう一度、今度はいつも通りのくだけた口調で今日あったことを和気藹々わきあたたかいと話していた。

そのなかでリインだけがどこことなく表情が硬く、何かを考えているようだった。

「どうしたんや、リイン？ そんな顔をして」

「何かご飯の中にはいつてたのか？」

一時の後、リインは無言でご飯にかぶりついた。

「主、リインはどうしたんですか？」

「さあ、さっきまでは普通やったけど？」

リインを除く、女性たちが顔を見合わせてから彼女をみると、黙々と食べている。

「突然ですなあ」

彼女たちはリインの感情を理解できずにいた。食堂に着くまではいつも通りの明るい彼女だったにもかかわらず、ご飯を食べるときになってシャマルの言ったとおり突然表情が変わっている。

リインは皿に盛ってあったものを全て平らげ、最後にティーで一

気に流し込んでから、

「コタロウさん！」

彼のほうを向いて大きな声を出した。

コタロウを除く全員は突然の彼女の声の張り上げにびっくりする。

「はい。なんでしょうか、リインフォース・ツヴァイ曹長？」

一方、向けられた相手は普段と変わらない寝ぼけ目のまま彼女のほうを向くと、彼女はふわりと飛んで、コタロウの正面に立った。

「どうして、私のことをリインフォース・ツヴァイ曹長と呼ぶのですか！」

『……………？』

今度はコタロウを含め首を傾げて、

「リインフォース・ツヴァイ曹長がリインフォース・ツヴァイ曹長であるからですか？」

至極真つ当な答えを彼は返した。

「ど、どないしたんやリイン？」

はやてが心底わからず、じっと彼女をみると、ぴくりとコタロウが反応する。

「わかりました。たしかにそうですね、申し訳ありません」

どつやら、彼はわかったようであり、それを聞いてリインも表情をくずす。

「やっと、わかって頂けたですか」

はい。とコタロウが応えるが、依然2人を除く人間たちはわからないでいた。

「シャマル、わかるか？」

「いえ、さっぱり」

シャマルもわかっておらず、はやての疑問はさらに増した。

「失礼いたしました。リインフォース・ツヴァイ空曹長」

『あ……あ』

コタロウの返答で逆に彼女たちはリインの言わんとしていることを理解した。

その証拠に、みるみるうちにリインの表情が戻っていくのがわかる。

「……リインフォース・ツヴァイ空曹長？」

彼でもリインの表情には気づいて、^{いた} 労わるように話しかけた。

「あんな、コタロウさん」

「はい。なんでしょうか、八神二等陸佐？」

「それや、それ」

コタロウは眉根を寄せる

「リインは、リインと呼ばれたいねん」

彼女は腕を組んで頷く。

「しかし、それは以前お話したように」

「コタロウさんの癖のようなものなんですよね。それはわかってる

です。でも、もう2週間も経つんですよ？ そろそろ慣れてきても良いはずです！」

実際のところ局員として勤めている彼女ではあるが、どこかしら年齢の低いところがうかがえることができ、初対面の人や、あまり親しい人でなければコタロウのような呼び方でもかまわないが、デバイスの作成をしているシャリオの下にいる彼とは話す機会が少なくなく コタロウの方から話したことはないが 彼はとげとげしいイメージも皆無であることから、どちらかということもうすこし親しくなりたいという人物になっていた。

もちろん、それははやてやなのは、新人たちも同様であるが、リンと違って彼らは幾分年齢を重ねた大人に近い精神の持ち主である事と、彼が自分等より年上である事から諦めていた。あわよくば、そうなってほしいという程度に留^{とど}めているのだ。

「リン、せめてリインフォースと呼んでほしいです！」

彼女は『諦める前に訴える』という、時には良いほうに転ぶが局員であれば悪いほうに転ぶほうの多い、子どもっぽさを前面に出した。

「そういうことやね」

状況的にはこれは有効であったが、

「それはできません」

私は自分の性格は知っているつもりです。とすっぱりと断られると、リインは『うっ』と唸り、

「呼んでください」

もう一度訴えた。

「できません」

もう一度断られる。

「コタロウちゃんと呼びますよね？」
「構いません」

また唸る。

「呼んでください」

「できません」

「上官命令です。呼びなさいー！ ですよ」

「それは公私混同していると思いますので、お断りします」

このようなやり取りがどれくらい続いただろうか、リインの目尻に涙が溜まってきたあたりで、ヴィータがたまらず呟く。

「別にいいんじゃないエの？ 呼んでやればいいじゃん」

「せやね。コタロウさん、すこし頑かたくな過ぎませんか？」

「リインちゃんもそう言っているみたいだし」

「構わないのではないか？」

一様に、リインの意見を尊重した。

「リインはただ、もうすこしコタロウさんと親しくなりたいのです」

彼女はもう少して決壊しかねない目をコタロウに向け、素直に気持ち_{もち}を述べる。

コタロウはそのまま目をそらさず、

「例えそう呼んでも、空曹長と私が親しくなることはないのでは？」

当たり前のように表情も変えず、言葉を吐いて首を傾げた。

「……………」

彼女は一瞬ぼかんとした後、急に熱が冷めたように表情から感情がなくなり、

「コタロウさんなんて、キライです」

そっぴい残して、リインははやてが持ち歩く移動型寢室にふよふよと力なく入っていった。

「……………コイツ、最低だな」

「コタロウさん、いくらなんでもそらないで」

シャマルとシグナムは無言で食事の続きをし始め、ヴィータは彼を自分の視界から追い出し、はやても、ぼんと寢室に軽く手を置いてコタロウを一瞥すると視線を落として同じように食事を再開した。

「それは怒るだろ」

「そうなの？」

「当たり前だわ」

コタロウは現在ジャニカ、ロビンと通信越し話している。

「まず、リインフォース・ツヴァイ空曹長の気分を害してしまったのは事実だから、謝りたいんだけど」

「そうだな、謝るのが先決だ」

「理由は何であれ、謝っておくのは大切ね」

彼は横を向き、

「申し訳ありませんでした、リインフォース・ツヴァイ空曹長」

ぺこりと頭を下げる。

「……何、隣にいるのか？」

「うん。いるけど」

「まさか、現場から？」

こくりと頷く。

コタロウがジャニカと通信をつないだのはそれから1分も経っていない。

因みに、先ほどのコタロウの謝罪をしてもはやて、ヴォルケンリッターは何も言わず、無言に徹していた。

「ネコ、お前バカだろ」

「あなたらしいといえば、らしいのですが」

「相変わらず仕事時のお前の『いつも通り』には呆れを通り越して感心するわ」

「同感です」

さすがに彼ら夫婦も、コタロウの態度には溜息しか出ないようである。

「いいか？ 名前や愛称で呼ぶというのは捉え方によっては違うが、好感度を上げるものなんだよ」

「私が当初、どれだけ苦労したか……」

詳細は割愛させていただくが、苦労したらしい。

その間に、彼女たちは淡々と食事をすませ、食後のティーも飲まずに立ち上がり、

「それでは、コタロウさん」

「お疲れ様です。八神二等陸佐」

形式的にはやては冷たく言葉を残して彼に背中を向けて歩き出し、彼も形式的な挨拶をする。

「……劣悪な環境にいるときはいるときで怒りはあつたが、まさか六課のような優良な環境でトラブルが発生するとはな」

「ネコ、その丁寧な口調が物事を円滑に進ませないことがあるのですよ?」

ジャニカは呆れ、ロビンは諭し、コタロウは眉根をよせて首を傾げる。

「なんだ、言いたいことがあるなら言ってみな」

ひとまず彼は親友の意見を聞いてからフォロワーを考えることにした。

「そうすると、リインフォース、あるいはリインフォース・アインさんとお会いしたときに、区別することが出来ないと思うんだけど」

はやてとヴォルケンリッターの歩みが止まり、くるりとコタロウの方を向く。

「……なんだって？」

「そうすると、リインフォース、あるいはリインフォース・アインさんとお会いしたときに、区別することが出来ないと思うんだけど」

もう一度、一言一句同じ事を繰り返した。

「そうではなくて、理由を話せるかしら？」

(何故そのようなことを聞くのだろうか?)

依然としてコタロウは首を傾げたままだ。

「だって、リインフォース・ツヴァイ空曹長は?^{ツヴァイ}が付いているじゃない。つまり?^{アイン}がいるってことでしょ? リインフォース・ツヴァイ空曹長が誕生する過程で、作成者やそれに関わった人たちはそのアインさんの大事な部分やそうでない部分、思い入れや考え、良いところや悪いところとかを受け継いでいると思ってるんだけど。もちろんそれは全て当てはまらないかもしれないけど、?^{アイン}がいないと?^{ツヴァイ}なんて名前付けないと思う」

違つのかなあ。と口からこぼれると、目を瞑って唸る。

「……ネコは、その、^{アイン}?さんと区別が付かないから?」

「ロビンの問いに当然とばかりに頷く。

「他のやつらが、リインと呼んでるのに?」

「それはほかの皆さんがアインさんに会ったことがあるからでしょう?」

通信先の2人は嘆息する。

つまり、コタロウがわざわざリインフォースにツヴァイと付けるのは、まだ会ったことのない、母か兄か姉かも不明のリインフォース・アイン^{初代}との見分けが付かなくなるために付けていたのだ。

かつ他のみんながリインと呼んでいることに違和感を感じないのは、その初代との呼び分けが出来ているからと思つたらしい。

もちろんコタロウは初代が既にないという場合も考えていたが、例え『いなかった』としても『いた』という事実は変わらないと考える人間なので、他のみんなも同様であると考えていた。

「ジャン、あなたの書類の再観をしたいわ」

「おい、じゃあロビンのも出せ」

いいわ。とって、ロビンは通信画面から消える。

「えと、ジャン、ロビン？ 僕の悩み全然解決してないんだけど？」
「あア？ おい、ネコ。近くにまだリイン曹長はいるのか？」

コタロウは少し視線をずらすと、そこにははやて、ヴォルケンリッターがこちらを注視していた。

「うん。いるけど」
「じゃあ、帰る間際にもう一度、『みなさん、お疲れ様です。私が理系的な思考の持ち主で申し訳ありません』とでも言えばいいんじゃない？ 書類が残ってるんだ、もう切るぞ、いいな」
「え、あの」

ブツンと画面が閉じられた。

コタロウは目を閉じて人差し指の第二関節で額をコツコツ叩いてから席を立ち、はやての持つ移動寝室に近寄って、

「みなさん、お疲れ様です。私が理系的な思考の持ち主で申し訳ありません」

深々とお辞儀をして、はやて、ヴォルケンリッターより早く、食堂を後にした。

『……………』

未だに彼女たちが彼を目線で追っているだけの行為を続けていると、移動寢室がふわりとはやての手から離れて最寄のテーブルにとりと着地すると、頭だけを出して、

「……………コタロウさんってヘンは人ですう」

目をこしこしこすりながら、不思議そうにコタロウの背中を目で追った。

次の日の早朝訓練前、コタロウは少し早く目が覚めてしまい
実質よく眠れていなかった。局支給の車を見ようとキーをとり
隊舎に入ると、ばったりはやとリインに会う。

「おはようございます。八神二等陸佐、リインフォース・ツヴァイ
空曹長」

コタロウは例え、昨日のような状況に陥^{おちい}ったとしても、自分はこ
れ以上の相手への挨拶の仕方を知らなかったため、これはこれで相
手と付き合っていていこうと、自分の口から出る言葉遣いをそのままに
帽子を取って、頭を下げた。

「おはようございます！ コタロウさん」

「おはようさん」

リインはコタロウの正面まで来て、元気に挨拶をした。

「申し訳ありません、昨日あれから考えたのですが……」

昨日、宿舎に帰った後、コタロウはリインの態度について考えた
が結局答えは見つからなかったらしいが、

「私には、お姉さんがいました」
それは過去形であり、彼はすぐに察しが着く。

「ですので、リインフォースで区別が付かないということはありま
せん」

「はあ」

「なので、待つです！ コタロウさんがそう呼んでくれるまで」

なるべく早く、ですよ？ と小首を傾げた後、にこりと微笑むは
やてのところまで戻って、かつかつと鳴らす彼女の足音に付いてい
くリインをコタロウは目で追った。

（何か良いことでもあったのかな？ なんにしても……ジャンの言
った通りにすれば問題ないみたいだ）

と結論付け、昨日のうちにメモしておいた『私が理系的な思考の
持ち主で申し訳ありません』という言葉にアンダーラインを引いた。

第6話 『役に立つメモ』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

……

前書きで書きましたが、本当にすいませんでしたー！
この話は、タイトル前で終わらせるつもりでしたが、いかんせんまとめることが出来ず、体たらくさを露呈する結果に。

ファースト・アラートの前日夜のお話です。

今回書きたかったのは、コタロウに対するちょっとしたリインのわがままですね。

ですが、意外なコタロウの発言によって意気消沈。他のメンバーも嫌悪を抱く。

コタロウはデリカシーなくその場の状況をジャニカ、ロビンに相談し、さらにみんなは落胆。

ここでリインが聞かなかった『コタロウがなぜツヴァイ付きで呼ぶか』の真相究明。

結果、別にリインと親しくなりたくないというわけではなく、六課のメンバーでは知っている人が少なく、見たこともない初代リインフォースがコタロウの頭の中にいるという事実をはやて、リイン（他ヴォルケンリッター含む）は知り、うれしく思い、待つということを選択し終着。

(初代リインフォースについてはDVD等で)

これが、皆さんにうまく伝えられたかが心配でしょうがありません。

なんにせよ、リインにとっては恋愛感情はなく、

『友達くらいの親しい関係になりたいな。リインって呼んでくれな
いかな？ 別に嫌われているわけじゃないんだ』

という、親しさの表れが今回のメインであり、

コタロウは『嫌われてしまったけど、機嫌が直ってよかった』とい
うのもメインです。

実際、メモなんて役に立っていません。

機械士として、今まで機械関係に従事してきた彼の感覚を楽しんで
いただければ幸いです。

言い忘れていました。

ジャニカとロビンは『機械イヌ』というドグハイクの別名は知って
います。

イヌ ドッグ

ドグ ドッグ

が由来です。

これも機械ネコという名前の要素の一つです。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております。

(用語解説コーナーやってないなあ)

追記！

空山さん、返信はいたしましたですが、こちらでも感謝の弁を述べさせていただきます。

ご感想、ありがとうございます！
感想のカウントがアップしていて、クリックするという感覚はおみくじを引いたような感覚でときどきしました。

第7話 『お好きなほう』 Aパート（前書き）

今回はパート分けなので前書きだけです。

最終パートは後書きを掲載。

その間は前書き後書きは未掲載。

ほとんど原作どおりなので、

知っている人にはこれ以上ないほどつまらないものになりますが、
どうぞよろしく願います。

ご指摘、ご感想お待ちしています。

第7話 『お好きなほう』 Aパート

感情が抑えられないとき、人間には大きく分けて2つ訴える方法がある。

1つは目から零れ落ちる涙。

もう1つは口から発せられる声である。

もちろん人間以外に方法はないのかというと、そのようなことは決してないし、これ以外に感情を表に出す方法は表情やその人の身体的特徴、行動等、無数に存在することは誰もが良く知っている。

だが、彼女の場合は涙と声、あるいは涙か声で感情を表す方法しか知らなかった。

それは当然である。

何故なら彼女はまだ幼く、見てきたものや聞いたこと、学んだことや忘れたことが圧倒的に少ないのためだ。

そして、ニンジンが嫌いということも彼女が学んだ少ない経験の1つである。

魔法少女リリカルなのはStrikers 〽困った時の機械ネ
コゝ

第7話 『お好きなほう』 Aパート

「はい！ 整列！」
『はい！』

なのはの号令とともに新人たちは整列し、少しでも早く体力を回復させようと息を吸っては吐いて、体の中に酸素を送り込む。訓練の激しさは彼らの服装の汚れを見れば一目でわかった。

「本日の早朝訓練ラスト1本！ 皆、まだ頑張れる？」
『はい！』

空中にいるのはを見上げ、ゆっくりと呼吸を整えていく。

「じゃあ、射撃回避シュートイベーションをやるよ」

彼女が構え、レイジングハートに呼びかけ意思を繋ぐと、足元に魔方陣が展開され無数の魔力弾が彼女の周りを守るように包む。

呼吸の整った新人たちは教導官の指示に返事が出来るよう固唾を呑んだ。

「私の攻撃を5分間、被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒッ

トを入れれば訓練終了。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。頑張っていこう！」

はい！ と自分たちでスタートを切った。

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を5分間、捌ききる自身ある？」

「ない！」

ティアナの確認にスバルは自信を持って言い切った。

「同じくです」

エリオも倣うう。

「じゃ、なんとか一発入れよう」

「はい！」

全員の代わりのようにキヤロが返事をした。
先陣を切るのは前衛の2人はやる気充分と相手を見据えて構え、

「よし、行くよエリオ！」

「はい、スバルさん！」

意志を固める。

なのははゆっくりと腕を振り上げた。

「準備はOKだね。それじゃあ、レディ」

ゴー！ という合図と共に腕を振り下ろすと、魔力弾が彼らに降り注いできた。

現在、なのはに近いのはティアナとスバルである。新人たちの司令塔であるティアナは正面に注意を払いながら右後方に指示を出す。

「全員、絶対回避。2分以内で決めるわよ！」

自らを奮い立たせるかのように大きく返事をする、なのはの放った魔力弾が着弾した。

全員が散開すると同時に粉塵が立ち上り、彼らにとっては煙幕に変わって僅かながら、相手をかく乱する。

なのはが少し自分の視界を広げるために着弾地点から体1つ分距離をとると、背後に風を切り裂く音が聞こえた。

振り向くと、スバルが使用する魔力で生成された空中路が彼女目掛けて敷かれ、それを追うように彼女が右足を前、右肘を思い切り引きながら距離を詰めてくる。

また、スバルを視界に入れると死角になる位置に、ティアナが魔

力弾を放つタイミングを見計らっていた。

「アクセセル」

なのはは1人の位置を把握すると、それを視界から追い出し、合図と共にまだ残しておいた魔力弾を2つ、1つはその死角に、もう1つは視界に入っている距離を詰めてくる少女に放つ。
彼女たちに着弾するタイミングで姿が掻き消えた。

「シルエット三次元影絵。やるね、ティアナ」

(残り少ない魔力を陽動に、ね)

感心に浸る暇を空中路は許さない。

(上！)

スバルは潜めていた姿を現し、拳を放つ構えで上空から滑空してきた。

「てエリアア」

彼女に対し正面を向くの^{みぎてのひら}に時間を割いたため、やむを得ず右掌を

翳し文字の刻まれた陣を張って受け止める。

陣と拳が交わると、互いの魔力がぶつかり合い、圧力がかかることよって陣は文字が見えなくなるほど光を増し、対象者を守護する。

力が平衡するくらいに魔力を制御しているのはは、彼女が自分に一心している隙を見逃さなかった。

空中である一定の演算処理にて制御され、発動者の指示を待機していた魔力弾は指示を受け、スバルに向かって加速する。

それはちょうど彼女の左右から迫る形になり、気づいた彼女は重心を後ろにして相手との距離をとって、それを避ける。

「うん！ いい反応」

しかし、この距離のとり方は緊急回避ともいえるものであり、離れたとたんに自分の立身バランスを崩す。

なんとか体勢を整えたスバルはなのはに背を向けて、振り向きもせず彼女から離れる。

それは当然といえは当然だ。なにせ、先ほど避けた魔力弾が背後から追尾しているのだ。

「スバル！ 馬鹿、危ないでしょ」

「ご、ごめん」

「待ってなさい。今打ち落とすから」

彼女の念話に声を出して会話し、ティアナは形勢を立て直させるためにアンカーガン 銃口下部に魔力生成によるアンカー出力可

能な銃　を構え狙いを定めてトリガーを引くが、ぽすんと魔力を弾かない金属の軽快な音が鳴って出力した魔力弾が雲散した。

「ええ！？」

すぐに打ち落としてくれると思っていたスバルは、いつまで経っても　実際は5秒も経ってない　相手の手助けがこないのので、切迫して、

「ティア、援護」

このままでは訓練がやり直しになってしまうとばかりに助けを求め。

「この肝心なときに」

魔力が漏れてしまった原因など究明している場合ではないとばかりに、急いで使用済みの薬莢じやくせきを抜いて交換する。再度構えて彼女の援護のために魔力弾を射出した。

「来た！」

スバルを追尾している魔力弾にティアナの放った魔力弾が追いつくと、魔力同士が干渉するのか追尾の精度が目に見えて落ち、彼女は大きく跳躍することによって回避することができた。

(すこし遅れたけど、フォローも、まあ及第点かな)

なのははティアナの放った魔力弾がゆっくりとこちらに進路を変えてくるのを見て、着弾地点を予測する。

その間、キャロとエリオはスバルとティアナが作り出した彼女の隙を利用して、ティアナがいずれ出す合図にいつでも応えることができるように身構えた。

「我が請うは疾風の翼」

キャロは眼を閉じて、魔力を手の甲にあるデバイスに集める。

「若き槍騎士に駆け抜ける力を！」
< 加速度後援！ >

腕を右から左へ振りぬいて彼に支援魔法をかけると、受信した彼の槍型デバイスは彼女の魔力色である桃色を帯びて光を増し、同時に、地面に展開しているエリオの魔法陣も力強さが増して行くのがティアナの位置からでもよく分かった。

槍の首から勢いよく魔力が噴射され、制御が困難なように見える。

「あの、かなり加速がついちゃうから、気をつけて！」
「大丈夫！ スピードだけが取り柄だから」

行くよ、ストラダー！ エリオの声に呼応するように、ぐんと魔力噴射の勢いが増す。一方なのはティアナが放った魔力弾をしっかりと注視しながら避けていた。

（疲労してくると目に見えて精度落ちるなあ……！？）

上空からフリードが彼女に向かって火球を2発打ち出し、なのはは一瞬怯むが

（一発に対するラグは少なくなったけど、まだ私を狙うことはできないかな？）

数日前までは火球1つ放つのに時間を要していた彼の攻撃は、まだ彼女を狙うまでは到達しておらず、彼女に向かって攻撃をしているようで、かわすのは容易かった。

（と、これで何とか追い込んだことになる、よね？）

本当であれば『追い込まれた』という表現が正しいのであるが、
なのは視点を新人たちのほうで見ているため、この表現が正しい。
実際、正面には準備していたかのようにエリオがこちらに向かっ
て構えていた。

「エリオ、今！」

ティアナの合図でエリオは重心を後ろに右手を引いて、全身のバ
ネを利かせながら槍と共になのはに衝き込んだ。

「いつけええ！！！」

（うん。速さは申し分なし。充分！）

彼女は正面から彼の攻撃を受ける。
威力は衝突した瞬間の爆煙が物語っていた。
その煙の中からはじき出されたのはエリオで、

「エリオ！」

「はずした！？」

スバルとティアナが気遣うなか、何とか彼は着地は成功するが、
勢いを依然いなせないでいた。

濛々とする爆煙はすぐに雲散し、なのはが何事もなかったかのよう
うにその中央にいる。

<ミッションコンプリート>

「おみごと！ ミッションコンプリート」

「本当ですか!?!」

エリオは確かに感触はあったが、それはなのはの展開するバリア
であったことを接触する瞬間に確認している。

「ほら、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで届いたよ」

彼女が要求した『私にクリーンヒット』は胸元にできた小さな接
触跡でも満たしていたようだ。

新人たちはそれを聞いて、とたんに顔をほころばせ力が抜ける。

「じゃ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

『はい』

彼女の号令の元、集合し、なのははバリアジャケットを解いて制
服に戻り、レイジングハートを首にかけた。

「さて、皆もチーム戦にだいぶ慣れてきたね」

『ありがとうございます！』

「ティアナの指揮も筋が通ってきたよ。指揮官訓練受けてみる？」

「いえ、あの、戦闘訓練だけで一杯々々です」

なのはの提案にティアナは頭を振って断っているのをみてスバルが微笑み、皆が歓談する。

そのなか、フリードだけが何かを感じ、『原因はなんだろうか？』とあたりを見回していた。

「ん？ フリード、どうしたの？」

「なんか、焦げ臭いような……」

キヤロが不思議がっていると、エリオも先ほどの爆煙とは違うにおいに不思議がる。

「あ、スバル、あんたのローラー！」

「へ？」

ティアナの指摘でスバルが自分の足元を見ると、そのローラーブ
ーツからプスプスと黒い煙が立ち上っていた。

「うわ、やばっ」

あちやゝ。とすぐに脱いで抱き上げる。

「しまったあ。無茶させちゃったあ」

「オーバーヒート……」

なぜですか？

耐久率の問題ですね。ナカジマ二等陸士は攻撃時は前傾姿勢、防御時は後屈姿勢、走行時は平行姿勢と、立ち方をそれぞれ変えています。あれでは間接部の衝撃はかなりのものでしょう。もっとも、壊れるのはそこからではなく、その箇所での磨耗によって全体のバランスが崩れ、全体の耐久率の低下に伴う故障になるかと思いますが

なのはが言葉をとめたことで、新人たちもかつての彼の言葉を思い出した。

当日はジャニカ二佐、ロビン二佐が来たこと、コタロウの腕がなかったことといろいろあったが、覚えていて。すぐ後の練習から意識するように努めていたが、疲労からすぐに忘れてしまっていた。

「コタロウさん」

なのはが通信画面でアクセスを取ると向こうから寝不足なのかいつもよりぼけつとした目をした男が映し出される。

「はい」

「スバルのローラーを視^みてもらいたいんですが」

「わかりました」

通信画面が閉じると、ひよこりと廃墟ビルから顔を出し飛び降りる。

初めの頃は驚いたが、彼らにとってはおなじみの行動であった。

コタロウは空中で『傘』をばさりと開いてふよふよと降りてくる。

『あれ、（また）やってみたいなあ』

スバル筆頭にエリオ、キャロがやったのは余談であり、なのはがティアナがやってみたいのも、また余談である。

「先ほどの射撃回避訓練開始50・43秒後の回避行動で限界がきましたね」

『（コンマ何秒までわかってるんだ）』

以前から分かっていることであるが、コタロウは自分からめったに話題を振らない人間であり、自分所持のものに関しては依頼が来るまで修理することはない。

もちろん機械を修理するものとして初めに『毎回私がメンテナンスしたでしょうか？』という質問をしたが、ここにいる全員が『できることであれば自分でメンテナンスしたいです』と答えたため、それ以降デバイスにおいて何かを自ら申し出ることにはなかった。デバイスは自分が文字通り身に着けるため、愛着がわき、自分でメンテナンスを施すのだが、今回に限ってはそれでは対応しかねた。

「よろしく願います」

「分かりました」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい。だましました。コタロウさん、スバルの後で構わないのでお願いできますか？」

「構いません」

訓練をはじめて2週間。両名のデバイスは既に薄氷の道のごとくいつ限界が来てもおかしくない状態にあり、スバルは既に限界が来てしまったようだ。

「みんな、訓練にも慣れてきたし、そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかなあ？」

「新」

「デバイス？」

なのはのつぶやきに、スバルとティアナが小首を傾げた。

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるつか」
『はい』

スバルは訓練場を出てから両足のローラーブーツをコタロウに渡し、全員それぞれ隊舎と寮に戻るために足を運んでいた。

「あれ？ あの車って」

ふと、視界に黒塗りの乗用車が入ると、それは自分たちの近くで停まり、ウィンドウが開いた。

「フェイトさん、八神部隊長」

名前をあげた2人は軽く会釈をする。

「すごい。これ、フェイト隊長の車だったんですか？」

全員がその車に駆け寄って、その納車したばかりのようなツヤのある車に感嘆する。

「そつだよ。地上での移動手段なんだ」

「みんな、練習のほうはどないや？」

「頑張ってます」

はやての率直な質問にスバルは苦笑いしかできず、ティアナが簡単に受け答えた。

フェイトは心配そうに2人の男の子と女の子をみて、

「エリオ、キャラごめんね。私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて」

「あ、いえ」

「大丈夫です」

2人は心配かけまいと頭かぶを振る。

「4人ともいい感じで慣れてきてるよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そうか？ それは頼もしいなあ」

はやてはなのはの報告に1つも疑うことはないので素直に感想を漏らした。

「2人はどこかにお出かけ？」

「ちよつと六番ポートまで」

「協会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか」

『はい！』

それじゃあ。とフェイトは前を向いてアクセルを踏もうとするが、正面で起こっている行動にぱちくりと眼を大きく瞬しはたいた。

「フェイトちゃん、どないしたん？」

「はやて、あれ」

はやてと共につられて、なのは、新人たちもフェイトが指差す方向に視線を向かわせる。

「予測どおりに全体の耐久率の低下による損傷。理論値を30日と設定していたけど、誤差はおよそ半分。誤差率は大きいしきいちが、閾値を高めしきいちに設定しているの、範囲内かな。成長率は今の訓練メニューで予測可能だけど、新デバイスとそれに応じた訓練云々……」

とその場でメンテナンスを開始していた。

『(うわあ)』

はつきりいつてその光景はフェイトたちや新人たちは見たことがなかった。それは別に自分がメカニツクの行うメンテナンスを見たことがないからではない。

光景が異様だったのだ。

つい先ほど、なのは及び新人たちは自分たちの背後でコタロウが何かぼそりとつぶやいていたが、気にも留めてなかった。

彼はこういったのだ。『傘、リトルMR』と。メンテナンススルーム

今、いつもコタロウが左腰に差していた傘は彼のみぞおち鳩尾拳2つほど下に水平に差され、テーブルのようになっており、先端の角は下がつているのが存在せず、スバルのローラーブーツはその上に片方だけほとんど分解されたかたちで横になっている。

傘の『露先』はワイヤーのように伸びていた。

彼は素早く右腰にある小さなバックに手を入れると、そこから交換部品と工具を出し交換していく。その速さはいつも見せるキータツチの比ではなかった。

「傘、ボード」

そういうと、『露先』が片掌かたのひらくらいのボードに形成され、コタロウはその上にローラー部の金具をおくと、ハンマーを取り出し、思

い切り叩く。

しかし、傘は半球状にデスクを囲っており、それが音をある程度吸収するのか、耳を塞いでしまうほどではなく、静かである。

「フレームがしっかりしているからか総じてテンプレートも問題なく、歪^{ゆが}みも無し。傘、研磨布紙」

今度は別の露先から『回転やすり』が形成され、コタロウはローラー部を研磨していく。

ローラーの数だけ研磨すると、それを元に戻し、ローラーブーツを構築すると「ぶふう」と息を吐いた。

「両足、終わり」

『（……両足？）』

彼らが初めに視線をコタロウに向ける前にもう片方は終わっていたようである。

「ナカジマ二等陸士」

「は、はい」

現在、彼とスバルの距離は20メートルほどある。

「こちらを向いて屈み、手を出していただいてもよろしいですか？
最後に蛇行を確認しますので」

「は、はあ。……へ？」

ぱちんと傘を閉じて左腰に差し、彼は足元においたブーツをもって振り子のように腕を振って、静かにローラーブーツを手放した。すると、その片方のブーツは音もなく転がりだしスバルに向かつて一直線に進んでいく。

「……………」

ブーツは彼が手放したときの力以外は何も外力は加わっておらず、情力で進み、ちょうど彼女の腕の中に入ったところでぼてりと横たわった。

もう一方のローラーブーツを肩掛けバックから取り出し、同様に手放すと、これまた先ほどのローラーブーツと同じ軌跡を辿^{たど}ってぼてりと横たわる。

「蛇行もなし。」

ナカジマ二等陸士、調整完了です。とコタロウはふわっとあくびをして、こしこし眼をこすりながらスバルに近づき肩掛けカバンを返した。

「あ、ありがとうございます」

「いえ。これが私の仕事ですから。あ、八神二等陸佐、テストロッサ・ハラオウン執務官、おはようございます」

『お、おはようございます』

コタロウは相手の表情から何を考えているかを想像するのが大変苦手であり、分かるのは『笑っている表情』や『泣きそうな表情』等、表情そのものだけである。

全員の驚いた表情をコタロウは不思議がることしかできなかった。

『（……これが、^{マシナリ}機械士の実力）』

何よりも彼らが驚いたのは、先ほどの作業を全て『片手』で行ったことである。

「好きなほうで構いませんが、ランスター二等陸士のアンカーガンは今直しましょうか？ それとも、着替えてからにしますか？」

第8話 『好きなほう』 Bパート

人間や動物が前に進むためにはある種共通的なものが何点か存在する。

1つは重心を前に倒し、歩くこと。これは走るも同様のことである。

もう1つは低く屈み込み、前述と同様に重心を前に倒しながら、思い切り跳躍すること。1度大きく屈んで小さくなるということは大変重要なことだ。

では、その動き出す根源無しに切欠きっかけはどうか。

多くの人間は考えた末、2つの方法が前に進む切欠の大半を占めるという考えに至るだろう。

それは、外力が加えられるか、そうでないかである。

外力というのは何も物理的なものだけでなく、精神的なものも1つの要素であることはほとんどの人間が知っている事実だ。

例えば、『押される』、『引かれる』、『進め』または『行け』等があげられる。

もちろん『来ていただけませんか?』と誘われる事だってあるだろう。

それは感情表現と同じように無数に存在するということに収束したい。

そして、そうでないものとは実に素直で1つしかない。

『自分の意志』である。これは揺ぎ無く、確固としている。途中で曲がってしまったても、曲がる前は揺らいでいないはずだ。

では、これらは『2極化されるのか?』であるが、そのようなことはありえない。

外力の助けによっていずれ『自分の意志』となる『自分の意思』

助手席に座っているはやてはふとドアウィンドウに視線を送り目を細める。

10年経った今でも、彼女の心の中では色あせることなく当時の情景が窓の外にぼんやりと移る。

「その2年後にラインが生まれて……っと、ごめんな。しんみりさせてもって」

「ううん。あの時は、私やなのは、関わった人たち全員にとって大事な時間なんだから、気にしないで」

「……うん」

あの時は。とフェイトも当時の嬉しかったこと、悲しかったことを思い出しそうになり、小さく頭を振って自分の中の『しんみり』を追い出し、話題を変えることにした。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官、カリム・グラシアさん、だっけ？ 私はお会いしたことないんだけど……」

「ん、あ、あー、そやったねえ。私が教会騎士団に派遣で呼ばれたのが切欠だったんよ」

ラインが生まれたばっかのはずやから、8年くらい前やね。と彼女も現実に帰ってきた。

「カリムと私は信じてるものも、立場も、やるべきことも全然ちゃうんやけど、今回は2人の目的が一致したから。そもそも、六課の立ち上げ、実質的な部分をやってくれたんはほとんどカリムなんよ？」

フェイトは相槌を打つ。

「おかげで私は人材集めに集中できた」

さもカリムのことを自分であるかのようにはやては胸を張って自慢する。

「信頼できる上司。って感じ？」

「んー。お姉ちゃんって感じやね。仕事や能力はすごいんやけど、あんまり上司って感じはせえへんのよ」

それを聞いてフェイトははやての表現から、『本当にそんな人なんだろっな』と思いながらふふつと笑った。

「まあ、レリック事件が一段落したらちゃんと紹介するよ」

きつと気が合うと思うよ、フェイトちゃんもなのはちゃんも。とはやても笑顔で返すと、

「うん、楽しみしてる」

そう言いながらフエイトはじわりとアクセルを踏んでゆっくりと加速していった。

「これ、ガジェット……新型？」

カリムと会ってしばらく歓談を済ませた後、彼女は部屋を暗幕を引いて、空間モニタにいくつか資料を見せた時、はやてはその中の1つに、見たことのないガジェットと思われる機体に注目がいく。

「今までの？型以外に新しいのが2種類、戦闘性能はまだ不明だけど、これ」

彼女はさらに、1つのモニタの画面を大きくしてはやてを促す。

「？型はわりと大型ね。本局には正式報告はしていないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたんだけど」

対象となる機体サイズの対比として一般人のシルエットを隣に出し、その機体サイズが人の身長を約1.5倍位であることがわかり、円形のためか会えばさらに大きいことが窺えそつだ。^{うかが}

はやてはカリムの話の聞きながらもう1つ別のものに注目した。

「これが今日の本題。一昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物」

「レリックやね」

「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも昨日からだし」

「ガジェットたちがレリックを見つけるまでの予想時間は？」

「調査では早ければ今日明日」

そこではやてはあごに手をやって考え込む。

「せやけど、おかしいな。レリックが出てくるのがちょい早いよう
な……」

「だから会って話したかったの。これをどう判断すべきか、どう動くべきか」

カリムの表情からもその言葉どおりに迷っているのが彼女の横顔から判断できた。

「レリック事件も、その後起こるはずの事件も、対処を失敗するわけにはいかないもの」

彼女が悩みだすと、深く、深く考えてしまうことをよく知っているたはやては、ボタンをたたいて、画面を閉じ暗幕を解き、

「……はやて？」

「まあ、何があっても、きっと大丈夫。カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。即戦力の隊長たちはもちろん、新人フォワードたちも実践可能。予想外の緊急事態にもちゃんと対応できる下地したじができてる。そやから、大丈夫！」

カリムの悩みを払拭させた。

着替え終了後　コタロウはシャワー室への移動中にアンカーガンの修理を済ませていた　新デバイスの紹介をおこなう予定だが、なのははすこし遅れるということで、途中ヴィータにも会ったこともあり、彼女が新人たちをラボまで連れて行くことになった。機^{マシナ}械士は最後尾を先ほどよりもさらに眠そうに付いてきていた。

「お前エ等、新デバイスの説明しっかり聞いとけよオ」

ヴィータがラボのドアを開けて、シャリオに挨拶すると新人たちはすぐに4つのデバイスに目がいった。

「これが
私たちの」

新デバイス、ですか？　と2人は感嘆で言葉を詰まらせる。

「そうですね。設計主任私！協力なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさん、ライン曹長、コタロウさん」

シャリオは出来上がったのをまるで自分のもののように大手を振って喜んで説明する。

「ストラーダとケリユケイオンは変化なし、かな？」

「うん、そうなのかな？」

「ちがいまーす！変化無しは外見だけですよ？」

「ラインさん」

エリオとキャロが彼女に気がつくと、ラインは元気に挨拶した。

「2人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触になれてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけでお渡ししていたのです」

「あれで最低限!?!」

「本当に!?!」

ラインの説明に2人は大きく目を見開く。

「皆が使うことになる4機は六課の前戦メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型。部隊の目的にあわせて、そして、みんなの個性に合わせて作られた文句なしに最高の機体です」

彼女は自分の周りにその4機を集めて、

「この機[□]たちは皆、まだ生まれただけですが、いろんな人の思いや願いが込められてて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

4人それぞれの手元に移動させる。

「ただの道具や武器と思わないで、大切に。だけど、性能の限界まで思い切り全開で使ってあげてほしいです」

「……この機[□]たちもね、きっとそれを望んでるから」

シャリオも作成者としてそれを願っているようだ。

「……なあ、リイン」

「なんです、ヴィータちゃん？ 念話なんかで」

皆が機体に親しみを込めたり、少々考えることがあったりとそれぞれ見つめているなか、ヴィータが念話でリインに話しかける。

「その『いろんな人』ってというのはコイツも入ってるのか？」

彼女はみんなの邪魔にならないよう、部屋の隅すみでふわっとあくびをしているコタロウに視線を送った。

はつきりいって、睨にらむに近い。しかし、ヴィータが思うのも無理はなかった。彼は終始眠そうであくびをしたり、目をこすったりと不真面目に見えることこの上なしなのである。

「ま、まあ、協力といってもデータ収集がメインでしたけど、立派な協力者です」

「ふうん。昨日のリインフォースの件もあったが、つかみどころが無エヤツだな」

「それは、私も同じですう」

また、彼はあくびをする。

「なあ。一発、渴入れてもいいか？」

「そ、それは……」

リインが頬を掻き、ヴィータが彼に近づこうとしたときにドアが開いた。

「ごめんごめん。おまたせ」

「あ、なのはざーん」

突然の話題の切り替えにもってこいとばかりに、リインは彼女に近づく。

「ナイスタイミングです」

シャリオは念話で聞いていないはずなのに、言葉は彼女たちにぴったりであった。

「ちょうどこれから機能説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね」

「はい！」

リインの言葉に合わせるように、シャリオは端末画面を開く。

「まず、その機たちみんな、何段階に分けて出力リミッターをかけるのね。一番最初の段階だと、そんなにびっくりする程のパワーが出るわけじゃないから。まずはそれで扱いを覚えていって」
「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから」
「ちょうど、一緒にレベルアップしていくような感じですね」

その説明を受け、ふと気づいたようにティアナがすこし視線を上げる。

「出力リミッターというと、なのはさんたちにもかかっていますよね？」

「ああ、私たちはデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

新人たちが驚き、コタロウは舟をこぎ、ヴィータは片眉を吊り上げる。

「能力限定って言ってね。うちの隊長と副隊長はみんなだよ。私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長」

「はやてちゃんもですね」

うん。となのはは頷き、『なんで、わざわざリミッターなんてかけるんだろっか？』と新人たち数名は首を傾げた。

「ほら。部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？」

話す相手に知っているように話しかけるが、スバルとキャラ口は苦笑いして頷く。

「1つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は、そこ

うまくおさまるよう、魔力の出力リミッターをかけるですよ?」

「まあ、裏技っちゃあ、裏技なんだけどねえ」

「うちの場合だと、はやて隊長が4ランクダウンで隊長たちは大体2ランクダウンかな?」

なのはは指折り説明する。

「4つ!? 八神部隊長つてSSランクのはずだから」

「Aランクまで落としてるんですか?」

「はやてちゃんもいろいろ苦労してるです……」

「なのはさんは?」

「私はもともとSクラスだったから、2・5ランクダウンでAA。」

「だからもうすぐ1人でみんなの相手するのは辛くなってるかなあ」

「隊長さんたちははやてちゃんの。はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役クロノ提督の許可がないと、リミッター解除できないですし、許可は滅多なことでは出せないそうです」

ラインが肩を落とすのに応じて、新人たちも肩を落とす。

「まあ、隊長たちの話は心の片隅くらいでいいよ。今は皆のデバイスのこと」

なのはが話題を元に戻し、シャリオは端末に触れた。

「新型も皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

「午後の訓練のときにでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかからないと思いますよ?」

それを聞いて、なのはは嘆息する。

「便利だよねえ、最近は」

「便利です」

便利という言葉にシャリオは思い出したようにスバルのほうを向いた。

「スバルのほうはリボルバーナックルとのシンクロ機能もうまく設定できてるからね」

「本当ですか!？」

「持ち運びがラクになるように収納と瞬間装着の機能もつけといた」

それもまた便利だというようにスバルは感嘆し、彼女にお礼を言う。

デバイスの一通りの説明が終わったところで、コタロウは説明開始から3回目のあくびをすると、ヴィータの彼に対する視線は片眉のつり上がりから睨みに変わった。

「おい、お前！」

「はい。なんでしょうか、ヴィータ三等空尉？」

遅れてきたなのはを含め新人たちはヴィータの性格上、怒るのも無理はないと思っていた。

今日のコタロウはいつも半目開きの寝ぼけ目がより一層閉じていて、傍目はためからみても眠そうなのは一目瞭然で、なのはやスバルが聞くと、彼は正直に『昨日はよく眠れなかったので』と、答えた。

しかし、だれも心配や注意をしなかったのはその様な状態でも彼はミスすることなく、作業をこなしていたからである。その代表的な例が先ほどのスバルのローラーブーツとティアナのアンカーガンで、どちらも2週間前の状態に戻っていた。いや、なぜかその時より使いやすくなっていると彼女たちは動作確認することによりそれぞれ感じていた。

「お前のデバイスじゃねエから関係無エかもしんねエけど。しっかり聞いとけ！」

一気に場が気まぜくなる。

「リイン、やっぱりちよつと言わせる。コイツ、不真面目すぎるだろっ」

昨日のこととは別だ。といわんばかりにコタロウに睨みをきかせるが、コタロウは特におびえるということはず、逆に新人たちが肩をすくめた。

「……しっかりとお話は聞いていましたが、不真面目とはどういうことでしょうか？」

表情を変えずに返答する彼に、ヴィータは言葉を無くす。

「ティア。えっと、コタロウさんって、ヴィータ副隊長怒らせようとしてるのかな？」

「わからないわよ。私に聞いたって」

彼女たちは横目で目を合わせて念話すると、

「でも、コタロウさんってそんなことするような人には見えないんですけど……」

「うん」

エリオとキヤロにもとばしていたらしく会話に参加する。ここ2週間彼と一緒にいて、そのような人間ではないことは明確であった。

「どづいづいことでしょうか？ どう見ても現まっただらるうが！

しっかり聞いていたんだったら、さっきのシャリオの説明もう一回やってみる！」

声を大にして命令すると、

「ヴィータちゃん、落ち着こう？」

「そうですね。新人さんたちが怯えています」

なのはとリインが彼女を宥めたが、寧ろ彼女たちに飛び火した。

「なのはもなのはだぞ。こいつにしっかり注意を」

その時である。

「『そうですね。設計主任私。協力なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさん、リイン曹長、コタロウさん』」

コタロウを除くこの場にいる全員の前疑問符がでた。

「『……この機たちもね、きっとそれを望んでるから』
『ナイスタイミングです』」

一瞬、何を言い出すのかと思ったが、すぐに全員の疑問符が感嘆符になる。

「『ちょうどこれから機能説明をしようかと』

『まず、その機たちみんな、何段階に分けて出力リミッターをかけてるのね。一番最初の段階だと、そんなにびっくりする程のパワーが出るわけじゃないから。まずはそれで扱いを覚えていって』

すみません、説明上高町一等空尉、リインフォース・ツヴァイ空曹長の言葉も入れさせていただきます。

『で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから』

『ちょうど、一緒にレベルアップしていくような感じですね』

『（……これ、さっきの会話だ）』

コタロウの口から出てきたのは、先ほどの説明云々ではなく会話そのものを復唱し始めたのだ。それは特に本人に似せているわけではなく、言葉だけであるが。

「おい、おま」

「『ほら。部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？』」

彼の復唱は止まらない。

「前後関係上、またリインフォース空曹長の発言を入れさせていただきます。」

『1つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は、そこうまくおさまるよう、魔力の出力リミッターをかけるですよ?』

『まあ、裏技っちゃあ、裏技なんだけどねえ』

「やめ」

「『新型も皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね』」

「や、やめろオー……!」

「『遠隔調整もでき……はい』」

コタロウはヴィータに視線を合わせるため、復唱をとめるとあぐらをすこしひく。

「……あの、私どこか間違えていましたでしょうか?」

突然止められたことを不思議に思い首を傾げる。

「あ、あの、そうではなくてですね。コタロウさん、さっきの会話覚えてるんですか?」

すこし肩で呼吸をしているヴィータの代わりにリインが質問する
と、

「はい。そのつもりでした。ヴィータ三等空尉が『しっかり聞いとけよ』と仰おほいっていましたので」

間違えていましたか。と、息をつく。

「えと、ヴィータちゃんがそう言ったから覚えたということですか？」

こくりと頷く彼が、ヴィータの初めの発言を真似ないところをみると、どうやら彼女の発言は覚えておらず、本当に彼女が『言っから』覚え始めたらしい。

「ヴィータ三等空尉」

コタロウはふっと顔を上げてヴィータへ向き直り、

「よろしければ、どのあたりが間違えていたのか教えていただきたいのですが？」

「……………」

聞かれた彼女は押し黙った。

「おい、なのは」

「な、何、ヴィータちゃん？」

「コイツ、いつもこんななのか？」

「うーん。こんな感じ、かな？ 態度、発言はともかく、不真面目じゃないの。むしろすんごい真面目なの」

彼の発言で場の空気がまた変化しはじめたときであった。

画面の表示が赤く表示されると同時に警報アラートが部屋に鳴り響く。

「このアラートって」

「一級警戒態勢？」

すぐになのはが反応する。

「グリフィス君！」

彼女が画面に話しかけると、すぐに相手にアクセスし、画面の向こうにグリフィスが現れ、

「はい。教会本部から出勤要請です！」

その横の画面にはやてと通信がつながる。

「グリフィスか？ こちらはやて。教会騎士団の調査部で追ってたリックらしきものが見つかった。場所はエーリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中」

「……まさか」

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型も未確認タイプも出てるかもしれへん。いきなりハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか？」

「どうやら、フェイトにも通信はつながっているらしい。」

「私はいつでも」

彼女の音声だけが聞こえてきた。

「私も」

それになのも同意する。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。皆も大丈夫か？」
オッケー

『はい!』

「よし。いいお返事や。シフトはA・3、グリフィス君は隊舎での指揮。ラインは現場管制」

『はい』

「ヴィータは隊舎で待機できるか？」

「おう! 2次の緊急時はまかせとけ!」

「なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮」

「うん!」

「ほんなら」

はやては自らも奮い立たせるために立ち上がる。

「機動六課フォワード部隊、出動!」

『はい!』

すぐに隊舎にもどるから。と、通信は切れた。

「よし! それじゃあ新人ども、しっかりな」

『はい!』

そうして、新人たちは急いでこの場を後にする。

「じゃあ、わたしたちもいくね!」

「隊舎のこと、おまかせしますです!」

そう言って、部屋を出て行くこととする。

「高町一等空尉」

リインは先に出て行き、なのはは振り向く。

「私はどうすればよろしいでしょうか？」

彼女ははやてより、『その場にいる隊長、副隊長陣にコタロウの配備を一存する』ということは聞いていた。

（コタロウさん、かあ……リインには現場管制に力を注いでほしいし、通信はシャーリーたちで対応できる。うん）

「一緒に来ていただけませんか？ 現場近くでのデバイス遠隔調整をお願いします」

さすがに隊舎にきて初めての警戒態勢に、コタロウの眠気は一気に覚めた。

第9話 『好きなほう』 Cパート

『選択』というのは結果を考えないのであれば、常に自由である。
『選択』とは存在しているうちの『どちらか選ぶ』ということ。
『選択』とは存在しているうちの『どちらも選ぶ』ということ。
『選択』とは存在しているうちの『どちらも選ばない』ということ。
と。

『選択』とは存在してしないものから『新たに選ぶ』ということ。
『選択』には能動的、受動的というものは存在しない。

『選択する』ということが能動的なのであり、『選択させる』と
いうのが受動的なのだ。

『選択する』ということは『子どもにのみ与えられた特権』、あ
るいは『大人も子どもになれる瞬間』だ。この時、本人は『選択す
る』厳しさと愛しさを知ることができる。

また、『選択させる』ということは『大人が子どもに与えること
のできる特権』、あるいは『子どもも大人になれる瞬間』だ。この
時、本人は『選択させる』難しさと残酷さを知ることができる。

そして、『選択させられる』というものは『大人のみに与えられ
た不憫極まりない特権』で、これが子どもながらに与えられてしま
うのは『大人になってほしい』という大人の願いであると、見返り
ある『期待』ではなく見返りない『信じる』という言葉で支持した
い。

では、『選択』に結果を考える、特に『選択した』という能動的
過去の場合は？

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く 困った時の機械ネ

コ

第9話 　『お好きなほう』 　　Cパート

彼女キャロル・ルシエは『普通』に“自分の居場所”である里で生活をしていた。

彼女は第一次反抗期を終え、自我が目覚めていくらか刻を刻み、大人の視線には気づかず『普通』に生活をしていた。

彼女は『普通』に自分と同じくらいの年齢の少年少女たちと戯れ、遊び、生活をしていた。

彼女は『普通』に“白銀の飛竜”を肩に置き、生活をしていた。

彼女は『普通』に“黒き火竜”の加護を受け、生活をしていた。

彼女にとってこれらのことは全て『普通』であり、今がまさに物心つき始めた頃なので、これが呼吸のように続くのだらうと、無自覚ながらすごしていた。

しかし、酋長に呼び出されたとき、それが『普通ではない』と自覚できたし、今までの生活が書割であつたことも自覚できた。

彼が口を開いたのはキャロが天幕に入り、大事そうに使役竜を抱いて、ぎこちなく正座し、パキリと目の前に炊かれている炎の薪がなつた時である。

「アルザスの竜召喚部族ルシエの末裔キャラよ……」

酋長は口ごもり俯くと後ろの女性が口を開く。

「僅か6歳にして“白銀の飛竜”を従え、“黒き火竜”の加護を受けた。お前は誠に素晴らしき竜召喚士よ」
「……………」

2人の表情から褒められているわけではないとキャラ口は無言を通していた。

また少し間があいた後、酋長は努めて表情に感情を持たぬよう顔を上げる。

「じゃが、強すぎる力は『災い』と『争い』しか生まれぬ」

キャラ口はまだ、『災い』、『争い』という意味を知らず、ただ彼の『選択させられた』大人の顔にどきりと心臓を弾ませた。

「すまんなあ、お前をこれ以上この里へ置くわけにはいかんのじゃ」

酋長の後ろにいる女性も気づけば同じ表情になっており、またどきりとする。

(置くわけにはいかない?)

彼女には書割のなかから『普通』であった“自分の居場所”を失い、実は『特別』であった“白銀の飛竜”、“黒き火竜”だけが残った。

知識を得るには何も本だけから得られるものではなく経験によって得ることもある。

キヤロは里を追放され、時空管理局に引き取られてから自分の制御できない力が酋長の言う『災い』と『争い』の意味を知り、自分の竜召喚という力そのものが『危うさ』と『怖さ』を秘めていることも知った。

自分の周りにいる自分を管理する人たちが自分を管理できないでいるのが何よりもそれを理解させていた。

彼女は自分の目の前で白衣を着た男性が持っているカルテをぺらぺらと捲り首を横に振るのを一つの合図であるということも知っていた。

(これは数えちゃだめだ)

別の施設へ移る合図の回数を数えるのを必死で我慢していた。

彼女は『普通』に別の施設へ行く。

彼女は『普通』に白衣を着た男性　あるいは女性　が1枚の

カルテを読んでいるのを見る。

彼女は『普通』に自分が調べられる対象になる。

彼女は『普通』にそのカルテが一定枚数まで溜まり、白衣を着た人間が首を横に振るのを見る。

これを幾度と無く繰り返し返していた。

期間にしては短く、移った場所の数も少なかったが、気づき始めると幾度にも続いているように彼女は思う。

そして、3年後の彼女は今日の『特別』を昨日のことのように覚えていてる。

それは深々と雪が降っている日であった。

「確かに、凄まじい能力を持ってはいるんですが、制御がろくにできないんですよ」

男性は一人の女性にキャロの能力について話していた。

「竜召喚だつてこの子を守ろうとする竜が勝手に暴れまわるだけで、とてもじゃないけどまともな部隊でなんて働けませんよ」

女性は男性の溜息交じりの説明に俯いている少女の震えを見逃さない。

「精々、せいせい単独で殲滅戦せんめつに放り込むしか」

「ああ、もう結構です」

女性が目を閉じて、溜息混じりに男性の説明を打ち切らせる。

「ありがとうございました」

キャラロは俯きながら彼女の低い声で言う謝辞を聞き、

「では」

「いえ、この子は予定通り、私が預かります」

ふいと顔を上げると、そこには『選択した』女性の横顔が見えた。周りは、驚きの表情をしている。

女性は周りの表情を気にもせず、キャラロに近づき、

「一緒に行こうか」

その後の準備と手続きは何事も無く済み　元々移動が多かったため荷物が少ない　外に出る。

外に出ると、その施設に特に思い入れも無いためキャラ口は振り向きもしなかったが、女性の発言、行動には不思議に思うところありで、彼女のほうを向く。

「寒い、よね」

女性が彼女の視線に気が付くと、少女と対等になるため足を折ってしゃがみこみ、自分のマフラーを彼女に巻いた。

キャラ口も話しやすくなったのか意を決して口を開く。

「私は今度は何処へ行けばいいんでしょう?」

女性は自分のマフラーが長いのか調節するために首元にリボンを作り、目を閉じて、

「それは君が何処に行きたくて、何をしたいかによるよ。キャラ口は何処へ行つて、何をしたい?」

『子どもにのみ与えられた特権』を大いに利用させることにした。

3年後のキャラは現在、他の新人たちと一緒にへりに乗っている。操縦しているのはヴァイス、隣にはコタロウが座っており、現場に向かっている最中である。

隊舎のオペレーションルームではアルトがキーをタイプして画面を開く。

「問題の貨物車両、速度70を維持。依然進行中です」
「重要貨物室の突破はまだされていないようですが……」
「時間の問題か」

互いに現状を把握すると、すぐに現状が動いたことを警告音が知らせる。
アラート

「アルト、ルキノ、広域索敵！スキャン 探索対象を空へ！サーチャー」

画面に空が映し出された。

「ガジェット反応！ 空から!？」

「航空型、現地観測帯を捕捉！」

情報をすぐに隊長陣に伝えると、いち早く通信先のフェイトが反応する。

「こちらフェイト。グリフィス、こちらは今、パーキングに到着。

車停めて現場に向かうから、飛行許可をお願い」

「了解」

彼女はすぐに手ごころな場所に止めるとすぐに車から出る。

「市街地個人飛行承認します」

その言葉とほぼ同時にフェイトは走りながら愛機に合図を送ると、周りが球体上に光り輝いてセットアップし、空へ風を切りながら駆け抜けていった。

一方なのはも、思うところありでへりの操縦室に向かい、

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と2人で空を抑える」

「ウス。なのはさん、お願いします」

ヴァイスがハッチを開くと、彼女はそちらへ歩いていく。

「じゃあ、ちょっと出てくるけど。皆も『頑張つて』、ズバツとや
っつけちゃおう!」

『はい!』

「はい」

キャラは初めての出撃からくる緊張なのか、或いは自分の制御で
きない力が『災い』と『争い』を生むということ、『危うさ』と『
怖さ』を秘めている可能性とに慄おのいているせいなのか分からないが、
びくりと震え、遅れて返事をする。

「キャラ」

するとなのはは彼女に近づいて、

「大丈夫、そんなに緊張しなくても」

両頬を両手で包み込み、

「離れてても、通信で繋がってる。孤独ひろじゃないから、ピンチの時は助け合えるし」

彼女の緊張を取り除き、

「キャロの魔法は皆を護ってあげられる、優しくて強い力なんだから、ね？」

小首を傾げながら、慄きを解いた後、ハッチから飛び降りて愛機に合図を送ると、周りが球体状に光り輝いてセットアップし、空へ風を味方に空気を撫でながら滑っていった。

キャロの頬に温もりを残して。

「スターズ1ワシ、ライトニング1ワシ、接触エンゲージを確認」

フェイトはシャリオの通信と相手の魔力でお互いが近いことを確認する。

「こちらの空域は2人で抑える。新人たちのフォローお願い」

「了解」

通信はグリフィスに届き、すぐにヴァイスに伝える。

「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん」

「うん。なのは」

彼女たちは合流すると、まもなく自分たちの視界に航空型ガジェットが入る。

先に動いたのはなのはだ。

彼女は背後から来るガジェットに旋回して逆に背後につくが、正面からもう数機ガジェットが彼女の正面にあらわれる。

ガジェットは目標を定め、攻撃を放つ。

(囷と攻撃。模範的な動き、だね)

なのはは正面から来る攻撃を引くことなく避ける。互いが交差する速度は単純に互いの速度を加算したものになるため、彼女の横を通り過ぎていく弾速はかなりのものであるが、彼女はそれを避けることをそれほど自分の障害になるとは思っていないようである。

弾幕を避けながらレイジングハートを構え、切先に魔力を込めると口径のある攻城砲の様な砲撃を放ち、自分に背を向けているガジェットを打ち落とした。

(うーん。初撃、制御できなかった)

彼女も新人が見ているかもしれないなか、ちよっぴり緊張しているようで、それが魔力制御に響き、大きく放出してしまったようである。

彼女は次に狙いを定めると、

<アクセルシューター>

今度はいつも通りの落ち着きを取り戻し、ガジェットを打ち落とす最小限の魔力弾を五月雨さみだれに放つと、全機打ち抜いて、撃墜した。

(うん！ いつも通り。ありがとうレイジングハート！)

撃墜したときの爆煙のなかから、フェイトがなのはと交差するかたちであらわれると、なのはの背後にいるガジェットを、愛機バルディッシュに搭載されている弾式魔力供給機能カートリッジシステム レイジングハートにも搭載されている を使用して、

<弾式魔力装填カートリッジロード>

思い切り身体をひねり、構えると、遠心力を利用して今は鉤型ハーケンフォルムのバルディッシュから魔力を放ち、ガジェットを切り裂いて撃墜した。

(思い切りすぎちゃったかな?)

そこでなのはから念話が入る。

「フエイトちゃん、新人たちの前だからかな、ちよっぴり緊張してる、かも」

「私はなのはと久しぶりの空で、はりきっちゃった」

2人はまた交差して互いの後ろにいるガジェットを落として目を合わせると、ふふつと笑う。

「でも」

「もう」

『大丈夫!』

今度は合わせるところは合わせ、単独のときは単独で次々と、片っ端からガジェットを撃墜していった。

「さあて、新人ども！ 隊長さんたちが空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下地点ポイントに到着だ。準備はいいか！」
『はい！』

ヴァイスは操縦室をしているため、声を張りあげて後方に伝える。

「よし、『頑張っ』て『こい！』」

彼は隣を向くと、

「コタロウさんも何か言っただけはとうですかい？」

眠気が覚めても変わらない表情のコタロウもふいと彼に顔を向けた。

「何か。とは？」

「何でもいいんすよ、一言キル応援を！」

「応援ですか……わかりました」

彼は立ち上がって操縦室と護送室の間に立つと、

「新人の皆さん」

『はい！』

新人たちは既に飛び降りるため、立ち上がり彼の一言を待つ形になり、彼らはコタロウのどんな言葉にも元気よく答える準備は万端だった。

「『頑張らない』でください」

『はい！……え？』

「コタロウさん、『頑張らない』なんてそんなありきたり……え？」

一度大きく返事し、飛び降りようとしたところで振り向き、ヴァイスは自分の聞き間違いかと、彼も振り返った。

「……どうか、なさいましたか？」

「えと、コタロウさん、なんて？」

「『頑張らない』でください。ですが？」

「自分は応援って言ったんすけど……」

「『頑張らないでください』は応援になりませんか？ 私の周りや、私もよく使つのですが」

(どんな友達ですかい！？　もしかして、ジャニカニ佐？)

それは口には出さなかった。

「あの、一応、俺やなのはさんは『頑張ってる』と……」

コタロウはそれを聞いて、僅わずかばかり無言になり、ヴァイスの発言がそれで終わりであると分かると、次の言葉を吐く。

それを聞いて、スバルとティアナは一つ息を吐いて、ハッチから飛び降り、エリオも苦笑する。

しかし、キャラロだけはきよとんと彼の『大人が子どもに与えることのできる特権』に既視感きしかんを覚えていた。

「好きなほうを選べばよいのでは？」

第10話 『好きなほう』 Dパート

「フェイトさん」

「なに、キャラ？」

彼女キャラ・ル・ルシエは執務官フェイト・テスタロッサ・ハラオウンという女性に引き取られた後、生活が一変したことを自覚するのに、多少の時間を要した。

自分を調べる人間もいなければ、別の施設へ移るということもなく、時々であるが寝る前に本を読んでくれる人間が傍にいたものにも関わらずだ。

1冊の本を読み終えた後、フェイトが「もう1冊読もうか？」と、聞く前にキャラが口を開いた。

「お兄さんってどういう人なんですか？」

彼女は、以前フェイトから自分には兄がいるということを知っており、今読み終わった本 『うさぎの精霊』 の内容から思い出したようだ。

フェイトは目を細め、キャラの髪を撫^なでる。

「とっても、厳しい人かな？」

「……厳しい人、ですか？」

しかし、こくりと頷くうなず彼女はイヤな顔をしている様には見えない。

「突き放したような言い方するし、にこりともしないし、怒るときはそれはもう……」

彼女は頭の中の彼を思い出しながら楽しそうに話していた。

「でもね……」

「……」

彼女の言葉で楽しそうなところは1つとしてなかったのに彼女が微笑んでいたのには次の言葉が存在するためだ。

「とても厳しいんだけど、それ以上に、ううん。その厳しさの中には優しさがあって、とっても頼りになる人なんだ、お兄ちゃんは」

(厳しさの中に優しさ?)

キャラはフェイトに引き取られてからしばらくの間、施設生活から来る怯えのため笑うことは無かったが、月日という時間がゆっくりと、そして確実に瞳の奥に光を取り戻させていた。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コ

第10話 　『好きなほう』 　Dパート

4人は貨物車両の真上にへりから飛び降りるかたちで着地し、下降している間にセットアップした自分の服装におのおの各々驚いていた。

自分が装着しているバリアジャケットのデザインにふと見覚えがあるように感じていると、

「デザインと性能は各分隊の隊長さんたちのを参考にしてるですよ？　ちよつとクセはありますが、高性能です！」

リインは片目を閉じながら新人たちのちいさな先生を演じて、ジャケットの説明をする。

特に大きく感銘を受けているスバルにティアナは彼女を現実に戻す。

「スバル、感激は後！」

一見、はちまきにも見えるが、後頭部には大きな白いリボンをしているスバルは、ツーサイドアップで黒いリボンをしているティアナの言葉に反応すると、待っていたかのように、車両の屋根が盛り上り、光線が飛び出してきた。

後援をするのはティアナだ。

光線を放った後に飛び出してきたガジェットを打ち抜くと青い髪と白いリボンを靡かせながらスバルは車両内に突入する。

「うおオリアア！」

着地点にいたガジェットに右拳を振るわせて打ち込むと見事に爆ぜた。

爆ぜた時の煙でも彼女の相手をする機体は怯む事無く、自ら出す太い鉄線や光線で果敢に彼女に襲い掛かる。

「リボルバーシュート！」

しかし、怯む事無く果敢なのは彼女の同じで、新しいデバイスであるマツハキヤリバーの力を惜しみなく使用して、車両内を縦横無尽に駆け巡り、一機々々確実に破壊していく。特に最後の機は思い切り打ち抜き、

(よし！ これで……ッ!?)

屋根もろとも突き破って、車両の外へを自ら飛び出していった。

「ッと、と……」

(い、いつもよりずっと力がのる！)

自分でもびっくりするくらいの威力で、そのまま車両から落ちて
しまいそうになるが、

＜ウィングロード
空中路＞

足元から声が聞こえたかと思うと、いつも彼女が自分で出している
空中路が構築され、彼女は身体が覚えているかのように滑走し、
着地する。

「……………」

着地したときはローラーとブーツの間のサスペンションがよく利
き、スバルに衝撃を与えぬように凶られていた。

「えと、マツハキャリバー。お前つてもしかして、かなり凄^{すご}い？
加速とか、グリップコントロ^{ウイングロード}ールとか、それに空中路まで……」

彼女は自分が自分でないような動きを実現してくれている機体に
驚いている。

<私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから>

表情や態度としてあらわれることはないが、「当然です」と機体
は言っているように彼女には聞こえた。

「うん。でも、マツハキャリバーはA^{エイアイ}I 人工知能 とはいえ、
ココロがあるんでしょう？ だったら、ちょっと言い換えよう」

(これから長い間、一緒に付き合っていくんだから)

「お前はね、私と一緒に走るために、生まれてきたんだよ」

<……同じ意味に感じます>

自分と共に自走できる相手を持つときの感覚を互いに共有するこ
とは難しく、

「ちがうんだよ、いろいろと」

（無理、かなあ）

自信はない。

しかし、スバルにとっては、

<考えておきます>

「んー」

この言葉がこれから自分の愛機となるマツハキャリバーから出てきただけで、大満足であった。

（いつ、わかるかな？）

それは然程遠くない未来であろう。

「ティアナ、どうですか？」

「ダメです。ケーブルの破壊、効果なし」

ティアナはスバルの後援の後、すぐに車両の制御を取り戻すため別行動をとってガジェットを破壊しながら、つい先程、車両の制御を支配していると思われるガジェットを破壊してみたが、車両の制御を取り戻せないでいた。

「了解。車両の停止は私が引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください」

「了解」

通信先のラインの指示に従い、スバルを迎えに行動を移す。

二丁拳銃として両手に装備していた拳銃クロスミラージユを行動しやすくように片方のみにして移動しはじめた。

「しかし、さすが最新型。いろいろ便利だし、弾体生成もサポートしてくれるんだね」

<はい。不要でしたか？>

クロスミラージユを握る力が強くなり、

「アンタみたいな優秀なデバイスに頼りすぎると、私的にはよくないんだけど……」

（でも、アンタがいれば　　）

「でも、実践では助かるよ」

<ありがとうございます>

（まだまだ私は強くなれる！　証明するんだ、私たちランスター家の実力を！）

これからの自分の成長を祈った。

それはエリオとキャラコが8両目に突入した直後に起こった。

「ライトニングF、遭遇！^{エフ エンカウント} 新型です！」

シャリオが周囲に警戒せよと言っているように叫ぶ。

車両の天井は大きく穴が開いており、2人は警戒しつつ進行していたので、まだ機動六課に情報は連携されていない新型ガジェット球形で2人が近くにいれば見上げること間違いない大きさの機体とは距離があったが、相手がこちらに照準を合わせた瞬間に距離を感じさせないワイヤーアームでの攻撃を仕掛けてきた。2人は後ろへ飛び退き、避ける。

「フリード、ブラストフレア！」

フリードは火球を主の合図で放つが、相手の鉄板の様なワイヤーアームにとっては撫でるに等しく、軽々と弾き返した。

「おオリアア！」

その弾き返したアームが初期位置に戻る前に、エリオが自分の間合いになるまで距離を詰め、上空から槍を太刀の様に振り下ろす。

「ッ　　！　硬ッ」

しかし、ガジェットセの装甲は頑丈で、断つことはできなかった。
エリオとの迫り合いが長引くと、相手はその魔力を認識して波状に、ある機能を起動させ、彼とその後方セにいる彼女の魔力を無効化していく。

『（これは……）』
「AMF!？」
Anti
Magilink
Field：領域
内魔力無効化」

「こんな遠くまで……!？」

魔力を無効化されたエリオはガジェットに純粹な力で挑むかたちになり攻勢するが、及ばないところは多く、アームにストラーダをつかまれ、弾かれそうになる。

（私は、どうすれば……）

キヤロは苦戦しているエリオの背中を見る形になり、自分が何をすればよいのか戸惑とまどう。

「あ、あの」

「大丈夫、まかせて！」

しかし、そのエリオの背中には依然として変わらず震えており、加えて相手はさらに彼に照準を定め、近距離から光線を放つ。

それを彼は跳躍してかわし、翻ひるがえってガジェットの後ろに付き、次のアームの攻撃に備えることはできたが、光線とアームの同時攻撃を受けて体勢を崩し、連続攻撃によって、車両の壁に叩き付けられた。

「ッく、はッ……」

それを見守ることしかできないでいるキャラは、続いて彼がアームで吊り上げられるのをみても身体が反応できないでいた。

(私は)

何か行動を起こさなければいけないと分かっているけど、身体が金縛りになったように動かず、思考がその代わりに動くことはよくあり、キャラもそれと同様の感覚に陥った。彼女の思考はまるで制御できない感情のように、無理矢理自分の過去がフラッシュバックし、大きく彼女を占める。

『確かに、凄まじい能力を持ってはいるんですが、制御がろく

にできないんですよ』

(私は)

『竜召喚だつてこの子を守ろうとする竜が勝手に暴れまわるだけだ……』

(違う！ 私は)

思考の中の彼女は首を振った。

『キャラは何処へ行って、何をしたい？』

(私はあの時、いつも『私のいてはいけない場所』、『私がしてはいけない事』ばかりの世界から変わったんだ)

そう、確かに彼女はあの瞬間から生活が一変した。

『強すぎる力は『災い』と『争い』しか生まれぬ』

(私の力は『危険な力』、『怖い力』)

思考の中の彼女は自分の力の可能性に眼を瞑るが、エリオがアームから解き放たれ、上空に高く投げ出されたところはしっかりと見えていた。

その『しつかり』は時間遅延をもたらし、エリオはゆっくりと自由落下をする。

「エリ、オ、くん」

(エリオくんや皆はとっても優しい人たち)

思考と感情はまったく別のものであるのにも関わらず、ふっと自分のココロがあったかくなり、感情が強くなるのを彼女は感じていた。

彼女の感情に代返すかのように、目尻から『涙』が溢れ、

「エリオくーんーん!!」

これもまた代返すかのように、気づけば大きく相手を呼ぶ『声』を出し、彼を追うように小さく屈み込み、重心を前に倒しながら、思い切り跳躍していた。

「ライトニング4、^{フォー}飛び降り!? ちょ、あの2人、あんな高々度でのリカバリーなんて!」

オペレータたちのやり取りや、

「発生源から離れば、AMFも弱くなる……」

なのはの言葉は、たとえ聞こえていても、いなくても、感情の溢れ出した彼女には聞こえるはずも無かった。

『キャロの魔法は皆を護ってあげられる、優しくて強い力なんだから、ね?』

(なのはさんは言うてくれた。私の力は『皆を護る優しくて強い力』だっ)

なのはの『過去』の言葉が彼女に聞こえ、自分の力の別の可能性に眼を開く。

『キャラは何処へ行つて、何をしたい？』

(私は、私のやりたいことは……)

フェイトの『過去』の言葉が繰り返され、『意思』が生まれる。

『一緒に降りようか』

(へりから降りるとき、手を握ってくれたエリオくんを……)

なのはが包み込んでくれた頬のぬくもりと、彼がへりから降りるときに握ってくれた手のぬくもりが同じであったことを思い出す。

(護りたい)

彼女の瞳に『意志』が宿る。

(優しい人を。私に微笑みかけてくれた人たちを。自分の力で、私の力で)

「護りたい！」

キャラは共に降下しているエリオの手を握り、

(やっぱり、あたたかい)

と、感じながら彼を引き寄せ、優しく抱きかかえた。

『キャラは何処へ行つて、何をしたい？』

『好きなほうを選べばよいのでは？』

(私のしたいこと、選ぶんだ！ 私は『頑張つて』、私に『微笑みかけてくれた人』を護るんだ！)

その思考、感情に呼応して、キャラのデバイス・ケリユケイオンが燦然と輝きはじめ、自由落下していた降下速度を緩めた。

彼女は自分の特長とも言うべき薄紅紫色の魔力光に包み込まれており、その中に追ってきたフリードが声をなげる。

「フリード、不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから……」

彼女に抱かれています。エリオはゆっくりと意識を取り戻し、ふと顔を上げると、そこにはヘリから飛び降りた時のかよわい彼女はおらず、フェイトを彷彿させる成長し、凛々しい『選択した』女性がいる。

「ッ!？」

ただ単純に見惚れて動揺し、顔に朱がはいる。

「いくよ、竜魂召喚！」

彼女は一心に魔力制御に集中し、エリオを抱く力が強くなる。

「蒼穹を翔る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ」

2人の足元にはミッドチルダ特有の四角い魔方陣が帯びているが、放たれる魔力、召喚魔法のためか少し様式は違っていた。

そこから自分の背よりも大きな翼が一對出現する。

「来よ。我が竜、フリードリヒ」

その翼は詞ことばに導かれ、

「竜魂召喚！」

詠唱完了と共に大きく羽ばたき、キヤロの魔力光の幕を卵のように突き破って白く大きな竜が召喚された。

「召喚成功」

「フリードの意識レベル安定フルー。完全制御状態です！」

「……これが」

「そう。キヤロの竜召喚。その力の一端いったんや」

オペレータールームでは全員が声をもらし、

「……あれが、チビ竜の本当の姿」
「格好いい」

車両の上ではティアナとスバルたちが嘆息していた。

(でき、たあ)

キヤロはふうと息を吐き、安心して閉じていた眼を開くと、自分の腕の中にはこちらをじっと見つめているエリオがいた。

「はうっ！ ご、ごめんなさい」

「う、うん！ そんな、こっちこそ……」

そうして、急いでキヤロはエリオを離す。

2人のやりとりをよそに、フリードは上昇を続け先程までいた車両まで戻っていく。

「あっちの2人には、もう救援はいらないです。さ、レリックを回収するですよ？」

リインを含めた3人とすれ違うことになり、そんな言葉が聞こえた。

そして、もとの車両ではガジェットが天井を突き破って姿を現していた。

「フリード、ブラストレイ！」

フリードが大きく息を吸い込み、首をそらせると正面には^{ブラストフレア}火球と

は比べ物にならないくらい大きな火炎を生み出し、

「ファイヤー！」

合図と共に噴射する。

相手は依然としてAMFを展開しており、それが炎を防いでいるため、損傷はするが大きさは小さい。

「やっぱり、硬い」

「あの、装甲形状は砲撃じゃ抜きづらいよ」

球体では確かに砲撃は打ち抜くことは難しく、着弾点が中央しかないと破壊するのは難しそうだ。

「僕とストラーダがやる」

キヤロはそれに頷くと、フリードを操りガジェットを正面に距離をとって、詠唱を始める。

「我が乞^こつは、清銀の剣^{ツルギ}。若き槍騎士の刃^やに祝福の光を」

エンチャンドワールドインサイト
＜特異領域貫通＞

左手を握り、右肩へ。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

ブーストアップ・ストライクパワー
＜撃徹力後援＞

右手を左手甲へ交わせた後、腕を大きく広げて体勢をとる。

「行くよ、エリオくん！」

「了解、キャロ！」

エリオはフリードから飛び降り、真っ直ぐガジェットへ向かっていった。

「ツインブースト。スラッシュ・アンド・ストライク！」

＜受諾＞

ストラーダがキャロの魔法を受信し、認証すると切先^{きりさき}が薄紅紫色に光る。

「ハアッ！」

エリオがストライダーを振ると鞭ムチのようになり、相手のアームを寸断し、相手の攻撃を殺そぐ。

(力が湧わく！)

彼の意志が通じ、ストライダーは弾倉を交換して自身の魔力を上げる。

エリオの着地した足元に魔方陣が展開され、周りに稲妻イナヅマが駆けて魔力が噴きあがる。

「一閃必中！」

そして、彼は構えてから思い切り右足を踏み込み、ガジェットに突きこみ、貫いた。

「でエリアア！」

彼の攻撃はそれでは終わらず、両手をもちかえて押し上げると、真上に切り裂く。

相手は自分の電力を制御することができず、内側から爆ぜた。

エリオは爆音のなか、「やったア！」という少女の声をしっかりと聞き取った。

その後は、スバルたちによってレリックは確保され、中央ラボまで護送。車両は制御を取り戻し、停車。エリオたちは現地職員に事後報告をするため、現場待機。
何も滞る事無く任務は完遂された。

(事後報告調査でも探索機サーチャーたくさん使ったなあ。あんな遠くまで)

コタロウはふと眼をやると、なのはたちが迎撃していた場所のさらに遠くに探索機が飛んでいたのが見えていた。

「刻印^{ナンバー}№9、護送体勢に入りました」

「ふうむ」

「追撃戦力を送りますか？」

1人の白衣を着ている男性が、先程まで航空機型のガジェットが撃墜された場所のさらに遠くの場所にいる探索機からレンズを拡大させて、護送されていく状況を見ていた。

「……やめておこう。レリックは惜しいが、彼女たちのデータが採られただけでも充分だ」

白衣の男性は両手をポケットに入れながら、採取したデータを人数分並行して映像を繰り返し再生し、不敵に笑う。

「この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材がそろっている上に」

1人の女性と1人の男子を拡大させる。

「この2人^コたちを。生きて動いているプロジェクトF^{エウ}の残滓^{ざんじ}を手に入れる好機^{チャンス}があるのだから」

彼の含み笑いはルーム内に静かに響き渡った。

機動六課の面々は初めての出勤任務を終え、少し遅めの昼食をとることにした。

もちろん、全員同時ということではなく、シフトごとで時間を割り振ってであるが。

グリフィスやオペレータ、ヴォルケンリッター（リインを除く）たちは管制、警備を兼ねて先にとり、その次に実際に出動した人たち^{ちがとることになる。}

「皆、おつかれや」

はやても彼らを迎え入れ一緒にとることにした。

『ありがとうございます』

「それじゃあ、ごはんにしよか？」

「はいですう」

そうして、食堂へ移動する。先頭は隊長陣、中に新人たちが、1番後ろにヴァイス、コタロウが続く。

(そうだ)

その途中ふと、キャラは足を止めて振り返った。

「コタロウさん」

「はい」

彼女は彼よりも背は低く、見上げるかたちになる。

「応援エールありがとうございます」

「それは何よりです」

彼はにこりとみせず、寝ぼけ目を細くして、キャロのお辞儀に合
わせて、帽子を取って頭を下げた。

(もしかしてお兄さんって、こんな感じ、なのかな?)

そして、頭を上げたキャロは何故かふとそんなことを思う。

『……………』

それを聞いていた新人たちやヴァイスはあの時のコタロウの応援
の言葉を思い出し、首を傾げた。

「コタロウさん、皆になんて言ったんですか？」

食堂に着き、並び始めたときに、なのはが話しかける。

「『頑張らないください』と言いました」

「……………」

なのはたち隊長陣はくるりと視線を彼に向けた。

「……えと、んー？」

「ライン？」

「あ、はい。確かに、コタロウさんはそういいました」

キャラを除く新人たちはぎこちなく笑う。

その間に少々ご機嫌なキャラは、皆の会話を左から右に聞き流し、並びの先頭になっていた。

彼女は今日のメニューを見て眉を寄せる。

(どれにしよう?)

それはAかBかの2択になっており、どちらかを選べば料理を頼める仕組みになっている。

今日は先程の出動任務もあったため、食堂はこの時間でもセルフサービスではなく、料理を作ってくれる女性たちスタッフがいた。

「なんだい迷ってるのかい？ ふむ、一方には好物もあるが、嫌いなニンジンもあるって？」

少女の少ない人生経験からニンジンが嫌いであることは自覚済みだ。

「じっくり悩んで、『好きなほう』を選べばいいさね！」「んうう」

その女性スタッフはその悩んでいる少女ににんまり笑いかけたが、その少女は召喚時の凛々しい姿は無く、『選択する』という『子どもにのみ与えられた特権』に、まるでコタロウのように眉根を寄せ、
て首を傾^{かた}げていた。

第10話

『好きなほう』

Dパート（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

投稿したあとも、うまくかけていたか心配でなりませんが、一応、何度か推敲したので大丈夫かと、あと何度か投稿後に見直して、てにおはを直していこうと思います

さて、今回といますか、初めての本編といますか、キャラの1つの成長を書いて見ました。

こんな感じで、ティアナとかスバルとか……

……

……

……やめよっかな。つかれるし

原作を何度か再生してみました、他の新人たちって心境を書いてないんですよえ
できて、ティアナくらいだと思います。そして、やるのであれば、情報僅かに創作するしかありません。

まあ、それはそのとき考えましょう。

大切なのは今です。

キャラは原作では僅か6、7歳くらいで里を離れることになりましたが、そのときの酋長の発言の意味は分かっているかないと個人的には思いました。

そんなことで、あの場面では里の全員の意見を聞き入れた『選択させられた』という表現を利用して、『大人の顔』にびっくりした彼女として扱ってみました。

まあ、あくまで私だったらがおしりにつきますがね。

そして、次はこの話で久しぶりの戦闘描写を書いてみました。

個人的に『ドーン』とか『疾!』という表現は好まないの（全く使わないというわけではありませんよ?）控えめに控えめにしてみました。

（もしかして、使ってなかったかなあ?）

英語表記も同様です。カタカナをなるべく漢字表記にしてみました。もう、ほんとにどうしても仕方ないとき（ドイツ語とかわかりますかい!）は使います。

AMFは別表現ですね。

ティアナのこれからの心理描写も書いていこうと思います。

そうそう、因みにキャラやエリオはまだ恋愛までには発展していません。

あれはただの友達への成り立ちみたいなのです。

同時に、フェイトとなのはだつてちがいますよ？
一応、タグには「恋愛あり？」とありますが、それじゃありませんのであしからず。

主人公はコタロウなんですから。

コタロウの真価はこれからです。

あの、記憶力も探索機が見えていたこともこれから明らかにして行くかとおもいます。

知っている方は、

「しいつ。ですよ？」（リン風）

では、次は閑話を話して、なのはさんの実家を書いていきましょうか。

（CDどこへやったっけなあ？）

恋愛フラグも一緒にゆっくりと立てていきましょうかねえ。

サブタイトルも話数ごとにもどります。

ではでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、メッセージお待ちしております。

以下は用語説明や謝辞です。

濛々 もつもつ

煙などが立ち込めるさまです

「煙濛々としすぎじゃね？」

零れる こぼ

容器や入れ物とかから外に出ることです。

「ちよっと、コップから零れてる、零れてるよ！」

散開 さんかい

散らばることです。

「野郎ども、散開して雪玉を。石はいれちゃダメだってば！」

翳し かざ

手さしだすこと。遮さへぎったりですね。

「手を翳せ。って痛っ！ 引っ張らないで」

書割 かきわり

芝居道具の一種です。偽者の風景で、いくつかに割れたりします。

「こんな世界……書割だ」

天幕 てんまく

テントです。酋長のいる場所がテントじゃあ格好悪い気がしたの
で。

「コテージじゃねえ。天幕、だ！」

末裔 まつえい

大きな意味での子孫の末っ子です。

「この子が小人の末裔？ ていうか、ちっさ」

おの
の
慄き

恐ろしさのあまり震えること。

「さあ、慄け！ 土下座する覚悟はできてるんだ」

さみたれ
五月雨

いつまでも続く、乱れ打つさまです。

「五月雨式に果たし状が来たんだけど……」

かぎがた
鉤型

先の曲がったフックですね。英語ではハーケンと言ったりします。

「鎌とはちがいます」

ざんじ
残滓

少し残酷ですが残りかすのことです。

「生きて動いているプロジェクトFの残滓」

この言葉で締めくくりって……

追記：

庚さん、ご感想ありがとうございます。

が、頑張ります！

そして、もう一つ気づいたことが……

女性描写、なのはとフェイトしかやってなくな？

カリムとか他の女性陣描写どうしようか。

やらなくても大丈夫だよ？

第11話 『ひとくちサイズ』 (前書き)

まだ、初出勤日です。

第11話 『ひとくちサイズ』

機動六課としての初出勤ファースト・アラートがその日の午後 昼食の後 は訓練

はなく、新人たちはそれぞれ本日の報告書に追われていた。

報告書と言っても、自分の出勤に付いての反省点や改善点を書く事はそれぞれ自分たちが未熟ということもあり、易かったが、それ以外の、調査報告や文章構成については得意不得意の差がそれぞれ如実に出ていた。

「あう〜」

「気が抜けるような声出さないでよ、集中できないでしょ」
「だってえ」

誤字を見つけたらしく、スバルは溜息をはいていたようだ。

「はい、終わり」

「え！？ ティア、もう終わったの？」

「アンタみたいにミスしてもおかしな声なんて出さないし、余計に文字なんて消さない分ね」

ティアナは書類を保存し、必要ない画面を閉じていく。

「じゃあ、私の」

「じゃあ、私の書類のペアチェックよろしく。エリオとキャロの手伝いしてくるわ」

スバルは手伝ってもらおうかと口を開いたが、相手に遮られ、なおかつ作業が増えた。

「と、友達を見捨てるの!？」

ティアナが立ち上がったのを見計らって上目遣いで懇願すると、彼女は目を閉じて、スバルの肩に手をやり、

「見捨てるわ!」

カツと目と開いて、そのあとは振り向きもせず手をひらひらさせながら「終わったらアンタのもチェックしてあげるわよ」と言葉を残して、エリオとキャロのデスクへ向かっていった。

「……むうッ!」

スバルは一瞬ぼかんと彼女を見送ってから片頬を膨らませ、

「ティアのいじわる」

明日の朝、ひとまず彼女の胸元で報復するでしょう。と、手をにぎにぎさせていた。

しかし、彼女も初めて報告書を書いたわけではなく、エリオとキヤロよりは早く仕上げる事ができ、そのあと彼女も2人を手伝い、見積もっていたより少し早く完了することができた。

上司に提出して了承なのはした後、

『ありがとうございます』

「いいよ。お互い様だから」

「まあ、そういうこと。効率もあるしね」

2人の感謝の言葉に、スバルとティアナはやっぱりと『どういたしまして』と返事をする。

「さて、と」

「ティア？ 何処行くの？」

「自主練。新しいデバイスに馴染んでおきたいし」

「あ、私もやるやる〜」

「僕も……」

「私も……」

エリオとキヤロも、がたりとデスクから立ち上がるが、

「エリオとキャラはダメ」

スバルに断られてしまう。

「アンタたち2人は疲れてるでしょ。体力は訓練で鍛えられているけど、精神的にはかなり消耗してるはずよ。スバルの言ったとおり休んでなさい」

ティアナもキャラの召喚と連続のエリオへの後援魔法。彼はその受諾と加えて自身の魔力解放後の攻撃で疲労していないわけがないと判断し2人を止める。

異なる系列の魔法を使用することは集中力を多分に消耗し、精神的に疲労することは当然であり、後援魔法を受け、自分の魔力と掛け合わせたときの疲労もよく知っていた。

『でも……』

「ダメ」

『……はい』

「このコたち2人は、オーバーワークになる可能性もあるしね」

「あー、その辺はティアに似てるねえ」

「う、うっさい！ バカスバル」

「ちっきのお返し〜」

まあ、お返しはこれだけでは終わらないけど。と思いながら内心舌を出す。

「じゃあ、行こっか」

そうしてスバルも動き出そうとしたとき、

「あ、いたいた。スバル、ティアナ」

ふいに呼び止められ、2人は呼ばれたほうを向くとそこにはスバルのローラーブーツの入った肩掛けバッグとアンカーガンを持ったシャリオがいた。

魔法少女リリカルなのはStrikers
困った時の機械ネ
コ

第11話 『ひとくちサイズ』

「あれ？　なのはさん？」

訓練場を利用する時には用途や時間等の申請等を事前に提出しなければならなかったため、個人練習であれば、普通利用しないのであるが、今回はシャリオがその手続きをしていたため、訓練場に向かう。エリオとキャラロは見学を希望し、ついてきている。

訓練場にシミュレーションの設定が終わり、シャリオが口を開こうとしたところで、なのはが隊舎からこちらに向かってくるのが見えた。

「はやてちゃんの事後処理の書類整理手伝おうとしたら、断られちゃった」

『ごういうのはわたしの仕事だよ』って。左頬を指先でぽりぽりかきながらにやははと笑う。

「^{ティーチング}んで、こちらに顔を出してみたの。明日から個別練習も入るし。^{コーチング}教導というよりは指導だから、主に見学だけど」

それならばと、少年少女2人がなのはのほうを向くが、

「エリオとキャロはお休み。ね？」

そこはスバル、ティアナと同意見であり、2人は肩を落とした。

「シャーリー、見学と行って何だけど、何をするの？ データ収集？」

「収集といえば、そうですね」

シャーリオはバッグの中からローラーブーツを取り出し、アンカーガンティアナへ、ブーツをスバルに受け渡す。

「2人はこれ、修理してもらったんだよね？」

2人は頷く。

「使ってはみた？」

2人は首を横に振る。

「私は握って構えたくらいです」

「私も履いて、少し滑ってみただけです」

ほんの動作確認程度です。と答える。

「じゃあ、実際に訓練では使用していないのね」
『はい』

それを聞いてから、シャリオはガジェットを2体出現させた。

「多分、クロスミラージュとマツハキヤリバーの感触はまだ覚えていそうだから、まずは今渡したそのコたちでこの2体破壊してくれるかな？」

シャリオ、なのは、エリオとキャロはシュミレーション上の建物の上へ移動し、スバルとティアナは2体と対峙して準備が整うと、シャリオがスタートを切った。

今までのなのはとの訓練のおかげか、ガジェット2体くらいの破壊など5分もかからずに終了し、建物の上にはいた全員が2人のいるところに降りてきた。

「どつだった？」

『……………』

シャリオの問いかけに、2人は顔を見合わせた。

なのは既にシャリオが何を言いたいのかわかっているようである。

「な、なんですか！？ これ！？」

「ティアナは？」

「……………これ、本当に私のアンカーガンなんですか？」

シャリオの方を向いて答える2人に、エリオとキャラ口は首を傾げる。

「どつか、したんですか？」

「みていて普通でしたけど……………」

シヤリオは腕を組んで目を閉じていた。

「2人とも正直な感想述べてくれる？ できれば、マツハキャリバーとクロスミラージユと比較してくれるといいかな」

現在はなのはの両サイドでふよふよと浮いている、アクセサリ状態のマツハキャリバーとクロスミラージユはチカリと光って疑問をあらわにした。

「加速やグリップコントロール、ブレーキングやサスペンションはマツハキャリバーの方が上です。でも
「弾体生成サポート機能付、魔力弾の誘導ホーミングや追尾トラッキングはクロスミラージユの方が上です。ですが」

2人はもう一度顔を見合わせてからうなずき、正面を向く。

『使いやすいのは、この「です」
『<！?>』

先程よりも強く点滅した。

「うん。2人とも意見は同じみたいだね」

シヤリオは一步前に出た。

<どういうことですか？ 設計士シヤリオ>

<私たちは……>

「そのローラーブーツ、アンカーガンは改良はしておらず、部品もそのまま。特に新しい機能を取り付けていない」

『はい』

「マツハキヤリバーとクロスミラージユは、高性能であなたたちに合ったフルオーダーメイドでそのブーツとガンを踏襲して設計されているの」

そこで彼女は息をつく。

「でも、それだけ」

ローラーブーツとアンカーガンに目をやり、

「コタロウさんが修理したそれには、あなたたちの利き腕（足）や重心　これは新デバイスにも組み込まれている　のほかに、癖くせも取り込まれているの」

『癖？』

「例えば、スバルは右利きで、右腕をよく使うでしょ」

こくりと頷く。

「足は左足を前に出し、重心を右足に預ける」

もういちど頷く。

「そのとき、重心を預けたときの右足のどこから重心をかけ始め、どこで安定する？　そして、終わったとは右足のどこから力を入れ始め、左に重心を移動し始め、中央にもっていく？」

「……わかりません」

スバルはそこで首を横に振った。

「うん。それは人間工学っていう分野で、デバイス設計上はずせない分野なんだけど、デバイス設計者はその情報から設計しているの」「つまり、クロスミラージューたちは私たちの情報から設計されたものですよ」

「そう。身長、体重、利き腕、重心等、統計学に基づいた設計になっ
てはいるけど、その人に特化した癖。つまり、個人内変動人間工学
までは加味していないの」

<それが、私たちに組み込まれていないと？>
>
<であれば >

マツハキヤリバーとクロスミラージユが話に割り込むが、

「これは余程、経験を重ねた人で、かつ専門分野にとられない裾野の広い人間でないと実現は不可能」

あー。となのはは頷いた。

「癖を取り込むには特別なパーツは不要。ネジや接合部の締め加減等で可能なの」

私では無理と首を横に振る。

「なのはさん。コタロウさんって何者なんですか？」

なのはは先日得たコタロウについて説明した。

新人たちは彼の持つ資格が多いことは知っていたが、実際の数値を聞いて全員目を見開いた。

『に、253!?!?』

「あの隊舎内放送『突然機器が修繕されたりすることがありますが、お気になさらず』ってコタロウさんのことなんですか？」

なのは話し始めてから終始苦笑いだ。

「これはシャリーも知ってるけど、コタロウさんは特に指示が無いときは自由行動だし、あるときは近くにいる隊長陣、上司に指示を仰ぐことになってるの」

「じゃあ、コタロウさんっていないときは」

「多分、どこかで修理や雑務をこなしてると思うよ」

新人たちはううむと唸る。

<待ってください>

マツハキヤリバーが話しの内容を聞いて音声をはさむ。

<はつきり言って、私は彼のことなどどうでもよいのです>

<私はマスターズバルをより強く、より速く走らせるために作り出されました、それでは >

<私たちはそれに劣ると言うのですか？>

新デバイスの2機にとって重要なのはコタロウではなくマスター

であるスバルとティアナなのだ。役に立っていないと聞かされているようであれば、我慢できない。

2機はどうすればよいのか問い詰めると、シャリオが答える。

「それは、初めに言ったとおり、一緒にレベルアップしていくという意味で、たくさんスバル、ティアナと練習をこなしていくこと。あなたたちはAI、その機能がついているから、早くマスターの癖を学習することね」

なのははマツハキャリアバーとクロスミラージユを本人に返すと、

<早く、練習を開始しましょう！>

<今日中に貴女の個人内変動を学習してみせます！>

この2機が人型であるなら、間違いなく鼻息を荒くしていることだろう。

スバルとティアナは気圧されながら頷き、シャリオは手元のローラーブーツとアンカーガンを見て、周りに気付かないようにはあっと思をつく。

(くやしいな)

コタロウのデータ収集に不備は無く、自分が得た情報からその癖を判断し、最初から組み込んでいないことに未熟さを感じる。

本当は、ある程度情報は解析済みで、それを元に再調整をかけることは可能であったが、それでもコタロウの域までの調整は不可能と自覚していた。

現在、そのような人の癖を扱った調整作業は自作でない限り、機能として既にほとんどのデバイスには取り込まれており、本来の意味でのその人専用になるのには時間はかかるが、実質 unnecessary 技術である。

一昔前であればその人の癖をオーダー時に取り込み、完成時にその人専用にするのできるデバイス作成者はいたが、今日日きょうじつそのような人間は少なく、シャリオもそれに当てはまる。

彼女はその実質 unnecessary 技術を目にしたことは無かったし、本人もそのような機能があるのであれば、もつ必要はないと考えていた。

だが、その職人技のような技術保有者を目にすると、自分の技術の低さを痛感してしまう。

(なんか、平然とやられると子どもあつかいされたみたい)

シャリオはそう思うと、ぎゅっと拳を強く握った。

はやてたちの世界では書類は電子として扱われることが多く、紙のようなもので扱われることは少ない。

しかし、もし紙として扱われていたのであればデスクが書類で溢れかえっているは間違いないであろう。

それぐらいの分量をはやてとリインはこなしていた。

「どれだけあんねん」

ちょうど折り返しについた時点で、はやてはその書類につっこみを入れた。

夕食は軽く済ませ、なのは、フェイト、ヴォルケンリッターの再三の手伝い願いを頑かたくなに断り、ずいぶんと時間が経つ。

あと、もう少しもすれば今日と明日の境目を経験できる時間だ。

「リインも今日はお疲れやろ？ 無理はあかんよ」

「ひいえ、これは私のひごとですっ」

くわりとあくびをかみ締めて、彼女はキーをタイプしていた。

現場管制をしていたリインははやての側近という立場もあり、年齢的には幼いにもかかわらず、書類整理を手伝っていた。

はやては管制でさえ疲労があるだろうになおかつ今の作業をしている彼女に申し訳なく思い定期的に『無理はあかん』と注意していたが、それでも彼女はやめなかった。

断つたなのはたちと違い、リインはそのようなこともありえる立場であるため強くやめさせることができないのだ。

だが、その強制も彼女の体力的に自然に訪れそうであり、なによりも彼女のあくびが物語っていた。すぐにもコロナといきそうである。

(寝たら、バッグに入れたげんと)

はやては、ぽつりとつく自分のあくびには自覚が無かった。

コタロウは出勤の後、特に指示は無く、ヴァイスとともにヘリの調整作業　ヴァイスがメインに調整作業を行い、本人は彼からの質問や確認作業を行う　を行い、夕食後は隊舎の空調を見て回っており、結構な時間が費やしていた。

彼は機器修理の時間は早いですが、行動そのものの動きはゆっくりで移動も伴えば総じて時間がかかってしまうのだ。

今日はこれくらいにしておこうかと思い、宿舎に戻ろうとしたところで、ふと右隣から空調音が耳にはいる。

(空調に異音有り。というか、八神二等陸佐たちはまだ仕事してるんだ)

自分のことは棚に上げて、そのようなことを思う。

(どうしようか。明日でもいいけど、ジャンも『六課ではできるだけ人と話したほうがお前の為だ』と言ってたし、一度確認をとってダメであれば明日にしよう)

彼はブザーを押したが、向こうからは反応がない。

(あれ?)

次いで2度押ししてみたが、反応は無かった。

「いないの、かな」

ブザー付近にはオフィス内の状況も確認でき、電灯は『オン』と表示されているし、ロック状態は『オフ』と表示されていた。つま

り、電気は点いていて、鍵はかかっていないと言っことだ。

「よし。空調機を直して、消灯、施錠して、明日、八神二等陸佐に『施錠されていませんでした』と報告しよう」

独り言とポツリとはいてから、ドアを開けると、

「……八神二等陸佐、リインフォース・ツヴァイ空曹長？」

デスクに突っ伏しながら静かに寝息を立てているはやてとリインがそこにいた。

「ふむ」

しばらく考えた後、彼は胸ポケットからメモ帳を取り出しぺらぺらとめくりだした。

「主^{あるじ}、主」
「んう〜」

シグナムが何度目かはやての肩をさすった後、やっと彼女は声をもらした。

「このようなところで寝てしまったては風邪を引いてしまいます」
「ふえ？」

彼女はゆっくり目を開けてからだを起こす。

「あれ、シグナム？ どないしたん？」

「こしこしと^{まぶた}瞼^{こず}を擦り、口を押さえて小さくあくびをする。

「カギネ二等陸士が、主が私を呼んでいると」

夜間練習を終えたところで彼に会いまして。とシグナムはリイン

の頬を指先でちょいちょい突付いて起こしながらここにいる理由を答える。

「私が？ 呼んでへんけど？」

「そうですか？ ですが、ここで寝てしまつては風邪を引いてしまいます」

（ここ？ ここって……）

ふと周りを見渡して、ここが自分のオフィスであることに気付き、自分がなんの最中であるかも気付いた。

「しもた！ 書類」

向こうのデスクで小さなあくびと伸びをしながら起きるリインをよそに、急いで待機中であつた画面を開きなおして中身を確認する。

「……あれ？ 終わつて、る」

まだ途中であつた書類が残っていたはずなのに、どの書類を見ても綺麗に仕上がっていた。

（せやけど、この書類は手をつけてへん、で。……シグナムなん

て？ カギネ三等陸士？ なんてあの人が？

はやてが覚醒し始めた思考をまわし始めると、

「あ~~~~~！」

ラインが声を上げる。

「どないしたん、ライン？」

そうすると、彼女は自分の手には大きすぎる物体を持ってシグナムとはやてに見せる。

「チョコですう」

ひとくちサイズのチョコを彼女はうれしそうに抱えてるのを見て、ふと自分のデスクに目をやると、端のほうにラインと同じチョコが一枚の紙の上にぽつんと置いてあった。

「わたしにもある」

手にとってみたそのチョコは透明のビニールにキャンディのよう
にくるまれており、なにも変哲のない、市販のそれである。
そして、同時にその下にあった1枚の紙を取り上げる。

(手紙? なになに……)

『八神二等陸佐、お疲れ様です。』

カギネ二等陸士です。

空調設備の見回りをしていたところ、部隊長オフィスの空調機か
ら若干の異音が聞こえていたので修理のため、入室しようとして3回ブ
ザーを鳴らしたのですが、反応がありませんでしたので、申し訳あ
りませんと思いながら入室した次第です。

空調機の修理は滞りなく終了しました。

加えて、二等陸佐のデスクでの睡眠から疲労と判断し、私の分か
る範囲で高町一等空尉やテストロツサ・ハラオウン執務官、及び新
人たちの書類から情報をすいあげ、書類を書き上げました。報告は
明日の午後とすることなので、確認と修正で間に合うと思います。

もし、不備があるようでしたら、削除の上、再作成をしてくださ
い
』

そこまで読み進めて、書類をななめに読んでいくが、別段不備は
なさそうであることを確認し、手紙へ視線を落とす。

『デスクの上に市販のチョコを置いておきます。疲労には甘いものをとると良いと、本で読んだことがあったためです。』

そして、夕食時にリンフォース・ツヴァイ空曹長が欲しいと仰っていた食器を試しに作成してみました。移動寝室の上においておきます

「こちらもおかございましたら、返却してください」

今度はリンの近くにおいてある黒い手持ちのバッグの上に視線を移すと、何かを包んでいるティシュペーパーが置いてある。特に中身は確認しないが、手紙に書かれているものだろうと、また手紙に視線を落とした。

『あなたの肩にかけているストールはよろしければ後日お返しください。』

それでは、あなたやリンフォース・ツヴァイ空曹長を運べる人がいないか探してきます。私では運ぶことができませんので。

以上、失礼いたします。

追伸：

もし、チョコを召された際には、いつも以上に念入りに歯を磨くことをお忘れなく。

「電磁算気器子部工機課より出向

コタロウ・カギネ三等陸士」

そこまで読んでから、視線を上げると、リインは口の周りを汚すのも何のそので嬉しそうにチョコを食べ、シグナムはそれをみて嘆息しているのが目に入る。

はやても丁寧^{ていねい}に手紙を2つに折り、自分の肩にかかっているどこか見覚えのある鳶色^{とびいろ}のストールを横目で見てから嘆息した。

(こゝ、子どもあつかい)

「ほら、主はやてもため息をついているぞ?」

そこでリインは「う?」とはやてを見る。

「それくらいにしときい、寝る前にそんなに食べると太るでえ」

「う」

「あと、ちゃんと歯を磨こうなあ」

「……はいですう」

リインは返事をするとな残惜しそうに、残りをしまう。

その後、リインの書類をみて、それも仕上がっているのを確認し、彼女たち3人はオフィスを出る。

(書類整理もほぼ完璧。というより、雑務という雑務、修理という

修理に特化した人間。これはアルトヤルキノは太刀打ちできへんわ)

ほいとチヨコを頬張り、歩きながら軽く目を閉じてから片目を開けてリインを見る。

(ちらこ……)

「ん〜、ふふ〜ん」

彼女は自分のサイズぴったりのスプーンやナイフ、フォークに目を輝かせていた。

(器用さも、並みのもんやあらへん。これはコタロウさんがすごいんか、それとも工機課のみなさんがこうなのか)

今度、ナカジマ三佐に聞いてみよか。と考えながら腕にかけているストールをぼやりと見て、あくびをこらえた後、

「ッ!?!」

はやてにほんのり頬に朱が入り、今まで考えていたことが真っ白になる。

「はやてちゃん？」

「主、どうされたので？」

「い、いや、なんでもあらへん」

(今の今まで気付かへんかったわ)

胸に手をやり、静かに深呼吸をした。

(ね、寝顔みられたかもしれへん)

はやてはコタロウという以前に、自分では確認できない無防備な自分の顔を異性に見られたことなど無かった。

第11話 『ひとくちサイズ』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

前書きに記載したとおり、初出勤日のその後です。

今回はコタロウの技術を披露してみました。

（まだ、披露する場面は用意いたしません）

コタロウの技術は、最新の技術を取り入れて、より発展的で画期的なものにするものではありません。

以前にもお話したとおり、機械的見地から人を判断し、それをまた機械に反映させる技術を持っています。

そして、これがコタロウ特有なのか、機械士特有なのかは次回くらいにもしかしたら、ナカジマ三佐が話してくれるかもしれません。

（その分、デバイスに独自設定が出てきてしまうのはご愛嬌）

シャリオやはやては彼の『普通の中の特異』に気付き始めています。いやはや、シャリオがまだ彼のデバイスに興味をもっていないかたっています。

興味を持ち出すのは、もうすこし先になるので。

最後に。

私の中でイメージするはやては、社交的ではありませんが、普段（ともだちの前など、本当の自分を前に出すとき）は押しはみるがすぐ引っ込んでしまう、気恥ずかしさを持ち合わせた人だと思っています。

ます。

今回がその赤面っぷりです。

今回は本音を言わない『狸』っぷりを出していきます。
いや、もしかしたら出します。

コタロウのメモ帳の中身や彼がはやてに掛けたストールは後々書いていきたいと思います。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております。

第12話 『言い忘れ』（前書き）

今回で、出張任務に突入するところだったんですが……
いや、みなまで言いません。

ごめんなさい。すみません。

（前書きであやまってるの多くない？）

後書きでもあやまりますんで、大丈夫！
それでは、本編をどうぞ！

第12話 『言い忘れ』

はやてが後日コタロウにストールを返したときに、それがコタロウの普段から腰に提さげている『傘』の生地部分であることにはすぐに気付いた。

何せ『傘』が骨組みだけの状態で少し寒そうなのが目に入ったからである。

彼女は彼が書いた書類に不備が見られなかったこと、ラインの食器のこと、そしてチョココについてお礼をした後、ストールについては別にお礼を述べる。

「あと、コタロウさん、ストールどうもありがとう。と、言いたいところやけど、生地がストール代わりって、少し汚きたなくはないやるか？」

「自浄機能付きであるため、問題ありません」

冗談めいた愛想笑い込みの自分でも少し可愛く思うくらいでお礼を言ってみたが、相手は表情一つ変えず、ストールを受け取り、『傘』に取り付けた 実際には「傘、装マウン着」と命令した 後、

「お役に立てれば幸いです。それでは、午前の訓練を見に行かなければならないので」

ぺこりと帽子を取ってお辞儀をし、すたすたと歩いていってしまった。

「……………」

コタロウが歩いてきたほうからリインがすれ違いに飛んでくる。彼女も嬉しそうに食器の礼をしていた。

「はやてちゃん、どうしたんですか？」

愛想笑いのまま固まっている彼女をみて、首を傾げる。

284

「……………リイン、コタロウさんにどついてもええ？」

「ど、どうしたんですか!？」

「なんでもあらへんよ〜」

「顔が笑って、いや、笑ってはいるんですけど……………」

怖いです。などとは口が裂けても言えなかった。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ
コ

第12話 　『言い忘れ』

「5月13日、部隊の正式稼働後、初の緊急出勤がありました。密輸ルートで運び込まれたロストロギア、レリックを」

リンはその後、数日前の出動任務について自分なりの日誌をつけていた。

「初任務としてはまず問題ない滑り出しだと部隊長のはやてちゃん、六課の後見人騎士カリムやクロノ提督たちも満足されているようです。っと」
「リイン曹長」

ふと画面から顔を上げると左手にファイリングボードを持ったシヤリオがいた。

「あ、シャリー」

「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な勤務日誌をつけてたですよ」

日誌をつけ終わり　最後に「コタロウさんはまだ、リインと呼んでくれません」と記載し　画面を閉じると、シャリオの正面にふわりと近づく。

「シャリーは？」

「新しいデバイスの調子を見に、訓練場のほうに行ってきたんですよ？」

「そうですか。みんな、元気でした？」

「フォワード陣もデバイスたちも、絶好調です！」

シャリオは先程訓練場で初めてコタロウの画面操作をみて、嘆息した呆れ顔だったが、すぐに戻して明るく答えた。

実際訓練が始まるとコタロウが各グループに対して画面展開し、

全員を驚かせたことなんてすぐに頭の片隅まで追いやり、隊長たちは教えること、新人たちは教えられることに集中した。

スバルは現在、背中を木にたたきつけられ、「痛う」とうめき声を上げている。

「なるほど。バリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「はは。ありがとうございます」

ヴィータが評価をし始めたため、大きく息をついてからスバルは彼女に近づき、

「アタシやお前のポジション、フロントアタッカーはな、敵陣で単身に切り込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間が長く取れるし、サポート陣にも頼らねえで済む。って、これはなのはに教わったな」

「はい、ヴィータ副隊長！」

大きく返事をする、ヴィータは両手を翳して魔力を展開する。

「受け止めるバリア系、弾いて逸らすシールド系、身に纏って自分を守るフィールド系。この3種を使いこなしつつ、ポンポン吹っ飛ばされねえように、下半身の踏ん張り、マツハキヤリバーの使いこなしを身に着ける」

「頑張ります！」

<学習します>

短い間にスバルの個人内変動を学習したマツハキヤリバーはまだまだ覚えることは多そうだと意気込んでいるようにみえる。

「防御ごと潰す打撃は、アタシの専門分野だからな」

自分の身長ほどある大きな槌の先をスバルに向けると、

「グラーフアイゼンに打つ叩かれなくなったら……」

ヴィータの目の色が変わる。

「しっかり守れよ」

「はい……」

そのときは身の心配はしないからな。と思わせる低い声に相應の返事で応えてみせた。

「エリオやキャラは、スバルやヴィータみたいに頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要。例えば」

フェイトの周囲には現在複数の障害物と球体機器スフィアに囲まれている状態で、合図とともにスフィアからビームが発せられると、彼女はステップやジャンプをして避ける。

「まずは動き回って狙わせない」

障害物を左右へ横切り、相手を錯乱させ、

「攻撃が当たる位置に、長居しない。ね？」
『はい！』

「こうすればよい。と、手本を見せる。

「これを、確実にできるようになったら」

2人はこれから先は早さが上がるのだろうという予測は正しく、スフィアの目標への認知、攻撃までの早さと速さがあがり始め、目で追うのがやっとになる。

しかし、フェイトは先程2人に教えたことを忠実に再現しながら避けていく。

『ッ　　！！』

2人が声を上げたのは、フェイトがある地点に長居をしたため、攻撃的になり、スフィアからの一斉射撃を受けたからである。

悪い見本でも見せたのだろうかと思った矢先、

「こんな感じにね？」

後ろのほうで声がしたので振り向くと、ついさっきまで正面にいた女性が「はじめからこんなのは無理かな？」というように眉を八の字にして微笑んでいた。

もう一度正面を向くと、彼女の移動の軌跡が地面をえぐるように残されているのがみえ、感嘆する。

「今のも、ゆつくりやれば誰でもできる基礎アクションを早回しにしているだけなんだよ？」

『は、はい』

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの」

フェイトはゆっくり2人の正面に立って視線が合うように屈んで、

「ガードウイングのエリオはどの位置からでも、攻撃やサポートができるように。フルバックのキャラは素早く動いて、仲間の支援をしておられるように」

エリオとキャラの肩にぽんと手を置く。

「確実に、有効な回避アクションの基礎。しっかり覚えていこう？」

『はい！』

「キョクル」

私も！ と、フリードが尻尾を振った。

「うん。いいよ、ティアナ。その調子！」

なのはとティアナのほうでは魔力弾が飛び交い、2人の弾丸がぶつかるたびに大きな音がして、地面が響いていた。

「ティアナみたいな精密射撃型は、一々避けたり受けたりしてたんじゃない、仕事ができないからね」

なのはが人差し指を上げると、いつもの彼女の魔力弾とは色の違うものが2つ指先に集まる。

「　　ッ!? バレット、レフト?^{グイ}、ライトRF!^{アールエラ}！」

ティアナのデバイス、クロスミラージュが反応した直後、背後から別の弾丸が彼女を狙う。

今いる位置から飛び退き、身体を回転させて避けると、すかさずなのはが彼女に狙いを定める。

「ほら。そうやって動いちゃうと後が続かない」

起き上がりの隙をつき、彼女は弾丸を撃つとティアナはその2つに向かつて撃鉄げきてつを引き、引き金を引く。

弾丸の一つは互いに交差しながら上空へ駆け上がっていき、もう一つは地面に水平に直進に弾丸同士が当たって雲散した。

「そう、それ！ 足は留めて視野は広く。……射撃型の真髄は」

ティアナはなのはが制御する弾丸を次々と命中させて霧消していく。

「あらゆる相手に正確な弾丸を選択セレクトして命中させる」

弾倉を交換しました次、また次と打ち抜く。

「判断速度と命中精度！」

「チームの中央に立って、誰より早く中長距離を制する。それが、私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ」

またもう一つ、いや、複数個魔力弾をなのはは生成した。

はやて、リイン、シャリオが隊舎の外に出たとき、ちょうど向こうからフォワード陣たちが歩いてくるのが見えた。

「あ、皆お疲れさんや」

「はい」

「はやてとリインは外回り？」

「はいです。ヴィータちゃん」

「うん。ナカジマ三佐とお話してくるよ。スバル、お父さんやお姉ちゃんに何か伝言とかあるか？」

「いえ、大丈夫です」

スバルは手をひらひら振る。

その反応を見てからジト目で1人に視線を送る。

「それと、コタロウさん」

「はい。何でしょうか、八神二等陸佐？」

「あんさんについて、よく聞いてくるからな？」

「……はあ。私について、ですか？ 私、そのナカジマ二等陸佐にお会いしたことがないのですが」

コタロウはただ上長に言われて出向されてきただけなので直接ゲンヤに会ったことはない。

「ちょっとちゃう。機械士についてや。もう驚かへんようにな！」

「驚く、ですか？ というより、機械士というのは」

「ええな！」

「……はい」

なにか説明しようと口を開くが、基本的にコタロウは反抗ということはしないため、こくりと頷く。

「コイツについてわかることはぜんぶ聞いてこいよ、ライン！」

「紹介情報以上にわかる工機課の情報を仕入れてきてください、八神部隊長！」

言葉に出したのはヴィータとシャリオであるが、ここにいる全員が『よろしくお願いします！』と言っているような表情をしている。

コタロウが首を傾げる中、はやてとラインは皆の意思を確認すると、颯爽と車を走らせていった。

ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐は一通りはやてのロストログアの密輸ルートについての詳細を聞き、ちょうど良く冷めたお茶を口にする。結果だけというと、調査のための人材が欲しいということらしい。

「ま、筋は通ってんな。いいだろう、引き受けた」

（肝心なところは濁すか。質問しても、のらりくらりやられそうだな。すこし、傍観に努めるか。言うのは点が線になったときだな）

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスで、ギンガはその副官だ。2人とも知った顔だし、ギンガならお前も使いやすいだろう？」

「はい」

モニターで説明するために立っていたはやては、スカートに手を

当て、ちょこんとゲンヤを正面にして座る。

「うちのほうは、テストロツサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと」

(しかし、よく頭がまわる)

「スバルに続いて、ギンガまでお借りするかたちになってしまつて、ちよつと心苦しくはあるんですが……」

「なに、スバルは自分で選んだことだし、ギンガもハラオウンのお嬢と一緒に仕事は嬉しいだろうよ」

「はい」

「しかし、まあ、お前も気が付きや俺の上官なんだよなあ。魔導師キャリア組の出世は早エなあ」

ゲンヤはさすがといわんばかりに呆れ混じりにお茶で喉を潤すと、は yet はどう切り返せば分からない顔をして、

「魔導師の階級なんて、ただの飾りですよ。中央や本局へ行ったら、一般士官からも小娘扱いです」

「だろつなあ。つと、すまんなあ。俺も小娘扱いしてる」

「……ナカジマ三佐は今も昔も私が尊敬する上官ですから」

「ここだけは心に留めていますとばかりに、彼女はゲンヤに目を合わせる。」

(女性は嘘を付くとき目を合わせるみたいだが、コイツの場合は分
からんな)

「そうかい」

しかし、実のところゲンヤの少し後ろに焦点をあわせて恥ずかし
さを隠しているのは、本人しか分からない。

「失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です」

話が一段落したところで、ゲンヤがモニタを展開して一人の男性
に通信をとる。

「おお、八神二佐から外部協力任務の依頼だ。ギンガ連れて、会議
室でちよいと打ち合わせをしてくれや」

了解しました。といって、通信を打ち切る。

「ありがとうございます」

「打ち合わせが済んだら、メシでも食うか」

「はい！ 一緒にします」

はやては笑顔で応えるがすぐに真摯な顔になる。

「ナカジマ三佐」

「ん、どうした。まさか、他に人を出せとか言うんじゃないかな」

それはさっきのロストロギアの密輸ルートについての説明くらいの表情だ。

「マシンナリ機械士って何者なんですか？」

会議の後、はやてはラインとともにゲンヤ、ギンガと一見和風とも思える食堂で食事をすることになる。

この食堂はゲンヤがよく通っているようで味も確かであった。

「そんな人、いるんですか？」

スバルの姉ギンガ・ナカジマは普段は落ち着いた、沈着な女性であるが、はやての話聞いたときはさすがに青い長髪を少し揺らして驚いた顔になっていた。

「本当に優秀な人間みたいだな、その、カギネ三等陸士っていうのは」

ゲンヤは箸で魚を啄つばみながら依頼した工機課課長を思い出しながら笑う。

300

「笑い事やあらへんですよ」

「この食器も然りですう」

彼が作成した食器の中には箸も含まれていた。

「まあ、機械士が器用なのは事実だな。それくらいわけではない」

ギンガはラインのスプーンを手に取り、それには装飾も施されているのを見てさらに驚く。

「機械士っていうのは修理が主なんですよ？　なんで書類整理も凄いですか？」

彼はぐいとお茶を飲んで、にやりとする。

「そりゃ副産物だ」

「副産物？」

「ですか？」

「あいつ等は、修理をするにあたっては設計図を見たりもするわな。だが、その設計図は自分が作ったもんじゃねえ」

「……………」

「自分が作ったものでもねえ設計図を見たり、それに関わる資料をみているうちに書き手の性格を無意識のうちに読み取る技術がつく」

今は専門メカニックが自分で設計したものを自分で作成し、自分で修理するだろう？　とさらに言葉を繋ぐ。

「加えて、質量兵器の機械調査も請け負ってるんだから、情報整理、書類作成はお手のもんだ」

そこまで聞いて3人は『なるほど』と息を吐くと、ギンガが口を開く。

「でも、そういうことなら、私たちでも」

「『やっている』わな。でも、工機課の人間は全部で何人が知ってるか？」

「確か、5人、と」

そこでいち早く答えたはやてはぞくりと背筋に違和感を覚える。

「そう、5人で、課の紹介情報にはなんて書いてあった？」

リインはそこでモニタと開きポンとキーを叩く。

「『時空管理局陸上における、電磁、電算、電気、電器、電子部品を担う部であり、工機課はさらに工業生産部品、主に管理世界に存在する質量兵器の調査、検証を行う課』ですう」

「まあ、あえて言うなら、その情報は設立当初から変わってねえから、正しくは陸に海も追加されていることだな。設立が陸なんで海がついていないだけだ」

至極簡単に管理局上の機械すべての修理を5人でやっていると言ったのけた。

『……………』

「な？ 言い得て妙だろう？」

ま、現在は各部や課には専門メカニックがいるから、忙しさはさほどでもないがな。とそこまで言うと、店員にお茶のおかわりを注文する。

「つまり、管理局の機械の修理を5人でまわしている？」

「いや、今はほとんどそういうことはない。それでも見てきた書類の数は俺やお前等がやってきた量とは段違いだ。特に俺が入局3年目くらいまではそういった機器のインフラは後回しされ、工機課に集約させてなんとかやってたからな。まあ、昔は5人じゃなかったが」

『……………』

他の3人は言葉を出すことができなかった。

「だから、そのときは“困ったときは工機課の機械士^{マシンナー}へ”なんて言っただけなんだ」

今はこの言葉なんて、俺より上の人間しか知らんだろうなあ。そもそも機械士なんて工機課にしかいねえのに。と感慨深く息を漏らす。

「な、なんとなく、わかりました。機械士の凄さが。でも、そんな凄惨な課ならどうして私たちが知らないんですやるか？」

「そりゃ、おめエらが若いからだろ。あいつらは基本末端だし、メ

カニツクの下に付いて、目立たず、細々と忠実に動くからな。ましてや魔導師なんて、入局入隊してから退役するまで会うこともないだろう。まあ、お前等の知らないところで、お前等がやらない仕事をやってる『縁の下の力持ち』の代表だな」

「はあ」

「しかし、その修理の速さと記憶力はちよいと異常だな。それは個人的なものだろう。それに感情表現もだ」

また、一口ご飯を運び飲み込んだ後、

「あいつらは修理する過程で使う人間のこともよく観察するからな。人間を嫌いになることなんて皆無だ」

(「というと、あの丁寧口調も性格か。基本、あの速さや記憶力は個人に能力ということやねえ」)

はやては指をあごにおいて何度か頷く。

「どうだ、機械士についてすこしは詳しくなったか？」

「あ、はい。大変参考になりました」

ゲンヤに会う前とは随分と機械士について知ることができて、はやて、ラインは満足そうだ。

いざ、2人は食事を再開しようとしたときに、連絡が入る。

「うん、うん。了解や。すぐ戻るから、対策会議しよ。ちょうど捜査の助けも借りられたところやから」

（機械士についても……コタロウさんについてはまだ不明なところがあるけど）

「うん。そんなら、また後で」

そう言って通信をきる。

「なにか、進展ですか？」

「うん。事件の犯人の手がかりがちょっとな」

一度、機械士については頭の片隅に追いやり、頭を切り替える。

「というわけで、すみませんナカジマ三佐。私はこれで失礼させていただきます」

「おオ」

はやては会計をしようとして伝票に手を伸ばしたが、ゲンヤがそれを制して先にとり、

「そ、そんな」

「さつさと言ってるやんな。部下が待つてるんだろっ?」

立ち上がっているはやてに挑戦的な上目遣いを向ける。

「……はい。ギンガはまた、私かフェイトちゃんから連絡するな?」

「はい。お待ちしています」

「ほないこか、リイン?」

「はいです」

そういつて2人は足早に食堂を後にした。

「……あ」

「お父さん、どうしたんです?」

「いや、機械士について言い忘れたことがあった」

「え?」

「まあ、事件にや、なあんも関係ないから、いいといえればいいな」

ゲンヤはごくりとお茶を一口、言葉一つを飲み込んだ。

第12話 『言い忘れ』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

どうもすみませんでした。

あれですよね、あやまった理由ですよね？

エー、本当なら、今回で海鳴への出張任務へ行くはずでした。ある程度、機械士についてお話した上で。

まあ、文章量的にノルマ達成してしまったので、ここで打ち切らせていただいた次第です。

さて、いかがでしたでしょうか。機械士の特徴。

第1話でお話したとおりでしたでしょうか？

工機課の人間は『局の修理屋』なのです。

修理の技術は下積みあった故に自然に身に付いたものです。

それ以外は彼の性格や能力です。

能力の詳細はまた、じっくりと。

次に、ストールですね。

あれは彼のデバイス『傘』の生地部分です。

これまたお話の中で出てきましたね。

デバイスについてもまた、じっくりと。

(秘密にしすぎじゃない?)

そ、そんなことないって!

機械士とは何か話したじゃない。

うん。大丈夫。

気にしない!!

えー、ここからは少々、真面目に謝ります。

カートリッジシステムについて修正しました。

『弾倉交換機能』ではなく

『弾式魔力供給機能』にしました。

弾倉というのは弾が入っているケースのようなもので、

これごと交換するってなんなの?

と、読み直して気付きました。

ティアナのリロード処理こそ、弾倉交換ですね。

薬莢を交換することはこちらのほうが言いかなと思ひ修正しました。

どうも、申し訳ありませんでした。

真面目切り替え。

さてさて、それでは次回の予告でも。

次回こそは海鳴への出張任務へ移っていきます。

コタロウは任務に参加? 不参加?

……答えは予測が付くかと思いますが、一応。

今回は登場人物が多くなるため、今回以上に、場面転換が多くなり、読みづらくなるかもしれませんが、読んでいただければ、ありがたいです。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております。

追記：

Honn^{ホッ}さん、ご感想ありがとうございます！

そんな、一気読みしていただかなくても。

(ストックが無くて頭を下げることしかできません)

第13話 『バンソウコウとキィ』（前書き）

さて、今回から出張編です。

パート分割？

いえいえ、そのようなことは致しません。

そして、前回お話したとおり、場面展開が多く読みづらいいとは思いますが、よろしく願います。

それでは、本編をどうぞ〜

第13話 『バンソウコウとキイ』

機動六課に関わらず個人訓練というものは、ひとりひとりにかかる体力の消耗、精神的な負担が多いため、それ相応の回復する場が必要なのは教導官の中で知らないものはない。

その中で、的確な訓練を生徒たちに与えることが教導官の腕の見せ所のひとつでもある。

しかし休暇と等しくなってしまうては生徒たちは何もできなくなってしまう。

生徒といっても局員なのだ。身体を鍛えるだけが仕事ではない。教導官なのは自分の生徒たちに対し、午前中は事務処理をさせることによって、回復と仕事の両立を図っていた。

「ん？ どうしたの、はやてちゃん」

午後に入ってすぐ、彼女に通信が入る。

「……………それ本当？ うん、こっちから連絡しておくね」

その後、何回か相槌を打ち、「了解。じゃあまた後で」と返事した後、通信をきった。

(ジュエルシードにドクター・ジェイル・スカリエツィ……これから多分、事件の真相が分かってくる毎に、任務も難しくなってくる。しっかりと、教導がなくちゃ)

モニターから視線をあげて、新人たちを見る。

フェイト主催で行われたこの前の対策会議で、今回のレリックにジェイル・スカリエツィという人物が浮上してきた。

その男はレリックの事件に関わらず、ロストログア関連事件を始めとして数え切れなくらいの罪状で超広域指名手配されている一級搜索指定の次元犯罪者というのだ。

そして、フェイトが以前から追っている人物でもある。

おそらく、あらゆる証拠を集めればこの男に落ち着くことは間違いないだろうが、情報はまだまだ足りない。

その真相究明、解決に向けて新人たちの実力を確実に向上させなければならぬと、彼女は心に強く込め、ひとつ息をついた。

(でも、それには確実に前にある任務をこなしていくことが大事だよな)

そうして先程はやてから受けた新しい任務に、ふふつと微笑む。

(今回の任務で少しでも場数を踏んで、もっと六課の繋がりを強くできたらいいな)

なのははメールを1つ、とある2名に送信してから、新人たちに

任務を伝えるために立ち上がった。

「え、派遣任務、ですか？」

「しかも異世界に？」

「うん。決定事項。緊急出勤が無ければ2時間後に出発だそうだから」

なのはは2人に目配せする。

「今の作業を片付けたら、出勤準備をしておいてね？」

スバルとティアナは返事をして、事務仕事のペースを上げた。

一方、それはキャラ、エリオにもフェイトから連絡を受けていた。

「レリックやガジェットの出現なんでしょうか？」

「まだ、分からないけど、ロストロギア関連ではあるみたいだね」

「はい」

転送先まではヘリで向かうらしく、連絡を聞いた2人はすこし緊張気味である。

「まあ、前線メンバー全員出動だし、いつもの任務とあまり変わらないよ。エリオもキャラも平常心だね」

フェイトはその緊張を解くように努め、

『はい！』

それに成功したようだ。

「じゃ、準備して屋上ヘリポートへ集合ね？」

『はい！ フェイトさん』

その出張先へ行くメンバーは本当に前線メンバーほとんどで、現在へりには、はやて、フェイト、そしてなのはたち隊長陣と副隊長陣のヴォルケンリッターと新人たちといった大所帯であった。ヴォルケンリッターのザフィーラだけが六課に残って守護に徹するという。

そして、その行き先が前線メンバーのほとんどを向かわせる理由のひとつでもある。

ティアナが行き先を質問すると、

「第97管理外世界、現地惑星名称『地球』」

それって。と、新人たちは声を漏らす。

「その星のちいさな島国の小さな町、日本の海鳴市、ロストロギア

はそこに出現したそうや」

「地球って、フェイトさんが昔住んでた……」

「うん」

「私と、はやて隊長はその生まれ」

はやても頷くと、

「私たちは6年ほど過ごしたな」

「うん。向こうに帰るの久しぶり」

シグナムとシャルマルも懐かしそうに頷いた。

隊長たちがそこから談笑し始める中、新人たちはつい先日自分たちの出身について話していたことを思い出し、こちらも話しに花が咲いていた。

ひととおり話が落ち着いたところで、キャラロが行き先に付いてモニタを開く。

「第97管理外世界、文化レベルB^ビ」

「魔法文化なし。次元移動手段なし」

あれ？ と、ティアナは首を傾げ、

「魔法文化ないの？」

「ないよ。ウチのお父さんも魔力ゼロだし」

彼女の独り言にスバルが答える。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

うん。と彼女が頷くと、それがティアナの疑問になる。

「じゃあ、なんでそんな世界から、なのはさんとか八神部隊長みたいなオーバースランク魔導師が」

「突然変異というか、たまたまな感じかな？」

ひょっこりとはやてが会話に参加してきてティアナは驚いて、急いで謝罪するが、

「ええよ、べつに」

特に気にもせず、ひらひらと手を振って返した。

「私も、はやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね」

なのはの簡素な経緯に彼女も頷くと、

「あ、シャマルありがとです〜!」

その話の向こう側では、ラインとシャマルのやり取りが聞こえてきた。

「ラインさん、その服って?」

キャラがシャマルの持っているものに目をやると、自分にも少し小さく見える服がそこにあった。

「はやてちゃんの小さい頃のおさがりです」

「あ、いえ、そうではなく……」

「なんか、普通の人のサイズだなと」

エリオとキャラがどうもその服が何であるのかの理由がわからない顔をしていると、ラインは、ああと気付く。

「フォワードの皆にはみせたこと無かったですね?」

人差し指を口に当てにっこり笑うと、

「システムスイッチ・アウトフレーム・フルサイズ！」

そう唱えると、彼女の全身が光り、全員の目の前に1人の少女が現れた。

『おオ！』

新人たちは大きく目を見開いて驚く。

「つと。一応これくらいのサイズにもなれるですよ？」

「……でかつ」

「いや、それでもちっちゃいけど」

「普通の女の子のサイズですね」

「向こうの世界にはリンサイズの間人も、ふわふわ飛んでる人間もいねエからな」

ミッドにもそのような人間はいないと思います。とティアナは苦笑いしながらヴィータにつきこみを入れ、スバルもそれに同意する。

「だいたい、エリオやキャロと同じくらいですかね？」

「ですね」

「リンさん可愛いです」

このような場に少年少女3人が談笑しているのはすこし異様だと思いつながら、ふとスバルはもう1つ思うところがあった。

「……リイン曹長。そのサイズでいたほうが便利じゃないんですか？」

「こっちの姿は燃費と魔力効率があんまり良くないんですよ。コンパクトサイズで飛んでるほうが楽チンなんです」

なるほど確かに。とリインの説明を聞いて頷いた。

「そうすると、コレはしばらくお別れですねえ」

彼女は移動寝室から何かを取り出し、しょうがないという顔をしている。

「コレってなんですか？」

「これですよ」

スバルはリインからそれを受け取り、ティアナはスバルの手のひらから摘み上げた。

ヴィータも気になってか彼女から1つ貰う。

「コタロウさんが作ってくれた食器です」

『……………へ？』

「……………は？」

よくできてるでしょう？ と、少女は胸を張る。

スバルの手にはナイフとフォーク、ティアナの手にはスプーン、
ヴィータの手には箸があった。

始めはおもちゃかと思ったが、そんなことはない。しっかりと花
と蔓つるの装飾が施されているのだ。

「しかもこれ見てください」

どこから出したかわからないループをスバルに渡して、彼女はそ
れを使ってしげりと見ると柄えの裏側にアルファベットで、

『リインフォース・ツヴァイ』

と、彫られていた。

『……………』

気付けばエリオとキャロも覗き込んでいる。

「……なあ、リイン」

「なんです？」

「この前、ナカジマ三佐から聞いてきたこと……」

「それは私が教えるよ」

はやては以前ゲンヤから教えてもらったことをしまっていた頭の引き出しから既に取り出していた。

「……というわけや。つまりところ、紹介情報のままなんよ」
『……………』

はやてが説明し終わった後、シグナムとシャマルでさえあいた口がふさがらないでいた。

「ヴィータにみせた『記憶力』。私や皆に見せた修理の『速さ』は別物みたいやけど、それ以外のキーの操作や、修理そのものの技術は機械士マシナリー本来の能力みたいやね」

うんうんとラインも頷いている。

「まあ、悪い人じゃないし、新人たちからみた私たちみたいな人ということやな」

自分を自慢するという意味やないんやけど。と息をつく。

「早い話、技術について隊長陣含め全員、分野が違うので驚いていただけというわけですよ」

「素直に凄いと思って、気にしないことやね」

たしかに、ここにいる全員は魔導師や教育者として仕事をこなすことが多く、技術者としてその現場に勤めたことはない。

そう考えると、なんとなく、なんとなく納得することができたため心に余裕が作ることができた。

「……そういえば、今日コタロウさんを見ていませんね」
「そ、そうだね」

そしてキャロがゆっくりと、この話題の終わりに足を進めるとスバルもそれにのる。

「まあ、あの人はいつも私たちといるけど、前線メンバーじゃないし」

「技術者、機械士ですもんね」

ティアナとエリオもついてくる。

「あー、コタロウさんは今日、お休みやよ。休暇届けは先日もろてる」

「たしか、外出届けも出ていましたですねえ」

大きくなったラインがモニターを出す。

「『コタロウ・カギネ三等陸士。休暇願』」

別に読まなくてもいいんじゃない。とまわりは思っが、話の流れ上、特に重要でない会話のような感覚で聞くことにする。

「『外出先、第97管理外世界、現地惑星名称『地球』の日本』」
『……………』

ラインもそこまで言った後、

『ハイ？』

そろえて声の上擦る。

そこで初めて休暇の外出先を知った。

はやてとラインは彼から受け取った時、彼の仕事そのものに問題ないことが既に周知の事実の領域に達していたため、中身を確認せずには承したのだ。

次に任意記載項目である外出用件に記載が見られたため目を移す。

そこには、

「え、えと、えと『正義の味方を拝見してきます』」

『……………』

またも少しの無言。

『ハイイ！？』

凄いと思わなくても、全員気になって仕方が無かった。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コ

第13話 　『バンソウコウとキイ』

ここ海鳴市は海に面した街で、さらには山や丘もあるため、散歩やサイクリングには事欠かない場所である。

特に今の季節、お昼に差し掛かる2時間くらい前は気温もちょうど良く、ぽかぽかと陽気なので、さらに外出する誘惑に勝てない人間を増やしていた。

「ん〜！ 　本当に今日は良い天気ねえ」

「それは今日何回目だあ、エイミィ？」

エイミィは自転車 　前輪は1つで後輪は3輪、後ろに2席備え付けられている電動3人乗り 　を漕いでいるため、思い切り腕を上げてることができず、ぐっと肩に力を入れて寝起きのネコのよう
に背筋を伸ばす。

彼女は今、海の青さと山の深緑のどちらも楽しめる道を進んでいた。

「アルフは良い天気だと思わないのお？」

自分の前カゴに目を落とすと、

「…………へ？ 気持ちいい天気だけど？」

こちらはちらりと犬歯を覗かせて、思い切り身体全体使って伸ばしていた。カゴの中なので、すこし窮屈そうであるが、それはとるに足りないことのようにだ。

「というか、そのフォームの時にしゃべらないの」

「なんだよお、しゃべりかけてきたのはエイミィじゃんかよお。な

あ、カレル、リエラ？」

「……………」

紅い犬は後ろの座席に座っている2人に聞こえるように声を出すが、反応はない。

不思議に思ってエイミィは後ろを向くと、

『すう、すう』

後ろの女の子が前の男の子に抱きつくかたちで寝息を立てて、ぐっすりと眠っていた。

「どつりで静かで背中が重かった」

男の子は頭を彼女の背中につけて寝息を立てている。

(この天気じゃあ、負けちゃうよねえ)

「まあ、この天気」

「アルフ、前、前！」

エイミィは電動4輪の特性を大いに使って、いつでも安全に止まれる速さで走行していると向こうから歩行者が歩いてくるのが見え、後ろに顔を向けているアルフに声をかける。

この世界のほとんどの動物はしゃべらないのだ。

アルフは出す言葉を飲み込みこの世界の動物に成りきる。

ワン！ とほえると向こうがこちらに気づき、始めにアルフと目を合わせた後、エイミィと目が合う。

(こんな晴れてるのに、『傘』?)

そんなことを思いながら彼女がぺこりと頭を下げ、その先のゆるいカーブを曲がるためにハンドルを操作しようとしたとき、彼の背後からいきなり自転車マウンテンバイクが飛び出してきた。

「　　っ！！」

「このッ！！」

エイミーはすぐに目を瞑つむってブレーキをかけ　後ろの2人はびっくりと目を覚ます　アルフはカゴから出ようとし、相手もすぐにブレーキをかけるが、間に合いそうも無い。

その時、アルフは目を見開き、エイミーはごちんという音だけが聞こえた。

「そのような速さは危険だと思います」

ゆっくりとエイミーが目を開くと、まず『傘』が見え、少しずつ視線を上げると、次に相手自転車のハンドルを右手で支えている男性の背中が目に入った。

その後、エイミーは相手の自転車乗りは今日始めてこの土地に来て、思わず魔が差しスピードを出しすぎてしまったことを1人の男性に話しているところを聞き、彼に一言、自分と2人の子どもたちに一言謝った後、ヘルメットを被かぶりなおしてゆっくり自転車を走らせていった。

「あの、大丈夫ですか？」

「はい。あの方と自転車は特になんとも無さそうです」

「え〜と、いえ、貴方が」

まだ、彼女は彼の背後しか見ていない。

「私が、ですか？ はい。大丈夫です」
「……………」

そう言ってくるり男性は振り向くと、

「ぜ、全然大丈夫そうにみえないんですけど……………」

無理矢理自転車を止めたため、相手の身が乗り出さないよう頭で相手の頭 ヘルメット付き を抑えたからか額ひたいから血が出ていた。

血は鼻背びやくで2筋に分かれ口まで達した後、その男性はぺろりとそれを舐める。

「あ、本当だ」

「えと、すぐに病院へ！」

「いえ、コレくらいなら大丈夫です」

その男性はつなぎを着ており、ジイと前を開けると中のポケットからちいさな傷薬とバンソウコウを取り出す。

さらに、彼はきよろきよろと辺りを見回して近くにベンチを見つけて腰掛けると、傷薬を額に吹き付け、特徴的である寝ぼけ目をさ

らに細め眉根を寄せて顔を歪ゆがませた。

エイミィは慌てて近づき自転車を止め、自分のハンカチを取り出して相手の額を拭う。

「あ。ありがとうございます」

「いえ、これくらい」

しばらくそつと押さえている間、アルフは子ども2人の面倒を見なければならず、ペロペロと舐めたり、じゃれたりしてかまっている。

「それ、貸してくださいませんか？」

男性がじつとバンソウコウとにらめっこしているのを見て、声を掛けた。

「よろしいのですか？」

「……貼はったとしても、お礼には足りないくらいです。あの、本当に大丈夫ですか？」

これもまたそつと、そして相手が顔を歪ませないようにバンソウコウを貼って、いたわるように相手の顔を覗き込むと、

「大丈夫です」

自分でも確かめるように右手でおずおずと額を撫でて、問題ないことを確認した。

「え、と、後でちゃんと病院へ行ってみてもらったほうがいいと思います」

彼女は自転車に乗り、なにかお礼するものは無いかと自分のポケットを探したりするが、散歩ということで特に何も持ち合わせておらず、申し訳ない気持ちも込めて心配そうにもう一度彼の額にそつと手を当て声を掛けると、相手はこくりと頷く。

「……………」

頷いた後、彼は何故か無言で前カゴにいるアルフをじっと見ていた。

(どうしたんだろう?)

「うちのアルフがどうかしました?」

そういうと、相手はまた眉根を寄せる。

「……そのアルフさん、ぶつかりそうになった時、しゃべってませんでした？」

エイミィは思わず彼の額に当てていたほうの手に力を入れてしまった。

コタロウはしばらく海鳴市の海辺や山などを中心に歩き、休暇を満喫した。

(ジャンとロビンの言ったとおり、本当に自然が楽しめる場所だなあ。また、機会があったら来ようかな)

そんなことを思い、初めていく土地では迷うという自分の特性も

楽しみの1つとし、人に道を聞きながら、地図を見ながら、時々額を擦りながら午前と午後　昼食はミッドチルダで購入した簡易食料　を過ごす。

そして、現在は本日の最優先事項をクリアするためにとある8階建てのデパートに来ていた。

(よし、時間も20分前。充分間に合う時間だ)

ゆっくりエスカレーターで行こうと2階に差し掛かったとき、

「うわぁん」

きよろきよろと辺りを見回した後、大きな声で泣く少年がいた。

(迷子、かな?)

彼は近づいて声を掛けるよ、

「あの、どうしましたか?」

「う?　ぐす、ぐすん、うわぁあん」

さらに大きな声で泣き出してしまった。

「ふむ」

しかし、彼は慌てる様子は無く、今度はしゃがんで少年と同じ視線になり、右腿みぎまたのポケットから袋で包まれているマシユマロを一つ取り出す。

「マシユマロ、食べますか？」

そうすると、少年は声を上げることは無くなり、目の前のお菓子をみて、

「あ、う。し、知らない人から食べ物貰っちゃダメってお母さんに言われた」

誘いを断る。

「……なるほど」

(しっかりしてるなあ)

彼は感心した後、マシユマロを持ったまま右手を自分の胸におい

て、

「私の名前はカギネと申します」

「カギ、ネ？」

こくりと彼は頷き、ベルトに繋がれている鎖から宿舍自室の鍵を取り出し、少年の目の前に出す。

「えーと。鍵^{カギ}、キイのことですね」

「きー？」

もう一度、彼は頷く。

「きー、ちゃん？」

眉を寄せるが頷き、

「貴方のお名前は？」

「僕はケンタ、南^{みなみ}ケンタ」

「南さんですね？」

今度は向こうが「うん」と頷く。

「それではもうお互い知り合いですね？ マシユマロ、食べますか？」

もう一度、少年は頷き、マシユマロを受け取った。

「あの、君の」

「アンタ、なにしてんの？」

相手がぱくりとマシユマロを口に含んだとき、自分に影が差したので見上げると、1人は金髪ショートカットで腕を組んで仁王立ちをし、1人は濡烏ぬれからすロングで両手を胸元で握る女性がこちらを見下ろしていた。

「これくらい買えば大丈夫でしょ」
「そうだね、アリサちゃん」

アリサはしげりと相手がトランクに入れた買い物袋の数々を見て、

「しかし、すずかは相変わらず運動神経抜群というか……」

彼女1人が運んできた買い物袋の数にちいさく息をつく。

「えへへ」

まあ、これくらいは。と、こちらも息をついた。

「でも、どうする？ 一応、ドライアイスも付けてるから問題ないけど、時間が余ったわね」

「はやてちゃんは後1時間くらいかかりそうって言ってたし」

うーん。と口に指を当てて考え込む。

「……あ」

「ん、どうしたの？」

「コップとか、大丈夫？」

ああ。と頷く。

「確かに人数多いし外でやるんだから、皿も足りないわねえ」

アリサは夕食のバーベキューをやるために、材料は充分そろえたが、肝心の飲み物を注ぐコップや料理を盛る皿がないことに気がついた。

「行こっか」

すずかは「うん」と頷き、先に行くアリサの隣に並んで、自分の親友の教え子たちの第一印象からどのような人物かを話しながらもう一度デパートへ入っていった。

そして2階へ上がり、一度大きく店内を見回して時間を少し潰した後、必要なもののレジを済ませ、下りのエスカレータへ向かおうとした時、

「うわァん」

1人の子どもの泣き声が上りのエスカレータの方から聞こえた。幼いからか泣き声から男の子か女の子か分からない。

幸い、2人は上りのエスカレータの近くにいたため、お互い目を

見合わせ、そちらのほうへ向かう。

「あの子だ」

「……迷子、だよな」

姿を見ると男の子なのは一目瞭然で両手で両目を押さえて泣いていた。

2人は近づこうとするが、

「あの、どうしましたか？」

男性が先に少年にしゃべりかけるのが目に入る。

一瞬その少年は彼の声に反応するがまた大きく泣き出した。

「えと、大丈夫かな？」

ぴたりと2人は足を止めて様子と見ていると、今度は彼はしゃがみこみお菓子を取り出し、少年にあげようとしている。

「でも、あいつ怪しくない？」

その男性は背後で顔は見えないが、生まれつきなのか寝癖なのか

分からない髪形に緑白色ろくぱくの作業つなぎを着て、黒いブーツを履き、
だらりとした左手にだけ軍手をつけ、皮製のベルトをしている左腰
には鳶色とびいろの『傘』を差している大分異様な格好だ。

「確かに」

すずかは思い切り深く頷く。

「最近物騒って言うし」

「そう、だね」

ぎゅつと2人は拳を握って、再度目を見合わせた後、そのしゃが
んでいる男性に近づこうとする。その間に彼は少年に対し自己紹介
をしていたが、脇から聞こえた通行人の会話によって聞こえず、鍵
を少年に見せ、

「キイのことですね」

「きー？」

と、説明してるのが伺えた。

どうも彼は『キイ』という特殊な名前で少年の心を開かせること
に成功したらしく、相手から南ケンタという名前を聞きだし、お菓
子も受け取らせていた。

「あの、君の」
「アンタ、なにしてんの？」

アリサは腕を組み、すずかは両手を握って身構え見下ろすと、髪型によらず綺麗な黒髪をもち、その髪の間隙からまるで起きたばかりのような寝ぼけ目の『キィ』と名乗る、額に『バンソウコウ』を付けた男性がこちらを見上げた。

第13話 『パンソウコウとキイ』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

前書きの通り、今回から海鳴出張です。

ん〜、というより、コタロウ休暇編？ ですかね。

定休ではなく、休暇願というかたちをとらせていただきました。

すばりどころの“ご都合主義！”です。

（ご都合主義、便利だなあ）

今回は場面展開が多くサブタイトル出すまでおよそ9kbyteも使ってしまった。

その後は10kbyteでなんとかカバー。

私は10kで納めることをノルマとしているもので。

一挙2話分くらいの勢いです。

特に筆が進んだわけではありませんよ？

えんらい時間かかってますから！

サブタイトル出して、終わろうとしていたくらいです。

他の小説家さんたちのペースと量に驚きです。

ですが、量を重ねると私の文才では読みづらくなるのでやりませんが。

では何故、分けなかったのか。

サブタイトルが思いつかなかったから！！

サブタイトルをつけるのは前もちよろりと書きましたが、時々、すんなり出てこないときがあります。

自分のセンスのなさですね。

精進します。

この休暇で彼の性格が少しでも分かっていたらただけなら鼓舞します。

そして、どこかに足の小指をぶつけます。

さて、本編に登場した自転車ですが、ちゃんと現存するものを採用していますよお

その名も「カルガモ」です。

電動付きがあるのか分かりませんが、あったほうが世のお母さんは便利だと思いつけてみました。

車体の値段は……ご想像にお任せします。

(電動付き4輪自転車ってあるのかなあ)

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております。

追記：

いつぐらいかぶりにやりましょうか。

用語解説

鼻背びはい：あれですよ。鼻の背中です。

眼鏡を鼻背にかけてください。

……これだけ？

最後に

イツキさん、ご感想ありがとうございます！
コルト、ブルズ、ダークは充分魅力的です。
こちらこそ、大変恐縮です。

第14話 『かぎしっぱ』(前書き)

出張編もとい、コタロウの休暇編その2です。

いろいろ、えーと、

キャラ崩壊？

独自設定？

ち、ちがうんじゃないかな？

的なことがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

それでは、本編をどうぞ！

第14話 『かぎしっぱ』

コタロウは自分のほうからしゃべりかける人間ではないことを自覚していたし、自分が相手の感情を読み取ることが苦手であることも自覚していた。

彼が少年ケンタに話しかけたのは泣いていたところから困っていることが明らかで、きよろきよろと辺りを見回してところから何かを探していたのも明らかであったためだ。

そこから瞬時に迷子と予想をつけたのは、とある2人の親友のおかげであることは彼自身疑う余地が無かった。

しかし、自分を今見下ろしている2人の女性に対しては、たとえば一方が威嚇いかくをあらわにした表情であっても、たとえ警戒をあらわにした表情であっても、それを予想することは出来なかったし、

(……誰?)

という疑問のほうが彼の思考の大部分を占めていた。

「アンタ、なにしてんの？」

黙っていると、金髪の女性がもう一度同じ言葉を繰り返した。

(え、えーと。僕は2人のことを知らないし……あ)

彼は女性たちからケンタへ視線を移す。

「南さんのお知り合いの方ですか？」

だったら安心だ。と、思いながら聞いてみたが、

「ううん。知らない人」

彼は一度アリサとすずかの顔を見比べた後、ふるふると首を振る。

(……ということとは)

「ふむ」

コタロウは少し視線を落として考え、結論付ける。

「失礼ですが、人違いではありませんか？」

「……………」

2人の女性は黙り込み、金髪の女性の片眉がぴくりとつりあがるのを彼は確認したが、特に気にはしなかった。

少年に視線を戻し、

「あの、南さんの」

「アタシはアンタに聞いてるのよ」

保護者、例えばお母さんやお父さんはどこに？ と、聞こうとするが遮られ、さらに女性の発言が自分に向けられていることを知った。

「……………私に、ですか？」

もう一度、見上げると金髪の女性は大きく、濡烏ぬれからいすの女性は小さく頷く。

（僕が何をしているか？ 進行形という意味で捉えていいのかな。南さんには質問できていないし、お菓子のことは過去形。それなら……………）

彼は視線を落として、自分の足元を見た後、

「しゃがんでいます」

『……………』

濡烏の女性は自分の頬をぽりぽり搔いている間、金髪の女性は目を瞑^{つむ}って組んでいた腕を解いて隣の女性の方を向き、一方の手で彼女の肩にポンと、もう一方の手でコタロウを指差してから目を開き、

「すずか、コイツ、投げてよし」

「ええ!？」

すずかという女性は驚く。

一方、コタロウは

(いろいろな現場の出向先で力を振るわれたことあるけど、知らない人から投げられるのは初めてかもしれない)

と、出向先に時々見られる、不条理な叱り方 本人は自覚なし
をする人間がいること知っていたため、そのようなことを考えていた。

魔法少女リリカルなのはStrikers

〜困った時の機械ネ

アリサ・バニングスと月村すずかが大学に進学したとき、高校のときからささやかれていた人気はさらに高まり、広がりを見せた。

大学に在学する学生たちは彼女たち2人のことをお金持ちである親の七光りのお嬢様程度にしか知らないでいたが、入学して1月もたたないうちに、2人はそのような人物ではなく、上級生顔負けの知性を持ち、しっかりとした意志、思考を持ち合わせていることを知った。

もし、そのような人物が1人であれば、多くの場合一匹狼になっ
てしまいがちであるが、彼女たちは2人で、かつ互いが親友であることは誰の目にも明らかであり、持ち合わせの社交性から、男女関係無く人気が高かった。

アリサは小学生の頃の気が強い性格は幾分か落ち着きを見せてはいるが、真っ直ぐなところは変わること無く、彼女の瞳は常に自信と英気に満ち溢れ、容姿端麗さも相まって、異性からの告白が後を絶たなかった。

今日も午前中に一人の男性から告白を受け、断ってきたことは余談である。

対してすずかは小学生の頃の物静かで温厚な性格はそのままに、大和撫子という雰囲気になさわしい女性に成長していた。彼女もアリサに負けない容姿をもち、同様に異性からの告白が後を絶たないが、見た目からアリサとは違い、食い下がって強引に付き合おうとする男性も多い。しかし、そのときは高校生のときから習い始めた

護身術を駆使して、やんわりとあしらっていた。

昨日の夜、車に乗る前に数人の男性に言い寄られたが、何事も無く「ただいま」と、家のベルを鳴らしたのは余談である。

「つまり、私の風体ふうたいが周りにそぐわず、南さんみなさんに対し危害を加えるかもしれない怪しい人物と思ったわけですか？」

「そうよ」

「えと、はい」

2人は今、とあるデパートの2階で『キィ』という男性と向き合っていた。

「ふむ」

彼は少年にマシユマロの次に飴をあげた後、立ち上がって少し考えてこちらに視線を向ける。

「偏見です」

「そうね。で、アンタはこの子が迷子かどうか確かめていたわけ？」

「はい」

「じっくりとキィは頷く。

「えと、迷子だと思いますよ?」

迷子センターって何階だっけ? と、幾分威嚇を抑えたアリサはエレベーターの各階紹介をみて確かめに行く。

「それは聞いてみないと分かりません」

彼はしゃがみこみ、

「南さんの保護者、例えばお母さんやお父さんはどこ?」
「お母さん、いなくなっちゃった」

またぐすりとぐずつく。

「ふむ。『いなくなっちゃった』ですか」

5階だつてさ。と、アリサは戻ってきた。

「なにしてんの?」

「え、迷子かどうか確かめてる?」

「さすがは彼の行動を疑問符つきで答え、アリサは訝しむ。

「別にそんなの」

「ということは、お母さんが迷子なのですか？」

『……………』

アリサとさすがはぱちくりと数回瞬きをすると、キイは立ち上がり、

「南さんのお母さんが迷子だそうです」

少年の頷きのもと、彼はそう答えた。

「……………はあ」

「ま、まあ、どちらでも連れて行くことは変わらないからいいんじゃない？」

心情としては探してあげたいが、それよりも階にある迷子センターへ連れて行くことを優先させる。

「じゃあ、それは私たちがやるわ。アンタはここまで」
「わかりました」

キイが特に執着無く答えたことにアリサはすこし肩透かしを覚え、さらに自分が彼に対し偏見を持っていたことにもすこし後ろめたさを感じていた。

「……悪かったわね、疑ったりして」

「いえ、構いません」

すずかもぺこりと頭を下げた後、

「じゃあ、行きましようか、ケンタ君？」

少年の手を引こうとするが、彼は立ち去ろうとするキイを追いかけつなぎを掴み、

「ん？」

「知らない人にはついて行っちゃダメってお母さんが言った」

『……』

自分を心配してくれる人がいるためか幾分か元気になったケンタの言うことはもっともである。

「私はアリサ、アリサ・バニングス」

「私は月村すずか」

先程、彼女たちの親友の教え子とあわせて2度目の自己紹介をする、

「僕はケンタ、南ケンタ。で、きーちゃん」

少年の紹介に、キイはこくりと頷いた。

ケンタがキイの左腕を話さなかったこともあり、アリサとすずか
は一緒に5階の迷子センターに向かい、エスカレータを使って3階
へ上がったとき、キイはそのまま4階へ上がるうとせず、フロアを
ある程度見渡せる位置に立って、

「南ケンタさんのお母さんはいらっしやいませんかー！」

大きな声で彼は呼びかけた。

これには少年と本人以外、びっくりしてキイのほうを向く。
そして、しばらく彼はぼんやりとそこに立っていた。

「アンタ、なにや、ちがうわね、ケンタ君を連れて行くんじゃないの?」

なにやってんの? などと聞くと「立っています」なんて答えが返ってきてそうなので、すこし内容を変えて質問を試みる。

「はい。ですが、もし5階へ行く前に見つかれば、そのほうが良いと思います」

『……………』

アリサとすずかは依然としてこの男性の雰囲気は掴めずにいた。

極論から言ってしまうえば、彼女たちには付き合う男性以前に、男性の知り合いが明らかに少ない。

しかし、口を聞いた男性は少なくなく、寧ろ多いが、その男性のどれにも彼は当てはまらないのだ。

自分より年下なのは見た目から判断できたが、はたして中学生、あるいは高校生がつかないなんてきくだろうか? と思ってしまう。

まだ、知り合って 実際には本名は知らない 10分と経っていないため当然であれば当然であるが、大体二言三言会話をすれば雰囲気は掴めるものだ。

だが、

『(キイ)君(って)へん(』

というところぐらいしか掴めない。

付け加えるなら危険性も無いということぐらいである。

「どつやら、いらっしやらないみたいですね」

そういつて2人の方へ戻ってくるキイの表情からは寝ぼけ目のせいか感情も読み取りづらく、何を考えているかも分からない。

そして彼はエスカレーターに乗ったところで、自分を見ていることに気付いたらしく、

「乗らないのですか？」

と首を傾げる。

その掴みどころの無さがアリサをジト目にし、すずかの瞬きの数を増やした

「本当に、ご迷惑おかけしました」

「いえ、見つかって何よりです」

「ケンタ君、お母さん見つかってよかったわね」

「うん！」

程なくして、というより、4階でキイが同様に声を張り上げたとき、5階のエスカレーター降り口からケンタを呼ぶ声が聞こえ、母親を見つけたことが出来た。

少年の母親は迷子センターに伝えたあと、自力で探しに行こうとしていたらしい。

「ほら、ケンタ。お兄さんとお姉さんにお礼を言って」

ケンタはぺこりと礼儀正しく「ありがとうございます」とお辞儀をする。

「御礼も何も出来ずに申し訳ありません」

分かれる際に、お母さんは何度のお辞儀をし、ケンタはぶんぶんと手を振っていた。

キイがそつと左腕を撫でたことに2人は気付くことはなく、

「それでは私はこれで」

彼はぺこりとお辞儀をして、次階へのエレベータへ向かう。

「時間、余ってるわね。7階でお茶でも飲む？」

「そうしよっか」

「……あ、キイもどっ？」

それが自分の社交性からなのか、単なる興味からなのかかわからないが、気付いたときには声が出ていた。

「お断りします」

だが、申し訳なさそうな顔も無く断られたことに疑問を感じたのは自覚があった。

「なによ、誰かと待ち合わせ？」

「いえ、違います」

「だったら別にいいじゃない。2、30分くらい私たちに時間を割いても、帰ることは充分にできるはずよ？」

（アリサちゃんも、興味があるんだ。この人に）

男性としての興味ではなく、人として彼に興味をもったのは自分だけではないとすずかは思い、

「ダメ、かな？」

軽く押しを強くしてみる。女性に対しこの言葉を使ったことは何度かあるが、男性に対しては使ったことがなく、それに気付くのは後のことである。

「ダメです」

「……………」

そして、無表情ににべもなく断られたのは男女ともに初めてであった。

「アンタねえ。これでも学内じゃあ、結構人気のある2人で通ってるのよ？」

久しぶりに気の強さが出てしまい、さらに自慢したくも無い言葉を考えなしに吐いてしまった。
すると彼はゆっくりと首を傾げ、

「お茶を飲むことと、貴女がたの人気に何の関連性が？」

ことさら不思議がる寝ぼけ目の彼に片眉がつりあがったのは、アリサだけではなかった。

「で、何で私たちは屋上の夕方に差し掛かるパラソルの下でオレシジューズなんて飲んでるのかしら、すずか？」
「え、えーと」

それはお互いにムキになってしまったからとは言わない約束にしていた。

一方、視線を移した向こうのほうでは

『たすけてー、ミラクルガオンー!!』

屋上で開催されている本日数回目の約30分ほどのヒーローショーが行われたいた。

ミラクルガオン、正式名称『えいしせき嬰獅石ミラクルガオン』は今年2月から放送されているテレビ番組で、詳細は省かざるを得ないが、正義の味方シリーズの1つである。世界征服を企む悪の軍団から人々を守るといったごく単純なものだ。

現在、彼女たちの位置からはキイの背中しか見えないが、右手を当てて子どもたちと同様に声を上げているのは後姿からでも把握できた。

「私たちの誘いを断つたのもあれが理由だと」

もうジュースの残りも少ないことはミラクルガオンが『ガオンクロー』で敵をやっつけたことを意味していた。

「でも、じ、時間は潰せたんじゃないかなあ」

確かに、まだはやてからの連絡はきていない。

『……………』

ああいうものに熱を持つ人種がいるのは知っていたが、あの場に居ないのを見ると、彼はまた別の人種のようにであり、無駄に時間を潰した可能性を否定できないでいた。

『はあ』

ため息が肯定をしているみたいである。

その間に会場は子どもたちの拍手に包まれ　キイはひらひらと手を振っていた　解散を始めていた。

降り口は彼女たちのいる正面を通り過ぎたところにあるため、全員がそちらに向かって歩き始め、キイは最後尾についている。

彼は帰り際、彼女たちに気付き、

「終わりました」

「みりや分かるわよ」

「見ていたのですか？」

「……すずか、私が許すわ、投げてよし」

「え、えーと？」

キイは雰囲気をつかめない人間であるが、下手したてに出ることも無ければ、馴れ馴れしくすることも無いため、会話自体に不快感は感じなかった。

「で、どうだったのよ、私たちの誘いを断って観たヒーローショーは？」

「はい。大変観るに値するものでした」

座ったら？　と促された後、満足そうな光悦の表情はなく目を細くして、無表情に答える。

「そうはみえないんだけど……」

「あんなのどこがいいの？」

子どもには楽しい催し物であるが、自分たちの年代にはそうは見えない。

アリサはこのような熱を上げる人間の一端を知る機会が無かったため、1つの経験として聞いておくことにする。

「あの人たちは、観ている子どもたちに表情を与えてくれます」

かさりと肩にかけている小さなバッグからチラシを出し、

「私は感情表現が苦手で、同時に相手の感情を表情から読み取ることも難としています」

それに視線を落とす。

「ですが彼は、自身がピンチの時は子どもたちを不安にさせ、勝ったときは笑顔にさせます。それは私にも分かるくらい鮮明です」

観ている最中、彼が何度か前に出て振り向いたのをアリサとすずかは思い出した。

「それに、着ているスーツは各所に綻はらびを修繕した跡がありました。動きが激しいのは観ていれば分かります。きつとあのシヨを何回も行い、綻んだでしょう。胸のマークもそうです、同じ構えをするために跡が出来ていました」

キイはそのチラシのミラクルガオンの写真右下に今日の日付を記載する。

「私は確かに相手の感情を読み取ることは出来ませんが、あのスーツを大事にしていることは間違いなく、それに関わる人たちはその子どもたちのために一生懸命であることを疑いません」

またチラシを折りたたんでバッグにしまっ。

「直接感情は読み取れなくても、スーツという媒体を通せばあの方たちがどのような人物であるかは考察することは出来ます」

そこで、ふうと嘆息をし、

「今日の観光は大変満足のいくものでした」

『……………』

キイの無表情は変わらないが、彼女たちは彼が本当にそう思っていることを雰囲気から察知することが出来た。

「キイ君ってさあ」

その時、すずかの携帯電話が振動し、通話する。

「あ、うん。終わったんだ、分かった、すぐ行くね」

「はやてから？」

「うん。終わったんだって」

そう。とだけ言うと2人は立ち上がった。

「キイ」

「はい」

「アンタ、アドレスは？」

「アドレス？」

「携帯よ、携帯電話」

「電話、ですか？ 先程の月村さんのようなものでしたら、持ち合わせておりません」

「持ってないの？ じゃあ、パソコンのアドレスは」

「メールアドレスということでしょうか？ でしたらあります」

キイが教えるのかと思ったがそのような行動はせず、ぽけりとアリサを見上げるので、我慢がいかず、

「キイ、紙とペン。早く、急いでるんだから」
「はあ」

ごそりと胸ポケットからメモ帳とペンを取り出すと奪うようにアリサは掴み、さらさらとメモ帳の最後のページにアドレスを書いていく。

「あ、アリサちゃん、私も」

その後、すずかもその下に記載する。

「いい？ 絶対連絡するのよ」
「うん、絶対ね」
「はあ」

彼が首を傾げるのを気にもしないで、早足に屋上から出て行った。

「なんの連絡を？」

ひとまず、飲み物を飲んでから次の行動に移そうと、キイはカウンターに向かった。

ティアナとスバルはなのはの両親が喫茶店を営んでいることに驚いたが、その母親を見てさらに驚いた。

「お母さん若っ！」

「本当だ」

彼女たちが啞然とするなか、なのはとリインは久しぶりの再会に声を弾ませてている。

店内では不快にならない程度にラジオ流れる中 週に数回夕方にラジオを流し、それ以外はクラシカルなレコードを流す 奥から若い男性と女性が出てきた。

「お父さん、お姉ちゃん！」

お父さんも大変若く見える。

なのはは自分の後ろでどつという態度を取って良いか分からないでいる新人たちに気づき、

「この子たち、私の生徒」

新人たちに挨拶する機会を与える。

「こんにちは。いらっしやい」

「あ、はい！」

「こんにちは」

その後、なのははここに来る前に電話で話した内容に心配そうな顔をして、

「でも、本当に大丈夫なの？」

「うん。予約分は用意してるし、ピークは過ぎたからなんとか大丈夫なんだけどね」

「明日、朝一で来てもらおう予定さ」

そうなんだあ。と依然として表情は変わらずにいた。

「ごめんね、なのは。おみやげ用意できなくて、今日はちょっと」
「ううん。気にしないで、オーヴンが故障しちゃったんだもの仕方ないよ」

彼女の表情の原因はまさにそれで、この喫茶店『翠屋』みどりやの洋菓子
の仕上げを行うオーヴンが壊れてしまったらしいのだ。
突然熱を発しなくなり、すぐに修理の連絡をしたが、来るのは朝
一番に来るといったものだった。

「フェイトちゃんと待ち合わせ中なんだけど、いても大丈夫かな？」
「もちろん」

「コーヒーと紅茶だけは作っておいたから持っていくといい」

「お父さん、ありがとう」

「ささ、君たちもお茶を飲んでゆっくりしていきなさい」

お茶うけはクッキーしかないんだ。と、なのはの父親は申し訳な
さそうにいう。

「んもう、大丈夫だって、私たちは本当についでだったんだから。
お父さんそんなに気を落とさないで」

なのははそんなことは気にしなくてよいというように、落ち着か

せる。

「そうよ、お父さん。定期的に検査してしても、起るときは起るんだから」

ねえ、お母さん。となのはの姉美由希は明るくなだめると、母桃子も頷く。

そうして何とか気を取り戻した父士郎は湯を沸かすためにカウンターに入ってしまった。

「えーと……」

桃子は小首を傾げ、それがスバルとティアナに向けられていると気付き、

「えと、スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターです」

「スバルちゃんに、ティアナちゃんね」

「2人ともコーヒーとか紅茶とかいけるかい？」

2人はどちらも大丈夫と頷いた。

「リインちゃんはアーモンドココアよね？」

「はいです」

「じゃあ、2人には元気の出るミルクティね？」

「はい！」

「ありがとうございます」

その後、全員が翠屋の出す紅茶やコーヒーに感銘を受けた後に、

「しかし、2人とも。ウチのなのは先生としてどうだい？ お父さん、向こうの仕事のことはどうもよく分からなくてなあ」

士郎が傍目から見て彼女はどうかと本人を前にして質問した。

「あ、その、すごくいい先生で」

「局でも有名で若いコたちの憧れの的ですよ」

『へえ〜』

聞いているのは士郎だけではないらしく、桃子と美由希は感心する。

「むっ」

そして、それがなのはの頬をぷくりと膨らませた。
なのはと家族のやり取りを見て、いつもの訓練のときとは違い、
私たちと同じような1人の女の人の人に見えたことには驚いたが、スバルはふうとため息をついた。

「でも、ちよつと残念かなあ」

「なにが？」

「だって、紅茶でこんなに美味しいんだよ？ ケーキだって絶対美味しいよあ」

「アンタそれ、ちよつと残念どころじゃないでしょ」

「えへ。ばれた？」

ティアナもはあと息をつく。

「アンタねえ」

「……コタロウさんがいればなあ」

「いくらあの人がここ地球の日本にいるからって、そんな偶然あるわけないでしょ」

「でも」

ティアナと2人しかいなければぐにやりと背を丸めているスバルは、なんとか肩を落とすだけにとどめる。

「でも、コタロウさんがいれば、直してくれますかねえ？」

「うん？」

どうもそう考えていたのは、スバルだけではないらしい。

「リインちゃん、そのコタロウさんって？」

「うちのマシナリー、機械士です」

『マシナリー？』

3人は初めて聞く言葉に首を傾げる。

「それはですねえ」

「すみません。トラガホルン夫妻で予約したものなんです」

カランと扉が開き、1人の男性が入ってきたところで土郎たちはスイッチを家族の一員からスタッフに切り替える。

「あ、はい」

『……………』

「本人たちが来られないということで、代理できました。一応こちら、代理を証明するものです」

「わかりました、すぐにお出しますね」

「お願いします」

桃子はその客に笑顔を向け、振り向いてカウンターに向かおうとしたとき、なのはたちがそのお客を注視し、リインがクッキーを落としたことに不思議がる。

「えと、お客様をそんな」

『コタロウさん！？』

「はい」

皆さんも御休暇中ですか？ と、今日の体験で幾分か身に着けた社交性を少し垣間見せるコタロウがいた。

ぱたむとオーヴンを閉め、カウンターへの立ち入りを許可したコタロウは自分より背の高い男性士郎を見上げる。

「修理は済み、動くことも確認しました。専門家が明日来るのであれば、視て頂いたほうがよろしいでしょう」
「本当かい？」

そういつて士郎はオーヴンを起動させ、自身でも問題ないことを確認する。

「いやはやなるほど、マシナリー、機械士とはよく言ったものだ」
「すごいわねえ、コタロウさん」

実際作業は見ていなかったが、士郎が30分ぐらい格闘しても直らなかったものを5分もしないで直したことに感嘆する。

「ふむ」

コタロウはラインに促されるまま 任務中であるとだけ説明はした後 に修理をしたのはいいが、疑問が残る。

「ラインフォース・ツヴァイ空曹長」

「はいです？」

「この方たちは何故、私の名前を知っているのですか？」

そういえば、こちらは何も話して居ないことに3人は気付く。

「ごめんごめん。私はこの喫茶『翠屋』の店主高町士郎」
「私は高町桃子」

「私は高町美由希」

それぞれ「よろしく」という言葉をつけて簡単な自己紹介を済ませた。

「ご存知でしょうが、私も紹介させていただきます。コタロウ・カギネと申します」

彼が丁寧にお辞儀したときに士郎と桃子だけ、コタロウの左腕が右腕と違いだらりとしていることに気付いたが、何も言おうとはしなかった。

それよりも桃子はふとあごに指を当てた後、ふふつと微笑み、

「ネコさんとお呼びしてもいいかしら？」

『……………』

これにはコタロウも寝ぼけ目を少し大きく開き、彼のあだ名がネコであることを知っている人たちもきよとんとする。

「お母さん、なんでコタロウさんのあだ名が分かったの？」

「あら、なのはやリインちゃんなら、すぐに気付いてもいい気がするけど？」

『……………え？』

2人は考え込むが、ふいにリインがなのは、スバル、コタロウへと視線を動かした後、

「あ」と、声をあげる。

「確かに、ネコさんですう」

「リイン？」

なるほど、ジャニカニ佐がにやりと秘密にするわけですう。と、うんうんと頷く。

「リイン曹長、今、私のこと見てたよねえ」

「そうね」

ふむ。と、なのはと一緒にスバルとティアナも考える。

『（リイン（曹長）は私（なのはさん）をみてからスバル（私）をみた）』

なのははスバルをみて、スバルとティアナはなのはを見る。

『（私（なのはさん）の名前は高町なのは。スバル（私）の名前はスバル・ナカジマ）』

3人はじっとコタロウを見る。

『（そしてコタロウさんは、コタロウ・カギネ）』

次に目を閉じて、あごを引く。

『（こっち（地球の日本）では苗字が先に来るから、カギネ・コタロウ）』

今は自分たち意外に客はおらず口を開く人間も少ないため、翠屋で流れるラジオが良く聞こえた。

「さて、それでは次の曲紹介行きましょうか。……あ、このはがき可愛い挿絵つきですよ？」

「どれどれ？ あ、本当だねえ、可愛い『かぎしっぽ』のネコさんだ」

「はい。本当に可愛いネコちゃんです。あ、話が逸れてしまいましたね、すみません。それでは、ラジオネーム『かぎしっぽ』さんからのリクエストで」

『（かぎしっぽのネコ？）』

疑問符が1つ、普段のラインみたいにふよりと浮かんだ後、

『あ!..!』

ぱっとコタロウに注意がそそぐ。

『カギネコ・タロウ! ……さん』

もうちょっとで完全に呼び捨てしそうになったが、なんとかそれは防ぎ、

「えーと、はい」

六課に配属になって初めてコタロウは桜色よりもっとうすい、染まっているのかどうかも分からない色が頬に入り、ぽりぽりと頬を搔いて、こくんと頷いた。

第14話 『かぎしっぱ』(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

前書きの通り、キャラをうまく表現できたかどうか分かりませんが、ラジオドラマを聴き、記憶を掘り起こしながら表現したもので、『こんなキャラじゃない』と言われてしまえば、

言われてしまえば……

すみませんでしたー(1回目)

私の記憶と表現技量ではこれが限界です。

2次創作ということで、寛大なお許しが出ることを祈っています。

アリサとすずかは一応、ネットにて情報を収集しましたが、独自設定を組み込んでいます。

- ・ 大学では人気者であること
 - ・ アリサが午前中に告白をされて、ばっさり断ったこと
 - ・ すずかが高校生のうちに護身術を学んでいたこと。
- などなどです。

なんか、高校は共学なんだけど、男女は別れている高校というっわさを聞いたので、

それなら、自分で自分を守る最低限の護身術をまなんでもおかしくないかな？

アリサはきつと、もちまえの気の強さとさすががいるから大丈夫かな？

という、かなぐりあまい考えのもと設定組み込みました。

アリサ、すずかファンの皆さん、ごめんなさい。

次に南ケンタ君ですが、知り合いをモチーフにしました。

迷子になったとき、自分で近くの知らない大人に話しかけて

「僕迷子です」といったそうです。

私ではそんなこと当時出来ませんでした。

（私は迷子の達人で、家族で遊園地の類は初めの1回しかいったことがありません）

えいしせき
嬰獅石ミラクルガオン

……私の中二病最大限に使用しました。

嬰は「みどり」（うまれたばかり）

獅は「獅子」（けもの的な）

石は「石」（宝石を想定）

『石から生まれた獅子』です。

服装表現も入れようかと思いましたが、文章量的な関係でコレにしました。

（両手ではさみを表現）

黒いスーツを下地に流線型のエメラルドグリーンが黒を邪魔しない感じではしているイメージです。

（わかりにくいですかね？）

ストーリーは考えようとして考えませんでした。

私は特撮を二十歳過ぎて初めて見ました。

というより、後にも先にも特撮はコレだけ、『仮面ライダー電王』
だけです。

最終局面を迎えてくるにあたり、スーツにいろいろ跡があることに
気がつきました。

正直に「ああ、このアクターたち頑張ってるなあ」と敬意の念を感
じてやみませんでした。

屋上のヒーローショーはバイトの知り合いがヒーローショーのアク
ターの卵さんで、

何度も何度も変身シーンの練習をするということを知っていました。
ある漫画からもこの「現実にはありえなくても子どもたちに夢を与
える」ネタを貰っています。

これはタグには載せないでいようとおもいます。

(載せなければならぬのであれば、載せようと思います。 サイト
側や読者から指摘があればですが)

アクターさんたちは身体が資本で寿命は短いと思いますが、長く続
けられる人は50を越えても健在だそうで、びっくりです。

きっと、オリジナル小説をつくったとしてもこのネタは使うかもし
れません。

すみませんでした(2回目)

独自設定その2

- ・翠屋のオーヴン故障
- ・ラジオが流れている
- ・カギしっぽのネコをカギネコという

ケーキの作り方はわかりませんが、きっと壊れれば、作れないと思います。

今回はお客様ように出すストックはあるが、お土産ほどなくてごめんなさいというのが桃子さんたちの心境です。
ちなみに嬰と翠はかけてます。

はい。 すいません(3回目)

そして

はい。

コタロウがネコとあだ名されているのは彼の名前からです。

コタロウ・カギネ

をカギネ・コタロウ

そしてカギネコ・タロウ

あるいは、カギ・ネコタロウ

これが、ネコのあだ名の正体です。

ドグハイク・ラジコフをひとつのヒントにしてみました。

彼のあだ名はドグ、ドッグから同期からはイヌなどと呼ばれていません。

そんなわけで、『機械ネコ』

マシナリーキャットの副題の意味でした。

これはタグにあるとおり、キャットルーキーの

雄根コタロウからもらっています。
読み方がえると、雄猫・太郎になります。

構想段階で、どうにかネコを見た目からではなく直線的に表現できたらなあ

と思い、苗字と名前をくつつけることである種直線的に表現しました。

むつかしく、巷ではこう呼ばれているなんて二つ名を持つほど、コタロウはすごくありません。

なので、苗字と名前をひっくり返して、なるべく分かりにくいようにしました。

分かったかたは私めを嘲笑してください。

カギネコという言い方はあと1回ほど出てくる予定です。

えーと、コレで解説おわりましたかな？

言い残し、ないかなあ？

あったらメッセージや感想で答えた後、設定資料集でも作りましようかね

さて、次回から

バーベキューやら銭湯やらを引つ張ってきましょう。

前回もいいましたが、この休暇でコタロウをすこしでもキャラ付けを出来ればと思います。

(まあ、彼も六課にもまれて幾分か成長するということです)

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております。

追記：

感想が増えて、自分びっくりしました。
以下は謝辞です。

イツキさん

ホーエンさん

ライゼルスさん

高橋さん

ジンジャーさん

ご感想ありがとうございます。

遅筆故、1週間で1話投稿できるか

(はたまた1月で1話投稿できるか)

わかりませんが、もしよろしければ

次回もご拝読していただければと思います。

第15話 『いのちのよじな理由』(前書き)

コタロウの休暇編その3です。

今回も崩壊していきます。

……あの、すいません。

それでは、本編をどうぞ

第15話 『このよじな理由』

「それでは、私はこれで」

トラガホルン夫妻が事前に予約したケーキを受け取り、土郎たち、なのはたちにぺこりと挨拶をして、店を後にしようとしたとき、

「ネコさんも何か食べていきませんか？」

桃子に呼び止められた。

コタロウはくるりと振り返り、

「いえ、結構です」

ぼんやりとした寝ぼけ目とは違い、すっぱりと断った。

「まあまあそんなこと言わずに、ウチのケーキは美味しいぞ？」

ウチの家内が作ったものは別格だ。と、にこりと笑って誘ってみるが、

「いえ、結構です」

『……………』

トーンを変えずに同じ言葉を繰り返した。

普通の人であればここから先、食い下がらずに「……………そう、ですか」と相手の意見を主張してしまう。その証拠に2人の娘美由希となのは彼の態度に少しむすりとする。のだが、高町夫婦はすぐに彼の性格をある程度、見定めていた。

「何か、お急ぎのご用件でもあるのですか？ よろしければ、お伺いしても？」

「私はこのケーキをトラガホルン夫妻に届けなければなりません」

「ふむ。では、その2人から許可が下りれば、問題ないということかな？」

「はい」

「それじゃあ、聞いてみましょう？」

そこまで話し、コタロウがなのはに対し人目の無いところを伺って店内奥に引っ込んだ後、士郎は腕を組み、桃子は手を頬に当てて、

「感情が読みづらい人だが」

「素直ないい方ねえ」

彼に対する感想を述べる。

「美由希、お客様に対してそのような顔はよくないわ」

「え、でも」

「なのはもだぞ」

「あ、う」

新人たちは彼女たちの背後にいたため、表情を窺うかがうことは出来なかったが、コタロウの態度を見れば、どんな表情をしていたかはなんとなく分かる。

「彼は別に、嫌だからあのような態度をとったわけじゃあない」

「ネコさんはただ単純に、トラガホルン夫妻のことしか考えていないだけなのよ」

ネコさんにはどんなお茶があつかしら？ と楽しそうに桃子は思案する。

「お母さんは、コタロウさんがどんな人かわかるの？」

「ですか？」

キッチンに消える前に、彼女の背後になのはは言葉を当ててみる
が、

「ん？ わからないわよ？ ネコさんは今までいらっしやっただお客様
様のなかでも、とびきりに難むづかしいお客様ね。ねえ、あなた？」

「ああ、何せ感性が感情と表情をうまく結び付けてくれないからな
あ
」

「でも、近道をしなければ彼を知ることができるわ」

シナモンティーにしましょう。そういつて桃子はお茶の準備を始
める。

士郎が桃子を除く全員に目配せすると、その誰もが自分たちの言
葉を理解できずにいることが一目で分かり、彼はすこし上目線に
やりと笑い、

「ま〜だまだ」

（特になのは。先生でそれだと、気付けないし、気付いてもらえな
いぞ？）

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ
コ

第15話 『このような理由』

フェイトとエリオ、キャラがなのはと合流するため、喫茶『翠屋』の扉を開き、なのはたちと久しぶりに会う彼女の両親と姉に挨拶をして、少年少女2人を紹介し、座ることを促され、

『お、美味しい』

と、フェイトはエリオとキャラがほつと息をついたのを見届けた後、ふと視線を上げたときに、

「コタロウ、さん？」

『え？』

3人はコタロウが店の扉前、隅に座席に座っているのに気がついた。

「……………」

彼はぷすりとショートケーキ 2皿目 のイチゴにフォークをさして、口に運んでいる。

声をかけた後、ふと姿がいなくなっていたリインはコタロウのお

向かいに座っており、クツキーを頬張っていた。

「はい。テストロッサ・ハラウン執務官」
『……………』

エリオとキャラロは彼を振り向くかたちで彼を見る。

「何かご用でしょうか、テストロッサ・ハラウン執務官？」

コタロウは名前を呼ばれたからにな何か用件があるのかと、もう一度彼女の名前を呼ぶ。

「い、いえ。用はないのですが……」
「ないのですが？ はい。それではなにか」
「いえ。何もありません」
「はあ」

バンソウコウをしている彼は寝ぼけ目を彼女に向けて小首を傾げた後、またケーキに目を落とし続きをはじめた。

「えーと、なのは？」

「あ、うん。コタロウさんの休暇先って、海鳴市ウミナギだったの」

念話で翠屋にいるの理由も話した。

「す、すごい偶然だね」

どことなくぎこちない表情のフェイトになのはは頷くことしかできな

「そついえば、ネコさんは今日、『正義の味方』は見れたのですか？」

『ネコさん？』

リインがコタロウをそう呼んでいることにフェイトたちは不思議がる。

「はい。拝見できました」

「その人ってどんな人なんです？」

「……正義の味方です」

「いえ、あのう」

視線の先では外出用件を聞き出すことに失敗しているリインが言葉をつまく選べないでいた。

「その方のお名前は？」

「それは変身前のお名前でしたら、答えることはできません」

「えと、変身後で大丈夫ですう」

「えいしせき嬰獅石ミラクルガオンです」

「ミラクル、ガオン？」

「もしかしてネコさん、デパートの『ヒーローショー』を見に行っ
たんですか？」

「はい」

ラインが唸っていると、桃子が会話に参加する。

「ヒーローショー。ですか？」

「ミラクルガオン、子供づれのお客様が話しているのを聞いたこと
があるわ」

ああ、ヒーローショーっていうのはね。と桃子はラインに解説す
ると、彼女も頷いて、

「そういうことだったんですかあ。ネコさん『正義の味方を拝見し
てきます』なんて書くから何かと思いましたよ」

分かりにくかったでしょうか？ とコタロウは表情は変えないが、
ラインと桃子は意外に楽しそうに話していた。

「なのはさん、リインさんとなのはさんのお母さん、コタロウさんのこと』ネコさん』て」

「うん。お母さんがね、コタロウさんのこと』ネコさん』って」

「お知り合いなんですか？」

キャラの質問になのははふるふると首を振る。

「今日初対面だよ」

「じゃあ……」

キャラは3人の会話に微妙に参加したそうに視線を送ると、なのはは逆にフェイトの方を向いて、

「フェイト隊長が知ってるかな」

「へ？」

フェイトもキャラにあわせてコタロウの方に視線を送っていたが、突然話題を振られ間の抜けた返事をした。

「なのは？」

「私もお母さんからヒントはそれしか貰わなかったの」

テーブルの上にあるペーパーナフキンを縦に巻四つ折した後、先

の方を蛇腹折じやばのおじにしてみせた。
『かぎしっぱ』のようだ。

なのはのヒントは周りも聞いていたので、スバルやティアナ、リンに聞いても同じヒントしか返って来ず、キャロとエリオの方が先に気づいたのは余談であり、フェイトが『ネコタロウ』と気付いて噴出したのもまた余談であれば、その後、名前を笑ってしまった事にどうしようもなく落ち込んだのも余談である。

「夕食、ですか？」

「はいです〜」

リンは移動を始める前にコタロウに夕食に誘った。彼女の心境としては友人を紹介するというより、『せっかくなんだから一緒に食べてみてはどうか？』というものだ。

「……ふむ」

「ダメ、ですか？」

するとコタロウは顎を引いて首と傾げた後、

「ご一緒させていただきます」

と真つ直ぐリインを見て答えた。

「決まりですね」

「あらあら、私たちのお誘いは断ったのにリインちゃんの誘いは受けるのね」

「これはこれは、妬けるねえ」

「あ、うう？」

桃子と土郎はコタロウ、リインをからかうと、一方は特に表情に出なかったが、一方は素直に表情に出る。変に意識してしまったようだ。

「はい。ジャン、いえトラガホルンが『夕食を誘われたら、気にせずお呼ばれされる』と」

「あー、確かに」

「あの人たちなら、そういうでしょうねえ」

トラガホルン夫妻がこの喫茶店を知っている以上、以前ここを訪れたのは明白であり、士郎と桃子は当時の状況を思い出していた。

「日本の経済について侃々諤々かんかんがく話し出して
「2人しかないのに喧々囂々けんけんじょうじょうとしてたわねえ」

お茶をお出ししたら、声をそろえて『申し訳ありません』と謝っていたけど。と、ふうと桃子は息を吐き、

「この世界の主要国の経済を事細かに議論してたので、ただの外人さんかと思っていたよ」

士郎も息を吐く。

「まあ、それはいいとして、もう行くのかい？」
「あ、はい。はやても待っていると思いますので」
「みなさんによろしくね？」
『はい。』

その後、すぐにフェイトは全員を車に乗せて、はやてたちのいるコテージに向かっていった。

「運転お疲れ、フェイトちゃん」

「うん」

コテージへは約20分程で到着し、全員が順番に降りる。コタロウは降りる前に『バンソウコウを取り替えたいので、先に降りていただいて構いません』と、一番最後に降りることにした。

「なのは、どうかした？ 車の中で考え事してたみたいけど」

「う、ううん。なんでもないの」

本当になんでもないこと。と、頭かぶりを振るが、内心、先程士郎と桃子の言葉の意味がよく分からないでいた。新人たちはそれほど気にしていないようだが、どうも引っかかる。

（『感情と表情の結びつけ』『近道をしなければ知ることはできる』
ってどつどついって。）」

もう一度考えようとするが、今は考えても分からないため、とりあえず、片隅に残しておくことにした。

「あ！ お帰り〜」

「なのはちゃん、フェイトちゃん！」

声のしたほうを向くと、なのはとフェイトの旧友2人が駆け寄ってくるのが見え、4人は手を合わせて、喜んでいた。

「……ティア。やっぱり隊長さんたちが普通の女の子だよ」

「同感。どうよ、ライトニング的には」

4人のやり取りに違和感を感じてやまないスバルとティアナはエリオとキャラコを横目で見ろ。

「なのはさんもフェイトさんも普通の女性ですので……」

「そっか。エリオくんは私たちの中だと一番昔からなのはさんたちのこと知ってるんだもんね」

エリオは頷いて、彼女たちも自分たち

エリオは男性であるが

と同じであることを示す。

そして、またその光景が額縁のなかの出来事のように見ていると、もう1台車がコテージ付近に停車する。

「ハイ」

「皆、お仕事してるかあ？」

「お姉ちゃんズ、参上」

ばたんとドアが閉まると、2人の女性と1人のけものみみ獣耳がぴよこんと頭の上のほうから出ている少女が車から出てきた。

「エイミーさん」

「アルフ！」

「それに、美由希、さん？」

「さっき別れたばかりなのに」

美由希はしょうがないという顔をして、

「いや、エイミーがなのはたちに合流するっていうから、私もちよつとシフトの合間だったし……」

「そうだったんですか」

実のところ、彼女は楽しみのようにも見える顔をしている。

「エリオ、キャラ、元気だった？」

『はい!』

「2人ともちよつと背エ伸びたか？」

少年少女2人は久しぶりに会うエイミーとアルフに嬉しさ半分、自分の成長を見てもらって恥ずかしさ半分と複雑ながらも笑顔で会話をしている。

「うん。誰かの使い魔かなあ？」

「イヌ耳としっぽ。ワンコ素体？」

「見た目10歳くらい？ ちっちゃくてカワイイ！」

エリオとキャラと話す間、アルフという使い魔は終始しっぽをふりふりさせていたが、1人の女性を見つけるとしっぽとぴんと張って駆け出し、跳びついていった。

「フェイト！」

「アルフ、元気そうだね」

アルフは何度も彼女の名前を繰り返して、主人にじゃれつく。

新人たちの中では先程会った人もいれば、いない人もいたりとで、後でまた自己紹介の場があるだろうと思いい、全員集まって移動しようとしたとき、

「またバンソウコウ、買っておかなくちゃ」
『……………』

ばたんとドアを閉め、コタロウが出てくる。

「テストロッサ・ハラOWN執務官、車のキイ、ありがとござい
ます」

「いえ。そういえば、その額ひたいの傷はどうしたんですか？」

「人とぶつかりました」

「大丈夫ですか？」

「はい。問題ありません」

『……………』

彼はバンソウコウを張り替え、また新しいものにしていた。

『キイ（くん）！？』

『あの時のバンソウコウ（さん）！？』

『……………』

アリサとすずかは彼の仮名を、エイミィとアルフは彼女がしたバンソウコウを口にし、コタロウを除くそれ以外は間の抜けた声を出す。

『…………え？』
『…………はい？』
『…………』

今度はアリサとすずか、エイミィとアルフはお互いに目を見合わせて間の抜けた声を出し、それ以外は首を傾げる。

『……………』

その後、全員がゆっくり彼を見るが、当の本人は視線の先、つまり後ろを向く。

「あの、車に何か忘れ物でも？」

コタロウの背後には2台の車があり、自然に熱が冷めるのを微動だにせず待っていた。

「つまり、コタロウさんは午前中にエイミィさんに会って、午後にはアリサちゃん、すずかちゃんに会ったわけやね？」
「はい」

全員の自己紹介が終わり、最後のコタロウが自己紹介で年齢を公開したときに、ガタン！と彼を知らない人間が驚いたこと以外は普通に歓談を楽しんでいた。

「どんな偶然やねん」

「ねえ、はやて」

「ん〜？」

「このコタロウ、さんってどんな人？　なんていうか、会ったことないタイプなんだけど」

一応、彼に対して『さん』付けしているアリサだが、特に気にすることなく本人目の前にして彼のことを聞く。

「正直、私もわからんのよ。管理局にもおらんタイプやから」

管理局の人間なんやけどね。と、ため息混じりにコタロウを見る。彼は彼女たちの視線に首を傾げるが、特に自分に対して話が振られないのを確認すると、ぷすりとフォークで料理を口に運び出す。

そうして、皿が空になると無言で立ち上がって料理のある場所まで歩いていった。

この料理は鉄板で焼かれたもので、調理したのははやてやなのはたちである。

はやては元々、幼い頃より自分で料理をしていたため、料理をすることそのものが生活と趣味の間に存在し、味もヴィータいっわ曰く、

「はやて隊長の料理はギガウマだぞ」

というものだ。

新人たちはそれを食べ始めてすぐに趣味の領分を越えているものであると理解できた。

それぐらいはやての作る料理は美味しいのだ。

また、その時「シャマル、お前は手を出してないだろうな」や、

「まあ、切るだけなら」とシグナムやヴィータが古くからの付き合いである1人の女性に懇願するように料理をすることを止めたのは余談ではない。

それはコタロウが席を離れたちようど入れ替わりに、少し鼻歌交じりのシャマルが戻ってきて、ちようど3人前あるかないかくらいの料理をことりと置いた時に起こった。

「久しぶりに作ってみました」

『……………』

全員の表情がもれなく固まった。

「ティ、ティア。これ、もしかして」

「い、いい？ 考えちゃだめよ」

「シグナム副隊長と」

「ヴィータ副隊長が言ったことって本当だったんだ」

新人たちは決して『食べる感じになってる？』とは口には出さなかつたが、

「よし、新人ども。毒見だ」

それはヴィータが許してはくれなかつた。

「毒見なんてひどーい。今度はちゃんと美味しくできました」

『（今度はちゃんと？）』

シャマルの作った料理はどうみても美味しそうには見えず、さらにいうと焦げてはいないのに、どれが野菜でどれが肉なのか分からないものだった。

彼女の料理の腕前を知らないのはどうやら新人たちとこの場にはない1人の男だけであり、ヴィータと当の本人以外は誰も口を出すことをやめていた。

一方本人シャマルは立ったままコタロウと違って空気を察知、寂さみしそうな表情をしている。

「え、えと、それじゃ」
「待ってエリオ、私がいくよ」

フォークを取るエリオを制してスバルが料理を引き寄せた。

「ち、ちなみにシヤマル先生？」

「は、はい」

「味見ってしました？」

「コイツがするはずない」

「……………」

シグナムの言葉にヴィータとリインが深く頷く。

「む、無理せんでもええで？」

「い、いいえ。頂きます」

シヤマルの無言のプレッシャーに新人たち　この場合はスバル
のみ　は拒否することができなかった。

そして、これは勢いだとスバルは心に決めて、迷うことなく一口
食すと、

「……………」

無言でぐにやりと背中を丸めてテーブルに額をつけた 料理は
ティアナが当たらないように避ける。

『……………』

「あの、お味は」

『（聞くんだ）』

心の中で全員が思いが一致する。

「と、とりあえず。すいませんとしかいいようがありません」

ゆっくり頭を上げて目尻に涙を残し、かろうじてスバルは答える。

「シヤマル、お前、味見してみる」

（できればそれ、食べる前に言ってほしかったです、ヴィータ副隊長）

あらゆる思考がなくなってしまったのか、スバルは妙に冷静にそんなことを思う。

シヤマルはフォークで自分の料理をすくい、頬張ると、

「じゅ……」

ふらふらと自席につき隣のシグナムに頭をあずけた。

「ごめんなさい」

それだけ言うと、しょんぼりと皿の上にあるはやての料理を口に入れる作業を再開した。

「まあ、味見は大事よね」

アリサが何とか改善点を示してみる　　実質それは料理をする上で普通の作業である　　が、シャルルの表情はうつむき加減で分からない。

「いえ、シャルルが悪いのです、お気になさらず」

歓談の続きを。　とシグナムは促したところでコタロウが戻ってきた。

そこでヴィータは何か閃いたように二度三度、彼と料理を目配せすると、

「コタロウ」

「はい。なんでしょうか、ヴィータ二等空尉」

「これ、シヤマルがお前に」

ずいと身を乗り出して料理をコタロウの前に持つてくる。

「え、ちよっ、ヴィータちゃん!？」

「いいから」

「ちよっこの前の仕返しをなー」

「……まあ、いいかもね。コタロウさんの表情を見る意味でも」

ヴィータとは意見は違うが、どうやらアリサも賛成のようである。

「シヤマル主任医務官が私に、ですか？」

「ああ」

先程の念話はコタロウを除く魔法が使える全員に聞こえており、なのはや新人たちは複雑な表情をしている。

アルフはそのいたずらを楽しそうににやにやしながら傍観を決め込み、残りはヴィータの性格をある程度理解したうえで、何も言わず、一口食べた後、無理に続きを食べようとするのであれば止めればよいという考えにとどめていた。

「それでは、頂きます」

そういつてコタロウは見た目から特にその料理を躊躇することなく口に入れ、

「……………」

寝ぼけ目を少し細くして、頭をぐらりと円を描いた。
ヴィータは口の端を吊り上げて、「どうだ?」と聞くと、

「シャマル主任医務官」

「……はい」

「まずいです」

コタロウは既にいつもの状態を取り戻し、いつもの寝ぼけ目ですとシャマルを見つめて正直に感想を述べる。

「あ、あう」

彼女はそれを知っていたが、改めてはっきり正直に答えられると、返事もできずに目尻に涙がたまった。

アルフは笑い、アリサは少々期待はずれであったが、ヴィータは

「え、えと、ま、まずいのは何で食べるんですか!？」

たまらずシャマルが疑問を口にするが、コタロウは不思議そうに彼女を見て、

「まずいことが食べない理由にならないからです」

「……………」

また食事を再開する。

残りが少なくなってきたため、右手で皿を持ち上げ 光景が異様過ぎて左手を使ってないことに気がつかず 一気に流し込み、ことりと皿を置く。

「……………」

「シャマル主任医」

「あ、あの!」

少しの間後、コタロウを遮ってシャマルが口を開いた。

「はい」

「ふ、普通の人は、まずいことが食べないり、理由になると思います」

「はあ」

「コタロウさんは、な、なんでならないのですか？」

「……ふむ」

なんとか言葉をつむぐと、コタロウは考え込み、

「私は料理を作ることができません。いえ、できないというより私が料理をするとなると、実験のようなものになります」

視線をシャマルからはずして食べ終わった皿に落とす。

「料理というのは楽しくするものだ、本で読んだ事があります。

先程、シャマル主任医務官とすれ違ったとき微笑んでいましたので、楽しく料理をしたと判断していました」

「……」

「そして、それが私の為であったのであれば、まずいという要素が食べない理由にはなりえません。もちろん、日常生活に支障の出るようなものでしたら困り、断ることもありますが、これくらいであれば問題ありません」

そこでぱくりと自分がよそってきた料理に手を出す。

「んく。それに私は料理のできる人間を素晴らしいと思い、尊敬しています」

またシャマルを見て、次にはやてを見ると、もう一度シャマルに視線を戻す。

「このような理由でよろしいでしょうか、シャマル主任医務官？」
「……………」

彼女がこちらを見つめているのは分かったが、どうも焦点があつていないので身を乗り出す。

「シャマル主任医務官？」
「……………ふわっ！ は、はい」
「私の理由、どこか変でしょうか？」
「い、いいえ、そんなことは」
「そう、ですか」

席に着いたコタロウはシャマルの料理でかなりおなかが膨れ、これが最後かなと自分が盛ってきた料理　彼は常にすこし少なめに料理を盛る　を食べる前に、彼は自分の言葉が途中であったことを思い出した。

「シャマル主任医務官」

「……………はい」

「……………さまでした」

「　　うう！？」
『……………』

彼はその後、普通に食事を再開したが、シャルルの申し訳なさと嬉しさのどっちつかずで紅くなっている表情には気付かなかつたし、周囲の空気にも気付かなかければ、ラインのふくれっつらにも気付かず、なおかつ、はやての頬も薄ほんのりと染まっているのにも気付かなかつた。

第15話 『このよじな理由』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

はい。今回は公開後一日はさんで後書きを書いています。

……

え、今回のお話はコタロウが実は全員に会っていたというお話です。

読者様はお分かりかと思いますが、あえて言ってみました。

そして、コタロウの料理に関する解釈です。

コタロウは料理をする場合は化学の実験のようになります。

それはもちろん、皆さんも同じだとは思いますが、彼の場合はちょっと違います。

同じ料理を何百篇作ったとしてもかれは変わらず、同じ手法で料理をします。

それを自覚しているからこそ出る発言なわけです。

違和感ばりばりでしたかね？

御三方、はやて、シャマル、ラインですが

それぞれの心境はご想像にお任せします。

私はただ単に、皆さん照れただけだとおもってます。。。

（ラインに限っては『お兄さんをとられた』感じですかね？）

さて、桃子と士郎ですが、あれで大丈夫でしたかね？
立ち位置としては『大人』の役割をはたして頂きました。

私を書く大抵の大人は狂言回してきな要素を多く含んでいます。

コタロウもその位置に立つことがもしかしたらあるかもしれません。

さて、今回はコタロウの休暇編その4です。

うまく行けば次回で休暇編は終了します。

私の文才なければ、たらたら1、2回続いてしまいかもしれません。
毎回言っています、この休暇編で少しでもコタロウがどういう人間か分かっていただければと思います。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております！

追記：

では、用語解説

蛇腹折じやばらひ

交互にぎざぎざに折る事です。

侃々諤々かんかんかくかく

自らの信念に従って主張することです。

喧々囂々けんけんしょうしょう

騒がしい様子ですね。ただがやがやと大勢で騒がしい様子を表すものなので2人ではまず無理でしょうね。トラガホルン夫妻、夢中になるのもそれくらいで。

以下は謝辞です。

イツキさん

高橋さん

毎度毎度ありがとうございます。

第16話 『オウム返し』（前書き）

コタロウの休暇編その4です。

えー、活動報告（2011/02/19）の通り、終わりませんでした。

今回は少し冗長で、自分でもどうしてくれようかと思えます。

構成力はどうしたらつくものか。。。

それでは本編どうぞ〜

第16話 『オウム返し』

コタロウが作り出した周りの空気はある種特殊なものであるが、
数人は最近体験したばかりで、その中の1人は雰囲気ではなく、テ
ーブルの状況に気がついた。

「もう飲み物がありませんね」

キャロは見渡すと、テーブルのところどころにおいてあるボトル
タイプのジュースがなくなりかけている。

「どちらにありますか？ 私が取ってきます」

少女の発言に全員を取り巻く空気がそろそろと足元を通過して雲散
していく。

「あ、あー、ジュースね。まだ5、6本ボトルがあるわよ」

「湖の水で冷やしてあるの」

アリサやすずかもまた同様で、彼から視線を湖畔へ移す。

そこでやっとほとんどの人が思考を切り替え、ティアナとスバル

も動く。

「じゃあ、私たちが」

「エリオ、キャラ、心配だから私たちもいくよ」

『はい!』

エリオとキャラはほぼ同時に席を立ち、湖畔へ向かい、テーブルからこちらの声が聞こえなくなったところで、

「……ふう。びっくりした」

「さすがに私もびっくりしたわ」

「コタロウさんって不思議な方ですよね」

口の中にまだ違和感が残っているスバルがふうと悟られないように小さく息を吐くと、ティアナとエリオも頷き、

「そうですか？」

しかし、キャラだけはそうでもない和小首を傾げる。

「キャラは驚かなかった？」

「え、あ。料理を食べるコタロウさんには驚きましたけど、コタロウさんなら普通かなって」

「ん、まあ、考えてみるとネコさんはいつもっていうか、時々って
いうか、平然と私たちのこと驚かすよねえ」

スバルの言葉にキャロはこくんと頷く。

「……でも、いやじゃないんです」
「確かに」

今日、こちらへ向かうヘリの中で、良い意味で気にしないよう全員のコタロウに対する接し方を考え直したが、誰もが依然として彼という存在をうまく捉え、例えることができていた。

なぜなら、彼の行動自体には不可解な点が見当たらないのだ。

初出勤前、自分たちのデバイスが故障寸前で、依頼されたときにはきちんと修理した。

ヴィータが『新デバイスの説明しつかり聞いとけよオ』と言えば、しつかりとよく聞いていた。

ヘリで移動してからの列車への飛び降り前もヴァイスが『何でもいいんすよ、一言応援^{エール}を！』といえば、本当になんでもない応援をした。

そして、ついさっきの『まずいものを食べる姿勢』も、料理をした人に対し気を使うわけでもなく正直に味の感想を述べ、その上で食し、食べ終わった後はきちんと『ごちそうさまでした』と言った。彼が地球の日本へ外出していることエイミィやアリサたちと偶然会い、自分たちに会ったということを除けば、彼の行動は一貫として間違ったことはしていない。

だが、裏を返せばそれが彼の存在を判断できずにしている原因なのだ。

自分たちのデバイスを直したときの速さと正確さ。
ヴィータの言った通りに会話を全て暗記したこと。

これはキャロだけに通じたものであったが、その応援の言葉。
明らかにまずい料理を食べきる。

これらは全て、普通ではない。

普通ではない行動が普通ではない結果をもたらすのであれば納得
はできるが、普通に行動しているはずなのに、不思議に思うこと、
驚くことが彼の場合、普通でなくらい多いのだ。

そしてなにより、ヴィータのように例外はあるが、基本、六課の
メンバーは彼の行動によって起こる空気を不快だと思っていないこ
ともその要因の1つといえる。

「『気にしないことやね』かあ。うん！ そのほうが気楽でいい気
がする」

「はい。それに隊長たちや皆さん全員で訓練、任務の後もそうです
けど、ああやって不思議に思ったり、驚いたりした後の雰囲気って
なんだかあったかくて和なごんだりもして、家族みたいだなんて思っ
んです」

キャロの言うことはもつともだとスバル思う。ティアナは疑問に
感じているようであるが、少なくとも自分はあの雰囲気は嫌ではな
く、楽しさを覚えはじめていた。

「私が前にいた自然保護隊も隊員同士は仲良しでしたけど、六課の
はそれともちよつと違ってて……」

それはコタロウがいる、いないに関わらずのキャラの正直な感想である。

「ネコさんは別として、隊長たちが仲良いし、シャーリーさんとかリイン曹長とかも気さくな感じだしね」

「そうですね。アルトさんとかルキノさんとか、皆さん優しいです」

スバルとエリオは六課全体をみて、関わっている人たちが皆、明るく優しい人たちであることを再確認し、

「もちろん、スバルさんとティアさんも！」

キャラはそこに2人も加えた。

スバルとティアナはキャラの偽りない本音に顔を見合わせて数回瞬きすると、まはた気恥ずかしく彼女を見て『ありがとう』と答え、彼女も「はい！」と頷いた。

「……あ、ジュース、これですね」

気付けば水辺まで着ていて、目を落とすとアリサたちの言ったとおり、ジュースが冷やされていた。

湖の水はとても冷たく、手を入れると思わず声を漏らしてしまうくらいである。

「ちょっと、落っこちたりしないでよ？ 水辺は滑りやすいから」
「大丈夫です」

ティアナは注意するように言い聞かせ、キャラは返事するも、少し油断があったのだらう。

「きゃあっ！」

「キャラ、危ない！」

彼女は足を滑らせた。

エリオはすかさずキャラに手を伸ばして落ちないように引き寄せようとするが、重心がキャラのほうへ倒れてしまう。

スバルがとっさに2人の腕を掴もうとしたとき、

（ 何！？ ）

自分とティアナの間に風が吹き抜けた。

それはエリオとキャラの隙間も通り抜け、2人の背後から、ぱさりという音が聞こえる。

2人の背中はその音によってそれ以上湖のほうへ傾かないように支えられた。

「あ、え、えと」

4人は自分たちの間から出ている物に目を向けると、銀色で親指くらいの太さを持つ、鉄の棒のようなものが先程席を立った場所から伸びてきているのが分かった。

「も、もしかして、これ……」

暗がりに向こう側はよく分からないが、多分向こうも驚いていることだろう。

エリオとキヤロは背中が優しく押されるのを感じると、身体が完全に陸に戻り、へたりと座り込む。

そこで初めて自分たちを支えてくれたものに目を向けた。暗がりから色を察知するのは難しいが、このようなものを持っている人物は1人しかない。

「これ」

「コタロウさんの
傘？」

4人の目の前には傘の裏側である骨組みがよく見えた。スバルがふと傘の中棒に触れようとすると、テーブルの方を中心として傘が上がり、かしょんという音と共に一段、また一段を短くなっていく。

その短くなっていくほうに視線をずらすとその音の鳴るほうから足音が聞こえてきた。

また、ぱさりと音が鳴ると、それは閉じられ、いつものように彼の左腰に納まった。

「水辺は地盤が緩くなっているので滑りやすいです」

気をつけてください。と言っている人の『人を助ける』という行動自体は普通であるが、普通ではない。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コ

第16話 　『オウム返し』

コタロウの腰に差している傘がデバイスであるということを知っている人間は少ない。この場では、なのは、フェイト、はやてと新人たち以外は知らなかった。リインも知らないわけではなかったが、改めてそれがデバイスであることを再認識する。

彼は新人たちと一緒に戻り、

「私たちに向けられてるわけじゃないけど」

「すっごい見られてますね」

「いや、まあ、さすがに」

「コタロウさん」

何事もなかったように自分の席に座りなおす。

『（なんで、この視線に普通でいられるのだろう？）』

気付いていないのか、気にしていないのかと言われれば、コタロウの性格上、おそらくどちらもおおよそ正しい。

「……アンタのそれ」

「デバイスだったの？」

アリサとエイミィが声を揃え、

「はい。デバイスです。……あの、リインフォース・ツヴァイ空曹長？」

「え、は、はい。何ですか？」

「とっさに使用してしまいました、皆さん、魔法に関する理解はされているのでしょうか？」

それは大丈夫です。と、すこし動揺しながらもリインは頷く。

「あ、エリオ、キャラ、こっちは突然で驚いたんだけど、何かあったの？」

「あの、はい。実は」

向こうで自分たちが足を滑らせて湖に落ちそうになり、その時のこちらから傘が伸びてきたことを話す。

「大丈夫だったの!？」

「はい。支えてもらいました」

「えと、こちらは……」

キャラがフェイトから横目でコタロウを見ると、

「こっちは、コタロウさんがいきなり傘を振りぬいた、んだ」

彼女もコタロウを見る。

フェイトが言うには、また自分たちが話を再開し、アリサやすずかたちの大学生活や、エイミィの子育てについてそれぞれ会話をしだした最中、いきなり彼が立ち上がり、右手を左腰に手をかけ、傘をエリオたちが歩いていったほうへ居合い抜きのような速さで振りぬいたというのだ。

このとき、ヴィータの頭上を通過したために髪が風圧にひよりと少し浮いていた。

「なんていうか、アンタについて考えるのが少し馬鹿らしくなったわ」

「び、びっくりした〜」

アリサがため息にアルフも息を吐き、アリサの意見に何人かは内心頷く。

「い、いきなり何すんだ！ 驚くだろ！」

ヴィータも頭を抑えながら、立ち上がって指を差すと、

「申し訳ありません」

一口続きを食べてから、彼も立ち上がり頭を下げる。

「ったく。助けるなら助けるで、ちゃんと……」

彼女は振り向いて湖のほうを向いてさらに文句を付け加えようとしたが、あることに気付く。

それは新人たちは向こうですぐに気付き、こちらにいる人も数名は気付いていた。

「……お前、どうやって分かったんだ？ こっからだと見えねエだろ」

「私は目が良いのです」

『（目が良いつてレベルじゃない気がする）』

考えることをやめたアリサたち数人以外は、そんなことが頭をよぎった。

コタロウは喫茶翠屋でトラガホルン夫妻と音声メール 傘に搭載されている機能の1つ で連絡を取ったとき、次のようなことも言われていた。

『夕食の後、というか、六課の面々や友人たちの事だ、おそろく何か行動を起こすだろう。それも誘われるようであれば、気兼ねなくついて行くといい』

『私たちのこと、特にジャニカのことなら心配しないで構わないわ。ケーキはこちらに戻ってきたときに待ち合わせしましょう?』

『オイ、時間配分的には俺の方が早く終わるだろう?』

『あら、時間配分的には私の方が早く終わらせることができるわ。手伝って差し上げましょうか?』

ジャニカとロビンが2人で揃って自分に会いに来ることは間違いないので、戻ったら連絡すると言葉をメールの締めくくりとして送った。

それは次の皆の会話で、彼等の言葉を裏付ける。

『ごちそうさまでした!』

その言葉にいち早く、はやてが立ち上がる。

『さて、探索機の様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか』
『はいー!』

『まあ、監視といっても、デバイスを身に付けていれば、そのまま反応できるし……』

『最近は本当に便利だね』

シヤマルが発動時の対応とその便利さになのはも感心する。

「技術の進歩です」

その理由をリインは一言で済ませた。

「ああ、ただ、ここお風呂ないし、湖で……」

しげりとアリサはコタロウを見る。

「無理ね」

「……そうすると、やっぱり」

「あそこ、ですかね」

「あそこでしょう」

「すぐかたち現地協力者はすでに代案を決めているようであり、ここ出身であるのはも分かっているようで、」

「それでは六課一同、着替えを用意して出発準備！」

「これより、市内のスーパー銭湯に向かいます」

それはフェイトも知っていた。

「スーパー」

「銭湯？」

スバルとティアナは首を傾げると、

「まあ、でもその前に簡単に片付けしよか。スバル、水汲んできてくれんか？」

「あ、はい」

全員がたりと席を立ち、お皿やコップを片付け始めた。

「ああ、コタロウさん。アンタも行くのよ？」

「……はい」

今度は断らせないわよ。というようにアリサは彼を誘うと、意外と素直に彼は頷いた。

食器はそのほとんどが紙仕様で片付けやすかったが、いくつかはきちんとした食器で洗わなければならない。

それは率先して、エリオとキャロが行い。他の皆は辺りの掃除を始める。

「しかし、よう食べたなあ」

「ほとんどはスバルやエリオだね」

がさりごみを片付けながら残すものが何も無いことにはやてとフェイトは感心する。

「あのシヤマルの料理もね」

「……ほんまやね」

今ははやての隣で紙皿を右手で一枚一枚重ねているコタロウに目を向ける。

「コタロウさん」

「はい」

「私の料理、どうやった？」

「はい。大変美味しかったです」

「……そ、かあ」

「ふふつ。はやて、嬉しいんだ」

自分で聞いておきながらすこし動揺しているはやてにフェイトは微笑む。

「フェ、フェイトちゃん!？」

「え、いや。私たち以外にそんな表情見せるの、珍しいから」

「からか 揶揄わんといてえな」

「ごめんごめん。あ、じゃあ私はこっちを片付けるから」
「う、うん。よろしくな」

フェイトははやてが自分たち以外に表情をころころ変えるのがとても珍しく、つい揶揄ってしまった。はやてもそれは自覚しているらしく、

「まあ、嬉しかったのは否定せえへんよ。料理するのは好きやから」

「うん。知ってる。私も料理、頑張ってみようかな？」

「エリオやキャラに？」

「やっぱり、『美味しい』って言われると嬉しいしね」

正直に嬉しいことを述べる。思えば、はやては料理をしたのが久しぶりであれば、『美味しい』といわれたのも久しぶりだったのだ。皆にも言われた言葉であるが、全員で声を揃えて『美味しい』といわれるのと、1人に面と向かっていわれるのでは感じるものも違う。それが、見知った人でなければ一人である。

フェイトもそれは分かっているようで、エリオとキャラにそう言ってもらいたいと思っていたため、はやてには敵わ^{かな}ないが、もうすこし勉強しようと内心頷く。

「八神隊長、汲んできましたー」

「おおきに。それじゃ、こっち持ってきてくれるか？」

「はい！」

スバルは少し小走りではやてのほうに向かってきたとき、

「スバル、足元！」

「……え？ うわっ！」

ティアナがおいて置いた小さなゴミ袋に蹴躓いた。
汲まれた水は中身が飛び出て、はやてへ向かう。

「はやて！」

「んう！？」

フェイトが叫んだとき、はやては水がゆっくりと自分へ向かう最中、自分の重心が後ろへ引き寄せられるのを感じた。

ばさりと音が鳴り、自分の視界が鳶色とびいろ一色に染まると、首もとの下、肩のラインにあわせて優しく引き寄せられつま先が浮き、さわりと自分の髪ではないくすぐったいものを耳に感じる。

「ふえ？」

水を弾く音が自分の目の前、鳶色の向こうで聞こえ、その水が落ちる音が耳に響いた。

周りからは彼女がその背後にいる人の傘に守られたにしか見えなかったが、傘の中なかにいる1つの空間せかいの中、女性ははやては自分が男性コタロウにほぼ抱き寄せられているに近い状況であることに気付く

のに数秒を要した。彼女が感じたくすぐったいものは彼の髪だったのだ。

コタロウは腕の力を抜いて、はやてのつま先を地面につけた後、傘を閉じる。

「す、すみません！」

「……………」

「ナカジマ二等陸士、片付けている最中は、足元を良く見たほうが懸命です」

「はい。すみません。も、もう一度汲んできます！」

いつもの寝ぼけ目で彼はスバルに注意を促すと、彼女は今度は気をつけようと再び水を汲みにいった。

コタロウはぱさぱさ残りの水滴を落として左腰に差し、何事もなかったように片付けを再開する。

「はやて、大丈夫だった？」

「……………」

「はやて？」

フェイトは心配して声をかけるが、彼女は傘を差していた場所とぼかんと見上げていた。

「あ、ああ、な、なにフェイトちゃん？」

「大丈夫？」

「う、うん。大丈夫や」

2人はそのままコタロウを見る。

「い、一応聞くんやけど、大丈夫か？」

彼はその言葉に気付き2人のほうを向くと、

「ひゃい!？」

「特に水はかかってない様なので大丈夫かと」

はやてを上から下に観察した後、彼女の肩を掴んで後ろ向きにして同様に視線を動かした。

「……………」

「ちやうわ!」

彼女は振り向いて、おもむろに彼の左頬をつねる。

「私は自分の心配をしてるんやなくて、あんさんの心配をしてるんや、コタロウさん!」

つねられた彼は2、3度瞬きをして、ごそりと胸ポケットからメモ帳を取り出し器用にぺらぺらめくり内容を確認した後、元に戻し、

ふにつ。

「私は自分の心配をしているのではなく、貴女の心配をしています、八神二等陸佐」

同じようにコタロウは右手ではやての左頬を優しくつねった。

その後、はやてが羞恥のあまり、顔を真っ赤にして自分のデバイスに手をかけようとしたところを、ヴォルケンリッターに抑えられたことは余談とし、メモ帳には箇条書きでこう書かれていた。

『ジャニカによる感情を豊かにする助言 アドヴァイス

その121

人がある程度のふれあい タッチング をしてきた場合、それは親密度が上がりかけている証拠。

感情を豊かにするところはそういうところにある。

上げる方法は冗談がその1つであるが、難しい。

ジャンも良く使う冗談『オウム返し』があり、それは自分にも可

能と彼は断定。

下手をすれば怒られることもあるが、たとえそうだったとしても感情は豊かになるとのこと『

第16話 『オウム返し』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

『傘』って良いですよね。

（苦し紛れの言い訳）

本当ならば今話で休暇編は終了するはずでしたが、載せたいもの一気に詰め込んだらこんなことになりました。

いえね、エリオとキャラを助けるところと、はやてを助けるところ。どちらかを載せようかと悩んでいましたが、悩むことやめてどちらも載せちゃったわけです。

その結果がこの冗長さですよ。

すみません。

はい。切り替えます。

今回初めて擬音語のみの一文を書きました。

『ぶにっ』
です。

擬音語のみの部分っていうのは文章を軽くしてしまう可能性がある

ため、めったに使わないと決めていますが、会話と地の文をなるべく読みやすいよう区切っているため、

まあ、時々くらいならいいかな？ と思って採用してみました。

如何でしたでしょうか？

もし、この使用方法が不快感に感じるようであれば、文章を繋げて再表現したいと思います。

あの、消してください依頼は『メッセージ』でお願いします。

コタロウの普段差している傘の中棒が伸びるといふ、物理学上ありえないことになっていますが、そこは見逃していただきたいところです。

突っ込まれると、すいませんしかいえません。

(折りたたみがさの要領で伸びるのですが、太さが変わりません)

後は普通の傘と同じですね、閉じて開くだけです。

よし、次話でこそ。休暇編を終わらせられるよう、頑張ります。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております！

追記：

謝辞です。

イツキさん

Jさん

景雅さん

月兔さん

月奏さん

感想ありがとうございました！

第17話 『言えばいいのに』（前書き）

なかば無理矢理、休暇編終わらせました。

な、長い。

（個人的には……いや、最長記録だ）

やすみやすみ呼んでみては如何でしょう？

長すぎるお話は、飽きてしまいますし、体力使いますからね？

（人によりますが……）

そして、タイトルが多少違うのはご愛嬌です！

それでは本編どうぞ〜

第17話 『言えはいいのに』

「ハイ、いらっしやいませ。海鳴スパラクーアツーへようこそ！」

自動ドアが開くと、受付にいる店員がにこりと微笑み、瞬時に団体と判断する。

「……えつと、大人13人と」

「子ども4人です」

その答えにスバルとティアナは『あれ？』と疑問に思う。

「エリオとキャロと」

「私とアルフです」

「うん！」

ティアナは現在いる総人数は分かっていたため、少年少女を数に入れると、リインとアルフが答え、

「えと、ヴィータ副隊長は……」

「アタシは大人だ」

顎を引いて見るスバルに下から思い切りヴィータがらみつけた。

「戻ってからの訓練に影響させても良いんだぞ」

「あつ」

ばつ悪く苦笑うが、店員はそんなことは関係がないように、団体客を奥へ促す。

「じゃあ、お会計先に済ますから、先に行つててな？」

『はい！』

「あ、そこの方」

「はい」

「傘立てがこちらにございますが」

団体最後尾をついていく男の腰に差してある傘に気付き、傘立てが脇にあることを教える。

すると彼は、傘を抜くが、

「コタロウさん、デバイスを離すのはまずいかと……」

「はい。分かりました」

なのはがこの世界では魔法という概念の理解がされていないこと

を教えると、彼は頷き、垂直に地面に軽くこつんと石突を叩いた。すると、親骨部分が2段に折れ 受け骨も対応して折れる石突が引っ込む。

「……………」
「珍しい傘ですね、どこで売ってるんですか？」

全員が押し黙るが、店員はさほど気にしている様ではなく、小首を傾げる。

確かに、構造上コンパクトになるだけで、違和感はない。

「こちらは私と友人で作ったものなのです」
「は〜」

「大切なものなので、持って入ってもよろしいでしょうか？」
「はい。それでしたら構いません」

そして、彼は嘘もついていない。

ぐっとそのまま地面に押し込むと、中棒がかしよんと1段短くなり、何処からどう見ても折り畳み傘にしか見えなくなる。

コタロウは手首を返すと、その遠心力でバンドが締まり、腰のベルトに下げる。

「べ、便利ですね」

「手動でも自動でも、折りたたみは可能です」

普段からその形状にしないのかと問おうとしたが、実際いつもの状態のほうが使い勝手が良さそうだと思い、口にはしなかった。奥に進み、何回か角を曲がると入り口につき、エリオは看板をみてふうと息をつく。

「よかった。ちゃんと男女、別だ」

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオくん」

「あ、そうだね。スバルさんたちと一緒に楽しんできて、僕はコタロウさんと……」

ちらりと後ろを見るエリオにキャラ口は思わず「え？」と声を漏らした。

「エリオ君は？」

「ぼ、僕はほら、い、一応男の子だし」

確かに少年の言うとおりであるが、少女は看板の近くに書いてある説明書きを指差す。

「でもほら、あれ」

「注意書き？ えーと、『女湯への男児入浴は11歳以下のお子様のみでお願いします』？」

ね？ とキャラ口は頷き、

「エリオくん10歳！」

「い、あ」

「うん。せつかくだし、一緒に入ろうよ」

フェイトも2人の会話に参加するために、しゃがんでエリオを誘う。

「い、いいや！ スバルさんとか隊長たちとかアリサさんたちもいますし！」

最後の防衛線を全員に聞こえるように引いてみたが、

「別に私は構わないけど？」

「ていうか、前から頭洗ってあげようか。とか言ってるじゃない」

「アタシ等もいいわよ。ねえ、すすか？」

「うん！」

「いいんじゃない？ 仲良く入れば」

「そうだよ、エリオと一緒に風呂入るのは久しぶりだし、入りたいなあ」

意外に線は低かった。

たまらずエリオはコタロウに助けを求め、

「コ、コタロウさん！」

思わず近くにあるほうの腕、左腕を引っ張った。

それは動揺のあまり結構な力が入り、ぐざんと彼の腕から音が鳴る。

『……………』

アリサやすすかたち 今日コタロウと出会った人たちは大きく目を見開くなか、エリオは手を持っていたため、ごとりと腕のつけ根が地面につく。

「え、あ、あの」

通りかかる人間も目を見張るが、コタロウは気にもせず腕を拾うと、するりとエリオの手から抜けた。

腕を左肩に落ちないようにかけると上目遣いで震える瞳の少年に彼は先程の会話から状況をある程度判断し、こういって男湯の暖簾のれんをくぐっていった。

「お好きなほうを選べばよいのでは？」

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コッ

第17話 　　『言えばいいのに』

エリオは気付けば『女湯』の暖簾をくぐり、現在は腰にタオルを巻いて浴室の扉を開いていた。

「なのはちゃん」

「なに、すずかちゃん？」

「コタロウさんのあれ」

「なんなのよ」

すずかの言葉を遮って、アリサが不満をあらわにする。

「えーと……」

「コタロウさんはうちの課に来たときもそうやったよ。2日目に腕がもぎ取れてん」

「うん。その日から日常は片腕なんだ」

自分たちも腕をなくした理由はよくは知らず、なくしたのは6年前であることを教えると、

「……はあ」

「今考えると、コタロウさん。今日会ったときから左手1度もつかってなかったよね」

「迷子の子も左手つかんでぶらぶらしてたただけだったわね」

「ご飯食べてるときもそうだったなあ、そういえば」

「自転車止めたときも両手なんて使ってなかった」

今日始めて彼を知った人は口々に声を漏らす。

出会った時の、あるいは出会ったときからの彼の意表さで腕の違和感に気がつかなかったのだ。

全員の良さが出てしまったのか、コタロウに近づこうとしてその空気に飲まれてしまったに近い。

「あー、もう、やめやめ！ コタロウさんについて考えるのやめるわ。ったく、さっき考えないって決めたばかりなのに」

「気にしないと決めても、コタロウさんの行動っておかしいから目に付いちやうんだよね」

「すずかあ、それじゃあ私たちがヘンにコタロウさんを意識してるみたいじゃない」

「んー、多分、私のなかじゃ、知り合い以上には意識してると思うけど……もちろん、アリサちゃんも」

「言っわね。まあ、否定はしないわ」

アリサはすずかを横目で流した後、足の付け根にきゅっと力を入れて一歩踏み出す。

「ほぐらっ、そんなことより、今は久しぶりに再会したのはたとお風呂満喫するわよ?」

「うん!」

「さ、なのは……」

瞬時に頭を切り替えられるアリサやすずかに関心していたなのは自分の目とは合わせようとせず、上から下へと目を動かすアリサに首を傾げる。

「な、なに、アリサちゃん?」

「ん、いや。友人のスタイルのよさに、ちょっとね」

「え、なに、すずか」

「うん。肌、綺麗だなあって」

『そ、そうかな』

見られたり触られたりする中、自分たちは特に気を使っていないとは何故か言えなかった。

一方エリオはその会話の間に、自分のおかれている状況に気がついた。コタロウの腕をわざとではないものの、引っこ抜いたために放心状態であったのだ。

はたりと視界に入ってくるの人の中に同姓は自分と同じくらいか、

自分より小さい少年しかいなかった。

「あ、エリオ、身体洗ってあげようか」

すずかの腕から何とか抜け出したフェイトが後ろから両手で肩に触れる。

「い、いえいえいえ！　じ、自分でできます！」

「……そう？」

いくら首を振っても絶対に後ろを向くわけにはいかなかった。エリオは右腕と右足を同時に出しながら近くの洗い場に座り、決して周りのものを見ないように身体を洗い始める。その時、ふともやのかかる向こう側、出口とは反対側にある扉に目がいった。

（混浴露天エリア？　にぎり湯ですが、入る際はお気をつけください？）

その間にはやても追いつき、久しぶりの友人たち揃ってのお風呂に瞳をきらりとさせる中、シャンプーだけは、フェイトは頑として譲らず、

「頭は洗ってあげるね？」

「……う、はい」

断らせない雰囲気や背中を背中にずしりと感じた。

フエイトに頭を洗ってもらう間は目を瞑ることができたため、どちらかというと落ち着いていられたが、

「じゃあ、一緒に入るうか？」

と言われたとき、とっさに念話で壁の向こう側にいる男性に話しかけてしまった。

フエイトが自分に優しさを持って接していることはわかりすぎるほどわかっていたが、頭の中では六課初出勤のとき以上に頭の中で警戒音が鳴り響き、どうにも治まりそうになかったからだ。

なにせ、自分の背中には自分でない髪の毛とタオル越しでもわかる何かやわらかいものが触れている

「コ、コタロウさん！」

「はい。エリオさんかな？」

そのため、コタロウの口調には気がつかなかった。

「あ、ああの！ そちらの出口とは反対側に露天風呂がありません？」
「ありますね。というより、今、僕はそこにいるよ。外が見えますと書いてあったから」
「今から、そちらにいきます！」
「それはエリオさんの自由だと思うけど？」

エリオは一方的に念話を切った。

「あ、あの。フェイトさん！」
「なに、エリオ？」
「僕、コタロウさんと一緒に入ります」
「……………へ？」

フェイトの間の抜けた声を聞く間もなく『混浴露天エリア』と書かれているドアを開けて、彼と待ち合わせている 実質既にいる 場所へ、もう少しで走ると言われてしまいかもしれない歩き方で行ってしまった。

「一目散やな」
「あれ、エリオは？ 一緒にお風呂回ろうと思ったのに」
「あゝ、混浴露天エリアのほうへ行っただ？ なんでも、コタロウさんと入る言うて」
「はあ……………」
「……………」

はやての視線にあわせてスバルもそちらへ動かすと、

「フェイトさん？」

「あれは子どもの成長を認めきれない親の顔やな」

フェイトが無言のまま、正面にある扉を見つめていた。

エリオはドアを開けた後、女湯を覗かれないように設計されている通路を2回ほど曲がり、湯の温度と空気中の気温の差から発生した湯気の大きさが物語る広い湯船に着いた。

湯は看板の通り乳白色で、女性あるいは男性の身体を映らせないように施してある。

人数はさほど多くはなく、年齢層は自分の5、6倍はありそうな人たちばかりで、その中に、水蒸気からか、あるいは髪を洗ったのかわからないが、いつもより落ち着いた髪の男性が目に入った。

「コタロウさん」

「……はい」

コタロウは肩まで 鎖骨が見えるか見えない程度 浸かっており、今は寝ぼけ目以上に目を細くし、近づくエリオから見ても気持ち良さそうに見えていた。

少年が彼を見下ろせる位置まで近づくと、相手は寝ぼけ目になり、顔を上げ、エリオは一言断ってから彼の右横にとぶんと浸かる。

「た、助かりました」

「うん？」

大きく湯気ごと肺に空気を入れると入れた以上に息を吐いた。

「あ、いえ、こちらの話です」

「……そう」

エリオは視線をコタロウからそらし、正面を向くと、それ以上お互い何もしゃべらなかつた。

『……………』

時間にしては2分となかったが、エリオはこちらが何も言わなければ向こうは何も言わないことをここ最近のコタロウをみて把握していた。

『……………』

(どっしり)

エリオは六課に配属されてから、これだけお互い近い位置にいるのに無言でいたことが考えても思い当たることがなかった。

(なにか、話題)

そう考えている間も、隣の男は何もしゃべらず、細い目で見ると、

(あ、そういえば)

少年は先程のコテージでの出来事について、お礼を言うのを忘れていたのを思い出した。

それに『傘』についても聞きたいことがあると考える。

(お礼を言って、その後、『傘』について話してみよう)

大体の場合、この様な話題のつなぎを考えるのは大人の役目であつたりするが、コタロウの場合はほぼほに等しい。

エリオは十分話題の流れを頭の中で整理した後、いざ話しかけようとおおずおおとコタロウのほうを向くが、

「……………」

声が出なかった。

それはただ単に、相手が気持ち良さそうに見えただけではない。

普段見るコタロウは目深に帽子を被っているためわからなかったが、髪は女性に負けないくらいのつやつやとした濡烏色ぬれからすで、毛先はところどころ跳ね上がり、その弧を描いている部分は水分で鈍く光っていた。

垂れ下がっている髪の間隙から見える睫まつげの長さは横顔のせいかわかり、ぼんやりと細い目の中にある黒い瞳は確認できないくらいずっと遠くを見ているようである。

そして乳白色の湯とその湯気がコタロウの認識を鈍らせ、そこからゆらりと消えても、疑問に思う人はここにはいないかもしれないと思わずにはいらなかった。

それくらい今の彼は妖艶に見えるのだ。

肌はほんのりと上気した桜色いよひざくらいろで、大人であるのにもかかわらず、幼さが若干残り、彼のどちらかといえば男性よりの中性的な顔が尚のことそれを引き立たせていた。

「……………ん。なに？」

「え、あ、い、いいいえ！ 別に、何も」

気付けばぴとりと自分の左手を相手の右頬につけていた。

自分でも何をやっているんだろうと手を引っ込めて、ぶんぶんと頭かぶりを振る。

「す、すいませんでした」

「特にエリオさんは謝られることをしていないと思うけど？」

コタロウは首を傾げ、頭を下げるエリオは、そこでもうひとつ何かに気付いた。

(……あれ？)

はたりと顔を上げた先には依然としてコタロウは首を傾げている。

(えと、今……)

「コタロウさん？」

「ん。なんだい、エリオさん？」

首を戻して反応するコタロウとは逆に、エリオが今度は首をかしげる。

この数分過ぎにキャラコがエリオやコタロウと一緒にいるために駆け込んできた。

「……………」
「そんな気になるんやったら、行けばええんちゃう？」
「いや、それは……………」

キャロも向こうに行ってしまったことにフェイトはちよっぴり寂しさを覚えていた。彼女ははやてのもっともな答えに、肩以上に湯船に浸かってぶくぶくと音を立てる。

「フェイトちゃんって、かわいたがりだよね」
「そう、かな」
「自覚がないんじゃない、決定的ね」
「あ、う」

さらにすずかとアリサに^{からか}揶揄われて、言葉を返せない。

しかし、それはエリオとキャロを保護した本人にとっては当たり前で、一緒にいたいのに離れていく2人の成長にどこかしら否定的であった。もつと甘えてもいいのにとフェイトは思う。

「よし、リイン。次はこっちだ」

「はいです」

その最中、ヴィータとリインはなるべく多くの風呂に入るということに興じていた。

ヴィータ本人は入る前は「楽しまない」と隊長陣である風格を出していたが、湯船の温度とは別に、その熱はいくら下がったようだ。憎めない妹に付き合っている姉というふうにも見える。

彼女の口調はトゲのある厳しいものであり、彼女を良く知らない人たちは話しをかけづらい人物となるが、彼女を良く知っている人たちは、誰かを叱っても決してその人の愚痴を叩かず、自分たちが気付かないところに気付き、感心することが多々あるため、彼女は本音で向き合えるよき友人でよき上司であった。

その彼女は今、エリオやキャロが消えていったドアを指差している。

「ヴィータ、そっちは混浴だぞ」

「別にタオルしっかり巻いていけば問題ないだろ」

自分が大人であることも、自分の体格体型も自覚しているため、頑丈に防備しておけば、タオルが肌蹴はだけない方法を自ら考案している。さほど視線を浴びないだろうと考えていた。

「じゃあ、ついでにエリオとキャロの様子もみてきてくれんか？
フェイトちゃん、いろいろと不安なんよ」

「はいです〜」

「念話で話してみればいいのに」

ふと、念話でもある程度状況を知ることが指摘すると、フェイトははたとそれに気付く。

「……そっか」

彼女は目を閉じてエリオとキャロに話しかける。

「エリオ、キャロ？」

「はい。フェイトさん」

「もしかして、探索機サーチャーに反応が？」

「う、ううん。違うの」

「フェイトちゃんがな、寂しいんやて〜」

「は、はやて!？」

「さっきのお返しや」

「うう。あ、あのねそっちは大丈夫、滑って転んだりしてない？」

「はい。大丈夫です」

「気をつけてます」

はきはきと答える2人にまた寂しさが僅かに増す。
念話であるため口調はいつもと変わらないが、眉は八の字になっ
ていた。

「何かあつたら言つてね」

「……あ」

「……はい」

『何かあつたら』という言葉の返事にエリオとキャロは齒切れ悪
くも頷く。

「何かあつたの?」

「い、いえ」

「あるといえば、ありますし……」

「ないといえば、ないです」

「どういふことなの?」

「気になるなあ」

そこで念話を隊長陣

ヴォルケンリッター含む

にも広める。

「ん、はやてちゃんどうしたの?」

「なんや、エリオとキャロがコタロウさんとなんかあつたみたいや
で?」

「コタロウさんが?」

『え、コ、コタロウさん混浴にいるんですか?』

「……どうしたんだ、お前等？」
『いえ、なんでも』

リインとシャマルが偶然にも声が重なり、2人とも敬語なのもヴィータは気になった。

「それで、なにかあったの？」

フェイトはまた念話を再開する。

本当になんでもないことですが、また驚いてしまいました。と言葉を繋いだあと、ぽつりと言葉を吐いた。

「コタロウさん、僕たちをファーストネームで呼ぶんです」

「あと、苦笑いくらいの表情も見せてくれます」

『「……へ〜」』

今浸かっている湯加減がちょうどいいのか、なんだそんなことかと軽く流そうとする。

ファーストネームで呼んだり、苦笑いするくらい普通の人なら誰でもあると。

『「……何？」』

だが、ふと考え直してみると、彼が自分たちのことをそんな風に呼んだこともなければ、困った顔以外の笑った顔などみたことがない。

一瞬、興味本位で行ってみようかと、視線を混浴露天エリアへ通じるドアに向けるが、彼女たちは女性であり、恥ずかしさのほうがそれよりも大きく、

「なんだ、じゃあ見てきてやるよ」

ほれ、いくぞリイン。と後ろですこし戸惑っている小さな少女の手を引いて、のしのしと混浴露天エリアへ向かっていった。

「んぐ、というより。制服を着ていないとき以外はこのような口調みたい」

「みたい、ですか？」

「はい。ジャンとロビンに言われてからかな。制服時の口調、それ

以外のときの口調を録音してみるとその通りだった。今はこの状態のときでも制服時の口調で話すことはできるよ」

「あの、その逆は」

「それは無理」

そうですか。とエリオとキャラは複雑な顔をして頷く。

「エリオくん。コタロウさんって……」

「うん」

『「すっっい真面目！」』

コタロウと接する機会があつた今日を除く全て、エリオとキャラは制服という媒体のものを通してであつた。

ここへ向かう前、いや、この地球の日本にいたとき自分たちは私服であつたが、彼はつなぎを着ていた。つまり、コタロウにとってはつなぎも制服の1つなのだ。

彼は制服の着る着ない、仕事とそれ以外で見事に口調を切り分けている。

エリオやキャラをファーストネームで呼んでいるのは自己紹介時にそれでも構わないと断っていたかららしい。

「あの、今日は休暇なのに、どうしてつなぎなんですか？」

「つなぎが一番動きやすいからかな」

今日は散策も兼ねていたので、動きやすい格好をしていただけと

いう。

エリオは気付けばキャロについても意識が薄くなり 彼女が入ってきたとき『レディは露出を多くしてはダメ』としっかりコタロウはタオルを巻かせた 一緒に会話をしながらコタロウに接している。

先程、彼女に瞳を合わされ笑顔で『いつも助けてくれてありがとう』と言われたときにはどきりとしたが、現在は彼女も含めゆったりと時間が流れていた。

「私服は持つてはいるけど、めったに着ることがないため部屋の荷物の中にまだ収納されたままだね」

「……そういえば、私たちも全然着ないね」

「うん」

確かに訓練ばかりで持つてはいるが着ることは少ない。今日のように私服を着ることは彼の言う通りめったにない。

エリオが今日喫茶店で話していたことをもう一度聞こうとしたとき、

「お、いたなチビども」

「ヴィータ副隊長と」

「ど、どうもです」

「リイン曹長？」

1人が後ろの1人の手を引いてあらわれた。

「ど、どうしたんですか!？」

「ん〜。妹の世話と新人どもの世話」

エリオは既に寄りかかっているためそれ以上後ろへは下がれないのに、思い切り後ろへ下がろうとする。

コタロウは彼女たちがあらわれ近づいてきても少年とは違い表情は変わらない。

「んで、コイツが笑うって?」

ヴィータはコタロウの正面を陣取りざぶんと入り、ジトリと彼を見ても、いつも通りの寝ぼけ目でした。

「ぶ〜ん。コイツがねえ」

彼女の隣にリインも浸かり、一度瞳だけをきよろきよろ動かした後、

「い、い〜お湯ですね〜、コタロウさん」

「はい、リインさん」

「……お、お〜」

本当ですう。とばちくりと瞬きをしてまじまじとコタロウを見る。そして正面にいなながらリインはエリオを同じ感覚に陥り、一度目を擦りもう一度彼を見ると、そこには確かに彼がいた。

それからヴィータとリインも加わり、今日の彼の動向について問いただすと、2人も彼の口調が服装を着ることによってのみ起こることであると自覚し　ヴィータに対しては階級をつけていたが始めは違和感に首を傾げたものの、彼の目を細めた表情と、柔和な口調から、とっつきにくさが抜けていった。

「お前、意外に普通だな」

「はあ」

「どうしていつもその口調じゃないんですか？」

リインは会話の間何度か同じ質問をし、そのたびに同じ受け答えをする真面目なコタロウをみてキャラ口はくすりと笑ってしまい、

「コタロウさんって、お兄さんみたい」

つい、言葉を滑らせてしまった。

「コイツが兄貴イ？」

「あ、いえ。すみません。というよりリインさんが妹みたいに見える
て」

初出勤から帰ってきたときに思ったのはこれだったのだ。あの時の空気に良く似ており、はたから見れば自分のお礼に丁寧ていねいに答えただけにしか見えなかったが、自分が自分を俯瞰ふかんして見たとき、丁寧な言葉遣いを除けば兄妹あやうだいのように見えていた。

「わ、私が妹、ですか？」

「え、あう。すみません」

「それとアタシも若干その目で見たる」

「……すみません」

「謝んな。認めてるぞ、それ」

戻ったときの訓練が楽しそうだと不敵に笑うが、コタロウの身長が低いといっても、今周りにいる全員はその彼より低いのだ。それを引き立たせているのは間違いない。

だが、リインはぼそぼそと「ネコさん、お兄さん、ネコ兄さん？」

と繰り返しているだけで、否定的な意見は出なかった。

(は、コイツ、なんだかんだあっても嫌われてなねえんだな)

ヴィータはこの捉えようのない彼が案外リインや新人たちに気に入られていることに内心感心していた。

(リインやエリオたちが子どもっていうのもあるが……というより、コタロウと一緒に風呂入るなんて誰がいるんだ?)

はやてから聞く限り、コタロウは基本メカニックの下につき、ただ命令を聞いていただけで、ここ六課のように 今日の彼は休暇中であるが 彼を自由にさせる場所なんてなかったようである。機械士としての彼ではなく、日常の彼を知っている人間がジャニカ、ロビン以外にいるのだろうか？ と疑問に思うが、答える人間はこの場にはいない。

(まあ、アリサさんの言ったとおり、気にしたら負けだな)

そこで思考を打ち切って、思い切り身体を伸ばした。

「おい、リインそろそろ戻るぞ」

「え〜」

「え〜じゃねえ。のぼせるぞ」

「はい」

ヴィータに合わせて、しゅしゅ彼女は立ち上がり、

「じゃあ、僕もそろそろですよ」

「……あ、僕も」

「え、エリオくん戻らないの？」

「あ、フェ、フェイトさんには先に出ますって言うておいてくれる？」

「うん。うん、わかった」

やんわりと断ることに成功したエリオは大きく息を吐き、コタロウに合わせて立ち上がろうとしたとき、

『……………』

ヴィータ、リイン、エリオとキヤロはコタロウから目を逸らすことができなかった。

それは別に彼の腰にしつかりと巻いてあったタオルを注視したわけではなく、彼の左腕とその背中であった。

4人はいずれも大切な人を護るためならば、何かを賭す覚悟はできている。しかし、3人はまだ若く、1人は何度か死線を越えてはきたが現在まで五体満足であり、そのために自分の何かを失ったことがなかった。

この目の前にいる男の左腕がないことは六課配属当初からわかっていたが、それは制服越し、布越しである。

しかし今はそのようなものはなく、裸である上半身がよく見え、彼の五体満足でない姿がはっきりと確認できた。

彼の左腕、義手の接合部は日常生活に支障をきたすことなく処置が施されているものの、悍ましく、骨がある部分は連結箇所なのか黒くくぼみ、異質を放っていた。

そして、彼の背中、厳密には左肩から平行に右腰骨までには熱された大きな鉄骨で押しつぶされたような跡が残っており、それに沿うようにリベットの跡が背後に残されている。

彼等はこのようなものを目の当たりにしたことなどなかった。

いつの間にかヴィータたちよりも前にいる彼は湯気ではやけているはいるものの、幻想などではなく現実であることは先程エリオが

前もって確認していた。

また一步彼がドアに向かって進むと、4人は思考が重なり、

『（身体の一部を無くした時以降、普通でいられるのだろうか？）』

少なくとも彼はそれを体現していることは自明である。

気付けばコタロウ以外は自分の左腕を握り、

『（……ある）』

幻想なのではなく現実にあることを確認していた。

お風呂から出ると余韻を楽しむ間もなく、探索機からの反応が見られ現場に急行する。

ティアナはシャルとリインオフティック・ハイトに視認不可をかけ、はやてを除く隊長陣は新人たちのサポートに力を注いでいた。
当のはやてはというと、

「……………」

現場より少し離れたところでコタロウのキータッチさば捌きに目を見開いている。

以前ゲンヤやなのはに言われたことは間違いなく事実で、彼は片手でありながら今現場に急行している彼等の倍ある画面を見てデータを収集している。

何故コタロウがいるかというと、彼曰いわく、「ケーキを貰った時点で休暇目的は全うしました。新人たちのデータを収集いたしましたよるか?」というもので、なのはは「そう出来るのであれば、申し訳ないが」と、お願いしたのだ。

「うーん。聞きしに勝る」

はやての言葉は断定で、コタロウからは返事は無い。

(これは圧巻やな。機械士マシンナーは皆こうなんかなあ?)

書類整理が凄いのは知っていたが、この速さと正確をもった人材が他にもいるのかと思い、

「コタロウさん」

「はい。なんでしょうか、八神二等陸佐」

（お風呂のときに念話でもいいから名前呼んでもらえばよかったなあ）

「他の機械士の皆さんも、コタロウさんほど早いんか？」

「……わかりません。機械士同士は配属してから一緒に仕事をする
ことがありますので。もちろん顔は全員知っていますが」

「ん〜。ということは、もしかして出向がほとんど？」

「課に残ったり、出向に行ったりと色々ですね。私の場合は、2割は残り、8割は出向です」

その間もコタロウは表情は変わらず、キータッチの早さも変わらない。
ない。

（コタロウさんほど早くは無くとも、処理速度は異常の域なんやろなあ）

しかし、機械士を見出した人間 出向先の上官 は危険も同
時に考えなければならぬことにはやては気付く。

（現場の領分を越えて仕事をこなしてしまえば、成長する人間がいなくなってしまう）

彼女の思うことはもっともで、新人が覚えて成長する過程を全てこなしてしまうのであれば、彼等は成長できなくなってしまう。

現在六課の新人はフォワード陣しかおらず戦いに関しては問題ないが、シヤリオやアルトたちはまだ優秀であつても成長途中だ。彼女たちにとって成長の起爆剤であるわからないものに対しての原因究明が出現することなく、解消してしまうのは彼女たちの成長を止めってしまうことになる。

はやては機械士の取り扱いを1つの課題として、ある程度の規制をかけることを念頭に置くことにした。まず、帰ってから彼の修理箇所に通さなくてはと思い、顎に手を当てて空を見上げると、

「……………ん？」

先程まで綺麗な星空であつたのに、気付けば暗雲が垂れ込んでいた。

(雷も鳴らんかったんで、気いつかへんかったわ)

「はやてちゃん、一雨きそつ」

「せやなあ」

「主、ここは私たちが見えますので」

「はやては降られないところに」

「私たちはバリアジャケットなので濡れにくいですが、はやてちゃんは」

なら、私もセットアップするだけや。雨一つくらいで部隊長が避難するわけにはいかんよ。と返した矢先に、

「はうっ！」

「リイン、戻ってきてもええで？」

「だ、大丈夫です！」

雷一つ、

「……あ」

「降ってきたな」

ぼつりと雫一つ頬に当たる。

「コタロウさん」

「なんでしようか、八神二等陸佐？」

「……一言いつてくれるとありがたいなあ」

「申し訳ありません」

彼ははやての左隣について、驟雨しゅううにはさりと傘を開いていた。

「持ちましようか？」画面操作ありますやろ？」

「いえ、構いません。後で編集すればよいことですから、手間は変わりません」

そうか。と無理に代わることはしなかった。傘といってもデバイスであり、情報収集端末でもある。自分のものでないデバイスに簡単に触れても良いものかと思いとどまったのだ。

『……………』

(どないしょ)

だがコタロウとは違い、画面を見ている、はやては無言の空間に堪えられない。

ふと彼を見てしまう。

彼は画面から視線を動かさなかったので、横顔がよく見えた。

(睫長いなあ、肌も綺麗や)

ふにりと彼の右頬を人差し指で押してみる。

「なんででしょうか、八神二等陸佐？」

「い、いや、なんでも」

「……………そうですか」

視線も彼女に向けなければ、特に振り払うということも彼はせず、画面から目を離さないので、はやても見習って視線を画面に戻した。

画面の向こう側では始めは手探りなところがあつたものの、徐々に弱点を見出し、封印対象を発見する。

今日ここへきた派遣任務とはロストログアの封印と回収。後報で明らかになったことだがレリックでもなければ危険性もなく、視認してみるとゼリー状のぼよぼよ跳ねるものであつた。それは無数確認されたため本体を見つけていたのだ。

「うん。ええよ。何事も経験や」

コタロウにも聞こえていた念話の内容だと、キャラが封印をやらせてくださいとラインに申し出たらしく、それを了承していた。

「ちょうど良く、雨もあがるみたいやね」

程なくして雨は上がり、事態も收拾する。

そして、全員でコテージに戻る最中に、ヴィータが隣にいるコタロウに向かって口を開く。

「お前、何で左袖^{ひだりそで}だけ濡れてんだ？」

「濡れないように努めたのですが、濡れてしまったようですな」

「……なに言ってるんだ？」

ヘンなヤツ。とそれ以上は気にせず、前にいる新人たち、隊長陣
たちに追いついていった。

「……言えばええのに」

彼の言葉は聞こえていたのに、前歩く何処も濡れていない彼女の
言葉は誰にも聞こえなかった。

「もう、帰っちゃうんだね」
「一晩くらい泊まっていけばいいのに……ってわけにもいかないの
か」

すずかとアリサは1人を除いて遊びで来たわけではないとわかる

と、迷惑をかけるわけにもいかないとすごすご引き下がった。
他の近親者たちもまた会いにいらっしやいと次の再開を約束を取り付けると笑顔で見送る。

『今度はちゃんとお休みの時に来るから』
『また絶対遊びに来ます』

1人を除く六課の人間もまた会いに行きますと宣言して、次回を楽しみにする。

「あゝ、コタロウさん」

「アンタは連絡することを忘れないように」

「時々、コタロウさんが何していらっしやるのか、そちらは何をしていますか？ みたいな感じで構いませんので」

「わかりました」

「しなかつたら、フェイトに頼んで雷落してもらっから」

「雷、ですか？」

「コ、コタロウさん、そこで私を見なくても落としませんから大丈夫です」

六課の人間とも地球の人たちとのやり取りを笑顔でみるエリオとキヤロであったが、スバルは自分の親友が何か浮かぬ顔をしていることに首を傾げる。

「ティア、せっかく任務完了なのに、何でご機嫌ななめなの？」

「いや、今回の私、どうもイマイチね」
「そんなことないと思うけど……」

彼女が言うには隊長たちならもつと効率よく事態を收拾させることができ、短時間で終わらせることができたということだ。

それは当然といえば当然であるとスバルは同意するが、自分たちもよくできてたと褒めるが、親友はどこか納得していないようであった。

はやてとシグナムがこの任務の依頼者に連絡を取る間、フェイトとリンに新規でメールが届いて内容を確認する間、なのはとヴィータがきちんと後片付けができているのを見てまわる間、ティアナはきゅつと口を結んで、明日の訓練で課題を自分でも見つけようと自分に対する疑念を打ち消した。

「それじゃあ、戻ろうか」

『はい！』

そうして、友達、家族に見送られながら六課全員はミッドチルダへ戻っていった。

第17話 『言えはいいのに』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

……な、長かった。

私は毎度のことですが、文才がありません。

というのも、文字をとこすことに時間が掛かるのです。

執筆時間は20時間弱は軽くかかっています

は、はやさが欲しい。

今回はおよそ30k

3話分です。

もう、どうしてくれようか。

次回終了宣言はやめにしよう！

うん、そうしよう。

今回のコタロウの性格ですが、

服装によって口調を切り替えるというものです。

ジャニカ、ロビンは特別で、また他に理由があります。

こちらは今後の私にかかっているわけですね。頑張ります。

次にコタロウの顔立ちですが、私の描写が全てです。

（今の私のちからそのものですから）

なので、イメージというものはありませんね。

過去に私が読んだ漫画や小説などからなのは否定はしませんが。

エリオくんは女湯に行かせることにしました。

これは簡単で、原作だと男湯から女湯だからです。

その逆を取ってみました。

(当然、ご都合主義もはいつてますよ?)

彼とキャラのやりとりはズバツとカットいたしました。

(だって、長いんだもん)

カットついでにもう一つ。

この話でコタロウのメモ帳の詳細についても述べようと思いましたがこれもカットです。読者さんたちにはこの前の話でわかったかもしれませんがね。

だから、キャラに対してタオルと巻きなさいということができたわけです。

天候も思い切りいじってしまいました。

原作重視のかたすいません。

いやはや、本当に長いのであります。

息抜きで書き始めたものなのに、今回は疲れました。

私が10kというノルマを課しているのは、そういった面もあります。

疲れて、やる気をなくすのはやめたいんですね。

そういう面も含めて『前書き』やこの『後書き』は、文字ミス上等
適当に脳みそそのままでお送りしています。

なので、不快なのであればこちらは読まないほうがよろしいかと思
います。

解説の前後も支離滅裂です。

まあ、ネット小説の醍醐味のひとつであると思いたいです。

では、次回は来週更新できるだろうか？

自問自答がやみません。

なにせ次はアレですからね。アレ。

次週更新不明ですが、次話はしっかり考えてあります。

次回 第18話 『今日という日この時だけは』

あれかな。

うん。

言ってみよう。

次回もお楽しみに！

うん。

やっぱりやめよう。

烏澁おじがましい。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております！

解説コーナー

濡烏：ぬれからす

日本人女性の特有とも言つべき理想美である髪の色として使用しています。彼についても使用してみました。

俯瞰：ふかん

高いところから見下ろすところ。私の場合、三人称の中の対象者がさらに自分を三人称として扱うときに使用したりします

五体満足：ごたいまんぞく

東洋医学では「筋・脈・肉・骨・皮」。仏教では「手・足・肘・膝・額」であったりします。一般的には四肢と頭で5つとしており、それを採用しています。

悍ましい：おぞましい

嫌な感じですが、すこし恐怖も混ざった感じですかね。

リベット：りべっと

鉄骨に打ち付けられているボルトのことです。過去の詳細を書こうかどうかは検討中ですが、おそらく書くことは無いかな？ 自キヤラクターしか出てこないの……

驟雨：しゅうう

にわか雨のことです。ザッと降ってパッと晴れるあれです。

最後に謝辞です。

イツキさん

笑い顔の猫さん

景雅さん

遠野悠夜さん

上条信者さん

感想ありがとうございました！

返信、毎回遅くてすいません！

ちなみに、前話に対する謝辞ですので今話の謝辞はまた次話にでも

では！

第18話 『今日という日この時だけは』（前書き）

今回から、当分前書き、後書きなしが続きます。後書きが入ったときが1つの節目ということと判断していただければと思います。なので、申し訳ありませんが、謝辞も控えたいと思います。感想に答えるだけとなってしまいますが、許してください。

さて、この話から読者にとって『つまらない』あるいは『イメージを崩した』と思われるかもしれませんが、もともと、主人公を食い込ませていくので、だんだんと変わっていくのは当然といえばとうぜんなのですが。。。

（すでに、前話まででかなりかわってますしね）

なぜかというところ、稚拙な文章に日本語の諺や、他国の諺や言語表現をこれから織り交ぜていくからです。

今までも織り交せていますが、それ以上に。ということですが。

私のある程度の独自設定、独自解釈も入ってきます。

なので、不快になられるようでしたら拝読されないほうが、懸命です。それでも、読んでいただければ、嬉しいことこの上なしです。

感想いただけると、飛び跳ねて喜びます。

今回は失礼して前書きに……

感想、指摘お待ちしております！

それでは本編どうぞ

前回までの謝辞

ゆうさん、イツキさん、景雅さん、高橋さん、月兔さん
感想ありがとうございました！

第18話 『今日といっ日この時だけは』

外では劈ひびくような音が鳴っていても、2人はそれほど気にはならなかった。

理由は簡単で、

「パパとママはどれにのってるのかなあ？」

「さあ？ どれだろうねえ」

指折り数えて待っていた大切な人に会えるからである。

人の行き交かう建物はそのほとんどがガラスのような透明な壁で囲まれており、音と風を弾き、人の声、歩く音、館内放送以外は聞こえないというものも、もちろん重要なことであるが、会えることの前には1つの要素でしかなかった。

「迷子にならないようにしっかり手を繋いでいるんだよ？」

「はい！」

2人の年齢は離れすぎているのか、1人は左肩を下げ、相手の負担にならないように手を繋いでいる。いや、実のところ小指、あるいは人差し指を差し出すだけで、相手の手のひらには十分だった。

『アテンションナリーズ
』ご案内申し上げます
』

館内放送が広いフロアに響き渡り、距離があるせいか、遠くから聞こえるものは山彦のように遅れて周りの人たちの耳に届く。

「ねえねえ」

「ん、なんだい？」

アテンション
ナリーズ
「ごあんないもうしあげますってなあに？」

「『よく聞いてください』って言う意味だよ」

どうして、わからないように言うの？ と、上目遣いでさらに問いかけることがわかっていたので、さて、このコにどう教えればよいかと考え、上を向くが、すぐに腕をぐいぐい引っ張られた。

見るともう既に次の興味へ移ってしまったようだ。この年齢はなんにでも興味を示し、次から次へと右から左、前から後ろと瞳をきらさせながら、周りから情報を吸収している。

この幼すぎるコは、最近文字も覚え始め、新聞を読んでいる最中にも「これってなあに？」と聞いてくる始末だ。

考えた相手は自分の住んでいる国の言葉に少しため息を吐くことがある。それは特定の文字を全て覚えてしまえば、意味はわからなくとも読めてしまうことだ。別の国であれば、1つの文字で多くの意味を持ち、この年齢でも読めない文字があるという。

しかし、それはこの手を繋いでいるコがしつこく聞いてくる場合に限る。このコに教えること自体は嫌いではないのだ。それを嫌ってしまつては、兄失格だろう。

嫌いでなくて良かったと思う。

「パパとママのひこーきがくるまでどねくらい？」

「ん〜、もう着いてるよ」

「ほんとー！」

「うん。ほら、多分あれさ」

彼はしゃがんでウィンドウの外を指差し、1機の旅客機を見せる。その旅客機は速度を落としながら、緩やかに滑走路を走り、乗客用ドアが降り口と連結しようとしていた。

「じゃあ、はやくー！ はやくーこー！」

歩幅の差を駆けることで差をなくしリードして、兄の手を引っ張っていった。

最後のブレーキを感じた後、ベルト解除許可がおりると、がちやりとベルトをはずして、夫婦はすこし顎を上げて息を吐いた。

「毎回思うが、離陸と着陸に感じる重力はどちらも好きになれん」

「ものは考えようですよ。好きなときもあるでしょう?」

「好きなとき?」

「ええ。この空港ではこの重力を感じなければ、あのコたちに会えないんですから」

「なるほど。ものは考えようだな」

相手のキャリアバッグを代わりに持ちながら、飛行機を降り、コンコースを歩く。

ウィンドウの向こうでは飛行機専門のメカニックたちが点検を始め同時に燃料を補給していた。

1週間ぶりにミッドチルダへ戻ってきた夫婦は、おそらく出口で待っているであろう2人の子どもたちと会えるという未来に胸が高鳴ってくるのを感じ、だんだんと足の運びが速くなる。

離れている間、每晚連絡を取っていても、現実に会えるとなると嬉しくてたまらないものだ。もちろん、自分たちの職業が子どもたちに会えない原因になっているので、申し訳ない気持ちもあるが、自分たちの息子が背中を押してくれたため、迷うことなく今の仕事を続ける。

彼は自慢の息子だ。そして、もう1人の自分たちの愛の対象である娘もまた自慢である。

「あ、パパとママだー」

夫婦の予測は正しく、出口を抜けた途端に、こちらに向かって走ってくる女の子が見えた。

「こーらっ、そんなに走ると転んじゃうぞ?」

その女の子の後ろでは、半ば苦笑いで歩いてくる息子が見えた。
女の子は母親に抱きつくというよりも、体当たりに近い動きで抱擁ほうようをねだる。

「ティア、お兄ちゃんとは仲良くしてた?」

「うん!」

「ティアダ、私たちの娘を泣かせたりはしなかったらうね?」

「寧ろ、父さんたちがその原因をつくる元になり得るんだから、自覚して欲しいね」

足元で女性と女の子が抱き合う中、男性2人はぎゅっと強く握手を交わし、『泣かせてなんていない』と無言で答えた。

今日は久しぶりにランスター家が4人揃った。

シルフィオ・ランスターとローラ・ランスターは2人とも自分の目で見ない限りは何事も信じない人間であつた。

夫であるシルフィオと妻であるローラは異なる職業であるものの、同じ分野の仕事に就いており、シルフィオは室外装飾を、ローラは室内装飾といつた建築分野でそれぞれ自営業で活躍し、そのほとんどを同じ建物で互いの分野外れることなく腕を振るつていた。

ティータは今年で17歳になり、時空管理局に勤めている。入隊年は普通の人よりも遅く、やっと最近3等空士から1つ階級の上がつたばかりであるものの、階級と実力の伴わない才覚をすでに見せ始めていた。

入局を遅らせた理由とは単純で1つは通信課程にて学業を専門にもつと深く修めたく、両親は『すねかじりのしようもない息子』と苦笑いながらも大賛成。2年間入局のための体力づくりと言語を中心とした各管理世界の政治・経済を学んだ。既にこの世にいない祖父の処世訓『学業とは何事にも得がたい見えない財産の1つ』を頑なに実行したのだ。

その甲斐あつてか、入局後の新人という期間で擢んでた実力を発揮し、2年というブランクをいとも簡単に凌駕することになる。

もう1つの理由は両親の仕事とティアナの面倒を見なければならぬところにあつた。『家族とは何事にも得がたい見えない財産の1つ』という同じくこの世にいない祖母の処世訓も実行し、両親からは『私たちではなく祖父母から生まれたのではないか?』と擲揄

われ、『それじゃあ、僕は父さんのお兄さん、それとも弟？』とティアナを抱き上げながら苦笑していた。

ただ、執務官になるという自分の夢を諦めたことは一度も無い。ティアナが幼く、多忙を極める執務官職であるが、両親は『その時は自分たちが大人になるだけ』と大いに息子の夢に賛成した。自分たちのどちらかが領分を狭め、家庭に従事するだけで、そもそも今の状態がおかしいのだ。寧ろ息子に甘えすぎていると思いつながら、仕事をしていることに感謝の念を感じずにはいられなかった。

今はここから飛行機でおよそ10時間かかるある土地のとある大きな建物の装飾を依頼されているが、今回を最後にもっと身近で小さな範囲で仕事をしようと考えていた。

建築士と協力しながら大改装をし、集客性を高め、地域に溶け込めるものといったかなり大掛かりなもの、何とかかたちになり後はオープンセレモニー開店記念式典を待つだけである。

「セレモニーはいつ？」

夕食の後、ローラの隣で皿を洗うティードが垂れた袖をもう一度捲り上げる。

「確か、来週ね」

「ティアの入学式の次の日だな。沢山、写真とってやるからなくティア」

パパ、おヒゲがイタイ。とティアナは頬擦りをイヤイヤとして突き放そうとするが、特に嫌ってはいないようである。

「それよりもティード、お前はまさか、ティアの入学式に出ないつもりじゃあるまいな？」

「一応、僕も勤めている身なんだけど？」

「なんだ、『休め』という風には聞こえなかったか？」

「聞こえていたからこそ、そうやってやんわりと断っているんじゃないか」

「ローラ、反抗期が終わったと思ったら、再発したぞ」

「あなた、ふざけてないでティアと一緒に風呂に入ってきてくださいな」

「どうやら味方はティアだけのようだ、お風呂に入るうか、ティア？」

「ママとはいる〜」

「う」

『それは残念』

一発ですつぱりと断られたシルフィオはすごすごと立ち上がり、お風呂に向かった。

「いつも悪いわね、ティード」

「それは父さんのこと、それともティアのこと？」

どちらもよ。とローラはくすりと笑い、エプロンをたたむ。

「気にしないでよ、母さん。僕だって迷惑かけてるさ」

「2年間のこと？ それはティータの人生のほんの一部でしかないわ。それにその間、ティアのことも見てくれてたでしょう？」

さあ、座って、お茶にしましょう。とローラはティータをテレビの前のソファに座らせると、まるでそれが自分の指定席であるかのように、ティアナは兄の膝ひざの上に座り込んだ。

ティータは彼女の頭を撫でていると、

「それでも」

「それに、迷惑と考えるはいけないわ。私たちが言うならともかく、息子、娘には言われたくないものね。それは当然であり、私たちは迷惑だなんて1度も思ったことはないわ」

「……………」

「今の仕事が終われば、今まで以上に『甘えて』構わないわよ？」

「母さん、一応、僕は勤めている身なただけど？」

「そうだったわねえ。さあ、ティア、こっちにおいで」

「うん！」

ティータの対面に座ったローラが両腕を開いて迎えると、今度は特別指定席にもそもそ移動する。

「息子が優秀でも親は悩むものねえ」

「……………母さん」

お互い困った顔をする中、くりくりと瞳を輝かせるティアナだけ

が不思議と首を傾げていた。

やはり、ティータは参加することができなかったが、入学前の写真は全員で写すことができた。ティアナは家では甘えることが多くても、式では立派に1人で行うことができ、どうやら、長女も長男と同様に甘える時間はひどく短いだろうと思わずにはいられなかった。

シルフィオはティータが帰るなり、現像した写真を1つ1つ懇切こんせつ丁寧に語ると、この夕食前と夕食中、夕食後、入浴後、就寝前と計5回は聞かなくてはならないだろうと内心頭の中で考えていた。

（父さんみたいなのを『親バカ』というんだらうなあ）

年の離れたティアナは写真を手にとって、「これ、ティア」といって次々と自分の写真を丁寧に並べている。

「可愛く撮れたろう、ティア？」
「よくできました」

彼女は頭にある小さい辞書の中から兄がよく自分に使う言葉を取り出し、父親を褒める。

これで今度ティアナに会えるまでのつなぎにしておこうと、飛行機に持って行くリストに追加した。

「……………」

「なんだ、ティード。一枚一枚写真の右上にお前の顔を貼り付けてやるのか？」

「いや、子どもを可愛がる親っていうのは皆こうなのかと、すこし離れた視線でみるのさ」

「お前は手の掛からない優秀な息子だったからなあ」

「進行形にはしないんだ」

「今は小憎らしい優秀な息子だよ」

どうして、こんな手の掛からない子に育ってしまったのか？と息子を褒めているのかわからない言葉を吐き、やれやれと首を振る。家族というのは1つの社会のようなもので、1つの定義では片付かないものだ。ランスター夫婦にとって、甘えてこないティードは物足りないことこの上なかつたらしい。

「甘えるときも、どこからしら大人っぽい」

「ん、褒めてる？」

「褒めてはいるが、裏があると思ったほうがいいな」

「それ、自分で言うんだ」

「ま、どちらも私たちの息子、娘にはかわりないさ。私が『親バカ』
ということも自覚しているぞ?」

「うん」

(父さんたちには敵かなわないなあ)

「まだまだ、敵うまい?」

「父さんたちは心が読めるの?」

何年お前を見てると思ってるんだ。と楽しそうに笑って、ティア
ナを撫でて写真をしまい立ち上がり、ぱしんとティードアの額を指で
弾く。

「また、明日から頼むぞ」

「うん」

さあ、ティアナ。今日はパパとお風呂に入ろう。と行ってティア
ナを抱え、まず写真をバッグに入れるために寝室へ向かった。

ティードアはぎしりとソファに深く腰を沈み込ませ、先程まで写真
のあったテーブルから視線を正面にある棚に目を向けると、写真た
てがあることに気付いた。

(……全く、いい親を持ったよ、僕とティアは)

玄関前で撮影した家族揃っての写真に、苦笑しながらふうとため息をついた。

「じゃあ、無事にセレモニーは終わったんだね？」

足元ではティアナが「つぎ、ティア〜」とテレビ電話の交替をせがんでいる。

「ああ、盛大だったぞ〜。まあ。私たちは簡単に紹介されただけだがね」

これは建築士も含めてであるが、芸術的なものではない建造物の実質の製作者は目立つことがない。開店記念式典というのは製作者が作成物を見る最後の時である。もちろん、いつでも式典が催され

るわけではないが。

「今日すぐに発つ予定だから、明日の朝にはそちらに着くよ。こっ
ちの世界が時差が同じで助かった。おかしな時差ほけも発生しない」
「ゆっくりしてきてもいいのに……」

「父さんはそれでも構わんのだがね、ローラがやくティアに
「式典が終わった後、開口一番に言ったのはあなたでしょう？」

割り込んでローラも画面に映る。

「親バカだねえ」

「思っても子どもが言うな。お前じゃ分からん」

よいしょつとティータはティアナを抱き上げる。

「分かってるつもりだよ、妹バカさ僕も」

「パパ〜、ママ〜」

それ以上は言った自分が恥ずかしいのか、すぐに妹に電話を替わ
る。

「あしたのあさにかえってくるって、ほんとう？」

「本当さ、帰ったらすぐに抱っこしてあげるからなあ」

「あなた、ヒゲを剃ってからにしてね？」

それがおもちゃになっていいんじゃないか。と、シルフィオはこれから伸びる中途半端のヒゲに期待する。

「どんなひこーきななの？」

「しっぽにちょうちよがいる飛行機よ」

「ちょうちよ？ わかった！」

「クロウエア―223型だな」

「くろうえあ―223がた。はーい！」

ローラが写真をみせ、シルフィオがさらに付け加えると、ティアナはそっくり覚えてみせた。

「ローラどうしようか。ティアも独り立ちが早そうだ」

「大丈夫よ。このくらいは何でも覚えるものだから」

夫婦は僅かに動揺しながらも、ティアナの自分たちに対する『甘え』を期待した。

ティードが新人の中で才覚を發揮していても、首都航空隊という集団には入ることはまだできない。

だから次の日の休日は普通に目が覚めた。

とはいっても、^{まぶた}瞼をあけると妹が自分の上で馬乗りになっていて、起こされたという形に近かったが。

「はやく、パパとママむかえにいこうよ」

ゆさゆさと揺らされる中、「ティアがそうやって乗っていたら起きられないよ」と彼女に言い聞かせ、もぞりとベッドから這い出た。ランスター家は2階に子どもたちの寝室を置く間取り^まで、妹の部屋は既に用意されているものの、入学式当日に両親に贈られ、まだ内装は新築のようであった。

「じゃあ、お兄ちゃんは湯を沸かすから、新聞を取ってきてくれないかな？」

「はい」

階段を下りてから朝刊を取ってくることを任せると、朝であるに

もかわららず元気に返事をして、とんとん軽快に歩いていく。

(さて、と)

彼は紅茶を飲むために、水を火にかけ、ソファに座り込みテレビをつけ、

「……………」

一瞬、テレビの中のアナウンサーが何を言っているのか分からなかった。

わかったのはそのアナウンサーの背後にはいくらかの文字列をとある映像が見えるばかりで、視界からしか情報がとりだせない。

「おにいちゃん、見て〜」

その声に気付いて、さっとテレビを消す。

ティアナは彼の表情には気付くことなく、新聞を片手に自分の指定席である兄ティーダの膝に座り込み、にっこり笑顔で新聞の第一面をみせる。

「これ、パパとママののってるひこーきだよね？」

そこには離陸前のクロウエア―223型の旅客機が一面を占拠していた。

ティータは両腕でぎゅっと妹を優しく抱きしめる。

(「いいか、ティータ。今日という、いや、この時だけでいい。努力しろ。』今日という日この時だけは』いつものように、そう、いつものように妹の質問に笑顔で答えるだけでいいんだ！)

「ねえねえ。カタストロフ だいさんじってなあに？」

今、このときから血縁がたった2人になった兄妹の兄ティータ・ランスターは少し力を込めると、妹ティアナ・ランスターの手から新聞がぱさりと零れ落ち、手前のテーブルに一面が広がった。

デイリー・ミッドタイムズ
『だいさんじ 大惨事

今日未明、第X管理世界を発ったクロウエア―223型がWW
N ワールド・トゥ・ワールド・ナビゲーション が管理す
るリーダーからの応答が途絶えた。現在は 』

そして『今日という日この時だけは』、リストとして両親の名前

を映し出したこの世界の情報の早さと技術を恨み、この世界の言語を呪った。

第19話 『今日といつ日』の時から』

その日の夕刊一面が『兇災』^{凶災}という単語で、おそろくどの新聞社も同じような内容が記載されていることは分かりすぎるほど分かっていた。

カメラクルーが現場に向かい、海に漂うあらゆるものをファイnderには入れないように心掛け、ただ海の上に僅かに残るく^{わず}の字に折れた飛行機の頭部と尾翼を撮り続けた。

その日ほど自分の職業を恨んだことはないだろうし、誇りが支えたこともなかっただろう。それだけの出来事であった。

ティードはティアナに「なんじにむかえにいくの?」と聞かれたところで、思い切り息を吐いて、彼女を膝の上から下ろし目線の高さを揃えた。

「いいかい、ティアア?」

「なーに?」

首を傾げる妹に一瞬ためらうが、言わないわけにはいかない。

彼は意を決して口を開く。

「パパとママの飛行機は事故にあったんだ」

「じい?」

彼はこくりと頷く。

「だから、もう、パパとママは帰ってはこないんだよ」
「かえってこない？」

もう一度頷く。

「どれくらいかえってこないの？」
「ずっとさ。いくら寝ても、いくら指を折っても、どれだけ時計を見ても、どれだけカレンダーにバツをつけても、絶対帰ってこない場所に行ってしまったんだよ」

いつも話しかけるよりもゆっくりと、一言一言確かめるように、自分に言い聞かせるように、そして入学前までに寝る前に読んであげた絵本のお話のように現実を話した。

ティアナは兄の言葉をしっかりと聞いてから、今までに体験したもので例えてみせた。

「それって、たかいところ？ ティアね、このまえキにのぼったときね、おりられなくなっちゃったの」

せんせいにたすけてもらった。とティアナが話したとき、ティアドは危うく微笑んだ目尻から涙が出そうになった。

「そうだね。降りることのできない高い所へ行ってしまったんだ」
「そっかあ」

「でもね、パパたちは大人だから、降りられなくても平気なんだって。ティアはパパとママが帰ってこなくても平気かい？」

「……………」

その言葉に彼女は何も答えなかった。幼い子から少女へと成長しはじめている目の前の妹は何か言葉を探しているように見えたので待つことにしたが、ティードはその間が辛^{つらい}かった。

彼がまた口を開こうとしたとき、

「……………ティアがおにいちゃんの肩に乗ってもだめなの？」

その言葉に彼は妹を抱き寄せさめざめと泣き、妹にぼんぼんと背中をやさしくたたかれた。

十分に落ち着いた後、ティアナとともにティードは引き上げられた両親を迎えに、現場近い安置所に向かうと、外はたくさんメデアが犇ひしめきあつていたが、彼等が通る通路は別に用意されていて、とくに掻き分けて行く必要はなかった。

係員が案内されるなか、聞こえてくるのはカツカツと歩く音以外に、嫌でも人の咽むせび泣く声が耳に入る。兄の手を握るティアナの手はだんだんと握る力を強め、一定しない震えを兄に伝えた。

少女は両親が『高い所に行った』という意味を深くまで知りはないものの、この雰囲気では何かを感じ取ったようだ。離れまいとまた一段と力を込める。

そして、最後の扉を開いたとき、彼女は彼の背後に回りこみ足に抱きついた。

どこかの施設を借りているため、安置されている場所は広く、そこに規則正しく棺が整列していた。

本当ならば遺体の搬送先は近くの病院に運ばれるはずであるが、既に入院している患者の配慮から、それは航空会社、病院の合意のもと、取りやめになり現在に至る。

ティードは入り口近くで簡易的な手続き　全乗客が書かれているリストにマルをつけること　を済ませ、棺の場所を教わると、妹を優しく諭さとし、促した。

案内する係員は1人から2人に増え、兄妹を案内する。

安置所は大きく2つに区画され、1つは『容姿・証明書等から断定』、もう1つは『判断付かず』といった、認識できるモノとできないモノに分けられていた。

家で確認したところでは既にランスター夫婦の名前が挙げられていたことから、前者のほうへ案内されることは分かっていたのにもかかわらず、ティードは棺の上におかれた遺留品には目がいかないで、両親の名前をみて愕然がくぜんとした。

「……………」

その間にも案内人の2人は棺の短辺にそれぞれ付き、棺に礼儀正しくお辞儀をする。

棺の上にぽつんと置かれた銘板は『ネムラレットシルフィオ・ランスター　　□
ーラ・ランスター』と書かれ、棺が1つしかなかった。

一瞬、また足元でしがみついている妹を忘れた。

1人の案内人は遺留品をティードに一度預け、棺はそのような力では決して壊れることなどないのに、ゆっくり、ゆっくり棺の蓋ふたを持ち上げる。

その両親の息子はその間、顎を引いて目を閉じながら妹の髪を指の腹でなで、案内人が「どうぞ」といつてから、やおらに目を開いた。

(…………… ああ)

間違いなく、自分たちの両親だと彼は確信する。

顔は配慮がなされ布が被せていあり、ティードは遺留品を胸に抱えながらこれもまたゆっくりと布を持ち上げて再確認した。

「現在も尽力していますが……………」

1人の体をもう1人の体を守るように抱きかかえており、守るほ

うは四肢のうち二肢しかなく、肩から上は何もなかったが、守られているほうは五体満足そろっていた。

「いえ、結構です。搜索ありがとうございます」

ティータは何故棺が一つしかない理由に納得すると静かに息を吐き、足元に目を向けると、橙の髪がふるふる震えているのが見えた。生きている人間より死んでいる人間のほうがこの場には多いのだ。ティアナも意味は分からずとも何かを感じ取っているようだった。

「ティア」

「……」

手続きはのちほど行ないます。と案内人に棺を閉じてもかまわないと促し、もう一度、今度はしゃがんで妹に呼び掛けた。

「な……に、おにいちゃん」

「パパとママは起こされたくないんだって、このまま『さよなら』をしようか」

疑問形にはせず断定するとティアアナは兄から白い棺に視線をうつし、彼の袖をきゅっとなつかんで抱きつき、

」「……うん」とうなずく。

ティータは彼女を抱き上げて、一步、また一步と両親から遠ざかる中、ティアナは決して顔を上げなかった。初めて自分の手に持っている遺留品に気が付いた。

それはランスター家の棚に飾っている一枚の写真と同じもので、後々、それ以外は見つからないと知る。裏に書かれているなく、り書き数々の中から辛^{から}うじて読める。3単語を見てティータは固く決心をした。

『ティータ　ティアナ　たのむ』

それ以降ティータは妹が『死』というものを知る過程を見守り、幼いながらもそれを懸命に乗り越える過程を見守り、時々夜中に泣きながら自分のベッドに入り、涙を自分の服で拭^{ぬぐ}うのを見守った。

時々突き放すような言い方をした時もあったが、彼は後悔はしていない。それが妹を強くすると信じて疑わなかったし、彼女はそれに応えた。

「ほらっ！ 兄さん、起きて！」

だから今の彼女がいる。

「私も学校があるんだから」

ティアナは、もう無断でベッドに入り込んだりはして来ない。今は寝ているティータの腰をつかんでごろりごろりとお構いなしに左右に揺らす。

「あと」

「ちょうど、私の右手には包丁が握られています」

それはまずいとばかりにもぞりと体を伸ばして、伸びをしていると、

「そして、左手には兄さんの作った銃があります」
「だんだんと、過激になってないかい？」

あくび一つといくつもの寝癖ねくせを携たずよえて、むくりとティードは起き上がり、髪をしっかりとツインに整えたのティアナに目を向けた。

「ん。おはよう、ティア」

「おはようございます、兄さん」

気づけば今年でティードは21歳になり、ティアナは10歳になっていた。

「今年、執務官試験受けるんでしょ？ 大丈夫なの？」
「そのために夜も懸命に勉強に励んでると理解してくれるかな」

そついうのは表に出さないようにするものじゃないの？ と食後の紅茶を運ぶ彼女に苦笑いするティードは、今年執務官試験を控え

ていた。

本当であれば入局3年目に受けるはずであった執務官試験はもう少し勉強に励まなくてはならないと遅らせたのだ、

ティータは自分たち兄妹にも例外なく見えない傷を付けたクロウエア1223型墜落事故のせいには決してせず、妹の教育と時空管理局の務めに身と霊の全てを費やした。ティアナはごく稀に甘えることはあったが、ローラ譲りの露草色の瞳の奥には信念の強さが見え隠れし始めている少女に成長しており、その過程を見てきた彼女にとっては妹というよりもむしろ娘にちかい愛情の対象になっていた。

「そつえば兄さん。今日は早く帰ってくるの?」

「ん」

ティータは妹に仕事の内容を話していない。それは情報漏れの危険性があることと、現在捜査中の事件には奇妙な点があることだ。

ことの発端は1つの情報盗難未遂であった。

ある1つの集団が、管理局が収容している犯罪者の名簿を盗もうと画策し、行動を起こしたのだ。もし成功すれば、その名簿を元に管理局がいまだ捕らえきれしていない犯罪者同士で徒党を組まれ、解放行動を起こす危険性があり、世間を揺るがす惨事になりかねない。そうならないためにも、その情報は普段管理局が管理している情報群とは違い、セキュリティレベルの高い管理が施されている。実質盗むということ自体困難ともいえた。

しかし、その集団は各管理世界と、ここミッドチルダの管理局に属さない優秀なエンジニアを雇い、綿密な計画のもと計画を実行に

移したのだ。

だが、前述したとおり、それは未遂というかたちで防がれた。逮捕後、ティードはその計画書に目を通すと、確かに綿密かつ周到といえるに十分なものであり 同期の航空隊の人間はよくわか
らなかつた 正直、実行されればまず間違いなく成功する計画であつた。

3、40人の優秀なエンジニアがセキュリティ、ネットワーク、データベース、運用設計の漏れ、ごく稀まれに発生するエラーケース、設計するにあつての予算から割り出した費用軽視部分の調査等と2、3人ずつグループになり、管理局についてよく研究がなされていた。

なおかつ、優秀な人間が通常より少ない時間帯を狙う手筈てはずになつており、それは確実に実行された。

しかし、もう一度言うが、それは未然に防がれた。つまり、実行に移されたはずなのに、盗まれずに済んだのだ。

今考えても不思議なことであつたとティードは思う。

なにせその計画を知つたのは情報盗難が未然に防がれ、十分1日過ぎた後だというのだ。

ティードの同期である新婚のトラガホルン夫妻がその事件を見つ
け、情報を展開し、首都航空隊が文字通り一網打尽にした。事件発
生してからゆうに1日過ぎていたのにも関わらずである。

しかもその集団はどこ誰であるということまで洗い出し済みで、
集団のいるビルは全面閉鎖し、閉じ込めているという。航空隊の人
たちは、その情報が陸からのものであること以外、捕まえられたこ
とに満足しているようであつたがティードだけはその詳細が気にな
つた。

しかし、夫婦に聞いてみても、

『ネコの目は誤魔化ごまかせない』

というだけであった。

彼は不思議に首を傾げるも、それ以上夫妻は何も言わなかった。

聞こうとしてもどうやら友人の『デバイス』の設計が佳境のようで『もう少しでこいつを打ちのめせる』とそれ以上取り合ってくれなかったからだ。

そして、それは3か月前の話である。

話が逸れたので元に戻すと。何度も言うようにその計画は未然に防がれた。そして現在は、一網打尽にした後とある魔導師が浮上してきたため、その搜索と確保に全力を注いでいる。

「いや、今日は帰ってこれるかわからないんだ」

「そう、なんだ」

ティアナは座りなおすと、砂糖もミルクも入れていないのにティースプーンをとっては紅茶をかき混ぜた。

「情報は集まったからね。そろそろ乗り出すよ」

「ふうん」

ティアナは興味なさそうに、棚においてある写真たてに目を向ける。

現在、その写真たてには4人は写っておらず、兄妹だけである。半年くらい前にティードが入れ替えたのだ。ティアナはそれに気がつくなり、顔をくしゃりと歪ませたものの、『いつも、僕等を後ろから見守ってくれるように』とティードが後ろに4人の写真を重ねていることを教えると、素直にこくりと頷いた。

「心配かい？」

「……まさか。兄さんは優秀なもの」

ゆっくりカップに口をつけて、一息ついた後、思い出したようにティアナは話題を変える。

「それと、兄さんのオルゴールはもう修理に出したの？」

「ん、ああ。まだ、出してない」

「出してきてあげようか？」

それはティアナが掃除をしたときにたまたま兄の部屋で見つけたオルゴールで、聞いてみるとティードが10歳の誕生日にローラから贈られたものらしい。見つけたときには錆びさびついていて、音は奏かなでないに等しかった。ティードは時間があるときに修理に出そうと思っただけでなく、現在も錆びついたままである。

ティアナの言葉にそれならと思うが、ふと頭にある解決策が思いつく。

「いや、大丈夫。今日頼んでくるよ」

「忙しいのに？」

「ふふつ。管理局にはいろんな人がいるのさ」

2人は紅茶を飲み終えた後、『いつてきます』と誰も居ない玄関に笑顔で呼びかけて、別々の道を歩み始めた。

ティードは自分より年下であるにもかかわらず、勤務年数が今年で11年になる三等空士に興味を持ち始めていた。

それは数日前、3ヶ月集めた情報を1つにまとめかたに悩んでいたときのことだ。

本来なら現場部隊であるティードはメカニックの下につく雑務要員のその人とは直接知り合う機会はなかったのだが、ふと自分の目の前を通り過ぎる男が40ほどのデバイスを抱えてメンテナンストームへ消えていくのを見て、興味本位から少し間を空けて入ったと

き、

「グーナルド二等空尉は左ききに杖の重心を12ミリメートル上部砲撃時に杖を4分の3回転させ……」

「……………」

その男の行動に目を見開いた。

帽子を目深に被った小柄な男は、左手でキーをタッチしながら、右手で杖に対しメンテナンスを施していたのだ。そして彼の見える正面画面には、首都航空隊全隊員の実践映像を並列で映し、その1人1人の映像の下には各隊員能力値を表示させていた。

「う、わ」

それは30分くらいのものであったのにもかかわらず、他のも合わせ40本以上のデバイスが調整されていく過程はまさにあつという間の出来事に思えた。

そして、ちょうど調整を終えてモニタを全て閉じきってすぐ、タイミングを見計らったかのように、航空隊正式のメカニックが入ってくる。

「おい、出向クン。ちゃんと回収した全機の母数はあっているか？」

「はい。こちらが回収分のチェックリストです」

メカニックはその小柄な男に「回収後、なんだつたらメンテナンスもしておいてもいいんだぞ？」と回収前に冗談交じりで言ったことなどすっかり忘れて、

「さて、メンテナンスはじめるかね。といってもほとんど使われてないからチェックするだけなんだが」

欠伸をかみ殺して、席に着く。

「んで、ティード。なんで、お前ここにいるんだ？ 書類整理の途中じゃなかったのか？」

「あ、ああ」

すこし狼狽してメンテナンスルームから出ようとしたとき、彼は振り向いてそのスタッフに声をかける。

「そちらの出向の人っていつからきてるの？」

「ん？ 今日からだな。臨時で1週間。ウチのスタッフが1人抜けたところに、いくタイミングで全デバイスのメンテナンスがはいった。まあ、それでだ」

へえ。と関心なさそうにみせて、所属と名前を聞いてみると、相手は覚えておらず、直接本人が特徴的な寝ぼけ目でぴしりと敬礼をして答えた。

「電磁算気器子部工機課より出向してきました。コタロウ・カギネ三等空士です」

それから数日間、注意深く見てみると、彼は何処にでもいた。あるときは清掃員であったり、またあるときは梯子はしこをもつて電灯を交換する庶務員であったり、またまたあるときはしゃがんで通風孔にごそごそ入っていく一般作業員であったりしていたのだ。そしてその全ては「出向クン、それやっという」という言葉からであることも知った。

「あの、カギネ三等空士？」

「はい。なんでしょうか、ランスター一等空尉？」

初めはおずおずと話しかけてみると、彼の年齢と勤務年数に驚き、さらに陸士と空士のどちらも保有していることにまた驚いた。

「私も詳細はわかりませんが、そのほうが円滑に手続きが済むのだそうです」

コタロウ・カギネ三等空士は自分の言葉に首を傾げていたが、アイデアはすぐに理解することができた。

陸と海では確執が消えないところがあり、それぞれ仲が悪いのだ。それはここ首都航空隊もそうである。

「そうすると、本来はどちらなんですか？」

ティーダは勤続年数からか、敬語で聞くと、

「設立が陸上なので、本来は陸です」

無表情に彼は答える。

それからまた数日、コタロウと会話をしてみると、彼が専門にとられない修理屋であることが分かり、今日、もしかしたらと思い、持ってきたオルゴールの修理を依頼してみることにした。

533

「カギネさんの仕事が終わった後で構わないんですが……」

「わかりました。それでは貸していただけますか？」

「あ、はい」

ごそりとポケットの中から取り出したオルゴールを手渡すと、彼は近くのデスクに座り、

「外面はそのままにいたしますか？ 磨き上げますか？」

どつちら、すぐに直してしまおうようだ。

「あ、できれば外面はそのままです。内なかはお任せします。でも、特に急がないので、仕事の後でも……」

「問題ありません。私の契約は昨日までで、今日は移動なのです」

じゃあ、なおさらお願いするわけにはいかないと断ろうとするが、

「視たところ、それほど時間は掛かりませんので、問題ありません」

「それではお願い……。つて、昨日までなんですか!？」

「はい。1週間という契約でしたので」

言われると確かに昨日で1週間だ。彼の修理と同じくあつという間であることにすこし驚き、そしてそうしているうちに修理は終わっていた。

「直りました」

「はち」

手にとってキリリとネジを回すと、見た目の古さからは想像もできない軽やかな音が鳴る。

「あ、ありがとうございます」
「いえ、なによりです」

なかば呆然としているティータに、コタロウはぺこりをお辞儀をして、

「それでは」

彼に背を向けて出口へ歩いていく。

「あ、つと、カギネさん」

「はい」

「……また、会えますか？」

ティータはこの機械のような人間のプライベートに多少なり興味があった。

「工機課へ連絡していただければ、時間調節は可能です」

「え、あ、いや。プライベートで」

「構いません。何時いつにいたしますか？」

「お礼もしたので、近いうちにでも」

コタロウとアドレスを交換して、ティータのほうから連絡すると

告げると彼はまた一定の足取りで出口へ向かった。

彼の次の出向先はヘリ等の航空機を扱う工場というのも聞いていた。

工場爆発はその日の夜、轟音とともに訪れて、沈んだばかりの太陽のように1つの区画を紅く染めた。

ガガル・トイカが初めて道を踏み外したのは10代の頃であるが、明確な年は覚えていなかった。

多感な時期だった彼は、もともと自分が魔力を保有している自覚もないまま、とある大人からの虐められたときに魔力が暴走し、人を殺めたのだ。

しかし、あまりにも悲惨な虐めだったのか、殺めても罪悪感というものには駆られることはなく、残ったのは飲み物をこぼした後くらい「あゝあ」という後悔だけであった。当時、彼の里は内紛中で、1人死んでも彼の知る世の中は関心を示さなかった。

金銭的に困窮していたガガルは自らその能力を金銭なしには使用することを禁じ、金銭を稼ぐ方法を模索した。両親が自分に対して関心を示さなかったこともあり、ほぼ自由に行動することができた。

そして彼はデバイスを自ら作成して、自分の魔力を評価することができる人間を探しに里を出る。その時も両親は関心を示さなかった。

不思議なことに管理局へは入局しようとは思わず、自らの力で仕事をこなそうとミッドチルダへ訪れたガガルは仕事を探してみると、どんなに選んでみても合法的なものはなく、もともと、自分でもこの能力で合法的なことは思いつかなかった。金品の強奪やその時の逃げる手伝いや、よからぬことを企てる人物の用心棒が主な仕事であった。

「今回は完全に失敗だ」

ガガルは3ヶ月前に依頼を受けた1つの集団の護衛に失敗したことで初めて自分の年齢がすでに40（しじゅう）近いことを自覚した。

依頼者が30届かない人物であることに疑問を持つべきだったと、さらに後悔を強める。

なんとか3ヶ月逃げ切ってみたが、精神的には既に限界であった。ガガルはじりじりと管理局員に追い詰められ、何人が致命傷を与えては見たものの、逃げることは難しそうである。

「管理局です。ガガル・トイカ、大人しく投降してください」
「……………」

1人の青年が自分の前に立ちはだかった。

「貴方ご自身が許可もなく飛行している時点でご理解いただけますかと思えます」

「……………」

（俺は相当前後不覚らしい。自ら目立つ行動を取るまでになっ
てい
るとは。おそらく、この作戦も悪手だが、隙は生まれそうだ）

自分が冷静を欠^かいているのを自覚済みであるのにも関わらず、次の作戦を実行に移そうとする。

ガガルは内紛中に身に着けた自衛手段を1つの油断生成に使用するのだ。

外套^{がいとう}に右手を突っ込み、

「動かず、デバイスを解除してください」

「……………悪いが、逃げられると思っている」

思い切り、奥歯を噛み締める。

「投降の意思なしと判断し」

それと同時にガガルの右手、相手の左手の方向の彼方から小さな赤い炎が噴きあがり、ガガルは相手が一瞬そちらのほうを向いたのを見逃さなかった。

(動作は偽だ)
フェイク

管理局で支給されている杖型のデバイスとは違い、身の丈たけ半分くらい細かいデバイスを相手に向け、

「爆ぜろ」

「しまっ
」

局員の目の前で酸素と魔力が混ざり合い、爆発した。

彼は質量兵器の扱いに長け、魔力操作、制御も爆発を得意としている。

ガガルの耳には2つの爆発音が音速差で同時に届いた。

コタロウは移動した当日からの作業を終わらせて工場からであると、親友2人が無言で立っており、1人は『傘』を持っていた。

「お疲れ様、ネコ」

「次はココか。1年間で10以上も出向先が変わるなんてお前の課ぐらいだぞ？」

「お疲れ様、ロビン。ジャン、正確には13箇所。今年は多いほうだよ。1年間異動しないときもあるしね」

ジャニカ・トラガホルンとロビン・ロマノワの2人が結婚する前にルームシェアをやめたコタロウは、ここ1ヶ月2人とかかなりの頻度で会っていた。

「さて、今日は何故ネコに会いに来たのでしょうか？」

「うーん」

彼はジャニカが時々自分のために疑問を投げかけるので素直に考え込んだ。

（いつもなら、必ず事前に連絡をするけど、今回はしていない。というとか僕に対して緊急の要求というのが妥当かな。ロビンは『傘』を持ってるし……）

一度頷き、彼を見上げ首を傾げる。

「『傘』に不備？」

「残念、その逆」

「……完備？」

「『傘』が完備。言われると違和感があるな」

今度はジャニカが不思議と傾げるなか、ロビンが1歩前に出た。

「『傘』が完成したのよ」

コタロウの手を取り、笑顔で大事そうに手渡してきゅっと握らせる。

貰った彼は途中何度も握った『傘』にすんと目を落とす。

「ジャン、ロビン、おめでとう」

「……違う。そこはありがとうだろ（でしょう）？。」

「ジャン、ロビン、ありがとう」

『どういたしまして』

帽子の隙間から相変わらぬの寝ぼけ目、無表情で2人を見上げると、対照的ににっこり笑っていた。

それから製作過程を思い出話に一緒に夕食をとろうと、ジャニカが提案したまさにその時、

（かちり？ 時限音だ）

「2人とも、伏せて」

「……？」

コタロウは感情表現が苦手であり、このときも焦りを感じさせない無表情で2人に危険を伝えると、回答を待たずに両腕を広げて2人の鳩尾部分を抱え込み、押し倒す。
ぐわんという爆発音とともに、真っ赤な炎が噴きあがった。

「なっ！」

「こ、これは」

「誰かが時限式の爆弾を仕掛けたみたい」

爆発の時間差でやってくる空気の戻りを感じた後、むくりとコタロウは起き上がり、2人を起こす。

「陸士部隊と救急隊にすぐに連絡を」

「すでにやってる」

ロビンの指示が下されるのと同時にジャニカは動いていた。すぐに消火と救助の要求を出し、通信を常時接続にしておく。

「ネコ、工場内に人は何人くらいいるの？」

「28人」

3人は燃え盛る工場と対峙して、ぐっぐつと足と腕を伸ばす。

「ネコはここにいろ」

「ううん。行くよ。この状況を見れば、僕だって中の人たちが困っているのはわかるから」

2人は『傘』の動作確認でコタロウの運動神経を知ったことから、無理に止めようとはしなかった。先の時限音を聞き取ったところからも明らかである。

「では、今は上官である私の指示にしたがって」

「分かりましたよ、ロマノワ一等尉」

「了解しました、ロマノワ一等陸尉」

互いの時計を合わせてすぐに、3人は工場内に駆け込んで行った。ジャニカとロビンの能力では火力を抑えることはできず、純粹に制御のみで立ち向かうしか方法はなかった。そして、コタロウは2人を押し倒したときから分かるよう、咄嗟とつぱの時に傘を使うということがまだできてはいなかった。

「私が先導します。無事な方はけが人を補助してください」

工場内28人全員の安否を確認できたところで、後方をジャニカとコタロウに任せ、ゆっくりだが確実に出口へ足を進める。このときはロビンの能力は役に立った。

幸い、けが人はいたが、死者はいないようである。重症でも骨折ぐらいだ。

544

「そちらは目視できないけど、大丈夫？」

「ああ、問題ない」

ジャニカは噴煙で見えない先導者の呼びかけに答えると、最後尾の影が動くのが見えた。

「ネコ、行くぞ」

「うん。ちょ、っと、先行ってて」

「何言ってるんだ？ 早く行くぞ」

少しはなれたところにいるコタロウに目を向けるとしゃがんで何かごそごとと工具を使っていた。

「爆発でここだけ消火装置が動いてないみたいだから……これよし」

ばたんと床を閉めると、上から消火液が散布される。

これで火の手が大きくなることはある程度防ぐことができる。床には炎を助長させる液体が流れているのだ。引火すればひとたまりもないだろう。

(ん、そうだ。傘を使えば、ここ一帯の炎を……)

気を抜いてはいないが、傘を使用すればこの状況をひっくり返せることを思い出し、こちらに向かってくるコタロウに近づいていた。

「おい、ネコ。その傘な」

妻であるロビンがジャニカに抱きついた数と、コタロウに抱きついた数は数えるまでもない。

そして、親友であるコタロウがジャニカに抱きついた数はおそらく片手で足りるほどだ。また、押し倒されたことなんて先刻さっきと今を

あわせて2回しかない。

「……コホッ。ジャン、大丈夫？」

だが、自分の上にのしかかっている親友が口からぼたりと血を自分の頬にたらしたところなんて見たことがなかった。

(なにが、起きた？ 俺は何に寄りかかっている？)

ジャニカはまだ状況をうまく飲み込めずにいた。スンと何か焼けるような匂いが鼻に入る。工場内に入ったときはまた違う匂いである。

「今、助けるから」

寝ぼけ目の男はもう一度小さく咳せきをしてから、相手の襟えりを噛み、思い切り首を動かして彼を脱出させる。床に流れている液体が手助けしてくれたので、摩擦力は少なかった。

彼はそこで自分の見えているものが天井であることを知る、消火液が黒い点になって数滴僅かに開いた口に入った。

「おい、ネコ！」

がばつとジャニカは起き上がってコタロウを見ると、数本の鉄骨が彼の上に覆いかぶさってるのが目に入る。思わず煙を吸い込むのも忘れて、彼に近寄った。

「すぐ、どかしてやるから」

熱された鉄骨に触れることで火傷は免れないが、そんなことを気にしている余裕はない。先程の焼けた匂いはコタロウの身体からだった。

彼にのしかかっている鉄骨を退かしたところでジャニカは彼の左腕に太い鉄骨が縦に突き刺さり、床にめり込み、どうしようもないくらい折れ曲がっていることに気がついた。

(…………う、あ)

彼の焼け爛れた背中など翳んでしまっただ。

「ジャン、悪いんだけど、左腕、切り落としてくれない？」

念話の彼はとても落ち着きたいいつもの口調だった。

親友の頼み事には彼の能力が役に立った。

ジャニカは2度、3度躊躇った後、一思いに綺麗に腕を分断し、彼を助けた。コタロウはむくりと立ち上がり、

「助けてくれてありがとう、ジャン」

転がった帽子を被りなおす。

固まっているジャニカはその瞬間、我を忘れて、相手の胸倉を掴んだ。

「なんで、だよー！」

「皆、無事でよかった」

結局、傘を使うことはなかった。

ロビンはコタロウの姿を見て、首を横に振って「嘘でしょう？」「と自失し、彼の言葉に膝から落ちて、腕ごと彼の腰に抱きついた。

腕ごとといつても右腕だけだが。

「えーと、ロビン？　あまり感情的になりすぎると、胎教によくないよ？」

今の彼女にとっては自分の体調のことなど、どうでもよかった。

「……悪い」

この時、ジャニカはロビンに生まれて初めて謝った。
彼女は立ち上がり、自分の制服の上着を抜いでシャツ一枚になると、上着をコタロウの肩にかけた。

「ジャンが謝っても、ネコの腕は返ってこないわ。それに、ネコ自ら動いたのでしょうか？」

「ミスを誘ったのは俺だ」

「疑う余地がないわ。ネコが1人ならミスなんて犯さないもの」

本当に貴方は私の感情を揺さぶるのが上手なのね。と救急隊を呼び寄せた後の彼女は燃え盛る火炎を横に、彼を見る。

潤んだ碧空色の瞳が、頬を伝う涙が赤く染まり、今の感情を表現していた。それでもジャニカに対する愛は変わらなかったし、彼もまたロビンのそれに気付いていた。

周りの人たちが騒ぐなか、3人の間は無言が続く。

だが、それは通信によって打ち切られた。同時に救急隊も到着する。

「首都航空隊より要請だ。苦渋の選択らしいが、陸士部隊に応援を頼みたいらしい」

「応援？」

通信相手の上官は陸と海の確執なんてくそくらえと言葉を漏らす。

「ガガル・トイカの逮捕だ」

「バースト・ガガー。か」

感情を押し殺し、冷静にジャニカは応対する。

「ああ。手傷は負わせたが、どうも取り逃がしたらしい」

取り逃がした局員は瀕死の重症だと続ける。

「それを追えと？」

「そうだ。情報は送る」

「お前たちのことだ。生ける人間は全員救助済みだろうか？」

上官は部下の功績をよく知っていた。あと数年もせずつに抜かれてしまうこともだ。

だが、次の発言で彼等の瞳がぐぐつと小さくなるのには驚いた。

「その工場爆破は逃げるためだけの、単なる遮蔽だ」
カモフラージュ

「……今、なんと仰いましたか、ダヴェンポート三佐？」

「単なる遮蔽？」

「あ、ああ。ガガルが」

「情報をすぐ送ってください。すぐに、追いかけます」

「飛行許可は下りていますか？」

それからすぐに情報を受け取り確認をし、通信をきくと、救急隊に運ばれるコタロウに気がついた。

「俺はお前の腕を奪った」

「……うん。ジャンにあげたんだ」

痛み止めを打たれ、もう少しで目が閉じそうである。

（なんで、普通なんだよ）

それでも、コタロウはいつもと変わらなかった。初めて出会ったときより、十分感情表現はうまくなったのにも関わらず、自分の今の状況によって彼は左右されない。

腕がなくなっても彼は変わらないのだ。

「追跡任務？」

「あ、ああ」

彼は救急隊員の制止を振り切ってよろよろと手を振り、

「いつてらっしゃい」

ジャニカがはじめて教えた『送り出しは笑顔で』を実行し、彼は眠りについた。

「……ちょっと、傘、借りるわ」

相手の承諾を得ず、ジャニカはするりと担架にねている彼から傘を抜き取る。

「今の俺だと相手を殺しかねない」

「……そう」

ロビンは彼が責任をガガルに転嫁していないことなど、考えずともよく分かった。

今、彼のなかでは自責の念が押し寄せている。

「行くぞ、ロビン」

「上官は私なんだけど、トラガホルン二等陸尉？」

2人はコタロウに振り返ることなく、飛び立っていった。

「兄さん、今日は帰ってこないのかな？」

臨時ニュースの工場爆発に兄が絡んでいるとは思ってもよらなかった。

ティード・ランスターは自分が爆発で堕ちていくのを自覚していても、相手からは目を逸らさなかった。

逃げていく彼に狙いを定め、一撃を見舞う。

「……今までの航空隊とは違うみたいだな」

ガガルは自分のデバイスを振りかざし、それを弾く。体勢を立て直したティードは先の爆撃で、片目をやられていた。

「怯まない、のか」

「はい。貴方がたとえ、魔力量が私の3倍以上あっても怯むわけにはいかないのです」

技術はともかく、魔力だけとると武装隊トップクラスの保有量を持つ彼はそれで今まで仕事を行い、管理局から逃げおおせてきた。

「今回は俺も必死なんでな。追手が来る前に逃げなければならない」
ずん。と魔力を内包する。

「悪いが」

自分の足元を小さく爆発させ、一気に距離を詰める。

「殺していく」

ガガルはデバイスを相手の喉元に突きつけるが、弾かれた。

「20年ほどそのデバイスを使用していたせいか、対象物に杖を向けるみたいですね」

一定の大きさの爆発を使用するとき、ガガルがそれに向けてデバイスを向けることを良く知っていた。
ティーダは杖を振るい、相手の鳩尾みそおちに突きつけると予想通り、相手はそれを先程の自分のように弾く。それを確認してから、

「つぐが！」

相手の左こめかみに蹴りを見舞う。
それから、相手が距離をとらないよう腕ごとバインドを仕掛けると、もう一度鳩尾に杖を当てて突き込んだ。

「距離を、詰めたのが敗因、ですね。そのまま大人し、くしていただくさい」

「……しつかりと、聞いていなかったのか？」

息切れをしているティードに打ち据えるだけの攻撃を受けたガガルは、飲み物をこぼした後くらいの「あゝあ」というため息を吐いた後、

「俺は『必死』と言っただ」

自分がシールドを張る時間でさえ惜しいとばかりに、目と鼻の先の相手に向かつて、そして自分に向かつて、爆発を仕掛けた。

縛られたガガルは腕の自由が効かなかったが、別に、デバイス持ち手部分を向けての近距離爆発も可能である。

爆ぜる音で2人とも鼓膜が破れても、それを覚悟しているものとしていないものとは建て直し時間が違う。

爆破によって距離が取れたガガルは体勢のみを変えて、デバイスの矛先ほこなきを向け、

「さすがに、これ以上手負いはしたくない……」

一瞬の間。

「爆燃しろ」

ティーダの周りで相手の魔力が収縮していくのを感じる。

（僕は、怯まない！）

懐ふとろに肌身離あさず持っている『ティーダ　ティアナ　たのむ』
と書かれた写真はその後でも、まだ残っていた。

557

「……まさか、あの連爆のなか両肩両脚ダブルタツプに二度撃ちを仕掛けてくる
とは、片目である技術、未恐ろしい逸材だな」

（いや、過去形か）

地面に叩き落とした管理局員を一瞥し、見事に全弾命中させられた四肢の痛みを堪こえながら、なんとか自分のデバイスを握り締め、逃げる方向を見定める。

また、こちらは初めから殺す気で襲い掛かったのにもかかわらず、

最後まで相手は自分の行動を鈍らせるためだけに執着し、わざと急所をはずしたことに尚のことその正確さと信念に感服する。

逃げる間、何度か同じ航空隊に囲まれたが、爆発で目を覆った時点で先程の局員より格下かくしたなのはすぐに分かり、簡単に退けた。だが、次にやって来た1人の男にはそれが通用しなかった。

「ガガル・トイカだな」

「……………」

ガガルは答えない。背中に翼が生え、傘をもっている男が奇異に見えたからだ。

「バースト・ガガ！。アンタはどの『季節』のどの『気象』で捕ま
りたい？」

自分が素直に降伏すればよかったと後悔したのはそれから、1ヶ月先の目が覚めたときであった。

仰向けに寝ているティードは薄れていく意識のなか、何とか右腕
右手だけが動くのを確認した。

手探りで近くにデバイスがあることを確認し、引き寄せ、口でくわ
えた後、

(あと、もう少し)

ぐるりとうつ伏せになる。地面の冷たさを頬に感じた。
ずる、ずる、と自分の近くに一緒に堕ちた写真に向かって這いず
る。

(もう、ちょっと)

腕が届くまで頭1つとなかったのに、いやに遠くに感じた。
何とか写真を手にして、

(ふ、ふ。これはティアに見せるわけにはいかないからねえ)

自分の身体の何処を触っても血が流れていたため、何処でも構わ
なかったが、あえて涙を拭くように、もう見えない左目下を拭って

指先に血をつける。

そして、写真を裏返して、『ティード　ティアナ　たのむ』
の最後の行に、『父さん　母さん　ごめん』と付け加えた。

写真を表に戻して4人写った写真に目を細め、

(ティア、も、ごめん)

残りの魔力を使って、その写真を燃やした。ゆらゆらと煙が天に
向かう。

その後、1人の女性が駆けつけて「ティード・ランスター一等空
尉！」と呼びかけたが、

「……………」

既に、彼はことごときれていた。

それから数日たったある日とある日を跨ぐ時刻、彼女は今、雨の中2枚の墓標に書かれた人の名前に目を落としている。
周りには誰も居ない。

「……………」

そこには

『シルフィオ・ランスター』

ローラ・ランスター　ここに眠る『

『ティータ・ランスター　ここに眠る』

と書かれていた。

まだここには来たばかりで、明日は休日、そしてその次の日は学校が待っている。

だが、家で待っている人は誰一人としていない。

そう、誰一人としていないのだ。

このような夜更けに10歳になるうとしている彼女が独りであるのに、心配する人間は居ない。もちろん、学校に行かなければ心配する人間はいるかもしれないが。

「……………」

彼女は無言を耐えるところまで貫いた。

(……………)

それは思考も同様である。

日は跨いだ。

しかし、時計なんてものは持つてはおらず、彼女の手に握り締められているのは見た目は煤^{すす}けても軽やかになるオルゴールのみ。そして、力無くそのオルゴールを手放したとき、

「……………い、や」

彼女は胸の奥でじわりと熱くなるのを感じた。

「な、んで……………」

答えるものはない。

「……いや、よお」

歯を食いしばろうとも思わなかった。

「いや、だよお」

声が一段を大きくなる。

「いやだ、いやだ、いやだよお！　なんで、なんでなのお」

頭を振っても、人は訪れない。
かぶり

ここには彼女一人しかいないのだ。

人目を気にせず、膝をつけて四つん這いになって、土にごちんと打ち付けても、人目がそもそも無い。

「……よお」

墓標に抱きついて止めるものもない。

「会いたいよお。会いたい、会いたいよお」

死んだ人間は生き返りはしない。

「う、う、うわぁーん！」

「死」を知っている彼女は大声で泣き叫んだ。

声が噎れるまで何度も何度も同じことを繰り返し、彼女はここで新しいことを学ぶ。

ごろりと泣き疲れ、寝転んだころには既に明け方になっており、ほんのりと明かりが差していた。雨もやんでいる。

（そっか。言葉に出しても、何も変わらないんだ）

彼女は知る。

（自分が何かをしようとしないうちに、何も変わらない）

口をぱくぱく動かしても、嘎れた声しか出ない。

(自分から動かない限り、何も変わらないんだ！)

彼女はびしょびしょに濡れた服など気にもせず、ぐしぐしと顔を拭うと思いい切り立ち上がった。

手放したオルゴールを手にとって、空を見上げる。

ぎゅっとオルゴールを握り締め、嘎れた声で決意する。

「兄さんの夢、私の夢にしてもいい？」

墓標は何も答えない。

それを確認した後、彼女は墓標を振り向くことなく、歩き出し、気付けば走り出していた。

振り返るわけにはいかない。

ティアナ・ランスターは何せこれからは血縁なく、一人で生きていかなくてはいかないからだ。

(一人で生きていかなくちゃいけないんだ、『今日という日』の時から『！』)

「私ね、スバル・ナカジマ。スバルでいいよ。……でね、ティアって呼んでもいい？」

彼女は出会う。

「空隊入隊試験、不合格、か」

彼女は打ちひしがれる。

『ああ、手傷を負わせるのにやっとだったランスターの妹か』

彼女は極稀に夢にうなされる。

「錆びついちゃった、なあ」

気付けばオルゴールはあの日のせいで錆びついていた。

「主席・ティアナ・ランスター前へ！」

彼女はすこしの自信を手に入れる。

そして、幾年月が過ぎ、

魔法少女リリカルなのはStrikers
コ

く困った時の機械ネ

第19話 『今日という日この時から』

ティアナ・ランスターは16歳になった。

第20話 『彷徨、鳳の如し』

軽快ではないものの、資料を横目で追いながらキーを打ち、また資料をみて、キーを打つ。

フェイト・テストロツサ・ハラウオンは、明日皆に話すための資料をまとめ上げている。時々、この資料に埋もれることをちよつぴり苦になることもあるのだが、自分がかんりの年月をかけて追い求めていた人物であることと、ついこの前、自分の故郷である地球に仕事であるものの帰郷できたことで、精神的にかなり落ち着いて整理ができていた。

しかし、疲れる疲れなはいまた別の話である。

「……………ふう」

座りながら足と手を前に出し、うんと伸ばす。

「……………ツン」。お茶でも飲もうかな」

新人たちの夜練を見に行こうとも思ったが、なのはに「そっちが優先！」と遠まわしに行くことを禁じられていたので、仕方なく部屋においてある電気ポットに手をかけようとする。皆に会うのも兼ねて食堂や給湯室に行つてよいが、そうすると仕事に手が付かなくなるおそれがあるため、自分で用意したグッズだ。

そのグッズでお茶を入れて座りなおしたときに部屋のブザーが鳴

った。

「はい、どつぞ〜」

ドアが開くとその姿がみえ、相手はぺこりとお辞儀をしてぴしりと敬礼を取る。

「失礼します」

目深にかぶった帽子の中からゆったりとした寝ぼけ目が見え、鳶色^{いろ}の傘を左腰に差した人物に2、3瞬^{まはた}きをする。

「コタロウさん？」

「はい。エアコンの点検に参りました」

よろしいでしょうか？ と、コタロウは彼女の許可を得るまで敬礼も解かなければ、一步も踏み出さない。

(そんなに、畏^{かしこ}まらなくてもいいのに)

そう思いながら、フェイトは入室を促した。

敬礼を解いて踏み出す彼は左腕がなく、その袖がぶらんと歩みに

あわせて揺れる。

フェイトはくるりと見回すコタロウを見て、今日までの彼に対する皆の反応を振り返る。

それはリインとスバルの反応に始まり、地球のコテージでのシャルとはやての反応やお風呂から出たときのヴィータ、エリオ、キヤロの反応だ。

リインとスバルは彼のことを『ネコさん』と呼ぶようになり、それに伴うようにエリオキヤロも『ネ……』とは口には出すが、すぐに『コタロウさん』と言いなおしていた。その後決まって、2人は肩を落とすのだ。年上の人をあだ名で呼ぶのはどうも気が引けるらしい。

シャルは彼が目に入れば、トントンと正面まで近づき「おはようございます」と挨拶をするようになった。身長はシャルのほうが背が高いものの、コタロウは常に落ち着いているので、端からみたそれはさながら兄と妹のように見える。

当然はやてもその光景を見るのだが、シグナムのように首を傾げることもあれば、ヴィータのように口をへの字に結ぶ時もあり、あえてそれを見ないようにリインを擲掬^{かつか}ったりしていた。

また、ヴィータはシャルのように近づいて挨拶することはないが、すれ違うとき必ず「よオ」と声をかけ、彼の左袖を一瞥していた。最近では挨拶のみであるが。

(私も何か変わったのかな?)

そこまで振り返って、トトトコとエアコンに移動するコタロウをみる。

彼は天井にあるエアコンに手を翳^{かざ}して空気の出を確かめると、すりと傘を抜き垂直に立て、器用にそれにつま先1つで乗る。

(凄^{バランス}い安定感。 というより……)

「 あ！ だ、大丈夫ですか？ すぐ、さ…… 」

支えます。 という言葉が出なかった。

(えと、支えるってどうやって？)

理由は気づいた通りで、垂直に微動だにしない傘をどう支えていいのか分からないのだ。 近づいてはみたものの触れようとしたところでぴたりと止まる。

「 はい。 大丈夫です。 修理は滞りなく済みます。 『 すぐ、さ』 とは？」

「 ……いえ、なんでもありません 」

「 そうですか 」

コタロウはフェイトの金色の髪から天井へ視線を移し、右腰後ろにある小さな鞆から1つ工具とりだし、外装を取り除く。

「 傘、ワイヤーフック 」

「 …… 」

ただ傘の露先つゆさきからワイヤーと外装を掛けるフックが出てきただけでも、フェイトはその光景に静かに指先を顎あごにあてる。

（足の、しかも指先から、デバイスに魔力を伝達？ 安定感を維持しながら……）

その魔力の放出量は最小限に一定のものを送り出しいるのにさらに目を凝らす。

（そして……）

彼の足元から上半身、頭の先、つまり点検、調整をしているの指先へ視線を移した。

（修理する指先にはブレがない）

手先での作業、重心の安定、魔力制御を同時に行なっていることに顎あごを引いて唸る。

（もしかして、この人、戦闘訓練させても凄いいんじゃない……）

いやいや、まさか。と首を振って、思考を中断させた。今はそれより、自分の作業をこなさなければならぬのだ。フェイトはぐいとその考えを頭の奥へ押しやり、彼に背を向けた。

その時、自分の後ろ髪にコツンと何かが当たったのに気づく。

「……ん？」

「うん？」

振り向くと、傘とコタロウがくの字に倒れかけていた。

（ う、うそ！ ）

自分の長髪が背を向けた時の遠心力で傘に当たったらしい、しかしコタロウはいつも通りの寝ぼけ眼である。

とっさに受け止めようとフェイトは両手を前に出すが、

「ふむ」

コタロウはネコのように身を翻し、すたんと思切りしやがんで着地した。

「……………」

「点検、調整終わりました」

フェイトにぶつからないようにだろうかと、彼女より身一つ分、後ろに着地している。

倒れた傘を拾い上げ左腰に差し、作業用の帽子をかぶりなおす。

「……ふむ。その両手はもしかして、私を助けようか？」

「え、えと、あの……はい」

小首を傾げるコタロウにいつまでそのままにいるのだろうかと自問し、すぐにフェイトは両手をひっこめた。

「ありがとうございます。ですが、この場合、私を助けないでください」

「え、何ですか？」

まさかそのような受け答えが返ってくるとは思わず、首を傾げる。

「この作業着つなぎには工具がたくさん入っているため、大変重いのです」

ジジと胸元のファスナーを開けて裏地をみせると、大きさ様々な工具が入っていた。

それでは失礼しました。と来た時と同じようにお辞儀、敬礼を済

ますと、彼女に背を向けて部屋を後にした。

ドアが閉じるところまで目で追ってから、ふと自分が謝らなかつたことを思い出したのはとある小事の後であった。

「……あう」

「フェイトちゃん、どうかしたの？」

「へ？ う、ううん。なんでもない」

朝食時、料理をトレーに乗せて席に座るフェイトが眉根を寄せて少し呻いたのに気づいてなのはが不思議がる。

「ほ、本当に何でもないの」

「そっ？ それならいいけど……」

（言えない）

フェイトは昨晚、自分がやったことは決して話はすまいと言いつけていた。

(コタロウさんが退室したあと、近くにあつた普通の傘で同じことをして、しりもちついたなんて、絶対いえない)

どつやらこの小事は大事にはなり得なさそうである。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コゝ

第20話 　『彷徨、鳳の如し』

「嗚呼、友がみなわれよりえらく見ゆる日よ」

ティアナ・ランスターは、銭湯の湯船に入った時のアリサ・バニングスと月村すずかたちとの会話を思い出していた。

モニターはアグスタに待機している副隊長たちを映す。

「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長他、数名の隊員たちが見張^はつてくれてる」

「私たちはアグスタ^{たてもの}の中の警備にまわるから、前線は副隊長たちの指示に従^{したが}ってね」

『はい!』

全員で元気に返事した後で、キャロは正面に座っているシャマルの足元にある、3つのケースが先ほどから気にかかり手を挙げて質問する。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱^{はこ}って……」

「ん? ああ、コレ? ふふつ、隊長たちのオシゴト着」

今の制服がまさにお仕事着ではないのだろうかと首を傾げて不思議がるが、どうもシャマルの言い方からクイズを出されているようで、それ以上はヒントを求めないことにした。

「ん〜、コタロウさん、何やってるんで?」

操縦席のほうでもヴァイスが気にかかり、隣にいる本来このへりに乗るべきではない人、コタロウに話しかける。

彼が何故へりに乗っているのかというと、出発前にヴァイスが彼からへりの調整について各所の説明を受け、全員が集まった時点で彼は「それでは」と立ち去ろうとしたところ、シヤマルに止められたのだ。

「コタロウさんも一緒についてきてください」
「シヤマル？ どないしたん？」

「ごとりとケースを見せ キャロはそこから気になりだした

「見てほしいんです！」

「ケースの中身ですか？」

「い、今じゃないですよ!？」

「はあ」

「……………」

隊長たち3人は中身を知っていたため、あえて意識するように言われお互い見合わせて頬をかき、特にコタロウの仕事に余裕があるのを確認してから、彼を乗せることを許可し、現在に至る。

ヴァイスに訊ねられたコタロウは正面のモニターから隣の彼に顔を向け、

「覚えています」

「覚えています。つて、それ、今日のオークション参加メンバーですよね？」

「はい。声や動きなどのクセもあると覚えやすいのですが、文字情報だけですと覚えにくいですね」

「……えと、まさか全員？」

こくりと彼は頷いてまたモニターのほうを向くと、ぶつぶつと魔法を唱えるように名前、経歴と顔を照らし合わせていく。

「冗談かと思いきや、モニターを見て言葉に出すところをみると、どうやら本当のようである。それは先ほどはやてから全員に配られたオークションの参加名簿で、「覚えることが、未然に防ぐ可能性を引き上げる」とできれば目を通しておいてと渡したものだ。」

「ヴァイスくん、多分それ本当に覚えてるから」

「どういうこと？ と訊ねるヴァイスに、なのはは自分が知っているコタロウの情報を話す前に、自動操縦に切り替えるように促した。」

（あの人もまた、才にあふれる人。か）

アグスタに着いてからシヤマルが一度へりからなのは、フェイト、はやてを除いて全員おろし、15分ほどたってから、ガタンと後ろのハッチが開いた。

「うわあ、綺麗です。なのはさん、フェイトさん、八神部隊長！」

「そう、かなあ」

「フェイトさん、すつごく綺麗です！」

「はい！」

「あ、ありがとう、キャロ、エリオ」

「どや？ 馬子にも衣装やる？」

「意味は分かりませんが、とつても似合ってますぜ、八神隊長」

「はいです〜！」

「全員、めいっばいおめかしさせました！」

シヤマルもえへんと胸を張って3人に胸を張る。

隊長陣3人は建物、つまりホテル・アグスタに相応しい格好に着替えていた。それぞれショートラインのドレスで薄いストールを羽織っているが、色彩カラーからそれぞれの特徴を捉えたいた。

なのはは桜色をベースにワンピースタイプのドレスで内側にはバラ色のチュープ、胸下の白いリボンが胸を強調するかのようになら

れ、腕を組まなくても魅力的である。その腕にはストールを絡ませている。

フェイトは黒紫色をベースに肩に紐のないドレスが彼女を魅せ、佳麗さを拍している。黒が女性を引き立たせるのか、それとも普段の彼女のバリアジャケットと統一がとれているためかは分からないが、女性からみても息をのむ雰囲気を放っていた。

はやては薄い水色のなのと同じワンピースタイプのドレスに胸元には瑠璃色るじいろのコサージュを付け、そこでリボンとストールを結っている。綺麗というよりもむしろ、愛愛あいあいしいという表現がよく似合う。

「……えと、ん〜」

シャマルはその人が着替える前にはいたのに、着替えた後にはいないことに気付いた。

「あれ？ コタロウさんは？」

「え、あー」

これを見せたかったのかとぼつが悪そうに頭をかくヴァイスは片手を顔の前に出す。

新人たちも苦笑いである。

「すみません、手伝わせに行かせてしまいました」

彼が言うに、彼女たちが着替え初めて5分ほど経過したときに、後ろのほうで会場設営の荷物を運ぶ搬入があり、その現場長がコタロウに目を付けたのだ。

コタロウはパイロット用のつなぎではなく、作業用つなぎである。それだけでは連れて行かれることはないかと思うが、その現場長はかれの服のよれ具合から人物を判断して呼び寄せ、話し合った。

のちに、ヴァイスに念話が入り、すこし手伝いに行きますと報告
なにかあればすぐに戻るを前提に　してホテルの裏口から入
って行ったという。

「え〜」

「すみません。特に現場を離れるわけでもありませんし、指令があるときはこちらを優先させるといったもんで……」

「う〜」

訴えるようにヴァイスに顔を近づけて足踏みするシャマルに彼は平謝りすることしかできず、ぺこぺここと謝っていた。

それを見て、なのはとフェイトは「はあ」と息を吐き、はやては手のひらで顔を扇あおいで「ふう」と自分の体温を下げた。

なのはたち隊長陣はアグスタ内の警備を見る限り、オークション会場内は特に厳重に警備がなされ、通常起こり得る障害トラブルは起こり得そうにないことを確認する。

「んでな、自分で指示すればいいだけなんやけど」

「……うん」

「なんで、コタロウさん普通に手伝ってるん？」

今、なのはとはやてたち2人は一緒に居おり、オークション会場の舞台上でコロコロといくつものイスを重ねてキャスターで運ぶコタロウが目に入った。

彼は舞台の下手しもてと上手かみてに2脚ずつイスを配置すると、舞台の中央へ向かい、べたりと伏せて、イスの角度が中央を向いているかを確かめている。

しかし、そんなことは最前線で過ごしてきた彼女たちにはわかるはずもなく、コタロウがイスの配置を直し、後ろに立って布巾ふきんに包んだナットを先ほどまでいた舞台の中央に放り投げ、耳を澄ませたところで、彼がイスに座った人間に一番よく聞こえる角度と位置を確かめているのがわかったくらいである。

「……………」

はやては念話をしようとして、思いとどまり、ジト目で手摺てすりに腕をついて顎を乗つけた。

「コタロウさん、呼ぶ？」

「うっん。ええわ」

自分に対してなのか、相手に対してなのか分からない、馬鹿らしいという表情のはやてを見て、

（なんだろう？ ふてくされてる？）

なのはもまた、フェイトと同様に故郷から戻ってからのみんなの表情の移り変わりに気付き、もう一度両親の言葉を思い出す。

（『感情と表情の結びつけ』『近道をしなければ知ることはできる』か。表情からでも感情は分かると思っけどなあ）

彼女の考えるはやての心理状況はおおよそ正しい。彼女は教導官という立場からか、2人の親友より多くの人と接し、人を理解する力があると少なからず自負していた。

現在舞台の上にいる1人の男性を除いて。

「オークション開始まで、あとどれくらい？」

< 3時間27分です >

フェイトは会場の外を見て回っていた。

「わかりました、それではすぐに戻ります」

「今、コタロウさんがどこにいるか分かりませんが、気をつけて戻ってきてください」

オークション開始のおよそ5分前くらいになった頃、ヴァイスか

ら通信が入り、

「隊長たちが予測していた通り、アグスタを中心にガジェットが放射線状に攻めてきました」

と報告を受け、すぐに戻ってくるようにと言われたのだ。

「了解です」

通信を切った後で、すぐにコタロウは近くにいた会場設営の作業員に報告し、そこで初めて周りにいた作業員は彼が局員であることを知った。ここがどこなのかを聞く。

「どちらって、お前。『地下』だろうがよ」

「地下ということは分かります。申し訳ありません。連れてこられたという形なので道がよくわからないのです。どうすれば地上に出れるのでしょうか？」

コタロウはその人から道を聞くと、すこし早足でこの場を後にした。

「……あ」

教えた本人は彼が左に曲がったところで、自分が道を教え間違えたことに気付いた。

「ま、大丈夫だろ」

何かあれば戻ってくるだろうと軽い気持ちで、道具の片づけを再開した。

コタロウは彼の言葉が実は間違っていたのではないかと思ったのは、『急いでいます』と自分の前で先を遮る数人の警備員に局員証をみせて少し頑丈なシャッターを通してもらって、4、50メートル進んだときであった。

（うん。引き返そう）

次に会った人にもう一度道を聞こう決め、来た道を戻り始める。そして、次の角を曲がろうとしたときに、ごそりと動く人影が自分の視界に入った。

（忙しそうだけど、僕も急いでいるし……）

迷惑を承知でトラックの後ろのドアを開けようとしている人に声をかけた。

「あの、お忙しいところ申し訳ありません」
「……………」

コタロウの声に反応して振り返る人は、

（大きい人だなあ……全身黒尽くめで、あれ？目が4つ？）

見上げる人はコタロウが見上げるほど大きく、首元に紫色のスカーフを巻き、2対の赤い目が鈍く光るモノであった。

（誰かの使い魔だろうか？いや、それより）

「道を訊ねたいのですが」

コタロウが、相手が実はドアを開けようとしているのではなく、こじ開けようとしているのに気づくのはそれからすぐのことである。通風孔から流れるものだろうか、それとも地上から流れてきたものだろうか。それは彷徨い、戦いで摩く。

“ 彷徨^{ほうこう}
鳳^{かぜ}
の如し ”

第21話 『涕淚、霖の如し』

相手はコタロウに背を向けると金属でできたドアに手を入れ、バキンという音とともにそれを^{むし}薙り取った。

（僕が見たオークション参加のメンバーには機動六課を含めて、このような人物はいなかった。作業員メンバーの誰でもなく、そもそもドアをとる時点で、このトラックの所有者じゃない）

「ごそり、ごそりとトラックの中の木箱をあさりだす。」

（使い魔の主人自体の命令もこのような非効率性は求めない、外では襲撃……）

「八神二等陸佐、今、お時間宜しいでしょうか？」

「ごめんな。外の通信報告に集中したいねん。後でもええか？」

「了解しました。申し訳ありません」

事後報告という事を確認し、念話を中断する。相手に名前を知らせてはまずいと念話にしたのだ。

視線を相手に戻す。

「盗難と判断しました。もし、運転手の使い魔ではなく、言葉が理解できるのであれば、任意の上御同行願います。言葉が理解できないのであれば、私の構えを見て私が貴方を拘束しようとしていることを認識してください」

傘の柄に手を置いて「傘、ワイヤー」と唱えてワイヤーを出すと、分断してワイヤーのみにする。

コタロウの言葉を理解したのか、それとも言葉という音に反応したのか分からないが、相手は狙いの品を地面に置いて、振り向いた。

(えーと、軽く打ちすえるだけ。お腹に一撃で、いいのかな?)

少なくとも傘を買ってから6年、コタロウは一度も実戦をしたことがない。

(軽く、軽く)

相手も合わせて構えをとる。

相手は、傘からワイヤーを出したところは見えていない。

魔法少女リリカルなのはStrikers 困った時の機械ネ
コ

第21話 『涕淚、霖の如し』

ホテル・アグスタにガジェットドローンが攻めてくる前、ティアナは自分の守備位置についているときに、スバルから念話が飛んできた。

「でも、今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合か」

「そうね。アンタは結構詳しいわよね、八神部隊長とか、副隊長とかのこと」

彼女は頷いて、ふとスバルがその人たちについて詳しいことを知り、聞いてみる。

「うーん、父さんやギン姉ねえから聞いたことくらいだけど……」

スバルの知る限りでも、自分と比較にもならないという事がわかる。

八神部隊長の使用しているデバイスが魔導書型の『夜天の書』というもので、副隊長たちとシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長

の『個人保有』の特別戦力。リイン曹長は別枠だが、同様と違って構わない戦力で、合わせれば他の部隊とは比較にならない戦力だという。

「稀少^{レア}スキル持ちの人たちはみんなそうよね」

「ティア？　なんか気になるの？」

「別に」

ティアナは素っ気なく答えると、スバルは念話を打ち切った。彼女は今、1人という事もあり、待機命令中の間、考える余裕ができる。

（六課の戦力は無敵を通り越して、明らかに異常だ。八神部隊長がどんな裏ワザを使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバー^{エス}S。副隊長でもニアSランク……）

考えると、それをサポートしている人たちもエリートばかりということを再確認し、目を閉じながら奥歯に力を入れる。

次に周りの人間に思考が移り、

（あの年でBランクを取っているエリオと、稀少で強力な竜召喚士のキャラは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子）

なおかつ、自分のよく知るスバルは戦術に稚拙さが残るものの、

潜在能力と可能性を秘めていることは日々の訓練を見ても十分わかる。

（スバルは、優しい家族のバックアップもある）

息を吸い、口を狭く深く息を吐く。

（やっぱり、ウチの部隊で自分が、私だけが……）

凡人ほんじんという、今まで何度も思えば打ち消してきた言葉をまた思い出す。

（『友がみな』 なんじゃない、私の周りにいる人たち全てが才気に溢れている！）

小さく顔を横に振り、そんなことは関係ない。大切なのは周りの才能ではない。と思考を雲散させる。

（それでも、私は立ち止まるわけにはいかないんだ）

そうして間もなく、ガジェットが攻めてきたと通信が入った。

管制指揮はシャマルが執ることになり、シグナムとヴィータたち副隊長とザフィーラは、新人たちの防衛する領域よりも前線に自分たちの防衛ラインを引き、ティアナとスバルは2人がガジェットを自分たちよりの確に破壊しているところをモニターで確認する。

「副隊長たちとザフィーラ、すごい！」

スバルはそれを見て、驚嘆する。モニターから確認できる黒煙が、耳に届く爆発音がそれを物語っている。

「これで、能力リミッター付き……」

逆にティアナは愕然とする。見るというよりも見せつけられていると思わせる映像にしか見えなかった。

今できることはそれに拳こぶしを握ることしかできない。

ゆらゆらと黒煙が立ち上るのを見ている男と少女に、通信が入り、モニターにとある人物が映し出される。

「ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア」

「ごきげんよう」

「……何の用だ」

その人物にゼストは挨拶することなく、用件を聞く。もともと用件がなければこちらからも、向こうからも連絡など来ないからだ。

そして、その考えは当たりであり、相手は自分たちの今の場所を把握していることを知った上で依頼を投げかけてきた。

向こうにあるホテル・アグスタで行われている 実際にはまだ行なわれていない オークシヨンのカタログには載せられていない品を手に入れてほしいというものだ。

ゼストはレリックがらみでない限り不可侵を守るという約束のも
と断るが、

「いいよ」

ルーテシアは2つ返事で答えた。

「優しいなあ、ありがとう。今度、是非お茶とお菓子でもおごらせ
てくれ」

相手はルーテシアのデバイスに情報を転送する。

「アスクレピオスに私がほしいデータを送ったよ」

間もなくして、吉報きっほうを待っているよと相手は言葉を残し、通信を
切った。

「……いいのか」

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど」

ルーテシアは小さく頷いて、実のところ自分は彼のことをそれほど
嫌いではないと言いつつ、身を隠していたフード付きの大きなコ
ートから袖を抜き、ゼストに預ける。

「そうか」

またこくりと頷いて彼から十分に距離をとり、両手を広げる。

「吾は乞う、小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が命を果たせ
……召喚」

紫紺色の正方形の魔方陣を展開し、ゆっくりと魔力で土台を作り
だした後に、呪文を詠唱した。

（おそらく、相手にも気づかれたらうな、速やかに完了して、はや
くここを離れるとしよう）

ゼストは彼女の放つ魔力が特徴的で、かつ躊躇いがないことを知
っていたので、そんなことを思いながら少女を見守る。

「インゼクトツーク」

その言葉で幾もの小さい虫のようなものを身のまわりに放つ。

「ミッション オブジェクト・コントロール
指令、無機物操作」

気をつけてね。と放たれた者に言い聞かせ、向かうように命じた。

ガジェット
無機物に、自分が召喚させた虫をとりつかせ、相手が様子を見るために一時引き下がったのを見計らってから、

「ブンターヴィヒト。無機物オブジェクト11機、転送移動」

と、さらに魔力を練りこんだ。

「有人操作に、切り替わった？」

シグナムとヴィータの攻撃が突如として当たらなくなったことからシャマルが見定め、

「それが、さっきの召喚士の魔法？」

六課本部のオペレーションルームにいるシャリオは、先ほど感知した巨大な魔力を放った召喚士の魔法によるものだと憶測する。
シグナムは新人たちの援護へ向かえとヴィータを促し、^{つなが}シヤマルはザフィーラにシグナムと合流をと管制を執る。

「遠隔召喚！」

まさかとばかりにキャロは顔を険しくする。

「来ます！」

その張り上げとほぼ同時に、自分たちの前方に見たことのない魔力光を放つ魔方陣が展開され、11機のガジェットが出現した。

(ここからだ)

ティアナは肩幅よりも少し広めに足を開き、僅かに膝を曲げて重心を低くする。

「あれって、召喚魔方陣？」

「召喚ってこんなこともできるの？」

キャロの錬鉄召喚とは違い距離をなくす転送魔法にスバルは息をのんだ。

「優れた召喚士は転送魔法の熟練者エキスパートでもあるんです

「何でもいいわ。迎撃、行くわよ！」

ティアナの言葉に、全員迎撃姿勢をとる。

(本当に何だっついていい。今までと同じだ)

落ち着かせるように、1つクロスミラーージュにカートリッジを込める。

(証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して)

変わる方法は6年前に体験したはずだと、デバイスを構え前髪の先に見えるガジェットに狙いを定め、

(私はそれで、いつだってやってきた)

魔方陣を足元に展開して態勢をとり、戦略を張り巡らせた。

「……見つけた」

ルーテシアは自分が召喚した虫のうち、数匹をホテルの搜索へ向かわせていた。

虫は小さく、普通の人には目視できても気にならない程度なので搜索は容易に事が運び、すぐに依頼の品を発見できたと報告を受け

る。

「ガリユー、ちょっとお願いしていい？」

彼女の左腕に装着されているアスクレピオスが肯定を示すように、ぼつと光る。

「邪魔なコはインゼクトたちが引き付けてくれる。荷物を確保して……うん、気をつけて行ってらっしゃい」

その左腕を掲げると、魔力弾とは異質な何か飛び出し、アグスタへと向かっていった。

弾が当たらないことは訓練でも実戦でもいくらでもあったが、今日はいやにそれが目につき、ティアナに焦りを生ませる。

一度深呼吸をして、ガジェットが打ち出した質量兵器のような索敵弾に狙いを定め、打ち抜く。

彼女はそれに全弾命中させたことで、リズムを取り戻した。

「ティアアさん！」

キヤロの声色から自分の死角から狙われていると思い後ろを振り向くと、その通りに背後にガジェットが2機、自分に対して狙いを定めていた。

跳躍することで、ガジェットが打ち出した弾をかわし、今度は彼女がその2機に狙いを定めて魔力弾を放つ。

だが、

(打ち抜けない)

当たりはしても、AMFを展開しているガジェット本体までには届かず、無力化されてしまった。

ティアナは苦虫を噛んで顔を歪めた。

(くっ)

心境としては、相手にではなく自分の実力に腹立たしくなる。
リズムは取り戻しても彼女にとっては一番いやなタイミングで、
フォワード全員にシヤマルから通信が入る。

「防衛ライン、もう少し持ちこたえてね」

「はい！」

「グイータ副隊長がすぐに戻ってくるから」

ティアナには自分たち、いや自分だけでは何もできないといわれ
ているように、

「守ってばかりじゃ行き詰まります。ちゃんと全機落とします！」

持ちこたえるという願いに近い命令に自分の意志を上乗せする。

「ティアナ、大丈夫？」

本部のオペレータから無茶はするなと警告するが、彼女は自分の
積み上げてきたものを、自分独自で積み上げてきたものを信じて疑
わず、

「毎日朝晩、練習してきてんですから」

それを自分に言い聞かせるように普段の言葉より口語調になる。

「エリオ、センターに下がって。アタシとスバルのツートップで行く！」

「あ、はい！」

「スバル、クロスシフトA。^千行くわよ！」

ティアナの指示にスバルが拳を握って応え、^{ウイングロード}空中路で滑空している。

（証明、するんだ）

両拳銃にそれぞれ2発の装填。^{ロード}

（特別な才能や、凄い魔力な無くたって）

魔方陣の光強さが足元を明るくさせ、周りを暗がりにする。

(一流の隊長たちの部隊でだって、どんな危険な戦いだって……)

練成した魔力を弾として自分に周りにいくつも解放する。

「アタシは、ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって」

(証明、するんだ！)

その間にスバルがガジェットを誘導し、自分に引き付けていた。狙いを定めようと意識を強めるが、なかなか照準が定まらず、腕に魔力が逃げ出し、ぴりりと電撃のように魔力光が迸る^{はちばちば}。

「ティアナ4発装填なんて無茶だよ。それじゃティアナもクロスミラージュも」

「撃てます」

<問題無く>

ティアナは通信の再警告を遮り、クロスミラージュも主に倣^{まね}う。なんとか魔力を抑え込むことに成功し、照準を合わせ、

「クロスファイヤー」

(大丈夫、いける！)

「シュート！」

周囲の魔力弾を、腕を交差させて一斉に出力した。

1つ、また1つとガジェット向かい、当たり、打ち抜き、爆ぜる。威力は十分で、的確だ。

彼女はさらに、クロスミラージュの引き金を引き、魔力弾を放つ。それもまた、的確だ。

『ああ、手傷を負わせるのにやっとだったランスターの妹か』

頭の中にノイズが入るまでは。

「ガリユー？」

ルーテシアが異変に気付いたのは、ガリユーが人に見つかり一撃で眠らせると報告があつて間もなくのことだ。

「どうした？」

「……ガリユーから反応が返ってこないの」

意思の疎通をはかるが相手からの反応がない。
もう一度呼び掛けると、応答が返ってきた。

「ガリユー！？」

苦悶の意思が返ってくる。

ゼストから見ても明らかにルーテシアが驚き、瞳が揺れており、動揺しているのがわかる。

「ゼスト、ガリユーが……」

「ひとまず、連れ戻すんだ」

揺れる瞳が彼に訴えかけ、連れ戻すことを提案する。
彼女は念じて引き戻し、

「……………」

2人は寝そべるガリユーを見て目を大きく見開いた。
呻き声うめを洩もらせている彼は魔力を帯びない通常のワイヤーで手足を縛られているが、それよりも大きく注視する部分が2人にはあった。

「シールドは張らなかったの？」

ガリユーの腹部にはくつきりと足跡が残されていた。それは汚れて付いたものではなく、へこんでいるのだ。深さは軽く成人男性の親指第一関節ぐらいのものである。

「嘘、でしょう？」

「ガリユーは何と？」

「多分、油断からだと思うけど、転ばされた後……………」

彼女が代弁するに、転ばされた後、警戒を持ってシールドを展開したが、展開部分で一番魔力結合の弱い部分を見破られ、相手の足

の振り上げとともに蹴り崩されて、振り上げられた足は気づけば自分の腹部を踏み抜いていたという。

振り下ろされた足の動きも見えなかったと付け加える。

アンラヴル・ポイント
「紡解点」

「それは？」

「生成し始めたときに一番最後に魔力結合される部分、或いは生成した後一番結合が薄い部分のこと。これは誰にでもある」

人間が作るものに完璧などないというように、言葉を吐き、ガリユーを召還する。

「そこを突かれたと？ しかし、可能なのか？」

「うん。注意して見れば誰にでも見える」

ほらといわんばかりに自分でもシールドを張り、連結の遅いところを見せる。

「一瞬じゃないか」

「うん。一瞬。それでココも紡解点」

そのままシールドの薄いところも見せる。それは先程の部分ではなく別の部分で、周り比べて言われなければ気付かないほど僅かに光が弱い。

「でも、これは周りより結合が弱いだけ。シールドの場合、他より2、3割劣るくらい」

「これを見破ったと？　しかし」

「そう。ガリユーが戦った人の怪力も異常だけど、これを一瞬で見抜くほうが、はつきりいつて異常」

「ましてや、戦闘の中ではなおのこと困難」

こくりと彼女は頷く。

「管理局員なのか？」

ゼストの言葉にルーテシアはアスケレピオスにいるガリユーに話を聞き、首を傾げた。

「わからない。って」

「わからない？」

「多分そうだと思うんだけど、管理局員の制服なんて着ていなかったし、魔力も弱くてそうかどうかとも怪しいって」

（僅かに魔力を有する、一般人程度）

「デバイスは所持していたのか？」

ふるふると彼女は首を振った。

「ガリユーが言うには……」

次の言葉に、ゼストもその人が管理局員かどうか首を傾げた。

「左腕がなくて、左腰に傘を差していたって」

「失敗したのかい？」
「うん」

相手は経緯を聞くと先ほどの2人と同じように首を傾げた。

がらりと何かが崩れたような気がした。

「ティアナ、この馬鹿！」

（いや、違）

「無茶やった上に、味方撃つてどオすんだ！」

自分の撃った魔力弾のうち1つがスバルへ当たりそうになり、ヴィータがそれを寸でのところまで打ち返してから、彼女の言葉なんてティアナの耳には届かなかった。

「あの、ヴィータ副隊長。今も、その、コンビネーションのうち
で」
「フザケ巫山戯るタコ！ 直撃コースだよ今のは！」

スバルの言葉も同様である。

(……………)

頭が真っ白になり、一瞬、周りの状況も忘れた。

「ち、違っんです。今は私がいけないんです。避け
「うるせエ馬鹿ども！」

砕かれたガジェットから煙が立ち昇り、油の混じった焼け付くにおいに瞳が動く。

「……………もういい」

ヴィータの抑揚よくよう無い声から意識してティアナの耳に入ると、次に吐かれる言葉が分かりすぎるほど分かっていたのにもかかわらず、

「後はアタシがやる。2人まとめてすっこんでろ！」

自分の身体から力が抜けていくのを止められなかった。

(ジャンに言われた通り、軽めにしたけど……)

「あの人、大丈夫かな」

地面には僅かにヒビが入っているのを見る。

(3トンぐらいってどうなんだろう?)

「このヒビを直してから……」

コタロウは僅かに身を竦ませ、

(この出向先は今週まで、かな)

盗難を未然に防いだものの、取り逃がしたというミスの重大さに息を吐く。

自分から進んででた裏手の警備が、ひとつの逃避であることはおそらく自分の背後にいるスバルも分かっているだろうと、ティアナは思う。

「あのね、ティアア」

「いいから行って」

それでも、彼女は踏み込んでくる。

「ティアア、全然悪くないよ。私が、もっと、ちゃんと」

しかし、今のティアナにはそのパーソナルエリアに踏み込んでく
るのが、心を悟られてしまいそうで、嫌だった。

「行けって、言ってるでしょ！」

（アタシ、スバルに甘えきってる。こんなこと言っちゃいけないの
に、言ってもスバルは変わらないから……）

「ごめんね。また、後でね、ティア」

背後の彼女はそれだけ言うと、エリオ、キャラたちのいる場所ま
で駆けていった。

（次に会うとき、アイツはまたしゃべりかけてくれる……ごめん、
スバル）

ティアナは今の自分の行動にも、口に出した言葉にも嫌気がさす。

（私は死んでしまった兄さんを……生きているスバルも、エリオも、
キャラも）

「私は……私は……」

壁に手を着いて、誰にも見せないように、顎を引いて下を向き、それを流した。

なんとか地上に出ることができたコタロウは、ここが裏手であることを確認した。

（まずは正直に状況を話し、今後の身の置き方を伺い……ん？）

ヴァイスからの指示を受けた集合地点まで戻ろうとしたとき、押し殺すような女性の声が聞こえた。

（ランスター二等陸士、泣いている？）

ちょうど遠目からティアナを横から見ることになり、項垂れてい

彼女の顔から雫が見えた。

彼は相手の表情から何かを読み取ることを困難としているが、泣いているところを見れば、今は同じ課にいることから、その理由を問いかけるような考えは持ち合わせていた。

しかし、彼の場合、もう1つ親友から学びとっている。

『いい？ 女性が泣き顔を誰にも見せないように、項垂れたりして顔を隠している場合は、それがどんなに霖ながめのようなものでも、慰なぐさめてはいけないわ』

それは、秋霖しゅうりん午後のある喫茶店で夫の隣で紡いだ言葉である。

『だってそのとき、女性は『泣いてはいない』のだから……』

“ 涕てい涙なみだ、霖ながめの如し ”

第22話 『掩蔽、雲の如し』

「お待たせいたしました。それでは、オークション開催です」

司会者がゆつくりと壇上中央まで歩き、トントンと簡単にマイクを叩いて調子を確認してから、ホール全体を見渡しながら、開催を告げた。

次の言葉を繋ぐ前に拍手が起こり、そのおさまりを見計らってから、オークションカタログに記載されているルールを読み上げる。競り落とした品の受け渡し方法や金額を上乗せる時の手段を話している間、司会者に目を向けずにカタログに目を落とし記載を追う者、自分たちが競り落とす予定の品を再度確認する者がいたり、参加者の行動は様々である。

「外は問題なく終わったみたいだね」
「うん」

先ほどシャマルから念話が入り、ホテルへの襲撃は阻止されたと連絡があり、なのはとフェイトはすこし警戒心を緩めた。

それでも多少は問題は残ったが、防衛という最優先事項は守られたのだから、任務遂行結果としては十分である。

「問題の召喚士は今、探索中や」

「あ、お帰りはやてちゃん。と、アコース査察官？」

見つけるのは難しそうやな。と声を漏らし、壇上を一瞥する。

「久しぶりだね、高町一尉、フェイト執務官？」

『お久しぶりです、アコース査察官』

会場の雰囲気もあってか、なのはとフェイトは簡単な会釈で済ませる。

「ほんなら、区切りがいいところで、私たちは会場から抜けようかなのは隊長は新人たちを、フェイト隊長は現場調査をお願いできるか？」

『了解』

「ふむ。忙しそうだね」

「どこかの査察官と違ってなあ」

「こういう場で擲揄^{からか}うなんて、はやても意地が悪いなあ」

苦笑するヴェロツサにすこし意地悪く笑うのをなのはとフェイトは見た後、2人はお互い顔を見合わせ眉を寄せてくすりと笑う。

「全く、仕様の無い妹だよ……でも、まあ」

だが、今度はヴェロツサがしたり顔が3人を見た。

「では、ここで品物の鑑定と解説を行なってくださいます、若き考古学者の方々を紹介させていただきます」

そのまま3人が彼と目を合わせると、彼は視線を壇上に移動させ、3人を壇上に向けさせる。

「ミッドチルダ考古学会の学士であり、かの無限書庫の司書長、ユーノ・スクライア先生です」

『 えっ!?! 』

3人とも目を見開いた。

「サプライズには成功したかな？」

『 ユーノ（くん）? 』

ヴェロツサは自分の言葉が3人に聞こえていないがわかるとさらに顔をほころばせた。

「それでは、ひとこと言葉を頂けますか？」と司会者に促され、ユーノと入れ替わる。

「あ、どうも、こんにちは、ご紹介にあずかりましたユーノ・スク

「ライアです」

ユーノはこの会場に招かれた事の感謝の言葉と、微力ながら尽力いたしますと一言述べ、司会者にマイクを戻した。

「アコース査察官もなかなか
「意地が悪いと思います」

はやて、なのは、フェイトにとっては嬉しいサプライズであるものの、どうも相手に一枚上手というところを見せつけられているようで、納得がいかないかった。

「意地が悪くてなによりだ」

実質、彼は一枚上手であることを見せつけていた。

「ユーノ・スクライア先生、ありがとうございました。それでは次に」

司会者は大きく意気込む。

「僅か26歳でミッドチルダ、ベルカにおける民俗学、自然哲学、

言語学の3分野において、博士を修め、かつミッドチルダで最も榮譽がある賞、『ディアヴ・ストーン賞』を受賞したご夫婦をご紹介いたします」

『……え？ いや、まさか』

司会者が自分のことのように自慢げに紹介するなか、なのは、フエイト、はやては久しぶりに会ったユーノとは違う、困惑の表情をする。

「どうかしたのかい？」

「アコース査察官、あの夫婦もお呼びになられたんですか？」

不思議に思った彼が3人に伺^{うかが}うと、悪い冗談だろうというようにはやてが質問する。

「いや、違うが……」

「さよ、か」

「あの夫婦ということは、知り合いなのかい？」

ええ、まあ。と曖昧に彼女は返す。

「この賞は、規則上、年1人しか受賞することしかできませんでした。しかし、これを覆したのはいまだ新しいと私も存じています。選考者たちは口を揃えてこう申したそうです。『優劣付け難^{がた}し』と。

……口上が長くなりました。それではお願いします
」
「……………」

3人ではなく、この会場にいる人たちのほとんどが息をのんだのは、

「ジャニカ・トラガホルン先生、ロビン・トラガホルン先生！」

その夫婦が、それは1つの芸術のように存在し、壇上を悠然と歩いているからだ。

ジャニカは黒いシャツに鈍いシルバーのネクタイを締め、上下とも黒いスーツを着こなし、赤黒い臙脂色えんじの髪と見事に調和している。対するロビンは女性であるのにもかかわらず、ジャニカと揃いの黒いスーツを着て、相対するように白いブラウスにダークシルバーのネクタイが銀色の髪の彼女を引き立たせている。

なおかつ、2人であることそのものが互いを強調し、周りの時間を止めていた。

ゆっくりとマイクの角度をあわせる。

「長い口上、どうもありがとう。しかし、私たちは年に片手で足りるほどの講義しかしておらず、広く長い道を創り、進んでいる多くの教授陣には敵いません。もちろん、スクライア司書長にも……」

ジャニカはユーノに目配せすると、相手は両手を突き出しぶんぶ

んと狼狽する。

「ご謙遜を。それに皆さんと違い、私たちは罪で暮らしているんですから、会場にいるほとんどのの方々にも敵わないわけです。まあ、罪を犯すほうではなく、取り締まるほうですが？」

僅かに会場を沸かす。

「だろう？ 古代遺物管理部機動六課課長、ハヤテ・ヤガミ二等陸佐、エース・オブ・エース、ナノハ・タカマチ一等空尉、そして若くして執務官に就く、フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務官？」

彼女たちには敵いますといわんばかりに視線を送ると、会場全員がそれに促され、視線が彼女たち3人に向く。当然、近くにいるヴェロツサにもだ。

『な、なな！？』

「それでは、今回は仕様がなく『自慢の妻』ということ、引き継がせましょう」

ジャニ方は彼女たちに会場全員の視線が送られたところを十分に楽しんでから、ロビンにマイクを引き継がせる。

「ふう、意地の悪い夫ですみません。ロビン・トラガホルンです」

『（ま、全くです）』

「折角着たドレスなんだ、見られたほうが良かったらろう？」

ロビンの後ろに付いたジャニカから内心驚いている3人に念話が入り、

「ジャニカ二佐が一番意地が悪い」

かろうじてはやてが返すと、なのはもフェイトも大きく頷く。尚、すでに観客の視線は壇上に戻っている。

「意地が、悪い？ 見せ場を作ったはずだが……」

「一応、任務中ですので」

「ふむ」

ちらりと、彼女は横目でヴェロッサを見ると、彼も少し驚いているようである。

「まあ、意地が悪いのは認めよう。だが、一番じゃあないぞ？」

「ん、それはどういうことやるか？」
「なんだ、聞いていなかったのか？」

会場が沸くのを見ると、ロビンの話術もジャニカに引けを取らない。

「そうは思いませんか？ 稀少技能、古代ベルカ式の使い手、ヴェロツサ・アコース査察官？」

『……っう！？』

また、会場全員の視線を4人に注そがせる。

「『優劣付け難し』と言っていただろうか？」

その念話は届いていても4人は反応できないでいた。

魔法少女リリカルなのはStrikers
く困った時の機械ネ
コ

第22話 『掩蔽、雲の如し』

それからまもなく、はやては制服に着替えた後、なのは、フェイトと別れ、ヴェロッサ、ジャニカ、ロビンと一緒にホテルが運営するカフェで帰りの準備が整うまで、一息を付いていた。

「いやはや、まさか公開されている私の能力のぎりぎりを紹介されたときはびっくりしました。やはり、事前に？」

「まあ、事前にといえば、事前にだな」

「正直、参加人数全員の経歴を覚えるのは骨でしたね」

「オークション参加メンバーの情報だけだと、その人の称号までは書かれていないからなあ」

1週間程まえから覚え始めていたと聞いたのははやては、今右に座っている女性とその向かいに座っている男性の『オ』に愛想笑いしかできない。

「その笑いを見ると、覚えてはいないようだな」

「す、すみません」

「あまり、はやてを苛め^{いじ}ないでください」

「こちらこそ、うちの愚かな男が申し訳ありません。そのためにアコース査察官が全員覚えたのですから何も問題ないでしょう?。」

ジャニカはロビンを睨み、胸ポケットのハンカチを相手に手渡すと、その女性は3本指で受け取り、口周りを拭う。

「……………」

「ぼ、僕も苛めないでいただけるとありがたいのですが」

驚くはやての視線を受けながら、ヴェロツサはぴくりと眉を動かす。

「ま、まあ、ある程度慣れましたわ。それで今日も、もしかしてコタロウさんが心配で？」

「ん？」

その一言に、今度は夫婦が驚いた。

「ネコが来てるのか？」

「ここで彼のすることなんて……………いえ、大抵できますが」

彼らもコタロウと同様に普段は冷静であり、彼が絡むとより感情的になるのがよく分かる。だが、そもそもコタロウがここに来る予定ではなかったと思いつくと、今回は偶然だと考えた。

「はやて、コタロウさんというのは？」

「ん、今六課に出向できている機械士マシナリーなんよ。ああ機械士というのは

「『局の修理屋』がはやての課に？」

はやての言葉を遮りヴェロッサがぼそりと工機課の代名詞を答える。

「なんや、知ってるんか？」

「ああ、ウチにも一度来たことがあるんだよ。1日だけだったけど。機械士、ダヴバード・ロクキールマシナリーバード 機械トリ の技術力、知識、身体能力には驚くところが沢山あった」

たったの1日だけだったのに。とさらに続ける。

「それで、興味から少し調べたんだよ」

「ああ、ハトさんか」

「今は何処で何を修理しているのかしら？」

鳩タウというあだ名より、はやての意識はヴェロッサに向いていた。

「それで？」

「うん。それがねえ、何も出てこなかったんだよ」

「何も出てこない？」

「データ上はね。『機械』なんて言葉で調べると数限りなく出てく

るし、『機械士』なんて、通称みたいなもので公式データには登録されてない。それ以外のデータには出てくる。『マシン』や『マシナリー』なんて本来『機械部品』と言う意味だからなおのことね」「なおかつ、40代以上でないと知らないときたもんだ」「ええ、そのとおりです」「さらに、その人たちも話し出すと」「昨日のことのように話し出して、懐かしむあまり一杯付き合わせるでしょう?」「それもそのとおりです」

つまるどころ、詳しいことは口承クチウケでしかない事しかわからないと言ったものだった。

「本人たちも色々忙しいせいで、情報は設立当初のまま塗り替えられておらず、事件という事件にも残されていない。功績という功績も無し。まあ、僕も興味本位だからそれ以上は調べなかつたけど」

「そこに行き着くだろうな」

「ジャニカニ佐もお調べにならったんですか?」

「俺は」

「私たちは直接本人から聞いていますから、それ以上に知っています」

「知りたければ」

「体験するんだな。何を聞けばいいかでさえ、分らんだらうから」

本当にお前は横取りするのが好きなんだなあ。といつも通りの口喧嘩を始める夫婦にヴェロツサは驚き、はやては苦笑した後、考え

込んだ。

（ほんまに何処にも出てこないんか。あんなにすご……いや、局の修理、雑作業一手に引き受けて、終われば次の現場。当たり前と言え、当たり前、か。やっぱり、その都度見るしかないんやるか）

どんなときに？ と自問自答しているとき、聞き覚えのある声が向こうから聞こえた。

「はやて、コタロウが報告したいことがあるって」

ヴィータの後ろに付くコタロウを見て、ロビンはジャニカの会話そっちのけで彼に抱きつこうとしたが、この時ばかりは彼はそれをやめさせた。

「申し訳ありませんでした」

コタロウは報告の始まりにも同様に述べ、状況をなるべく的確に話した。

「了解や。無事でなにより。せやけど……いや、事後報告の確認はしたな。こちらのほうこそ、すみません」

先に連絡が欲しいと思ったが、連絡を貰っていたのは確かで、事後報告判断をしたのは自分だと思い出すと、はやても頭を下げる。

「いえ。それで、私はやはりこのミスにより、来週から別の場所になるのでしょうか？」

「ん。いや、そんなにはならへんけど……」

「それでは、反省文はいつまでに？」

「反省文もなにも、お咎めは何もなしや」

「しかし、それでは」

2人の会話で3回ほど同じやり取りがおこなわれると、するりとジャニカは彼の腰から傘を抜き取り、石突いしづきに持ち替え、

「傘、張り扇ハリセン」

はらりと、傘をまとめているボタンがはずれてハリセンになり、そのままスパンとコタロウを叩く。はた

「ジャン、痛い」

「反省を食い下がるのはいいが、3回以上は時と場合だ。この場合は咎とがめがない事を喜んで引き下がってよし」

コタロウはううむとしばらく悩んだ後、謝辞を述べて敬礼して場を収めた。

「その傘って、ハリセンにもなるんか？ あ、いや、余計やった。それで、その人物の顔は覚えてますやるか」

「はい。傘、剥離、アンマウントタミーペーパー仮紙」

こくりと頷き、傘に命令すると、離れた生地は驚色とびいろから白く変わり、紙になる。

そして、床に広げてぺたりと座り込むと、ペンを片手に もとも片手しかない ザザという音とともに描き出していった。

「これも機械士の実力、か」

「こんなんばかりなんよ」

今度ばかりははやては驚かず、ヴェロツサが驚き、トラガホルン

夫婦は表情変えず紅茶を飲み干していた。

「ふむ。このような方でした」

「お前、絵も描けるのか？」

「召喚獣、やるか。いや、追っているのも召喚士やからそれが妥当やな」

設計製トレス図補助も行ないますので。と紙を見せながらコタロウは頷く。

その後、立体感のある絵をデータでシャリオに送ると、同時に帰る準備が整った知らせを受けた。

「俺らも帰るかね、仕事もたまり始めたろうし」

「主に貴方の不備が発生した書類ね」

どうだか。とはやてに合わせて夫妻が立ち上がり、ロビンが気付く。

「でも初めてね。ネコが実戦をしたなんて」

「ああ、そうだな。少なくとも出会ってから」

「え、うん。うん？　そ、か。いや、思い出したよ。初めてだ、僕。模擬戦以外で人と戦ったの」

『快拳だ』

夫婦が驚くなか、はやて、ヴェロッサ、ヴィータは頭を傾げる。

「ん、戦ったって言ったけど、お前、強いのか？」

「わかりません。少なくとも、私はジャンとロビンに勝ったことはありません」

「ネコはいつも防戦一方だもんな」

「うん」

次にヴィータが夫婦に聞こうとするとはやてが止めて、首を振った。

「2人とも、私と同じや」

「え？」

「聞いたことないか？」 『クアッド・クアッド・エスSの天魔使』

「本局のほうだと、夫婦であることが有名すぎて、この名前は一人歩き。顔を知っている人は少ないんだよ」

はやても今日、夫婦に会う前にヴェロッサから聞いたばかりである。

まだヴェロッサも直接2人の戦闘を見たことはないことから、六課の誰一人として知っている人はいないだろう。

『ティアナは時々、少し一生懸命すぎるんだよね。それでちょっとやんちゃしちゃうんだ』

ホテル・アグスタから戻った新人たちは今日の実戦もあり、夜の訓練はなくなつて、ティアナは個人練習に励みながら、現場でなのはに言われたことを反芻していた。

『でもね、ティアナは1人で戦っているわけじゃないんだよ？』

精密射撃の練習は動きを最小限に保たなければならなかったため、下半身はほぼ固定され、疲労も著しい。

『集団戦での私やティアナのポジションは、前後左右全部が味方なんだから。その意味と今回のミスの理由、ちゃんと考えて同じことを二度と繰り返さないって、約束できる？』

射撃の標的は彼女の周囲に展開され、日が落ちても練習できるよう、銃口が正常に向けられれば点灯するものだ。

（確実に、確実に　くっ）

限界に達したのか足が震え、力を抜けてへたりと座り込んでしまった。

（まだだ。こんなじゃ）

拳を握って大腿を一発殴り、立ち上がり再び構える。

（もう、一度　）

「4時間も続けてるぞ、いい加減にしたらどうなんだ？」

（ヴァイス、陸、曹？）

十分だろうと手をたたいて、ティアナの注意を引く。

「見てたんですか？」

「コタロウさんと一緒にへりの整備中、スコープでちらちらとな」

彼は腕を組んで言葉を選ぶと、

「ミスショットが悔しいのは分かるけどよ。精密射撃なんぞ、そう
ホイホイうまくじゃあない」

近くの木に寄りかかって、がしがし頭をかく。

「無理や詰め込みで、ヘンな癖つけるのもよくねエぞ」

ヴァイスの面倒見のよさを知っていても、今の彼女には少し鬱陶うつとう
しい。

そして、その雰囲気は十分にヴァイスに伝わった。

「って、昔なのはさんが言ってたんだよ。俺アなのはさんや、
シグナム姉さんたちとは割と古い付き合いでなあ」

「……それでも、詰め込んで練習しないと、うまくならないんです。
凡人ぼんじんなもので」

話を無理やり打ち切るために、ヴァイスに背中を向けて、再び銃
を構えた。

「凡人、か。俺からすりゃあ、お前は十分に優秀なんだがなあ。羨ましいくらいだ……」

彼女はもう話をするつもりはないらしく、ヴァイスは息を吐く。

「ま、邪魔する気はねエけどよ。お前等は身体が資本なんだ。体調には気を使えよ」

「ありがとうございます。大丈夫ですから」

しばらく、ティアナは彼のほうを向かずに訓練を続けていると、いつのまにか気配は消えていた。

(少しでも、無理をしないと。少しでも、詰め込まないと、追いつけない。『あの時から』決めたんだ)

『あの時』を思い出し、意志をもう一度固くする。

(練習しないと……そうしないと、何も、何も変わらないし、傷つける……)

「コタロウさん」
「はい」

がたりと彼の向かいに座り込んだヴァイスは食堂のテーブルに突っ伏した。

「時間があつたときに、コタロウさんからも言っておいてくださいよ、ティアナに」
「何をですか？」
「こつ、なんて言いますか……」

コタロウはヴァイスの言葉を聴いてこくりと頷き、自分で言つてヴァイスは首を傾げた。^{かし}

人によって様々であるが、その人の歩んだ過去は無言によって
われ、その人自身の容すがたも蔽おおわれるため、よく見えない。

“ 掩蔽えんぺい、雲くもの如し ”

第23話 『想念、臭の如し』

「あの、さ。2人ともちよつといいか？」

ホテル・アグスタから隊舎に戻り、新人たちに午後の訓練の延期を伝えた後、ヴィータがなのはとフェイトの背後から話しかけた。

「……あ、うん」

その場にいたシグナム、シャリオも彼女の1つ音を下げた声に真剣さを感じ、加わることにする。

彼女たち5人は休憩室に移動する間、誰一人として口を開くことはなく、飲み物を手に取りイスに腰をかけた。

「訓練中から時々、気になってたんだよ。ティアナのこと」

「……うん」

紙コップの中に入っている飲み物は口をつけたばかりで蛍光灯の反射光が波立っていた。

「強くなりたいなんていうのは、若い魔導師なら皆そうだし、無茶

も多少はするもんだけど、時々ちよつと度をこえてる」

組んだ腕のなかの指をトントンとヴィータは動かさし、なのはを見る。

「……あいつ、ここに来る前になんかあったのか？」

ヴィータは今日、彼女の無茶を目の当たりにしたので、疑問に思うことは当然である。なのはは心の準備をしていたものの、話すのは心苦しく、顔を歪ませた。

「……………」

その間、ヴィータはなのはが理由を話すにせよ、話さないにせよ、口を開くのみで無言を貫いた。

一度目を細めた後、彼女は口を開く。

「ティアナのお兄さん、ティード・ランスター。当時の階級は一等空尉。所属は首都航空隊。享年21歳」

話し出すと同時に1人の男性が休憩室に入り、飲み物をぐいと一気飲みして、すぐに出て行く。

「結構なエリートだな」

「……そう、エリートだったから、なんだよね」

フェイトがなのはに目配せした後、彼女の代わりに口を開いた。

ティーター・ランスターが亡くなった原因は、任務中での出来事による殉職。彼の精密射撃は、なのはよりも優れ、二度撃ちダブルタップ 一度打ち抜いた場所に寸分違わず同じ箇所を打ち抜く射撃術 を得意とする射撃は航空隊でも群を抜いていたという。加えて、彼はその射撃術で犯罪者を必要以上に傷つけることは決してしない、優しい人間であつたらしい。

「ティーター等空尉の亡くなった時の任務。逃走中の違法魔導師に手傷は負わせたんだけど、取り逃がしちゃって」

しかし、当時の任務ではそれが裏目に出た。相手は必死とも決死とも言える覚悟で彼に挑み、致命傷を与え、逃亡を計はかった。彼はその時の怪我けがが原因で帰らぬ人となった。

「まあ、地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで、犯人はその日のうちに取り押さえられたそうなんだけど」

なのはは捕らえられた犯人が、半身はんしんが凍りつき、もう半身は黒く焦こげ、ずぶ濡ぬれで両手両脚の骨が折れていたことは話さなかった。

「その件についてね、心無い上司がちょっとひどいコメントをして、一時期問題になったの」

「……そのコメントって、なんて？」

片眉を上げたヴィータになのは一口飲み物を含んで口を潤わせた後、彼の上司の言葉をそのまま真似た。

「『任務を失敗するような役立たずは死んで当然だ。死んだら死んだで葬式に行かなきゃならんのが迷惑極まりないがな』」

「……………」

「ティアナはその時、まだ10歳。たった1人の肉親を亡くして、しかもその最後の仕事が無意味で役に立たなかったみたいなこと言われて、きつともものすごく傷ついて、悲しんで……………」

それ以上なのはが口を開かなくても、ヴィータは十分何を言いたいのが分かった。

（そっか、『近いうちに』と言ってから6年経たつけど、享年21歳ということ、ランスター一等空尉は殉職していたんだ。それにランスター二等陸士は彼の妹……………）

コタロウはあれから一向に連絡のない彼の現状を知る。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ

コゝ

第23話 　『想念、昊の如し』

練習後、ティアナは熱めと温めぬるのシャワーを交互に浴びて、筋力の血行を促進させ、なるべく明日に疲労を残さないように努めた。そして、今日は朝4時に起きなければならぬにもかかわらず、0時過ぎに寝てしまったため、設定した目覚ましで起きることができなかった。

「ティアゝ、起きて、朝だよ」

スバルに揺さぶられて、ゆっくりと目を覚ます。

「……ん」

「起きてっ」

「お、きた。ありがとう」

「練習行けそう？」

(疲れは、それほど溜^たまってないみたい)

彼女の言葉に頷き、もそりとベッドから這^はい出ると、スバルからトレーニング服を受け取った。

「さて、じゃあ私も」

(ん、スバル、も?)

着替えるために自分のスペースを確保しようと彼女から距離をとると、背後で服を脱ぐ音が聞こえ、振り向くとスバルも着替え始めていた。

「……って、何でアンタまで？」

「1人より2人のほうが色々な練習ができるしね。私も付き合う」

ティアナはそれを聞いて、常人より体力のあるスバル。彼女は日常行動なら4、5日不眠でも問題ない体力の持ち主。でも自分の訓練を加算すれば、負荷がかかりすぎると思い、彼女の申し出を断るが、決めたことに対する彼女の態度も良く知っていた。

それが今までのティアナをよく支えていた。

「私とティアはコンビなんだから。一緒に頑張るの！」
「……………」

片目でウィンクされた時には、言い返すことはできなかった。

「短期間で、とりあえず現状戦力をアップさせる方法」

ティアナが思案していたことは言葉通り、短期間で戦力をアップさせることであった。

「うまくできれば、アンタとのコンビネーションの幅もグッと広がるし、エリオやキャロのフォローも、もっとできる」

「うん。それはわくわくだね」

個人の能力を向上させるものだが、それによる自分との連携や、エリオとキャロをもつと安全に戦わせることができるという1人よがりしない考えにスバルは大きく頷いた。

(ティアはしっかりみんなのことをよく考えてる)

スバルはティアナとコンビで行動をとることが多く、彼女が決して一匹狼いっぴきおおかみとして個人練習に励はげんでいるわけではないと元々考えていたので、大きく感心することはなかった。

出会った当初のとげとげしい振る舞いはそういったことの裏返しであつたと今になってはよくわかる。

「いい？　まずはね……」

スバルはその詳細に耳を傾けた。

それからというものの、なのはやフェイト、ヴィータとの訓練指導以外の全ての時間をコンビネーションにあてた。

休憩も訓練のうちに入ることはよく理解していたものの、息を合わせるような訓練は費やした時間がものを言うため、疲労をほぼ忘れるというくらい練習に励んだ。

疲労の回復は隊長陣たちに知られてはならないと考え、シャマルには決して診察を依頼しなかった。

なのはたちは彼女たちが個人的に訓練をしていることは知ってはいたが、内容を問い詰めるようなこともしなければ、傍観に努めるという事もせず、ただ無理をしないようにと願い、背を向けることにした。

彼女たちが隠れて練習をしている時点で見るべきではないと判断したためだ。

しかし、コタロウとエリオ、キャロには「彼女たちが無理をしないようにサポートをお願い」と彼女たちの疲れをなるべく軽減するように頼んでいた。

スバルもティアナに対してはなるべく迷惑をかけないように、彼女の考えに真摯に耳を傾ける。

彼女の考えが危険行為になりそうな時はさすがに注意するも、強くなること、効率よく危険を脱することについては概ね^{おおむね}考えは一緒であった。

「幻術のデメリットは知ってるよ？ でも、中長距離から踏み込んで近距離戦なんて、危険なんじゃないかな？」

「……それは、わかってる。でも、私が中長距離からの支援から近

距離への攻撃に転ずることで、相手のリズムを崩し、意表を突くことが可能なのよ……ごめん、これだけは譲れないわ」
「……………」

（確かにそれは相手の攪乱かくらんにはもってこいだけど、危険だよ。よっぽど近距離戦に慣れないと……）

作戦としては確かに魅力的である。だが、一歩間違えば他へのサポートはできなくなり、陣形も崩れる。近距離戦も一撃ですぐに中長へ距離をとらなければならず、体力も使う。

（大丈夫かな）

ここ数日で顕著に出たのはティアナの体力の少なさであった。もちろん、同期の中ではスバルには劣るものの、秀でるくらいの体力は兼ねている。それでも中距離戦からの近距離戦、またその逆の行為に消費する体力は尋常ではない。

「……………成功率」

「え？」

「成功率6割行かないとダメ。これ以下の場合には次のなのはさんとの模擬戦では使わない。私もこれ以上は譲れない。自分も結構無茶してるけど、譲れないよ。パートナーとして」

次の模擬戦までティアナの体力は付いてきて、成功率は上がるだ

ろう。それでもこれ以下の成功率はスバルは許さなかった。

「わ、かったわ」

「うん！」

ティアナは少し顔を歪めたが、6割という成功率でも許してくれ
たスバルに頷いた。

「上げてやるわよ、絶対に」

そうしてもう一度練習を再開しようとして彼女はクロスミラージュを
持ち、スバルに空中路ウィングロードを出すように指示をする。

もう日の変わりが近づいてはきたが、あと何度かはできそうだ。

スバルは空中路を展開し、滑走しながら交互に敷かれた空中路を
ティアナが階段のように駆け上がってくるのを目で追う。

だが、残り2、3段というところで彼女は足が上がらなかったの
だろうか、バランスを崩して前のめりに空中路から落ちる。

「つかは！」

「ティア！」

クロスミラージュを持ちながら手からつき、肘ひじ、肩と受け流して
いくが、完全にダメージを吸収はできなかった。ごろりと仰向けに
なって、大きく息をする。

「大丈夫!？」

「なん、とか、ね」

すぐにスバルは彼女を抱き、10メートルほど離れた場所にいる
コタロウ 早朝はヴァイスが見学している に助けを求めろ。

「すみません。私、ティアを運ぶんでデバイスを」

「聞いて、なかったの? なんとか、大丈夫だって」

「だってティア」

「大丈夫だから。それよりも水を、お願い。ちょっと眠気が、あ
つたみたい。吹き飛ばしたいの」

「だったら、今日はもう」

「いいから、お願い」

「わ、わかった」

ティアナの気迫に押され、頷いてしまったスバルはそっと彼女を
横たわらせ、立ち上がるが、

「水があればよろしいのですか?」

スバルに呼ばれたのはいいが、会話に区切りがなく話しかけるこ
とができなかったコタロウが口を開いた。

「え、あ、はい」

(持ってきてくれるのかな?)

駆けよつとするスバルは足を止める。

「量としてはどれくらいになさいますか?」

コタロウはするりと傘を抜いて開くところをみると、どつやら持つてきてくれるものではないらしい。

「えと、あの」

「思い切り、被りたい、ので、バケツ一杯くら、いです」
「分かりました」

息絶え絶えにも何とかティアナは立ちあがり、正面の男をみる。

「ランスター二等陸士、私が柄を手渡したら自分の名前を言ってください」

じくりと頷くと、彼は口を開いた。

「傘、権限付与・8等級。オーソリゼーション レヴェル・エイトどうぞ」
「ティアナ・ランスター」

渡された傘に名前を答えるとちかりと柄の先が光る。

「量は出力する魔力とその制御で調節可能です。疲労が激しそうなので説明は省きます。私の後に続けてください」

彼はティアナから一步下がり、彼女の差した傘から出る。

「傘、夏昊天、なつのかうてん天気八雨」
「傘、夏昊天、なつのかうてん天気八雨」

ティアナが言葉とともに魔力結合した途端に、傘の内側からシャワーよりも激しい水が降ってきた。

「うわわ！」

スバルも思わず距離をとり、ティアナはコタロウの言葉を思い出して、魔力を制御すると、応じて強さも治まった。

(え、え〜〜)

「ネコさん、これ、雨？」

「はい。各季節の空、春はる蒼天、夏なつ昊天、秋あき旻天、冬ふゆ上天から選択のもと、天気あまの生成が可能です。ランスター二等陸士、被ると言っていました。こちらで宜しいですか？」

「……はい。びっくりしましたけど、これぐらいで丁度いいです」

上を向いて傘を除くと、口の中に雨が入り、喉を潤す。そして身体から熱が程良く奪われて、体力が僅かに戻っていく。

「止やませる時は『傘、止め』と命令してください」

そのまましばらく傘が生成した雨に打たれているティアナをみて、スバルは彼女の服が濡れたことにより透けてしまっていることに気付いた。

右にいるコタロウはティアナのほうを向いたままだ。

急いでスバルはティアナとコタロウの間に割って入り、彼のほうを向くが、

(目、閉じてる)

横から見たときは帽子に隠れて見えなかった彼の目は閉じられていた。

「もし、服を乾かす場合は、『傘、天気八晴、風八下』と命令してください。夏昊天のまま、気圧を変えて風を起こします」

雨を降らせた時点で服についても考えていたらしい。ティアナは彼の言ったとおりになると、すぐに服は乾き、ある程度体力が回復したことを実感する。

「ありがとうございました」

彼女は彼に傘を返し、屈伸を始め特訓の続きをするためにクロスミラージユを握りなおした。

「ティア、もう今日は……」

「ごめん。次の模擬戦までにどうしても成功率を上げなきゃならないから」

スバル、お願い。と言われると彼女も断れず、顎を引く。
2人はコタロウにぺこりと頭を下げて、背を向けたとき、

「ランスター二等陸士、グランセニック陸曹より伝言が
「すみません。今は模擬戦に向けて力を注ぎたいんです。その後で
もいいですか？」

「……ふむ。問題ありません」

ティアナはヴァイスが自分に対して何を言おうとしているのか大
体予想が付いていたので、先ほどのコタロウの対応とは話が別だと
いうように話を終わらせる。

「行くわよ、スバル！」

「う、うん」

彼女たちはまた練習を再開した。

「さて、午前中のまとめ。2ON1ツー・オン・ワンで模擬戦やるよ」

結果的に、ティアナの考えた戦略の成功率はぎりぎり6割まで引
き上げることができた。蓄積された疲労を考えてのことなので、昨
日早めに休んだこともあり、成功率は幾分かそれよりも増すだろう

というのが2人の考えである。

「まずはスターズからやろうか」

『はい!』

なのはな空中でティアナとスバルにバリアジャケット防護服の準備をするよう指示を出す。

「エリオとキャロはアタシと見学だ」

『はい!』

一緒に訓練をしていたヴィータが2人に下がるように言うと、3人はコタロウがデータを収集しているビルに上り、空を見上げる。

「あ、もう模擬戦始まっちゃってる?」

「フェイトさん」

遅れてフェイトも駆けつけてきた。

「私も手伝おうと思ってたんだけど……」

「今はスターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

ああ。とヴィータは頷く。2人は新人たちの教導をとるときに同時にお互いもよく見ていた。その中でもなのは訓練密度が自分たち比べて特別濃い。自分たちでできることならば交代して、気休め程度にも休ませてあげたかった。

「なのは、部屋に戻ってから、ずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ」

彼女はコタロウが編集したデータを使用することなく、自分で練習を確認して訓練メニューの作成や新人たちの陣形のチェックをしていた。もちろん、彼が編集したデータも確認するが、参考程度にである。なのは自分でできることならば必要なのは時間だけと考え、惜しむことなく費やした。

「なのはさん、訓練中もいつも僕たちのこと見ててくれるんですよ」
ね
「本当に、ずっと……」

それはヴィータ、フェイトに関わらず、エリオやキャロにも見て分かるほどである。

「お、クロスシフトだな」

眼下にティアナ特有の魔力色が入ることで会話をやめ、模擬戦に目を向けた。

「クロスファイヤー、シユート！」

ティアナの周りに生成された複数の魔力弾が命令とともに上空にいるのはに向かっていく。

「なんか、キレがねエな」

「コントロールはいいみたいだけど」

向かう先の相手の視界を誤魔化すように、各魔力弾は揺れ動くもののスピードは無く、

「それにしたって……」

弾丸は避けようとする彼女を抜くことはなく、彼女を追い立てるように背後を追う。

(誘導して私をどこかに誘い込もうとしている?)

背後を追う通常なら当てることを目的とした弾丸を見ながら、相手の戦略を読もうとしたところで、前方から風を切る音がした。なのはは警戒して自分の周りに魔力弾を生成する。

(フェイクじゃ、ない)

ここでなのははこの戦略が自分が教えたものではないと判断した。一直線で射撃を得意とする相手に真正面から飛び込んでくる戦略は教えたことがない。正面から特攻にも近い速度で空中路を走^{ウィングロード}ってくるスバルに向かって弾を放つ。

「うおおオオ！」

彼女は左手にバリアを展開して前方に翳^{かき}したのはの放^{はな}った弾から身を守る。

「 くっ! 」

だが、速度は緩^{ゆる}めることなく、スバルはなのはに突っ込んでいった。

スバルは右手のリボルバーナックルを突き出し、なのははそれをレイジングハートで受け止めシールドを展開する。

(いや、まさか)

なのはは1つの答えを導き出したが、その考えに至るような教え方はティアナにもスバルにもしていないと頭を振って、スバルを吹き飛ばした。

「ほらスバル、ダメだよそんな危ない軌道」

「つとと、すいません！ でも、ちゃんと防ぎますから！」

態勢を立て直してからなのははティアナを探そうと周りを見ると、離れたビルの屋上から自分に狙いを定めているのが確認できた。

魔力を溜めこみ出力を上げている。

「砲撃？ ティアナが!？」

離れたところで見ているフェイトはティアナがいつもと違う行動をとっていることに驚くが、

(な、なんで?)

なのはは2人の考えている戦略が自分の考えていることと同じであると確信し、表情を変えないまでも、動揺をしてみよう。

(あれは、フェイク)

見ているフェイトたちと違い、これから起こす2人の、特にティアナの行動が手にとるように分かった。

「特訓の成果。クロスシフトC、行くわよスバル！」
「おオ！」

ティアナの念話に咆哮ほろほろで応え、スバルはリボルバーナックルから弾カートリッジ式魔力を装填ロードする。

彼女が装着しているマツハキャリバーは勢いよく回転し、敷かれた空中路を駆け抜け、なのはとの距離を詰める。

その威力を相殺するかのようになのはは魔力弾を放つが、スバルはそれをすり抜けて思い切り彼女に右拳を突き込んだ。

「ぐぐ、ぐウ！」

なのはは先ほどと同様、シールドで防ぐ。

「ティアアア！」

念話で彼女は合図した。

ビル上のティアナの^{シルエット}投影が消えたところで、

「あっちのティアさんは幻影！？」

キャラが叫ぶとエリオが周囲を見回す。
見つけたティアナは空中路を走り抜けていた。

(バリアを切り裂いて、フィールドを突きぬける！)

駆け上がりながら、ティアナは装填^{ロード}して今は一丁拳銃のクロスミラー^{ラージュ}からナイフを魔力で生成する。

(一撃必殺！)

なのはよりも上空でティアナは振り返りながら相手を見定め、重力の力と脚力を加算させて攻撃を仕掛けた。

なのはは背後から来る気配を感じながら、疑問が治まらないでいた。

(どうして、こんな中長距離から近距離に戦いを移す危険な戦略を？ 私はこの考えに至らないように、教えてきたのに)

隠れて練習をしていたのは知っていたが、こんな戦略を立てたことに内心激しく動揺する。

(ホテル・アグスタで注意したときだって、『分かった』って思っていたのに)

「レイジングハート、モドリリース状態解放」

<わかりました>

気づけば彼女は愛機を解放していた。
レイジングハートは珠玉に戻る。

(……思っていた?)

背後から聞こえるティアナの気迫を込めた声は聞こえず、

『ああ、何せ感性が感情と表情をつまく結び付けてくれないからなあ』

『でも、近道をしなければ彼を知ることにはできるわ』

両親の言葉が頭の中に鈴のような音を奏でて響き渡った。

(嗚呼、そっか。私、ティアナたちの感情を思った気持ちでいたんだ。相手の声を聞かず、私の思いを隠し、表情や雰囲気だけから相手を理解したと勘違いしてたんだ)

自分の両親が言ったことが今理解できた。

(ちゃんと聞くように……ううん、もつときちんと声を聞く努力をして、少しでもお互いが理解できるように思いを張り巡らせればよかった。確かに、見るだけ、感じるだけで、近道、横着してた)

スバルの拳を、ティアナのクロスミラージユを素手で受け止めても痛みなんて感じなかった。

「頑張っているのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

(……違う、私が言いたいのはこんな言葉じゃない)

自分の言っていることと考えていることが一致しないという事はよくあり、なのははその状態に陥っていた。

「練習の時だけ言う事しているふりで、本番ではこんな危険な無茶するんなら……練習の意味、ないじゃない」

（お願い私、こんな頭ごなしじゃなく）

傾いた感情を戻すことは容易ではない。

「ちゃんとさ、練習通りやろうよ」

（ちゃんと、落ち着いて……）

分かっていても止められない。

「あ、あの」

「ねえ、私の言ってること、私の訓練、そんなに間違ってる？」

（押し付けるんじゃない）

まるで自分の体が何かに操られているように、口が動いてしまっ。

<解除します>

クロスミラージュのナイフが消え、ティアナはなのはから距離をとる。

(なのはさんの言っていることが間違っているなんて思わない)

「私は、もう、誰も傷つけたくないから!」

(そう、私は誰も傷つけたくない)

蔽おほって隠してきた彼女の感情が、なのはのなにか諦めたような表情を見ることによって爆発した。今まで溜めこんできた疲労が身体もろとも制御できなくなってしまったのだ。

もう一度彼女は魔力の装填を行なう。

「無くしたくないから!」

(あんなミスするようじゃ、今度は私が大事な人を)

脳裏に兄ティードが生きているときにみせた最期の笑顔を思い出す。

(無くしてしまう！)

発した言葉と意思が一致する。

「だから、だから私は、強くなりたいんです！」

「少し、頭冷やそうか」

(お願い、やめて)

なのはが願っても、自分の行動は止まらず、指先に魔力を込めて
ティアナに向ける。

「クロスファイヤー」

「うわアア、ファントムブレイ」

(私はただ、強くなりたくて……)

ティアナは感情のままに魔力を解放、弾を生成した。

しかし、なのはのほうは感情的ではなく落ち着いており、複数弾生成にも関わらず構築が早い。

「シユート」

ティアナが引き金を引くよりも早く、なのはは弾を放った。そして逃すことなく全弾命中する。

「テイ バインド!?!」

「じつとして、よく見てなさい」

自分の行動を阻もうとするスバルにバインドをかけ、身動きをとらせない。

(こつしたかったんじゃない、こつ教えようとしたんじゃない)

いくら制止させようとしても、態度が感情と結びつかない。

自分の指先に魔力が収束していく。

「なのはさん!」

なのははスバルの声が耳に入ってきてても自制することはできな

った。

ティアナは生成した魔力を先ほどのなのはの一撃によって相殺され、ふらふらとなんとかバランスを保ち、立っている。

ぼんやりとなのはを見つめながら。

『（違う（そうだ）、私はただ……）』

なのははドンという音とともに収束砲を放った。

ティアナは避けようと思っても身体は動かず、向かってくる砲撃の光が視界を占めていく。

『（私はただ……貴女あなたにそれを知ってほしいだけ）』

互いの思いは一致したが届くことはなく、なのはの放った砲撃だけがティアナに届き、彼女が立っていた空中路から重力に逆らわずに落下した。

スバルが立っている近くの空中路に倒れ込む瞬間だけ、痛みが無いうようにティアナはふわりと倒れ込む。

「ティアアア！」

スバルの叫び声はなのは、ティアナには聞こえず、見ているフェイトたちにのみ響き渡った。

倒れたティアナに近づいてもバインドがかけられているため、手を差し伸べることもできずに見下ろすことしか彼女にはできない。

「模擬戦はここまで。今日は2人とも撃墜され終了。コタロウさん、いつも通り後でデータをください」

淡々と述べるなのはの声には抑揚よくようがなく、

「……………」

涙を流しながら無言で睨みつけるスバルの視線と目を合わせた後、ふとなのは天を仰ぐ。

春を過ぎて夏が近いせいか日は高かった。

人の思いや考えは例え感情、雰囲気を感じ取っても、掴つかめるものではない。

もちろん、声を聞いたからといって理解できるといってもない。

それは昊そらのように大きく、広いのだ。

只ただ、ほんの少しの切欠きっかけでお互い歩み寄ることができ、近づくこともできる。

思いや考えを知ろうとすることは難しくもあり、簡単でもある。

“ 想念そつねん、昊そらの如し ”

第24話 『首肯、凧の如し』

スバル・ナカジマが彼女、高町なのはに出会ったのは11歳の頃である。

その彼女に出会う前、スバルは自分よりも前には必ず姉を立てる人で、何をするにも姉を前に置き、また姉の後ろを必ず付いていくという、いわゆるお姉ちゃん子であった。

だが、なのはと引き合わせた事柄はそれからの彼女を大きく変えた。

ミッド臨海空港の大規模火災事故だ。少なくともスバルが助けを求めた声の届く範囲には人はおらず、周りには瓦礫と大火、そして巻きあげる粉塵が彼女の傍に寄り添っていた。

「……………痛いよお、熱いよお」

何度か爆風に巻き込まれ、じわじわと体力と精神力を削り取られていたスバルは跪き、ぼろぼろと涙を流す。

（小さい頃の私は怖いことから逃げ、ただ蹲ることしかできなかった）

彼女は下を向いていたため、背後に空港の象徴である彫像シンボルがあることに気付かず、思い切り泣くという力も尽きてで嗚咽する。

(だから、自分が変わろうと思った出来事はよく覚えている)

突然背後が暗くなったので振り向くと、自分が普段見ている家の天井よりも高い彫像が倒れ掛かってきた。

「ッ!」

スバルは竦みすくあがり、眼を閉じることしかできなかったが、一呼吸おいても自分には何も降りかかっては来こず、

「よかった、間にあつた」

眼を開いてみると、彫像は撫子色なでしこの魔力光を放つバインドで固定され、スバルに影が降りかかったただけであった。

彼女は声のするほうに視線を移し、その声の主を見た。

「よく頑張ったね。もう、大丈夫だからね」

空中から急いでスバルに近づき、安否を確認した女性が『エース・オブ・エース』の異名を持つ、高町なのはという人であることを知ったのはしばらくしてからである。

(その時のなのはさんは凜々しくて……)

「安全な場所まで、一直線だから」

女性は彼女の安全を確保すると、天井を見上げ、左手に持つ愛機に指示を出す。

スバルは自分を不安にさせない彼女の言葉、愛機が従い変形するさま、内包し練り上げられる魔力、そして見えない空へと愛機を構える物怖じしない悠然な姿勢に目を奪われた。

(格好良くて、優しくて……)

その後、女性のまるで天井ごと空まで打ち抜くような収束砲撃は、そのひと本人の強さであるかのような力強さであったことをスバルは忘れない。

彼女に優しく抱き上げられながら打ち抜いた穴を通り抜けてその場を脱し、彼女の背中にまわされた腕の温もり、肌で感じる空の冷たい空気、腕の合間から見える夜空の星々全てがスバルの緊張を解き、安心を促す。

(弱い自分がとても情けなく見えた)

救助隊に救急車で運ばれた時は、再び救助に戻るため飛び立つ彼女の背中を見て、悔しくて泣いた。

(強くなろうと思ったのはその時からだ)

スバルは医務室から出た後、近くの休憩室に座り込んだ。おそろく、エリオとキャロの模擬戦はもう終わっているだろう、今は昼食の時間であるが、空腹感はない。担^かいだティアナは気絶よりもむしろ、死んだように眠っている状態で、あまりにも静かな呼吸だったのでスバルは心配で仕方がなかったが、シャマルが言うに「今までの疲れがでた」といったもので大事ではないらしい。それでも彼女はティアナの事が心配だったが、

(なのはさんは、なんで、あんな……)

なのはの感情を切り捨てた抑揚のない表情を思い出すと、何も読み取ることができないことに苛立ちを覚え、一瞬、手に持った一度も口をつけていないコップを握りつぶしそうになる。

背中を壁に寄り掛かせながら、ごちんと後頭部を壁にぶつけた。

(……そんなにいけないことだったのかな)

ティアナと自分の努力と頑張りがあまりにも呆気なく終わり、問いただしてみても、明解なものは何も浮かびあがってはこなかった。

魔法少女リリカルなのはStrikers 　　く困った時の機械ネ
コ

第24話 　『首肯、凧の如し』

なのははフェイトがエリオとキャロの2人と模擬戦するのをヴィ
ータと2人で見学していた。

フェイトは元々、なのはやヴィータのように教導を専門としてい
ない。だが、それにも関わらずエリオとキャロに的確な教導を行な
えるのは、彼女が2人の特性をよく理解していることと、そもそも
教えることに苦を感じない性格を持ち合わせているためだ。彼女が
元々面倒見が良いことも付け加えることができる。

『……………』

そして、その間ヴィータはなのはが自分のすぐ隣にいても口を開
かなかつた。ただ、フェイトと交替するために着地した時は、フェ
イトと合わせてなにか口を開こうとしたが、それも結局何もなかつ
た。

なのはのほうも同様で、口を開くことはなくじつと3人の模擬戦
を見守っていた。

『……………それじゃ、午前中はここまで』

ほどなくして3人の模擬戦も終了し、フェイトはエリオとキャロに今回の改善点と次回への課題を説明すると、お昼にして構わないと言いつ渡す。

「高町一等空尉、4人の模擬戦のデータ、および編集データをレイジングハートさんに転送しておきました」

一番初めになのはに口を開いたのはコタロウだった。

<確かに頂きました>

「ありがとうございます」

彼はなのはのすぐ近くに着地して、報告をするとぺこりと頭を下げ、敬礼をする。彼だけがいつもと変わらない挙動だ。なのはの次の指示を待つ。

「コタロウさん、あとフェイトちゃんもヴィータちゃんもお昼に行っていていいよ」

「わかりました」

「……ん、ああ」

「……なのは」

再度コタロウは頭を下げると建物から飛び、傘を差ししてふよふよと降りていった。

「なのは」

「ごめん。フェイトちゃん」

たまらずフェイトが右手を差し伸べようとするが、なのはに背中を向けられてしまう。

「……行こうぜ、フェイト」

「だって、ヴィータ」

ヴィータとなのはの間にいるフェイトは2人を何度か交互に視線を移すと、出した右手を軽く握りしめ、胸元に添えて大きく深呼吸をする。

「うん……」

頷いた後は、なのはと相対する^{あいたい}ように背を向けて歩き出すヴィータを追って、もう一度ドアを閉める前になのはの背中を一瞥して、静かにドアを閉めてそこを後にした。

なのはは2人の足跡が段々と遠ざかるのを聞きながら、モニタを開いて先ほどのスバルとティアナとの模擬戦の内容を確認する。い

つもなら、自分の視点ではない個所からのデータでも自分の視点から見る事ができたし、第三者としてみることもできた。しかし、今日の模擬戦は第三者、つまりスバルとティアナと戦っている相手が自分ではない誰かと戦っているようにしか見えなかった。見えたのは開始すぐの自分の射撃くらいである。

「ひどいなあ、これ」

息をつくと、また少し冷静になれた。

(……………どつちがひどいんだろ)

モニタから視線を外すと、ヴィータとフェイトが建物からでて、隊舎へ向かって歩いているのが目に入る。フェイトが視線をこちらに向けたが、目を合わせようとはせず、またモニタへ目を移す。そのまましばらく繰り返し模擬戦を見たが、うまくまとめあげることができそうにないと判断すると、モニタと閉じる。

「……………」

<マスター、少しお休みなられては？>

「ありがとう。大丈夫だよ」

レイジングハートが光るのにあわせて笑って返すが、声のトーンは変わらず抑揚がなく、いつもと様子が違うことくらいしかレイジングハートは分からなかった。

(……どうしよう。心の整理が全然つかないよ)

おそらく内面とは違って、表情は仮面を付けたように普通だろう。それは先ほど見ていた模擬戦の内容からでもうかがえた。

彼女は完全に傾いた心、または感情を元に戻すことができずにいた。いつもなら不安になっても、持ち前の前向きさで自身を取り戻すことができたのだが、自分の慢心から生まれた自己嫌悪には慣れておらず、解決するのに必要なのが時間なのか、それとも他の何かなのか分からないのだ。

気づけば膝を抱えて少女のように座り込んでいる。

(……いつとき、どうすればいいのかなあ)

相談したいわけではないし、誰かに解決方法を聞きたいわけでもない。霞のようなもやもやした感情が出口の無い部屋に閉じ込められて、不思議と気流を生み出してくると渦を巻いている。

午後にはまた訓練がある。それまでには何とか自分を取り戻したい。

<マスター、通信です>

そんなことを思っているときに、不意に通信が入る。

「ん、誰だろ……って、ユーノくん!？」

「やあ、なのは」

相手が意外だったので、一瞬ユーノの名前を口に出しても理解するまでに時間がかかった。ぱっと立ちあがる。

「ど、どうしたの!？」

「あー、うん」

画面先のユーノは何か気まずそうに頬を掻いている。

「ええっと、本当なら多分、仕事のことだろうし、僕がいうのはどうかなあと思ったんだけど……」

そこから先、今度は口ごもり顎を引くが、意を決したように、

「なのは、何かあった？」

「……え」

思い切り相手は彼女に踏み込んできた。

「それ、って……もしかして、フェイトちゃんやヴィータちゃんたち何が何か？」

「へ？ いや、違うけど……」

いくらなんでもあの2人が今の自分をはやてやユーノに話すとも思えなかったが、あまりにもタイミングが良すぎる。だが、彼は何のことだろう？ と首を傾げるところを見るとどうも違うらしい。

「そ、そう。うん、何も無いよ。大丈夫」

「そう？」

「え、と。なんでそう思ったの？」

では、何故そう思ったのかが気になり、なのはなるべく表情を装いながら、相手を遮って理由を聞いた。

「うん。この前、さ、ホテル・アグスタで会ったじゃない？」

確かにこの前、その場所でオークションが終わった後、事後調査の合間を割いて短い間であるが久しぶりに会い、話をした。自分のこと、ユーノのことなど簡単にだ。

彼女は頷く。

「それで、その時思ったというか、久しぶりだったからかな？　なんか、息をついていないってというか、頑張りすぎてってというか……うん。ごめん」

「どうしたの？」

「えと、気分を悪くしたらアレなんだけど。なのはが、さ、肩と胸を張りすぎているように見えた」

「……過信してるって、こと？」

彼は頷いて、その後もう一度「ごめん！」と頭を下げた。

(……ユーノ君は、気づいてたんだ。自分では気づかないところに)

それは久しぶりに会った時の違和感からくる偶然の要素を多く含んだものかもしれない。けれど、例えそれが発端だとしても、今の彼女には自分の納得を後押しする何物でもなかった。

「それで、それが実は勘違いだったらどうしようと思って、何日か考えたんだけど……本当にごめん」

ユーノは考えても答えが出ることではなく、連絡をすれば答えはすぐにわかると分かってはいたものの、聞くべきかどうか数日悩み、自分の精神的安定も込めて聞くことにしたのだと吐露する。

(……心配しているのが伝わってくるよ。でも……)

ゆっくりとなのは目を閉じて、口を結んだ。その後、眉を寄せ、顎を引き、思い切り肺に溜めこんだ息を吐きだす。

「私のことを心配して？」

きちんと相手の思いを正直に聞いてみた。少しでも彼の今の心を知りたかったのだ。

「あ、いや……うん」

モニタの向こう側の彼は否定するしぐさを僅かに見せたが、すぐに落ち着き、目を閉じているなのはのほうを向いて頷いた。

「……ありがとう」

「なのは？」

彼女は薄く眼を開いてもユーノのほうを向くことはなく、地面に目を落としたまま頷く。

「うん。その通りだよ。私、大丈夫じゃない。私ね」

「あ、ちょっとまって」

今の感情を素直に伝えようとするなのは、ユーノは両手を前に出してそれを止める。

「ユーノ、君？」

彼は通信機能のうち映像通信だけを切断し、音声だけにする。

「これで大丈夫」

「え、と……」

「僕は頷くことしかできないから」

「……ふえ？」

「なのはが泣いても、僕は近くにいないから何もできないんだよ」

気づかぬうちに、顔をあげた彼女の目じりには涙が溜まり始めていた。ユーノはモニタを閉じる前にすでにその状態であったとは言わなかった。

「君の心を軽くすることしかできない」

「……………」

「頑張れとは言わないよ。なのはは強いから。だから、僕はなのはその声に頷くだけにするよ」

ユーノが声柔らかに「どうぞ」となのは心の扉に扉を取りつけて、扉を引くと、そりそりと霞が外に出てきた。

「う、あう。私ね、ひどいことしちゃった。えと、ね……」
「……うん……うん」

それから涙声のなのはの言葉に、慰める言葉もかけなければ、同情する言葉もかけず、ユーノはただ頷くことに徹した。
彼女は自分の想い、後悔を心から出すたびに、渦巻く気流が凧がれていくのを実感する。

「……もう、大丈夫、だよ。ユーノ君」

自然に流れる涙に抵抗しなかったせいか何度かしゃっくりをしたものの、泣きはらすという事はなく、最後に軽く拭い、相手に伝えるとき、モニタが開き向こう側には表情を窺うようにみて安心するユーノが映る。

「よかった、いつものなのはだ」

いつもの自分とはどんなのだろうと不思議に思うが、彼から見ても自分がいつもの自分であることが分かると、目を細めてにこりとする。

向こうも合わせて微笑んだ。

「ありがとう、ユーノ君」

「うん。気にしないで、だって僕はなのはの友達なんだから」

「……バカ」

「え、と。なのは？」

ユーノは画面の向こうの彼女が聞き間違いかと思えるような反応を返したので首を傾げる。心なしか口をへの字にしているように見えた。

言ったなのはも驚いて、すぐに頭を振る。

「う、うん！ なんでもない、なんでもない！ も、もう大丈夫だから！」

(えーと、あれ？ なんだろ、モヤつとした)

「本当に、今度の今度は大丈夫！ ほら、時間もアレだし」

「う、うん。分かったよ。でも、無理はしないで」

通信を切る前に、もう一度心配されたが、手でグーをつくって「大丈夫！」と返し、手のひらを振ってユーノと別れた。

（多分、まだ完全じゃない。でも大丈夫。今度はきちんと言おう！）

なのはは正面から風を受けながら大きく深呼吸をして、余った昼食時間のつぶす方法を考えることにした。

とすとんと座る音と人の気配を感じてそちらを向くと、ある意味今日の模擬戦で一番近くで見えていた男性が自分より少し離れたところに座っていた。

おそらく昼食後の休憩場所を個々に選んだのだろう、彼は常で休憩をとることはなく、毎回場所を移動していた。

『……………』

その前に、何人がスバルのいる休憩室に入りはしたが、彼女の放つ拒絶する空気に^お圧されすぐに出て行ってしまった。それはエリオとキヤロも例外ではない。

コタロウは間もなく、飲み物を空にして休憩室を出ていこうとしたとき、

「ネコさ、いえ、コタロウさんも、見てましたよね？」

「何をですか？」

スバルの突然の質問にも特に動揺することはなく、空になったコップを捨てるのを止め、彼女を見る。

「今日の模擬戦と、普段のティアと私の個人練習を、です」

「はい」

彼女は顔を下に向けて、コタロウを見ることなく、まだ一口も付けていない飲み物に視線を移す。

「朝とか、夜、頑張っていましたよね？」

「休むことなく練習に励んでいたと、グランセニック陸曹から聞いています。短い間ですが、ここ数日と比べると頑張っていたと思います」

「……間違っていたんですかね、それ」

「それを決めるのは私ではありません」

考える様子もなくコタロウは即座に答えた。

「なのは、さん、ですか？」

「付け加えるならば、ランスター二等陸士、ナカジマ二等陸士を教導している皆さんとその本人です」

「まあ、あそこでヴィータ副隊長もフェイトさんも止めなかったってことは私たちが悪いんですね……でも！　でもですよ？」

ゆっくりとスバルは顔を上げた。

「もう、動けないって見ても分かるのに、あそこで気絶させる必要があっただんですか！？」

コタロウがそれほど遠くにいないのにもかかわらず、声が大きくなる。彼はスバルの音量に驚くことなく真つすぐ彼女を見て、表情からまだ彼女の言葉が続きそうだと、即座の回答を控えた。

「あんなにティアは頑張っていたのに、ここに来る前だって、一生懸命で、訓練校でだって、ずっと、ずっと頑張ってたんです！　それをまるで、まるで、認めない人への見せしめみたいになくてもいいと思います！」

立ちあがって訴えかけるスバルに、コタロウは顎を引く。

（感嘆、あるいは肯定調。でも、何か僕に意見を求めようとしている？ 高町一等空尉を機械的見地で話したほうが良いのだろうか？
だったら、その前に……）

若い人間ばかりだからだろうか、六課にいる人間のほとんどは表情がとても豊かで、少しずつではあるが、コタロウに判断力が付き始めていた。

彼は顔をスバルに向きなおす。

「高町一等空尉は頑張っていないのでしょうか？」
「……………」

彼女は彼の脇を通りコップをゴミ箱に叩きつけ、そのまま隣にある自販機を思い切り殴りつけた。

「どうしてそういうこと言うんですか？ そりゃあ、なのはさんだって頑張ってると思います。いつも私たちのこと見てくれますし……でも、ティアのほうが、ティアのほうが頑張っていると思いますー！」

拳が自販機に手首までめり込み、じわりと中の水分が流れ出た。

引き抜くと手には一切怪我はなく、自販機から黒や茶色の液体が流れ出し床を汚す。吹き出る事はなく、2人とも服にかかるとい

事はなかった。

「失礼します」

それだけ言っただけでスバルは休憩室を後にした。

コタロウは自分の手に持つコップをゴミ箱に入れてから、

「……なるほど」

こくりと頷いた後、つなぎのファスナーをジジと開け、内側に備え付けてあるまるで網目のように張り巡らせている大小様々な工具の中から適した工具を取り出して口にくわえ、傘を片手に自販機の修理に取り掛かった。

(なんだろ、ちょっとスッキリした)

スバルはそれが自販機を殴りつけたからなのか、あるいは自分の想いを誰でもよい誰かにぶつけたからなのかは分からなかった。

時々、自分の沈みきった、或いは高まりきった感情を元に戻すことが困難を極めるときがある。

その時、相手を気遣うことなく思いの丈をぶつけることで、元に戻ってしまう事が稀まれにある。そして、その相手が感情を持つものであれば、当然寛恕かんじょ、または沈着が要求される。

自分はただ、吐露するだけでよい。

相手は首肯し、感情を凧いでくれる。

“首肯しゅくけん、凧なの如し”

第25話 『綺羅、星の如し』

ティアナは目を覚ました時、目を閉じる前の最後の景色をすぐに思い出すことができず、自分がどこにいるのかすぐに把握することができなかった。

「あらティアナ、起きた？」

「……シャル先生」

彼女が入ってきたことがヒントになり、自分が眠る前　正しくは気絶する前　の状況を思い出そうとする。

シャルは彼女の近くに座り、当時の状況を語る。

「ここは医務室ね。昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

「……あ」

ティアナはスバルと組んでなのはと模擬戦し、相手に撃墜されたことを思い出した。

「はい」

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、身体にダメージはないと思うんだけど……どこか、痛いところある？」

立ちあがってティアナの衣服を持ってきたシャルルは、確認として彼女に身体の状態を聞くと、彼女は首を横に振る。

そして、ふと視界に入った時計が視界に入り、彼女は驚き、

「　　っ！　　9時過ぎ!？」

窓の外に目をやると、外は真っ暗だった。

「すごく熟睡してたわよ？　死んでるんじゃないか？　って思うくらい」

シャルルは目を細めて、

「最近、ほとんど寝てなかったでしょう？　溜まっていた疲れが、まとめてきたのよ」

「……………」

彼女の最近の身体のことを考えない特訓を示唆する。

その後シャルルが、まだ横になっていても構わないという誘いを丁寧に断り、ティアナは医務室を出た。

部屋に戻る途中、隊舎と寮の間にスバルと出会い、2人で一度なのはのいるオフィスへ謝りに行ったが、そこにはフェイトしかおら

ず、

「なのははまだ訓練場だよ。今夜は遅いから、明日朝にでも、もう一度話したら？」

と諭されて、寮へと帰って行った。

なのはは、午後スバルと顔を合わせたか、お互い会話をするのではなく、練習のメニューを伝えたくらいで彼女の教導はヴィータが行なった。

夜練習も同様に、話す会話は業務的なものばかりで、終了後スバルはいそいそと寮へ戻ってしまった。その後、隊舎へ早足に向かうのをなのはは目で追うも、追いかけなかったのは、まず、ティアナが起きないことには何も始まらないと考えたためだ。

現在、なのはは練習場の前で明日の練習メニューを考えている。コタロウは練習場内を歩きまわり、所々で火花を散らしている。練

習によって臨界を超えて傷つけてしまった場内を修理しているのだ。

「……なのは」

「あ、フェイトちゃん」

なのははきりの良いところでデータを保存し、

「コタロウさん、そちらのほうは」

「はい。そろそろ終わります」

念話でコタロウに話しかけ、3人で隊舎に戻ることにする。

「さつき、ティアナが目を覚ましてね。スバルと一緒にオフィスに謝りに来てたよ」

「……そう」

フェイトはひとまず明日もう一度来て話すことを提案し、寮へ帰ったことも伝える。

「ごめんね。私の監督不行届きで……フェイトちゃんやライトニングの2人まで巻きこんじゃって」

「う、ううん！ 私は全然」
「あと、コタロウさんにも……」
「私は特に迷惑なことはありません」

午後以降の練習そのものがぎこち無くなってしまったことをなのはは謝った。

（でも、よかった。なのは、会話するくらいの余裕ができてるみたい）

フェイトはあれほど塞ぎこむなのはをここ最近見たことがなく、どうしようかと悩んでいたが、午後からは落ち着いたようで安心していった。

「それで、その時、ティアナとスバル……どんな感じだった？」
「ん、やっぱり、まだちょっとご機嫌ななめだったかな」

起きたばかりのティアナとそれに付き添っていたスバルはいくらか落ち着いていたものの、殺気立った怒りはなく、なんとなく納得の表情であったという。

なのはは少し視線を下げて俯くも、すぐに顔を上げた。

「明日の朝、ちゃんと話そうと思う。フォワードのみんなと」
「うん」

シヤリオに閲覧許可が必要な情報の申請していることを話してから、また彼女は俯いた。

「……でも、聞いてくれる、かな」

「だ、大丈夫だよ。ねえ、コタロウさん？」

フェイトは少しでも早く立ち直ってほしかったため、焦りながら後ろを1人で歩いているコタロウにも同意を示すよう、横眼を流す。

「……ふむ」

だが、彼はすんなり頷くことはせず、顎に手を置いて俯いた。

(あれ？ いつもなら、すんなり返すのに……)

彼のいつもと違う行動によって発生した間に、フェイトは余計に焦ってしまふ。

「疑問に疑問で返すようで申し訳ありません。高町一等空尉、1つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

「え、あ、はい」

彼女たちは立ち止まり、コタロウを見た。

「高町一等空尉は、フォワードの皆さんに聞いてほしただけなので
すか？」

「……はい。そ」

なのはそのまま頷こうとしたが、思い止まる。

「なのは？」

「……ち、がいます。私はあのコたちに知ってほしいんです。私が
何故、今の教導をしているのかを」

聞いてほしただけではない。理解してほしいのだ。となのはは視
線を泳がせることなく、真っすぐコタロウを見る。

「であれば、私の回答は『わかりません』です。聞くことは簡単で
すが、理解してもらわなければならないということは、大変難しい
です」

「……そう、ですよね」

「はい。私は何故か同じ過ちをジャン、いえ、トラガホルン夫妻に
していますので」

彼は小さく息をつく。

「何回も、ですか？」

「はい。何回も、です。ですから、答える前には情報を良く集めるのですが、いつも彼らを困らせてしまいます。おそらく、それが私の個性なのでしょう」

それが容易に想像できてしまったのか、なのはは微笑んでいた。

「テストロッサ・ハラウン執務官、申し訳ありません。私は貴女に同意はできませんでした」

「……いえ」

「話すということは、私にとって最も大きな課題の1つなのです。この六課に出向して、うまく成立しないことが多く、改めてそう思いました」

そういつても彼の表情は落ち込んでいるような表情は一切感じられず、いつも通りの寝ぼけ眼だ。

「ありがとうございます。フォワードのみんなには分かってもらえ
るよう、頑張ろうと思います」

「はい」

また少し、なのはは落ち着いたそぶりをみせ、今度は3人並びながら隊舎へ歩き出した。

「……あのね、フェイトちゃん」

「ん？」

「今日、もし緊急出勤があった場合、ティアナを外そうと思うの」「あ、うん。そのほうが、いいかも」

万全が取れていないときの緊急出勤がどれほど危険なものかを2人は良く知っていた。不満は出るかもしれないが、当然のことなのだ。不安定な時ほど命を脅かすものはない。

「本当ならね、私も……にやはは。みんなに迷惑かかるから出勤はするべきじゃないんだけど」

「大丈夫だよ。無理しないで」

実際のところ、フェイトから見てもなのはもまた万全とは言いがたい。だが、彼女の立場というものも良く知っていた。

「でも、私は隊長だから」

「なのは、午前中、言えなかったけどね」

フェイトは彼女のほうを向く。

「近くにいるんだから、いざというときは頑張らないで、頼ってよ」
「……フェイトちゃん」

全部口に出してから、なのはの隣に彼がいることを思い出し、気
恥ずかしさを覚えたのは余談として、隊舎に入ってからすぐに警戒
態勢の警報が機動六課に鳴り響いた。

きらりと光る、星が良く出ている夜だ。

魔法少女リリカルなのはStrikers 困った時の機械ネ
コ

第25話 『綺羅、星の如し』

「いや、ちょっとしたこと変わるもんすねえ」

「操縦しにくいですか？」
「とんでもない！ 操縦桿そうじゅうかんの応答速度が段違いで、慣れればこれほど扱いやすいものはねエっすよ」
「慣れましたか？」

もちろん。とヴァイスは大きく頷く。

ヴァイスは既にヘリに乗り込んでいる状態であり、コタロウはドアの前に立っている。

警報の原因は、どうやら航空型のガジェットドローンの出現のようで、以前のとは違い、速度の向上がみられた改良型だという。

隊長陣であるはやて、なのは、フェイトの見解としては、こちらの戦力を測るものではないかといったもので、できるだけこちらの手を見せないよう、空戦を可能とする、なのは、フェイト、ヴィータが今回出撃することとなった。

なのははフェイトとヴィータにだけ、自分が本調子ではないことを告げるも、激しい空中戦はしないが、砲撃の出番があるのであれば出撃したいと懇願した。2人はなのはの消極的であるものの積極的である態度に、顔を歪めたが「無理はしないこと」と強く念を押して許可をした。

「コタロウさんは何か指示は出てるんですかい？」

「いえ。あなたから特に指示がなければ、本日は終了です」

もともと、フォワードの夜練習が終了したところで、コタロウへの指令権限はヴァイスに遷移しており、彼からの指示がなければ実質本日の作業は何も残っていなかった。コタロウは名目上はシャリオの下に就いているものの、作業内容はフォワードのデータ収集の

ほかに、六課のあらゆるメンテナンススタッフのサポートしながら庶務をこなし 彼らもコタロウの分野にとられない修理技術の高さを認識している 隊舎内の清掃スタッフの手伝い 主に外の窓ガラス清掃 も行なっている状態でほぼ一般スタッフと変わらないポジションであるため、指示がなければ作業は終了になる。

「何かありますか？」

「ん、特に無いっすね」

「それでは、見送ってから寮へ戻ろうと思います」

「お疲れ様です」

ヴァイスは愛機であるストームレイダーに合図を送るとゆっくりとヘリを起動し始めた。

「よし、つと。後はなのはさんたちが乗れば大丈夫」

彼は身を乗り出して後方を見ると、コタロウも合わせて視線を移す。

そこには乗り込もうとしているのは、フェイト、ヴィータの3人と待機するシグナムと新人たち4人の計8名がいた。

「今回は空戦だから、出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の3人」

「みんなはロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

『はい！』
「…………はい」

隊長たちの言葉に、ティアナだけが遅れて返事をした。そして、乗り込もうとするところで、なのはは振り向く。

「ティアナは出動待機からはずすから」

『！』

その言葉にティアナは目を見開き、他の新人たちは息をのみ、なのはの後ろにいるフェイトはティアナから目をそらした。

「そのほうがいいな……………そうしとけ」

「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし」

ティアナには、ヴィータの言葉は気遣いに聞こえても、なのはのはそうは聞こえず、きゅつと奥歯を噛みしめた後、

「……………言う事を聞かない部下^{ちゅう}は、使えないってことですか？」

視線を下ろしたままのティアナになのはも口を結ぶ。彼女は真っすぐ姿勢を正してティアナを見る。

「自分で言ってるて分からない？ 当たり前のことだよ、それ」

今日の模擬戦のことではない。上司と部下の関係についてなのは述べた。実際、ティアナは教導に対しての反抗はあったが、指示に対しての反抗は過去も今もしたことがない。

「現場でも命令や指示は聞いています。教導だって、ちゃんとさばらずやっています」

「……………」

なのはは彼女の言葉を冷静に、ひとつひとつ確認するようにじつくりと耳を傾けた。

「それ以外の場所での努力まで、教えられたとおりじゃないとダメなんですか？」

真つすぐな視線に反抗の色が見え始めたところでヴィータがティアナに歩み寄るが、なのははに腕を出だされ制止させられる。ヴィータはなのはを見上げて、彼女はティアナから視線をそらすことなく、相手の言葉を聞いていた。

「私は」

ティアナは悔しさに代わって眦まなじりに涙をため始め、一歩なのはへ踏み出した。

「なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も、キャラみたいな稀少レアスキル技能も無い！」

両手を握りしめて、また一歩踏み出す。

「少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらなきゃ、強くなんて慣れないじゃないですか　っ！」

突然、2人の間から腕が見えたかと思うと、ティアナは右肩を掴まれ、視界が揺れる。左頬に鈍い痛みを感じる頃には彼女は地面に伏していた。

シグナムに殴られたのだ。

「シグナムさん！」

「心配するな、加減はした」

なのははシグナムの背中を見ると、

「言葉は全部聞けたな」

「……え、はい」

「少々荒っぽいが、これ以上は話の無駄だ。矛先は変えてやったほうが幾分か落ち着きやすいだろう」

時間も同時に無駄にする気か。と言わんばかりになのはを横目で視線を送りながら、念話を届かせる。

「駄々をこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合ってやるからつけ上がる」

今度はなのはだけでなく、全員に聞こえるように声に出した。

「痛そうですね」

「んまあ、シグナム姐さん。自分が悪役になるの嫌いじゃねエすから」

一部始終を見ていたコタロウとヴァイスは普通に会話をしているもエンジンと風の音で後方には聞こえることはなかった。

「ヴァイス。もう出られるな」

「ん、乗り込んで頂ければすぐにでも！」

シグナムの確認に彼は大きく頷く。

なのははへりに乗る前、ティアナに一言口に出そうとするが、今度はヴィータに頑として押さえつけられた。フェイトが念話でエリオとキャロにフォローをお願いするなか、へりは飛び立っていった。

「……目障りだ。いつまでも甘ったれてないで、さっさと部屋に戻れ」

上体は起こしているものの、いまだに立ちあがることができないティアナにスバルが寄り添っている。

「あの、シグナム副隊長、その辺で……」

「スバルさん、とりあえずロビーへ……」

エリオとキャロは自分たちがこの場を治めることはできなくても、流れは変えることができると思い、フェイトからのお願いも含め、ひとまず声を出してみた。

「シグナム副隊長」

シグナムはぴくりと眉を動かして、立ち上がって正面を向くスバルの目を射抜く。

「なんだ」

迷いの無い彼女の視線は、はじめは決意のあったスバルの瞳を歪ませる。たまらずシグナムの視線から逃げ、目を泳がせながらもスバルはぽつりぽつりと口を開いた。

「命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いか……それを止められなかった私は確かにダメだったと思います……」

昼間のような怒りではなく、反省と自己嫌悪の気持ちで声の震えからもスバルは自覚できた。

「だけど！」

訴えること、自分の意見を聞いてもらうことの為には視線は落とすままだはいけないと、彼女は顎を上げてシグナムの瞳に自分の瞳を合わせた。

「自分なりに強くなるうとするのとか、きつい状況でもなんとかしようと頑張るのって、そんなにいけないことなんじゃないか！」

自分の言いたいことは間違っていないはずだと言わんばかりに疑問形にはせず、声を大きくする。

「自分なりの努力とか……そういうことも、やっちゃいけないんでしょうか！」

しかし、今日の認めてくれないような出来事を思い出し、段々と声小さくなっていく。言い終わった後は嗚咽が小さく響いていた。

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力はすごくいいことだよ」

『……………』

この場にはいないはずの声に気付いて、そちらを向くと、

「シャーリーさん」

彼女がそこにいた。そして、彼女の後ろのほうには階段を下りていくコタロウの背中が見えた。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはライン曹長がいてくれますから」

「すみません、一部始終聞いてしまいました。とシャリオは頭を下げた。」

「なんかもう、みんな不器用で……見てられなくて」

まだ17歳の彼女には、この場の空気を放置することはできそうになかった。

シャリオに「話したいことがある」とロビーへと促された新人たち4人は、シャマルを加え、長椅子に座り込んだ。シャマルの右にはシャリオが画面を操作し、左には腕を組むシグナムがいる。

「シャーリー、話すといつても機密情報が入っているだろう？」

「あ、はい。申請は今日の午後にはしていて、音声なしで等級レベルの低い個所をいくつか選別して許可してもらいました」

シグナムとシャルマルにはシャリオが何を話そうかとしていることは分かっていて、新人たちだけ、顔や視線を見合わせる。シャリオは準備が出来上がると、隣にいる2人に合図を送ってから口を開いた。

「昔ね、ある女の子がいたの」

彼女が話し始めた最初は、その女の子が誰なのか、新人たちには分からなかった。

シャリオは追わせるように左を向くと大画面にとある学校風景が映し出され、さらに続ける。

「その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった」

画面に映し出された映像には、無音無声のまま他にも家での何気ないやり取り等の日常風景も映りだされ、どこかのドラマの一場面のように流れていく。そして、映像のなかの面影から、新人たちはすぐにその女の子がなのはであると気付いた。

シャリオの流す映像の中に魔法を使用する場面はなく、話す言葉も一般家庭を説明するように淡々と話している。

「だけど、ほんの些細なきっかけで」

ひとつキーとタイプすると場面が変わる。そこにはデバイスとの契約、戦闘が映し出された。画面の中の女の子が動揺、戸惑いを感じていることは明らかで、形を判断することができないモノからの強襲に目を瞑りながら、怯えながらのバリア展開に息をのむ。
ダイジェスト
要約として流れる戦闘は、明らかに女の子の想像を超えるもので、激しい竜巻に吸い寄せられるように葉のように巻き込まれていくのが無音無声のせいか、その恐怖が容易に感じ取れた。

「その女の子は、魔力が大きかったというだけで」

解説するシャリオの言葉を聞かなくても、明らかに状況が異常であることは判断が付く。

また、画面が変わる。今までは得体のしれない何かであったが、今度はその女の子と同じくらいの金髪の女の子との戦闘だ。

「これ……」

「フェイトさん？」

映し出されたのは幼いころのフェイトであった。

「フェイトちゃんは当時、家庭環境が複雑だね……」

あるロストロギアをめぐるってなのはと敵対していることを告げる

と、フェイトを中心に映像が移り変わる。とある女性 シグナムがフェイトの母親であると付け足す に縛りあげられ、鞭で全身を打ちつけられる苦悶の表情のフェイトが映し出された。瞳は何かに執着するように鈍い光を放ち、疲労と苦痛に耐える様子が見て取れる。

ここからはシャマルがシャリオに代わりに口を開き、この事件をきっかけになのはとフェイトが友情を育むことになると言葉を結ぶ。だが、映像の中のなのはとフェイトは戦闘を繰り返していた。

「収束砲！？ こんな、大きな！」

なのはの放つ砲撃は、画面の大半を占めるように大きく、わずかに9歳の放つものではないと、エリオを皮切りに新人たち全員、すく疎みあがる。見た目からもわかる大威力砲撃は、身体の負担を無視したものだ。

「……………」

「その後もな、さほど月日をおかず、戦いは続いた」

シグナムが口を開くと同時に場面は変わる。次はなのはとよく知る人物との戦闘風景だ。

「私たちが深く関わった、闇の書事件」

「襲撃での撃墜未遂と、敗北」

事件そのものは新人たちの耳にも入ってくるくらいの情報はある。それだけ有名な事件であった。なのはヴィータと戦闘し、重みのある一撃でバリアを砕かれ、敗北する映像が新人たちの顔を歪ませる。

「それに打ち勝つために選んだのは、当時はまだ安全性が危うかった弾式魔力供給機能の使用」
カートリッジシステム

今から10年前、この機能は使用時の反動が大きく、使用者はその反動を許容しなければならぬもので、身体のできた大人であれば筋力と技量でカバーできるが、そうでない子どもには負担が大きすぎ、耐えうるものが困難な設計の1つであった。

シグナムはそれでも当時の機能を使用しているなのは、フェイトの覚悟を少し思い出した。

「誰かを救うため、自分の想いを通すための無茶を、なのはは続けた」

映像の中の戦闘は、今まで見てきたものとは違う、大魔力戦の数々が映し出される。今の新人たちには考えられない無茶な戦闘であった。作戦も戦略もその場で立てられ、成功率を限界まで下げた危険性伴うものだ。

「だが、そんなことを繰り返して、負担が生じないはずがなかった」

「……事故が起きたのは入局2年目の冬」

シャリオは一度、画面を閉じた。

「異世界の捜査任務の帰り、ヴィータちゃんや部隊の仲間たちと一緒に出かけた場所。不意に現れた未確認体。いつものなのはちゃんなら、きつと何も問題無く、味方を守って落とせるはずだった相手。だけど……」

シャマルはきゅつと一度口を結んでから、小さく首を振る。

「溜まっていた疲労、続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃった」

ここからは機密情報ではない、シャマルの医者としての情報である。一般的に個人の情報を公開することは禁止されているが、なのははこの映像の公開を医療の発展のため、ひとつの検体サンプルとして許可していた。

シャマルはその内容を公開する。

『……う、あ』

見たこともないなのはの状態に新人たちは声を漏らす。胸部は包

帯で巻かれ、口にあてがわれた酸素マスクからは呼吸のたびに白くなり、その割には肺は活動していないかのように微動だにしていなかった。

「なのはちゃん、無茶して迷惑かけてごめんなさいって、私たちの前では笑っていたけど……」

飛べるかどうかもわからず、立って歩くことでさえままならないかもしれない状態であったとシヤマルはなのはのりハビリ風景も交えながら口を開く。今度の映像には声も混じり、悲痛の声の中、転んでは立ちあがるなのはのりハビリ映像に目を閉じ、耳も塞ぎたかった。

スバルたちが目を泳がせたところで、映像を閉じた。

「無茶をしても、命を賭けても譲れぬ戦いの場は確かにある。だが、お前がミスショットをしたあの場面は自分の仲間の安全や」

ゆっくりとティアナは声のするほうを向き、焦点を合わせる。

「命を賭けてでも、どうしても撃たねばならない状況だったか？」

ホテル・アグスタでの自分の行いを反芻し、

「訓練中のあの技は、一体誰のための、何のための技だ？」

今日の模擬戦で実行した戦略と技を思い出し、一瞬の強張りの後、全身から力が抜けていくのをティアナは感じた。

「……………」

目を閉じ、恥じる。

「なのはさん、みんなにさ、自分と同じ思いさせたくないんだよ。だから、無茶なんてしなくてもいいように、絶対絶対みんなが元気に帰ってこられるようになって」

その先もシャリオは続けたが、聞かなくても、なのはがどのような考えで、これから自分たちをどうしようとしていこうかという思いはひしひしと伝わっていた。

しばらくして、フォワード部隊の解散報告を受けた後、新人たちを残してシグナム達は姿を消す。

「……ティア」

「ごめん、ちょっと外で風に当たってくる」

彼女は虚ろに立ちあがり、ロビーを後にするも、スバルは止めはしなかった。

『……………』

エリオとキャロも何も喋らず、彼女を見送ると、フェイトから帰還したと念話が入る。

「あの、フェイトさんたち帰ってきたみたいです」

「……そう」

「い、一応解散ということですし、寮へ戻りませんか？」

「……うん、そう、だね」

スバルは促されるかたちでロビーを後にし、エリオとキャロと並んで通路を歩く。ティアナに合わないように歩調はとてもゆっくりだ。

「……なのはさんって本当に一生懸命だよね」
『はい』

ティアナも自分も頑張っではいるが、今回は別の方向であったと悟る。

「本当に頑張ば……」

ため息をつきながら笑おうとするが、スバルは何かを思い出してびたりと足を止める。

「スバルさん？」

「どうしたんですか？」

何事かと2人はスバルを覗き込むとティアナと同じように目が虚ろになっていた。

ふらふらとスバルは壁に額を付け、そのまま一呼吸おいた後、

『高町一等空尉は頑張っていないのでしょうか？』

1人の男性の言葉に、思い切り壁を殴りつけた。

「ス、スバルさん!？」
「え、あの」

砕けはしなかったものの、壁はごぶしの大きさをへこんでいた。

(……私、馬鹿だ)

自分の拳も無傷であった。

シャリオが勝手に自分の過去を話してしまった事について注意した後、なのははティアナを探しに外に出て、シャリオが教えてくれた場所にぼつんと1人で座り込む彼女を見つけた。

気配に気づき、ティアナがこちらを向いたところで、なのはは微笑む。

なのはが隣に座り、軽く伸びをしたところでティアナは口を開く。

「シャリーさんやシグナム副隊長に、色々聞きました」

「なのはさんの失敗の記録？」

「え、ああ、じゃなくて」

手を振って否定し、言葉を濁す。

「無茶すると、危ないんだよって話だよね」

「……すみませんでした」

物陰から、途中でなのはの背後を見つけてついて行った落ち込みながらも見守るスバルと、エリオとキヤロ　フリードもいるにシャリオが追いついた。

「じゃあ、分かってくれたところで、少し私にも話させて」
「……………」

一度目を閉じた後、なのは静かに息を吸う。

「あのね、ティアナは自分のこと、凡人で射撃と幻術しかできないっていうけど、それ、間違ってるからね」

しつかりと感情を交えた声だ。風に乗るようにティアナに届く。

「ティアナも他のみんなも、今はまだ原石の状態、でこぼこだらけだし、本当の価値も分かりずらいけど」

ティアナがなのはのほうを向いたので、彼女も合わせてそちらを向き、

「だけど、磨いていくうちに、どんどん輝く部分が見えてくる。エリオはスピード。キャラは優しい支援魔法。スバルはクロスレンジの爆発力。3人を指揮するティアナは射撃と幻術で仲間を護って、知恵を勇気でどんな状況でも切りぬける」

思い描きながら、軽く腕を振る。

「そんなチームが理想型で、ゆっくりだけど、そのかたちに近付いていってる。模擬戦でさ、自分で受けてみて気付かなかった？」

当ててしまつてごめんなさいと謝っていることを謝ってから、

「ティアナの射撃魔法　クロスファイヤー・シユート　って、ちゃんと使えばあんなに避けにくくて、当たると痛いんだよ？」

それでもなお、申し訳なさそうにティアナの魔法の良さを説く。
なのはは教導しているときのような真面目な表情に戻り、少し叱る。

「一番魅力的なところをないがし蔑ろにして、慌てて他のことをやるうとするから、だから危なっかしくなっちゃうんだよ」

技が磨かれていないうちに、次の技を習得することは、自分の魅力に気付くことも無ければ、その技の完成度も低くなり、結果的に良くないことに繋がる可能性があることを示唆した。

「……って教えたかったんだけど」

そろりとクロスミラー・ジュを手にとり、

「システムリミッター・テストモードリリース」

なのはの命令にチカリと反応する。

「命令してみて、モード2ツイって」
「……モード2」

ティアナは彼女から愛機を受け取り、構えながら言われたとおりに命令すると、クロスミラージユは自分が自力で制御し出力したものは違うダガーが出力され、デバイスも合わせて変化する。

「……これ」

「ティアナの考えたことは間違えじゃないよ？ でもね、それはより確実な精密さ、基礎の土台ができてないと、危険しか伴わないんだ。だから、なるべく基本を、この考えにならないように教導してた」

なのははダガーモードのクロスミラージユを見ながら、目を細めて、

「あと、ティアナは執務官希望だもんね。ここを出て、執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし、将来を考えて用意はしてたんだ」

ゆつくりとティアナからデバイスを受け取り、モードを解除する。ティアナの考えは間違っではない。射撃手が常に、相手と距離をおいて戦う事があるかと問われれば、それは否である。ただ、今確実にできていないものをそのままにして次の段階へ進むことは自滅への一歩でしかなく、ティアナはなのはの教えているものが基礎そのものであるという自覚がなかった。

彼女は先ほどシャリオから教えてもらった、なのはの教導の意味するものと、後悔の念から悲しくなり、恥ずかしさも忘れて嗚咽を

漏らす。

「クロスのロングももう少ししたら、教えようと思った。だけど、出勤は今すぐにでもあるかもしれないでしょ？ だから、もう使いこなしている武器を、もっと、もっと確実なものにしてあげたかった」

自分がそれを話そうともしなければ、相手の意見を聞くような仕事もとらず、ただ一方的に教えていたこと。今までの一斉教導では思いつかなかった考え。を省みて、声を落とす。

「じゅめんね」

「……う、あう」

「多分、私の教導、地味で成果を感じられないことが多いし、自分の考えも押しつけっぱなしで……苦しかったり、不満があったり、色々したよね？」

もう一度、ごめんとなのは謝る。

「思い詰めて、頑張らなくてもいいよ。ティアナには、私やみんながいるから、そういうときは言ってほしい。ううん、出勤前、言ってくれて嬉しかった」

泣いているティアナを引き寄せ、

「本当にごめん。私も、もっとそういう風に聞けばよかったんだよね」

「いえ……いえ……私のほうこそ、すみません。ごめん、なぞい」

「一人で頑張らないで、みんなでお互いに頑張っていこう？」

それから、何度も何度も、ティアナは謝罪を続け、なのはは子どもをあやすようにぼんぼんと背中を軽く叩いた。

少し空に雲が出てきていても、星は瞬きはまたた失っていなかった。

『おはようございます』

「ん、おはよう」

朝になり、支度をして外に出ると、元気な挨拶がティアナを迎えてくれた。

「おはようございます」

「うん。ティアナ、昨日はよく眠れた？」

「はい」

じゃあ、ちょっと散歩でもしようかとフェイトに誘われて新人たち揃って近くの芝生を歩く。

「……技術が優れてて、華麗で優秀に戦える魔道師をエースって呼ぶでしょ？ その他にも、優秀な魔道師をあらわす呼び名があるって、知ってる？」

少し遠回りになるが、朝の練習には十分間に合う時間だ。

「その人がいれば困難な状況を打破できる。どんな厳しい状況でも突破できる。そういう信頼があって呼ばれる名前……」

スバルたちは互いに顔を見合わせるが明確なものは思い浮かばな

い。

フェイトはにっこりと微笑んで、後ろ手を組む。

「ストライカー
Striker」

『……あ』

彼女は全員の顔を見てから、前を向き、

「なのは、訓練を始めてすぐの頃から言ってた。うちの4人は全員、一流のストライカーになれるはずだって」

空を見上げる。

「だから、うんと厳しく。だけど大切に、丁寧に育てるんだって」

昨日の空はそのままに、朝日が海上を照らしていた。

「しっかし、教官っていうのも因果な役職だよなあ。面倒な時期に手エかけて育ててやっても、教導が終わったら、後はみんな勝手な

道を行つちまうんだから」

「まあ、一緒にいられる期間があんまり長くないのは、ちょっとさびしいけどね」

なのは、ヴィータ、シグナムが訓練場の階段を上がったところにおり、コタロウは階下の海辺近くでぼけりとなのはからの指示を待っていた。

「ずっと見ていられるわけじゃないから、一緒にいられる間は、できる限りのことを教えてあげたいんだ」

データを打ち込んだのか、コタロウに合図を送ると本日のメインとなる訓練施設を形成する。準備が整ったところで、新人たちが寮から走ってくるのが見えた。

「おはようございまーす！」

『おはようございまーす！』

スバルに合わせて全員が走りながら挨拶をした。

「おオ、来たか」

「おはよう」

ヴィータが全員に、今日の訓練の辛さを仄めかすのを見ながら、
なのはは思う。

（何があっても、誰が来ても、この子たちは墜とさせない。私の目が届く間はもちろん、いつかひとりでそれぞれの道を駆けるようになって……）

この子たちを力を最大限に引き出すためにはどうしたらよいか考
えることは、これからもあるかもしれない。だが、それでも一歩
歩確実に前を見て強くしていこうと決意を改めた。

「さあ、今日も朝練頑張るよ！」

『はい！』

き、
そうして、海上に浮かんだ訓練場へ足を運ぼうと階下へ降りると

「あ！」

スバルは1人の男性が目に入り、声を上げる。

「スバル？」

ティアナの呼び掛けを無視して、階段を使うことなくそこから飛び降りた。

「コタロウさん！」

「はい」

飛び降りることで誰よりも速くスバルはコタロウに近づくと、膝をついて手を床につき、

「昨日はすみませんでした！」

「……………」

ぞろぞろと後ろに続くなのはたちを余所に、土下座をして頭を地面につけんばかりに謝る。

「なのはさん、頑張っていました！」

「え？ 私？」

「私がおか、ナカジマ二等陸士に謝られるようなことをしていたのであれば、許しますので、立ちあがっていただいてもよろしいですか？」

「……………はい」

顔は上げずにしょんぼりとスバルは立ちあがる。

「アンタ、何したの？」

状況を読み切れていない隊長、新人たちのなか、ティアナが口を開いた。スバルは両手の人差し指をちよん、ちよんと何度も付け合わせながら、

「あろう、そのう……」

ゆっくり昨日の、昼間の出来事を話す。

「はア！？　じゃあ、お前、ティアナが撃ち落とされて、煮え切らない気持ち全部コタロウに吐き出して、拳銃の果てに休憩所の自販機壊しただア！？」

「……はい」

「その場でちゃんと修理しておきました」

驚くもの、乾いた笑いをするものがそれぞれいるなか、コタロウだけが普通に話す。

「ふむ」

そして、少しコタロウは考える。

「ナカジマ二等陸士」

「……はい」

「もしかして、ロビー近くの通路のへこみもそうですか？」

「うう！……はい」

何それとみんながスバルに視線を送る中、エリオとキャロが何をしたか話す。

「……は？」

「すみません！」

「そちらも今朝、直しておきました」

なのはは頑張っているのか？ という質問で感情が爆発した後、シャリオとシグナム、シャマルからなのはの過去を聞き、自己嫌悪をそのまま壁にぶつけてしまったことも話す。

「……………」

先ほどまで、あれだけ元気になっていたスバルは肩を落とし、周りは少し呆れてしまっていた。

「しかし、カギネ二等陸士が許しているのだから、それで良いのではないか？」

「はい」

「ま、練習時間これ以上なくしても困るし、はやく始めようぜ」

シグナムの言葉にコタロウは頷き、ヴィータも練習開始を促そうをするが、

「すみません」

「ん？」

「ナカジマ二等陸士に質問と、ランスター二等陸士に伝言があるのですが、よろしいですか？」

「それは短いのか？」

「はい。すぐ済みます」

それならと、ヴィータたちは待つことにする。

「ナカジマ二等陸士」

「は、はい！」

めったにない彼からの質問に落とした肩を戻して、ぴしりと姿勢

を正す。

「高町一等空尉は頑張っていた。とのことですが、それはやはり高町一等空尉の過去のお話ですか？」

「……え、あ、はい」

ぴくりと、隊長たちの眉が動き、ティアナたち新人たちも2人のほうを向く。昨日の今日で謝罪があったのだ。コタロウが何か話があったのだらうと思うのは、容易に想像がつく。

「それは胸の傷のお話ですか？」

『……』

しかし、話しの内容が分かり、確認するように質問するとは思えず、全員が彼を注視する。

「え、あの、はい」

「そうですか。ありがとうございます」

ぺこりとコタロウは頭を下げるものの、スバルたちには何故彼がそれを知っているのか分からない。

「シグナムさん、昨日、コタロウさんにも話したんですか？」
「いや、話してない」

それはへりに乗った人間なら分からないが、残ったフォワード陣は確かに彼が話の場にはいないことを知っていた。

「あの、コタロウさん」

「はい」

「何で知ってるんですか」

スバルが全員の代表のように質問すると、彼は特に不思議がる様子もなく、

「フィニートー一等陸士の付き添いで、デバイスを見ているのですが、レイジングハートさんだけ、自己判断で使用者、つまり高町一等空尉にショックアブゾーバーを展開していました。それは砲撃時のほんのコンマ数パーセントの魔力をそこに独自で割り、自身で衝撃を吸収しています。そのアブゾーバーの重心から判断するに、使用者の胸を重点的に展開していたので、過去に大きな傷を負ったのではないかと見地しました」

『……………』

黙って彼を見るなか、なのはは首にかかっているレイジングハートをみる。

<申し訳ありません。マスターの命令なしに行なっていました。完治はしているのですが、いざというときのためを見越してです>

「うん、それは、いいんだけど……」

今まで使用して数年間、全くそれには気付かなかった、いや、レイジングハートも使用者に分からないほど微弱に展開していたものに気付く。その行為に少し驚いた。

周りもそれを聞き、理解できるも、彼の以前見せた機械的見地に再び目を見張る。

彼にとってはほんの確認要素でしかなかったが。

「ランスター二等陸士」

「はい」

次にティアナのほうを向く。

「グランセニック陸曹より伝言があります」

その言葉に、あつと声を漏らす。

模擬戦前、傘を借りた後に彼が言おうとしたものだ。おそらく「無理はするな」といった類の言葉だと思い、少し遠まわしに断ったことを思い出した。

今では、昨日のこともあり、それは自覚していた。

「頑張らないください」

「……はい」

やはりそのような言葉であったとゆっくりと頷く。

「は、さっきなのはが頑張るって言ったのによ」

「……………」

ふふんと笑って歩き出すヴィータの言葉に、新人たちは「あれ？」と首を傾げた。

752

「（……なんだろう？ どこかで同じことあったような……）」

なのはとフェイトもどこかしら記憶にあり、不思議に思う。

「（なんか、記憶にあるなあ）」

疑問に思いながらも、コタロウはこれ以上話すことはなく、隊長たちを先頭に歩きます。訓練の時だけはコタロウは隊長たちのすぐ後ろ、新人たちよりも前を歩く。

『新人の皆さん』

『頑張らないでください』

『はい！……え？』

『コタロウさん、頑張らないなんてそんなありきたり……え？』

『あの、一応、俺やなのはさんは『頑張つて』と……』

それは初出勤の時である。

全員、どんな言葉にでも答える元気があつた時だ。

『(……あ)』

スバルたちは思い出した。

『コタロウさん、皆になんて言ったんですか？』

『頑張らないでください』と言いました』

『……』

『……えと、んー？』

『リイン?』

『あ、はい。確かに、コタロウさんはそういいました』

『(……あ)』

なのはたちも思い出した。

そして、それぞれ昨日のことを思い出す。

『近くにいたんだから、いざというときは頑張らないで、頼ってよ』

なのははフェイトの言葉を、フェイトは自分の言葉を思い出し、

『思い詰めて、頑張らなくてもいいよ。ティアナには、私やみんながいるから、そういうときは言ってほしい。ううん。出勤前、言ってくれて嬉しかった』

『1人で頑張らないで、みんなでお互いに頑張っていこう?』

新人たちはなのはの言葉を、なのはは自分の言葉を思い出し、

『頑張らないでください』

先ほどのコタロウの言葉へと思考が終着した。

『……あー!!』

ヴィータとシグナムはなのは、フェイト、そして新人たちが揃って立ち止まり声をあげたことに驚いた。

2人を除く全員がコタロウを見る。彼は前を歩いていたフェイトが立ち止まったので、彼女の後頭部に鼻っ柱をぶつけ、落ちた帽子を被りなおし鼻を右手で押さえていた。

訓練場に着いていないのにも関わらず立ち止まった彼女を不思議に思っても、再び歩き出そうとする彼に、

「あの、ちょっと、コタ　　うわっ!」

話しかけようと一歩前に出ようとしたスバルは、自分の足に引っかけ、重心が思い切り前に傾いて、思わず手をバタつかせてしま

「……………ん？」

横に薙^ないでコタロウを海に突き落としてしまった。彼も振り向くために重心を傾けていたため、特に重さを感じることもなくすんなりと倒れた。

『……………』

ざぶんと風いでいる海に白い波が立つ。

『……………』

ぶくりぶくりと泡がたち、

『……………』

こぼりと最後に小さな気泡が出てから、

「わ、あわわわわわー」

「ちよっと、スバル！」

「おい、待て！ 今何が起こった」

『ええー！？』

一同、騒ぎ始めた。

「す、すぐに助けに」

「じぼ」

『……じぼっ。』

沈んだ場所に目を向けると、また小さな気泡が出た後、帽子が水面に出て、階段を上るように、コタロウが一歩一歩足踏みしながら、ざばりとあらわれた。

彼は一応魔法によって、飛ぶことはできる。しかし、厳密には空^{ウイ}中路^{ソウロウ}に近く、足元に片足ほどの地面をつくりだし、その上を歩く。垂直に上がる時は、梯子^{はし}を登るように足踏みをして地面から距離を取るのだ。

「……じく」

無言で地面に足を着くと、口から魚を吐きだした。そしてその後、じぼじぼと思いい切りせき込む。

「す、すみませんでしたー！」

スバルはコタロウの背中をさすり、少しでも和らげるように努める。

さすがに今は彼女が何について悪いと思っているかは理解できた。

「コホ、許します。それで……私に何か？」

「(えー！？ 怒らないの?)」

内心それは怒ってもいいんじゃないかと思うが、あえて口には出さなかった。

しばらく背中をさすっていると大分治まってきたようで、咳せきも引いてくる。もう、大丈夫ですと断った後、すくりと立ちあがり、申し訳なさいっぱいで半泣きのスバルも立ちあがらせる。

「何か、ご用件があったのではないのですか？」

「……ぐすん、ふあい。ありました」

服を乾かす許可をなのはから得てから、パチンと傘を差す。

「乾かしながらお伺いしますから、話してください」

「……はい。コタロウさん、以前も『頑張らないでください』って言ってたじゃないですか？」

「はい」

こくりと頷き、傘に『なつのこうてん夏昊天、天気八晴レ、風八下降』と指示を

出すと、傘から風が吹き出た。それを知らない人は少々驚く。

「それで、それはどういう意味で言ったのかなと」

「ふむ」

帽子を腰のベルトに引っ掛けながら乾かすコタロウは風に目を細める。

「高町一等空尉は頑張れという言葉の次に、『離れてても、通信で繋がってる。ピンチの時は助け合える』と仰おっしゃっていました。ジャンとロビンもよく言います。『自分にできることはやる。できないことは頑張らずに仲間に頼む』と」

ジジッと胸元を僅かに開けて中にも風を送る。髪は既に乾いており、緩やかにカーヴを描いている。

「ですので、『頑張れ』に対して『頑張らない』と言いました。適宜、『お好きなほう』を選べばよいのです」

キヤロはその時、選ぶ行為そのものを学んだ。だが、コタロウはそうではなく、自分のできる部分を見極め頑張ること、相手を信頼してお願いをすることを意味していたのだ。

「そして、これは私が初めて機械ではなく、人と多く接する場、つまりこの六課で思考したのですが、ランスター二等陸士が一番、それを学んでいると感じました」

「わ、たし、ですか？」

頑張る要素とそうでない要素を学ぶ、なのはの指示を一番よく守っているとかタロウは言う。

「昨日のヘリポートで、エリートでもなければ、ナカジマ二等陸士、モンディアル三等陸士のように強くもなく、ル・ルシエ三等陸士のような稀少技能レアスキルも無いと言っていました」

自分を凡人と認めたティアナの言葉だ。

「グランセニツク陸曹にも、『自分は凡人だ』と言っていたみたいですね」

「……あ、はい」

靴を脱いで、中も乾かそうとする。視線はティアナではなく、靴の中だ。

「私はあなたが凡人であることを否定しません」

「……」

「自分がそう思っているのであれば、それで十分だからです」

靴は衣服と違い、もう少し時間がかかりそうだ。

「あなたは誰の能力も持ち合わせておらず、ただの凡人です」
「……………」

昨日、塞がった傷が開こうをしているようで、ティアナは顔をゆがませ、なのはが止めに入ろうとするが、

「しかし、ランスター二等陸士はセンターガード故、全ての能力を使う事ができます」
「っ！」

大きくティアナは目を見開いた。

「クロスレンジの力も、対応できない高速の中も、稀少技能である竜召喚もあなたは自分の前後左右にいる仲間をお願いするだけで、叶えることができます」

靴は乾き、開いたまま傘を地面に置くと　風は手放したところで消えている。

「あなたはその全てを兼ねています」
『……え』

周りが声を漏らすなか、コタロウは靴をはき、片足で跳躍しながら耳の水抜きをする。これは新人の皆さんにも言えることですが、と言葉を繋ぐ。

「地球の言葉を借りるのであれば、『綺羅、星の如し』と言いますよ。あなたが背後には星のように隊長たちが居並び、守っています」

ティアナたちは気づいたように隊長たちを見た。

「ランスター二等陸士は、兄、ティード・ランスター一等空尉の妹であると先日知りました。彼は亡くなり、星よりも遠い場所にいますが、あなたの頭の中にはしっかりと残り、あなたの性格として受け継がれているはずです。それは両親から受け継がれた遺伝子も同じですね」

今度はフェイト、エリオも目を見開く。

「せっかく、あなたの周りには多くの人がいるのですから、頑張らなくてもよいはず。一言お願いすれば、自身は能力を発揮できなくても、助けてくれる仲間や友達がいるのですから」

コタロウは自分の周りには同じ工機課の4人とトラガホルン夫妻の2人、そして片手で足りるくらいの知り合いしかいないことは口には出さなかった。

「そういう意味すべて含めて、頑張らないでくださいといいました」
『……………』

衣服は残らず乾き、全身を見まわしてからパチンと傘を閉じ、左腰に差した。

そこで初めてコタロウは周りを見ると、全員惚けながら自分を見ているのに気が付き、

「ランスター二等陸士？」

「…………ぐ、うう」

ランスター二等陸士だけが、自覚なく泣いていた。彼は前に進み
でる。

「泣いているのですか？」

「え、うう、泣いて、ま、せん」

「……………そうですか」

ぐじぐじと目をこすると、彼は再び傘を抜いて開き、彼女に手渡した。

「こ、ねは？」

傘を持たせたあと、傘の先端、石突を掴み、ぐいと彼女の顔を隠す。

「高町一等空尉」

「え、あの、はい」

惚けた状態から我を取り戻し、ふるふると頭を振って反応する。

「今から私、嘘をつきます」

「……へ？」

「よろしければ、頷いてください」

「あ、はい」

コタロウの嘘をつきますというおかしな宣言に、全員自覚を取り戻した。

彼は空を見上げ、

「雨が降っているので、止むまでお休みしませんか？」

手をかざして朝のまぶしく光る太陽を見る。
なのははつられて空を見て、その後、傘に目を移し、

「ふふつ。そうですね。傘が閉じられるまでなら」

ティアナ以外の新人たちは大きく微笑み、ヴィータとシグナムは仕様がなという顔をした。

「5分で、5分で、この通り雨は止みますから」

傘を差しているなかから小さな声が漏れ、その通り、5分後には傘は閉じられ、元気いっばいで本日の朝練を開始することができた。

自分の周りには、あらゆるものが存在している。

それは特に、近いから大事であるとは限らず、遠くにあるからといって捨ててよいものでもない。自分で見つけ、判断しなければならぬ。

その時になれば必要で、あるときは必要でないかもしれない。
だが、私たちはそれに守られている。

もちろん、守るときだつてある。
助けるときだつて、教えるときだつて、学ぶときだつてある。
お互いが影響し合っていることは疑う余地がない。
1つ、星に願つてみてはどうだろうか。
綺羅と光るその星はあなたを助けられるかもしれない。
そして、忘れてはいけない。
あなたも当然、星なのだ。

「コ、いえ、ネ、ネコさん」

「はい」

「1つ直してほしいものがあるのですが」

「何でしょうか？」

「このオルゴールなんですけど……」

彼は極稀にしか自分からは語らないため、過去に全く同じものを直していたとしても、持ち主が違えば、特に詮索することなく直せるものを直す。

「わかりました。それでは貸していただけますか？」

今日、彼女は1つ星にお願いをすると、こくりとそれは頷いた。

昨晩は自分が大事している写真の裏側に『お父さん お母さん
お兄さん ありがとう』とメッセージを添えたのは誰にも言えない
秘密だ。

そして、ティアナが兄ティード・ランスターとコタロウ・カギネ
との交流を知るのは、また別の機会である。

“ 綺羅、星の如し ”

第25話 『綺羅、星の如し』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

シュテルンです。

しばらくぶりでございます。

前回最後のあとがきから、2月末のお話なのでおよそ3カ月ぶりでございます。

さてさて、第18話からこの第25話で、現時点の全力でティアナとスバル、そして、ちよっぴりなのはさんの成長期を書いてみました。

768

ランスター家の話から始まったこのお話、いかがでしたでしょうか？
私は長くてちよっと疲れしました。

いや、本当に私にとっては長く感じました。

まあ、それは置いておきまして……

私は何故、ランスター家のお話を創作したかといいますと、

『アニメでは、どうもティアナの追い込まれ感がないなあ』と感じたためです。

確かに10歳でお兄さんを無くし天涯孤独になってもどうも、もやもやして、

こう、某新世紀のランとかグレーさんみたいな必死さがないなあとかね、感じました。

(あれは、比較にはいけませんね、そうですね)

そんなこんなで書いてみました。

んでは、内容のほうを

第18話 『今日という日この時だけは』

ここで登場したキャラクター

・シルフィオ・ランスター

・ローラ・ランスター

の2名ですが、由来は日産自動車のセフィーロとローレルから生まれました。

(だって、なのはwikiにはティアナとティータの名前の由来がそれっぽいことかいてあるんだもの)

名前をモチーフにしたくらいで性格は、お父さんっぽく、お母さんっぽく、それなりに作成した感じですよ。

んで、はい。

飛行機墜落事故ですね、これは皆さんあれですよ？

日本空港123便墜落事故がよぎったかもしれませんが、これではありません。

(別に『沈まぬ太陽』をみて感極まって泣いたからではありません) 題材は西暦1912年4月14日深夜に氷山に接触して沈没した船、タイタニックをモチーフにしています。

まあ、モチーフにしたとしても、そんなに考証色々してやったわけじゃありません、イメージした程度です。

当時は情報技術なんてそれほどありませんから、新聞に載った時は大分時間がかかっていたのではないかと思えます。

そして、ここで大事なのはミッドチルダの言語形態。

これは英語と同じものとしています。決まった文字を並び替えるだけで意味の難しい単語でも、こどもは読むことができるというところが重要です。

もし、自分よりも先に子どもから「大惨事」なんて読まれた日にゃ、きつと膝から崩れ落ちます。

(私は子どもなんていませんが、あくまで想像です)

日本のような漢字を使えば、子どもは読めませんからね。いや、10歳だと微妙かしら。

そのようなかたちでランスター家の両親の事故を描いてみました。

770

第19話 『今日という日この時から』

この話ではティードの死の理由を書いてみました。

両親に先立たれ、自分も死ぬかもしれない状況、自分の死で妹がどれほどの苦難をこれから経験しなければならぬのかと思ひ、すこしでも軽減しようと考えたのが写真を燃やすことです。

メッセージを裏面に書いて燃やすというのは証拠隠滅と先に天にいる両親に向けて送ったものです。すこし、オカルトっぽいですが、この燃やすというところに感嘆していただいた方もいらっしゃると思いますので、嬉しい限りです。

そして、ティアナはアニメを同様に天涯孤独に生きていくようにしました。

これでティアナの土台は完成です。

ちなみに、コタロウの腕のお話と繋がったのは偶然中の偶然です。

第20話から第25話

ここからはアニメとほぼ同じですね。違うのはコタロウがいること
によって、ガリユを撃退したところと、最後を締めくくっちゃっ
たところです。

この話の題名はこの『綺羅、星の如し』を載せるために、ずっと同
じ形式でサブタイトルを付けていきました。

いやはや、結構無理あるタイトルもありましたが、これはこれでい
いかなと思ったりします。

ここでのコタロウの立ち位置ですが、なのはたちオリジナルにいる
キャラクターにどれだけ、かげをひそめるかを意識しました。

コタロウに問題を解決するようなことはさせないのがミソです。

なので、ティアナには沈んでもらいました。

(ティアナファンの皆さん、助けてあげられなくてごめんなさい)

次に、なのはとスバルですね。

私はDVD版ではなくTV版を参考にしています。

みましたか？ あれ

はつきりいって、なのはさん怖っ、スバルさん完全に親の敵みたい
に睨んでた。

でも、次の話でなんか治まってる。

よし、なんか入れてみよう！

という考えのもと、ユーノとコタロウでなんとか心の傾きを戻して
みました。

つまるところ、ご都合主義です。

（だ、大丈夫ですよね？」

なのはさんがあのテイアナに向けて撃った砲撃の心境は、多分表情のままが正しいと思います。ですが、それはあまりにも教導官として冷たいだろうと思います、

自分でもあなたが気付かないのがいけないでしょ！ と戒めを含めて、コタロウ休暇編の高町夫妻にフラグを立てさせておきました。

（高町夫妻、かつこい〜）

先ほどの述べましたが、コタロウをなるべく目立たせない、つまり本編の部分になるべく介入しないようにさせたのは、彼の最後の締めを言ってもらったためです。

はじめは

「頑張らないください」

の一言だけ発言して

あれ？ デジャヴ？ なぁんて思わせて、思い出させる。

そして、コタロウは六課にいた当初からお互い仲間であることを知っていたと完結させるためだったのですが、それはあんまりだろうと口にださせてみました。

彼の思考は機械みたいに単純ではありません。

単純なのは「聞かれないから答えない」とかとかだったりで頭の中は結構合理的に物事を判断しています。

なのはたちの察する能力だけじゃだめだよ？ という警告としています。

うまく彼に質問すれば、彼は自分の考えをざぶさぶ答えることうけおいです。

星のくんだりもトラガホルン夫妻からは『綺羅、星の如し』という意

味を聞いたくらいでほかの考えは自分で形成したものです。

お、そうでしたそうでした。

でてきましたね、トラガホルン夫妻。

彼らははつきりいつてなのはたちより強いです。そして、はやてよりやり手です。

ですが、なぜはやてと同じ階級なのかといいますと、並行して学業も治めていたからです。

夫婦の受賞の経緯とか、幼少期のできごととか題材ありきでエピソードは考えますが、それはなにか別の機会があればちよこちよこ公開していききたいと思いますね。

(いや、だせばいいかなあ。くらいで)

話を戻しましょう。

今回のタイトルである『綺羅、星の如し』は思いつきは、あれですよ。

『綺羅星!』

とかいう某アニメからです。なので、そのアニメが終わる前にここまで行きたかったのですが、ごたごたいってて無理でした。

んで、まあ、なんにせよ、この言葉について調べると色々出てきました。

『綺羅、星の如し』という言葉ですが、古い文献には似たような言葉はあってもこの言葉そのものは存在していないんですね。

つまりはいろいろ変化して生まれてきた言葉という事です。

詳細はメント……私のおバカのせいもありますので、ひとまずは自分で調べになってみてくださいな。

このようなところで、全部話しましたかね？
なにかご質問ありますようでしたら、メッセージで頂きたいと思
います。

もちろん、感想を頂いたうえでちよろりとした質問も当然受け付け
ます。

謝るところ多く、反省するところも多い稚拙な文章ですが、今後と
もよろしく願います。

そして、次回からいくつかオリジナル展開が続きます。
まあ、アニメ的には2週間後となるので、良い感じで入れていきま
すよ？

晴れてコタロウも段々、物語の先頭（戦闘）に顔を出していきます。
彼の能力、デバイス『傘』の力を1つ1つ解明させていきましょう。
ああと、もちろん恋愛も（すごい苦手ですが）やらせていただ
きます。

以上、シュテルンでした。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしています。

以下、謝辞と、用語解説をしていきます。

イツキさん

鮮血の刻印さん

上条信者さん

月兎さん

月奏さん

景雅さん

トータスさん

ユウスケさん

遠野悠夜さん

Jさん

紫鏡さん

ゲンさん

グラムサイト2さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

用語解説コーナー

劈く：つんざく

勢いよく突き破る

耳を劈くような悲鳴を上げるマンドラゴラ

室外装飾：エクステリア

室外、門等を設計したりします。インテリアと比較し昔はアウト
リアなんて呼ばれていました。

擽んでた：ぬきんでた

ひとときわ高い

擽んでた才能の持ち主（何かは不明）

兇災：きょうさい

取り返しのつかない崩壊と不運な状態

2011年3月11に起こった出来事は後々、兇災と呼ばれるもの
になるだろう

犇めく：ひしめく

集まって騒ぎたてること

犇めきあぐっていななくは

咽ぶ：むせぶ

よろこび、悲しみなどが込み上げ、息を詰まらせながら泣く
咽び泣く

爛れる：ただれる

皮膚や肉が破れ崩れること。

焼け爛れた背中

爆燃：ばくねん

爆発の膨張速度が音速を超えないもの。ちなみに超えるものは轟爆ばくという。

愛愛しい：あいあいしい

かわいらしい。

表現上こっちのほうが大人っぽいかなあと使い使いました。

彷徨：ほうこう

あてもなく歩き回ること

迷子は怖いです。

涕涙：ていらい

なみだと流すこと

本を読んで涕涙す。

霖：ながめ

ながくしとしとふる雨、りん

梅雨や秋によくありますね。長雨、秋に降る雨を秋霖しゅうりんと呼びます。

容：すがた

うつわのことです。

内容という言葉の語源は「うちなるすがた」「つまり本質ってことです。」

掩蔽：えんぺい

おおつ

月を掩蔽する。どちらも「おおつ」という漢字です。

攪乱：かくらん

かきみだすこと

陣形、攪乱！

想念：そうねん

想いや考え

想念は見えずらく、読みにくい。

昊：そら

なつぞらのことです。天の上に日がありますよね？

夏の昊天、日は高し！

寛恕：かんじよ

心が広くて思いやりがあること。

その人、心寛恕あり

首肯：しゅこん

頷くこと

首を垂らして肯定するので首肯

眦：まなじり

目じりのこと

眦を決する。

綺羅：きら

美しい衣服 綺は綾織りの絹布、羅は薄い絹布を意味するよう
す。

『綺羅、星の如し』地位の高いものが多く並ぶこと、本編では、強
く格好いい人たちが堂々と背後から自分を守っている、みたいな感
じで使用しています。

第26話 『指を口元に、片目を瞑り』（前書き）

さて、今回から数話は私の独自設定を組み込んで、ストーリーを展開していきます。

齟齬はなるべく、なるべく無くしたつもりですが、なにか矛盾があるようでしたら、指摘よろしくお願いします。それにしても主人公、頑張りなさいよ。

第26話 『指を口元に、片目を瞑り』

ティアナ・ランスターが初めてティードのオルゴールの音を聞いてから、数日は何事もなく隊長陣は教導を、新人たちは訓練に次ぐ訓練を繰り返した。夜練習は時々、体調を考えて休みになるパターンもあったが、それでも密度は濃く、熱した湯を冷まさないような訓練が続いていた。

「んじゃ、午前の訓練はこれで終わりだ」

『あ、ありがとうございます！』

新人たちは、隊長たちもそれなりに動いているはずなのに、息一つ乱れていない事が不思議でならなると、息を切らしながら思う。自分たちの個人練習に付き合うことで、夜練習がない時ぐらいしか休む暇がないのにも関わらず、何事も無かったかのように振舞っている。

「しっかりクールダウンして、シャワーを浴びた後、お昼にしようか」

『はい！』

だが、練習が日を追うごとに激しくなってもこなせてしまう自分を考えると、その成長に拳を握り締めてしまう。過大評価をするつ

もりは無いが、初めの頃に比べると随分動けるようになったと、新人たち、そして隊長たちも自信を持って言うことができる。もちろん、囃し立てるように聞く人間は六課にはいない。

「それぞれの訓練記録とその編集記録をレイジングハートさんに転送しておきました」

<ありがとうございます、カギネ三等陸士>

また、上空から全員の動きを捉え、記録した後、傘を使ってふよふよと降りてくる寝ぼけ目の男、コタロウ・カギネの行動に驚くことも少なくなつた。八神はやてが話す彼の経歴を聞けば、データ収集の正確さ、隊舎内を放浪しながら所々を修繕する技術などは彼の所属する電磁算気器子部工機課の人たちにとっては当然であることが理解できたからだ。加えて、ティアナの過去と劣等感から発生した蟠りが解けると同時に、彼に対する一種の緊張も解け、親密度も幾分か上がった。

エリオとキャロは「コタロウさん」と以前のままであるが、ティアナが彼のことを「ネコさん」と呼ぶようになったことが、なによりもそれをあらわし、

「あ、ネコさん」

「はい」

「朝、小耳に挟んだんですけど、ヴァイス陸曹が外出でいないのでしたら、お昼一緒にどうですか？」

「ご迷惑にならないのでしたら、一緒にさせていただきます」

食事に誘うことも、特に戸惑いはない。

彼は全員のクールダウンと着替えが済むのを待ち、一緒に食堂へ向かうことにする。

向かう途中、今日の夜の訓練が高町なのはとフェイト・テストロツサ・ハラオウンの急遽入った調査依頼によって中止になったことを告げ、午後の訓練に力を入れるからとヴェータが嚇し、新人たちを苦笑いにさせた。

「おー、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「今日は早いなだね、お昼」

「うん。午後からちよつとな、忙しくなりそうなんよ。それで早めにご飯」

八神はやてはリインフォース・ツヴァイ、シグナム、シャマル、ザファイラと一緒に食事をしながら、午後にリインと一緒に先日の出撃についての報告を陸上本部にしなければならず、その準備に手を焼いていることを話す。シグナム以下もどうやら忙しいようだ。

本当なら文字通りネコの手も借りたいくらいだが、それが妥協への入り口だと分かっていたので、頼むことはしなかった。これは他の隊舎内の人達にも言えることで、必要以上に他の人の手は借りてはいない。

(そうすると、夜時間空くのはあたしだけか？ いや、暇なら暇でいいのか)

ヴィータが時間が空くことに心配を覚える妙な感覚に浸りながら、席につき、スープで口を湿らせて1つ目のパンにかぶりつく。

隊長たちは日常的に忙しいということはなく、身体と頭を動かす時間はある程度分けられている。だが、このようにポツカリ時間が空くことは六課設立から考えてもなかなかない状況であった。ヴィータも夜訓練がない時は、最近得意になってきた書類作成があつたりしたのだが、今日に限ってはそれも無い。

(余った時間の使い方、かあ)

何故、料理を作るのは趣味になって、料理を食べることは趣味にならないのだらうとも考える。彼女はお菓子は元より、美味しいものを食べるのが好きだ。それは一般人も当たり前なことであるが、ヴィータの好きという感情は一般人のそれよりも多いと自負している。

だから、それに切欠を作る人間がいるとは思ってもよらなかった。

「ヴィータ三等空尉」

「ん〜」

ごくんと口に入っているものを飲みこんで、彼を見る。後ろのテーブルでは食事の準備をしている新人たちがいた。なにか雑談をしながら、料理を運び、飲み物の用意をしている。

「今日の夜、少々お時間ございますか？」

「おオ、不思議とある」

ヴィータははやてたちに隣接するテーブルに座っており、一緒なのはやフェイトも座っている。そろそろはやてたちは食事が済むらしく、最後にリーフティーで気持ちを切り替えようとしていた。

「それでは今夜、ディナーを一緒にしませんか？」

『ぶふっ！』

ヴィータの隣では向かい合っている数名と1匹の噴き出す　ザ　フィーラは四足の為、飲むというより舐めるに近く、衝撃で鼻に入った　音が聞こえ、背後からは皿が複数枚割れる音がした。

唯一何も被害がなかったのはヴィータとはやて、リインのお向かいにいたシャマル　被害甚大なのはリイン　と、提案をした男だ。

一方、彼女と同席しているのはとフェイトはというと、

「わわっ」

「……」

だが、

『……………』

リインを含め、その状態にしたシャマルの視線はコタロウのほうを向いたままだ。

他にも、割れた皿を片し、服を拭く人は彼の周りには数人いる。

「悪い、もう一回言ってくれ」

「それでは今夜、ディナーを一緒にしませんか？」

一言一句変えることなく、もう一度繰り返す。

ここが外なら間違いなく風が吹き、この空気を入れ替えているはずだ。

「……………誰と？」

「私と」

「誰が？」

「ヴィータ三等空尉が」

「2人で？」

「トラガホルン夫妻と一緒にです」

ヴィータは視線をコタロウから離し、目を閉じる。

一度、水を喉に通してから、

（待て待て……待て待て待て！ 状況を整理しよう）

頭を必死に回転させる。

（何処からこの雰囲気になった？ 午前中の練習は至って普通だった。スバルの動きも良くなってきたし、攻防の戦略も整理しながら立てられるようになってきて……）

内心頭を振り、それは違つと整理しなおす。

（うん……うん……そうだ、練習後は食堂にきて、はやてたちと会話）

これは問題ないと少し顎を引く。

（皆、忙しくつて、あたしだけ時間が空いていた。それが問題か？ いや、違うな……）

くるくるとネジが頭の左右に食い込んでいくような感覚で、最後の一回転を澄ませると、

(……そうか、コイツが『ディナー』なんてものに誘うからだ)

何のことはない、コタロウが話しかけてきたことがそもそも原因であることに気付いた。であれば「何であたしが……」と突き返してしまえばよい。

ヴィータは軽く頷いて目を開き、彼を再び見据えて、

「……なん」

『何でですかー!?!?』

見事にシャマルとリインがヴィータを遮り、代弁してくれた。リインは、もはや水を含んだことによる服の重みもなんのそので、コタロウの目と鼻の先まで飛び上がる。彼はその勢いに少し顔を引くが、

「オークションの鑑定及び、解説の報酬だそうです」

距離を憚らない彼女たちの声と違って、平然沈着に彼女たちに届く声で疑問に答える。

ホテル・アグスタで開催されたオークションは、ホテルの系列会社が行なっているものではなく、とある競売会社オークションハウスが会場としてホテルのホールを借りて行なわれた。トラガホルン夫妻はその競売会社から依頼を受け、その報酬としてホテルの優先的なディナー招待券
ただし、事前予約必須 を頂いたのだという。これは時空管

理局における賄賂罪として扱われる可能性があり、懲戒処分を受けることになり得る。だが、それは正規の手順を踏まない場合だ。もともと、夫婦は年に数回、外部での講義を行っており、これに『私』として行動することを事前に管理局に申請している。且つ、これに対する報酬も管理局と依頼者間で合意が取れていれば、問題なく報酬を受けることができることになっている。この合意にはある程度の信用が必要であることは言うまでもない。

ユーノの場合も同様であったが、彼の人間性が表に出たのか、断っている。

『へえ、なるほど……って、違います！ 何でヴィータちゃんとなんですか！？』

コタロウが右後ろのポケットからハンドタオル 茶トラのネコがあしらわれている を取り出し、ラインに手渡すと、彼女はテーブルに着地して服の上から水分を取り始めた。そして、彼の説明に理解を示すも、聞きたいのはそれではないと眉根を寄せる。

「ヴィータ三等空尉がお時間がありそうでしたので、話の状況を伺う限り」

『た、確かに』

ここまで声を揃えるシャルとラインは、また彼の答えに理解しつつも、何故か納得できずにいた。シャルも確かに今日は、午後の訓練結果を元に、シャリオと協力して新人たちの体調を間接的に診なければならぬ。

うんうんと唸る2人を余所にヴィータはコタロウを睨み上げ、

「行かねエ」

と、すぐに手を振りながら視線をそらし、食事を再開しようとする。

「他のヤ」

「ほう、誘いを断る理由くらいは聞かせてほしいね」

「命令ではないけれども、頭ごなしでないものがほしいわね」

聞き覚えのある声が先ほど視線をそらしたほうから聞こえてきた。彼の足元を見ても、他に足がないことから、今ここには居ない人物であることは間違いない。

割れた皿を片づける音が聞こえないことから、既にその片づけは終わったのだろう。状況としては、一応全員、ある程度の落ち着きを取り戻している。

ゆっくりとヴィータは視線を彼に戻すと、

「やあ、モニター越しで申し訳ない」

「ホテル・アグスタ以来ね、ヴィータ三等空尉」

彼女から見てコタロウの右側にモニターが2つ開き、彼女を覗き込んでいる彼らがいた。

「ト、トラガホルン二等陸佐！」

「おっと、過保護だと思ってもらっては困るぞ？」

「もともと今夜のことについて昼食時に話す予定で、丁度今回線を繋いだところなのですから」

敬礼はしなくて結構、と周りに聞こえる声で響かせる。

その後、ジャニカは不敵に笑い、ロビンは頬に手を当てて、

『何とも、私たち（貴女）にとって都合の良い（悪い）展
開で申し訳ないが』

ひとまずヴィータに発言権を与えてみた。

冷静に考えれば主張できたかもしれない黙秘権という言葉は、彼女の頭の中に出てきてはくれなかった。

食堂が夫妻によって法廷にされ、外堀を埋め、感情を揺さぶり、徐々に真綿で首を絞めるようなやり方で追い詰められていく1人の人間を見たとき、自分たちが完全に傍聴席にまわり、手も足も出ない事を知った。おそらく、口を挟めば自由に発言を与えられるであろうが、後ろ向きに崖を歩く人間が増えるだけで、なにも好転はし

ないという結果は目に見えていた。
新人が替わろうとすれば、

「まさか、『庇^{かば}う』という一種の親切心からでたものではないだろうね?」

と、ティアナでも口を噤^{つぶ}む状況に追いやられ、

「リイン曹長、シヤマル主任医務官が替わっても構いませんが、予定を余暇の為に曲げるといふのは、はたして適切でしょうか?」

と、声を荒げることなく2人を沈黙させた。

もし、十分な知識を持った人間が六課にいれば、もしくはヴィータが明確な断る理由を話せていれば、相手は納得させることができたかもしれないが、そもそもトラガホルン夫妻はヴィータが恥ずかしさからくる拒絶で断っていることを見破っていたので、引き下が
る気はなかった。

「ヴィータ三等空尉、貴女もしや、自分が女性である自覚が無いのではありませんか?」

「あ、あたしは騎士だ! ……です」

「そうですね。そして いえ、それ以前に女性でしょう?」

「だからって、そんなディナーなんて……」

「貴女、強くはなりたくないのですか?」

「つ、強さとホテルの食事なんて、関係ねエじゃない、ですか」

至極まっとうな答えであると、自分でも納得しながらヴィータは反抗する。

騎士は主あなを守護する為に戦うものだ。これはヴォルケンリッター共通の意志でもある。

しかし、そんなことは歯牙にもかかけず、

「貴女が『騎士としての強さ』を求めただけに甘んじて、『女性としての強さ』を求めないのなら、そうなりますね」

「……女性としての強さ？」

ロビンは静かに頷く。ジャニカとコタロウは通信で離れていながらもスバルたちと一緒に食事をすることにした。

ヴィータは訝しむなか、

「そうです。騎士としての強さをもって主を守護し、女性としての強さをもって気高くあると。そうなりたいとは思いませんか？」

どんな状況でも気高くあり、過信することなく迎え撃つ。騎士として、女性としての誇りを持った人になりたくはないかと、ロビンは問う。これは周りで聞いている女性陣にも問われているようにも聞こえた。

「どんなクラスのホテルに食事に誘われた時にも、動揺することな

く悠然と立ち振る舞う自分を見たことはありませんか？ もちろん、誘いを断るしなやかな自分でも構いませんが」

真綿で締めながらも、冷やかすようなふざけた表情は一切ロビンには見られない。

ヴィータを1人の女性として、対等に話を進める。

「恥ずかしさは一時です。しかし、自分の為になるなら、1つの糧^{かて}として経験してみても構わないではありませんか？」

追い詰められているのは分かっているが、それは逃げ場を与えないのではなく、自分の思考の結果をきちんと聞くためということ^が把握できると、

「じゃ、じゃあ、1回だけ」

と、もじもじしながらヴィータは答えた。

感情を表に出したリイン、シャルル関係なく、女性たちは少し羨ましいとヴィータとロビンを見比べた。

やはりともいうべきか、ジャニカとロビンの2人自らが作りだした空気は、自分で入れ替えていったため、午後の練習に差し支えることはなかった。練習開始さえしつかりできていれば、練習密度のおかげか、強制的に今夜のことを考えずに済むのだ。ただ、身体を動かさない人間たちは分からないが。

時々、ヴィータがスバルに対し練習を激しくしたことがあったが、それは思い出した瞬間ではなく、振り払った瞬間である。

そして、夜の帳とほりが降りはじめたころ、午後の訓練が終わった。座りながらクールダウンをするスバルとなのはたちは、ヴィータが一定距離を行ったり来たりしているのを見ながら、自分でもあなるだろう、しかし羨ましくもあると、どっちつかずの想いを張り巡らせる。

「待ってればいいんだっけ？」

「ん、お、おう」

予定は変わることなく夜は自由待機オフソフトになる。

ロビンから言われたことは、シャワーを浴びた後、寮の入り口で待機することだ。

ヴィータは入局当初の緊張とは全く違う緊張感で若干脚が震えていた。

そして、訓練場から寮へ向かい、言われたことを済ませ寮の外に出ると、

「こんばんは、ヴィータ三と、いえ、ヴィータさん」
「ども、です」

少し離れたところに黒のセダンが停車し、助手席からはロビンが、運転席からはジャニカが降りてきて、挨拶を済ます。ジャニカはデイナー用のダークスーツを着こなしているが、ロビンはドレス姿ではなく、局員規定の制服だ。

「それでは、着替えましょうか」
「え、あ、でもあたし」
「ん、5着持ってきた。サイズは合うはずだ」

一式全部ある。と、ジャケットを脱いだジャニカが各種ケースを運んでくる。

「サイズはネコが教えてくれました。彼は見るだけでおおよその採寸を取ることが可能ですから」

そのおおよその差分率はあえて言いはしなかった。
ジャニカとロビンはヴィータの部屋へ赴き、ケースを置く。

「レディ・ヴィータは別として、あんたはどうあがこうとも変わらないのだから、努力はするなよ」
「くだいという言葉が最も似合わないのはネコくらいのものね。早く出ていきなさい、ジャン」

返事をする間もなく、ドアは閉まった。

「えと、あの」

「さて、それでは、全て脱いで頂きましょうか？」

「あ、はい……って、はい？」

公衆浴場で、人前で脱げたのは用途が入浴なので恥ずかしくはない。だが、何故だろうか、同性でも着替えの為に服を ましてや下着まで 脱ぐのは、どうしようも無く恥ずかしいことに今気が付いた。付け加えるなら、それをじっと見られているのだ。

ヴィータは耐えきれなくなり、おずおずと口を開くと

「向こうを向いてもらって、い、いいですか？」

「それが一般的な反応ね」

さも当然というようにロビンは切りかえす。まるで、そついわれるかを待っていたかのような反応である。

「も、もしかして、かしら 擲擲かしらつて、ます？」

制服を脱ぎ、シャツに手をかけ、前ボタンを中ごろまで外してから、彼女ははたりと気付き、すらりと背の高いロビンを見上げる。彼女と目が合うと、相手は左手人差し指を口元に、片目を瞑りながら、

「それは秘密」

コタロウのような感情を見せない表情で応えた。

そして、後ろを向き、取り揃えた品をケースから出し始めた。

「貴女の紅あかの似合い具合は、言わずもがなね」

緊張の為か、ヴィータは自分の着る下着、ドレス、ヒール、ドレスグロープに至るまで、寸分たがわずぴったりなサイズであることに違和感を感じることはなく、それを告げた人物のことなど頭の隅にも残らなかった。

第26話 『指を口元に、片目を瞑り』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

もう、なんといいですか。
ご都合主義ですみません。

ヴィータさんをアグスタに連れて行きたかったんです。
（ホテルに連れて行くななんてかくと、なんか卑猥）

どのように、ヴィータだけを連れていくかを考えたのですが、私の
ような矮小な頭脳ではこれが精一杯です。

ちなみに、シグナムはフェイトたちの付き添いです。

さて、ザフィーラの活躍がほぼ皆無であることに気付いた、私です
が、

それは置いておきまして、

今回は『ヴィータさん、ホテルへ行く』編です。

予定としましては、次話で終わらせるつもりです。

はい。アグスタで行われたオークションですが、管理局配下でもな
ければホテル配下でもない事にしました。

オークションは競売ですから、国にちかい人たちが運営するはずは

ないと踏んでいます。
でなければフェイトの口から『密輸』なんて言葉は出ないはずですから。

ほぼ一カ月ぶりに書きましたが、いかがでしたでしょうか？

『違和感あります！』

なんて方がいらっしゃれば、私は両膝ついて謝ります。

そして、戻せるようになるだけ頑張ります。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘、お待ちしております！

以下、謝辞と解説をしていきます。

イツキさん

笑い顔の猫さん

高橋さん

グラムサイト2さん

庚さん

上条信者さん

月奏さん

景雅さん

えんヴいさん

88式紙製装甲車さん

神崎さん

感想ありがとうございました！

前は一区切りであったせいか

多くの方々からご感想をいただきました。

大変励みになり、感激でありました。

私自身感想書き無精であるため、感想を頂けるだけで幸福このうえ
で無いことでございます。

本当にありがとうございました。

解説コーナー

離し立てる：はやしたてる

冷やかすことです。

憚らない：はばからない

「憚る」でためらう、とか遠慮するといふ意味ですのでその逆で
すね

噤む：つくむ

口を閉じる

夜の帳：よるのとぼり

夜になるといいいですね。 歌の歌詞でも有名ですね。

第27話 『それは秘密』(前書き)

ヴィータさん、お食事会へ行く。その2です。

そうは言っても今回で終わりなので前後編の後編というところでしょうか。

オリジナル要素が続く今回ですが、よろしく願います。

第27話 『それは秘密』

六課の人たちが使用している寮にも数台のテーブルが用意されている休憩所がある。ここは就寝前の談話や自由待機オフシフトの時間潰しに利用されていたりするのだ。

スバルたちは着替えを済ませた後、隊舎の食堂へ揃って移動しようとして休憩所を横切ろうとしたとき、見覚えの無い臙脂色えんじの髪が自分の視界ぎりぎりに入った。いつもないものがそこにあると違和感を覚えるのは大抵の人間で、スバルたちも不思議に思い、そちらを向く。

「ん、顔だけでなく、身体もこちらを向けてくれると嬉しいね」

『し、失れ』

「敬礼は結構。今日は『公』ではなく、『私』で来ているのだから」

制服を着なければ、30手前の若造にしか見えんよ。と、新人たちを窘めるたしな。

ジャニカはシャツの袖を2、3度捲くっており、脚を組んで、ポケットに入るくらいの本を読んでいる。スバルたちが身体を向けると、そこで初めてスバルたちのほうに視線を上げて、本を閉じた。

「揃って、夕食かい？」

『はい』

「もし、急がないのであれば、暇つぶしに付き合っ頂けるかな？」

「謝礼もだそう」

「それは構いませんが、謝礼は、その、結構です」

ティアナの言葉に皆が頷いて、ジャニカの傍まで近付くと、彼は柔和に席を促し、席に着く。

ジャニカの暇つぶしであるスバルたちとの会話は、コタロウという話題を出さない六課での仕事内容であった。「情報機密を話さないよう言葉を選ぶように」とジャニカは新人たちの話術の難易度を上げ、それぞれの難度にあった質問を、ティアナを筆頭に質問をしていった。

ただ、

「さて、新人唯一の男性エリオ・モンディアル君」

「は、はい！」

「周りが女性ばかりで、モヤモヤしないかい？」

「モ、モヤモヤッ!？」

エリオに限っては、分野の違う質問をにやにや口の端を上げて質問をする。

ひくつと肩を上げて一歩二歩を後ずさり、腕の何処に収めてよいかも分からないといった様子で、わたわたと挙動するエリオの顔は熱気に当てられたように赤面した。

「え、いや、あの」

エリオより年上のスバルとティアナは一瞬ぽかんとしたものの、興味本位からか、あえて笑顔がでないように、不思議な顔をするキヤロを同じ表情を装い、エリオの顔を覗き込む。

そのうち、ジャニカは堪えきれなくなったとばかりにクツクツ笑い出し、

「ひとまず、その表情は『羞恥』からくるものとしておこうか」

「……ひ、ひとまず、じゃ、ないです。本当に」

「まあ、質問が不明瞭の場合、解釈の仕方は色々あるな」

エリオは『よからぬこと』からではなく、『羞恥』から来ることを小さくもはつきりと答え、ジャニカはおどけるそぶりなく、目を細める。

「大抵の場合、嘘が上手いのは『女性』だ」

スバルとティアナは挑戦的な目を向けられて、じとりと汗をかいた。先程までとは表情も違い、乾いた笑いをしてエリオからジャニカへ視線を移す。

「質問が不明瞭な場合は、素直に『仰おしこっている意味がわかりません』と返しなさい」

「……あつ、はい！」

話の内容は変わっても、話術の難易度は変わらず少し高めだ。上官からの質問に戸惑うことなく答える技術が管理局にいる限り必要であることを説明すると、ジャニカはエリオに再度同じ質問を投げかける。

「お、仰っている意味がわかりません」

「ふむ……『周りが女性ばかりで、相手の無自覚な発言で戸惑ったりしないかい？』と言えばわかるかな？」

「はい。あの……時々あります」

「結構！」

手を招いてエリオが顔を近づけるのを待ち、手の届く範囲になってから頭を撫でた。

「正直や誠実を履き違えてはいけない。質問に常に正直に応えてしまつと、よからぬ結果を招きかねない。どの答えにもなりえる問いが仕儀（おかし）に至らぬよう、予防線を張り巡らさなければ」

「あ、ありがとうございます」

暇つぶしでお礼を言われることになるとはね。と、最後にエリオの頭をぼんぼんと軽く叩いてイスの背凭（せもた）れに寄りかかる。

そして、ジャニカは鈍く光る銀色の腕時計で時間を確認し、「そろそろか」と声を漏らした。

「良い暇つぶしになった。どうもありがとうございます」

『こちらこそ、大変勉強になりました』

口々にスバルたちはジャニカにお礼を言うと、彼はそれを気にする様子も無くひらひらと手を振る。彼にとっては本当に暇つぶしでしかないのだ。大学で教授する良い練習になったくらいしか彼は考えていない。

「では、暇つぶしになってくれた礼を受け取ってもらおうかな？」

「あの、先程も申し上げましたが」

「なあに、金銭的なものは一切掛かってない。ちょっとした、驚嘆サブライヌ・プレゼントする贈り物さ」

『……え？』

ジャニカはもったいぶるように通路側を向くのに従って、スバルたちもそれに誘われるように彼に倣う。休憩所と通路の間にはスバルたちがジャニカに気付いたことからわかるようにドアというものには備え付けられていない。そのため、人の足音は良く聴こえ、今回も誰かがこちらに向かって歩いてくるコツコツという靴音がスバルたちの耳に入ってきた。

「ジャン、用意できたよ」

「ん、良く着こなせてるぞ」

『……う、わ』

特徴ある寝ぼけ目から彼がコタロウということはすぐにわかった

が、普段寝癖ともとれる髪は適度な整髪料によって後ろへウェーヴがかかり、僅かに前にかかる髪とその目の調和からは、一瞬彼と認識することができなかった。スバルたちの誰一人として彼のこんな^{ヘアスタイル}髪型を見たことがない。

最近気付いたことであるが、彼は身長が男性の平均よりは低い自分たちよりは高い。制服の場合は底の高い靴を履き、訓練時はブーツで彼とは離れて訓練を行なうため、なのは共々気が付かなかったのだ。これには彼への興味も付加されており、初めは驚くくらいだったのだが、ここ数日からは彼自身への関心も湧いている。だから、自分たちより背の高い男性が見事にダークスーツを着こなしているのには息を呑む以外の行動を認めさせてくれそうになかった。

「コ、コタロウさん、格好いいです」

「ありがとうございます、モンディアル三等陸士」

エリオがかるうじて出せた言葉に、スバルたちは無言でうなづく。それに応じて行なう彼の会釈もまた落ち着いたもので、普段の振る舞いがそのまま応用されていた。エリオを含む全員の頬が僅かに染まり、彼らを緊張させる。

「ロビンとヴィータ三等空尉は、まだ時間かかりそう？」

「そうだな、もう少しかかるかもな」

コタロウが確かめるように左腕を握るのを見て、先程まではしていなかった義手をしていることに気付く。近くの席に着いたところで、やっとスバルたちは呼吸と思考をする余裕が出てきた。

「男なのに『たおやか』という言葉が似合っただろっ?」

言葉の意味は曖昧でもジャニカが言わんとしていることは容易に解釈することができ、また彼らは無言で頷く。

「謝礼はこれだけではない……」

そして、先程と同じようにスバルたちの反応を楽しむような笑顔
をジャニカは見せ、

「親愛なる上官、レディ・ヴィータのドレス姿を見たくはないかね

」?

『……………』

もう一度、彼らの呼吸と思考を削ぎ落とそうとする。

実のところ、彼は隊長陣　ヴィータを除く　にも同じ言葉を
念話で送っていた。

コ

第27話

『それは秘密』

ヴァイスの操縦するヘリから降りたはやてとリインは、ジャニカからの念話を聞きとったところから、どうやらまだ出発はしていないようだ、少し早足で階段を下り、寮へと急いだ。ヴァイスも急いでヘリを止め、彼女の後を追う。

寮の入り口近くには黒のセダンが留めてあり、ジャニカと新人たち、シャマルとシャリオ、そして1人見覚えの無い男性が遠目に見えた。シャマルとシャリオはその男性について少し戸惑っているように見える。

その理由は、はっきり彼らに近づいたときに明らかになった。

『コ、タロウ、さん？』

「はい」

「お、例外漏れることないその反応。ネコが六課内で全く関心がない人物ではないことがわかるな」

はやてたちは、その男がコタロウと分かった瞬間に目を見開き、その後すぐにたじろいで半歩後退する。リインが先程のエリオの言葉を漏らすと、コタロウはその時と同じように返し、彼女たちを緊張させる。ジャニカの言ったとおり、シャマル、シャリオを含め、

全員がエリオたちと同じ反応をしたようだ。

「若い人間は本当に偏見が少ない」

ジャニカはコタロウの話題を一切出さなくても、彼がこの課でどのような扱いを受けているのかが手に取るようにわかった。彼の普段の暮らしぶりも同様である。

リンは彼の周りを螺旋を描くように飛び、無言で万歳をしたり、ふむふむと頷いていたりしていた。

「一見、執事バトラーにも見えるが、紳士ジェントルマンの風格だろう」

「はいですう！」

この風格は出せないとはかりに、ジャニカ自身も頷く。彼の場合、押さえつけてもある程度の威圧感がにじみ出でてしまい、鷹揚おつやうに構えることが難しい。年を重ねればそれなりに身につけることができるが、彼はまだそれほど重ねてはいない。

「そろそろ、か」

車に乗り込み、エンジンをかける。

全員がその言葉に、やっと入場を許された観客のような緊張感を覚え、息をのむ。はやてはつい先日、同ホテルでドレスを着る機会があった。しかし、それは警備目的であり、食事も無ければ、エス

コートしてくれる人もいなかった。

そう思うと、やはり羨ましいと思ってしまう。

そして、その対象がロビンに導かれ、寮のドアをくぐってやってきた。

「……………」

「な、なんで、お前等」

「いい？ 我慢も秘密と同等に女性の美德のうちの1つよ？」

頬を染めながら歩く彼女は身長という外見を加味しても、もはや、少女と見紛うことができない姿であった。

ヴィータの着こなしているドレスは、彼女の髪よりも濃く彩られ、歩調に合わせて微かに光る、細身を強調したものとなっており、彼女にしとやかさを与えている。靴もそれに合わせた色で、いつも履いているそれよりヒールは高いが、ロビンが事前に歩行を教えたのだろうか、歩く彼女にぎこちなさはない。肩にかかる透明度の高いストールは彼女に幽玄を与え、特徴とも言える赤い髪は、三つ編みが解かれ、緩やかなウェーブを描きながら彼女の性別を決定付けていた。

彼女に『可愛い』という表現は最も似合い難く、

『綺麗』

自覚なく相応しい言葉を六課の面々にはかせた。

おそらく、この周りの空気に圧倒されていないのは、慣れているトラガホルン夫妻と、この空気をなんとも思わないコタロウ、そし

てコタロウを見て驚いたヴィータのみである。

「お前、それ」

「ほら、コタロウ」

ジャニカは驚いているヴィータを遮り、コタロウに合図を送ると、彼は正面にいる彼女に一步近づいて、右手で相手の髪を僅かにかき上げ、耳元で、

「大変お似合いですよ、レディ・ヴィータ？」

「ひうっ！」

と、囁きかけた。コタロウが相互で制服を着ていない時に口調が変わるのは知っていても、彼の言葉は彼女の目を泳がせ、熱をもつ一度跳ね上げようとする。

しかし、ヴィータは一度瞬きをした後、コタロウを正面からおつとりとした薄目で見つめ、僅かに微笑みながら、

「貴方も大変お似合いですよ、ミスター・カギネ？」

「お褒めに預かり、光栄でございます」

着替えている最中に、ロビンに教えられたことをそのまま返して、自制を取り戻した。

『（ええー！？ なにその紳士淑女の遣り取り！）』

周りは完全に、取り残された。

「シャマル、どう思う？」

「もう、今夜の夕食は私を作るしか……」

「うん。動揺してるのはよく分かった。次いで言うと、作らなくてええからな？」

「一体私たちがいない間に何があったんですか？」

シャマルが相当動揺しているのがわかると、ラインがスバルたちに呼びかける。

「い、いえ……」

「私たちも何がなんだか」

「僕はジャニカさんとお話したくらいで」

「あつたとすれば、ヴィータ副隊長が着替えている間にロビンさんが……」

自分たちがいた限りでは何もなかったことを話す。寧ろ、自分たちも驚いたくらいなのだ。

そうしている間にも、ジャニカはロビンを後部座席へ促した後、運転席に座り込み、

「貴女もどうぞ」

「お、おう。あ、いや、ありがとう」

コタロウもヴィータを同様に促して、助手席に座る。

「そうだ、1つ教えておこつ」

「な、なんででしょうか？」

車の窓を開き、近くにいるはやてに笑いかける。

「女性のエスコートは、ネコには既に教え済みだ」

「え？ はあ」

他の女性でも同じ対応を取るぞ？ というジャニカの思いは、はやてには届かず、

「それより、あの、うちのヴィータは無事に帰ってきますやるか？」

変わりすぎたヴィータに内心はやては心配になり、正しいかもわからない質問をジャニカに投げた。

その質問に彼は口の端を吊り上げながら、人差し指を口元に、片目を瞑り、

「それは秘密」

アクセルを踏んで、車をホテル・アグスタへ走らせた。

車内でヴィータはロビンから『演じる』ということを知った。だが、それはヴィータが入局当初に覚えた不快を表すものの1つで、人間が自分の信念を曲げて上官に媚び諂う行為は、普段彼女の周りにはいる人間の顔をも歪ませた。この時も、ヴィータは真っ直ぐロビンに、

「『演じる』というのは好きじゃ無エ、です」

と、言い切った。ロビンは訥々とその理由を話す彼女に耳を傾け、

打ち明けた後、視線を逸らそうとするヴィータの膝の上にちょこんと置かれている小さな握り拳こぶしの上にそっと手を添えて、

「貴女は本当に良い方々に恵まれているのね」

逸らすことを許さない。

「それは普段貴女が、良い環境にいるために感じる違和感にすぎないわ。でも、もし自分に幅を持たせるものがそこにあるなら、自分を成長させる機会がそこにあるのなら、演じる価値はあると思いますよ？ 貴女はもう、上に立つ人間なのですから、善し悪しは自分で決められるはずですよ」

自分の判断力をもって、メリツトのあるモノを吸収してく人間であると彼女は言う。そして、媚び諂う人間に目を向け、思考を深くする必要があるかと問う。答えが既に見えている問いは、ヴィータに自信を付け、評価される言葉は彼女の心を改めさせた。

だが、いざ演じるということを決めても、ホテルに着いてトラガホルン夫妻が注目を集めだすと、ヴィータとコタロウも集めている。ぐるぐると目を回しそうになった。

ホテル・アグスタは土地そのものも買い取っているホテルで、レストランもいくつかのグレードに分かれている。その中でも、今回予約しているレストランは余程の幸運に恵まれない限り、最低でも1カ月は待たされるところで、席に付いている人たちは、相応の人であることが見た目から判断できた。

今回はコースとしての料理は頼んでおらず、一品一品自分で選ぶ形式の『ア・ラ・カルト』を夫妻は採用しており、ウェイタにリストからメインディッシュを中心に小前菜、アミューズブッシュネードフル前菜、スープ、口直し、デザート、コーヒーを念話で懇切丁寧に促した。分からない事は素直にウェイターに聞くことも教える。

例えば、

「魚のほぅが好きなのですが、お勧めはありますか？」

といったごく単純なものだ。ロビンたちは何も言わず、ウェイターが常に微笑みを変えず説明していくのを聞き、ウェイターはコースを決めていく。途中、分からない事があつた時は、リストを手にしている薬指をピクリを動かし、念話で伝え、疑問を回収していった。全ての料理を頼み終わり、トラガホルン夫妻が無言で頷くを見て、初めて緊張が解け、念話の利用性を再確認した。

「それでは、お飲み物はいかがなさいますか？」

「白を2つ」

これは、ジャニカが決めることになっていたので、一言で済まし、ウェイターは引き下がる。

緊張は解けたものの、ウィータは体格と違って年齢的には問題なくともはやてがまだ未成年ということもあり、お酒なんか口にしたことがなかった。

それにテレビで見たこともあるが、こう言った時は、「」の何年物」などと頼むのではなかったか。と、首を傾げる。

そうこう考えているあいだにウェイターは1本のボトルを両手で持ってきて、女性であるロビン、ウィータからグラスに飲み物を注いだ。

透き通るような白さだ。

「貴女からどうぞ」

「あの、あたし」

「いいから、一口」

一応、形式を組み軽くグラスを掲げるも遠慮を示し、グラスを置こうとするが、ジャニカは何も気にすることはないといった様子で飲むことを勧める。

しかたなく礼節として受け入れ、少量口に含むと瞳がわずかに動いた。

「……これ、葡萄ジュース？」

「葡萄酒のほうがよかったかい？」

ふるふると首を振る。なるほど、これなら年式は関係ない。

「ホテルは私たちが今日、何で来ているか知っているのさ」

ヴィータはすぐ後ろに構えているウェイターと目を合わせると、軽く会釈を返された。ホテルそのものが、1人の人間のように連携が取れ、一体となり動いている。

ロビン曰く、

「集団が大きくなればなるほど、同じ方向を向き、意思疎通をとれていることが要求されるわ。これを勘違いすると、個性を無視したものになりえるけれど」

というものであった。

「付け加えるなら、私たちに快く楽しんでもらいたいのよ」

ヴィータに続き、彼女も白葡萄ジュースで喉を潤わせた。

そこから先は、ドラマで見るとような展開が本当に起こり、ヴィータを驚かせるものばかりであった。

グラスを口に付けるのもそうであるが、料理を口にするにも女性

が優先されるレディ・ファースト。聞くところによると、現在は行なわれていないが、女性が席を立ち、座りなおす際には一度男性も立ちあがり、女性が座るまで待つということもかつてあったという。緊張の為、最初のうちは味がよくわからなかった料理も、ジャニカからテーブルマナーを教えられつつ、

「あまりマナーに拘りすぎないこと」

と助言も受けると、段々と心に余裕が出てきて、どの料理も素晴らしいと感じることができた。

また、何処で分かったのか、コタロウには片手でも簡単に食べることができるよう、料理が既に分けられて出てきたのにも彼女を驚かせた。

「事前にあたしたちの情報をホテルに話しているんじゃないですよね？」

「そう思うのも仕方がない。だが、グレードの高いホテルは何も、料理が豪華なわけじゃない。優秀な人間が多くいるのさ」
「大切なのは引き抜いたのではなく、育て上げたことよ」

葡萄ジュースを口にしながら、ジャニカとロビンは互いに睨みあう。

そして、この夫婦である。交差する言葉は常に皮肉に皮肉を重ね、いがみ合っているようにしか見えないのにも関わらず、彼は一度もレディ・ファーストを破ることはない。まわりは守らない人間が少なくない。

「追加のデザートで、パイを御馳走してやろうか」

「さて、そんな粗末なパイと食べるのは、はたして私なのかしらね？」

デザートなんだから全員食べればいいんじゃないのか？ と不思議に思うヴィータは念話でコタロウに聞くと、実際に食べるわけはありません。と夫婦のやり取りを見届けながら答える。

「粗末なパイを食べる (eat・humble・pie)

は『平謝りする』という意味ですよ。なので、負けを認めさせてやる。という歓談の合図になるかな」

「それは、喧嘩開戦の合図なんじゃないか？」

「『そう見える時もある』と、ジャンとロビンは言いますね」

レストランだからか、自分たちのテーブル内にしか聞こえない声で話すも、ヴィータからしてみればやはり喧嘩をしているようにしか見えないやり取りが続いた。

「ジャンの出版した参考書は穴だらけのチーズ以外の何物でもない」

だとか、

「ロビンの出演した民俗学講義のテレビ視聴率は、かつてない程最低なものだったそうじゃないか」

といった口論だ。ヴィータの知らない知識が飛び交い、その特殊な言い回しは彼女を感心させる。分からないときはコタロウに聞けば、その慣用語の意味を教えてくれるのだ。この夫婦の言葉の応酬も夫婦なりの愛情表現に見えてくる。

そして、この遣り取りも緩やかに終着すると、話題は六課の話になり、ヴィータやコタロウが今日までの生活を料理を楽しみながら、談笑を交えた。もちろんコタロウが笑うことはなかったが。

途中、コタロウが席から離れたとき、ヴィータがうちのシャマルとリインにやけに気にいられていると話すと、

「コタロウ このような場ではネコとは呼ばない に女性が、
ねえ」

「それは恋愛対象をしかしら？」

「いえ、というよりは……」

「兄妹のようなもの？」

こくりと頷く。2人に懐かれているという表現のほうが似合つかもしれないと彼女は付け加える。体裁はあっても彼女たちは憚らないのだ。

「コタロウにとって良い刺激になるな」
「そうね」

2人とも満足そうにデザートを口に運んだ。

この夫妻はコタロウのことになると、手を取り合ったように協調し合うのも不思議なことである。ヴィータはこんなにも優秀な彼らが何故、コタロウとともにいるのかが気になった。

それにはまず、コタロウについて聞いてみようかと彼女は口を開く。

「コタロウは昔からあんな感じだったんですか？」

2人の手が止まった。

しかし、止まったのは一瞬で、ジャニカが食後のコーヒーを要求し、ウェイターを遠ざける。

空気は重たくはない。ただ、そろそろと足元のつま先から何か冷たいものを感じ始めた。

『あんなものじゃなかった』

「……え？」

彼らの口調が変わり、講義をする教授のように話しかける。今までと違い、彼女を対等に扱わない話し方だ。

「ヴィータ三等空尉」

「は、はい……」

「時空管理局はとても過ごしやすいと思わないかい？」

漠然とした問いで、人間によっては肯定も否定もできる。
今度はロビンが口を開く。

「衣服、制服が支給され」

「食事は食堂、あるいは自販で買うことができ」

「住まいも管理局配下の住居、もしくは寮が与えられる」

「そして、他に欲しいものがあれば、ネットワークを使って取り寄せることができる」

管理局は衣食住が完備され、生活に事欠かないことを告げる。

改めて考えるとそうだと思う。管理局は所属よつては辛く、（つら） 艱難（かんなん）な部分はあるが、勤務意欲を向上させる福利厚生は割と万全で、志（しんぎ）とは別として、安定性を求めて入局する人たちもいるくらいである。生活面だけを考えれば、かなり恵まれていると思う。

「はい。そういう意味では過ごしやすいと思います」

ヴィータは最初の質問に頷いた。
ジャニカとロビンも頷く。

『そう、特に会話をすることなく、生活することができる（わね）』

『……会話を、すること、なく？』

気付けば足元にあつた冷気は膝下まで感じるようになった。これはトラガホルン夫妻が出したものではない。自分の発言が招き寄せたのだ。

『コタロウは俺（私）たちと会うまで、会話をしたことがない』

一瞬、彼らの言葉がすんなり耳に入つてこなかった。

周りの時間は短くとも、彼女自身は多くの時間をかけたような感覚で言葉を理解し、

「……え……いや、うー」

「私たちに話すような話し方は3カ月かかったわ」

「それが身に付いているのに気付くまで、さらに1カ月」

『うそ』と言おうとするヴィータの言葉を遮り、彼の言葉遣いを習得した期間を話す。ジャニカが自身を『俺』と言ったことに彼女は気付かなかつた。

確かに、言葉遣いというのは会話の中、或いは教えられることによつて身に付き、使うことができる。嬰兒は、育てる人、大人たちの会話を聞きとることによつて言葉を身につけることができるのだが、それはおかしい。彼は大人だ。彼らに出会うまでに会話をしていないわけがない。現に普段畏ま^{かし}つてはいるが、会話は成立している。

ヴィータは思考の為に引いた顎を上げると、

「グイータ三等空尉は上官の命令に頷くとき、その遣り取りを『会話』とするかい？」

「或いは、上官に報告するときの遣り取りを『会話』としますか？」
「……………」

2人に遮られるも、その質問に即座に応えることができなかった。命令を受け取る人間は相手が上官である限り、感情なく頷くしかない。そうしなければ、それこそ『言う事を聞かない部下』^{やっ}、使えない』というレッテルを貼られかねない。

報告も同様であり、事実のみを話す場であつて、私情を話すものではない。

命令や報告に私情を挟むものであれば、それが解^ほれとなり、冷静を欠いた歪んだ結果を招きかねない。

命令や報告に感情を挟まないのが、物事を円滑に進める大前提である。

だが、もし命令や報告に感情が入り、なおかつそれで物事が円滑に進めることができる場合があるとすれば、それは両者間に信用、信頼が成立しているときだ。

グイータは寒気を覚えながら、彼らの言う『会話』というものが自分の感情や思いを乗せたものであることが分かると、嫌な考えが脳裏をよぎる。

容易に想像できるのだ。あの寝ぼけ眼の男がどこかの管理世界で命令に反抗することなく頷き作業に取り掛かる姿を、完了後に報告を行ない信頼を築く間もなく次の現場へ出向される姿を、今日までの彼を見て違和感なく想像できる。

そうすると、意識しないのに思考が彼女の中を占領し始める。

(待て、よ。コタロウの入局はなのと同じ、9歳の頃……9歳の頃、から、そんな命令に頷き、報告をして、また、次の現場へ行く？ いや、あいつがジャニカさんやロビンさんと出会ったのは何時だ？ いやいや、何時からあいつはこの人たちと親しくなったんだ？ いやいやいや！ 何時までコタロウはそんな暮らしをしてたんだ？ 入局前は？ 待て……そもそも、あいつの家族や他の仲間、友達、は？)

しかし、隣でイスの引かれる音がしたところで、催眠術が解けたように我に返った。

驚くようなしぐさでコタロウを見るヴィータが、すこし顔を歪ませていたので不思議に思い、彼は訊ねる。

「ジャン、僕がいない間にどんなことを話したの？」

「ん、コタロウにとっては何でもない事さ」

「何でもなく……」

思わず席を立って、声を張り上げそうになるが、言葉も出なければ立ちあがることもできなかつた。

彼女は気付いたのだ。

(……そっか、コタロウにとっては何でもない、そんなことは当たり前で、普通のことなんだ)

ヴィータは苦いものが好きではないにもかかわらず、コーヒーの苦さが気にならなかったことに疑問なんて湧くはずもなかった。

現在、トラガホルン夫妻に連れられて、星と月が明かりの代表を担う海岸線を歩いている。夫婦とは海を正面に右を、コタロウとヴィータは左をとペアで別れて十数分ほど散歩をするというものだ。

海岸線といっても砂浜を歩くのではなく、沿岸遊歩道であり、ロビン、ヴィータの足を痛めない程度の道である。

ヴィータは腕を絡めているコタロウとは視線を合わせず、先ほどの考えを聞いてしまおうかと思う。だが、それは本当にコタロウのことについて深く知りたいのか、ただの興味本位からなのかが分からない。下唇を微かに噛む。

それに、自分については何も話していない。過去に自分が、いや、ヴォルケンリッターである自分たちが起こしたこと、誰と出会い、誰と別れ、誰とともに歩んできたかを彼に話していない。それ以前に、話してよいのかどうかも分からない。

しかし、彼について知りたいのも事実だ。

それは彼の未成年時代ではなく、

「コタロウは、さ」

「うん？」

「今日、楽しかったか？」

今日という日が楽しかったのかが気になった。トラガホルン夫妻はいうまでもなく、自分と居てどうだったか？ という意味を含んでいる。

「はい。楽しかったですよ」

きっと彼にはそんなことは分からないし、今日は彼から誘ってきたのだからつまらないということはないはずであるが、それでもその返答は自分を安心させた。

「昨日はどうだ？」

「昨日は楽しかったです」

「一昨日は？」

「一昨日は楽しかったです」

そのまま六課に配属されてからは？ と聞こうと思つても返答に違和感を覚え、ヴィータはコタロウの顔を下からのぞきこんだ。

「そついつときは、『は』じゃなくて、『も』じゃないのか？ 『昨日も』、『昨日も』、だろ？」
「いいえ、『昨日は』、『昨日は』であってます」
「……何で」

時間的に既に折り返さなくてはならず、回れ右をして再び2人は歩き出す。ヴィータは彼から目を離さない。

「一昨日より昨日のほうが楽しかったから。『も』は等しい時に使うものですかね？」

「……………」

「だから、昨日より今日、『は』楽しかったし、今日より明日は楽しいと思ってるから」

寝ぼけ眼をより細める。

ヴィータは彼について知らないことが多いなか、ジャニカとロビンがレストランを出るときに念話で言ったことが間違いないことであると理解した。

「ネコは自分の考えをちゃんと持ってるし、感情が全くないわけじゃない」

「深層で眠っているに近い状態であると思うの」

「俺たちの命を助けてもらったお礼として いや、それはおこがましいな。親友としてやりたいだけだ」

「私たちが眠っている彼の感情を呼び起こし、引き摺りだして、表面、表情まで引き上げたいのよ」

「悲しさはネコの父親が教えた。嬉しさ、楽しさはこの俺」
「この私が見つけたわ」

よくもぬけぬけと。と、そこからまた口論が始まってしまったが、
今、夜道を歩く彼の無表情ながらも纏っている雰囲気は満足感以外の
何物でもなかった。

今度はコタロウのほうからヴィータに話しかける。

「ヴィータは レディは止めると車内で訂正させた 今日、楽しかったですか？」

心配というよりも寧ろ、疑問に近く、コタロウは首を傾げる。
彼から視線を逸らし正面を向いて考える彼女は、今日は夜からかなり色々なことがあったとひとつひとつ指を折る。

大変で、訓練以上に疲れたが、不思議とつまらなくはなかった。
ヴィータは頷き、彼を見上げると、

「それは秘密だ」

人差し指を口元にあてて、にこりと微笑んだ。

コタロウは、その仕草がその人自身を神秘的ミステリアスにすると夫妻から聞いていたので、

「なるほど」

と、それ以上は詮索はしなかった。

2人が正面を向いた先では、ちょうどジャンカとロビンも歩いてくるところであり、その後、彼らは六課まで送り届けてもらった。

六課の寮の近くまでくると、ロビンから、部屋にあるドレスは貴女のものだから、と断るヴィータに無理やり押し付けた。ここで、

「職権を乱用しようかしら？」

というのは卑怯だとヴィータは思ったが、結局、押し負けてしまった。

車を降りたあとは簡素なもので、会釈を交^かわすと、すぐに彼らは車を走らせた。

そして、部屋に戻ろうかと振り向くと、何処に隠れていたのか、

「ん、はやて？　なのは、フェイトまで」

『お、おかえり』

「ただいま」

「ただいま戻りました」

はやてたちとスバルたちが見に来ていた。

なのはとフェイトは、シャリオから出かける直後の彼らを映像で見せてもらっていたので、息を止めるほど驚きはしなかったが、それでも実物を見ると目を見張るほど驚きはする。

「スバルたちは寝なくて明日大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です」

全員、ヴィータが表情一つ変えることなく、当然のように彼の右腕に自分の腕を絡めているのを見て、彼女からの質問以上に言葉をかけられなかった。はやてたちでさえ、一步引いて彼らを見ている。

(なるほど、『演じる』ね)

レストランでは自身がなかった行動も、ここでははつきりと自覚をもって自分が演じているというものを俯瞰ふかんで見れた。

自分たちを思い思いに見るはやてたちを尻目に、ヴィータはコタロウに引かれ悠然と歩く。

ドアを通ったところで、やっとはやてが口を開いた。

「ヴィータ、コタロウさん、どうやったん？ その、食事は」

コタロウはヴィータが立ち止まるのを見計らって歩みを止め、彼

女が自分から離れはやてに振り返るのに合わせて、後ろを向く。ワ
ンテンポ彼女に遅れて動く彼もまた、レディ・ファーストを間違え
ない。

自分より身長の高い彼女が、右手人差し指を口元に当てるのを見
て、次にどんな言葉が彼女の口から出るのか容易に判断ができた。
彼も彼女に合わせ、同じ動作を取る。

そして、ヴィータの念話で疎通を図り、彼は彼女とほとんど同じ
タイミングで、こう言った。

『それは秘密です』

したり顔のヴィータもまた、コタロウがはやてたちに対し、どの
ような言葉遣いをするのかが分かっていたので、言葉をそろえるこ
とは簡単だった。

彼女はまた、彼らに背中を向けてコタロウの腕に絡み、

「今度はあたしから誘うから、しっかりエスコートしろよ、ネコ？」

彼は頷く。他にも、

「食べることも趣味にすることができそうだなあ、それには色々な
マナー作法を学ばねエと」

などと、独り言を吐きながら、服装指定なくいける美味しいお店

もあるのかなあ、と思考を巡らせる。

その背後を見送りながら、はやてはなのはとフェイトに視線を泳がせた。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、どないしよう？ ヴィータが遠いところに……」

『……う、うん』

2人は乾いた笑いしか返すことができず、彼女たちもまた、トラガホルン夫妻がヴィータに一体何をしたのか想像することはできなかった。

第27話 『それは秘密』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

さて、今回はオリジナルには関係の無い内容で、コタロウの過去をほのめかす内容となっております。

私の考えるヴィータは勘の働く頭の良い人間であると思います。なので、彼女が考えることがそのまま彼の過去を知る要素となっております。

- 1 . 彼が9歳ときから工機課で働いている。つまり、彼が入局する前は何をしていたのか？
- 2 . 彼がトラガホルン夫妻と出会ったのは何時なのか？
- 3 . 彼の家族や仲間、友達は何にしているのかいないのか？

このフラグは今のところ、詳細までは書かなくても、話の中では書いていこうかな？ と考えています。

以前も申し上げましたが、これはなのはたちが全く出てこなくなるので、書いてしまった方がいいのか悩んでいる次第です……

路線修正。

今回、重点を置いたのは、トラガホルン夫妻がヴィータにだけ、彼

がなぜあのような口調になったのかを話したことです。周りの環境が彼を作り上げました。

エリオやキャロはフェイトが親身になって心身ともに育て上げましたが、彼の場合は違います。工機課にいる彼は1人で出向先をまわり、1年で数回、多くて2ヶタになるほど色々な場所をまわります。そして、そのほとんどをもの言わない機械とともに過ごすのです。会話なんてなくても、衣食住のすべては管理局がサポートしているというのも重要です。便利ですよ？ 間接的な手続きで全てが手に入るんですから。

9歳から数えて16、7年、彼はそのようなところで働いていました。

頷き、報告の繰り返しです。つなぎを着て、帽子をかぶる無表情な彼に話しかける人物はいません。少なくともトラガホルン夫妻と出会うまでは……

彼らと出会うところは書きましようかね？（多分）

ジャニカが言った「俺らは命を救われた」というのが、コタロウと出会った時とだけいっておきましょう。

そして、彼が制服を着ないときに話すあの口調は、夫妻が教えたというより、引き摺りだしたというニュアンスが近いです。

洗脳しようとしているわけではないからです。

そうそう、ジャニカやロビンが『コタロウ』と呼んだり『ネコ』と呼んだりしていますね？ これは間違いではなく、わざとです。

これは立場を考えての使い分けです。

英語表現も混ぜてみました。

eat humble pie (粗末なパイを食べる) というのは作中の通り、『平謝りする』『屈辱に耐える』という意味になります。

慣用句です。

ちょっと使ってみたかったので使ってみました。

さてさて、後書きもこの辺にいたします。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞と用語解説になります。

高橋さん

グラムサイト2さん

イツキさん

上条信者さん

景雅さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

用語解説

嗜む：たしなむ

注意する。いましめる。

仕儀：しぎ

ことの成行き。主におもわしくない結果や事態のことです。

鷹揚：おうよう

おっとりとして上品なさま。

諂う：へつらう

人に気にいられるようにとる仕草。

訥々：とつとつ

口ごもりながら話すさま。

艱難：かんなん

困難にあい、苦しむこと。『艱難汝を玉にす』という有名な言葉がありますね。

嬰兒：みどりご えいじ

生まれたばかりの赤ん坊のことです。

俯瞰：ふかん

高いところから見下ろすこと。

第28話 『ネコの傘』(前書き)

今回のゲストはこの方です！

潦「……………」

……

……………すみませんでした

それでは本編をどうぞ〜

第28話 『ネコの傘』

ヴィータがドレスを着て食事へ行つた夜以降、はやてが懸念した少し近付きがたい女性に彼女がなってしまうのではないか、という考えは杞憂に終わった。

次の日は、普段通りの制服や訓練服を着ていたし、髪型は三つ編みで、新人たちを待つ姿は威風堂々としていたのだ。

「ただ、それを見てついぼろりと、『いつものヴィータ副隊長だ』と、スバルが発言したときは、いつもの下から睨みをきかせ、少し迫力をのせた嫌味を言う事はなく、

「ば〜か」

と、^{かしこ}揶揄うような、自慢するような雰囲気と半目で返した。

そんな想定していたかのようなヴィータの余裕ある態度は、今までの彼女ではまず考えられないことだった。

そして、彼女は新人たちだけでなく、なのはを含む隊長陣にも目を向けるようになったのだ。

ヴィータが言うには『その人だったらどう考えるのか？ って考えるのが楽しくなった』とのことで、なのはが教導プランを考えるのとは別に、自身で教導プランを立て、彼女に見せて、指示を仰いでいた。

「生徒が1人増えたみたい」

なのはの負担は増えはしたものの、ヴィータもしばらくスバルたちを見ていたのか、指摘は少なく、1週間もかからずになのはが任せられるくらいに成長し、結果を見れば彼女の負担を減らすことができた。

なのはたちから見ても、スバルたちから見ても、ヴィータが成長しているのは明らかであり、疑問に思うよりかは敬慕の念のほうが大きく上回った。

「成長、するものだな」

「……ん」

見回りに隊舎の通路を歩きながら、ぽつりと『剣の騎士』シグナムは呟くと、『盾の守護獣』ザフィーラは訝しんだ。

彼女は一度彼を目を合わせてから、また正面を向き、

「いや、私たちは多くの年月としつきを重ねてきたからな。プログラムである私がいうのもなんだが……人間性はある程度定まっているだろう

？」

「ああ」

そういうことかと、彼は頷く。

ヴィータの内面的成長は、はやての守護騎士ヴォルケンリッターからみれば、なのはたち以上に内心の対象になる。同じ時間、同じ意志、同じ環境を歩んできたのだ。そのなかで、ヴィータの意思が外を向き、人に関心

が及ぶというよりはかなり驚くものである。

「確かに驚くことではあるな」

彼に同調しシグナムは首肯する。

「カギネ三等陸士、か」

「シヤマルとリインも、あれだけ……その、なんだ、男性に懐くのも珍しい」

戦いにおける洞察に長け、それ以外の分野では疎いシグナム、ザフィーラにでもわかるくらい、2人は彼に懐いていた。

親密度というのは、切欠を通して突然深まるものと時間をかけて築くものとの大きく2つに分けられる。なのはやフェイトたちとは前者、管理局に入局してから出会った人間とは後者であるパターンが多かった。なのはたちは言わずもがなとして、入局後は言ってしまうば『公』としての付き合いが多く、『私』としての付き合いが少ないためだ。この六課自体は普段から『私』に近い付き合いはしていても、もともと身内繋がりがあることもあり、前線以外の一般スタッフとはそれほど仲良くはない。

稀有な立場であるコタロウ・カギネ三等陸士もそれに近い存在である。

だが、彼は入局後 六課設立後 に初めて会い、これといった大きな事件と一緒に関わったわけでもなく、突然リインたちと仲良くなっている。

(いや、彼がどう思っているかは分からないか)

最近はいータータも食事を切欠に彼と親密度を増し、彼を切欠に人間的に成長していた。その証拠に彼女もリンたちと同様に「ネコ」と彼を呼んでいる。

「そういえば、シャマルは何故彼と親しくなったのだ？」

「ん、それは出張任務で地球に訪れたときに……」

シグナムはその時いなかったザフィーラにその時の詳細を説明した。聞き終わった後、彼はコタロウの行動に驚きながらも納得する。シャマルの料理を全部食べたのだ。驚かないほうがおかしい。

しかし、シグナムやザフィーラは、彼女たちが仲良くなる切欠を知っていても、戦闘を交えずに突然意気投合することが数えるほどしかなかったために、どこことなく違和感を感じていた。

「あ、シグナムにザフィーラ」

「フェイトとシャリオか、調べものか？」

交差する通路の右手から長髪の女性2人があらわれる。

「はい。スカリエッティについての情報が何かないかと」

結局めぼしい情報は何もなかったとフェイトは息をつく。事件から彼を導き出すことはできても、彼から事件を導き出すことはできず、確証を得ることが困難であることを意味していた。

「でも、こんなことは当たり前だしね、根気が必要なんだ」
「殊勝なことだな」

彼女は頭を振って否定する。

執務官はそのようなことが大半なのだ。調べることに多くの比重をかける。確実性が欠ければ、もし行動を起こした時に関係の無い人にも被害が及ぶことが可能性がある。

「そうだ、お茶でも飲みませんか？ 休憩がてらに」
「うん。どう、シグナム？」

外から帰ってきたばかりのシャリオとフェイトが休憩を促そうとする。

「残念だが、私は見回り中で」
「行ってきて構わんど、私1人で十分だ」
「……そうか」

彼は隊舎の外に向かって、歩き出すのを目で追いながら、3人は

食堂へ足を運んで行った。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 　　困った時の機械ネコ
第28話 『ネコの傘』

「付き合ってやりたいのはやまやまなんだが、統率者ともなると身体が自由がきかなくてな。悪いが、無理だな」

まだちらほらと人がいる食堂の隅のほうで1人だけモニターを開き、トラガホルン夫妻と話しているコタロウがいた。

彼女たちは彼らのやり取りはよく聞きとることはできなかったが、最後のほうで、

「なら、六課むくちの彼らに頼むのはどうだ？」

という言葉が彼女たちの耳に入ったので少し気になった。通信が終わると紅茶を口にして、「ふむ」と考える彼に隣接する

テーブルにフェイトたちは座り、視線を彼に向ける。

別段、彼の行動におかしいところはない。だが、ヴィータとの食事を含む彼の今までの行動を考えると、どうも彼が六課内で起こす行動は、身内繋がりでないからか、それとも彼の性格故なのか、気になってしまい目についてしまう。それは一挙一動というものではなく、彼が主として動くとき、或いは彼の友達であるトラガホルン夫妻とともに行動をしているときに限定される。

先ほどの会話内容から察するに、彼が六課内の誰かの命令で動いていないことは明確であり、モニター先の人間が断ったことから、彼自ら行動を起こそうとしていると予想がつく。

「お願いするなら、シグナム二等空尉、か」

「……ん、私か？」

思わず彼の独り言に会話を成立させてしまった。

ぴくりと彼の体が反応する。彼女たちの座る隣接するテーブルは丁度彼の後ろに位置しており、彼の襟足がはねたようにも見えた。

『（あ、驚いてる）』

シヤリオはデバイス調整で、フェイトは訓練で彼と行動することが多く、六課内では彼に近い人間のうちに入っており、2人にとっては回り込んで見たい気もする。

おそろく、少し目を見開いたくらいだろうが。

「勝手なる貴官への発言、申し訳ありません」
「いや、構わない」

席を立ち、コタロウはシグナムに向かって敬礼を取る。
彼はどうやら考えが時々口に出てしまったりしいと思いつながら、彼女は敬礼を解かせ、顔を彼に向けずに視線を落とす。

「それで、私にお願いとは？」

「はい。この『傘^{デバイス}』の動作確認と試験運転のご協力をお願いしたく」

きらりとシャリオの眼鏡が光るなか、シグナムは彼の言葉に要領を得ることができず、詳細を伺うと、端的に言えば、

「……私がカギネ三士と実戦、いや高町教導官の言葉を借りるなら、模擬戦をするということか？」
「はい」

彼が言うには1年に数回、自分の最低限度の訓練も兼ねてデバイスの動作確認を行なうらしい。限定付武装局員資格　シャリオが以前調べたところによると、資格試験自体は数年前に廃止されたが、所持している分には有効な資格　を所持する彼は限定付きといえども武装局員であることは変わらず、緊急時に武装局員として出撃をしなければならぬ。

「つまり、いざというときは強制的に戦闘に駆り出されるといって
とですか？」

「いいえ。自衛の範囲内です」

現在の武装局員資格は一定の魔力を保有し訓練校を卒業した者
のみ任命される資格である。これは、基準となる魔力を有してい
ない人間は武装局員になれないという、ある種、個人の夢を打ち砕く
決まりであるが、管理局の考えとしては魔力を有していない人間を
戦闘に出し、命を落とす結果に至らせない為というものであり、人
命を守るという意味を持っている。

これが管理局の人材不足を加速させているが、それは余談として、
昔を省みると、まだ管理局システムが安定していない頃にできた資
格であり、今の管理局の考えにそぐわない資格であることは言うま
でもなかった。限定付武装局員資格は最低限度デバイスを動作でき
る魔力を保有していれば取得できる資格なのだ。

「自衛でもかなり危険かと。返上、しないんですか？」

「工機課内で魔力を保有しているのは私だけなのです。修理する人
間として手を抜くことはできません」

総合的に武装局員が自衛もするため、返上を局は推奨している。
しかし、そこは自身の立場を自覚しているのか返上することはない
と彼は言い切った。

「……それで、何故私なのだ？ 私に限らなくてもいい話だろう？」

「他の方々は新人たちの教育を重視していますので、シグナム二等

空尉の書類作業を微力ながら私も手伝い、空いた時間を動作確認に割っていたかどうかと」

ふむ。とシグナムは顎を引く。微力ながらというのが謙遜以外の何物でもないということは六課内の誰もが思う事である。彼は考えで作成する論文のようなものはさておき、思考を伴わない報告書類は、隻腕にも関わらず六課内の誰よりも速い。

普段書類作成を苦手とする彼女にとってそれはまたとない機会ではあるが、裏を返せば楽をするというものにもなり、2つ返事をしようとして踏みとどまった。

それ以外にも懸念すべきものがあり、シグナムは直立しているコタロウを足先から頭上まで視線を動かす。

(魔力が低い)

彼に魔力で探りを入れてみると、彼の魔力は小さく、武装局員になれるほどの魔力を有していないことが分かる。『傘』であるデバイスで戦う限り、戦闘方法も特殊なものだろうと思うが、攻略し難いともいえず、かえって彼に怪我を負わせてしまう可能性があり、危険性の伴うものになってしまう。

戦闘が好きならシグナムはあるが、思い切り戦えない相手では精神的に負荷が多すぎてしまい、それが原因で溜まる疲労は避けたかった。

「その条件は魅力的だが、私には無理だ。手加減できそうにない」「わかりました……検討して頂き、ありがとうございます」

それだけで十分とばかりに、コタロウは頭を下げた。

「ふむ。テストロッサはどうなんだ？ 六課で加減ができるのは教導しているものたちぐらいだろう」

「いえ、先ほども言いましたが」

「私なら構いませんよ？ その、動作確認にかかる時間はどれくらいなんですか？」

「20分です」

「それくらいなら、なのはたちも大丈夫だと思う」

フェイトがそう言うのと彼は顎を引いて考える。ジャニカが誘導したこともあるだろう。真面目である半面、融通のきかない彼は内心納得したのか顔を上げた。

「それでは、お願いできますでしょうか？」

「はい。それで、いつになさいますか？」

「特に、そちらのご都合がよろしければいつでもかまいません」

それでは、と考えるフェイトの横から、はい！ と手を挙げているシャリオがいた。

子どもが元気に手を挙げているようである。

「シャーリー？」

「フェイトさんの予定、確認しました！ 明日のお昼前とかどうですか？ 私もその時間は空いてます！」

既に彼女の予定を確認しており、自分の予定ともあつ時間を割り出していた。

長く付き添ったフェイトにとって、彼女が何故こつも生き生きしているのか大体の予想がつく。

「コタロウさん！」

「はい」

シャリオは立ちあがって彼の正面まで来ると、手を合わせた。

「その『傘』を見せていただけませんか？ その、言うタイミングがなかなか無くて」

外見だけではなく、機能も色々と見てみたいと彼女は付け加えると、彼は特に考える様子もなく、

「それは構いません。それでは、傘を握ったらご自分の名前を仰ってください」

傘を抜き取り、傘に命令する。

「傘、オーソリゼーションレヴェル・シックス権限付与・6等級。どうぞ」
「シャリオ・フィニーノ」

人物認証したのか柄が光る。

「……あの、今のは？」

「権限付与です。6等級は1日閲覧、使用が可能です」
「使用？」

「フィニーノ一等陸士は魔力を保有していませんので、魔力を使用しない機能に限られますが、使用が可能です。設計書がデータで添付されていますので、ご覧になればよろしいかと」

コタロウは閲覧方法を教え、シャリオは頷く。これだけ見ても、権限を付与されればだれでも使用できる汎用性が持たれていることに目を輝かせた。

「分解もされますか？」

「……………」
「フィニーノ一等陸士？」

「あ、はい！ありがとうございます！ それでは、明日の朝にはご返却いたします」

一頻り傘を眺めた後、そそくさとカップを手にとり開発調整室へ

行ってしまった。

「徹夜するな、あれは」

「コタロウさん、シャーリーは、あの、結構のめり込みやすいコなので……」

「……はあ」

首を傾げている彼とは違い、フェイトとシグナムは半ば落ち着いた状態で休息の続きを楽しむことにした。

次の日、朝練の時に彼の特徴とも言える傘が腰に差さっていないのを見て、疑問を持つのは新人たちだけではなく、

「コタロウさん、傘、どうしたんですか？」

「フィニーノ一等陸士が拝見したいと仰っていましたので、お貸し

いたしました」

フェイトと模擬戦を昼前に行なう事を経緯も含めて話し、なのは
たちを感心させる。

「ネコさんの模擬戦かあ……どんな戦いをするんだらうね」

「正直、想像できないわね」

「あの傘で、ですよね」

一見、傘の形状から見ると、持ち方から剣のように見え、やはり
それを振って戦うのだからという予想がつく。

そこでふと、キャラがコタロウのデバイスに単純な疑問をもった。

「そういえば、コタロウさん。あの、デバイスには名前って無いん
ですか？」

「あります。ただ、傘のほう呼びやすいので、普段はそう呼んで
います」

『傘』は2文字で済みますから。と、付け加えるとスバルがいの
一番で口を開く。

「あの、自分の相棒パートナー何ですから、名前を呼んであげたほうがいいと
思います」

「いいえ、私にとっては自分の手足と同義なので、このままで問題

ありません」

自分の右腕に名前はないでしょう？ というように、コタロウは自分のデバイスを『傘』と言い切った。全員、彼の言い分は納得はしづらいが、理解はすることができたため、それ以上強要をするとはしなかったが、キャラはそれとは別にそのデバイスの名前が気になったので、彼に訊ねると、

「にわたすみ 潦という名前です」

「にわたすみ、ですか？」

「はい。『水たまり』という意味が含まれています」

傘と言えば雨、雨と言えば水たまりという意味だろうか？ と思うも、質問を投げすぎても失礼と感じキャラ達は心の中で完結させる。

「それに何か意味はあるのか？」

だが、ヴィータの考える真意は違うのか、躊躇することなく深く訊ねた。

「『水たまり』というのは、地上にたまりあらゆる方向に流れる水から『行方知らず』、ジャンとロビンは『神出鬼没』と皮肉りまし
たね」

全員、その意味の真意に関心を示すが、内心は、

『（確かに！）』

『神出鬼没』という彼の行動を表していることに深く深く頷いた。別に気付かないような行動をとっているわけではないが、彼の場合、行動次第で予測のつかないものになり得る。

実はもう一つ、自分が『迷子になりやすい』という二重の意味も含んでいるのだが、それは口には出さなかった。

朝練が終わり支度を整えて、食堂で各々が席に着いたとき、よろよろと程良く髪に癖のついたシャリオが、足取り重く歩いてくるのが見え、誰も座っていないテーブルに座り、ぐにやりと突っ伏すまでの一部始終を目で追う。

彼女は徹夜の1つや2つ軽くあしらってしまえる体力の持ち主であるはずなのに、今日に限っては徹夜1つで悄然しやうぜんしてしまった。

何事かと思い、フェイトが同席しようと席を移動すると、なのはたちも心配なのか彼女たちの周りに席に着く。

「シャーリー、大丈夫？」

「あ、はい。体力的にというより、精神的に、少し疲れただけです」

ヴィータが気を使って飲み物を出すと、1つお礼を言っただけで喉を潤した。

ヴァイスとコタロウは彼女たちから少し離れたところに座っており、1人は傍観し、寝ぼけ眼のほうはパンを口に押し込んでいる。

これ以上心配させてはいけないとシャーリオは周りに食事を促し、一応自分の声が聞こえる位置に移動してもらい、その間にはやてたちも食堂にきた。フェイトは口を開いた。

「それで、コタロウさんのデバイスは」

「やっぱり、スゴイのか？」

お腹に温かいものを入れたのかシャーリオは幾分落ち着いて、ヴィータのもはや決定事項であるような発言にこくりと頷く。彼女は手に持った傘をテーブルの上に置き、

「このデバイス、自作なんです」

「……それは見れば、わかるな」

当然のような発言に、はやては全員言葉を代弁する。

しかし、言わんとしていることが違うのか、シャーリオは首を振って否定した。

「このデバイス『療』にわたずみはミッドチルダ、古代、近代ベルカのデバイス規格のどれにも準じない、独自規格で作られています」
「ん、もう少し分かりやすく言ってくれますか？」
「あ、はい。デバイスっていうのは規格が統一されているんです。例えば、レイジングハートさんとバルディッシュさんたちミッドチルダの規格、グラーファイゼンさんとレヴァンティンさんたち古代ベルカの規格はそれぞれ統一されています」

魔法術式と勘違いしてしまうがそうではなく、作成時の時代で修理がしやすいよう、デバイス規格が統一されているという。より簡単にいえば、レイジングハートのパーツの幾つかはバルディッシュに流用でき、グラーファイゼンのパーツも同様にレヴァンティンに流用できるというものだ。その人にあつた使用者独自のデバイスではあるが、細かいところでは統一されている。

「車のエンジンはバイクに積めない……みたいなもんか？」
「はい。そのような感じですよ」

スバルとティアナは自分のデバイスを自作した時のことを思い出した。自分で設計し、パーツを買って、組み立てたのは今ではいい思い出である。

だからこそ、彼女たちは気付いた。

「もしかして」

「接合部品やパーツそのものが、自作……」

こくりと頷く。

「これは部品を組み立てて作ったのではなく、部品そのものから、部品と部品を結合する締結部品　ネジのようなもの　まで、全て自作なんです」

極論を言っしまえば、とシャリオは言葉を繋ぐ。

「ただの鉄から組み立てたようなものです。なので、私が知る規格のどれにも当てはまらず、なおかつ一カ所一カ所統一もされていないので、部分部分で違う工具を使わなければならないため、分解なんてできなかったんです」

『……………』

そう言って少し肩を下げる。フェイトは昨日コタロウが彼女に確認をとった理由が理解できた。あれは分解する工具を渡そうとしたのだろう。

「でも、逆に分解できたとしても元に戻せる自信なんてなかったんですか……………」

「えと、でも設計書、だっけ？ マニュアルみたいなものが一緒だったんだよね？ 機能自体は分かっただんじやない？」

自虐的なシャリオを見るのがいたたまれなくなり、フェイトは外装ではなく機能のほうへ話題を移そうと言葉をかける。

「あれは設計書という名の研究論文です」

傘の柄を持ち「傘、共有文書出力ライブラリ」と唱えると、1冊の電子書類が出てきた。

「この傘の設計者は当時一等陸尉だったロビン・ロマノワさんと、二等陸尉だったジャニカ・トラガホルンさんです」

この時点で彼らを知る人間はざわりと背骨に嫌なものが通り過ぎた。

「あの2人が『協力』してる時点で普通じゃねエな」

ヴィータはこれは早めにご飯を食べてしまおうと急いで口に頬張り、準備を整える間、シャリオはまた首を横に振る。

「協力なんかじゃありません。『敵対』です」

その書の題名を彼女は読み上げた。

「『傘（潦） 作成設計書 第23版』……つまりこれ、あの2人が1年11ヶ月かけて研究、検討してはお互いに粗あらを指摘し合い、研鑽に研鑽を重ね、練り直してさらに相手の不備を貪欲に追求し、書きあげられた設計書です」

実際の組み立ては1月、つまり作成に丸2年を要しています。とシヤリオは告げる。初対面時に彼がこの傘に2年かけたと言っていたのは、彼の技術的な遅延ではなく、設計の綿密化に要した時間であったのだ。

「はつきりいつて、理解することは私には無理です。デバイス作成以外の知識があまりにも多すぎます」

一度あの2人の対立を見たことがある人には容易に想像できた。研究面である口論を行ない、互いに負けじと練り上げるのだ。想像できないのはどんな結果になったかである。

「理論的のところはほとんど分かりませんが、機能概要はなんとか分かりますので……」

コタロウが次のサラダに取り掛かるうとするなか、ヴァイスは食事の手を止めて完全にシヤリオの言葉に耳を傾けていた。

「分かる範囲でお話しますね」

「ネコの傘にネコに傘からかさだろうな」

「ジヤンは6年前の自分をそこまで自賛できるものなのね？」

「おい、そのにやけた口元はどう説明するんだ、ロビン？」

第28話 『ネコの傘』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

初めに言っておきます。

そんなに凝ったデバイスではありませんので、

（固まってる部分もありますし……）

期待しない感じをお願いします。

そんなわけで、次回は傘こと潦の簡単な設定をお話します。

次回から説明くさい内容（厨二設定）がばさばさ出てきますので、

この場を借りて先に謝罪しておきます。

どうもすみません。

なるべく読みやすくできるよう尽力します。

これくらいは話しておきましょう。

権限付与ですが、これは以下の設定になっています。

0等級 全権限行使

1等級 使用

2等級 閲覧

- 3等級 1回機能追加
- 4等級
- 5等級 1回更新
- 6等級 1日使用、閲覧
- 7等級 1日閲覧
- 8等級 一定時間使用
- 9等級 一定時間閲覧

4等級に設定がないのは縁起が悪い為です。

0が最上位で、権限付与から権限破棄まで何でもできます。

ちなみに

0はコタロウが

1はトラガホルン夫妻が持っています。

残りは次回シャリオさんがあやふやながら答えてくれるでしょう。

868

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞と用語解説になります。

グラムサイト2さん

イツキさん

景雅さん

月兔さん

yukidaitさん

感想、および指摘、ありがとうございます！

用語解説

敬慕：けいぼ

ここから尊敬し、うやまつこと

悄然：しょうぜん

しょんぼり、元気がないこと

猫に傘：ねこにからかさ

びつくりすることです。ハトが豆鉄砲くらったよう。みたいなものです。

第29話 『季天鋏』（前書き）

ちよつと、前回と今回、副題が納得を得ないところでは。

それ以外は、特に……

ありましたありました！

副題からして、私の厨二設定駄々流しです。
それでは、本編をどうぞ

第29話 『季天鋏』

現在、コタロウの手を離れている傘『潦』^{にわたすみ}の形状は柄は感嘆符のように真つ直ぐだが、何処の角度からも握りやすいようきりもみ状の流線型をしている。そこから生える中棒は研磨されたばかりの光を放つ金属素材で形成され、これは他の骨の部分も統一されている。黒鳶色の生地を張る親骨は12本あり、開いたときは計算された様に美しいカーヴを描き、石突は片手で握れるくらいの長さである。

一般の人から見れば地味な傘にしか見えない。しかし、見る人が見れば、形の整った綺麗なものであった。

「ひとまず、これが標準形状^{デフォルト}で、『形式』^{スタイル}と『形態』^{モード}が幾つかあり、これはスタイルは『雨傘形式』^{アンブレラ}、モードは『お散歩形態』^{ワンダー}になります」

シヤリオは傘を取り、テーブル上から床に移して「日傘形式^{パランル}」と命令すると、カチンと自転し形状が変わる。

「このように、形式が変わります。因みにこれは『ちよつと一息形態』^{ブリーズ}となります」

傘の形状が先程前とは違い、柄と中棒はほぼ一体化して重厚感ある黒色。親骨は36本になり、開いてもカーヴはせず、直線である。生地の色は藍鉄^{あいてつ}、先端の石突は無くなり、被り物をして紐で結わえられている。柄の長さは使用者の身長ほどに伸び、被さるかたちに

なっている。

「唐傘、番傘みたいな和傘になるんか！」
『からかさ、ばんがさ？』

地球の日本出身であるはやてやなのはには馴染みは薄くとも見たことのあるかたちであり、昔の人が使っていた 現在でも稀に使用されている 傘であると説明する。それはシャリオも知らない知識だ。

「今、他の形式もありますが、私がわかっている形式はこの2つです。形態はもう1つあります」

傘を握り、「フォルディング折りたたみ形態」と命令する。

「フォルディング……折りたたみ傘か」
「はい」

これは銭湯に行ったときに見た形態だ。あの時は手動でこの形態にしていたが、今回は自動で形状が変化している。

「雨傘、日傘とどちらも対応します」

『……………』

驚きというより、形状形態変化の楽しさに息を呑んでいるようだった。シャリオも段々と落ち着きを取り戻し、血色もよくなっている。

「……あ、すいません。形式でいうならもう一つ、これは『その他』という括りですね」

そう言っ、傘の先端を持ち「傘、張り扇ハリセン」と命令すると、まさしくその形になった。

「それは見たことあるな」
他にも、滑空機グライダー、空飛ぶ絨毯マジックカーペット、トランポリン等、魔力を使用して『金属』と『布』を駆使した『何か』に形状変化できます」
『そんなもので!?!』

布みたいなので、薄いものならと彼女は付け足した。

「これを暇の持て余しとして『寝そべり形式リカンベント』と位置づけています」

設計書に箇条書きで書かれている部分をスライドさせて、簡単に説明し、その他という番外形式があると言葉を残す。

「これ、くらいですかね。今わかるどころの形式と形態は」

形式を標準の傘に戻し、テーブルの上に置く。

「傘の形式を外れる寝そべり形式を除外すれば、本当にただの傘なんです、皆さんのデバイスと連想すると、少し怖いですね」
「怖い？」

シヤリオは一度カップに口をつけた後、眼鏡を掛けなおし、傘を撫でた。

「この『お散歩形態』で剣と小銃ライフル、『ちよつと一息形態』で槍、
折りたたみ形態』で短剣と銃ガン、開けば盾……に見えませんか？」
「……いやいやいや！ それは見ようによっては見えるかも知れへんけどそんな」

シヤリオは傘を生地ごと両手で握り、少し捻る。

「これ、銃口が付いてるんです。ティアナのクロスミラージユも形は少し変わりますが、魔力結合でダガーを出せますから、おそろくやりようによっては可能です」

傘の先端に穴が開き、それをはやてに見せる。どうやら、これは偶然見つけたようであった。設計書を読み解く上で、武器搭載を匂わせる記載はあったが、核心を得る解読までは行き届かなかつたようである。

「それと弾式魔力供給機能も搭載されています」

「カートリッジシステムが？」

「弾数は54発、連続供給が可能です。魔力容量は優れ、弾の大きさは現在皆が使用している弾の5分の1程でロード時間も格段に早いです」

この詳細が設計書に書かれているが、複雑すぎて読みきれないという。A級デバイスマスターであるシャリオは開発はできても理論部分は深くまで学習しておらず、装填方法、効率の理論式までは追いきれなかった。

分かるのはこの傘がそのような機能を持っているということだけだ。

「な、何でそれをジャニカニ佐たちは公開しないんや？ それがあれば局のデバイス全部向上できるやんか！」

勢いをつけるはやてに対し、シャリオは息をついた。

「公開しているかどうかは分かりません。ただ、現行のままで充分要件を満たしていれば採用はされません。安全性を土台として、要

件定義を充分満たす2つの設計書を比較したとき、現行規格採用で大量生産しやすいデバイス設計書と、要件以上の高性能を発揮しますが、構造が複雑且つ今までの規格を外れ、大量生産するまでに時間のかかるデバイス設計書、どちらを採用すると思います？」

「……………」

近年やっと安全性を確保できた現行のカートリッジシステムであるが、コタロウの傘が安全性があるとは限らないし、安全性を確保できたのであれば大量生産しやすいほうが、思い思いではあるが、採用されるのは前者であろう。

そのような人間がこの世に多くいることははやてでなくても知っていた。

「もし、論文を公開していたとしても更なる研究と実用化までは最低でも20年はかかります。世に出てくるのは多分10数年後です。時代を先取りしすぎた研究が、歴史に埋もれてしまうことを、おそらくあの御二方は知っていたのだと思います」

もちろん、コタロウさんのため、という名目が一番最初にくるとは思いますが、研究開発のみの視点から見れば、一般的なことだとシャリオは言い切った。

「この傘が採用しているカートリッジシステムは6年前 開発当初であれば8年前 に搭載されているので、現行のカートリッジシステムと同様、当初は安全性は無かったですでしょう。6年掛けて安全性を確保したのだと思います」

直接本人から聞いたわけではないため 関与する人間は近くにいる 予測の域を出ないが、おおよそそんな感じだろうと彼女は決定付けた。

はやてたちよりは機械に従事しているため、1つのものを作り上げるのに研究開始から実用化まで多くの時間を費やすことをシャリオは良く知っていた。そして、需要が無ければ開発途中で消えていくことも良く知っている。

「このデバイスは古代、近代、現代のどれにも当てはまらない未来のデバイスと言ってもいいかもしれません」

『……………』

そういわれると、言葉が詰まるのは当然だった。子どもの頃の自分が今の自分を想像できたろうかという感覚に似ており、それが今、目の前にあるのだ。

「アイツのデバイスは未来のデバイス、か」

「この生地も、現行のバリアジャケットに採用すれば全ての性能をおおよそ10倍に跳ね上げます」

「……あかん、納得できるが理解できなくなってきたわ」

「私も理解できていないので大丈夫です。素材は現行のバリアジャケットと同じなんです、編み方が違うんです。全て手編みで柔軟且つ魔力を受け流す独自の編み方になっています」

「それもやっぱり」

「はい。大量生産は、現時点では不可能です。工芸の領域で普通の

人が編めば少なくとも半年はかかります」

フェイトは唸る。簡単に言えば六課の前線メンバーに採用するのには一年以上の月日を費やすという意味だ。

「コタロウさん」

「んくつ。はい」

口に入れたサラダを飲みこむ。

「この生地は誰が作ったんですか？」

「私です。設計自体はトラガホルン両二等陸佐が、製作、調整は私です。最終調整はあちらが行なうと言っていました」

「因みに、時間はどれくらいで？」

「336時間です」

「さんびゃッ」

丸2週間だ。とスバルは声を漏らす。不眠不休で製作したのかは聞かなかったが、それだけの時間がかかったことに嘘は無いだろう。改めてこの生地を見る。単純に1日8時間作業に従事したとして42日かかる計算だ。新人4人を優先的に作ったとして6ヶ月弱、手の空いている人が複数人いればもつと短縮できるが、それに時間を割ける人間は六課には居ない。それにそれが出来たとして手編みなのだ、いくつものテストをしなければならぬ関係もあり、試用期間1年のこの六課にその余裕は無い。

考えてみれば、彼が普段使用してるデバイスは不安定極まりないもので、実用化には向いていないことがよく分かる。彼が所持するこのデバイスのみが、6年という長い期間テストを行い、実用できる水準に近いものなのだ。

そこまで考えてはやては疑問に思う。

「せやけど、そんな危ないもの、完成当時は局が許さないとちゃうんか？ 説明聞いたけど、全部研究段階で危険性の高いものばかりやん。所謂このデバイス、試作品みたいなものやろ？」

その疑問はもっともだと思っはやてたちに対し、シャリオは用意していたかのように頷いた。

「はい。ですので、この傘、局登録がなされていません」

「……は？ じゃあ、コタロウさん違法所持や」

管理局では民間でもデバイス所持は認められているが、局員は局員で所持する場合は申請が必要で、民間とは違う手順を踏まなければならぬ。局員では誰でも知っていることである。

「いいえ。登録されていなくても試作品であれば、試験運転および動作確認、またある程度の一般使用を許可される資格があります」

「……限定付武装局員資格」

気付いたようになるのがぼつりと言う。

「はい。一般のデバイスであれば作成した後、局から認可が降り、正規の局員に使用されます。スバルたちのも出来たばかりだけど、安全性は私だけでなく局もお墨付き。そのあと、上官の許可が降りたところで使用が許可され、調整して、一般許可があります」

マツハキヤリバーたちの使用はいきなり本番になったが、それは上司からの使用許可が有り、それ以前に局登録のなされたものであるという。

「でも、コタロウさんの持つ限定付武装局員資格は、動作確認という名目上で認可の下りていないデバイスの所持と限定使用が許可されているんです。しかも試作品扱いなので、デバイスリミッターも関係ありません。コタロウさんにしか出来ない裏技中の裏技です」

「そ、そんなん、もし、使用して事故が起こったらどないするんや」

「ですから、試験運転、動作確認という模擬戦でしか傘のフルの機能を使用できないんです。おそらく、もし普段使うことがあったのであれば、その機能だけ局で認められたものだろうと思います。局から認可が降りた機能にどんなものがあるか分かりませんが、2年位前にハリセンという機能を見たことがあります。模擬戦というのはあくまで試験運転の範囲内、スバルたちに言わせれば訓練と同意なんです」

さらに例外が存在します。とシャリオは付け加えるが、この会話に何人か付いていけない人間が出てきた。

「緊急時はコタロウさんも一般武装局員と同様に召集がかかりますから、その時は存分に傘の機能を使用できるんです」

「緊急時って？」

「ん〜、分かりませんが、例えば、管理局システムが崩壊するようなときが来たとき、とかじゃないですかね？」

「ぶふっ！」

「八神部隊長？」

「い、いや、なんでもあらへん」

「まあ、確かに管理局システムが崩壊するなんてありえないですよ
ね」

咳をして頭を振るはやてを見るシャリオにとっては、そんなことはあり得るはずもなく、はやてが吹き出すのも理解できた。

「せ、整理させると……なんや、コタロウさんの傘は完全独自規格でトラガホルン両二等陸佐とコタロウさんによる独自のチェックをクリアした試作品で、複数武器搭載の可能性を秘め、管理局認可が降りていないデバイス。なおかつ、コタロウさんだけある一定の条件下でフルに使用できるということ。で、ええんかな？」

シャリオは頷き、他は悩みながらも顎を引く。

そして、錆びた人形のように首を動かして、この傘の所持者である男のほうを向くと、彼は既に席を立とうとしていた。食事を終え、そろそろ業務に移らなければいけない時間だ。

「……機能の説明も、聞きます？」

まだシャリオは外装と機能の可能性しか話していない。本来の機能はまだ一言も出てはいなかった。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 　　困った時の機械ネコ
第29話 『季天鋏』

コタロウの模擬戦 彼に言わせれば試験運転 　　が始まる十数分前にシャリオが現れ、興味本位からはやてたちも姿を見せる。

今は訓練場上空で、フェイトがエリオとキャロと模擬戦を繰り広げ、とあるビル群の屋上では、なのはとヴィータ、スバルとティアナがそれを観察している。

「あ、八神部隊長、シグナム副隊長とみんな」

『お疲れ様です、八神部隊長、シグナム副隊長』

「お疲れ様です、八神二等陸佐、シグナム二等空尉」

はやてはスバルたちの敬礼を解かし、気を使わなくてよいことを告げる。

そろそろ、フェイトたちの模擬戦も終わりそうな雰囲気であった。キャラが支援するなか、エリオが力を込め、彼女に突き込んでいくところだ。

フェイトは愛機で受け止め、電光が2人の間にほどばしる。頬の横で、膝もとで、身体の脇で光を放ち、轟音と共に一方が弾きとんだ。

「ハッ、ハッ！」

「ふう。うん！ もう少し、弾を避けるときは余裕をもつてね？」

あとはいいかな」

「ありがとうございます！」

「あ、ありが、とう、ございました」

キャラはもう少し、エリオを支援して余計な疲労を与えないようにと注意し、3人と1匹は一緒になのはたちのいる地点に着地する。彼らの模擬戦のデータをコタロウは編集し、レイジングハートに転送すると、彼もすたと着地した。

「テストロッサ・ハラオウン執務官。それでは10分後をお願いします」

「はい」

彼は傘を置き、準備運動を開始する。基本的な腱を伸ばしたり、捻ったり、屈伸をしたりなどして、身体を整えていた。

特に顔を歪ませることもなく、足を 180度縦に開いたり、横に開いたりしているのを見て、スバルが口を開く。

「コタロウさん、身体柔らかいですねえ」

「十数年前、は、カートリッジシ、ステムは身体への負、担が大きかったんです。知らない間に蓄積して、あるとき身体、が動かなくなるこ、とは若い人ほどよくありました」

びっくりとなのはが反応する。つい数日前シャリオから聞いた話だ。

「成人で、あれば身体が出来上がり、そのシステムに耐えら、れるのですが、子どもの場合そ、れは負荷となり身体を軋ませます。その時、必要なの、が身体の柔らかさなのです。デバイスにかかる負荷を抑え込むか、身体全体で吸収して負荷を逃がすかですね」

彼は座り込んでべったりと体を折り曲げる。

「もちろん大人の場合でも高い負荷、そうですね、もし人体への負担を無視した高出力な砲撃を撃てば、身体が出来上がっても無理でしょう。その場合の柔軟さでもあります。かといって完全に雲散できるかという点、そうではありませんが、柔軟なことで損することはありません」

よし。と最後に首をじっくり回し、大きく深呼吸をして体操を終わらせた。

「え、あの、それは誰に教えてもらったんですか？」

「ふむ。誰に教わったというより、ジャニカ・トラガホルン二等陸佐から貰った訓練学校の教本に書かれていましたね。『身体とデバイスの相互関係』という節に書かれています」

聞いたことある節ではあるが、思い出せない。そもそも、デバイスとの相性は学科というより実際に見て、体験しただけな気がする。と訓練校出の人間は首を傾げた。

「……ム」

疑問に思うのも束の間、コタロウの魔力制御を感じ取った。

普段の修理精密性から予想した通り、彼の魔力制御は揺らぎなく安定し、そして堅固だった。

彼の手のひらの上を凝視すると、何か透明で球体状の物体が浮かび上がっている。彼は手を返すと、それは重力に逆らうことなく緩やかに落下し、地面に触れた瞬間にゼリーのように形が歪む。そしてそのままゆっくりと跳ね返り、また彼の手のひらに落ち着いた。

「何ですか、それ？」

「エアロゲルです。99.9%が空気で残りの0.1%が水の物質

です」

スバルは手にとってみると、なんとも柔らかいゴムのようでスライムのようにもある不思議な感触だ。ティアナたちも手に取ってみると何とも形容しがたい感触であった。

興味本位から他の人にも回され同じ感想をもつ。

「まどろっこしいのなしだ。これ、稀有レアスキル技術なのか？」

「いいえ？ ただ単に空気中の水蒸気に魔力制御で空気を送り込んで密度を減らしただけです」

「だけですって、お前……」

グイータが試しに空気中の水蒸気を魔力で収集し、そこに空気を送り込もうとするが安定はしないし、目に見える状態で出現しない。魔力制御にきと聡い、なのはたちがやってみても結果は同じだった。

「いや、無理だろ。できねエよ」

「訓練次第だと思えます。『水分子』と『水分子』の間に自分の『魔力分子』を」

「ちよつと待て」

途端に、エアロゲルは制御を失いシャルルの手の中で雲散した。

「水分子と魔力分子イ？ お前、魔力素子を制御できるのか？」

「皆さんも魔力素子を使用してバリアを展開しています」

物質を扱うとき、例外に漏れることはなく、これ以上分割することのできない素子を使用する。例えば鉄板をつくりたいのであれば、鉄の素子を集めて生成する。魔力によるバリアの場合は、魔力素子を集め、結合して堅固な防御壁をつくりだす。

この魔力素子の量こそが、その人本人の魔力量となるのだ。

管理世界はこの魔力素子の利用と、人体にある魔力の源であるリオンカーコアの発見により、今まで感覚的に使用していた魔法をほぼ科学に近い形で確立させた。質量保存の法則を無視したように錯覚するのはこの魔力素子を取り扱うからである。

「んなもん、感覚と意思で作れるだろ」

「はい。なので、魔力素子で分子を制御する感覚です」

「ちょっと待ってくれるか？　ということは、コタロウさんは魔力で分子間結合制御ができるということか？」

それに近いことであるとコタロウは頷いた。

ジャニカとロビンはこのことを知っているのだろうかと思うはやてはその疑問を即座に打ち消した。知っている知らないという問題ではない。はやてたちがほぼ感覚と想像、意思によって生成しているバリアの類を粒子単位で完全に制御下において操作している事実のほつが問題である。

「まさか、デバイスを酸化させたりもできたり？」

ぞくりと全員デバイスを隠す。

「それはできません。あくまで分子同士を近づけたり、離したりすることだけです」

コタロウは誓いに近い強さで否定する。

彼にしては珍しく言葉に力が入ったものだ。

はやてがぎこちなく頷くのを見て、コタロウは傘を手に取り、和傘に変えて上下に数回振り抜く。そして、そのまま右足を前に出しながら、上から斜めに傘を振り、左足を移動させながら真半身をとる。そこでは既に傘は形状を変え槍のような野点傘のだてに変わり、中心を持って2回転、3回転。さらに腕を内側に巻き込み身体を回転させ、傘を握る手が口元まで来る時には、傘は折りたたまれ小型化されていた。

進行方向は常に変わらず一直線であったが、彼の身体は独楽ユツのように回転し、その間傘は、例えるならば剣、槍、短刀へと形状を変えていく。彼の発言による命令がなかったことから、どうやら口に出さなくても傘の形状は自由に変更することができるようだ。

傘の形状変化のパターンをいくつか変えながら、歩みを進退する足捌きをスバルたちはみたことがなかった。

なのはたちのみが、

『（武道の動き？）』

と、親近者である人や学生時代の部活風景で出てきた人、または

テレビでも機会があれば見たことのある動きによく似ていると感じた。

コタロウがその動きを終えると、ぼつりと声を漏らす。

「命中力の確認もしておこう」

傘を自分の身長の3、4倍高く放り投げると位置は動かさずに、先ほどとは比較できない速度で、また独楽のように回り始めた。

彼の周りの粉塵が僅かに回転にあわせて舞い上がる。

そして、傘もまた回転しながらコタロウと同じ位置まで落下すると、彼は柄を掴み、

「ンッ！」

「……え？」

方角としては隊舎に向かって突き抜く。

以前みたことのある動きを傘はする。遠心力と彼本来の力によって弾きだされた傘は主人の手元を離れずに中棒が伸び、隊舎の屋上に向かって真っすぐ突き進んでいく。

音はそう、カートリッジロードしたときのような音だ。

そして、遠目で見るとあれはおそらく避雷針だろうか。それと交わったのを確認してから、彼は傘が自重で撓しなる前に逆の動作を行ない、傘を引き込んだ。

傘が戻るときの音はまた違い、金属のタガが外れ収納される音である。最後に「かち、ん」という音を漏らし、通常の大きさに戻る。

「ふむ。問題なし」

お待たせしました。とコタロウはフェイトのほうを向き、丁寧に
お辞儀をする。

「それでは、試験運転及び動作確認の条件をお話させていただきま
す」

「……え、あ、はい」

フェイトを含む周りの、特になのはやスバルたちは半ば、何かを
諦めたように息を吐いた。

「あのね、ティア。私、ネコさんについて考えるの止めようと思う」

「奇遇ね。でも多分、また考えるわよ。人間ってそういうものだから。今日のところは考えるのをやめるってことでいいんじゃない？」

「あの地球での夕食の時も、結局考えないと決めたのに、考えてま
すよね、現在」

「うん」

スバルたちが念話をしている間に、コタロウはフェイトにルール
を説明していた。

それは特に難しいことはなく、傘の耐久性と防護性、および操
作性の確認のため、攻撃するのはフェイトだけで、コタロウ自身は防
衛のみであるというものだ。

彼は一切攻撃を行なわない。

「わかりました」

「それではよろしく願いします。空戦、陸戦もそちらに合わせます」

再度彼女は頷き、先ほどのバリアジャケットのままふわりと空を飛ばうしたとき、ふと、彼の服装がつなぎのままであることを気が付いた。

「コタロウさんはバリアジャケット、着ないんですか？」

「……………」

「あ、いえ、無ければそれでいいんですが……………」

コタロウはフェイトに目を合わせ、数回瞬きをした後、

「ッ……！」

2歩、3歩と引き下がった。顔も幾分か上気している。

「き、着なければなりませんか？」

『（動揺してる！？）』

六課にいる面々が初めて見る光景だ。瞳も僅かだが震えていた。しかし、それは幻覚であるかのようにすぐに元の無表情に戻る。

「は、はい。安全の為、着たほうがいいと思います。その、どうかしたんですか？」

全員の代表として、フェイトが先ほどの表情の理由を聞く。対する彼は、いつもの表情ではあるものの、淀みのない口調ではなく、

「わ、私のバリアジャケットは恥ずかしいのです」

おずおずときこちがなかった。それでもフェイトに着用を要求されていたので、彼は傘の先端を地面につけ、

「セットアップ」

彼の周囲が光りだした。

『……………』

靴に類するものであれば、踵かかとから接地する歩き方をすると、カツと固い音がする。しかし彼の足音は少し違い、

カラコロン

小気味良い音が鳴り響いた。

スバルたちにとつては見たことのない姿で、なのはたちにとつては和傘と同様に見たことのある姿であった。

知る人の表現を借りるのであれば、彼の履いている履物は足の2本生えた『下駄』と呼ばれるもので、『足袋』も履いている。『仁・義・礼・智・信』を意味する五つの折り目を付けた黒い『馬上袴』を履き、上半身は紅緋べにひの『羽織』をはおり、中も同じ色の織物を着ている。袖口等の端部分は無患子むくろじの種の色をしており、その後ろからは白地が見え、三色が上半身を彩っていた。胸元には蛇の目に六角形の装飾があしらわれている。そして、激しい運動にも耐えられるよう、黒い襷たすきが隻腕でも器用に交差していた。

『……………』

和傘によく似合っている。

確かに、このようなバリアジアジャケットはここミッドチルダではみ

ない服装であるが、特に彼が恥ずかしがるような格好ではない。

「別に、ねえ」

「珍しい格好ですけど……」

「よく似合ってますよ?」

スバルたちは口々に感想を述べ、周りも同意を示す。

セットアップを完了した時点で、彼は鼻筋より上を覆う黒曜石のような鈍い光を放つ顔の輪郭を取った一見仮面ともとれるバイザーをしており、目は完全に隠れてしまっていた。おそらく、彼からは見えるが自分たちからは見えない作りになっているのだろう。

そのみが、少し異質を放っていた。

「いえ、格好ではなく……」

彼は背中を向けるとそこには、

『困った時の機械ネコ』

ネコは尻尾に語りかけ

尻尾はネコにのみ命を告げる

そして運命はネコに微笑む

常にかわらぬ貴方の親友より……』

という言葉がミッドチルダの言語で円を描いて書かれていた。中心部には横を向いた黒ネコが振り返りながら自分の尻尾斜め上を見つめているマークが大きく貼り付けられ、円の外側にはドライバー、スパナが左右に平行で添えられている。

かなり人によって感想が分かれるデザインであり、どうやらコタロウにとっては恥ずかしいほうに傾く代物しものであるらしい。

『(……答えにくい)』

フェイトも感想は控え、「それでは始めましょうか」と地上を離れた。

コタロウは、またカラコロンと音を出しながら建物から飛び降りると、途中足元に格子状のエアロゲルをつくりだし、弾性をふんだんに使って高く飛び上がった。彼女と同じ高さになって1人分の地面を作り、カラコロンと着地する。

ここで初めてシグナムが口を開いた。

「主、カギネ三士の実力をご存じで？」

「ううん。知らん。けど、『クアッドQuad・Sエスの天てん魔まし使』のトラガホル

ン夫妻がいるわけやし、弱くは無い、と思っ」

『Quad・Sの天魔使!?!』

周りも初めて聞く情報である。話題としてはなのはと同様に有名であり、姿は見たことはないが、その異名だけは局内でも知らぬ人がいないくらいである。唯一知らない若いエリオとキャロだけはティアナから局内の有名人であることを教えてもらう。

「あのお二方が? 異名名高い……」

「2人ともな、ダブルエスSSなんよ。アコース査察官から直接な」

「確か、入局当初話題になった人だよな?」

「せやね、その後2年くらいでぱたりと噂を聞かんようになったなあ」

「私が怪我をした時だから……8年前、だね」

スバルたちが入局当初は既に活躍の話しは聞かなくても、時々話題に出てくる人たちである。これほど近くにいるとは思わなかったと内心驚いた。

そのなか、シャリオはふと頭に1つの共通点を見出す。

「……傘の制作開始年、ですね」

『……………』

気付けばまた、彼に対して思考を巡らせている彼らがいた。

はやてはこれはまずいと思ってか、シャリオにフェイトとコタロウがよく見えるようにモニターを展開させる。展開したのは複数で、

見た目だけでなく、体内の魔力分布や体温、気圧など色々な角度から見ることでできる特徴ある画面だ。これで、魔力の動きなどを観察することができる。

そこでシャリオは、コタロウの周辺気圧だけが違う事に気が付いた。

「……嘘」

「どないしたんや？」

「コタロウさんの周囲約1?の気圧が異常に低いです。高度およそ3500m級」

「今やったんか？」

「わかりません。ただ、あの地点に着いた時の魔力差分を見ても反応差が見られないという事は、普段から常時使用していると考えるのが普通かと……うわっ、下がりでした！」

その気圧を一定にしていたのかと思いきや、急激に10000m級まで下がり、そこで彼の周辺気圧は安定した。その間、はやてたちも魔力反応を察知できた。

バリアジャケットには本来、空気圧の防護も備えられているが、おそらく彼の場合は機能を一時的に解除しているのだろうとはやてたちは決定づける。

そろそろとティアナたちもシャリオに近づいてモニターを見た。

「……そういえば、想定される限りのあらゆる『季節』と『天気』気圧を操作できる機能が付いとるって言うてたな」

「『きてんはさみ季節天錠』機能ですね」

『季天鋏（シザー seather scissors）』という機能があると食堂でシャリオが話していた。はやてが言った通りの機能で、別名『氣象布の裁ち鋏』と名を打ってあった。

名前と概要以外は、魔力操作の独自理論が展開されており、修正に次ぐ修正が幾重にも張り巡らされていたため、彼女では理解できなかった部分である。

今、空中にいるフェイトは彼の魔力反応は察知できたが、彼に対して一見どこにも変化が見られずにいた。

「それでは、使用者私わたくしコタロウ・カギネの高度約10000mの超高度を想定した酸素欠乏状態における、傘『しわたすみ 濼』の試験運転兼動作確認試験を実施します」

「……え？」

彼は相手の動揺を無視し、発言を続ける。

「試験協力者であるフェイト・テストロツサ・ハラOWN執務官は、先ほどの御説明の繰り返しとなってしまうますが、戦略は自由とします。ですが、戦略立案の極端な長考はできるだけ控えるよう御願いたします。その場合、適当な攻撃を行なってください。また、わたくし私は衝撃で移動をすることはあっても、基本的に移動は致しません。もちろん、自身の危険性を考慮したうえで回避行動をしてしまうことは、事前に御了承願います。そしてもし、間合いの間に御要望がございましたら仰ってください。適宜設定いたします。以上、なにかご質問がございましたら、気にすることなく仰ってください。特に質問が無い場合は頷くか、そのまま5秒間お待ちください……」

すかさず、彼女は質問した。

「酸素欠乏状態とはどういう事ですか？」

「言葉の通り、現在、私たちがいる空気濃度を気圧変化によって減少させ、酸素を欠乏状態にしたということです」

「コタロウさんの人体の影響は？」

「私はこの傘を所持し、且つ他者に対してある一定の距離がある場合、常に高度約3500mの酸素欠乏状態を維持しているため、特に問題はありません。私の現時点での最高高度耐性は高度約1500mで、耐久時間は72時間ジャストです」

相手は普段以上に感情に抑揚が無くなっていた。

相手を納得させようと、彼は答えに付加情報を発言するが、フェイトは彼の状態が納得ができない。

「何でそんな状態で試験を行うんですか!？」

「私たち工機課の人間は場所を選びません。飛行する艦船をも迅速に修理をしなければならぬ場合が存在します。それを想定しての訓練です」

他の機械士も例にもれないことを告げる。

そこでコタロウはトラガホルン夫妻に言われたことを思い出し、付け足した。

「トラガホルン両二等陸佐から、もし協力者が3つ以上の質問があった場合、この言葉を伝えよと伝言があったため、お伝えします」

彼は再び口を開く。

『協力者になつてしまった以上、何かかもが遅すぎる。分かっていることは、ただ1つ。ネコにとってはそれが日常で、普通であること。これ以上の質問がネコ本人に依存するものであれば、質問は別の機会に致しなさい。それはとても嬉しいことだけれど、頭の良いあなたなら御理解できるでしょう？ 試験中、ネコに対する感情は排除することをお勧めする。そうそう、試験に関する質問であれば、どうぞ御自由に』

900

彼の言葉以降、フェイトは一度深呼吸して相手を見据えた。
両者間に無言の時間が流れる。

「5秒の無言、質問無しと判断いたしました。試験運転兼動作確認試験カウントダウン開始……」

彼女は呼吸静かに、目を閉じる。

「5」

彼の傘は開いてはおらず、右手に握られ、特に構えてはいない。

「4」

彼のカウントダウンに動揺することなくやおら眼を開き、バルディッシュ愛機を構えた。

「3」

モニターを見ている人、空を直接見上げている人たちを意識することは、今までの新人たちの模擬戦と同様でない。

「2」

相手の表情はバイザーによって窺えず、カウントダウンは彼女の緊張を少し押し上げた。

「1」

風が吹き、僅かにフェイトのツインテイルが揺れ、初撃の戦略を立てる。まずはそれで彼の実力を把握しなければならぬ。全力ではなくコタロウの力を測るのだ。相手の抱えている負荷は考慮しなくてよいと言いつつ聞かせる。

次の想定される言葉で、ゆっくりとフェイトは間合いを詰めていった。

「0」

第29話 『季天缺』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

もしかしたら、今回は誤字が多いかも知れませんが、進行形で依然推敲中です。

さてさて、

魔力を一つの原子、或いは分子と取る設定は誰の頭にも浮かびますよね？

私もそれを採用しています。

私の場合、特に化学や物理に強いわけではありませんので、それほど難しい設定は考慮していません。

只の『不思議粒子』くらいの設定です。

ですから、ある程度の原則は決定づけていますが、適当も適当です。考えていることをとりあえず以下に羅列してみると、

- ・ 原子でもあり分子でもある不思議粒子
- ・ トランプのジョーカーみたいに変換することが可能だったりする
- ・ 人体に限らず自然界にも存在している。
- ・ 魔力量を決定づける
- ・ 人体の魔力を消費しすぎると頭の中にモヤがかかった状態になる。
- ・ 発火、冷却は空気中の酸素や水、気圧を操作して行なう。
- ・ 召喚は素子を使用して『場』を操作してとある次元から呼び寄せ

たりする

・ 等など

もう一度言いますが、適当も適当です。

人間が勝手に定義しだした『量子力学』を劣悪模倣したものです。

(量子力学というのは『こうしなれば成り立たないでしょ?』みたいな人間定義の法則って勝手に私がイメージしている)

万物どんな分野でも取り扱えるものではありません。

ただ、これらを使用して可能となる劣悪SFを私は作成していきま
す。

(嗚呼、あの時私は黄色いくちばしだった……)

はい。つぎは『エアロゲル』です。

現存するエアロゲルとは全く違う弾性を持っています。

あんなに伸びたりしません。

スライムみたいなものと取ってしまったても構いません。

(詳細は調べてみてくださいくださいね?)

お次は、そう。傘の機能

詳細は本編で書いたとして

『季天鋏機能：season scissors』

滑稽ですね

季天のスperlだつて「season」と「weather」をくっ
つけただけです。

『気象布の裁ち鋏』もそうです。

手芸で使った裁ち鋏を思い出しただけです。

全く単純な脳みそしてますね……

え、次。

傘の所持条件ですね。

基本的に局に認可されないと使用してはいけない条件にしています。ただし、試作品は別。

さて、コタロウの場合は資格があるために、無許可の試作品を所持していますが、

では、他の人たちは持てないの？

はい。持てます。

ただし、それは機密に関するものなので、公の場に出てきていないだけです。

研究施設では試乗訓練みたいなものが行なわれています。

傘の形式や形態名称の由来

ブリーズ
breeze……そよ風……一息つばい

座りながら一服できる傘で『野点傘』

『ちよつと一息形態』決定！

ワンダー
wander……当てもなく歩き回る……散歩、だ

歩きながら使える通常傘で『日傘』『雨傘』

『お散歩形態』決定！

フォルディング
folding……折りたたみ

折りたたみ傘

『折りたたみ形態』決定！

リカンベント
recumbent……横になった……どっでもいい

暇つぶしに変えられる形式

『寝そべり形式』決定！

あと、研究分野におけるの考察

新しい画期的な発明品ができたとき、それに類する品を競わなければならぬのは現代では普通の出来事です。

そして、競争に負けた発明品は時々、日の目を見ることなく消えていったりします。

儲けが無かったり、クリアしなければならぬ条件が多くあったり、既に出ている品に価値名がない時など様々です。

トラガホルン夫妻が導いた論文はどうなんでしょう？

公開しても体よくあしらわれたのか、それとも発表なんてしていないのか？

こちらは読者のご想像にお任せしようかな。
なあって考えています。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞と用語解説になります。

グラムサイト2さん

上条信者さん

高橋さん

コージーさん
景雅さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

用語解説

無患子：むくろじ

種は羽つきの球として使われます。『子が患むすつことが無い』という縁起物の1つです。

袴：はかま

袴には折り目が付いています。一般的にその数は5つで、儒教の『五倫五常の教え』があるといわれていたり。それが『仁・義・礼・智・信』の5つです。他にも五穀豊穰を願っている。なんてこともありますね。

第30話 『それはあなたです』（前書き）

日記に書いた通り、今回も厨二病、独自設定がいろいろできてきます。

戦闘描写ってムズい

それでは、本編をどうぞ

第30話 『それはあなたです』

試験開始 0分 イン eye wall アイウォール

自分の攻撃を受けるのであれば、もう少し強く、もう少し早く、次撃を行なえばよく、攻撃を避けるのであれば、さらに加減をすればよい。

フェイトはそう考えていた。

彼女は今まで執務官として現場調査や情報収集が多く、シャリオに手助けをしてもらってはいるものの、だからといって戦闘が多いとは限らず、少ない。

それに、六課へ出向してからも自分から向かっていくような戦闘は少なく、指導がそのほとんどを占めていた。

これより、特に相手の実力が知れない場合、初撃を重要視するのは当然といえば当然であった。触れること事態が危険という人物でもない。

「0」

彼女は振りかぶり、一気に間合いを詰め 一般局員が認識できる速さ ハーケンフォームで体重を乗せながら相手の頭上から振り下ろす。

「……へ？」

音が耳に届くとともに、自分の視線は下のほうにいるのはたちを捉えていた。こちら見ているシグナムを目が合う。そして、フェイト自身がそうであるように、モニター越しで見ている人たちも、目を見開いていた。

（何がおきたの!?!）

だが、模擬戦をしている人と模擬戦を見ている人とは観点が違う。前者は当惑で後者は驚きである。

フェイトは彼が予想外の行動を起こしたため、認識できず、一瞬何が起こったのかわからなかったのだ。体勢を立て直し、彼を真正面から見ると、攻撃する前と変わらない自然体の構えである。

もう一度、今度は見逃さないように重心を僅かに傾け、ハーケンバルディッシュを振り上げる。

ハーケンが頂点に達し振り下ろそうとした瞬間、彼が動いた。

コタロウも和傘を振り上げ、これからフェイトが描くハーケンの軌道上を僅かに外れた位置に平行に添え、ハーケンが軌道を通り過ぎようとしたときに和傘をその腹に当てて、軌道をずらし、自身に当たるのを防ぐ。

この時の魔力で覆われたハーケンと傘が擦れる音をフェイトは初撃で聴いたのだ。魔力同士の擦れる音は荒い鑢やすりのような乱暴な音ではなく、涼やかで根元から先にかけて音程の変わる鉄琴よりも滑らかな音色がした。

（これは想定してなかったな）

最近は確実な防御をエリオたちに教えていたため、このような防御方法があったことをすっかり忘れていた。いや、聞いたことはあるが、実際見たことがあるのは初めてかもしれない、とフェイトは思う。

（それならっ！）

上からではなく、横から攻めようとハーケンを握りなおし、横一閃に薙ぐ。

彼はフェイトの初動では動かず、薙ごうと刃が向かおうとしたときに動き、ハーケンと傘を擦り合わせ軌道をずらした。

ハーケンは彼の頭上を斜めに通り、振り終えたフェイトは右腕が左目を隠すような残身をする形になる。

自分の攻撃が当たる感触はある。しかし、擦れる音とともに軌道をずらされ、空振る姿勢を残して相手を見据えるかたちで終わる。そして、相手は攻撃が逸れたのを見届けてから自然体に戻る。

二撃、初撃もあわせると三撃、見事に自分の攻撃は受け流された。純粹に驚くが、それよりも心に息吹くものがあるのをフェイトはまだ自覚できずにいた。

（次は……）

と、正面からではなく、彼の横に移動してみると彼はそれに合わせて彼女の正面を向くように動く。ただ、位置は動かない。

それではと横に移動しながら視線をコタロウに向けず、払うよう

に腕を振ると、腕が別の意思を持ったように上に弾かれた。いや、弾かれても反動は腕には響いてはこず、もともと自分が上へ払おうとしたかのように違和感が無い。

力強さより、速さを重視したほうが良いかもしれないと、攻撃に意識せずに戦術を練る。

その間、絶えず振り下ろし、振り上げ、右払い、左払いと攻めてみるが、全て音を奏でながら軌道をずらされ、当たらなかつた。

(……うん！　まずは……)

フェイトは自分が口を僅かに緩めていることに自覚はなく、自身の速度を上げ始めた。

魔法少女リリカルなのはStrikers　く困った時の機械ネコく
第30話　『それはあなたです』

試験開始

0～5分

アウト

アイウォール
eye wall

フェイトの初撃があまりにも綺麗に逸らされたのを見て、特に新人たちは目を見開いた。なのはたちも多少驚く。

二撃目も同様にコタロウが受け流したのを見て、それが偶々たまたまでないことを自覚させた。

彼はそういうスタンスなのだ。

「なのは隊長」

「……何、八神部隊長？」

「なのは隊長だけやないねんけど、戦術、主に接近戦においてはそちらの方が詳しいはずや、分かったことがあれば、念話でもええ、考えずに口に出してほしい」

はやては彼が避けるわけではなく、バリアで受けることもしなかったことで、これから予測される、不明事項をなるべく無くそうと全員に呼びかけた。

了解ですと全員は頷く

フェイトは彼との距離を保ちながら周囲を回り、攻撃を繰り返すがどれも初撃と同じように受け流されていた。

「フェイトの戦術、決まったみたいだな」
「うん」

ヴィータの言葉になのはが頷き、フェイトは彼と距離をとる。

彼女のマントが揺れる。肩幅にあわせてハーケンを握り締め、左足を後ろに前のめりになり、

「はアッ！」

初撃よりは倍以上の速さで突っ込んでいった。大きく振りかぶり、

「……まずはパワーよりもスピード」

「それで、正面からじゃなく、背……は？」

フェイトが振りかぶった位置から消える前に彼は後ろを向いた。

遅れて彼女の姿が消え、彼の背後　正面に出現する。

彼女の体勢は振りかぶった状態であられるが、彼がこちらを向いているので目を大きく見開く。そのまま背後を狙おうとしていたのに、正面から受ける形になるのだ。魔力の擦る音こすが聴こえ、軌道を逸らされる。また、フェイトは屋上にいる彼女たちのほうへ視線が向く。

「ネコさんが背後からの攻撃を読んでたってこと？」

「……ううん。それ、違う」

モニター越しから見るのをやめたティアナに、スバルにしては珍しく抑揚が無く、首を横に振る。因みにスバルもモニターは見えない。

「ネコさんが動いたのはフェイト隊長が消える少し前……」
「だからっ」

「消えるってことは残像なんだよ。つまり、消える前にはフェイト隊長はそこにいなくて……」

まさか。とティアナは息をのむ。

「……フェイトさんに合わせて動いたってこと？」

スバルは頷く。

つまり、残像に騙されること無く、彼は動いただけだとスバルは言葉を漏らす。視界の認識がコタロウとは違うことを自覚する。

「多分、エリオもそう見えてるはず……ね？ エリオ？」

「あ、はい。でも、残像は残ってますよ？」

「それは私も。普段接近戦で慣れてるんだと思う」

上空ではその間も彼女はフェイントをかけつつ、彼の背後から攻撃しようとしているが、彼の正面を攻撃するかたちに終わる。気付けば彼女の行動が執着ともとれる時間が経過していた。
だが、

「……なのは隊長、フェイト隊長はまだ手加減しとるんか？ なんや、そうは見えへんのやけど」

「うん。全力じゃないけど、かなり本気でやってる」

見上げるなのは目が、どのように見えているのかは分からないが、はやての目にはフェイトが2人、3人で彼を囲っているように見え、目が追いつかない。なにより、戦っている2人はぶつかり合っ
て競り合うことが無いのだ。全てフェイトの振り抜きで終わる。

試験開始 5分 in eyewall

フェイトはまたコタロウの背後を狙おうとするが、正面から上から下へ受け流されたのを最後に再び彼から距離をとった。

「……はあ……はあ」
「……」

フェイトの呼吸が乱れ始めたのに対し、コタロウの呼吸は乱れていない。

（もう、一度ッー！）

この一撃を最後にしようとして今日一番の速さで間合いを詰め、彼の背後に回り込む。

今度は移動し終わった後も、

(よしっ！)

彼の背中がフェイトには見えた。彼女は既に振り下ろすだけの状態であり、そのまま彼の右肩に狙いをつけ、振り下ろす。

『 なっ！ 』

降りぬいたとき、彼女の予想としては左足のほうを抜けて終わるはずなのに、実際は右足のさらに外側へ抜けていた。

今まで彼に逸らされるたびに聴こえた擦れる音が振り抜いた今になって耳に響く。

すぐに彼へ視線を向けるが、相手は正面は向いておらず背後のままだ。ただ、傘だけが『^{ブリーズ}ちよっと一息形態 槍のように長い野点^{のだて}傘』になっており、ハーケンが今通過した軌道上に添えられてあった。

コタロウはゆっくりとフェイトの方を向き、傘を元の状態へ戻す。彼女の視線はそのまま彼の目を合わせる位置にあったが、相手がバイザーをしていたのでそれは叶わない。

(凄い！ 正面、背後関係ないんだ。 それならっ！)

バイザーに何か秘密があるのかと考える余裕は彼女には無く、即座に彼と距離をとった。

中距離より近く、近距離よりも遠い位置まで移動する。

そこで改めて彼の姿を広くみると、彼の持つ傘が異様な光を帯びていることに気付いた。

試験開始 5 \ 8分 out eyewall

「なア、何かアイツの傘、光ってねエ？」

「……そうだな」

それは屋上にいるヴィータたちにも見えているようで、シグナムも頷く。

「傘にフェイトさんの魔力が移動しているんです」

「はア！？ じゃあ、あの傘、フェイトの魔力奪ってるのか？」

「いえ、奪っているのではなく、移動してるんです」

奪うと移動は違う事をシャリオは言及する。

彼女はモニターで魔力反応を見ていたのでフェイトの魔力がコタロウに移動している経過をみていたのだ。

全員がシャリオの方を向くなか、キャロが口を開く。

「エリオ君」

「なに、キャロ？」

「あれ、もしかして、『擦過現象』じゃないかな？」

「……あ」

彼女の予測に、エリオは保護施設や訓練校の基礎カリキュラムでその用語が出てきたことを思い出した。スバルたちもキャロの言葉に反応し、言葉を漏らす。

「なるほど、『擦過現象』ね」

「……初めて見た、かも」

なるほど。と2人は感心するが、ヴィータをシグナムはなんとシャリオを見る。

「『擦過現象』、もう少し詳しく言うのであれば、『魔力異相差間の擦過行為による素子自由化、及び相平衡を利用した魔力素子遷移現象』ですね」

フェイトは自身の周りに魔力弾を複数出現させていた。

「一方の魔力量が極端に大きく、もう一方が極端に小さい場合で、且つ大きいほうの魔力結合力が小さいほうに比べ弱い場合、擦過互いを擦り合わせたときに発生する現象です。簡単に言いますと、高さの違う砂山を同じ高さにしようとする現象といえいいでしょうか」

一般的に、結合した魔力は衝突すれば必ずその箇所は破壊され、魔力素子は制御を離れ自由素子となる。生成した防壁が攻撃を受ければ常に同じ強度は保てず、その分弱体化するものだ。

そして、この時相互間に極端な魔力差が発生する場合、束一的性質と呼ばれる相平衡 安定を求めて均一を保とうとする現象により魔力素子が小さいほうに遷移するのである。

これは衝突を連続で繰り返す、つまり擦過を行なうことよって発生するため、一般的には『擦過現象』と呼ばれ、より専門になるとシャリオが話したように『魔力異相差間の擦過行為による素子自由化、及び相平衡を利用した魔力素子遷移現象』と少し長つたらしい呼び方になる。さらに、そこで制御を行なえば魔力素子は雲散することなく他人の魔力を相手の制御下におけることが可能だ。

「そんなの、今まで見たこと無エぞ」

「……あるわけありませんよ。単純に魔導師ランクではなく、魔力量の比較でいうと、Aクラスでさえ相手はEまたはFクラスの方ぐらいでなければ発生しない現象なんですから。それ以上でしたらDくらいの差が無ければそんな現象は起こりません」

『……………』

ヴィータとシグナムは黙りこむ。

現在、フォワードメンバーの中にそれほど魔力量の低い人間はいない。全員魔力量は高く、将来性のある人材を集めているのだ。低い人間はいないと言ってもいい。

「……ゼロレンジ」

彼の防御方法を見て、思い出したようになるのはが言葉をこぼした。

「なんやの、それ？」

「あ、うん。一般的にクロスレンジ ショートレンジも含むとミドルレンジ、ロングレンジのうちのどれか、あるいはそのいくつかを専門とする魔導師になるんだけど、それはある一定の魔力を持つ人しか魔導師になれないという現在の適正基準が出来てからなんだ。でも、その基準が出来る前はどんなに魔力量が低くても魔導師になれたから、その人たちが戦える領域があったの……」

前置きとして、先輩に聞いた話であるとなのはは付け加える。

「それがゼロレンジ。クロスレンジよりも相手に近く、まるで触れてしまいそうな距離のことなんだ。そのなかでも特に優れた人は『擦過現象』を巧みに使う『アドヴァンスドグレイザー』って呼ばれて、魔力量差を実力差をせず、相手を圧倒することができたみたい、なんだけど……」

「なんやけど?」

はやてはなのはを見て訝しみ、

(……魔力量差を實力差としない?)

ティアナは拳こぶしを握り、クロスミラージュに目を落とす。その代わり、

「うん。でも」

「すり抜けた!?!」

上空で何が起こったのかを彼女たちは見逃した。

試験開始 8分〜11分 in eyewall

フェイトはコタロウが何をしたのかを一挙一動として見逃さなかった。

自分が放った複数の魔力弾は相手に全弾命中させるためのもので

はなく、散弾のように広範囲を想定したもので、相手が移動するなり、傘を開くなり回避行動をとるだろうと彼女は考えていた。しかし、彼の取った行動はそのどちらでもなく、

(自分に当たるものだけ、軌道を逸らした)

弾幕のなかで自分に当たるものだけに傘の先端を当て、進行方向を変えたのだ。魔力弾は彼の身体すれすれを吹き抜けていった。

遠目から見れば弾幕の中をすり抜けたように見える。

(ふ、ふ。それなら、左右同時なら、どう?)

まだ、彼女は自分が微笑んでいることに気付いていない。

心地よい疲労を感じながら、今度は先程より倍近い魔力弾を生成する。

空は晴れ、太陽が地を照らしているのに、彼女の周りは自身の魔力弾でそれよりも明るい。彼女はそのそれぞれに意思を送り、彼に向かって撃ち放った。左右に別れ、加速し、彼に向かうのをフェイトは見届け、戦術を練ろうとするが、

(……駄目だ。攻めたい!)

寒気に近い振るえが身体に走ると、一度大きく彼と距離をとり、叫んでいた。

「ザンバーフォーム！」

ソニックムーヴも惜しむことなく2度唱え、離れた距離を助走距離として加速度をつけ、彼に突っ込んでいった。フェイトは彼にザンバー 剣 を突き刺す構えである。

コタロウは傘を伸ばしその中心を握り横にして胸元におく。

（長さは準備運動で見たとおり自在なんだ）

彼の身長のは3倍はある長さだ。彼女はさらに加速し距離を詰める。そして、彼は魔力弾が自分に着弾するよりも先に、

（傘の撓りを利用して撓ませて、当たる弾だけ擦らせた！？）

三方向の攻撃がほぼ同時であれば、自分から先に当たるのだけ対処すればよいかのごとく、先端と柄の部分で弾だけ先に軌道を変える。

その後、瞬時に傘を折りたたみ、ザンバーと地面に対して垂直に前を出し、接触する瞬間に手首を巻き込みながら身体を回転し、剣の腹を撫で、フェイト諸共後ろへ受け流す。左右から彼を襲う魔力弾は彼女とも交差するかたちになるが、彼女は身を翻してよける。

(傘の伸縮は自身の間合いの調整なんだ)

通り過ぎた後、フェイトは彼のほうを振り返ると、傘がまた一段を輝きを帯びていた。

頬を汗が伝い呼吸が徐々に荒く鼓動も跳ね上がるが、気だるさはなく、心地よい。

「フェイトちゃん、今はさすがに……」

なのはから念話が入る。明らかに危険性ある行動だとフェイトは言葉遣いから判断できた。

しかし、

「……ごめん、なのは。今は、集中したいんだ」

彼女の言葉を押しつけた。屋上には一切目を向けない。

コタロウと間合いを詰め、一撃、二撃と剣を振るい、接近戦を繰り広げながら魔力弾を放ち、自身もその弾幕の中に侵入し、さらに剣を振るう。そして、距離をにおいてはまた攻めるとつたことを繰り返した。

彼は傘の長さを自由に変えて、彼女の軌道を擦りながら逸らしていく。

精神はますます研ぎ澄まされ、自分たちを見ている人たちはもとより、空の景色も分からなくなるほど視界が狭まり、対象がコタロウだけに絞られていった。ただ、周囲を飛び交う自分の魔力弾は手

に取るように分かり、軌道修正したりなどして彼に向かわせる。

また彼女は彼から距離をとり、呼吸を整えながらカートリッジを3ロード。足元に魔法陣をひき、魔力を練り上げる。魔力が変換され激しい稲妻を周囲に呼び起こし、コタロウに手を翳すと、そこに照準と砲口の役割を果たすリングが二重三重に出現し、手のひらに自身とロード分の魔力が収束していく。相手の姿が霞むほどだ。

その後、

「プ、ラズマ……スマッシュャー……ッ!!」

コタロウに向けて砲撃を撃ち放った。

試験開始 9 \ 14分 out eyewall

フェイトがコタロウに向かって左右から攻めるように魔力弾を放つ。

シグナムは先程のフェイトの斬撃や正面からの弾幕にとった彼の行動を見て、

「当たるものだけ、軌道を逸らす、か」

「バリアやフィールドを使わず、使う防御壁はシールドのみ。しか

も、接触時に接触箇所だけ展開して擦る」

グイータと揃って片眉を吊り上げるが、フェイトからこぼれる微笑みをみて、自分が拳を握っていることに自覚はあった。

一つは武者震いであり、もう一つは、

(……しかし、まあ)

何故断ってしまったのかという後悔である。

今まで、魔力量の大きさはその人の実力とほぼ比例し、魔力量が少なくとも、雰囲気からその人の実力を判断できた。だが、彼の場合、そのどれにも当てはまらず、とても戦う人間には見えない。まさか、戦いの面でも彼に驚かされるとは思わなかったのだ。

(……ううム)

上空を見上げながら腕を組み、左右の魔力弾がコタロウに迫るのを見ながら、仕方がないとシグナムは首を振る。次回強制的にこちらから迫ってみるかと考えを無理やり完結させて、ひとまずフェイトに自己投影することによって後悔を軽減する作業に写ることにした。

(私の場合は左右の魔力弾だけの様子見は……やはり、そうするだろうな！)

フェイトは少し彼から距離をおき、速度魔法をかけて突撃していった。

しかし、彼はその三方向からの攻撃を左右の魔力弾から捌き、その後、正面の彼女を接触すれすれで受け流す。

「いくらなんでも危険すぎるよ」

なのはが言葉をこぼしていた。

「フェイトちゃん、今のはさすがに……」

「……ごめん、なのは。今は、集中したいんだ」

と、全員に響く念話で謝りながらも姿勢を変えず微笑む彼女を見て、シグナムも口元を吊り上げる。

すぐにフェイトは魔力弾を放ちながら彼に迫り、接近戦を繰り返していた。彼女特有の電光以外にも頬を伝い、髪を走る汗が舞い、輝いていた。また、コタロウの傘も輝きを増す。

一度距離を置き、また接近戦。また離れてと繰り返すたびに速度は増し、彼女の中で練り上げられる魔力量も増え、磨かれていく。その度にシグナムは武者震いを覚え、隣にいるヴィータでさえ、魔力が練り上げられていくのを感じる。

それは先ほど注意したなのはやスバルも同じであった。

『(……引き込まれるな)』

まるで台風アイウォールの目に引き込まれるように、2人の戦いから目が離せなくなる。

いや、

(本当の台風の目はアイツか)

襲い来る連激による連激を何事もなかったように受け流し、呼吸を乱れずたまたす佇むコタロウこそがその中心であるとシグナムは首肯する。

「なあ、コタロウさん疲れへんのかなあ？」

そうはやてが言葉を漏らすのも当然である。

「ただでさえ、酸素欠乏状態なんやろ？ おかしくないか？」

シャリオがモニターを覗き込む限り、接近戦だからか、欠乏状態なのは彼の頭部だけに狭まっている。そうであっても呼吸を行なうのは頭部であるので、依然として酸素が欠乏しているのは変わらないが。

「疲労を感じない人はいません。ただ、普段から気圧を低く過ごしているせいか、酸素摂取能力が格段に高く、心臓の筋肉が発達しているからだと思います」

「身体能力が高いということか？」

「はい。そうとも言えますが、単純に筋力があるとか体力がただ高いというわけではありません。一般的に人の心拍数は1分間に60〜70。多くて80と言ったところでしょうか。ですが、コタロウさんの場合、模擬戦開始時で心拍数が1分間で約20回」

シャマルの言葉に、はやては聞き間違いかと片眉を上げた。彼女はシャリオの気圧変化の驚きで体温などのモニターを見ていなかったのだ。シャマルだけが身体に関わるモニターを見ていた。

「現在で多くて40前後を保ち続けています。気圧を低くしてもコタロウさんに異変がないのは、それらが影響しているでしょう。呼吸回数も極端に少ないです。これは1年やそこらで身につくものではありません」

平地での訓練や実戦では酸素摂取能力は身に付きづらく、高山を想定した気圧の低い場所での長時間行動で身に付き、強靱な心臓は平地でも身に付くが、高山に比べればそれほどでもない。

医務官として人体に詳しいシャマルは、これほどまで環境に依存しない瞬発力と持久力を兼ねた人間を見たことがなかった。現在、管理局にいる人たちは、そのほとんどが平地での訓練で、身に付く体力しか持ち合わせていないのだ。しかも、戦闘を主としない人間がそれを身に付けているということにさらに驚く。

彼の発言からするに、高高度対策であるということとは間違いない。

そう思うと、フェイトが彼への質問時に考えたであろう言葉が頭をかすめる。

(コタロウさん、貴方は一体どんな環境で過ごしてきたのですか？)

彼が機械士で、出向がほとんどである限り、過ごしてきた環境が一カ所で無いことは分かっていた。だが、それでもトラガホルン夫妻が以前こぼしていた、劣悪な環境というものはどういふところなのか気がなってしまう。人間関係だけでなく、環境そのものに。ただ、それは決して聞かないと心に決めていた。

(貴方なら、聞けば答えてしまいそう)

あの夫婦だから話すというものではなく、単純に『質問したから答えた』という結果に終わるのが、シャマルはなんだか怖かったからだ。

彼に近づけば近づくほどそれが分かってしまう。リインは分からないが、少なくともヴィータはその考えに至っているだろうと彼女は思いながら、今はそれを考えるべきではないと考えを改め、頭を振ってモニターを見なおした。

『……………』

上空にいるフェイトは彼から距離を置き、出現させた魔力弾を使

い果たして、肩を大きく上下させて呼吸をしていた。

左手にバルディッシュを持ち、右手のひらを顔に当て、ぐいと汗を拭う。しかし、辛そうな表情はうかがえず、微笑みがこぼれている。そして、バルディッシュをスタンバイフォームに戻して、両サイドの髪留めをほどいた。

なのはたちはどうしたのだろうかとおもっなか、彼女はツインテイルをやめ、後ろで1つに結びあげた。ふるふると頭を振って乱れないことを確認する。

(そこまでか)

戦っている最中、極稀に髪の毛が煩い（たまら）と思うときがある。おそらくフェイトはその状態に陥ったのだらうと、シグナムは彼女のポニーテイルに目を細め顔を緩めた。

次に彼女はカートリッジを3ロードして、魔方陣を足元に引き、スタンバイフォームを解除したハーケンフォームの状態で相手に手を翳（かざ）す。

『砲撃!?!』

数名の言葉が重なり、

「プ、ラズマ……スマッシュャー……ッ!」

それは撃ちだされた。

コタロウは、砲撃が打ち出されたと同時に右足を引き、腰を低く突く構えをとり、今までフェイトから移動してきた魔力を瞬時に練り上げる。そして、不規則な輝きを放っていたものから、鈍く落ち着いた光を傘に纏わせ、

「ムウッ！」

砲撃に向かって突き抜いた。

2つの光が接触しようとした瞬間、フェイトの撃ちだした砲撃がぐにやりと曲がり、彼の左肩、首元すれすれをかすめることなく通過する。

『……………は？』

傘は光を失って、模擬戦開始時の通常の傘に戻る。

「……………はぁ……………傘を開いて、対応すると……………はぁ、思ったのに……………」

それだけ言うと、また彼女はバルディッシュをザンバーフォームに変え、魔力弾をまた複数生成した後、コタロウに切り込んでいった。

「……そうか、干渉だ！」
「干渉？」

思い出したようにシャリオが声を上げる。

「はい。フェイトさんが打ち出した砲撃に対し、コタロウさんは今まで遷移してきた相手の魔力素子で傘の周りを砲撃を同じ魔力結合を施し、砲撃と同じ速度で撃ち抜くことで干渉、つまり相手の砲撃の『波』に同様の『波』を与えて、歪ませたんです。本当はコタロウさんのほうも歪むんですが、手に持っている分、力で押さえつけて反動を相手に返したんでしょね」

「そんなこと、可能なんか？」

「目にしたと思いますが、可能です。ただ、それは相手と同類の魔力、同様の魔力結合、加えて同速でないと発生し得ません」

さらに、とシャリオは続ける。

「この、言うなれば『砲撃干渉』は、理論上だれでも可能です」

教本にしか載っていない、あるいは部屋の中で行なう実験くらいにしか見たことの無い現象がこれだけ広い空間で行われたことに、シャリオは興奮を隠しきれない様子だった。それは当初抱いていた、傘と彼自身の秘密を打ち消す程である。

「片や攻戦一方、片や防戦一方だからできるのでしょね」

彼女は声を漏らす。

確かに、一方が攻撃に徹し、もう一方が防御に徹する。お互いが1つのことしか考えないが故にできるものだと言っただとシャリオは考える。攻める人にとって防御を考えないことは一つの利点とも言えた。

そうシャリオが考えるなか、はやてとヴィータは彼女の言葉に思いついた節があった。

「わかりません。少なくとも、私はジャンとロビンに勝ったこととはありません」

「ネコはいつも防戦一方だもんな」

ホテル・アグスタでのオークションの護衛任務でコタロウとトラガホルン夫妻たちとのやり取りだ。

『（もしかしてあの2人、守ることしか教えてないんじゃないか……）』

勝ったことがないというのは、同時に負けたこともなくて、防戦一方というのは攻撃を教えてない、あるいはコタロウ自身が攻撃することを拒んだのではないか。と思わずにはいらなかった。

『戦うことで大切な人を守る』というのは聞いたことがあるが、純粹に守る技術だけに特化した人物を見たことがない。

彼女たちがよく知るユーノ・スクライアでさえ、バインド等の敵の拘束する魔法を持っている。多分、ホテル・アグスタで捕え損ねた人物との攻防戦は誰かの助言と独自で考えての行動だったのだろう。普通のワイヤーを使用して拘束したと彼は言っていた。

「でも初めてね。ネコが実戦をしたなんて」

「ああ、そうだな。少なくとも出会ってからは」

「え、うん。うん？　そ、か。いや、思い出したよ。初めてだ、僕。模擬戦以外で人と戦ったの」

『快拳だ』

だからあの時、そんな会話をしていたのだ。それにデバイスである傘を使わずに戦ったのは今日話したところからも考えることができる。

「あれだけの戦い　いや、守りか。あれだけの守りができて、細かい魔力制御、アタシら顔負けの身体能力をもっているのに。魔力量が低すぎて正規の武装局員じゃないから、デバイス使った戦闘は緊急時以外規定違反？　なんだそれ？」

フエイトの息をつかせない魔力弾の応酬と剣による連激を、傘の形態を変えて柔軟に対応し、彼女の体力を削ぎ落としていくコタロウ。しかも、彼は最小限の動きであるため、体力消耗は僅かで相手の魔力を擦り取る。

（魔力量の低い人間が魔道師になれないのをこんなに不毛に感じたのは初めてだな）

そんな彼を見ながらヴィータは戦いたい反面、狼狽して眉を動かす。なんとも複雑な気分であった。

だが、その雨のように2人の間に降り注ぐ魔力弾のうち、その1つがおかしな軌跡を描いていることに気が付く。

なのはもそれに気付いた。

「フェイトちゃん、気付いてない！」

それはフェイトの背後の死角を捉え、そこからコタロウを狙っている。今までもフェイトの背後からの魔力弾による攻撃はあったが、かなり早い段階で彼女は避けて対応していた。

今回はその動作を取ろうとする気配がない。

体力消耗による集中力の低下で、想像以上に自分の体力が削られていることに気付いていないのだろう。精神力で戦っているといってもいい。

なのはは瞬時に念話で呼びかけようとするが、呼び掛けることで逆に集中力が切れてしまう可能性があり、躊躇ってしまった。彼女いや2人の周りにはなのはでさえ訓練に使用したことの無いくらいの魔力弾が飛び交っている。

その一瞬の戸惑いで、魔力弾はフェイトのすぐ背後まで迫ってきていた。

『…………え?』

試験終了 6分5分前 in eyewall

(……………)

プラズマスマツシャーを撃つてからか、それともそれ以前からだろうか。フェイトは考えることを止めて、純粹に戦いを、彼が自分の攻撃を受けるわけでなく擦り続けるのを楽しんでいる。髪を結びかえたことに意識はない。

「……………はあ、ングッ……………はあッ!」

ぶつかり合うことを彼はさせてくれない。フェイントが通用しない。自分の動きを見逃さない。位置を移動してかわすということをしてしない。

それに加えて魔力弾を狙っているのにそれも身体を張って避けることはせず、自分に当たらないように軌道をかえるのだ。

上斜めからの斬りつけるが、角度を変えられ当たらない。反して再度斬りつけても同様だ。だが、当たらないことに対しての焦れる

衝動はない。

そして、この時、残り時間が僅かであることに気付かなければ、自分の体力が既に尽きかけていることにもフェイトは気付かなかった。

だから、今までなら気付いていた背後にある魔力弾に気付かなかったのは、意外ではなく当然であった。

上下左右から魔力弾を先行させながら正面からフェイトはぎらりとコタロウを睥睨し、重心を下げ、斬り込む。

その時、今までの傾向として、傘を伸ばして魔力弾の軌道を変え、自分の振り下ろす剣に即座に対応するが、

(……えっ!? 当たっ……た?)

その挙動はなく、相手の左腰、右肩、左目上　バイザーが砕ける　右足に当たり、

(　　ッ!!　止められない!)

我に返り、自分の剣を止めようとするが、寸止めする位置に剣はなく、相手の左肩から右腰骨まで思い切り振り抜いた。

コタロウはその間、自分に当たる魔力弾をもともせず、フェイトの左肩に傘をのせるだけに執着し、彼女が剣を振り抜いた瞬間、自分に引きこむようにして身体を入れ替える。

身体が入れ替わる瞬間、フェイトは今まで自分がいた場所に魔力弾が迫っていたことを知り、それを彼は小回りのきく折りたたみの傘で弾を逸らした。

「あの、すみま
」
「集中力を、切らせないで下さい」

砕けたバイザーから片目だけ覗かせ、彼女を見据える。

その目で、はたと気付いた彼女は急いで周囲を飛び交う魔力弾を再び制御させようと意識を集中させるが、疲労からか、今の今まで制御が取れていたのに、魔力の制御が取れない。

体中に気だるさが襲いかかる。完全に集中力が切れ、今まで忘れていた疲労が一気に押し寄せる。

その証拠に、

「あの！」

魔力弾を抑えることができず彼に迫り、逸らすかたちで終わる。
フェイトはぐらりと飛行でさえ危うくなる。

「危険です。近付かないでください」
「でも！」

なのはとヴィータが向かってきたが、それを制止させる。

コタロウは傘を口にくわえ、崩れ落ちそうなフェイトを抱きとめ、

「私の腰元に掴つかまっていてください」

「……え、あの」

「掴まっついていてください」

「は、はい」

彼女が力を振り絞りながら腰にしがみつくのを確認して、傘を握る。

「残り約5分で試験を中止し、ひとまず危険回避行動訓練に移行します」

彼はフェイトに見向きすることなく、また押し寄せる魔力弾を逸らし、傘を構えた。

そこで改めてフェイトは周囲を見回し、先ほどまで制御のとれていた魔力弾をみると、それらが自分を狙っているようで、

(この弾幕のなか、コタロウさんは私の攻撃を受け続けてたんだ)

ぶるりと身体が震える。視界が広がり意識を外に向けると、今まで自分が起こしていた空間に少し恐怖するほどだ。疲れがなければ何のことはないが、今の自分の状態を考えると、そう思ってしまう。

「寒いのですか?」

「あ、いや」

「傘、アンマウント自浄後剥離、ブランケット、カラー色彩ダーク・アンド・シルバー

チエック」

「コタロウは生地と骨を分割させると傘を啜え、右手で生地を器用にフェイトのマントの下に滑り込ませた。

「マントよりは防寒効果があると思われます。すぐ済みますから、もう少しお待ちください」

集中力が切れ、体力も無くなり、魔力弾が制御できないのも合わさって、申し訳なさでいっぱいになりながらフェイトはコタロウを見上げたとき、

「^{アッパー}上昇から^{トップ}頂点へ」

ぼそりと彼の口から漏れたのを聞く。
すると、下から覗き込んだからか、模擬戦では見ることもなかった両目がよく見えた。バイザーは丁度半分壊れ、そこから光が差し左目だけを照らす。瞼は開かれ、瞳も僅かに小さくなり、少なくともいつもの寝ぼけ眼ではない引き込まれそうな真剣な目つきだ。

「^{ナイン}ロード数9」

傘が「かち」とダイヤルを回すような音が9回鳴り、僅かに回転

するが薬莖は排出されず、コタロウではなく傘の魔力量が跳ね上がる。さらに呼応してフェイトが抱きついている羽織りが9つに割れ、彼の踵ほどまで伸びた。

魔力反応は当然周りにいるのはたちにも感知できたが、一番近くにいるフェイトが何よりもそれを感じ取れた。

『キャット・オー・ナイン・ティル九尾の猫形式』

試験中止 0分〜3分 out and in eye w
all

943

和傘に生地はなく、骨組みがよく見えた。

その骨組みである36本の親骨は使用者の身長の5、6倍まで伸び、3本ずつ三つ編みに12本の束になる。次に傘の先端が伸び、束になったうちの3本がそれを中心に編み込まれていった。

その後、ネコの尻尾のようにぐねぐねと縦横無尽に空間を這う。

さらにヴェータはコタロウの羽織の文字が変化し始めたことに気が付いた。

『困った時の機械ネコ』

ネコは尻尾に語りかけ

尻尾はネコにのみ命を告げる

其れは天の如く九つ成り

中央鈞天
きんてん

東方蒼天 そうてん 西方昊天 こうてん 南方炎天 えんてん 北方玄天 げんてん

東北方変天 へんてん 西北方幽天 ゆうてん 西南方朱天 しゅてん 東南方陽天 やうてん

そして天はネコに微笑む

常にかわらぬ貴方の親友より……」

言葉が増え二重にぐるりと猫のマークを囲い、その猫の尻尾も丸つに分かれ、先端が稲妻のような『かぎしっぽ』となっていた。

「テストロツサ・ハラオウン執務官」

「……はい」

「今この時より、危険回避まで貴女を全力でお守りいたします」

「……は、はい！」

フェイトがコタロウを見たことに対し、彼は一度も目を合わせず、周囲の魔力弾を炯眼けいがんし鞭を振り上げる。

『 つ！？ 』

周りは彼ら2人が瞬時にして弾幕の外に出たように見えた。だが、それは違い、

「魔力弾が動いた!？」

位置、座標が動いたのはコタロウたちではなく、周囲の魔力弾だったのだ。その証拠にフェイトの髪も靡なびいてなければ、彼の羽織も靡いていない。

「高町一等空尉、テストロツサ・ハラOWN執務官をよろしく願います」

「は、はい!」

なのはは急いで寝ぼけ眼のコタロウに近づき、酷く疲労しているフェイトに肩を貸し、彼から受け取る。

「直ぐに離れてください。全弾に触発をかけたので一斉に襲いかかってくるでしょう」

「でしたら、私のシールドで」
「それでは、この『九天鞭きゅうてんべん』の動作確認ができません」

九つに割れた鞭と羽織の端がうねうねと動きはためく。

コタロウは彼女が離れないことに首を傾げ、カラコロと自分自ら彼女から距離を置き、襲い来る弾幕のほうを向く。

とりあえずなのはは、彼より今自分が抱えているフェイトを優先し、ウィータに合図を送ってシャルルのほうへ降りていくことにした。

その後、コタロウは向かってくる五十、六十では収まりのきかない弾幕を当たる当たらないにかかわらず、自分を通過するたびに全て擦らせ、魔力を削り取り、弾が存在を保てるまで縮小、自壊させて、その場を収めた。

フェイトがぼんやりと見るコタロウのその姿は、弾幕の中を静かに舞っているようであった。

階段を降りるように、カランコロンと下駄の音を奏でながら彼は

なのはたちのいる屋上に着地すると、すぐにフェイトはよたよたと立ち上がり口を開く。

「す、すみま、せん、でした!」

「構いません。こちらのほうこそ、試験に助力していただきありがとうございました」

息をつきながら、丁寧にお辞儀をする彼女にお辞儀で返し、フェイトがぐんと膝から落ちそうになるのをなのはとシグナムに支えられ、すぐに救護室へ運ぼうとする。エリオやキャロも彼女たちに付き添い、その後をスバルやティアナがついて行く。

そして、全員が隊舎へ戻ろうとするなか、シャルは寝ぼけ眼の男に口を結んで、腕を組んで仁王立ちをしていた。それを見て、歩みをとめるものがちらほらいる。

「コタロウさん!」

「はい」

どつやら、先ほどの自分を省みない行動にかなりご立腹のようである。

「もっと自分を大切にしてください!」

「大切にしていますか? 死ぬのは私も困ります」

「あの、いや、そうではなくてですね……」

彼にとっては死ぬか死なないかが重要だという。

シャルはコタロウにさらに注意しようとするが、よく考えればフェイトも、いや、彼女のほうが自分の疲労を考えない無茶な行動をとっている。そう、そちらのほうがこそ注意しなければならない対象だ。彼はそれを助け、守ったにすぎない。

そう考えると、怒りよりも仕様がなという気持ちのほうが大きくなり、彼女は肩の力が抜けてしまった。

「もう、いいです。もう少し、自分に気を遣ってください」

「わかりました」

「それで、コタロウさんは身体、大丈夫なんですか？」

極度に疲労したフェイトも心配であるが、彼も当然心配なのだ。しかし、そこでシャルは先ほどの模擬戦を振り返る。

(あれ？ フェイトちゃんは疲労してるけど、コタロウさんは……)

きよとんと彼女はまだバリアジャケットのままであるコタロウの身体全体をみる。

顔にかかるバイザーは割れて片目だけ垣間見え、胸元は傷は付いていないものの、僅かに焼け焦げた跡が斜めに走っていた。

疲労があつたとはいえ、速度が乗り切ったフェイトの全力の一撃をなにも防御することなく彼は受け切ったのだ。もしかしたら、余計な力が抜けた分、切れ味が上がっていたかもしれない。

シャルは自分で言うっておきながら、バリアジャケットが傘と同

じ生地を使用していたとしても無事なはずがないと思うと、身体が硬直した。
だから、

「ダメです」

と言った後、自分が彼の手で押しのけられ、前のめりに膝を曲げず、ばたりと倒れる彼を見た時、激しく動揺した。
目をぐるぐるさせながら、はやてたちの方を向く。

「い、い、い、医者あ~~~~~!!」

へたりと座り込んで訴えかけるシャマルに対して、全員が揃って『それはあなたです』と言葉を投げかけるのには、コタロウが無造作に倒れたこともあり、一時の間を要した。

第30話 『それはあなたです』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シユテルンです。

フエイトさんファン、どうもすみません

私は彼女、大人しめながらも、一度火が付くとスゴイ人と勝手に想像してます。

シグナムさんは戦うのは好きですが、常にクールな人でしょうか？
んまあ、六課の隊長陣は燃えるとすごいと思ってます。
沸点がそれぞれちがうことですね

それはいいとして。

今回、戦闘描写に力を入れました。
本っ当に難しいですね。

今のところは、お決まりの言葉ではありますが、
「現状はこれが限界です」としか言いようがありません。

勉強します。

さて、今回も色々と設定が出てきましたね。

（今回の厨二病設定）

1 擦過現象

- 2 ゼロレンジ
 - 3 アドヴァンスドグレイザー
 - 4 九尾の猫
- の4つです。

『干渉』については電子反粒子を使用した衝突ですので説明は要らないでしょう。

さてさて、

その1である擦過現象さっかげんしょうですが、魔力量の差、結合力の差を利用してなにかできないかなあと考えたところ、高校の時に生物で習った『浸透圧』を思い出し、作りました。

ようは、濃度に差がある場合、均一になろうとする現象です。

これを魔力に置き換えただけです。擦ることによって弾きだされた魔力素子を魔力量が低く、結合力が強い方面へ移動する。

これを擦過現象と名付けました。

(笑うところですよ？ どうぞ笑ってください)
ちなみに擦過というのは「擦り傷」である「擦過傷」から貰いました。

その2である『ゼロレンジ』

まあ、細かく言う必要はないでしょう。

ただ単に、なのはたちの世界では考えられないほどの接近戦を繰り返すことなんです。

その3

アドヴァンスドグレイザー

その2のゼロレンジで戦う人のこと。

フロントみたいな単語ないかなあ

アドヴァンス 決定！

擦過 擦る 掠る *graze*

グレイズ 決定！

それっぽい名前でもアドヴァンスドグレイザー

単純な脳みそですみません。

そして彼はアドヴァンスドグレイザーではなくマシナリーです。

さらに彼は夫婦から教えられたのではなく、それが一番効率がいいからという理由でこの防御方法を適用しており、アドヴァンスドグレイザーという単語、意味はしりません。

夫婦は知っているのですが、どうでもいいことなので話していません。

その4

九尾の猫というのは多分有名です。

cat - o' - nine - tails

九尾の猫むちのことです。九つの縄のついた鞭は主に罪人を打つために使われました。

別に九尾の狐から取ったものではありません。

うん。じゃあ、これを使おうということで採用しました。

これに空を九つに分ける九天と重ねました。

これくらいですかね。

ああ。

フェイトがプラズマスラッシャーに使った3ロード
A・Sでは1ロードなのですが、威力を増すために3ロードにさせ
ました。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞と用語解説になります。

高橋さん

イツキさん

グラムサイト2さん

神ちゃんさん

景雅さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

用語解説

eyewall: アイウォール

台風の目のことです。模擬戦している2人の間の俯瞰をin、外をoutとしました。苦肉の策です

撓り、撓み: しなり、たわみ

曲がることです。つりざおとかがよく撓みます。

睥睨: へいげい

にらみつけること。

第31話 『太陽と月』（前書き）

え

……

え

今の私にはこれが限界、です。

なにが限界なのかは、本編を知らんに……

はい。本編をどうぞ

第31話 『太陽と月』

古代遺物管理部機動五課が今年の4月から劇的に変化を遂げたのは5月中ごろ、つまり一月半経つてから、ようやく管理局内で噂されるようになった。

無論、ジャニカ・トラガホルン、ロビン・ロマノワ両二等陸佐をよく知る人から見れば、一週間、いや三日も経たずにそうなることは疑いの余地がなかったが。

機動五課が、彼らが来る前まで、査察官を丸め込み、実に巧妙に私腹を肥やし、且つ排他的な課であったことは、ある特定の年齢以上で怠惰な人たちの間では有名な話であった。

なおのこと悪いのは、知らない人間はそのままに、知っている人間を懐柔、あるいは脅迫の上で排斥する手段　主な対象は新人を取っていることである。

そのなか当時、部隊長であったロマノワ二佐と部隊長補佐のジャニカ三佐は、訓練校で偶々見かけた新人サングネア・ノヴァクが五課から自分たちの部隊　陸士910部隊　に来た時、局員としての夢と現実のギャップで打ちのめされる以上に目の輝きを失っていたため、こちらから『機動五課』という単語は決して出さず、世間話からやんわりと情報を聞き出した。

実際には直接本人が五課の不正を話したわけではなく、今日までの身の上話をする過程で目の動き、話し口調、呼吸から『何かあったであろう』という疑いを見抜いた。

そこからジャニカは　ロビンは自部隊の指揮に専念　本局に提出されている機動五課の不正の糸を紡ぎあげ、一度解かれた大きな縄を再構成したのだ。その縄には、罪に染まった人間ほど掴まりやすいコブが付いており、機動五課のトップから中堅クラスの人間

まで、多くの人間が釣れた。

彼はかつての上官であるリヒト・ダヴェンポート二等陸佐から助力を得、上官の名前は隠しながら、足元からではなく、トップの首から切り落としにかかった。

機動五課隊舎部隊長室へ 部隊長室へ向かう間、内情を知らない人間に「数日後に残っているのは君たちだけかもしれない」と不敵に笑いながら彼らを不思議がらせ 彼はロビンと訪れ、機動五課課長に罪状を延べ、相手のくだらない言い訳を無視し、解雇を言い渡した。

「機動五課課長ヘルバ・アコニート三佐、貴方の奥さんには既に伝えておきましたよ。『あと数日後に離婚すれば、旦那の退職金のほとんども貰うことができません』と。さすがに局に今まで貢献した先輩殿を無一文で放り出すようなことは致しませんから」

「貴様ッ」

「もちろんもちろん。貴方がおよそ20数年間で築き上げてきた信頼から得た人脈を使用して私に挑んでも構いません。ただ、私が言いたいことは……」

気迫と共に自分の体内にある全魔力を練り上げる。

「隊舎入り口からこの部屋まで徒歩で3分32秒かかった。1分32秒でココヲ去レ」

びりびりと地面が揺れ動き、食堂では皿が数枚割れた。

その日は、その時以外の時間帯でも皿が数枚割れている。

事前に本局にその日限りの人事権限を与えられていたジャニカ二佐は、既に両手で縄を掴んでいる人間全てをその場で解雇し、片手、または掴もうとした人間は例外なく降格の上出向させ、内情を知らない人間には、今五課におかれていた現状等を丁寧に説明し、その人たち以外、五課に所属している人間を全て立ち退かせた。

さらに、この内容は局内ですら情報が出回らないよう、ジャニカとロビンは努めた。それは陸士部隊に五課の現状を話し、部隊を二分割してまでも行なわせる徹底ぶりであったという。

だがそれは、リヒトのことを考えてのものであり、彼にスポットが当たってしまうのを避けるためだ。彼ら自身、これが外に漏れることになっても後ろめたさはない。

それからジャニカの元へ通信で機動五課への部隊長の誘いが来たのは、五課の事後処理が終わった3日後で、その返事をする前にコインを1枚投げたことは言うまでもなく、

「良い知らせと悪い知らせがあるのですが、どちらから先に聞きたいですか、ダヴェンポート二佐？」

「良い知らせから聞こうか」

「機動五課への辞令ですが、快くお引き受けいたします」

「ふむ」

「そして、ロビン・ロマノワ二佐が私の補佐に就きます」

「ほう」

その場に居合わせているロビンも含め、暫しの間が訪れる。

「それで、悪い知らせは？」

『……………』

ロビンは結局のところ、ジャニカが五課の不正を調べている間に、陸士910部隊内で次期部隊長となる人間、部隊長補佐となる人間の選出、育成、引き継ぎは全て終わらせており、異動時の部隊内の惜しまれることを除けば、他のすべては滞りなく終わらせていた。

機動五課には事情を知らない人たちに加え、自分が今まで出会い信頼を築いた人たちの中でも、その後輩たちを回してもらい、彼らとともに課の再編成を図った。そして五課発足 異動前 までのおよそ5カ月間、陸士部隊指揮の傍ら、その局員たちを育成し、4月から問題なく始動できるよう力を尽くした。

そして、始動してから約1ヶ月半後、つまり最近になってやっと軌道に乗り始め、時間に余裕が出来始めた。この前のコタロウとヴィータを交えての食事が1つのタイミングとも言える。

また、今日はジャニカとロビンは部隊長オフィスで、お昼時間を利用して無言で必死に眉根に皺をつくらないように堪えていた。

「やーの。ルナとねるの！」
「だーめ。ソルと！」

モニターの向こうでは、今年で5歳と4歳になる息子、娘が互いに声を張り上げていた。

撮影しているのは夫婦の家の家政婦、サンテ・シユールムムである。

2人は過去に撮影したビデオを見ているようだ。

「ルナはパパと寝ようか」

「パパはめがこわいからやー」

「うぐっ」

1人の男、ジャニカは無残にも散り、

「ソルはママと寝るのはどう？」

「ママはおはなしながいからやー」

「むぐっ」

1人の女、ロビンもまた無残に散っていた。

2人の子どもたちは、また自分たちの間にいる男の裾を引っ張る作業を開始する。

『ネコちゃんとねるのー！』

『……………』

「ネコちゃんはソルとねたいよねー？」

「ちがうよー。ネコちゃんはルナねー？」

「……………ふむ」

右手を顎に添えて考えようとするが、2人に頭を撫でさせられることを強要され、どちらがより多く撫でてもらえるかの競争が眼下で勃発しており、2人の頭を交互に撫でさせられていた。

「この前のように、一緒に寝るとするのはダメなの？ ソル、ルナ？」

『うん』

考えている最中でも、自分たちを撫なでもらえるよう、手が移っては自分の頭の上に乗せなおし、その間、その手の持ち主である男は手をなすがままにされている。

その後、その兄妹は彼の右足、左足に抱きついて、

「ルナとはねないけどネコちゃんとねるー」

「兄いとねないけどネコちゃんとねるー」

「それでは、やはりそれもこの前のように、僕が2人の間に入るということでいいかな？」

『うん！』

頷いてズボンがもぞもぞと動いた。

「それでは、私はお風呂をお借りいたしますね、ジャン、ロビン、サントさん」

『……………』

「はい。ごゆっくりなさってください」

『ソル（ルナ）も、はいるー』

「お二人とも、もう入られたとサントさんが仰っていたけど？」

『いいのー！』

僕は構わないけど。と言いながら両足にそれぞれへばりついている兄妹をそのままに、膝を曲げずにゆっくりバスルームへ歩いて行く。

『……………ちょっとソルオス、ルナエラ』

『なーにー？』

『どうしてそんなにネコがいいんだ（いいの）？』

ソルオスは彼の右足から、ルナエラは左足からちょっとぴり顔を出して、ジャニカとロビンのほうを見て、

「ネコちゃんのおねむのめがいいのー」

「ネコちゃんはおうたがうまいのー」

『……………』

また自分たちが抱きついている足に振り落とされないう、顔を隠した。

確かに、以前来た時に試しに彼を自分の子どもたちと一緒に寝かせたことがある。彼らが好きな子守唄も教え、全て彼に任せ、ソルオスとルナエラに任せたとはいえる。一晩3人だけにさせたのだ。

その次の日、その男が帰るときに2人が『やー!』と駄々をこねたのを見て、ジャニカとロビンは成功したことを内心喜んだが、まさかこれほどとは思っていなかった。

自分の親友が他人にも好かれることは喜ばしいことだが、この時ばかりは表現できない複雑な感情を相手に抱く。

『ねえ (なあ) 、コタロウ?』

「うん?」

『貴方 (お前) には負けない』

「……ふむ」

彼は今までの会話の流れから何に負けないのかを考え、1つの答えを導き出し、

「お先にどうぞ」

バスルームへの道をあける。

『そうじゃないわ (そうじゃねえ) !』

そこでドアのブザーが鳴り、2人は映像を切って入室を促した。

「失礼します」

「どうした、サングネア三士？」

「御休憩中申し訳ありません。今年度の経費として回した、去年破損した食堂の食器についてなのですが……」

どれ。と書類を受け取るうとしたところをロビンにかすめ取られ、

「376枚。結構割ったわね」

「……そうか」

ジャニカは特に言い返すことなく、ロビンが書類の不備がないことを確認してサングネアに返すところを目で追う。

「こちらは御子息と御息女ですか？」

フォトフレームに映し出されている2人の子どもが目に入り、サングネアは明るく話しかけた。

「ああ、私の勝てない対象だよ」

「それはそうでしょう。それ以外であなた方に勝てるのは、お互いしかおられないのでは？」

彼は苦笑し、お礼を述べて部屋を出ようとするが、

『いや、既にある人に俺（私）は負けている（わ）』

まさかと彼は振り返ると、ジャニカとロビンは腕を組んで物思いに耽^{ふけ}り、眉を寄せていた。

魔法少女リリカルなのはStrikers ㄱ 困った時の機械ネコ
第31話 『太陽と月』

そもそも、模擬戦が終わっても直ぐにバリアジャケットを解除することを忘れていたことから、コタロウが相応のダメージを負って

いることは明白であった。

「とりあえず、ネコさんも医務室へ連れて行きましょう。私が運びます」

提案をしたのはスバルだ。六課の、特に新人の中では彼女が一番力があり、以前ティアナが倒れたときに運んだのも彼女である。彼女はまず、うつ伏せに倒れている彼に近づき、

(……んしょっと)

かなり力を入れたことに不思議に思いながら、彼を仰向きにさせた。

魔力弾が当たったからか、あるいは倒れたときに、砕けたバイザーの破片が掠めたからなのか、彼はこめかみから少し出血している。シャリオは避ける意味も込めてそのバイザーを拾い上げ、内側からのぞきこむと、何の変哲のないただの光量を軽減させる防護眼鏡サングラスのようなものであることを確認する。別段、高性能な機器というものではない。

「ティア、ちょっと手伝って」

スバルはしゃがみ、コタロウに対して背を向けて、ティアナに彼を起こして寄り掛からせるようにお願いする。

「それじゃ、いくわよ。いち、にい、さ」

掛け声に合わせてスバルは力を入れるが、しばらくしても背中に重さは感じない。

「……ティア？ どうしたの？」

「なに、これ……すごく、重いん、だけど」

「うん？」

振り向くと、依然として仰向けのままであるコタロウと、彼の肩甲骨あたりに手を入れ 実際は地面と肩甲骨の接地面で手は止まっている 顔を歪ませているティアナがいる。

「ちょっとスバル、ネコさんどうやって仰向けにさせたの？」

「え？ それは、こっ、ごろりと……うん、確かに力を入れたけど

……そんなに重い？」

アンタの馬鹿力と一緒にしないで！ という言葉を飲み込み、

「起こしたら私が支えるから……」

「う、うん。分かった」

ティアナと代わってスバルが彼の頭上に座り込み、両腕を滑り込ませようとしますが、力を入れながらでないと入らない。しかし、なんとか入れることができた。

「せーのっ！ ……け、結構、重、い！」

「でしょ？ これ、普通の重さじゃないわよ」

女性と比べるのはどうかと思うが、明らかにティアナの体重の3、或いは4倍以上の重さはある。

エリオとキヤロも彼女たちに近寄る。

「僕らも手伝います」

「腕をスバルさんの肩にのせればいいんですか？」

「あ、うん。お願い……でも、気をつけて。重いから」

ティアナが起きた上半身を支えながら、エリオとキヤロは後ろ向きに構えているスバルにコタロウの右腕をのせようとしますが、予想以上に重かったのか、彼の腕をぶらりと垂れ下げてしまう。

その時、コタロウの袖から何かが落ち、がらんと音を立てて転がる。

「……これ」

「……スパナ？」

長さが丁度二の腕くらいのスパナ レンチ が日の目に晒されきらりと光った。心なしか腕の重さも軽くなっている。

『……………』

エリオは右袖、キヤロは左袖を無言でゆさゆさと振ってみると、がらり、がちん、がこん、はたまた、どさり、ばさっ、コロコロといった音を立てて、大きさ、長さ、重さ様々な工具が地面に転がった。

『……………』

再び腕を持ち上げてみると、普通の重さである。

「ネコさん、ちょおっと失礼しますね」

気絶して頭を垂れているコタロウの反応は聞かず、スバルは彼の羽織りを無理矢理脱がした。もちろん、上着の1枚を剥いだにすぎないのでまだ中に着ている。

案の定、いや、かなり重い。これだけで2人以上の重さはある。

『……………はあ』

疲労しているフェイトと当惑しているシャマル以外はさすがに諦めたのか、出てきたのはため息だけだった。

だが、その数分後、新人たちは同じ思考に至る。

『（低酸素で、しかもあの重さで……模擬戦、やったんだ）』

意識が覚醒し始め、自分の頬に空調機のひんやりとした風を感じるようになる。フェイトは目を覚ました。

「……………ん」

なのはとシグナムに支えられながら、医務室のドアをくぐったのは覚えているが、寝かされたところまでは覚えていない。フェイト

は手に力を入れて握ったり開いたりして、自分でも大分回復したことが分かります、体調の確認も兼ねてゆっくりと身体を起こす。どうやら、普通に動けるまでには回復しているらしい。もしくはシヤマルが処置してくれたのかもしれない。

自分の服装を見直して、特に身体のべたつきも感じられないことから、誰かがやってくれたのだろうとぼんやり考えて、ふと下を向くと、起き上がる拍子にずれた毛布が目に入った。

(……これ)

コタロウが自分に貸してくれた、変形した傘の生地である。黒地のバリアジャケットに合うように、黒を下地に銀色格子のデザインが施されている。

シヤリオは特別な編み方がされていると言っていたが、質感はまさに毛布そのもので、心地よい。

(本当は違ったんだけど……ありがとうございます)

恐怖心からの震えを勘違いしたコタロウに内心お礼を言いながら、何時返そうかと毛布を折りたたみ、膝の上のせて考えようとしたとき、視界に何か入る。

(コタロウさん?)

そちらの方を向くと、羽織を毛布代わりに仰向けになって寝ているコタロウがいた。そのもう一つ向こうには多種多様な工具が大量におかれている。

フェイトは床に足をつき、まだ少し疲労感が残っているが、歩くことに支障はなさそうであることが分かると、静かに寝息を立てているコタロウに近づいて、午前中の模擬戦を思い返した。

開始直後は戦術を練り、相手の実力を量りながら加減を調節して彼の試験に貢献しようかと思っていたのに、気が付けば今持てる魔力や技術を最大限に出してしまった。いや、当時の感覚を思い出すと、いつも以上に実力を発揮できた気がすると思う。

(……凄かったなあ)

背後からの自弾が魔力の流れからか手に取るように分かり、神経が研ぎ澄まされ、まるで空間を制御下に置いたような感覚は、シグナムとの模擬戦でも体験したことのないものだ。少しの間だけゆくり時ときが流れていたような気もする。

最後は疲労で感知することは出来なかったが、かなり特別な感覚であった。

そして、コタロウを見下ろす。

配分を忘れた行動により、試験を中止してしまった申し訳なさはあったものの、あの時、彼に抱きとめられた感覚と、こちらから振り落とされないように抱きつき、下から覗き込んだ時の彼の表情のほうがか心象に残っており、

(……ん？……)

僅かに脈が跳ね、顔に熱を感じた。

フェイトは片手を頬に当てて首を傾げる。彼は顔を自分に向けることはなかったが、魔力弾の光が映った寝ぼけ目でない、慧眼した真剣な目つきは兄であるクロノや親友のユーノ、または他の男性とはまた違う印象を受ける。

兄やエリオは別として、そもそも捜査中の犯人確保以外であればど男性を近くに感じたことは、記憶を掘り起こしても出てこなかった。

ふるふると首を振り、静かに大きく深呼吸をして落ち着きを取り戻し、もう一度彼を見る。

コタロウは呼吸の回数が少ないのか、言ってしまうまさに死んだように眠っているようだ。うつろながら、彼がこめかみに怪我をしていることを覚えていて、その部分を見るために身体を少し折り、身を乗り出して覗き込む。シャルが治療したのだろう。怪我は綺麗に消えていた。

そのまま、自分が思い切り斬りつけた胸の方に視線を移す。

(大丈夫か……な？　　ひうつ！?)

自分に何かの影がかかるのに気が付くと、後頭部に重みを感じ、そのまま胸元に引き寄せられた。

「ん、眠れないの？」

「　　ううう!？」

フェイトはびくりと瞳が小さくなり、一瞬呼吸が止まる。
中腰の体勢が保てず、膝を折り、ベッドの端に体重を預けること
が彼女に出来た行動である。

(コ、コココタロウさん!?)

彼にゆっくりと髪を撫でつけられる。呼吸は一瞬だったが、思考
を取り戻すのには数回の呼吸を要した。脈は先程とは比較にならな
いほど乱れ、それはまだ、取り戻せていないし、取り戻せそうにな
い。

さらに、

「あなたは私の愛にいつ気付くのだろうか？」

と口ずさみ始めたときには、一度大きく心臓が跳ね、それを最後
に止まってしまうのではないかと思わずにはいられなかった。

だが、淑やかで琴線に触れる唄だからだろうか、そのようなこと
はなく、フェイトの落ち着きを取り戻させる。

「言葉をかえていくつも愛は伝えられるけど、あなただけは何もの
にもかえられない……あなたにはそれが分かるかい？」

「……………」

曲調のせいなのか、彼の声色のせいなのか、それともゆっくりと

髪を撫でられているせいなのか、分からないことは多いが、これほど愛を伝える歌詞なのに、とても心地が良い。

唄を聴く限り、月を思わせる歌詞で、まだ鼓動も早く、顔に熱を感じていても、身体中の強張りこわばりはとれていくのが分かった。

「……私はあなたを、愛しています」

「……………」

その言葉を最後に手の動きも止まり、また静かな間が流れる。そこで初めて、コタロウの静かすぎる寝息と心音が自分の耳に入ってきた。

(終わっ…………た?)

だが、そこでフェイトは再び驚く。

彼の方を向いておらず、ただ片耳を胸元に当てている自分が、唄が終わっても自ら起き上がるうとしないのだ。

別に、彼に力や魔力で強制的に押さえつけられているわけではない。

(…………あつたかいな)

頭に乗せられている彼の手がほんのりとあたたかい。

フェイトは少し触ってみたい衝動に駆られた。頭的位置は変えず

に、そろり、そろりと手の位置を探るように自分の手をそのあたにかみのあるほうへ持っていく。

そして、自分の人差し指が彼の手のどこかに触れる。その時だった。

『失礼します』

「ッ!」

入室のブザー　医務室は他の部屋とは違い、患者を驚かせないメロディ　が鳴り、エリオとキヤロが入ってきた。彼女はドアが開く前に乗せられているコタロウの手を払わずに、両手をベッドの端に置いて勢い良く立ち上がった。その勢いで彼の手がぱたりと自身の胸の上に落ちる。

「フエイトさん、大丈夫ですか？」

「訓練中だったんですけど、今、休憩時間で……」

午後の訓練途中の休憩時間を使って、なのはに了承を得て、様子を見に来たというのだ。それほど医務室へ歩く疲労困憊したフエイトの姿は、痛々しかったらしい。

「あの、やっぱりもう少し横になっていたほうが……」

「顔、赤いです」

「そ、そう?」

フェイトの頬は上気して、さらに髪がすこし乱れているせいかな風邪を引いているように見える。疲労がよく風邪につながることを知らなくても、今の彼女が心配を助長させる状態であることは手に取るように分かるからだ。

「だ、大丈夫、大丈夫。心配してくれてありがとう、エリオ、キヤロ」
「なら、いいんですが……」

訝しむ2人に彼女はにこりと微笑むと、それ以上彼らは自分に訊ねることはなく、その奥にいるコタロウに目がいく。

「コタロウさんは大丈夫なんでしょうか？」
「へ？ あ、うん……今は、ぐっすり眠ってるみたい」

フェイトはさっきの勢いに任せた飛び上がりで、起こしてしまったのだらうかとおずおず後ろを向くと、特に変わることなくコタロウは寝息を立てていた。

「そ、それじゃあ、コタロウさん起こしちゃうかもしれないから、出ようか？」
「フェイトさん、あの、本当にお体のほうは……」
「一応ね、シヤマルには連絡しておくよ」

キャロの気遣いに、頭を撫でながら応えた後、フェイトはシャマールに念話で起きたことを伝えると、今日は激しい運動を決してしないことを約束し、医務室を後にした。

2人が自分を守るように先頭を歩くのを見ながら、フェイトは胸に手を当てる。

(……大丈夫、かな?)

「フェイトちゃんとコタロウさん、大丈夫やるか?」

「見に行くですか? リインはここにいますから、様子を見に行ってくると思いますよ」

モニターの向こうからリインが顔を出して、にっこりと微笑んだ。はやては指を顎に当てて一考すると、息抜きがてらに行ってみようかと思いい席を立つ。

はやてたちはシャマルの診断結果により、2人とも問題ないことが既に分かっていた。フェイトは疲労、コタロウは彼女の攻撃を受けた衝撃　羽織には工具が防護の役割を果たしていて、斬られた痕はなく、斬撃による衝撃　で気絶したのだ。彼女は休めばすぐ良くなるし、彼は起きた後の再診で予後を見る。

「起きていたら、2人によろしくです」

「ん〜。ほなお留守番、よろしくな？」

「はいです」

そういつて、はやてはオフィスを後にした。

正直、コタロウが自分を含め六課の面々の雰囲気という雰囲気を、回れ右したかのように変えることは既に分かりすぎるほど分かっていた。

「ソルも眠れないの？」

「……え？」

しかしそれでも、ちょっと内心興味本位で寝ている彼の顔を覗き込んだとき、彼のほうを向きながら、かなり相手の顔に近い位置に

顔をうずめることになるとは、思ってもみなかった。

彼は機械士^{マシナリ}だ。機械を修理し、雑務もこなす優秀な人である。だが、今の状態はどうか。確実に自分の思考を壊している。

(……ふわわわっ!! 近い近い近い!)

はやては壊れて止まっていた思考をなんとか取り戻すと、疑問以前に彼をちょうど上目遣いで見上げる状態にある自分に、今まで体験したことないような緊張と動揺を覚えた。

「君に出会ってから、全てが変わった」

「んんんん!?!」

どうやら彼は起きてるときだけでは飽き足らず、寝ていても六課の面々 現在、この場にいるのははやてのみ を驚かせるらしい。

「眠っている君には分からないかもしれないけれど、傍にいただけで嬉しいんだ」

「ンナッ!?!」

彼が寝ぼけていることと、どうやら子守唄を歌っているのはすぐに分かった。なかなか会えない人 多分、ソルという人 を想う唄で、嬉しい気持ちと哀しい気持ちが揺れ動いている歌詞になっ

ている。

歌詞を理解することで思考に余裕を見出し、そのまま深呼吸をしようとする。

しかし、それは息を吐こうとしたところで思い切り両手で口を押さえた。

(こんな、か、顔の近いところで深呼吸!? 絶対、できひん!)

彼のほうを向いていないのであればいざ知らず、向いている今、普通に呼吸をするのでさえ恥ずかしいことに、はやては気付いたのだ。

とりあえず、呼吸をいつもより慎重にさせることで事なきを得たが、それでも彼の唄と、髪の間を掻き分けながら指の腹を這わせるような撫で方は止まらなかった。

(……うう)

思考や感情は頭脳で行なわれているにも関わらず、胸は激しく鼓動し、それが本当なのかと疑いたくなる。相手がこの鼓動に気付いてしまうのではないかというくらい、自分の耳には自分の心臓の音が聞こえた。

「今、ここにいる君は果たして夢なのか、現実なのか」
「……………」

ひとまず、目を閉じて自分の心臓を押さえつけることに集中するが、周りに何も見えなくなると、彼の手と、呼吸によって上下する胸に余計意識がいつてしまう。

だが、さわり、さわりと自分の髪に触れる手はとてもあたたかく、撫でられる回数が増えれば増えるほど、何故か落ち着きを取り戻していった。

(ヴィータたちは、こんな感じやったんかなあ)

最近、ヴィータやリイン、ザフィーラを撫でることは滅多に減り、逆にはやては撫でられるのはこんな気分なのかと思う。言い知れぬ不思議な感じだ。始めは驚きはしたものの、今はそんなことはなくなすがままにされている自分に驚くほどである。

それでも、唄には終わりがあり、

「僕の目が覚めても、それが夢じゃなく、君が近くにいれば……いいいな」

「……………」

手の動きも止まる。

その頃には、はやては完全に落ち着きを取り戻し、ゆっくりと目を開く。

「ッ……」

彼は微笑んでいた。

「……ん」

コタロウは目覚めた。

視界はぼやけ、何度か瞬きし、最初に入ってきたのが天井だとわかると、開いた目を再び細くし、

（医務室？）

起き上がり、今いる場所を把握する。

次に何故ここにいるのかを、思い返した。

(昼食前に傘の試験運転、残り5分で試験項目の変更をして……)

顎に手を当てて、目を閉じ、しばらく考えた後、自分の最後の言葉
葉を思い出す。

(そうか、『ダメです』と言ったきり記憶が無いということは、そこで気絶したのか。それで誰かが医務室に運んだ……重かったろうな)

胸が痛くないことに不思議の思おも、シヤマルがなにか処置をしたのだろうと決定付け、ここまでどうやって運んだろうなと考えながら右を向くと、そこには大量の工具が置かれていた。

(なるほど。工具を別にして運んだのか)

ずり落ちた羽織に目を落とし、頷く。

彼は傘を持ってセットアップを解き、いつものつなぎ姿に戻ると、胸元を開き、工具を袖や胸に仕舞い込んでいく。どうやら、バリアジャケットに変身しても工具が消えることはないらしい。ただ、それとは違い、足のポケットにも工具を入れていく。

(あの一撃、効いたなあ。4年5ヶ月ぶりだ)

彼は、試験協力者が怪我をしてしまうことに気付いたとき、試験後、なるべく問題なく行動ができるように努めることを一番の優先事項としている。ジャニカとロビンは彼が自分の攻撃を受け、気絶するたびに、「自分を優先しろ（なさい）！」と怒りや泣きつきに近い訴えをされるが、コタロウにとってこの行動は当たり前であり、気絶して遅れた作業は自分だけにかかる負担なので、気にはしなかった。

もし、本当の戦闘になったときは、対応を変えれば済む話だ。自分の行動による負担は自分で取ればよいと考えている。

コタロウは時計を見る。

（今は…… 17時、か……）

休憩時間を抜くと、4時間分の遅延が発生していることがわかる。そして、通常勤務時の作業項目を確認し、残作業を終わらせるため、

「……仕事」

彼は医務室をでた。

「フェイト隊長も本当に強情なんだから」
「もっと休んでてもよかったんだぞ？」
「……ごめん」

午後の訓練が終わり、全員で身なりを整えて隊舎へ戻る頃、なのはとヴィータは途中で訓練を見に来たフェイトに、苦笑にも拗ねるようにも似た口で言葉を漏らしていた。
シャマルから許可を得ていても、心配なのは変わらないのだ。

「気をつけてね」
「全くだ」
「……ごめん」

彼女たちに対し、フェイトは謝る以外の言葉は許してもらえそうになかった。

そして、隊舎の入り口をくぐり、何度目かのなのはたちのお叱りに、何度目かの謝りを見せようとしたとき、

「ヴィータ、なのはちゃ、いや、なのは隊長、フェイト隊長！」
『…………ん？』

なのはたちと目があうとはやてが早足で近づいてきた。小走りといってもいいかもしれない。

「どうしたの？」

「コ、コタロウさん見なかったか？」

彼女の後ろからシャマルも少し息をついて、彼女たちに近づく。

「八神部隊長、ネコさんがどうかしたんですか？」

「さっきな」

「コタロウさんがいなくなっちゃったんです〜！！」

『…………へ？』

話を聞くと実に簡単で、シャマルはシャリオとの仕事の合間に、定期的に彼の様子を見に医務室へ行ったのだが、仕事が終わって、医務室へ戻ったところ彼がいなくなったというのだ。

彼女たちは、焦り以外に、怒っているようにも見える。

「…………ムウ」

「フェイト隊長？」

「へ？ あ、ううん。と、とりあえず探そう？」

『はい!』

新人たちも、幾分か口をへの字にして、ひとまず隊舎の奥へ早足に歩こうとする。

それは誰かを心配させたためにしているのか、彼について心配しているのか分からないが、彼らも多少怒っているようだ。

そのなか、ヴィータは、腰に手をあてながらシャマルを見据え、ため息混じりに口を開いた。

「銭湯の時も言ったけど、念話で全体に呼びかけてみたのか？ あと、探査魔法とか……あ、それは大げさか」

「……あ」

念話で呼びかけると、彼はすぐに見つかった。

外の窓を拭いているところだったらしい。

「コタローウーさーん」

「はい」

『……………』

「あなたが何故、このようにイスに座らされて、皆さんに囲まれて
いるか分かりますか？」

実際には、シャマルが正面に腕を組んで仁王立ちし、その後ろには
はやてやなのはたち隊長陣、新人たち、そして、ライン等、彼をよ
く知る人たち全員が立っている状況だ。彼の背後には誰も居ない。

「……………ふむ」

彼らの見下ろす睨みに近い視線に動じず、考えを巡らせる。さすが
のコタローも、彼らの表情や仕草が、自分の行動によって引き起
こされことであることは容易に想像できた。おそらく、何か彼らを
逆撫でることがあったのだろう。

彼はよく考えた末、幾つかの答えを見出し、口を開いた。

「倒れるとき、シャマル主任医務官を無言で押しのけてしまったこ
とですか？」

「違います！」

シャマルはにべもなく言い放つ。

「私を運ぶのに大変苦労したことですか？」
『違います!』

今度はスバルたちだ。

「テストロツサ・ハラオウン執務官を疲労させてしまったことですか？」

「違います!」

フェイトも強めに声を出す。

「5時間程寝てしまったからですか？」
「違います!」

またシャマルがぴくりと眉を動かして答えた。

「……………」

コタロウが首を傾げるをみて、シャマルはこれ以上答えが出ないと決定付け、自ら答えを言う。

「あなたが起きたときに、私への連絡もなく、勝手に医務室からいなくなってしまったことです！」

彼の寝ぼけ目が少し開いた。完全に考えになかったらしい。

「申し訳ありませんでした」

「皆さんに心配をかけたのは、私が大げさにしてしまったことです。から、それは私も皆さんに申し訳ないと思っています。ですが、これだけコタロウさんを心配してくれる人がいるんです。少しは自覚してください」

怒りの中に、心配を隠している言い方だ。言葉を繋ぐうちに段々と心配にかかる比重が高いしゃべり方に変わってきていた。

「そんなことはすっかりやっていると、コタロウさんのこと、嫌いになっちゃいますよ?」

全員、こくりと大きく頷く。

「……皆さんもですか?」

「そうです! ですよね、シグナム、ザフィーラ?」

「わ、私たちもか? ……そ、そうだな。う、うむ」

「……うむ」

もう一度全員が頷き、シグナムたちも主はやくの心労が増えるなら、そこは頷こうと顔を縦に振る。

「分かりました」

コタロウも全員の頷きに納得したようで、こくりと頷き、

「分かればいいんです」

シヤマルも彼の返事に頷いた。

その後、この話題はこれで終わりというように、シヤマルはぱちんと両手をたたき、「それじゃあ、ご飯にしましょう!」と笑顔で食事を提案した。

今日はヴァイスとは時間がかみ合わず、コタロウはスバルたちと一緒に食事をとっているとき、

「……………まあいい」

『んっ』

という言葉を残して、口に運ぼうとしているフォークを食器の上
に落とした。

シャマルは彼の「まずい」という言葉にぴくりと反応する。

「……………」

「コタロウさん、どうしたんですか？」

彼が落としたフォークに目を落としているのを見て、隣にいるエ
リオが口を開く。

「筋肉痛です」

「筋肉痛？」

「はい。全力で九天鞭を振りましたから、その影響でしょう。神経
疲労も同時にきたようです」

それは過度な運動をすれば必ず出てくるもので、シャマルが診断
する限りは特に異常として捉えることはしなかったようである。逆
にフェイトは疲労が問題であったので、同じ症状が既に出ており、
動けるくらいに処置はしてあった。だらりと腕を下げて、微動だに
しない腕を見て、エリオたちは心配するが、一晩休めば問題ないこ
とを彼は告げる。

そして、コタロウはエリオのほうを向き、頭を下げた。

「え、コタロウさん？」

「すみません。お願いがあります」

「なんですか？」

「もしよろしければ、食べさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

なんだ、そんなことかとエリオは快諾し、コタロウのフォークを
とって、彼の口へ運ぶ。

「はい。あーん」

「あーん」

もくもくと食^はむコタロウを見守っていたとき、エリオは視線を感じ
じる。

『……………』

「え、皆さん、どうかし……………ハッ！」

自分の手が、まだコタロウの顔の付近で止まっているのを見て、
彼も気付いた。

「……………っと、これは、その」

「エリオくん、エリオくん」

「な、何？」

「私も」

「はい!？」

「私もやってみたい」

「え、あ、なんだ、うん、はい」

一瞬、キャラロが自分にもやってみて欲しいといわれたのかと思いつくくりするが、すぐに違うことが分かり、彼女にフォークを手渡した。

「ル・ルシエ三等陸士？」

「はい、コタロウさん。あーん」

「あーん」

コタロウは疑問に思っても、彼女はそれには答えず、彼の口に持っていくと、彼は首を傾げながら口を開いた。

「おいしいですか？」

「むぐ……はい。美味しいです」

「ふふっ」

食堂で出てきている料理なのだから、彼女の食べているものも同じであろうと再び彼は首を傾げる。

「皆さん、一緒の料」

「キャラロ、あたしもあたしもー」

「はい、とっぴぞ」

彼のフォークは、スバルへ渡る。

「はい。ネコさん、あーん」

「はあ。あーん」

何故、このような自分の食事を阻害する行為を進んでやるのか、コタロウには分からなかった。思えば、ジャニカとロビンも取りあっていた気がする。

「ティアもやってみる？」

「な、何であたしが！」

「はい。ご迷惑をかけてしまい申し訳ありません。ランスター二等陸士、モンディアル三等陸士にお渡しください」

「あ、う……………」

一瞬顔を歪め、顔を上気させた後、ティアナはスバルからフォークをもぎ取った。

「ネコさん！ あーん！」

「……………あの、ご迷惑」

「あーん！」

「あ、あーん」

彼は終始疑問が取れない様子で、ティアナに断りを入れようとしたが、無理矢理顔に近づけられたこともあり、口を開いた。

口に入れられた料理を飲み込み、ティアナの手に握られているフォークをエリオに渡してもらおうようにお願いするため、再度口を開く。

「ランスター二等陸士、フォークを」

「ネ〜コ〜さん!」

「ん?」

「あーんですう!」

「ングッ」

パンが、いや、パンを持ったラインが自分の口目掛けて飛んできた。

口に入るとかくんと彼は強制的に上を向く。

「どうですか? おいしいですか?」

『ライン曹長、それは、さすがに……!』

彼はどうかかわからないが、新人たちは背後からいきなり現れた彼女に驚いた。

彼にとって良かったのは、それほどパンが固くなかったことだ。ゆっくりと器用に食べている。

「んくっ……おいしいです」
「ふふふーん。よかったです〜」

そのままリインは満足したのか、自席に帰っていった。その隣でシヤマルがリインを叱り、こちらを向いて丁寧な頭を下げている。

『だ、大丈夫ですか？』

「何がですか？」

『……いえ、なんでもありません』

ティアナとスバルは、自分たちがコタロウのことを心配していることに相手が気付かず、彼がリインの行動について何も思っていないことが分かると、それ以上何も訊ねなかった。
そして、

『……ええな (いいな) 』

ぼそりとつぶやく2人の声に、気付く人はいなかった。

『 どうしよう (どないしよう) () 』

自分の手を頭に乗せると、鼓動が少し早くなる。

その日の夜、それぞれの部屋では、同室の人がぐっすりと眠りに付いたのに、自分がまだベッドの中で枕を抱きながら、今日の午後に起こったことを思い出し、それに否応なく悩まされていた。

『 () …… 眠れへん (眠れない) …… 眠れへんよう (眠れないよう) () 』

クラナガンから見た太陽ソルと月ルナは、ゆるやかに傾き始めた。

第31話 『太陽と月』（後書き）

今の私にはこれが限界なんじゃーーーーー

ええーい、コノヤロオオオー！

あ、はい。我を忘れました。

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

内容については触れたほうがよろしいのでしょうか？

えゝ触れるならば

まずはコタロウの歌った唄ですね。

ラブソングって赤ん坊に聞かせるとそれだけで子守唄になると思っ
んですよ。

なので、よく使う文句を並べてみました。

どこかの歌詞を持ってきたわけではありません。

子どもは親にとって第二の第三の愛の対象かと私は思います。

あ、ソルオスとルナエラは本編の通り、ラテン語の太陽ソルと月ルナから貰
いました。

厨二病患ってすみません。

ここまでできますと私の王道がどういうものか分かったかと思えます。
あれです。

ヤンキーとか番長が雨の中の捨てネコを抱き上げる。
それを影で見ている人がいる。

これに尽きます。

この考えは古いんですかねえ……

私、大好物なんです

それをイメージしながら今回書いてみたのですが、いかがでしたでしょうか？

私、頑張って書きました！

……すみません。

大事なのは結果ですよ

ただ、私は今現在はこれ以上のものはかけそうにありません。
今後の遅々なる進化を生易しく見届けていただけると嬉しいです。
良いほうか、悪いほうかどちらに転ぶか分かりませんが……

今回はこの程度ですかね。

では謝辞の前にお知らせです。

そろそろ、PVもいい感じで、感想も100件を超えました。

はい。ということ、番外編を書きたいと思います。
下の3つからお選びください。

- 1 ちょっと見せます！ 主人公の出生
- 2 これが見たいの？ 主人公入局
- 3 似すぎた2人！？ ジャニカとロビン、ネコに会う

このなかで、一番読みたいのを1つ選んでください。

構想は短編で、私の勉強を兼ねてやらせていただきます。

どれもいずれ出そうとしているものなのですが、

どれを先に書こうか迷ってしまい、このままではどれも出ないだろうなあと思います、

それなら『皆さんに聞いてみよう！』と思った次第であります。

なので、感想やメッセージで番号をお伝えください。

内容としては、どれも彼の周りにいる人たちのお話です。

話が明るいかな、そうでないかは、読んだ上で判断していただけると
よろしいかと思えます。

期限は今のところ未定です。

どうぞ、よろしく願います。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞になります。

朧月那由他さん

グラムサイト2さん

神ちゃんさん

景雅さん

イツキさん

キヨンさん

下村さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

そして、最近、誤字脱字が多く申し訳ありません。

気をつけてはいるのですが……

ただ、このような指摘は嬉しい限りです。

まさか、この後書きにまで指摘されるとは思っても見ませんでした。

結構、思い立ったこと書いているので、分かりにくい解説なのに……

いえいえ！ 読んでいただいて感謝していることは変わりません。

今後も力を入れて推敲して行きたいと思います。

(この後書きも)

今回、用語解説はな〜し〜

第32話 『だからこそ』（前書き）

随分、間が空いてしまいました。

また暑くなってきましたね。

はい。アンケート期限は8月末日までに致します。

- 1 ちょっと見せます！ 主人公の出生
- 2 これが見たいの？ 主人公入局
- 3 似すぎた2人！？ ジャニカとロビン、ネコに会う

上から1つ選んでくださいね。

それでは、本編をどうぞ！

第32話 『だからこそ』

彼女はあの言葉を聞いたその日から、今日までの数日間、今までの教訓を活かし、ある作業に取り組んでいた。必要な情報は集め、必要な品物は揃え、差し迫る時間を除けば必要なものは全て揃っている。

「……よし」

ここから外は見えず時計だけが頼りで、それを見る限り、残り時間は5時間を切っていた。そこで彼女は残り時間ではないと首を振る。元々制限時間として5時間と決めていたのだ。それに考えるならば、

「あと、5時間もある」

と、前向きに思考を切り替えることである。

そうしなければ、これからのおよそ5時間を乗り切れないかもしれない。自分の周りには誰も居らず、自分の影を作り出している頭上の光だけが、孤独という恐怖を和らげている。

怖いのであれば誰か呼べばいいのではないか？ という疑問は、今の彼女にとっては考えてはいけないものの1つ。寧ろ、誰かに見つかることは気まずさを生んでしまい、明日の計画に支障をきたしてしまう。見回りの人には既に見つかってしまったが、理由を話せ

ば快く引き下がってくれた。彼は仕事を全うしているだけなのだ。隠すことはできないし、彼女自身の行動はたとえ執務官であっても裁くことは出来ない。

「大丈夫」

彼女は自分に言い聞かせ、初めになにをするか、その次は、と順序を確認して、深呼吸をした後、

「よし！」

敵に立ち向かうかのごとく、それに手を出した。

コタロウは早朝訓練の付き添いが終わり、フォワード全員揃って食堂へ向かう。朝食を摂るためにヴァイスと一緒に食事を用意し彼は片腕しかないため、持ち運べる数に限りがある。2人揃って席に着いたとき、向こうから身なりはきちんとしていても、かつてのシャリオのようにふらふらと歩みを進める女性が目に入った。彼女を見かけた人たちは心配して声をかけると「大丈夫、だいじょうぶ」と手を振って気遣いに感謝していた。

そして、彼女は自分の視界にその対象者が目に入ると、真っ直ぐ

にそちらに向かって、テーブルの前でぴたりと止まる。

「おはよう、ヴァイス君、コタロウさん」

「お、おはようございます……って、大丈夫ですかい？ 眠れなかつたんで？」

「おはようございます、シャルマル主任医務官」

シャルマルは背筋を伸ばし、ぶつぶつを自分に何か言い聞かせるような言葉を吐き、一度頷いたあと、テーブルの上に布製の生地に包まれた箱をコタロウの前に置く。

「コタロウさん、これを……」

「こちらは？」

彼は箱を見て、上目で彼女を覗き込むことのないよう、顎を上げて彼女を見る。ヴァイスはその箱の大きさ形状からある種の予想を立て、彼女が彼の質問に答える前にそれが何かを決定付けた。よほど間違っただ思考の持ち主でない限り、誰が見てもこれはアレであると。

(ここまでは想定内……決めたなら堂々としなくちゃ！)

彼が上官に対し、目を合わさないことは以前から知っていたため、いくらか彼の顔を真剣に見れた。彼女は微笑むことはせず、意を決

したように彼を見返す。

「お昼のお弁当を作りました！」

「……へ？」

「私にですか？」

「はい！ 雪辱リベンジです！ 感想、お願いします！」

「……………」

味見もしたので大丈夫です！ と胸を張る彼女は、自分の料理が下手なのは、以前、コタロウから、

『まずいです』

と言われたときから自覚、あるいは再確認していた。

そして、数日前に「……まずい」と彼の口から漏れたことで思い出し、『彼にそれだけは払拭させよう』と、もう一度自分の料理を食べてもらおうと決意したのだ。

食べてもらうのだから、六課にいるうちはこっそりではできない。彼女にとってではもう、『誰かに、コタロウのために弁当を作ったことが知れる』という羞恥より、『コタロウに自分の料理がまずいと思われたまま』のほうが比重は高いのだ。

邪よこしまで、下心こころづかいがあるというものではない。ただ、純粹に、感覚で言うなら『はやてや同じ守護騎士たちに食べてもらう』と同じ感覚だ。「わかりました。では、昼食後に述べさせていただきます」

だから、彼がそういうと心がすんと落ちて、それだけで報われた気がした。緊張していたのは恥ずかしさではなく、断られたらど

うしようという不安からだ。

『……………』

だから、シャマルは彼のテーブルから離れるために後ろを向いたとき、皆がぼかんとしていることに狼狽したり、顔を上気させることはなかった。

「えー！？」

リンあたりが声を上げるのも想定内だ。
最近のコタロウの性格に対して耐性が出てきたのか、声を上げて驚く人は少ない。

(……………ん?)

だが、はやてとフェイトからなにか妙な視線を送られたことに対しては、シャマルは首を傾げるしかなかった。

魔法少女リリカルなのはStrikers ㄱ 困った時の機械ネコ
第32話 『だからこそ』

「それは何なんですか！」

「……ハムです」

リインは今、コタロウが用意したハンカチの上に正座して、たし
たしとそのハンカチを手でたたいている。一方、コタロウは彼女が
こちらへ飛んできてぐいぐいと頬を押すので、ハンカチをテーブル
に敷き、座ることを勧めたあと、彼女が声を上げたので自分がいま
食べようとしたものを答えた。

「違います！ これです、これ！」

「お弁当ですね」

「……ごちそうさまあ」

ヴァイスはひっそりと席をはずし、スバルたちの席へと移動する
とコタロウたちには聴こえないよう声を小さくして話しかける。

「なあ、コタロウさん、シャマルさんといつからあんな関係になっ
たんだ？」

「関係がどうかと言われれば、多分何も変わってないかと……」

スバルはサラダを食べ、ティアナたちに目線へ動かすと、周りはいこくりと頷く。さらに、何故そのような理由に至ったかを話すと、ヴァイスは彼の性格はそこまでなのかと頭を悩ませた。

「するってエと、あれは本当にリベンジなのか」

「多分、お弁当自体が親しみのあらわれで、あれから何かっていうものはないと思います」

「というより、僕らも」

「何かしたいと思います」

おそらく、この課が少数精鋭だからだろうとヴァイスは思う。少数なりに親近感を持ちやすく、話をかけることが多い機動六課はコタロウを見過ごすことがないのだ。片腕がなく無口でとっつきにくい彼は別の課や部隊が見れば、無視されることが多かったのかもしれないが、ここでは以前ジャニカが言ったように、外見で人を見ず、偏見が少ない。

それがコタロウを少しずつ変えているのだろう。いや、どちらかというと彼が六課の面々を変えているのかもしれない。

自分も自覚はあるが、スバルたちからみても、彼とは家族のように親しくなりたいようである。

「どうしてお弁当なんですか？」

「それは私も分かりません。詳しい話はシャマル主任医務官にお伺いしたほうがよろしいのではないですか？」

コタロウがシャマルに視線を移し、彼女は目が合うと会釈をする
が、リインはそちらのほうは向かず、ただじつと無言でお弁当を見
ていた。

「お伺いしなくてよろしいのですか？」
「いいんです！」

他の人から見れば彼女が子どもっぽさ故からでた心情であること
を理解できたが、コタロウにはそれは分からず、

「わかりました」
「……え、あの……ちよっ
」

彼女の言葉を全てとし、それ以上何も聞かなかった。
彼は食事を再開しようとする。

「……リインフォース・ツヴァイ空曹長？」
「や、やっぱり、いけないです」

リインは彼があまりにも自分の言葉を素直に受け取りすぎてしま
い、逆に動揺して、思わず口に運ぼうとしている彼の右腕に掴まっ
てしまった。ぶらりと両手を上げた状態で吊り下げられた状態にな

る。コタロウの手は止まり、元に戻す。

「それではお伺いするのですか？」

「お伺いはしないです！」

「……ん」

ふよふよと自分の目線に合わせるように飛び、眉を吊り上げ、頬を膨らませた彼女にコタロウは顔を近づけ目を細める。

「な、なんですか？」

「……ふむ」

彼女が何故、このような　今は彼が顔を近づけたことにより動揺しているか　表情をしているか分からないのだ。

だが、この六課に来てから、表情変化を見る機会が今までにないほど増えたコタロウは、今まで把握できていた『泣き』『笑い』『怒り』など、特徴ある感情からくる表情以外にも自分に向けられるものがあるのではないかと疑問を持ち始めたのである。

「私がお弁当を頂いたことについて、何かご不満な点か？」

「え？　べ、別に、そういうわけじゃ……」

「……そうですか」

彼にとって彼女の表情は『怒り』には見えなかったらしく素直に

聞いてみるが、リインは首を横に振る。

しかし、彼女はそこで目を見開き、ぽんと手を叩いた。

「そうです！ リインは不満なのです！ なので、私の不満を解消してください！」

「……………？ わかりました」

『……………』

胸を張って『不満』を自慢する彼女に、彼は頷く。

自ら自分の引け目を自信満々に語り、且つそれを公私関係なく真摯に受け取ることができる人間は、ここでは彼ぐらいのものである。

リインは相手 特にコタロウ に自分の考えが伝わったのか、胸を撫で下ろし、またちょこんとハンカチの上に座り込んだ。

(……………不満。この場合、原因が問題じゃなくて、解消する策を考えればいいのか……………)

コタロウは彼女とお弁当を見比べながら考え込む。不満を抱えている人間に質問することは、時々さらなる不満を与えかねないので、リインへの質問はできない。

助けとなる情報はシャマルと自分の遣り取りだ。

顎に手を当てたり、テーブルをコツコツ指で叩きながら、先ほどの遣り取りを振り返り、飲み物で喉を潤したあと、

「……む、う。それなら……」

悩みながらぼそりと独り言を吐く。

「私が、リインフォース・ツヴァイ空曹長に『お弁当』を作るのは……いや、それはダメか。それだと」「ん！ それにしましょう！」

リインは彼の独り言に賛成と言わんばかりに飛び上がり、彼のまわりをくるくると舞う。

彼は首を傾げた。

「私がお弁当を作ることですよろしいのですか？ 時間がないのでパ
ンで挟むといった『サンドイッチ』になってしまいますが……」

「はい！」

「最悪、私がその場で作るということになってしまいます」

「『一緒に食べる』ということですよ？ なおのこと良しです！」

「……よろしいのですか？」

「よろしいです！」

片手で作るため時間がかかることも告げたが、彼女はより一層目を輝かせた。今度は星の自転のようにくるくる回る。

「わ、かりました。それでは、今日の昼食は私がリインフォース・

ツ
「よろしくくないです！」

言葉を遮られ、視界に影が入ったので見上げると、そこには先ほどのラインと同じように不満をあらわにしたシャマルがいた。

「シャマル主任医務官？」

「私も不満になりました！　なんとかしてください！」

「あの」

「なんとかしてください！」

コタロウは、何故ライン（こ）が食堂の料理より劣る自分の料理を食べたいのか、そして何故シャマルが不満になったのか分からなかった。

結局、コタロウが悩みから解放されないのでヴァイスが脇から助

け舟を出し、お昼は時間の会う人たち皆で、外のちよつとした芝生のある広場で昼食をとる案をだした。そうすると次に動いたのはスバルで、食堂のスタッフにかけあい、パンとその間に挟む具をお願いし、用意してもらった。つまるところコタロウはリインにサンドイッチを作り、渡すだけになってしまったが、それでも彼女にとつては渋々ながら満足の域らしい。シャマルもそれに納得した。

そして、少なからず新人たちにはそのお昼のイベントが楽しみになる要素になり、訓練に良い意味で影響が出た。本当なら、感情の左右によって訓練に影響が出るのは喜ばしくないことであるが、隊長たちもどこかしら心動くところがあり、仕方なく注意をすることはしなかった。

訓練が終わった後、新人たちはへとへとなりながらもクールダウンをしっかりと行い、早々に昼食の準備をしに行く。

「あれぐらい元気なら、まだ絞れるなあ」

「……まあまあ、ヴィータちゃん」

彼らの後ろ姿を見送りながらヴィータは含み笑うと、なのはは宿めるように苦笑い、後を追うように歩き出す。

フェイトとコタロウは彼女たちの後ろに少し距離を置いて 実際にはフェイトがコタロウの歩調に合わせて 歩いている。

彼はスバルたちと一緒に向かおうとしたが、彼女たちに止められ、なのはたちと一緒に移動することになったのだ。

「コタロウさん」

「はい」

フェイトは少し音量を下げて話しかけると、コタロウも合わせて音量を下げる。彼にとって音量を合わせることは、聞かれてはいけない話をするという機密性からではなく、上官に呼応するのが礼儀であると考えているからだ。

「き、今日はコタロウさん、お弁当なんですよね？」

「はい」

「……」

前で何気ない会話をしているのはとヴィータたちとは違い、会話が続かない。しかし、その原因となっているのが、両手の指を交互に組んでは離す彼女のせいなのか、普段と変わらず歩く彼のせいなのかは言及できない。

「お弁当って、貰うと……う、嬉しいものですか？」

「嬉しい、ですか……？」

そのまま十数歩の無言が続くと、また彼女が独り言にとれなくもない消え入りそうな声で問いかけると、彼は目を細めて僅かに顎を上げた。

（え、あれ？ わ、私、変なこと聞いたのかな？）

心が不安定な時、自分の口に出した言葉が相手に思考を与えてしまつと、心を覗かれたような気持ちになり、フェイトは思わず顔をコタロウのほうへ向けてしまった。

彼は彼女がこちらを向いたのに合わせて、彼もそちらを向き、彼女に不快感を合わせないよう、視線だけをやや下に向ける。

「そのような感情は必要ありません」

「……え、どういふことですか？」

先ほどと同様の声量で答えたコタロウに対して、フェイトは今の彼の答え方が、声量は別として、あの模擬戦を思い出させる抑揚のないものだったので、緊張と不安で高まった熱は一気に引き、なのはたちにも届くやや低い声で訊ねてしまう。

「ん？」

「どうしたんだ？」

彼女たちが振り向くと、コタロウは彼女たちのほうを向き、口を開く。

「テストロッサ・ハラウン執務官が『お弁当を貰うことは嬉しいか?』とご質問をされたので『そのような感情は必要ありません』と申し上げました」

それは淡々と録音された音声を再生しているかのように淀みがない。

『……何ですか（何でだ）？』

なのはは驚いたが、ヴィータはまだ彼に対する情報が足りないというように落ち着いていた。

「あ、なのはさーん！」

スバルは彼女たちがこちらへ歩いてくるのに気付くと大きく手を振って呼び掛けた。エリオやキャラもそれに合わせて、少し背伸びをして手を振っている。

そして、なのはたちが自分たちのところまで来た時、コタロウが弁当箱を持ちながら額を抑えていることに首を傾げた。

「あの、ネコさんどうしたんですか？」

「ん、ああ、あたしが愛機アイゼンで軽く引つ叩いた」

『……………』

原因が分からず、スバルたちはなのはへ視線を向ける。

「……えっと、ね……」

『そのような感情が働いてしまうと、お弁当の味を正しく評価できません』

『よし、とりあえずその弁当をフエイトに渡して額デコを出せ……』

「……あの、つまり……味をきちんと評価することが本来の目的なので、お弁当を貰うということについては特に何も思っ
てなかった。」

「はい」

『……はあ』

全員がため息をつく、スバルは頬を掻きながらコタロウの方を向き、

「じゃ、じゃあネコさんは、その、味の評価なしでただ単純にお弁当を貰うことに対しては、嬉しいんですか？」

「はい。大変嬉しいです」

彼はこくりと頷く。

味を評価することを第一に考えていたので、貰うことに対しての感情を一切持っていなかったらしい。貰うことを第一に考えていれ

ば、嬉しいことは彼にとって当然のようだ。

「シャマル先生の言葉が悪かったのかなあ」

「ネコさんの融通の無さね」

スバルとティアナの会話を聞き、なのはは以前コタロウが「いつもトラガホルン夫妻を困らせる」といった類の言葉を思い出し、間違いないと納得して頷いた。

彼は妙な部分で、人と思うところがずれるようである。

「おー、準備できとるなあ」

振り返るとはやとヴァイス、そしてヴォルケンリッターがこちらに向かって歩いてきていた。

「コタロウさん、どうしたんですかい？ そのおでこ……」

「ヴァイタ三等空尉に叩かれました」

「……察しろ」

ヴァイタはヴァイスが不思議がって自分の方を向くまえに答える
と、芝生の上に敷かれている、赤、黄、白が格子状に描かれたシートの上に靴を脱いで腰を下ろし、無言で全員をせかす。

シートは1枚で5人はゆくに座れる広さで、それを3枚使って場所を確保していた。そして、その各シートにはバンとその具である

レタス等の野菜類、ハム等の肉類の他に、ポテトがメインのサラダや、ジャム等、手の込んでいない簡単なものが揃えられている。これらを自分で『料理』して食べるのだ。

「ネコさん、こっちです！ こっち！」

リインはすでにシートのやや中心に近い位置に座っており、招き猫のようにコタロウを招いていた。彼が彼女の招くままに移動すると、周りもそれに合わせて座ろうとする。

ヴァイスは靴を脱ぎながら、

「しっかし、良い天気なのはいいけど、ちっと眩しいな」

「ちょうど、太陽も真上ですしね」

スバルもつられて空を見る。

雲も今日は少なく、太陽がすこし強めに照らしていた。
すると、

「傘、パラソルスタイル日傘形式」

コタロウはリインの正面に座る前に傘を抜き取り、近くの繫ぎ目に突き刺し、

「ラージ大きく、トランスルーセント光透過」

の野点傘に变化させ、言葉通りにシート全てを収まるほどに大きくさせたあと、木洩れ日程度の光を入れるように半透明化させた。

「……………」

「グランセニツク陸曹、この程度で宜しいでしょうか？」

「……………あ、はい」

彼が頷くのを確認して、コタロウは座ろうとすると正面にいますインが口を開いた。

「ネコさんのデバイスは何ができないんですか？」

「不可能の方が多いので、可能なりストを後でお渡しいたします」

「い、いいです。少し、興味があっただけなので……………」

「そうですか……………わかりました」

少し首を傾げながらも、彼はシャマルから貰ったお弁当を脇へ置くと、近くにある取り皿の上にサンドイッチの材料を盛る。

「それでは、お昼に致しましょう」

「は、はいですー！」

近くににいる人にしか分からないくらいの微弱な魔力反応をリインは感じ取ると、コタロウは料理の作業に取り掛かった。

まず、リインが目を見張ったのはその指先だ。コタロウの指先は硬化させたエアロゲルを纏い、それをナイフのように使って、パンをリインの持てるサイズに切る。次は具をそのパンに挟めるように薄切りにしていく。切るとき、具がぶれないようにこれもまた指先と同じものを形状変化させ押さえつけていた。

彼女は、地球へ出張任務に訪れたとき、彼が「料理が実験のようになる」といった理由がよくわかった。その過程が正確で、精密過ぎるのだ。彼にとっては仕事の延長線上に『食べるものを作る』という点があるだけなのだと思わせる。元々表情に出ない彼であるためか、楽しそうでもない。

「出来上がりました」

「あ、ありがとうございます」

ただ、出来上がったものは寸分たがわず、大きさ、見た目は紛れもなく彼女にとってぴったりの料理であった。

「いただきます」

リインがサンドイッチを手に取り、口に運ぶまでをコタロウはじっと目で追う。

彼女はその見下ろされている視線が気になり、少し身体を移動させ視線を逸らした。このサイズで自分の手に収まる料理は食べる機会が大変少なく、違和感がないことに逆に違和感を抱きながら彼女

はそれを食べた。

味は普段食堂で食べているものと変わらない。

「おいしいです〜」

だが、リインはこのような場所で、且つ親しい人が作った料理が普段以上のものになることはよく知っていた。

「…………ふむ」

リインは正直に答え、それが相手に不快感を与えない答えであるはずなのに、彼は首を傾げたことを不思議に思う。

「あの、どうかしました？」

「…………はい。自分の作った料理を召し上がっていただき、そしてそのような言われると嬉しいものだと思います」

「え？ そ、そうですね？」

「はい。幾つか私の作成したものをリイン・フォー・スツヴァイ空曹長がご利用されていますが、それとはまた違います……………どうかしましたか？」

「ひい^いえ、なんでもないです」

少し頬を染めたのは彼女だけではなく、彼もだ。もちろん、彼の場合は分からないくらいの小さな変化であったが、リインはそれを

見逃さなかった。単純に、自分が彼をそのようにさせたことは嬉しいことだと思う。

「むっ」

「シャマルもそれを見ていなければ、より一層嬉しかったことだろう。」

「シャマル主任医務官？」

「さあ早く、私のも食べてください！」

「わかりました」

シャマルは不機嫌そうに彼に顔を近づける。目の下のクマのせいか少し威圧感があるが、彼は動じることなくお弁当に手をかけた。

「シャマル、ちょう顔近いで」

「……え、あ、すいません」

はやてに柔らかく注意を受け、コタロウに頭を下げて座りなおす。そして、彼が包みを解くのを見守った。彼は蓋を開けようとす。

「あっ」

「どうかなさいましたか？」

「い、いえ……なんでもないです」

シャマルは自分の作ったものが唐突に心配になり、思わず声をあげてしまったが、コタロウが自分の方を向くと引きさがる。

また彼は蓋に手をかける。

「あっっ」

「どうかなさいましたか？」

「……な、なんでもないです」

また同じ行動が繰り返された。
再び蓋に手をかける。

「あっっ」

「どうかなさいましたか？」

「……なんでもないです」

またまた同じ行動が繰り返された。コタロウは3回も同じことが起こるとさすがに不思議に思うところがあり、口を開こうとするが、

「ムウ！ なら、ラインが開けるです〜！」

『あ』

2人に隙を与えず、ラインが蓋を開いた。その瞬間、シャマルは顔を覆う。

「……ちゃんとしたもの、です」

その顔を覆っている間、それを気になる人たち　シャマルの料理を見たことある人全員　が身を乗り出してそのお弁当の中身を見る。どうやら、開ける前から気になっていたらしい。

『……普通だ』

シャマル自身、事前に味見をしていたと言っていたが、それでも心配だった彼らはそのお弁当を見て、外見が変哲ないことに驚いた。中身は地球では、ほぼ一般の家庭で食べることのできるものが入っていた。

主食はご飯で、おかずである副食、菜食は少しバランスは悪いが、唐揚げ、卵焼きと備え付けのようなサラダと品数は十分である。シャマルは『普通』という言葉で多少安心して顔を出した。

「あとは味、だな」
『つむ』

シグナムとザフィーラはヴィータに頷く。
何対もの目がコタロウの右手を注視し、

「いただきます」

口に入れ　この時点で表情に変化はない　飲み込むのを見守った。

シヤマルの顔はそれでも歪む。コタロウは飲み込んだあと、彼女のほうを向き、

「おいしいです。前回の料理と比べ、ずっと」

『……お、お〜』

数人が声を漏らしたが、シヤマルにはすでに聞こえていなかった。

「ほ、本当ですか!？」

「はい」

「本当に、本当ですか？」

「はい」

「本当に、本当に本当？」

最後にもう一度彼が頷くと、曇天どよみが突然快晴になったかのようにシヤマルの瞳が光り、

『(……いい、良い笑顔すぎる)』

と、周りに思わせるような表情をした。

そんな表情に感心することもなく、コタロウは次のおかずに着をのばした。

彼女の料理の味をよく知る人たちは、試しに食べてみたい衝動に駆られるも、彼が箸を休めなかったこともあり、食べることはできなかった。

仕方なく、各自食事をとることにする。

そして、コタロウは残さず食べ終わり、弁当箱を包んだあと、

「シャマル主任医務官」

「は、はい…」

「ごちそうさまでした」

「お、粗末さまでした」

軽く会釈をすると、シャマルもそれに応じて頭を下げた。

「最後にもう一度聞きたいんですけど……本ッ当においしかったですか？」

「はい。本当においしかったです」

彼女にとって、その結果は大成功と言ってもいいほどのものだ。

『前回と比べ』というものが含まれていても、『まずい』という言

葉が彼の口から出なかつただけで手を振って喜んでもいいくらいである。

そして、実際に手を振って喜ぼうとしたとき、

「や、やつら、ああ……やふう」

緊張が解けたのが、シャマルは疲れと眠気が一気に押し寄せて、ぱたりと倒れた。

『……へ？』

丁度コタロウの膝を枕にするように。

「あいらるつおらいまふう」

「……………」

すぐに元の表情に戻ったコタロウだが、さすがに彼もこれには僅かに目を開いて驚いた。彼は自分の膝 実際は腿^{もも} を枕にして
いるシャマルを見下ろしながら、数回瞬きして、

「……………寝てますね」

と、結論付けた。

「なるべくお静かに願います」

『……………』

この沈黙が別に自分の言葉で静かになつたわけではないことが分らないのは、彼だけだ。

コタロウは自分を枕にしている彼女の顔を覗き込もうとはせず、ただ正面の風景をじっと眺めていた。

「ネ、ネコさ」

「お静かに願います」

一番初めに口を開いたのはそれを真正面で見っていたリインだ。声が大きかったのが、コタロウに諫められる。すぐに念話に切り替え、

「ネコさん、何なんですか!？ それは!」

「……………膝枕ですね」

「そうじゃ……………いえ、そうなんですけど……………」

彼女は口をぱくぱくさせて、何かを訴えようとしたが、言葉が上手く出てこない。

一方、スバルたちは、

「……あれさ、もう、上官と部下の関係じゃないよね」

「言っておくけど、私たちもご飯を『あーん』して食べさせたんだから、変わらないわよ」

「それは、そうなんだけど……」

「なんか、最近ますますこの六課が『家族』って思うようになってきましたね」

「うん。どんどん大きく……ううん、強くなっている気がする」

その光景を見ながら、訓練以外にも強くなっていると実感する出来事に、内心大きく頷いた。訓練が激しく厳しいものだからだろうか、時々彼を原因とする出来事がより一層穩やかで和むのだ。それが六課という集団を堅固にしているように彼らは感じた。

そんなことを思いながら再びコタロウの方を向くと、また少し変化を見せていた。

「お、こうすると楽だな」

ヴィータがコタロウの背中を支えに自分の背中を預けているのだ。彼を背凭れのようにしている。

「……ヴィータ、それじゃコタロウさんに迷惑が」

「別にいいだろ。なあ、ネコ？」

「はい。私は構いません」

コタロウの膝枕で片眉を吊り上げても声を出さなかったフェイトは、なるべく落ち着いて彼女を注意するが、彼は特に嫌がっていないようだ。

「……ム」

「なんだ、フェイトも寄り掛かりたいのか？」

「そ、そんなこと、ないよ！」

「ふん」

語尾を強めてしまった彼女の言葉を、ヴィータは意識することなく聞き流した。ヴィータはフェイトとは直接向き合っているわけではないため、フェイトが若干赤くなっていることには気付かなかった。

だが、ヴァイスの次の言葉が彼女たちを突き動かした。

「でも、コタロウさんはネコって言われている割に、立場が逆ツすねえ」

「逆、ですか？」

「ええ。普通ならネコが膝の上に乗るものでしょう？ こつ、頭や背を『撫でながら』」

『ツ……！』

コタロウが「なるほど」と頷き、自分の1つしかない手とシヤマルの頭を見比べ、彼女の頭に手を持っていこうとしたとき、

『それはダメ（アカン）！』

フェイトは彼の腕を、はやては彼の肩を掴んで、動きを止めた。背中に寄りかかっているヴィータが驚くほどの速さだ。

「え？ はやて、フェイト？」

『……ハッ』

我を取り戻したかのように2人は目を見開くと、ぱっと彼から手を離れた。

『いや、これは……そのう……』

手が所在を定めることができずにわたわた動き、最後にも後ろに回して、はやてとフェイトは乾いた笑いをする。

互いの行動より、自分の行動を問い詰められるほうが気になり、笑っあいだくるくると頭を回転させ、

「ア、アカンよ、コタロウさん、簡単に女の子の頭を撫でるやなんて」

「う、うん！ よくないと思う」

「……申し訳ありません。至りませんでした」

シャマルを膝枕し、ヴィータの背凭れと化しているコタロウは身体を動かせず、軽く頭を下げると、2人はぎこちなく頷き、くるりと背を向けた。

「はやてちゃん、フェイトちゃん？」

「どうかしたのか？」

「なんでもあらへん」

「うん。なんでもないよ」

ヴィータは見る事ができないが、なのはには彼女たちの表情がよく見えた。恥ずかしいとは少し違う表情だ。それに、お互いがお互いの行動に気付いていない。完全に自分についてしか考える事ができていない、思考が内面に向かっていている様子である。

(……んんん?)

一口、パンを口にしながらなのはは首を傾げる。以前から地球に行ったときから はやてや自分たちが彼への対応が変わったことには自覚していたし、気付いていた。それは自分が思う限り、親しさのあらわれであると思っている。コタロウ自身は気づいていないのであるが、そうでなければ、あんな状態にはなりえない。なのはは彼の膝で静かな寝息を立てているシャマルと彼の背に寄りかかっているヴィータ、それにいつのまにか彼の頭の上に乗って、やや不機嫌ながら食事をしているリインを見る。

(あれでコタロウさん、普通……なんだよね)

それを、違和感なく見れている時点で、自分やスバルたちはかなり感化されているといてもいい。シグナムやザフィーラはまだ抵抗がありそうだが、それも時間が解決するだろうと、なのはは自分の考えを疑わなかった。

考えを戻す。

小動物のようにサンドイッチを食んでいるはやてとフェイトへ視線を移す。

(んと、何かあったと考えるのが普通、だよな。なにかあったのかな?)

時間が経つにつれ、平常に戻っていく2人を見て考えを巡らせる限り、もし何かあったとすれば、コタロウの無自覚な行動くらいだとなのはは考える。彼女たちをぎこちなくさせる行動をコタロウが取ったと考えるのが妥当だからだ。以前、彼がはやての行動にあわせて『オウム返し』をしたときのようなことが起こったのだろう。

(む……)

そう、なのははそれ以上の、特に彼女たちの気持ちまでは掴むことができなかった。はやてたち自身、自分の真意に気付いていないため、分からないのだ。なのはが掴むことができないのも当然であ

る。

なのはとりあえず、機会があったら聞いてみよつくらいに思考を完結させて、2人に飲み物を注いであげた。

『あ、ありがとう』

「うん！ どういたしまして」

いや、なのはだからこそ、気付かないのかもしれない。

そしてその後、シャマルはラインに鼻をつままれて起き上がり、現状を把握してコタロウと目を合わせた時、一拍おいて真っ赤に顔を染め上げ、再び倒れるくらい狼狽したのは余談である。

「ティア？ 何か調べるの？」

「うん。ちよつとね」

その夜、寮に戻る前、ネットワークが使える部屋へ向かおうとするティアナにスバルは首を傾げた。

「何を？」

「……アドヴァンスドグレーザーについて」

「それって……」

コタロウが模擬戦で見せた超接近戦術だ。

ティアナは軽く首を横に振り、

「大丈夫よ、そのときはちゃんとなのはさんに話すつもりだし、独りじゃ絶対動かないわよ……アンタにもちゃんと言う」

「なら、いいけど……」

「今はただ、資料を集めるだけ」

そう言ってティアナはスバルと別れた。

第32話 『だからこそ』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

今回は六課の中の日常風景です。

食堂で具材あるなら、みんなで作ればいいじゃん！

という安易な設定のもと、シャマルの（ちよつとばかりの）料理克服とコタロウの膝枕、ヴィータの背凭れ、リインが頭の上と盛り込んでみました。

いやはや、今回は人が沢山いたので、上手く動かす難しさを知りました。

しっかりと考えなければなりませんね。
頑張ろう。

それにしても心理描写は難しい。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞になります。

キヨンさん

ユウスケさん

グラムサイト2さん

朧月那由他さん

高橋さん

にやむさん

神ちゃんさん

ねぎとろどんさん

庚さん

景雅さん

下村さん

イツキさん

幻擲恣蔽さん

どくおさん

ポリンキーさん

感想、および指摘、アンケートの回答ありがとうございます！
現在、2の主人公入局が多い感じですが！

今回も用語解説は無しです。

……いや、ありました。

シャマルの寝る寸前、直後のセリフです。

第33話 『なにか変か』（前書き）

気がつけば10月ですね。

めっきり寒くなり、めっきり執筆速度が遅くなりました。

時間をとることができませんでした。

でも、マイペースは崩しません。

それでは、本編をどうぞ〜

第33話 『なにか変か』

アドヴァンスドグレイザー 以降AG が、人の命を無視した戦闘手段でないという情報は、調べれば直ぐに分かった。元々はフロントアタッカー 以降FA であり、その人たちのなかで特に魔力の少ない人間が使いだしたのが切欠らしい。

ティアナは、おそらく敵や周りの自分より多く魔力を保持する人たちに対抗するための手段だったのだらうと考えながらモニターに目を走らせた。

危険性は確かに、FAの上をゆく。だが、戦闘をする以上は危険と隣り合わせなのは武装局員の誰でも知っている。それを実力を持ってFAと同じ危険性まで低下させているのだ。高魔力保持者もこのAGを使用していたという記載はあったが、擦過現象 相互の魔力量と結合力差を利用した平衡現象 で相手の魔力を利用するのは低魔力保持者あるいは、魔力放出を可能な限り抑えた人にかない。

もちろん自分も六課内では魔力は低いが局内の平均以上なのはよく知っているため、擦過現象を扱う場合は魔力の出力を抑えなければならぬ。年々高魔力保持者による犯罪が増加している今、近いうちに敵に圧倒させる場面に出くわすかもしれない。これを習得していれば、戦局はかなり有利に進めることが可能だ。

そして習得したいと考えたのはもうひとつ、

(昔はもっと頻繁に感じてたはずだ。自分と他の人との魔力差を…

…)

共感である。ティアナはつい先日のフェイトと模擬戦をした男を思い出した。

その時の映像を見直せば見直すほど、言葉にすることができなかつた。

実際に見たときの印象としては、彼女と彼の魔力差は圧倒的で、彼の方は微々たるものだった。ただ、魔力結合の精度の高さと結合された物質の魔力密度は、誰もが認める最上位の魔導師である彼女を震ませるほど确实且つ精密だった

さらに彼は魔力量差を實力差としないということを、体現してくれた。

(映像資料だ……つと、記録日は……30年前!?)

読み進めながら、ティアナはAGの模擬戦記録を見つけ、息を呑んだ。

異様に古い。近年ではあるが、最近ではない記録だ。

ティアナはそこに並べてある『中長距離戦』『近距離戦』『零ゼロ距離』を1つ1つ確認することにした。

(中長距離戦は……)

少し乱れた無音映像の中に映し出されたのは距離を置いた2人が対峙しているところから始まっていた。両方が構え一方が魔力を集束させている。見た限りではAクラス魔導師が砲撃を放とうとしているようだ。

そして、放つ。

受ける側はそれに対して右手を前に出し、左手を右側の耳元へ沿えらと、

(……嘘でしょ)

砲撃を右肩あたりで掠めながら、その集束砲が放つ魔力を両手で擦り落としていた。

その後、そのまま擦り落とした魔力に自分の魔力を繋ぎ、結合してカウンターで相手に集束砲を撃ち放ち、相手が分かっているかのように防御をして映像は終了していた。

あらかじめこの映像を移すための台本戦シナリオなのだろう。事前に返すことが分からなければ、あのように始めに放った人間がカウンターを避けられるはずがない。

(あくまで防御は零距离、か)

次に近距離戦の映像を見る。

その映像はまさに、この前見たフェイトと男の戦いそのものだった。一方はその場所から動かず、一人が座標を変え、角度を変え攻撃する。しかし、相違点にティアナは気付いた。

(……相手の態勢が崩れた一瞬を狙って、攻撃を仕掛ける)

映像の中は徒手空拳で、相手が攻撃することによって生まれた隙を見逃すことなく迎撃していたのだ。

フェイトの模擬戦で、男は一切攻撃はしていない。

相手の耳を掠め、後頭部に手刀を打ち据えようとした時点で寸止めし、映像は終了する。

先日の模擬戦を見たが、今の映像を見て自身のダガーモードでも応用できそうだとティアナは確信した。

次に零距离戦の映像をティアナは確認する。

(……………)

一方は両手にダガー、もう一方は徒手で対峙していた。

ダガーを持つ人は、片方のダガーを逆手にもち、相手は左右で差はあるものの両手を喉の高さまで上げて、互いにゆっくり距離を縮め、互いが腕を伸ばせば接触する距離まで近づく。だが、お互いに動く変化は見られない。間合いを確認しているのだろうかと思つた矢先、また彼女は気付いた。

(……………動いてないんじゃない)

始めは制止していると思つたのだが、映像速度を遅くしてみると互いが互いの攻撃を虚実、フェイントを織り交ぜながら、仕掛けては軌道を逸らし合っていたのだ。動きが速くて一瞬目で追いきれなかった。その証拠に地面が互いの闘せめぎ合い耐えきれず、僅かにヒビが入りへこみ始めている。

しばらくその位置で激戦を繰り返した後、さらに互いは緩かん緩と距

離を縮める。互いの肘が当たる距離まで来ると、頭を動かし、回り込みあい重心を変えたりと、熾烈を極める戦いになる。

速度を遅くして、やっと捉えられるくらいである。通常に戻せば、まず目で追うことはできないだろう。

戦闘は一方が喉元にダガーを突きつけ、もう一方が相手のこめかみに足を打ち下ろそうとするところで膠着し、互いがまた距離をとったところで映像は終了した。

「レベルが今と比較にならない」

始めにティアナが抱いた感想は口からこぼれた。

魔力量で補えない部分を、体術を持って制する。

理には適っているが、ここまでとは思いにもよらなかった。あれだけの技術を持てば魔力制御は当たり前、もし相応の魔力を持っていれば、現代では相当の実力者であつただろう。

では、今言う一魔導師は相手から魔力、擦過現象を利用しなくても自分の魔力を最大限に使い、A Gとして戦わなかったのか。という疑問がわいた。

さらに資料を読み進めているうちに、

(……………そうか)

1つの結論にティアナは至る。

(通用するのは、A G以外……………A Gには防御でしか役に立たないん

だ)

魔力を^{じゅう}実にするためには結合が必須だ。その結合は使用する魔力が大きければ大きいほど労力を費やす。AG同士の戦いの場合、結合する瞬間を見出すことは極僅かしかないので、大きな魔力を使えばそれだけ戦いの危険性は高まる。それは同時に、その結合する瞬間を見出し実行することができる人間、そんな相手と戦うのであれば、戦う前から実力差が圧倒的であることを表している。

時限式をとりいれたゲリラ戦であれば、元々結合された魔法を使うため通用するかもしれないが、その場で瞬時に結合、出力を行なうことができるのは相手がAG以外である。

(魔力戦に持ち込んだ時点で、AGが有利。そして、AG同士は実力……絶対的な白兵戦有利者……それが彼ら、なんだ)

それはおそらく、一対多の場合も変わらないのだろう。確実に一対一に持ち込んで、打ち倒していくのだ。戦闘中は他の人間は仲間^に当てる可能性があるため手が出せない。多は余程のコンビネーションが要求される。

(でも、一対多になったとしても、AGはほとんど全方向からの攻撃におそらく対応できる)

フェイトと男の模擬戦で把握済みだ。彼は全方向からの攻撃で自分に当たるものだけを捌いていた。

（崩せるとすれば、仲間を切り捨て、仲間ごとAGを倒す広範囲魔力攻撃）

しかし、それはFAにも言える危険性だ。だから、そのようなことにならないよう、他のポジションが存在する。

危険性はFAと同じ。そう思うところで、ティアナは違和感を覚えた。

先ほどの各距離の模擬戦映像だ。

（AGはどの距離からの攻撃でも受けるときは必ず零距离……ちよつとまって、ということ……）

もう一度今度は、3つの映像を同時に再生させながら、内容を整理する。

（高魔力保持者でも魔力を抑えて、堅固かつ精密な制御を行えば、迎撃のときには余計な魔力は使わずに相手の魔力を利用して、どの距離でもカウンターができて……どのポジションの防御もできる……逆に進撃に転じたときは、相手の魔力弾を擦らせながら力を蓄え、自分の攻撃範囲に入れば……打ち倒す……）

相手の近付かせないようにする弾幕が寧ろ、相手に力を与える結果になり、攻め込まれたとき、本人にはフィールド、バリア、シー

ルドの防御手段をもって対応するしかない。

しかもだ。おそらくそのバリアも削り落とされるだろう。
じつりと冷や汗が出た。

(零距离を制するAGはすなわち全距離対応可能なFA)

FAであるスバルに適したものだと思う。だが、ダガーを使うてイアナ自身にも適した能力であることも間違いない。

彼女は一度モニターから目を話し、背凭もたれに寄り掛かった。

(じゃあ、どうして現在では使用されていないのか……考えるだけ無駄ね。そんな実力者がそう簡単にいるはずがない。エース級集まるこの六課でも、1人しかいないんだから)

実質その通りだった。再び、書かれている電子書類に目を通していくと、管理局システムが安定してくると共に減少し、当時 30年前 以降AGが確認されないことから自然と新しいものの中に埋うずもれ、消えていったらしい。

(今いるとすれば、ネコさんだけ、か……いや、トラガホルン両二等陸佐が知らないはずがない……けど)

彼の親友であるトラガホルン夫妻は優秀すぎる人たちだ。もしかしたらと意気込むが、諦めた。

彼らと接触するためには彼を仲介しなければならぬし、なににより将校クラスの間が自分に気安く話してくれるとも限らない。もちろん、彼が関係すればあの夫婦は快く話してくれるであろうが、そんなコネのようなものは使いたくなかった。

ティアナは頂垂れつみだ、途中でAGについての調べごとに好奇心という比重が高くなっていることが分かり、自分を戒める。

知りたいのは誰がAGを知り、使いこなしているかではなく、自分がそれを身に付けることができるか、或いは身に付けたいかどうかである。

(少なくとも、私はこのAGを使いこなせるものなら使いこなしたい……そのためには、きちんとその危険性を把握して、なのはさんに相談することだ)

彼女は一度気持ちと思考を入れ替えて、AGの、特に危険性や弊害について再び調べ始めた。

魔法少女リリカルなのはStrikers 〓 困った時の機械ネコ〓
第33話 『なにか変か』

なのはたちが日中訓練と並行して六課の警備や出動に備えるため、はやての守護騎士であるシグナムとザフィーラは彼等の時間に合わせて行動するのは必然的であった。同時に2人が出会う確率も多く、シグナムが外へ足を運んだとき、四足で歩くザフィーラと何度目かのすれ違いをみせた。

「異常は？」

「無しだ」

彼女は軽く目線で「気分転換でもしないか？」と合図すると、ザフィーラは頷いて彼女の隣につき、揃って外に出る。

隊舎の外は日が昇る前と曇天なこともあり、若干気温は低く、眠気を覚ますのには丁度良かった。

「随分と雲が低いな」

「ああ」

シグナムは目を細めながら上を見上げると、鼠色の雲が直ぐにでも重さに耐えきれずに雨を降らせようとしているのが窺えた。そのまま彼女は一度身体を強張らせたあと、肺の奥まで空気を入れて大きく深呼吸し、六課の隊舎と寮を一周しようと歩きはじめる。

そして、まずは寮へ向かうために角を曲がったとき、ザフィーラが何気なしに口を開いた。

「先ほど、カギネ三士に会った」
「……そうか」

彼はあくびをかみ殺し頭を振る。

「何か、準備をしていたな」
「準備？ 新人たちのか？」

シグナムが語尾を上げて、右耳をひよこりと動かす彼に視線を下げる。

「いや、違う」
「……要領を得ないな」
「む。木の周りを縄と杭で囲って敷地をつくらうとしていたな」

自分で話題を彼女に振っても、話の終着をさせることはできず、2人の中で無言が続いた後、シグナムはザフィーラをやや前にして、あとに歩調をあわせた。

コタロウがいるのはどうやら寮の近くらしく、そちらへ歩を進めていく。

そして、寮の入り口を正面に右側面にある、日の出の影になる場所に生えている一本の木の見えると、その下には片手で十分握れるほどの細い杭が打たれ、人が入らないように縄で杭と杭の間を結んで柵をつくり、その中にコタロウはいた。

彼は両膝をつき、一見正座のように見えるが、つま先は立て、即座に動けるように構えている。作業帽は深く被り表情を窺えず、手は足の付け根に添えられている状態で座り込んでいた。

2人がその柵の外、彼の正面に立っていても相手は動く様子はなく、微動だにしない。

「訓練中です。命令、指令の際は念話あるいは通信でお願いいたします」……と書かれているな」
「ふむ」

ザフィーラが柵に貼り付けられている注意書きに気が付いて読み上げると、ぼつりとシグナムの肩に雨粒が当たる。

(……………訓練中、か)

座りながらも動ける姿勢と、その張り紙の内容から訓練中ということとは間違いないだろう。しかし、訓練内容が分からない。普段彼とともにある傘は彼の背後にある木に立てかけてあり、構えとは別に使う様子は無い。

ならば瞑想かと考えるが、それならばそもそもこのような体勢はとらないと考えが初めに戻る。

やがて、身体に当たる雨粒の間隔が短くなるのとは無関係に、シグナムは思考を打ち切った。

「……………やめておこっ」

「どうした？」

「いや、強さに関する情報は極力避けようと思ってな」

「……………ん」

ザフィーラが首を傾げると、彼女が機会があれば交えようとしていることを話す。自分が相手の魔力量だけで実力を判断し、本当ならあの場に立っていたのは私であったこともそれとなく付け加えると彼は苦笑し、息を漏らした。

「それなら、これ以上ここにいる必要もあるまい。戻るか。雨も降り始めたしな」

「……………そうだな」

そう言って、ザフィーラとシグナムは雨が本格的になる前に、引き上げた。

そろそろ、スバルたちの天候に左右されない屋外での訓練が始まる時間だ。

シグナムが息を呑んだのは、それから数時間後のことである。

ザフィーラと仮眠をとった後、シグナムは1人で新人たちの訓練の様子を見に行くことにした。

雨は依然として降り続いており、日中は晴れないという予報者の予報はどうやら間違いなさそうである。

そのなか、シグナムは隊舎の入り口付近に備えられている廉価の傘を使用して屋上から訓練場を見渡すと、そこでは新人たちが息を乱しながら訓練に励んでいた。今日は雨のせいか、踏み込むべき地盤に思うように力を入れることができず、そこを隊長たちに厳しく指摘されている。

モニターを使用して切り出した映像では、さらにそれが如実に表れていた。コタロウが以前口にした『気象に左右されない』というのは、どの立場の人間にも当てはまる言葉であることがよく分かる。

「……む」

ふと気になって、いつも全員を見渡せる位置にいる彼が訓練場内にいないことに気付く。再度見渡しても、視界に入っていない。

「なのは」

「あ、えと、シグナムさん？ 珍しいですね、どうかしました？」

「ああ、いや、カギネ三士が見当たらないのでな」

彼女はそっけないのを装って訊ねる。

「コタロウさんは午後からなんです。午前中は自由待機です」

「そうか」

普通、自由待機オフソフトというと休息、自由時間と等しい扱いだ、彼の場合は少々異なる。彼にとって自由待機とは、六課内の機器類を点検、修理する時間になるのだ。もちろん、休憩も自由に取りる私用時間として構わない。ただ、コタロウが自由待機を自堕落なものにしないことは誰もが良く知っている、注視すること、懸念することとはしなかった。彼の自由待機は実質、務め以外の何ものでもない場合が多い。

彼を戦力としての実力をみると、夜明けにみた訓練も務めの一つと認識できる。

なのはとの念話を終わらせたシグナムは、あのと看見た彼が脳裏をよぎった。彼女にとってコタロウは決して気になる人物ではない。だが、つい数時間前に見た人物であれば気にはなる。

シグナムは傘にかかる雫が数滴流れ落ちるのを見た後、踵を返して屋上を後にした。

「……………」

もし、シグナムが自分の記憶力を自負しているのであれば、この目の前にいる人物は夜明け前から換算しおよそ6時間以上、その姿勢を維持していた。そのなかで違いがあるとすれば、彼の周りに展開している気圧の変化から、雨粒が凝固し、氷の粒となつて付近に転がっているくらいだ。

彼が目を離してから姿勢を変えずにいたという証拠はないが、シグナムは自分の考えを疑いはせず、驚きというよりも寧ろ、不可解かつ異様であることに息を呑んだ。

既に知っているあまりにも静か過ぎる呼吸は、肩や胸の動きを見せず無呼吸に見え、深く被った帽子は普段から読むことを困難にさせる雰囲気完全に消失させていた。

一言で言うのであれば、

(気配がない)

というものである。

目視できているのに気配がないという感覚が彼を異様と思わせている原因であった。

「カギネ三士、そこで何をしている」

故に、シグナムが思わず彼に向かって話しかけたのは、その雰囲気を一蹴したかったのかもしれない。だが、すぐに彼女は彼に横槍を入れたことを後悔した。何をしているにせよ、彼の訓練の邪魔をしたのは間違いないのだ。長時間一定の姿勢を維持しているということは、等しく真剣な証拠である。

「……………」

しかし、相手は反応することはなかった。

彼女が後悔した前後で姿勢、雰囲気の違いはない。変わらず正座をし、身に降りかかる氷の粒にも反応することはなく、無言を貫いている。

雨脚は強くなり、彼女の傘に降り注ぐ雨粒の音が大きくなる中、すこし見下ろすかたちで彼を見ていた彼女は訓練内容より、今正面にいる彼の状態が知りたくなった。この訓練が何を鍛えるものかは分からないが、正面に立ち、声に出しても全く反応がないのであれば、表情も気にはなるところである。

まして彼は敢えて無視をする、気付かないふりをする人間でもない。真面目で丁寧な人間であることは人間関係に疎いシグナムでさえ知っている。

目を瞑り耳でも塞いでいるのだろうか、彼女は正面よりやや右に移動し、膝を折って彼と同じ視点に立ち、覗き込んだ。

「ッー!!」

彼女の呼吸が止まった。身体が硬直し、少し声が漏れてしまったことに気付くまで、数秒を要し、そしてすぐに上体を起こし、呼吸を整えた。

彼はいつもの寝ぼけ眼ではなかったのだ。『いつもの』ではなかった分、すぐに顔を上げたのにもかかわらず、容易にその表情を思い出すことができる。

彼は正面を炯眼けいがんしていたのだ。

帽子のつばによって顔上半分を覆うように影ができ、その中で黒曜石のような黒い瞳が白目によって強調され、圧倒せんばかりに鈍く炯炯けいけいとしていた。

ただそれだけのことであるが、普段の彼からは決して想像することのできない表情であった。今まで　約2ヶ月弱　確認できた表情のうち、どれをとっても寝ぼけ眼が付随していたため、本来の本人と疑わしくなるほど真剣な目つきであるコタロウに彼女は驚いた。目つきが変わるだけでこうも人の印象が変わるのかと思うのはシグナムにとって初めての体験だ。

彼がフェイトと戦ったときもこんな表情はしていなかった。

ふりなのではない。本当に気付いていないのだ。自分の存在だけでなく、降り注ぐ雨の感覚も、その雨が奏でる音も、腿の上に積もっていく氷の粒の重ささえ、彼からしてみれば存在を許されていないように思えた。

乱れる心境の中、また少し雨脚が強まった。

シグナムという女性は自分が騎士であることは自覚していたし、余程の切欠がない限り他人に関心を示さない人間であることも自覚していた。もちろん、アルトやヴァイスといった自分に踏み込んでくる人間に対しては、例外である。

『あれ？　なのはさん、コタロウさんはお昼も自分の部屋ですかい？』

『うん。さっき聞いたらそう言ったよ』

気付けば彼の部屋のブザーを押そうとしているのは、些ちとか自分でも首を傾げた。

押す前に一度躊躇ためらい、

(あの時のことを『訊く』のではない、こちらから一方的に『頼む』のだ)

と言い聞かせ、ブザーを押した。

数秒後、ドアが開くと見覚えのある寝ぼけ目をした男が自分の正面に立っていた。

「はい」

「……………」

「何かございましたか、シグナム二等空尉？」

「あ、いや……………」

彼女の言葉が出なかったのは、地球へ訪れたときの銭湯で一緒に入浴したヴェータたちと同じ理由だ。コタロウは着替えの途中で、つなぎの上半身だけ脱いだ状態であり、腰の部分を折り目に生地がだらりと下がっていた。いくら彼女といってもその覚悟や緊張感がなければ、彼の表情も助長している。服の上からでない非対称な彼の両肩を見れば、言い淀んでしまう。その男は左肩から先がないのだ。

「ひとまず、服を着たらどうだ？」

「……………はい」

振り返ったときの彼の背中にある火傷も彼女の目に留まった。

心に隙があつたせいか、「部屋なかでお茶でも召し上がりになりますか？」という彼の言葉にシグナムは首肯していた。彼は新しい黒のインナーを着込み、つなぎのファスナーを上げると、それほど時間を掛けることなく、部屋に置かれているテーブルに座るシグナムの

前にお茶を出した。

シグナムはカップの面に映る自分をみて、二三度瞬きをし、

「何故誘った」

「まだ時刻的に休憩中で着替える時間を頂きましたし、呼び出しではなく上官自ら下官の部屋に訪れるほどのご用件であれば、公的な命令よりも寧ろ、何か個人的な命令、或いはご要望の類であるかと考えたためです」

正面に座っている彼は、表情から思惑は読めずとも行動から判断することができるとかと思ひ、再びカップに目を落として一口含んだ。

(……どこまで観察眼がはたらく?)

シグナムがお茶のときのみ砂糖を匙^{さじ}半分入れることを知っているのか、ほんのりと甘かった。砂糖やミルクが出ていないのはそれが理由らしい。

(いや、言わずもがな、か)

その教育を施したのが誰なのかすぐに想像がつき、カップを置いた。

「確かに、要件というのは私事だ」

「はい」

「おまえと一戦したい。もちろん私のときはおまえも攻撃して構わない」

「……………」

単刀直入にこたえる彼女に対し、コタロウは目線を落としてこつこつと人差し指を叩く。シグナムがもう一口含むまでそれは続き、最後に顎に手を当てたあと、彼は口を開いた。

「1つ、確認をさせていただいても構いませんか？」

「ん、なんだ？」

「それはシグナム二等空尉はレヴァンティンを使い、私はこの傘を使用したデバイス戦ということでしょうか？」

「ん、そうだが？」

「分かりました。でしたら、申し訳ありませんがお断わりさせていただきます」

ぺこりと頭を下げる。

「…………理由を聞いても構わないか？」

「確かに、この傘は戦う上で『持たば太刀、振らば薙刀、突かば槍、隠さは懐剣、狙わば銃』という特性を持っています」

さらに続ける。

「ですが、『差せば傘』がそれ以前の、傘そのものであり、『翳せば盾』が本質なのです。九天鞭きゅうてんべんは鞭としていますが、役目としては盾です」

「あの鞭が盾？」

コタロウは頷き、

「はい。シグナム二等空尉や高町一等空尉、そのほかの方々は『何かを護る為に戦う人』であると考えています」

今度はシグナムが頷いた。

「私は『何かを護る為に護る人』でありたいのです」

私の場合はそのほとんどが機械になりますが、とそこで初めてコタロウはカップに口をつける。

戦うという言葉は何も、武力を持つての戦いだけではないが、彼の場合はそれに言及していた。戦いたくないと言っているようである。

「戦いたくはない。ということか？」

「いえ、違います」

だが、彼は否定する。

「私が局員である以上、戦うことはあります。ただ私は、この傘を『武器』として使いたくはないだけです」
「……なるほど」

考え方が違う。とシグナムは素直にそう思った。彼女の場合、彼とは逆でデバイスを武器として使用する。今までもそうであったし、これからも何も疑問に思うことなく武器として使用するだろう。極論、それが故に自分が存在すると言ってもいい。

「トラガホルン二等陸佐やロマノワ二等陸佐もシグナム二等空尉と同じ考えです。『全員が私のような考えであれば、管理局はとつくに自壊を始めている』と自嘲していましたが」
「そうか……であれば、仕方がないな」
「申し訳ありません」
「ん。構うことはない」

またカップを手に取とうとしたところで、はたと顔を上げる。

「……む、ということはお前がデバイスを使わなければ私と戦える
とっ」

「はい。それは構いません。先程の両二佐より、最低限の攻めは学んでいます」

武器対無手か。と考え込むも、ヴィータから無手で敵を退けたということを聞いたこともあり、その時は無手対無手だが、湯が煮立つより早く彼に対する興味がわいた。

ならば時間ができたときに、シグナムはコタロウに約束を取り付ける。

そうして心が切り替わると余裕も生まれ、自分はやはり深く考えるような人間ではないかと再確認する。思考に重さをおいていたせいか、周りを見ることもできなくなっていたが、今は部屋の回りを見る余裕ができた。

コタロウの部屋は、おそらくほとんどの部屋も同じであるが、寝具と幾つかの私物で構成されているのがわかる。私物というのは今使っているこのティーセットと、

「……………あれは？」

「資料集です。私は学がないため、機械を修理するときはその歴史や経緯を学ぶようにしているのです」

『古代〜近代 ベルカの歴史（武器・武具）』と書かれた書物が目に入った。厚さは指2本程度で、大きさはポケットに入るくらい。他にも同じ系統の本が棚に並べられている。

「ご覧になれますか？」

彼女が頷くと、コタロウは立ち上がって机の脇にある本棚から本を取り出し、手渡した。

「こちらもどうぞ」

「私は目、悪くないぞ」

カップの横に置かれた細い銀縁眼鏡を取らずに本を開くと、そこには何も書かれていなかった。ぱらぱらと数頁めくってみても同様に文字一つ書かれていない。

「何も書かれていないが」

「特殊なインクを使っているので、肉眼では見えないようにしてあります。その『いんがいきょう隠解鏡』を使わなければ見えないのです。内容は現代訳していますので、読めないことはないと思いますが」

「しています？　というと、お前が作ったのかこの本」

「はい」

コタロウ曰く、無限書庫やトラガホルン夫妻が講義をしている大学の図書館からそれに類する本を電子化して送って貰い、まとめ上げたのだという。読めないようにしているのはその書物の中に、漏洩防止策としてのインク生成の項目があったので興味本位から作っただけらしい。

眼鏡をかけると、先程まで何も書かれていなかった白いページに文字や挿絵が浮き上がってくる。内容は想像していたものと違い、文字は細い草書体で書かれ、挿絵は武器道具だけにとどまらず、魔

法陣の構成、当時主流とされていた魔法原理、その構造に至った思想等が分かりやすく書かれている。

シグナムはしばらくの間、読み耽^{ふけ}った。

「……そろそろ、私は仕事に戻りますが、お持ち帰りになられますか？」

余程没頭していたのか、コタロウが昼食を取っていたことにも気付かず、時刻をみるとそろそろ休憩も終わる時間に差し掛かっていた。

「その眼鏡はスペアがありますので、どうぞお持ちくださって構いません」

「……む、悪いな」

「構いません。私以外の方が読まれても問題がないことに、少し安心しました」

ぱたりと本を閉じ部屋を出ようとしたとき、ドアが開いたままの状態であることに彼女は気付いた。

「私は開けたままにしてしまったか？」

「いえ、女性を自室に入れる場合はドアは常に開けたままにしているのです。ロマノワ二等陸佐が言うには『異性と部屋で二人きりになる場合は四本の足が地につき、常にドアは開けておくこと』とのことだ」

所謂、官位いわゆるによらない異性間のマナーの1つだという。もちろん例外もあるが。

寮を出ると雨は幾分か弱まったものの、まだ降り続いており、お互いに傘を差して歩き出した。自分より背が低いせいか、彼の差す傘は持ち主の頭をかくし、胸から下しかシグナムは確認することができなかった。

不意に、彼女は首を傾げて傘の下を覗き込んだ。

「……雨粒が跳ね返りましたか？」

「あ、いや、大丈夫だ。問題ない」

近くを歩きすぎたかと眉を寄せる寝ぼけ目と目が合うと、シグナムは居た堪れない気持ちになり、ぎこちなくまた前を向いた。

僅かに緊張した心持を振り払い、落ち着きを取り戻す。

(いつもの目だな)

何故覗きこむようなことをしたのだろうかとは考えなかった。

ただ、普段の彼であることに安心したのはシグナム自身も気付いていた。

そして、隊舎と寮の中間地点まで来たとき、

「コ・タ・ロウ」

「はい」

「二杯目に砂糖はいらない」

相手の返事を聞くことなく、シグナムは彼と別れた。

『……………』

夕食の後、小時間空けて夜間訓練を始める前、一番近くにいる隊長陣たちがシグナムの変化に気付く。

足を組み、銀縁の半月眼鏡をかけながら、テーブルの上に広げた小さな本に目を落とす彼女はいつもの気高さに若干の淑やかさを身に纏っていた。左手は本をやさしく固定し、右手は次の頁、或いは前のページをめくるために下のほうに添えられている。

はつきりいって、今まで見たことない仕草である。

「……どうかしたか？」

本の脇に置かれているカップに手をかけるために視線を上げたとき、シグナムは視線を感じそちらを向いた。

「シグナムが読書……？」

「そうだが？」

「それに、眼鏡」

「……ん」

人が普段の印象とはかけ離れた行動を取る場合、必ず原因がある。そして、その原因を探ることが自分の疑問を解消させる最も早い近道であることは、彼女の行動に気付いた人たちの誰もが知っていた。しかし、ヴィータたちはその原因を探る前に、根拠はないが多くの要因を持つ1人の人物が頭の中に思い浮かんだ。おそらく、いや十中八九間違いはないだろう。

『（今度はコタロウさん（ネコ）、何をしたの（んだ）？）

』

内心そのようなことを考えていると、表情に出ていたのだろう。シグナムは彼女たちの表情をみて微笑みをこぼし、やや挑戦的な目つきで、

「なにか変か？」

じっくりと彼女たちの挙動を楽しんだ後、砂糖の入っていないお茶に口をつけ、また続きを読み始めた。

第33話 『なにか変か』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

今回はクラナガンに雨を降らせてのと、彼の訓練描写です。

クラナガンの気象システムが資料を探しても出てきませんでしたので、勝手に雨を降らせていただきました。

アニメではクラナガンに雨降っていませんよ。

（確かね）

彼の訓練描写ですが、見せたのが表情のみという、かなり曖昧なものにしています。

描写を見て、あるいは前々から彼の能力に気づいてしまったかもしれない読者の皆さんは、なにとぞ秘密にしていただきたいところです。

どうぞよろしくお願いします。

今後の展開次第ということでは……

さて、内容の方ですが、なるべく文章の中で主人公の戦う場合を書いたつもりです。

これまで、彼が戦闘したのは（実際に迎撃したのは） ホテル・アグスタのみです。

フェイトとは模擬戦という名のただのデバイス試験なので。

そのホテルでデバイス自体は武器として使わなかったはずですが、ワイヤーを出したあと、傘を収めましたからね。

はい。彼はデバイスを傷つける武器として使うことはしません。戦うときは必ず徒手空拳あるいは傘以外の木の棒とかになると思いま

す。これは構想時に既に決めていました。今後も傘の役割を果たせるよう、主人公さんは頑張ります。

次はシグナムの心理描写。

彼女のイメージを少し壊してしまった方には申し訳ありません。ですが、彼女はこのままいかせていただきます。

そして、シグナムを部屋に入れたときの彼の行動。

『ドアを開け、四本の足を地に着く』

これは、自分の記憶をあさる限りどこかの全寮制の高校で実際にある規則です。

個人的に、よその小説で見られる

締め切った部屋に男女二人つきりで勘違いを生み、他の女性の嫉妬を生む優秀だけど鈍感で優柔不断な主人公という展開は嫌いではないのですが、

優秀だったら普通、やさしい以外にも勘違いさせない、未然に防ぐ行動をとると考えています。鈍感であればなおのことですね。

私はこういう行動が紳士的であると思います。

あと、彼が彼女の考えを見抜いたのは、仕事の延長線なので、人そのものの考えを見抜いたわけではありません。1つのパターン化された動作のようなものです。

最後に参考（パクリ？）となったものを2点
1つは『持たば太刀、振らば薙刀、突かば槍、隠さば懐劍、狙わば銃』です。

これは神道夢想流杖術の『突かば槍 払えば薙刀 持たば太刀 杖はかくにも 外れざりけり』の言葉を変えています。

もう1つは『隠解鏡』

これはキテレッツ大百科の『神通鏡』です。

私の小説の底の浅さが露呈していますね。

以上です。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞になります。

キヨンさん

t i k u w aさん

誇りなき悪さん

k y oさん

イツキさん

景雅さん

HAKAMATAさん

カモさん

又ガ漬けさん

トータスさん

sesさん

YF-19さん

感想、および指摘、アンケートの回答ありがとうございます！

皆さんの記憶の外だと思えますが、番外編は書かせていただきます。

用語解説

緩緩：かんかん

ゆるやかに

炯眼：けいがん

真偽・本質を見抜く鋭い眼力。鋭い目つきという表現としています。睥睨へいげいは睨むという意味になってしまいますので……

炯炯：けいけい

光り輝くや鋭く光るという意味です。眼光炯炯という四字熟語がありますね。

第34話 『ラッパのラ』(前書き)

えらく寒い。

寒いのは苦手です。

そりゃあ、えらく苦手です。

それでは、本編をどうぞ〜

第34話 『ラッパのラ』

『……………』

「どう？　これが調べた結果なんだけど」

スバルはティアナが調べたAGアドヴァンステックについての書類をみて腕を組む。
エリオとキャラもティアナの説明を聞き閉口する。

「う、ん……………なんて言っつていいか分からないけど……………すごいね」
「え」と

「すごいですね」
「まあ、当たり前前の反応よね。でも、この映像は合成じゃないし、
実際にあんたたちも見たでしょう？　それも間近で」

もう一度、特にAG同士の模擬戦映像をスローで見直し、両者の動きを確認した。

「手数足数は1秒間に平均2.5、6回」

「えっ!？」

「互いが接近するほど数は減るけど、それでも」

「僕等の比じゃないですね」

「これで速さ2分の1」

目を皿にして何度も観たからね、とため息をつく。

「ティアはこれを？」

「……そう。体得したい」

ティアナが頷くと、またスバルたちは黙った。

それはそうだろうと彼女は思う。身体能力の向上は言うまでもないが、それ以外に必要な要素が見つからないのだ。場数という経験が物を言う、六課にいるうちに体得できないということはしたくない。

「あの……」

「なに、キャロ？」

「コタロウさんの他にもAGはいるんでしょうか？」

テーブルにあるジュース入りの缶に目を落としたあと、ティアナは髪をいじる。

「分からないわ。でも、フェイトさんとネコさんの模擬戦を見てたのはさんや八神部隊長は知らなかったみたいだし……10年局にいて知らないとなると、少なくともクラナガンにはいないということになるわね」

「そう、ですか」

はやてについては昔から隊長としての進路を決めていたため、前線で戦うことは少なく、出会う機会は低いためわからないが、なのは戦技教導の傍ら前線に参加することが多く、同時にたくさんの人と会う機会がある。そのなのも出会ったことがないということであれば、同期や先輩後輩にはAGはいないことをあらわしていた。

「今週中にはなのはさんに話すつもり」

「それで、分かってもらえば、コタロウさんに？」

「まあ、そうなるわ。AGに関するデータのうち、習得方法は1つも出てこなかったけどね」

大きなため息をつき、ジュースを一気に飲み干して自販機隣のダストシュートに缶を放り込むと、問題は山積みでも区切りをつけるように背伸びをして、気持ちを切り替えた。

「んで、スバルも参加する？ AGって元はフロントアタッカーのことだし」

「ううん。私はいいや」

「そう？」

「うん。強くはなりたいけど……私はなのはさんやヴィータ副隊長から習いたいな」

座っている足をプラプラさせて、目線を落として苦笑うスバルに「ああ」とティアナは声を漏らした。若さゆえの強さの探求にもス

バルとティアナの間には違いがあるためだ。恩師の下で教わりたいという純粋な想いの差がそれを引き止めたのだろう。そして、それはティアナにも十分伝わった。

「それがいいわね。私もそうありたいけど」
「ネコさんから習いたいんでしょ？」

意味ありげにスバルは笑う。

「何その笑い」

「からかってみたの」

「……缶を捨てたことにこれほど後悔したのは、今日が始めてよ」

いざ投げようとした缶が既にダストシュートの中であることに不満を覚えながら、ゆらりとティアナはスバルの背後へとまわる。

「だって最近ティア、まるくなっただって言うか……えと、なんで怖い顔してるの？」

「缶があれば投げるだけですんだのに……まさか」

スバルの頬に痛みが走った。

「^{つね}抓ることになるなんてねえ」

「イタタタ！ イタイよ～～ティア～～」

「アンタ本当に、そのうち痛い目みるわよ」

「ふぎゆう～～。うん、し、知ってる。げ、現在進行形で体験中うう～～あうう～～」

しばらく、撰ったばかりの水分をスバルは目から消費することになったが、なんとか微量で済み、訓練での反省文がまだ完全に終わってないこともあり部屋に戻ろうということになった。

その時、

「ティアナさん、もしその時は僕も一緒にいいですか？」

「ん、ああ、AGの訓練？ まだ、色々分からないところがあるけど……別にいいんじゃない？ フェイトさんがいって言えば」「はい！」

エリオも興味があることを示し、全員休憩室をあとにした。

魔法少女リリカルなのはStrikerS 〽困った時の機械ネコ〽
第34話 『ラッパのラ』

「はい。今朝の訓練と模擬戦は終了。お疲れ様」

『お、お疲れ様でした』

早朝、前夜の過失のことなどすっかり忘れてティアナを起こすために彼女の胸を揉みしだき、案の定お返しに踏みつけられたあと、スバルは皆と揃って訓練場に向かい早朝訓練を済ませた。なのはやヴィータが考えた訓練カリキュラムは新人たちの日々の成長に合わせて組み立てられているため、慣れるということはなく、終了時にはへとへとなり、それが早朝、午前、午後、時には夜へと続く。

そして、今日の早朝はいつもより若干激しく行なわれた気がした。今、スバルたちはなのはたち隊長の話聞くために膝を抱えて座り込んでいる。

「でね、実は何気に、今日の模擬戦が第2段階クリアの見極め試験^{テスト}だったんだけど……」

『えっ!?!?』

なのはは本当に何気なく、雑務中ながら会話のようにスバルたちに話した。

驚くのは座り込んでいる新人たちばかりで、彼女の後ろにいるフイトとヴィータの表情に変化はない。新人たちの後ろに立っているコタロウも同様だ。

「どうでした？」

「合格！」

『はやっ！』

ゆるりと髪をゆらせながら振り向くのはに、フェイトは悩む間もなく優しく答えてスバルとティアナを驚かせた。

「ま、こんだけみつちりやって、問題あるようなら大変だったとだ」

それはフェイトが結果を下す前、今日の訓練が始まる前から決まっていたようで、普段の訓練も評価に入っているらしく、スバルたちは苦笑う。

なのはも全員の成長ぶりを褒め、皆に自信を持たせた。

「じゃ、これにて2段階終了！」

この声と共に全員立ち上がり、腕を大きく上げて喜んだ。さらにフェイトはこれからの訓練はデバイスリミッターを解除した段階で行うことを告げ、シャリオがそのリミッターの解除を行なうので、自分たちの愛機デバイスを一度コタロウへ預けるように指示する。

スバルたちが彼にデバイスを預けるのを見ながらヴィータは腕を頭の後ろに回し、

「明日からは、セカンドモードを基本形にして訓練すつからな
『はい!』」

これもまた何気なく口にしたからだろうか、新人たちは彼女の言葉に疑問を持つことはなく頷いた。

「あの、明日?」

「はあ、返事をしてから気が付くか……お前らが普段どんなふうにあたし等の言葉を聞いているか分かったよ」

「いえ、あの、そうではなく……」

「ちよつとヴィータ副隊長」

「冗談だ。つまりはそういうこと。訓練開始は明日からだ」

言い淀んで気まずい表情をする新人たちに、なのはが眉を八の字にしてヴィータを注意をすると、彼女は満足したように笑みをこぼした。

「もう、しょうがないなあ……あ、それでね、話を戻すと」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったから」

スバルたちはそれぞれ目を合わせ、ヴィータがうんうんと頷いて、

「気分転換も大事っちゃ大事だ」

「今日は皆、一日お休みです。街にでも出かけて遊んでくるといい

「よ」

「私たちも隊舎で待機する予定だから、ゆっくりするしね」

彼女たちの言葉を理解していくのに比例して目がきらきら光り、
今までの疲労を吹き飛ばし、

『はい！』

今度はしっかりと理解したうえで大きくスバルたちは頷いた。
そうして、服はじっくりと選びたいのか、新人たちは食事のあと
に私服に着替えることにしたらしく、制服に着替える為に一度寮へ。
なのはたちは食事をするために隊舎へ足を運ぶ。コタロウは預かっ
たデバイスをシャリオに渡すためになのはたちについて行った。

1090

「私服って地球に行ったとき以来だね、エリオくん」

「うん、そうだね。あとは六課に来たときくらいだ」

別に休日が無いことに対して不満を漏らしたわけではなく、久し
ぶりに着る私服に少し緊張しているようだ。スバルとティアナもど
んな服を着ようかと盛り上がっていた。

「あ」

その時、隣にいるエリオだけに聞こえるくらいに小さくキャロは
息を呑んだ。彼女はそのまま訝いぶかしむ彼のほうを向き、声のトーンを

下げて、

「エリオくん、エリオくん」

「どうしたの？」

「地球で一緒にお風呂入ったときのこと、覚えてる？」

「っ！？ お、覚え……」

エリオはそこで口を濁した。キャロと一緒に入ったことを『覚えてる』と応えることが、答えとして正解なのか誤りなのか判断がつかなかったからだ。

「あ、と……コ、コタロウさんに入ったときだよね？」

と、決して二人つきりでないことを示す答えに落ち着かせた。しかし、キャロにとってはまさにそれが聞きたい答えであり、彼からコタロウへと視線を移す。

「うん……コタロウさんって、どんな服を持ってるのかな？」

「……あ」

エリオもそこで思い出した。

『私服は持つてはいるけど、めつたに着ることがないため部屋の荷物の中にまだ収納されたままだね』

この一言である。

コタロウはトラガホルン夫妻を除き、互いが制服でない時のみ口調をくずす。思えば、彼が自分たちに柔和に話しかけたのはその時だけだ。彼の丁寧すぎる口調に慣れ、それが既に普通になっていたが、時がくれば口調は柔らかくなるということをキャロとエリオはぼつりと思い出した。

「それでね……」

キャロはエリオの耳元で一つの提案を出すと、エリオはこくこく頷き「聞いてみようか」と、彼のほうに歩いていった。

「コタロウさん」

「はい。どうかありませんか、モンディアル三等陸士？」

「実はですね……」

少し背伸びをして口に手を添える彼に、コタロウは膝を折り耳を傾けた。周りもそれに気付き、彼らを見る。

「それは構いませんが……」

彼はエリオを真似るように耳打ちで言葉を返すと、エリオは満足したように顔を綻ばせた。

「何の話だ？」

「あのですね……」

その行為に最初に口を開いたのはヴィータで、彼女にキャラコが耳元で話すと、

「あー、なるほど。いいんじゃないか？」

『はい！』

彼女も面白そうだと頷いた。

そうになると、興味がわくのは周りの人たちである。なのはヤスバルたちはキャラコやエリオが内緒話をするのにも気にかかるところだが、その話した内容のほうに気になる。

しかし、それはヴィータがこう言ったことで一蹴されてしまった。

「それは秘密だ」

『 ングツ！！』

コタロウが食堂に訪れたとき、秘密と言い張ったヴィータはタイミングが悪く、口に入れたミックスベジタブルサラダを喉に詰まらせた。他にもそれをみて同様に詰まらせたり、飲み物を吹き出したりする人が多く、茫然と開いた口をふさげないものもいた。

彼が訪れたのはテレヴィジョンに映っている地上本部の事実上トップ、レジアス・ゲイズ中將が技術進歩が故の犯罪の手口の高度化なのか、高度化故の技術進歩なのかを問いかけ、今問題視されている揺らぎを確固たる決意を示すかのように声を荒げて、地上本部のこれからを説き終わったときである。

誰にも聞かれないように小さく「……よし」と袖の中で拳を握ると、真つ直ぐエリオたちのテーブルへ向かっていった。その間、彼を知る人は、全員彼を目で追う。

「モンディアル三等陸士、こちらが私の私服になります」

「……え……は……はい」

『……………』

コタロウは一度会釈をすると、ヴァイスが座っているテーブルに向かい、断ってから席に着く。

「いただきます……む、やっぱり、うごきづらい」
「……………」

料理を自分の皿に盛り、ぱくりと口に放り込んだところで、

「な、なんですか、その服」

「やはり、この服装は隊舎にはそぐいませんか？」

「あ、いえ、そうではなく……なかなか見ない服装なので」

ヴァイスが口を開き、視線を彼の服へ落とすのに合わせて彼も自分の服を見る。

「こちらは第97管理外世界の日本で時々着られる『着流し』といわれるものです」

「きながし、ですか」

『（……………きながし？）』

その服はつなぎと同様に上下一体であるが、締めるものは腰のあたりにある帯だけで、袖が無ければ布を巻きつけているだけの単純なものであった。ファスナーも無ければボタンも無く、肩から先の

袖は振れるようにだらりと垂れ下っている。鉄紺色の濃淡は縦に縞が入り、その下から出ている足は紐と藁で作られた履物を履いていた。

「その土地の民族衣装といってもいいかもしれませんがね」

「へえ。あ、傘も和傘？ でしたっけ、それになってますね」

「はい。こちらのほうがじっくりくるそうです」

「それで、その着流しつてのはコタロウさんが自分で作ったんで？」

「いえ。これはロビンが作ってくれました」

フェイトとコタロウの模擬戦を見ていないヴァイスは物珍しそうに いや、実際に珍しい 着流しの構造や着方について質問しながら食事をすすめた。

「……さつきエリオたちが言ったのってあれ？」

「あ、はい」

「ちょっと予想と違ってて、びっくりしちゃいましたけど」

この反応はヴァイータたちも同じようで、

「なんだアレ」

「え？ ヴイータちゃんが『それは秘密だ』って言ったじゃん」

「そりゃあ、そうだけど……」

「なんの話？ というか、何でコタロウさんあんな格好なん？」

「え、うん。ネコってさ、制服着てないとき、敬語じゃなくなるん

だよ」

『……………へ？』

「あ、まあ、その時はこっちも制服着てちゃいけないんだけど……銭湯行ったとき、エリオが自分らのことファーストネームで呼ぶって言うてたろ？　んで、あたしとリインが混浴行ったときにそう言うてたんだよ。だからいい機会だし……………」

「私服着てみたら？　ってことになったん？」

彼女は頷く。

「それで、着てみたらああなつたと……………」

「和服着てくるとは思わなかつたんだよオ」

フェイトは僅かにひきつった顔のヴィータの次に、服装に合わないカップに手掛けるコタロウを横目でちらりと見る。

「でも、あれだね……………」

「あ、うん。そやね」

「場所は別で、コタロウさん自身は違和感ないね」

「……………そうだな」

「というより」

『（似合ってるなあ）』

敢えて口に出さなくても、いつの間にかいないリインが彼の周りをふわふわ飛びながらそれを代弁をしていた。

グイータの話聞く限り、コタロウは実務が無いわけではないため、エリオたちを見送ったあとはまた制服 つなぎ に着替えるらしく、ひとまず市街に近い出口のほうでなのはと一緒に待機していた。しばらくすると、ティアナがスバルを後ろに乗せた^{タンデ}2人乗りであられる。

「転ばないように気をつけてね？」

「はい！ 安全運転を心がけます！ ね、ティア？」

「何でアンタが答えてんのよ」

「いいじゃん別にいゝ。あ、お土産買ってきますね、クッキーとか」
「嬉しいけど気にしなくていいから。2人で楽しんでくるのが、何よりかな？」

なのははスバルたち自身が楽しむことを望んで、にこやかに微笑む。

「あ、じゃあネコさんはお土産なにか欲しいですか？」

「僕？ うーん、そうだなあ」

「……………」

目を細め、顎を少し上にあげて考え込むコタロウに、3人はぱちくりと目を瞬いた。

「…………ティア聞いた？ 今の」

「ええ、本当に敬語無くなるのね」

「いつもこうならいいのに……………」

彼女たちが念話をしている間に決まったようで、

「お金はあとで払うから、キャンディを買ってきてくれるかな？」

「わかりました。味は何にします？」

「スバルさんとティアナさんが選んだものなら、なんでもいいよ」

「…………スバルさんだつて」

「…………ティアナさん、か」

ギアをローからニュートラルに切り替え、ティアナは振り向く。

「あの、ネ」さん

「うん？」

「さん付け、しなくていいですから」

「そうそう。それ抜いて今の言葉、もう一度お願いできますか？」

彼女たちの言葉を不思議に思うも、

「スバルとティアナが選んだものなら、なんでもいいよ」

『わかりました！』

言われたとおりに応えるコタロウに2人は元気に返事をした。

「それじゃ、いってきます」

スバルが片手をあげて挨拶をしたあと、ティアナはそれに合わせてギアを入れ替え、ゆっくりとクラッチを繋ぎ、

「はい。いってらっしゃい」

「いってらっしゃい」

サイドミラーに映る微笑みながら手を振るなのはとコタロウにアケセルと余計に回して、危うく転びそうになった。

「ちょっと、ティアナ!? 本当に大丈夫?」

「え、あ、はい。だ、大丈夫です」

もう一度彼を見るといつもの寝ぼけ目無表情であった。態勢を立て直し、今度はゆっくりと慎重にアクセルを回す。

「ねえティア。今、ネコさん微笑んでなかった?」

「じゃなきゃ、運転ミスらないわよ」

「なのはさんは、気付いてなかったね」

「まあ、隣じゃ気付かないんじゃない?」

スバルとティアナは互いの確認が取れたのにもかかわらず、まださつき見た彼の惹き込まれるような微笑みが現実なのかそうでないのか疑いながら、自分たちの髪を風に任せて走りだした。余談であるが、彼の表情によつて彼のお土産を買い忘れたことに気付くのは今日という日が過ぎたときである。

なのはとコタロウが2人を見送ったあと、後ろのほうでやや軽い足音が聞こえたので振りかえってみると、エリオとキャロ、そして送りだすフェイトがいた。

「ライトニング隊も一緒にお出かけ?」

『いってきます!』

「うん、気をつけて」

「あんまり遅くならないうちに帰るんだよ? 夜の街は危ないから

ね
『はい!』

フェイトは2人が頷いてもどうも心配することは止まず、エリオがキャラをエスコートすることを言い聞かせたあとにも「知らない人に付いて行っちゃだめだよ?」や「何かあったらすぐに連絡するんだよ?」等を何度も何度も繰り返した。それに対しエリオは少し気恥ずかしそうに「大丈夫です」と返事をする。
それを見てなのはが苦笑するなか、

「『ラツパのラ』だ」

コタロウはぽつりと呟いた。

「コタロウさん、なんですか? その『ラツパのラ』って」

ぴくりと反応するフェイトたちを余所になのはは彼のほうを向く。

「シン“パ”イされるよりシン“ラ”イされたい。ラツパのラの音は大人には届かないということですよ」

「……あ」

なるほどとなのはは頷く。フェイトは今、信頼したい気持ちより

も心配したい気持ちのほうが大きく、エリオたちを過保護に扱っているのだ。育てるときは、そのジレンマをうまく調節しなければならぬ。

「フェイトさん、僕たちのこと信頼してください」

「大丈夫ですから」

「う、うん……でも……」

言われて自覚してもまだ揺れ動いており、眉根を寄せてなのはを見る。

「大丈夫だよ。エリオたちはしっかりしてるから」

「う、ん」

次に、コタロウを見た。

「テストロッサ・ハラOWN執務官は御二人をどう思われたいのですか？」

「え、っと、信頼したいです」

「では、信頼なされればよろしいのでは？」

彼は彼女が選んだほうを推す。

「でも、心配もしています」
「では、心配なされればよろしいのでは？」

彼の答え方は変わらない。

「でもでもっ、信頼したいんです」
「では、信頼なされればよろしいのでは？」

最初と同じ応え方だ。

「でもでもでもっ！ 心配もしているんです！」
「では、心配なされればよろしいのでは？」

フェイトがすこし語尾を強めても、彼は変わらない。

「……ムウ！ 信頼だってしています！」
「では、信頼なされればよろしいのでは？」
「あの、フェイトさん、コタロウさん。その辺で」
「フェイトちゃん、落ち着こう？」

依然として彼の無表情で淀みない受け答えはフェイトの頬を少し膨らませ、目を潤ませることになった。コタロウを除いた人たちがフェイトのその表情を可愛いと思ってても口には出さず、やんわりと

彼女をなだめようとする。

「うー、コタロウさんはいじわるです」

「私がいじわる、ですか？」

これではいつ決着がつくかもわからないと感じたのはは、

「それじゃ、エリオ、キャロ。いっぱい楽しんできてね？」

『はい、はい！』

話題を切り上げる切欠として2人を送り出した。

さすがにそれにはフェイトも逃すわけにもいかず、

「い、ごめんね。なのはの言つとおり、楽しんできて。心配だけと信頼もしてるから」

『はい！』

取り繕って笑顔で応えた。

「それでは」

「いってきます」

笑いかけたフェイトに、エリオとキャラも安心して気分を取り戻した。フェイトの隣にいるコタロウに笑顔を向けて歩き出そうとし、

「いってらっしゃい」

笑顔で送り出すコタロウに驚いて躓きそうになった。

「エリオ、キャラ！？ だ、大丈夫！？」

「……はい」

「だ、い、じょうぶです」

もう一度彼を見て首を傾げたあと、2人は目を合わせて再び歩き出した。

そして、彼らの姿がある程度小さくなったあと、フェイトは振り向く。

「どうしてコタロウさんはそうなんですか？」

「……そう、とは？」

「誰かに頼りたいってときが、誰にでもあるということですよ」

「まあ、そういうことかな、コタロウさん」

「ふうむ」

彼女はまだ、ごく立腹のようである。

しかし、

「それは、テストロッサ・ハラOWN執務官が私に頼りたいということでしょうか？」

「へ？ あの、いや……それは、そうであるような……. そうでないような…….」

「フェイトちゃん？」

彼の一言でじせむせにさわってしまった。

「あ、シグナム」
「ヴェータちゃん」

そのあとすぐになのはとフェイトは着替えに寮へ戻るコタロウと別れ、自分たちのデスクへ戻ろうと廊下を歩いていたとき、ヴェータとシグナムとすれ違った。

「外回りですか？」

「108部隊と聖王教会にな」

「ナカジマ三佐が合同捜査本部を作ってくれるんだってさ。その辺の打ち合わせ」

「ヴィータちゃんも？」

「あたしは向こうの魔導師の戦技指導……全く、教官資格なんて取るもんじゃねエな」

ポケットに手を入れて愚痴るヴィータに、なのはは彼女がそれほど嫌と思ってないかと破顔する。

「捜査回りのことなら、私も行った方が……」

「準備はこちらの仕事だ」

シグナムは挑発するような笑みをフェイトにこぼし、

「お前は指揮官で、私はお前の副官なんだぞ？ 威厳をもって命令を、な」

「ありがとうございます……で、いいんでしょうか？」

「好きにしる」

そう言ってヴィータが「お昼、評判のレストランに行かぬエ？」と続きを彼女と会話を再開し、2人はフェイトたちを背中に歩き出

した。

その時、ヴィータがポケットから手を出したと同時に1枚の紙がこぼれ落ちた。

「ヴィータちゃん、何か落としたよ？」

「ん？ あ、それは……！」

なのは話していたレストランの情報だろうかとぺらりと中身に目を通した。

コタロウが着替えを済ませて隊舎へ戻り、手に数枚の書類を持って歩いていると、そろそろ走りだすのではないかという速さで歩くヴィータと、その後ろを数人の女性が追いかけているのが見えた。

「ちょっと待ちなさい、ヴィータちゃん！」

「いや、だからな？ 悪気は全然無いんだって！」

「いいから、止まれ」

イヤリングを揺らしなが歩くシャマルと長い髪を揺らすシグナム、

「ほんのちょっとでいいから、止まるうよヴィータちゃん」

「お、落ち着こうよ、みんな」

サイドテイルなのはとさらにその後ろを追いかけるフェイトだ。ヴィータは後ろから前へ視線を移動させると、コタロウが目に入り少し駆ける。

「い、いいところにいた！」

ぐいっと彼の左袖を引っ張り彼の背後にまわって彼をシャマルたちに向けた。

「ネコオ、ちょっと助けてくれ」

「助ける、ですか？」

じりじりと近づくシャマルたちに合わせるようにヴィータは彼の背中を引っ張り、後ろへ引き下がる。

「コタロウ、いいからヴィータをこちらに渡せ」
「はい」

横に一步踏み出して道をあける。

「うおっ、ちよい待て!」

すぐさま彼女は再び彼の後ろに隠れる。

「な、なんでシグナムの言うことを聞くんだ!」
「シグナム二等空尉がヴィータ三等空尉より上官だからです」
「なっ!? いや、それは違う! 公私混同だ! ここは困っている方を助ける」
「……ふむ。公私混同……? どうしたのですか?」

コタロウは後ろの自分より背の低い女性から、依然として憤りをあらわにしているシヤマルたちに目を向ける。
フェイトがその間に入り仲裁に入ろうとするが、

「これ、見てください!」
「はい」

シヤマルがなのはの持っている紙を指さすと、彼女はそれを手渡

した。

コタロウは書類を腕で挟み　フェイトがそれを見て書類を預かる　その握られて皺の付いた2つに折れば十分ポケットにしまうことのできる紙を受け取り、片手で器用に開くと、そこにはこう書かれていた。

『自作慣用句』

その1

・シヤマルの料理を食べる。

意味：平謝りすること

由来：シヤマルの料理

ギガまずいので勘弁してほしい
謝るしかない

例：お前にシヤマルの料理を食べさせてやる。

その2

・シグナムの手加減

意味：不可能なこと。できたらすごいこと。

由来：シグナムの手加減

できるわけがない
できたら逆にすごい

例：はやての料理にシヤマルが勝つのはシグナムの手加減である。

その3

・なのはの砲撃をくらう　（見る）

意味：戦慄する。すくむ。震えあがること。

由来：なのはの砲撃

大威力
全員を戦慄させる

例：その光景を見て、彼はなのはの砲撃をくらう。』

「ひどいと思いませんか？」
「だからごめんって謝ってんじゃない」

シャマルは腕を組んで立腹し、シグナムは右足で何度も床を叩き、
なのはは胸のレイジングハートと握りしめ深呼吸をしている。

「特に、読めないほどひどい字ではないと思うのですが？」
『違います（違う）』！

字面が問題ではないと彼女たちの目に力が入り、三対の目がコタ
ロウを睨んで、そのまま彼の腰のあたりから顔を出しているヴィー
タを見下ろす。

「ネ、ネコオ」

小刻み震え顔を隠す彼女を見ながらフェイトはどちらが猫か分か
らないくらいだと思った。

「つまり……この場を治めればよろしいのでしょうか？」
「あ、うん。そんな感じで頼む」
「……ふむ」

懇願するヴィータにコタロウはその紙をシャマルに返し、自分の

胸ポケットからメモ帳をとりだし、ぺらぺらとめくりだした。日本でバーベキューをしたときに開いたメモ帳だとすぐに周りは気がついた。中身を見たことが無いのでシヤマルたちは予測の範囲をでないが、おそらくトラガホルン夫妻が残した言葉や自分で気がついたものを書きとめているものだろうと考えることができる。

つまり、彼が困ったときに開くメモ帳だということだ。

コタロウはそのまま1つのページに目を通したあと、メモ帳をしまいこみ、シヤマルたちのほうを向く。

「ここは私の顔に免じて許していただけませんか？」

『ンナツ!?!』

じつと見据える彼に全員大きく一歩引き下がった。

「あ~~~~」

自分の料理をまずいと言っても「自分の為ならば」と残さず食べ、さらにはお弁当も食べて、なおかつ膝枕をしてくれたコタロウにシヤマルは言葉を出すことができない。

「ん~~~~」

普段から新人たちの訓練を見て、データを収集し、自分の見たい分野や別の視野も残してくれるコタロウになのは息を詰まらせる。

「……………う、むう」

きつかけは何にせよ、最近の本を読むことで学への興味を示し、時々教養を仰ぎ、新たな発見の楽しさを教えてくれたコタロウにシグナムは怯んだ。

「そ、その発言はあんまりです〜！」

「それはずるいですよ、コタロウさん！」

「姑息過ぎるだろう、コタロウ」

なんとか言葉を出した3人の心持は、ヴィータとフェイトには分かりすぎるほどよく分かった。

「……………？」

わからないのは首を傾げる発言者だけである。

「ヴィータ二等空尉、これで治まりましたか？」

「え、と、治ま……………あっ！！！」

コタロウが今度は身体ごとヴィータのほうを向いたところで、シ

ヤマルたちは束縛から解放され、その隙を狙って回り込んだ。

「お、お前ら！ 卑怯だぞ！」

「なんとでも言え」

シャマルとシグナムはヴィータの手を掴み、万歳をさせて地面に足がつくかつかないかのぎりぎりまで持ち上げた。

「ほぐら、地面に上手く足がついていないと、不安で不安で仕方ないでしょう？ こう言う状態ってなんていうか知ってる？」

「……あ、あつ」

「浮足立ってるって言うんだよ、ヴィータちゃん？」

感情が昂っていることと新人たちがいないせいか、責め立てる人止める手立ては、最早フェイトは持ち合わせていなかった。

「ネ　むぐつ」

「ネコさん、どうもご迷惑かけました」

そう言ってヴィータは連れて行かれる。コタロウが無言で見送るなか、その視線の先では、

「丁度いいじゃないか。出かける前に私たちで戦技指導をすればい

い。大丈夫だ。『手加減』はしてやる」

「ゆっくりお話　ううん、しゃべらなくてもいいかも。『私の砲撃をくらう』んだし」

「グイータちゃん、大丈夫だよ。私が治癒と『料理』で元気にしてあげるから」

「え、ちよつ、ほらつ、余裕をもって早く　」

「安心しろ、すぐ済む」

「うん！　すぐ済むよ」

「さあ、訓練場に行きましようね。あつ、その前に調理室行かなくつちゃ！」

という声が廊下に響き渡っていた。

「　ひゃう！」

コタロウがブザーを押してメンテナンスルームに入ってきたのは、

丁度リインが制服を全て脱ぎ、調整液に浸かった時だ。

シャリオの予定と自分の空いている時間を報告しようとして、すたすと彼女に近づく。その間、リインには一瞥もしない。

「フィニーノ一等陸士、今日の予定なのですが」

「え、いや、コタロウさん!？」

シャリオが酷く動揺しているのを見て首を傾げると、彼の横でこぼりと気泡の音が聴こえ、そこで初めて急いで本を出し、それを盾にしているリインを見た。

「リインフォース・ツヴァイ空曹長の調整中でしたか。すみません、フィニー」

「……って、ください」

シャリオに向き直そうするコタロウに、リインが身体をふるふるさせながら言葉を絞り出した。

「申し訳ありません。もう一度よろしいですか、リインフォース・ツヴァイ空曹長?」

「……うう」

リインの顔が、見る見るうちに紅潮していく。

「リインフォース・ツヴァイ空曹長？」

「コタロウさん、あのですね……」

「フィニーノ一等陸士。申し訳ありません、上官の命令のあとに
」

その時だ。リインは大きく腕を振り上げる。

「で……」

「はい」

「出てってくださいいっ！」

彼の頭上が光ると、その頭と同じくらいの大きさの氷塊があらわれ、そのまま彼女の合図で振り下ろされた。

「ツタ！……？ あの」

「出てってくださいいっ！」

「わ、かりました」

ごとりと氷塊が落ち、結合が解放され雲散していく間にコタロウは部屋をあとにした。背中後ろ、ドアの向こう側では

「ふえええん、裸見られたですうっ！」

「あの、大丈夫ですよ。ほら、コタロウさん、気にしていないよう

でしたから……」

「それは、なおさらですう……」

「え、えーとお……」

「もう、お嫁にいけません……あ……」

「……どこで、そんな言葉を？」

そんなやり取りが行われていた。

「僕、なにかしたのかな？」

もちろん、調整においては男性や女性ではなく、1つの『個』として見るコタロウには彼女の心情を理解することは現時点では不可能だった。

「なにがあっただんですか？」

「頭に氷をぶつけました」

コタロウが部隊長室に訪れたとき、彼が何故頭から血を流しているのか皆目見当がつかず、はやては開口一番で彼に尋ねた。だが、彼は血を流した理由だけを応えただけで、それに至った理由は応えなかった。

「早くシャマルに見せなあかんやん」

「いえ、血はもう止まっていますので、行くのであればあとにします」

そういつて彼は手に持った書類をデスクに置く。はやてはそれを手に取り、ざっと目を通すと、怪訝そうに顔を上げた。

「これはなんですか？」

「はい。こちらは……」

そこで彼が話すその書類の理由に、顔を顰めるも納得せざるを得ず、頷いて認め印を押す。

「ありがとうございます」

丁寧に頭を下げるコタロウに、小さくため息を吐く。

(ほんまに、この人たちどこまで及ぶんや)

彼の、いや、彼らの考えには今一つ及ばないと思いつつ目を細める。全くその通りだと思う。そしてひとまず考えを取り払い、彼を見上げた。先ほどの着流しからつなぎに着替えた彼はいつも通り、自分の目線よりもやや下を向き、上官が不快に思わないようにしている。

(そんな畏^{かしこ}まらんでもええのにな)

はやてはまだ、彼と敬語抜きで話をしたことがない。それはどちらかというとな多数の部類にはいるが、何故だかもどかしさは拭いきれないのである。あの日からどうも気持ちが安定しないのだ。ある程度、もしかしたらという条件で自分の心に整理をつけてはいるが、そちらに傾倒するわけにはいかなかった。

(それでも見極めな、あかんなあ)

ただ、うやむやに心を引き摺るよりは、はっきりと明確にさせておく必要もある。そういつた感情の揺らぎが極稀に任務に多大な影響を与えることを知っているからだ。

今日は久しぶりに自分に多く割ける時間がある。内部の打ち合わせもないため、良い機会だと思い、

「それでは、私はこれで」

「ちよう待ってください、コタロウさん」

コタロウが敬礼し、回れ右をして部屋をでようとしたとき、はやては彼の呼びとめた。

「はい」

「……え、つとな……うん」

口を開くが、言葉に詰まるも意を決したように口ときゅっと閉じて相手を見据えながら、言葉を絞り出した。

「今日お昼、ご一緒しませんか？」

第34話 『ラッパのラ』（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

シュテルンです。

やっと、アニメ本編に戻ってきました。

だからでしょうか、特に話すことありませんねえ

まあ、言えることは

主人公も変わってはいるのですが、馴染む、変わり具合激しいのは
周りばかりで、霞んでしまう。
ですかね。

ふう。

これで、銭湯フラグを回収

以上です。

それでは、また。

次回書くことが出来れば、頑張ります！

感想、指摘お待ちしております！

以下、謝辞になります。

トータスさん

グラムサイト2さん

shiku89さん

景雅さん

キヨンさん

イツキさん

tikuwaさん

カモさん

001さん

感想、および指摘、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7051o/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS ~ 困った時の機械ネコ~

2011年10月28日08時20分発行